

人類のあけぼの

上 卷

エレン・G・ホワイト著

清 野 喜 夫 訳

福 音 社

PATRIARCHS AND PROPHETS

by

ELLEN G. WHITE

Fukuinsha
Yokohama, Japan



序

日本のキリスト教が、いま、どうしても、しなければならないことのひとつは、聖書についてのよい書物を、一冊でも多く、刊行することだと、思っている。

こうしたとき、本書が刊行されることを、まず喜びたい。

日本に、キリスト教の根をしっかりと、おろさせるためには、なんと言っても、聖書を日本人に与えることであるが、そのためにはどうしても、聖書についての適切な書物を紹介しなければならぬ。

聖書が、口語訳になったからと言って、それで、聖書が、よくわかるということにはならない。むしろ、口語訳になって、いっそう、聖書を読むために、座右に備えるところの書物が、必要になってきたとさえ、言いうるのである。

というのは、日常のことばで、聖書が翻訳されたことによって、かえって、やさしくな



ったことばの背後にあるところのいみというものを、さらによく、そして、深く、解明しなければならぬからである。

そのためには、日本人によって、書かれたものも、もちろん、たいせつなことだが、やはり、外国書のよい翻訳ということは、まず考えられて、しかるべきことだと考える。

そして、聖書について、とくに日本人に読んでほしいのは、旧約聖書であるが、本書は、きわめて簡明に、旧約聖書の中心思想を、よく各章にまとめている。しかも、ただ聖書の記事解明ということだけではなく、あくまでも、読者が、そのポイントをはあくでるように、配慮されている。だから、読者は、聖書のものの見かた、考えかたというものを、とらえることができるのである。

いま、日本の教育は、正しい歴史観ともいうべきものを求めている。正しい歴史観というものの確立がないかぎり、精神的な基盤というものは、その形成を見ることが、すこぶる困難である。

旧約聖書は、人類の書として、正しい歴史観を与える。そして、それは、単なる人間の歴史観ではない。じつに神の歴史観なのである。

福音社は、これまでも、いろいろと、聖書、そして、キリスト教についてのよい外国書



の、しかも、よい翻訳を刊行してこれ、日本のキリスト教出版界に、ユニークな分野を開拓してこれたが、このたび、さらに本書を加えられたことに對し、心からなる敬意を表するとともに、本書が、教会における、また、家庭における、そして、学校における聖書研究のテキストとして、かならずや役だつてあろうことを思い、大いなる期待と、貢献とを祈るものである。

昭和四十六年新春

文学博士 関根文之助

目次

第一章	罪悪はなぜ発生したか	1
第二章	天地創造のいわれ	17
第三章	天地創造の一週間	29
第四章	エデンの園の悲劇	37
第五章	人類救済の計画	53
第六章	明暗を分けたカインとアベル	65
第七章	セツとエノクの時代	75
第八章	ノアの洪水	87
第九章	約束のじ	105

第一〇章	バベルの塔・	112
第一章	神の召しに応じたアブラハム・	121
第二章	カナンにおけるアブラハム・	131
第三章	信仰をためされたアブラハム・	150
第四章	ソドムの滅亡・	163
第五章	イサクの結婚・	181
第六章	ヤコブとエサウ・	189
第七章	ヤコブの逃亡と放浪・	198
第八章	苦闘の一夜・	212
第九章	カナンに帰る・	222
第二〇章	エジプトにおけるヨセフ・	234
第二一章	ヨセフと兄弟たち・	247
第二二章	モーセ・	273
第二三章	エジプトの災害・	293

第二章	過越の祭り・	314
第二章	エジプト脱出・	323
第二六章	紅海からシナイへ・	335
第二十七章	十誡・	352
第二八章	シナイでの偶像礼拝・	369
第二九章	律法に対するサタンの敵意・	389
第三〇章	幕屋の制度と儀式・	405
第三一章	ナダブとアビウの罪・	424
第三二章	律法と契約・	430
第三三章	シナイからカデシへ・	445
第三四章	十二人の斥候・	436
第三五章	コラの反逆・	477

神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、また、ひとりの人から、あらゆる民族を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに時代を区分し、国土の境界を定めて下さったのである。こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない。われわれは神のうちに生き、動き、存在しているからである。



天上で、最大の榮譽と栄光にあずかり、責任をゆだねられていたルシファーは、天軍を指揮して、神の命令を遂行し、神を賛美していた。

第 1 章

罪惡はなぜ発生したか

「神は愛である」(ヨハネ第一・四ノ一六)。神の性質、神の律法は愛である。それは今までもそうであつたし、これからも同じである。「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者」、その「道が永久」であるかたは、お変わりにならない。彼には、「変化とか回転の影とかいうものはない」(イザヤ書五七ノ一五、八バクク書三ノ六・文語訳、ヤコブ一ノ一七)。

創造の力が現わされているものは、すべて、神の無限の愛の表現である。神の統治は、すべての造られたものへ、豊かな祝福を与えることを意味する。詩篇記者は言っている。

「あなたの手は強く、あなたの右の手は高く、

義と公平はあなたのみくらの基、

いつくしみと、まことはあなたの前に行きます。

祭の日の喜びの声を知る民はさいわいです。

主よ、彼らはみ顔の光のなかを歩み、

ひねもす、み名によつて喜び、

あなたの義をほめたたえます。

あなたは彼らの力の栄光だからです。……

われらの盾は主に属し、

われらの王はイスラエルの聖者に属します。」

(詩篇八九ノ一三 一八)

まず、反逆が天で始まったそのときから、ついに、それがくつがえされて、罪が完全に根絶されるまでの善悪の大争闘の歴史もまた、神の不変の愛の実証である。

宇宙の統治者は、その恵み深い働きをひとりではなさらなかった。彼には助け手があった。すなわち、彼の目的を理解し、幸福を与えることを、共に喜び合える共労者であった。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった」(ヨハネ一ノ一、一二)。言であり、神のひとり子であったキリストは、永遠の父と一つ、すなわち、その性質、品性、目的が一つであつて、神のあらゆる計画と目的に参加できる唯一のおかたであつた。「その名は、『靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』となえられる」(イザヤ書九ノ六)。「その出るのは昔から、いにしえの日からである」(ミカ書五ノ二)。また、神のみ

子は、ご自身について、こう言明された。「主が昔そのわざをなし始められるとき、そのわざの初めとして、わたしを造られた。いにしえ、地のなかった時、初めに、わたしは立てられた。…また地の基を定められたときわたしは、そのかたわらにあって、名匠となり、日々に喜び、常にその前に楽し」んだ(箴言八ノ二一 三〇)父はみ子によって天のすべての住民をお造りになった。「万物は、…位も主権も、支配も權威も、みな御子にあって造られたからである。これらいつさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである」(コロサイノ一六)。天使たちは、神に仕える者で、神のみ前から流れ出る光で輝き、みこころを果たすためにすみやかに飛ぶことのできる翼が与えられているのである。しかし、神の受膏者、「神の本質の真の姿」、「神の栄光の輝き」であられるみ子は、「その力ある言葉をもって万物を保っておられ」て、それらをすべて支配しておられる(ヘブルノ三)。「初めから高くあげられた栄えあるみ座」は、彼の聖所のあるところであり、「公平のつえ」が彼の王国のつえであった(エレミヤ書一七ノ二、ヘブルノ八)。「誉と、威厳とはそのみ前にあり、力と、うるわしさとはその聖所にある」「いつくしみと、まことはあなたの前に行きます」(詩篇九六ノ六、八九ノ一四)。

愛の律法が神の統治の基礎であるから、すべての知的存在者の幸福は、その偉大な義の原則に彼らが完全に一致することにかかっている。神は、造られたすべてのものから愛の奉仕、すなわち、神の品性を理解することによってわきおこってくる崇敬を受けることを望まれる。神は、強制された服従をお喜びにならない。そして、神はすべての者に自由意志を与えて、彼らが、自発的に神に奉仕できるようになさった。

造られた者がすべて、神に対する愛の忠誠を了承しているうちは、神の造られた全宇宙に完全な調和があった。

創造主のみこころをなすことが、天の軍勢の喜びであつた。神の栄光を反映することと神への賛美が、彼らの楽しみであつた。そして、彼らが神を最高に愛していた間は、互いの間の愛も信頼と無我の精神に満ちていた。そこには、天の調和を破るものは何一つなかつた。しかし、この幸福な状態に変化が起こつた。神が被造物にお与えになつた自由を悪用したものがあつた。罪は、キリストの次に位し、最大の榮譽を神から受け、天の住民の中で最高の力と栄光を与えられていた者から始まつた。「黎明の子」ルシファアは、きよく汚れのない守護のケルブの第一の者であつた。彼は、大いなる創造主の目前に立つていた。そして、永遠の神をめぐり照らすつきない栄光の輝きが、彼の上に宿つていた。「主なる神はこう言われる、あなたは知恵に満ち、美のきわみである完全な印である。あなたは神の園エデンにあつて、もろもろの宝石が、あなたをおおつていた。……わたしはあなたを油そそがれた守護のケルブと一緒に置いた。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いた。あなたは造られた日から、あなたの中に悪が見いだされた日まではそのおこないが完全であつた」(エゼキエル書二八ノ一二—一五)。

ルシファアは、少しずつ自己を高めようという野望にふけるようになった。「あなたは自分の美しさのために心高ぶり、その輝きのために自分の知恵を汚した」(エゼキエル書二八ノ一七)。「あなたはさきに心のうちに言つた。……『わたしの王座を高く神の星の上におき、……いと高き者のようになろう』」(イザヤ書一四ノ一三、一四)。この偉大な天使の栄光のすべては神から与えられたものであつたにもかかわらず、彼はそれを自分のものであるかのように思うようになった。彼は、天の軍勢にまさる大いなるほまれを受けていたが、自分の地位に満足しないで、創造主だけに向けられなければならない尊敬を受けたいと望むようになった。彼は、神をすべての

被造物の愛と忠誠を受ける最高のかたとするかわりに、自分で彼らの崇敬と忠誠を受けようと努めた。そして、この天使のかしらは、無限の父である神がみ子にお与えになった栄光をほしがり、ただキリストだけが持つておられた力を自分のものにしようと熱望した。

さて、天の完全な平和は破られた。創造主に仕えるかわりに、自分のために働こうとするルシファアの気質を見て、神の栄光を第一義的に考えたものたちは、不安の念に捕われた。天使たちは、天の会議の席上で、ルシファアに嘆願した。神のみ子は、創造主の偉大さと恵み深さと、公平なことで、そして、神の律法が神聖で不変なものであることを彼にお示しになった。天の秩序をお定めになったのは、神ご自身であつた。そして、その秩序から離れるならば、ルシファアは彼の創造主をはずかしめ、自分を破滅させることになるのであつた。しかし、無限の愛とあわれみによつて与えられた警告も、ただ彼に反抗の精神を起こさせるだけであつた。ルシファアはキリストへのしつとに燃えて、ますますかたくなになっていった。

神のみ子の至上権に異議を唱え、そのことによつて、創造主の知恵と愛とを非難することが、この天使のかしらの目的となつていた。キリストの次に位を占め、神の軍勢の中で第一位であつた彼は、その偉大な頭腦の能力を、その目的のために傾けようとしていた。しかし、すべての被造物が自由な意志で行動をするよう望まれた神は、反逆を正当化しようとする詭弁にだれひとり欺かれないうちに警告を与えておられた。大きな戦いが始まるに先だつて、すべての者は、神のみこころをはつきり知り、神の知恵と恵みが彼らのすべての喜びの源泉であることを悟らなければならなかつた。

宇宙の王は、天の軍勢をそのみ前に召集された。それは、彼らの前で、み子の真の地位を説明し、み子がすべ

ての被造物に対してどんな関係にあるかを示すためであつた。神のみ子は、父のみ座に共に座をしめられた。そして、永遠、自在の神の栄光が両者を包んでいた。み座のまわりには、数えきれない大軍、「万の幾万倍、千の幾千倍」もの聖天使が集まつた（黙示録五ノ一一）。彼らは、使者、従者として、最高の榮譽を与えられた天使で神のみ前から来る光を受けて喜びに満ちていた。王なる神は、集まつた天の住民の前で、神のひとり子であるキリストだけが完全に神の計画に参与し、神のみこころの大いなる計画を実行することがゆだねられていることを言明なさつた。神のみ子は、大ぜいの天使を創造なさつたときに、神のみこころを行なわれたのであつた。そして、彼らは、神に対すると同じく、み子に対しても、尊敬と忠誠を尽くさなければならなかつた。キリストは、この地球とその住民の創造のときにも、神の力を働かされることになつていた。しかし、それにもかかわらず、キリストは、神の計画にそむいて、権力を求めたり、自分を高めたりすることをせず、父の栄光を高め、神の恵みと愛の御目的を実行しようとなさつたのである。

天使たちは、快くキリストの主権を認めて、キリストの前にひれ伏して、彼らの愛と崇敬の念をあらわした。ルシファアは、彼らとともに頭をたれた。しかし、彼の心の中には、奇妙な激しい葛藤があつた。真理、公平、忠誠などがしつととねたみと戦つていた。聖天使たちの感化は、しばらく、彼を納得させたように思われた。美しい調べにのせて、賛美の歌が聞こえ、歡喜に満ちた幾千もの声がそれに和したとき、悪の精神は消えてしまつたように思われた。彼の全身は、言い表わしようのない愛で震えた。彼の心は、罪のない礼拝者たちと一つになつて、父とみ子とを深く愛した。しかし、また彼は、自分の栄光を誇る気持ちに満たされた。最上位を求める欲望が舞いもどつてきた。そして、彼は、ふたたびキリストをねたむ気持ちにふけつた。ルシファアは、彼に授け

られた大いなる榮譽を、神の特別の賜物として認めなかったので、創造主に対する何の感謝の念も表わさなかった。彼は自分の輝きと高い地位を誇り、神と等しくなろうと欲した。彼は、天軍に愛され、尊敬されていた。天使たちは喜んで彼の命令を行なった。そして、彼は、すべての天使にまさって、知恵と栄光が与えられていた。しかし、神のみ子は、父と同じ能力と權威を持ったかたとして、彼以上に高められていた。み子は天父の相談にあずかっていたが、ルシファアは、そのように神の計画に参与していなかった。大天使は、「なぜ、キリストが最高でなければならぬのだろうか。なぜ、かれが自分以上に榮譽を受けるのだろうか」との疑問をいだいた。

ルシファアは、神の御前の自分の場所を離れて、天使の間に不満の精神を流布するために出ていった。彼は極秘のうちに働いた。そして、彼はしばらくの間、神を崇敬しているふうを装って、彼の真意を隠していた。彼は、天使たちを支配していた律法に対する疑惑をほめかし始めた。そして彼は、諸世界の住民にとって、律法は必要であるうが、天使たちは、彼らよりもすぐれたものであり、自分自身の知恵が十分な道しるべとなるから、こうした制限は不必要であると言った。彼らは、神のみ名を汚し得るものではない、その思想もすべて清いのである、神ご自身があやまりを犯すことがありえないと同様に、彼らもあやまちを犯すことはありえないと言うのであった。神のみ子が父と同等に高められたことは、自分も同様に崇敬と榮譽を受けるべきだと主張していたルシファアにとって不正行為を意味した。もしも、この天使のかしらが、彼の当然到達すべき高い地位につくことができれば、それは天の全軍に、大きな利益をもたらす。なぜならば、彼のねらいはすべての者に自由を確保することだからである。ところが、今まで彼らに与えられてきた自由さえ、もう失われた。なぜなら、独裁的支配者が、彼らの上に任命され、その權威にすべての者が従わなければならないからである。これは、巧みな欺きであ

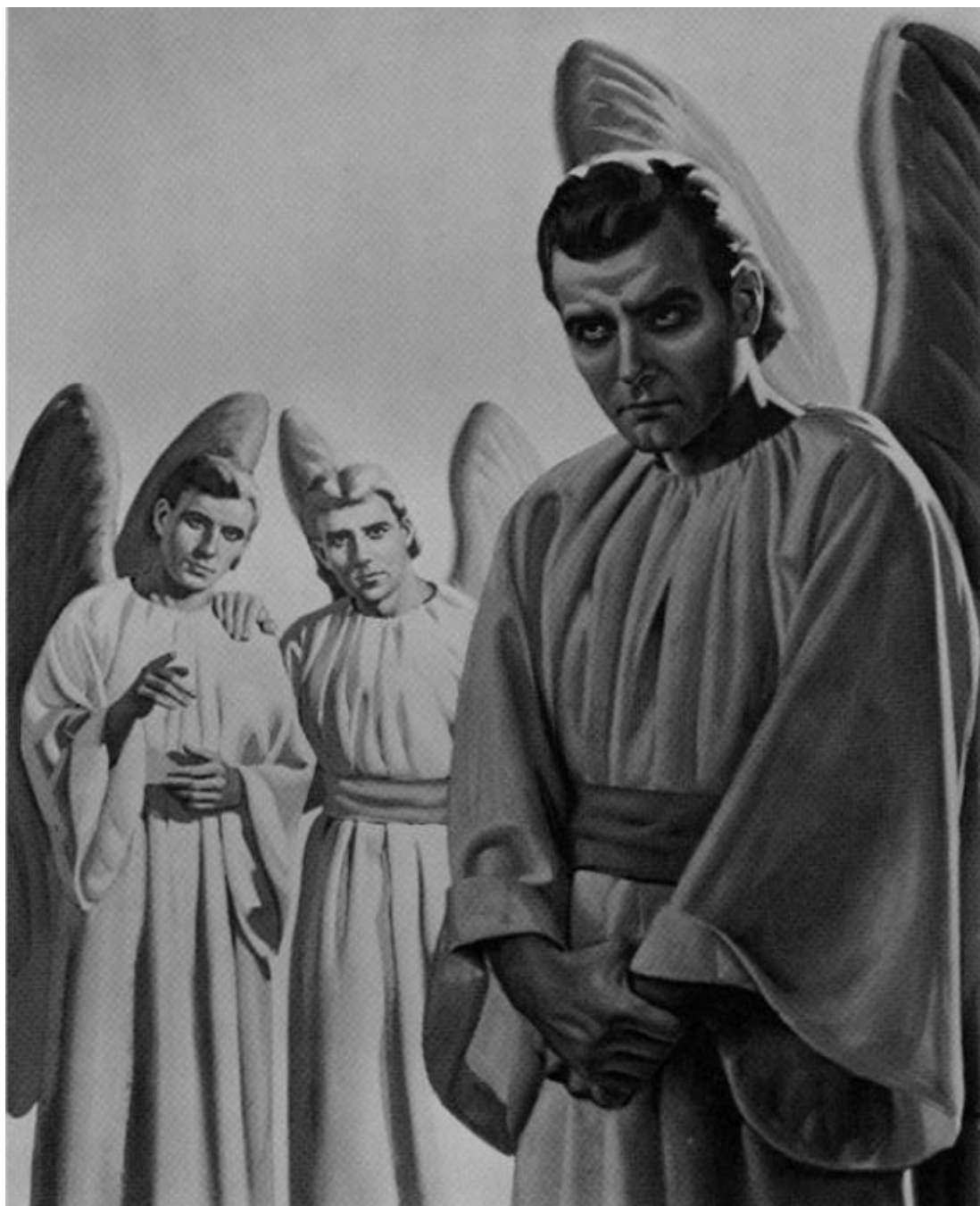
り、ルシファアのたくらみによって、天の宮廷に急速に広がっていった。

キリストの地位、または権威には何の変化もなかった。ルシファアのしつと虚偽のことば、そして、彼がキリストと同等の地位を主張したことから、神のみ子の真の地位についての宣言が必要になった。しかし、み子の地位は、初めから同じであった。ところが、多くの天使たちは、ルシファアの欺きに惑わされていた。

ルシファアは、自分の配下の天使たちが、彼を愛し、真心から信頼しているのを利用して、巧みに彼らの心に彼自身の不信と不満の精神とを吹き込み、それが彼のしわざであることが、だれにも気づかれないようにしていた。ルシファアは、神のみこころを曲げて伝え、誤解と曲解によって、紛争と不満をかきたてた。彼は、巧妙に彼の話聞いた者たちにその感情を口にするように導き、自分に好都合のときには、天使たちのそのようなことを利用して、彼らが神の統治と完全に調和していない証拠としてあげた。自分は、神に完全な忠誠を尽くしていると言いながら、神の政府の安定のために、天の秩序と律法の変更が必要であると、彼は力説した。こうして彼は、神の律法に対する反対を引き起こそうと努力し、彼の支配下の天使たちの心に自分の不満を吹き込みながら、表面的には、不満をとり除き、離反した天使たちを天の秩序に従わせようとしているように見せかけた。彼は、最高の狡猾さをもってひそかに不和と反逆を培養しながら、自分の唯一の目的は、忠誠心を促し、調和と平和を維持することであるかのように装っていた。

こうして、たきつけられた不満の精神は、有害な作用をしていた。公然とした反乱は何もなかったが、知らず知らずのうちに、天使たちの間に考え方のくい違いが生じてきた。神の統治に敵対するルシファアの扇動に賛成するものがあらわれた。彼らは、これまでは神の定められた秩序に完全に一致してきたが、測り知れない神のみ

第1章 罪惡はなぜ発生したか



ルシファーは、徐々に、自己高揚の精神をいだき始めた。彼は、他の天使たち以上の榮譽が与えられていたにもかかわらず、自分の地位に満足せず、神だけに属する榮譽を得たいと願った。

こころをきわめ得なかったために、不満と不幸を感じるようになった。彼らは、神がキリストを高められることを不満に思った。これらの天使は、神の子と同等の権威を要求するルシファーを支持した。しかし、真実で忠誠な天使たちは、神の命令が、知恵と公平に満ちていることを認め、彼らを神のみ旨と和解させようと努力した。キリストは、神のみ子であった。彼は、天使が造られる以前から、神と一つであり、常に天父の右側に立つておられた。すべてのものはキリストの慈悲深い支配下で豊かな恵みを受けていたので、その至上権はこれまで一度も問題にされたことはなかった。天の調和は今まで乱されたことはなかったが、なぜ、今、不和が起こされなければならぬのか。忠誠な天使たちは、この不和が恐ろしい結果しかもたらさないことをさとした。そして、彼らは、不満を持ったものたちに、心を入れ替えて神の統治に従い、神への忠誠をあらわすように熱心に勧めた。

恵み深い神は、大いなるあわれみをもって、長い間ルシファーを忍ばれた。不平と不満の精神は、これまで天において起こったことがなかった。それは、初めての不可解な、説明することのできない新しい要素であった。はじめのうちはルシファー自身も、自分の感情の真の性質を理解することができず、しばらくは、自分の心の動きや思いを口にするのを恐れたが、その気持ちを一扫しようとはしなかった。彼は、自分がどこまで迷って行くのか見当がつかなかった。しかし、無限の愛と知恵の神の力が、彼の非を認めさせるために用いられた。彼の反逆には、正当な理由がないことが明らかにされ、また、彼が、反逆を続けるならば、どんな結果になるかが彼に示された。ルシファーは、自分の非を認めた。彼は、「主はそのすべての道に正しく、そのすべてのみわざに恵みふかく」、神の律法は、正しいものであること、そして、それを全天の前で認めなければならぬことを知った（詩篇一四五ノ一七）。もし彼がそうしたならば、彼は自分と多くの天使たちを救うことができたことであろう。

そのときまで、彼は、神への忠誠を全く放棄してはいなかった。彼は、守護のケルブの地位を去ったけれども、創造主の知恵を認めて神に立ちかえり、神の偉大な計画のなかで与えられている地位に満足するならば、彼の職務に復帰することができたのであった。やがて最後の決定をくださなければならないときがきた。彼は、神の主権に全く服するか、それとも公然と反逆するかのどちらかにきめなければならなかった。彼は、もう少しで立ちかえる決心をするところであったが、彼のプライドがゆるさなかった。これまで、不正なものであることを証明しようとして戦ってきたその権威に、自分のまちがいと自分の考えの誤りを告白して服従することは、彼のよう

に高い榮譽を与えられてきた者にとっては、あまりにも大きな犠牲であった。

慈悲深い創造主は、ルシファーと彼に従った天使たちをあわれみ、彼らを、いままさに陥ろうとしている滅亡の深淵から、なんとかして引きもどそうと努力された。しかし、神のあわれみは、彼らに誤解された。ルシファーは神がなされる忍耐を、むしろ自分が優勢である証拠であると考え、みんなのものに、宇宙の王は、自分の条件に譲歩しようとしていると言いふらした。彼はもし、天使たちが、断固として自分の側につくならば、望むものは何でも得られると宣言した。彼は、あくまでも、自分の行為の正当を主張し、創造主に対して大争闘をいどんだ。こうして、「光になう者」であり、神の栄光にあずかる者、神のみ座に仕えていた者であったルシファーは、その反逆によりサタンとなって、神の聖者たちの「敵対者」となり、天が彼に指導と保護をゆだねられた者たちを滅ぼす者となった。

彼は、忠実な天使たちの意見と嘆願を軽べつして退け、彼らを、だまされた奴隷であると宣言した。彼は、キリストが優先的に扱われることは、自分と天の全軍とに対する不正行為であり、自分と天の全軍の権利がこのよ

うに侵されることは、もはや許すことができないと宣言した。彼は、キリストの至上権を二度と認めようとしなかった。彼は、当然自分に与えられるべきであった榮譽を要求し、彼に従うすべての者を指揮する決心をした。そして、彼の側に加わる者に、すべての者が自由を楽しむことのできる新しく、よりよい政治を約束した。そのために、彼を指導者として受け入れることを表示した天使が数多くあらわれた。彼は、自分の主張に賛成するものがあつたのに気をよくし、天使全体を自分の側に引き入れ、自分が神ご自身と同等になって、天の全軍に従わせようと望んだ。

けれども、忠実な天使たちは、なお、ルシファーと彼に同調した者たちに、神に従うことを熱心に勧めた。そして、もしも、彼らがそれを拒否するならば、ついには、どんな結果に陥らなければならないかを示した。彼らを創造されたかたは、彼らの権力をくつがえし、彼らの反逆活動に対し嚴罰を下すこともおできになる。また、神ご自身と同様に、神聖な神の律法に反対して成功をおさめる天使はひとりもないことを説明した。忠実な天使たちは、ルシファーの欺瞞的議論には耳をふさぐようにすべての者に警告した。そして、ルシファーと彼に従ったものたちには、一刻も早く神のみ前に出て、神の知恵と權威を疑ったあやまちを告白するように勧めた。

この勧告に耳を傾け、彼らの不満を悔い改めて、父とみ子に喜ばれるものになりたいと思うものが多くあつた。ところが、ルシファーは、すでにもう一つの欺瞞を用意していた。この大反逆者は、自分と結束した天使たちはすでに深入りしすぎているから、立ちかえることはできないと断言した。自分は神の律法に精通している、だから神は、お許しにならないのを知っていると彼は断言した。天の權威に屈服するものは、すべてその榮譽を奪われ、その地位を下げられるであろうと彼は断言した。そして、彼自身は、二度とキリストの權威を承認しない決

意をした。彼と彼に従う者たちの唯一の道は、自由を主張し、自分たちに、気持ちよく与えられなかったところの権利を、力づくで手に入れることであると、彼は言った。

サタン自身に関するかぎり、深入りしすぎて立ちかえれなくなっていたことは事実であった。しかし、彼に欺かれた者たちはそうではなかった。忠実な天使たちの勧告と嘆願は、サタンに従った天使らに希望の扉を開いた。彼らが警告に耳を傾けたならば、サタンのわなからのがれることができたはずであった。しかし、誇りと指導者に対する愛着、無制限の自由を得ようとする欲望などが勝を得て、神の愛とあわれみの嘆願は退けられてしまった。

神は、不満の精神が熟して行動的な反逆になるまで、サタンが働きを進めることをお許しになった。サタンの計画の性質と傾向がどんなものであるかが、すべての者に理解されるように、その計画が十分に実行される必要があった。油を注がれたケルブとして、ルシファーには高い地位が与えられていた。彼は、天使たちから大いに愛されていて、彼らに強い感化を与えていた。神の統治は、天の住民ばかりでなくて、神が創造されたすべての諸世界をも包含していた。そして、ルシファーは、もし天使たちを自分の反逆に引き入れることができれば、すべての世界をも自分の側に引き入れることができると考えた。彼は、自分の目的を達成するために、詭弁と欺瞞を用いて、巧妙な論陣を張った。彼の欺瞞の力は非常に大きかった。彼は、欺瞞の外とうに身を隠して、自分の側を有利に導いていった。彼の行動は、すべて、神秘で包まれていたので、天使たちは、彼の働きの真の性質を見破ることはむずかしかった。それが十分に発展するまでは、それが悪いものであることがわからなかった。彼の不満が、反逆とは思われなかった。忠実な天使たちでさえ、彼の性格を十分に見わけ、彼の働きがどんなこと

になるのかを識別することができなかった。

最初ルシファアは、自分自身は全く関係していないような態度で、誘惑の手をのばした。彼は、自分の側に十分に引き入れることができなかった天使たちには、天の住民の利益に対して無関心であるという汚名を着せた。彼は、彼自身が行なっているその働きを、忠実な天使たちの責任に帰した。神のみこころに関して巧妙な議論をして当惑させることが、彼の方針であった。彼は、単純なことをみな不可解にし、巧妙な曲解悪用によって、主の明白な言葉に疑惑を投げかけた。神の統治と非常に緊密な関係にあった彼の高い地位は、彼の言い分に大きな力を貸した。

神は、真理と公平にかなった方法しかお用いにならなかった。サタンは、神がお用いになれないもの、すなわち、へつらいと欺瞞を用いることができた。彼は、神の言葉を偽りであると言い、神の統治計画を曲解して示した。そして、神が天使たちに律法を課するのは正しくないと言った。また、被造物に従順と服従を求めて、神はただ自己を高めようとしておられるのだと言った。したがって、天の住民と、すべての世界の前に、神の統治は正しく、神の律法は完全であることを示す必要があった。サタン自身は、宇宙の福利を増進しているかのように装っていた。横領者の真の性質、彼のほんとうの目的がすべてのものに理解されなければならなかった。彼の正体が彼自身の悪い行為によって露見するために時間が必要であった。

サタンは、自分自身が天で引き起こした不和を、神の統治のせいにした。すべての悪は、神の統治の結果であると断言した。彼は、主の律法を改良することが自分の目的であると主張した。そこで神は、彼の主張するところを実際にやって見て、彼の主張するように律法を変更したらどんな結果になるかを示すことをお許しになった。

彼自身のわざが、彼を断罪すべきである。サタンは、初めから、自分は反逆していないと主張してきた。全宇宙は、欺瞞者の仮面がはがれるのを見なければならなかった。

彼が天から追放されたときでさえ、無限の知恵を持つ神は、サタンを滅ぼされなかった。神は、ただ愛の奉仕だけをお受けになるのであるから、被造物の神に対する忠誠は、神の公平と慈愛を堅く信じた上でなされるものでなければならぬ。天と諸世界の住民は、まだ、罪の性質、あるいはその結果を理解することができなかった。サタンが神に滅ぼされることの正当性をそのとき理解できていなかった。もしもサタンが、直ちに滅ぼされてしまったならば、愛からではなく、恐れから神に仕えるものも起こったことであろう。欺瞞者の影響は完全にぬぐい去られず、反逆の精神も根絶されなかったことであろう。全宇宙の永遠の福祉のために、サタンに、彼の主義主張をもっと展開させなければならなかった。それは、すべての造られた者が、神の統治に対するルシファアの非難の正体をほんとうに悟るためである。そして、神の公平とあわれみ、神の律法の不変性に対する疑惑が永久に除かれるためである。

サタンの反逆は、来たるべきすべての時代にわたって、宇宙に対する一つの教訓、すなわち、罪の性質とその恐るべき結果についての永遠の証明となるべきであった。サタンの支配の結末とそれが人と天使におよぼした影響は、神の権威を取り除いた結果がどうなるかを示すことであろう。それは、神に造られたすべてのものの幸福が、神の統治の存在と結びついていて、これを証言することであろう。こうして、この恐るべき反逆の歴史は、すべての清い者たちを永久に守るものとなり、彼らが罪の性質に関して欺かれることがないようにし、罪を犯し、その罰を受けることがないように、彼らを救うものとなるのであった。

天において支配なさるかたは、初めから終わりまでごらんになるかたである。そのかたの前には、過去と未来の神秘が同じように展開されている。彼は、罪がもたらした不幸と暗黒と破滅のあなたに、神ご自身の愛と祝福のみこころが達成されるのをごらんになる。「雲と暗やみとはそのまわりに」あるけれども、「義と正とはそのみくらの基である」(詩篇九七ノ二)。そして宇宙の住民は、忠実なものも、不忠実なものも共に、やがて、このことを理解するときが来る。「そのみわざは全く、その道はみな正しい。主は真実なる神であって、偽りなく、義であって、正である」(申命記三二ノ四)。

第2章

天地創造のいわれ

本章は、創世記一、二章に基づく。

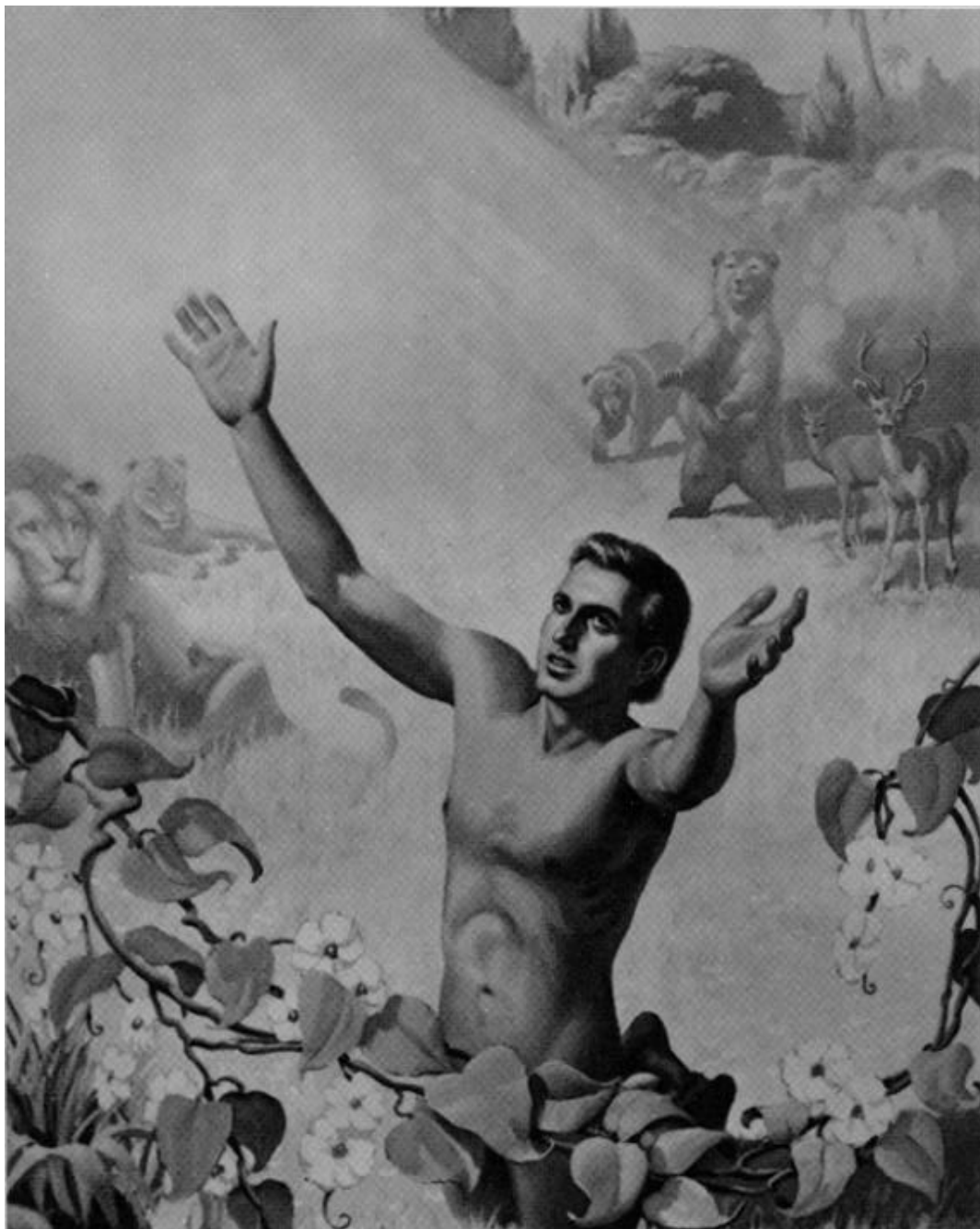
「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた。」「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである。」「あなたは地をその基の上にすえて、とこしえに動くことのないようにされた」(詩篇三三ノ六、九、一〇四ノ五)。

地球が創造主のみ手によって造られたとき、それは非常に美しかった。その表面には、山や丘や野原があつて変化に富み、きれいな川や美しい湖水が、ここかしこにあつた。しかし、山や丘は、現在のように、けわしく、荒けずりでなく、恐ろしい絶壁や裂け目などはなかった。地球の骨組みをなす岩かどは、肥沃な土地におおわれて、いたるところで、緑の草木が繁茂していた。気味の悪い沼や、不毛のさばくはどこにもなかった。どちらを向いても、優雅な灌木や優美な花が視線をとらえた。丘は、今はえているどんな木よりも堂々とした樹木で飾られていた。空気は、臭気で汚染されておらず、清らかで健康的であつた。回りのけしきは、どんなりっぱな宮殿の飾り立てられた庭園よりも、はるかに美しかった。天使の群れは、その光景をながめて感激し、神のすばらし

いみわずに歓喜の声をあげた。

地球が、数多くの動物と植物で満たされてから、創造主のみわざの冠であり、この美しい地球に住むのにふさわしい人間が、活動の舞台にのぼってきた。人間は、見渡すかぎりのものを統治する支配権が与えられた。「神はまた言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに……すべての……ものを治めさせよう。』神は自分のかたちに人を創造された。すなわち……男と女とに創造された」(創世記一ノ二六、二七)。ここに人類の起源が明瞭に述べられている。聖書の記録は、誤った結論を出す余地がないほど明白である。神はご自分のかたちに人間を創造された。そこにはあいまいさが全然ない。動物や植物などの下等な生命形態から、次第に発達段階をたどって、人間は進化したのだと想像する余地は全くない。こうした考え方は、創造主の偉大なわざを、人間的な狭い、地上的な考え方のレベルに引き下げる。人間は、宇宙の王座から神を追い出そうと努める結果、人間自身の品位を低め、人間の崇高な起源を見失っている。星空を高くすえ、野の花を巧みに飾りみ力の奇跡によって、驚くべきものを天地の間に満たされたおかたは、その輝かしいみわざの最後を飾るにあたって、人間をこの美しい世界の統治者としておたてになつたが、それは生命の賦与者のわざに恥じないものであつた。靈感によって与えられた人類の系図は、その起源を、細菌、軟体動物、四足獣などの進化の跡をたどるのではなくて、偉大な創造主に帰着させる。アダムは、土のちりで造られたが、「神の子」であつた(ルカ三ノ三八)。アダムは、神の代表として、彼より低い動物の上におかれた。動物は、神の主権を理解することも認めることもできないが、人を愛し、人に仕える能力を授けられた。詩篇記者は、「これにみ手のわざを治めさせ、よるずの物をその足の下におかれました。……野の獣、空の鳥、……海路を通うものまでも」と言っている(詩篇八ノ

第2章 天地創造のいわれ



人間は、創造主の手から出てきたとき、神のかたちにかたどって造られていた。彼は、服従することによって、その外見と品性において、神のかたちを持続けることができたのであった。

六八。

人間は、外観においても、品性においても、神のかたちを保っているはずであった。キリストだけが、天の父の「本質の真の姿」ではあるが、人間は、神に似せて造られたのである（ヘブル一ノ三）。彼の性質は、神のみ旨と調和していた。人間の知力は、神の事物を理解することができた。彼の愛情は清く、食欲や情欲は理性の支配のもとにあった。彼は、神のかたちをしていて、神のみ旨に完全に服従していたので、清く、幸福であった。

人間が創造主によって造られたとき、彼は背が高く、完全に均整がとれていた。彼の顔は、血色がよく、生命と歡喜の光に輝いていた。アダムの身長は、今日のだれよりも、はるかに高かった。エバは、アダムよりは少し低かったが、その姿は気高く、美しかった。罪のない彼らふたりは、手で造った衣服を身にまとっていなかった。彼らは、天使が着るような光と栄光の衣をまとっていた。彼らが神に従って生活するかぎり、この光の衣は、彼らをおおっていたのである。

アダムが創造されたあとで、彼に名をつけてもらうために、すべての生物が、彼の前につれてこられた。彼はどの動物も対になっているのを見た。しかし、それらの中には、彼に「ふさわしい助け手が見つからなかった」。神が、地上で創造なさったすべての生き物の中には、人間にふさわしいものはいなかった。また神は言われた、「人がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」（創世記二ノ二〇、一八）。人間は孤独な生活をするように造られたのではない。彼は、社交的な存在でなければならなかった。もし伴侶がなければ、エデンの美しい光景も、愉快的労働も、完全な幸福を与えることはできなかったことであろう。天使たちとの交わりでさえ、同情と伴侶を求める彼の願望を満足させることはできなかった。愛し愛される同じ性質のもの

がいなかったのである。

神ご自身が、アダムに伴侶をお与えになった。神は、「彼にふさわしい助け手」すなわち、彼にちょうど合った助け手、彼の伴侶となるにふさわしく、彼と一つになって、愛し、同情することが出来る者をお与えになった。エバは、アダムのわきから取られたあばら骨によって創造された。このことは、彼女がかしらになって彼を支配するでもなければ、彼よりは劣った者として彼の足の下に踏みつけられるものでもなく、同等のものとして、彼のかたわらに立ち、彼に愛され、守られるものであることを示している。男の一部分、彼の骨の骨、彼の肉の肉として、彼女はアダムの第二の自分であった。そしてこの関係には、密接な結合と深い愛情がなければならぬことを示された。「自分自身を憎んだ者は、いまだかつて、ひとりもない。かえって、……おのれを育て養うのが常である。」「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである」(エペソ五ノ二九、創世記二ノ二四)。

神は、最初の結婚をとり結ばれた。だから、結婚式の制定者は、宇宙の創造主である。「結婚を重んずべきである」(ヘブル一三ノ四)。それは、神が人間にお与えになった最初の賜物の一つであった。また、それは、墮落後、アダムが楽園の門から持って出た二つの制度のなかの一つである。婚姻関係に関する神の原則をわきまえ、それに従うときに、結婚は祝福である。それは、人類の純潔と幸福を守り、人間の社会的必要を満たし、肉体的、知的、道徳的性質を高める。

「主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた」(創世記二ノ八)。神が造られたすべてのものは美を窮め、清い夫婦の幸福の増進のために、欠けているものは、何一つなかった。しかし

創造主は、特に彼らの家庭のために、一つの園をそなえて、その愛のもう一つのしるしをお与えになった。この園には、種々さまざまな樹木があつて、その多くはかおり高く、おいしい実をつけていた。まっすぐにのびた美しいぶどうの木は、最も優雅な姿をみせていた。その枝には、最も豊かで変化のある色合いの美しいような実がたわわについていた。ぶどうの木の枝を巧みにたわめて木陰をつくり、果実と葉でおおわれた樹木を用いて住居をつくることは、アダムとエバの仕事であつた。そこにはあらゆる色彩のかおり高い花が咲きみだれていた。園の中央には、いのちの木があつて、その美観は、他のすべての木にまさっていた。木の実は、金や銀のりんごのように見え、生命を永續させる能力があつた。

創造は、ついに完成した。「こうして天と地と、その万象とが完成した。」「神が造つたすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった」(創世記二ノ一、一ノ三二)。エデンは、地の上で栄えた。アダムとエバは自由にいのちの木のところに行くことができた。この美しい世界のどこを見ても、罪の汚れや死の陰はなかった。「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわつた」(ヨブ記三八ノ七)。

偉大な神は、地の基を置かれた。彼は、美しい衣で全世界を飾り、人間のために役立つものを地に満たされた。彼は、地と海に満ちるあらゆる驚異すべきものを創造なさつた。創造の偉大なみわざは、六日で完成した。神は「そのすべての作業を終つて第七日に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日にそのすべての創造のわざを終つて休まれたからである」(創世記二ノ二、二三)。神は、そのみ手のわざを見て満足された。あらゆるものは、完全で、創造主である神にふさわしかった。神は、疲労のためではなく、その知恵と恵みのわざとその栄光のあらわれを心から喜んで休まれたのである。

神は、七日めに休まれたあとで、その日を聖別し、人間の休みの日とされた。人間は、創造主の模範にならうて、この聖なる日に休むことになった。それは、人間が天と地をながめて、神の偉大な創造のみわざを瞑想し、神の知恵と恵みの証拠を見て、創造主に対する愛と畏敬の念に満たされるためである。

神は、エデンにおいて、第七日を祝福して、創造のみわざの記念となさった。安息日は、全人類の父であり、代表であるアダムにゆだねられた。その遵守は、地に住むすべてのものが、神を創造主とし、自分たちの正当な統治者として認めたことをあらわし、自分たちが神のみ手のわざであり、その權威に従うことを快く認める行為ともならなければならなかった。こうして、この制度は全く記念のために、全人類に与えられたのである。そこには、あいまいな点はなく、ある特定の民だけにかぎられることもなかった。

神は、安息日が、樂園においてさえ人類に欠くことのできないものであることをお認めになった。人間は、第七日に自分の興味や楽しみを捨て、神のみわざについて熟考し、神の力と恵みを瞑想する必要があった。人間はさらに明瞭に神のことを思い起こし、自分のものとして所有するすべてのものが、創造主の恵み深いみ手から来たことを思っ感謝するために、安息日が必要であった。

神は、人々が安息日に、神の創造のみわざについて瞑想することを望まれた。自然は、彼らの知覚に訴え、生きた神、創造主、万物の最高の支配者の存在を宣言している。「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をかの夜につげる」(詩篇一九ノ一、二)。地上をおおっている美は、神の愛のしるしである。われわれは、それを万古不易の山、壮大な樹木、開くつばみ、優美な花に見ることができる。万物は、神について語っている。万物の創造主を指示している安息日は、自然と

いう偉大な書物を開き、そして、そのなかに創造主の知恵と力と愛を探究するように命じる。

われわれの祖先は、罪なく清いものに造られたが、罪を犯す可能性がなかったのではない。神は、彼らを自由意志をもった道徳的行為者として創造された。彼らは、神の品性の知恵と慈悲、また、神の要求の正当性を理解し、完全な自由のもとに、服従か不服従かを決定することができた。彼らは、神と聖天使たちとの交わりを楽しむことになっていた。しかし、彼らが永久的に確実なものとされる前に、彼らの忠誠が試みられなければならない。人間が存在の当初から、サタンを墮落させた致命的欲望、すなわち、放縱に対する欲望に一つの制限がおかれた。園の中央にあるいのちの木に善悪を知る木があつて、われわれの祖先の服従と信仰と愛を試験するものとなっていた。彼らは、ほかのどの木の実も自由に食べることが許されていたが、これは食べることを禁じられていて、その罰は死であつた。彼らは、また、サタンの誘惑に会わなければならなかった。しかし、もしその試練に耐えるならば、彼らは、ついに、サタンの力の圏外に置かれ、神の永遠の恵みにあずかることができるのであつた。

神は、人間を律法のもとにおかれたが、これは、人間が存在するためには、不可避の条件であつた。人間は、神の統治に従う者であり、律法のない統治はあり得ない。神は、神の律法を犯す力のないものとして人間を造ることもおできになった。また、アダムの手が禁果にふれないように、彼の手をおさえることもおできになった。しかし、それでは、人間は道徳的自由意志の持ち主ではなくて、単なる機械人形になってしまう。選択の自由がないと、彼の服従は自発的なものではなくて、強制されたものとなる。品性が啓発されることもあり得なかつたであろう。こういう方法は、神が他の諸世界の住民を取り扱われた計画と相反したものであつたことだろう。人

間は知的存在者としての価値を失い、神の支配は専制的だというサタンの非難が正当化されたことであろう。

神は、人間を正しいものに造られた。神は、人間に悪の傾向のない気高い品性をお与えになった。神は、彼に高い知的能力を与え、神に対して忠誠を尽くさせるために、最も強力な示唆をお与えになった。完全で永続的な服従が、永遠の幸福の条件であった。人間は、こうした条件のもとにあつて、いのちの木に近づくことができた。われわれの祖先の家庭は、その子供たちが地に住むためにひろがっていくときの、彼らの家庭の模範とならなければならなかった。神ご自身の手で飾られたその家庭は、豪華な宮殿ではなかった。高慢な人間は、広壮で高価な建物を好み、自分たちの手のわざを誇る。しかし、神は、アダムを園の中におかれた。これが、彼の住居であつた。青空が屋根であり、美しい花と緑の草のじゅうたんを敷いた地が床であつた。葉の繁った大木の枝が、天蓋であつた。壁は、偉大な芸術家であられる神の作品によつて、最も豪華に飾られていた。清い家族の環境は、すべての時代に教訓を教えている。つまり、真の幸福は、誇りとぜいたくにふけることにあるのではなくて創造のみわざによつて神と交わることにあることである。もし人間が、人工的なものに目を向けず、もっと単純さをつちかうならば、彼らは、神の創造の目的に接近することであろう。誇りや野心は、あくことを知らない。しかし、真に賢明なものは、神がすべての人の手のとどくところにおかれた喜びの源泉から、実質的で高尚な楽しみを見いだすのである。

エデンに住むアダムとエバには、「それを手入れし、守るために」園の管理が任せられた。彼らの仕事は、たいくつなものでなく、楽しく爽快なものであつた。神は、頭脳を活動させ、身体を強壮にし、能力を発達させるために、労働を祝福として人間にお与えになった。知的、また体的に活動することが、アダムの清い存在の最高

の楽しみの一つであつた。墮落の結果、彼は、美しい家庭を追われ、日ごとの食物を得るために、かたい土とたたかなければならなくなつたとき、その同じ労働は、樂園での楽しい仕事とはずいぶん異なつていたとはいえ、誘惑の防壁であり、幸福の泉であつた。労働には、労苦や苦痛が伴うからといって、労働をのろいとみなすものは誤っている。金持ちは、しばしば、労働階級を軽べつして見下すが、それは、神が人間を創造された目的から全くはずれている。どんなに多くの富を所有している人であっても、祖先のアダムに与えられた嗣業と比較すれば、いったいどれほどのものであるうか。しかし、アダムは怠惰でなかつた。人間の幸福をもたらすものが何であるかを知つておられた創造主は、アダムに仕事をあてがわれた。働く男女だけが、生活の真の喜びを発見する。天使たちは熱心に働いている。彼らは、人の子らのために働く神の使者である。創造主は、怠惰なのろろした習慣をお許しにならない。

アダムとエバは、神に忠実であるかぎり、全地を支配することになっていた。彼らは何の制約も受けずに、すべての生き物を支配することができた。ししと小羊は彼らのまわりで平和にたわむれ、いつしよに彼らの足もとに横たわつた。楽しそうな小鳥たちが、恐れもせず彼らのまわりを飛びまわり、その喜ばしい歌が創造主を賛美すると、アダムとエバは、その声に合わせて共に父とみ子に感謝した。

清い家族は、天の父の保護を受ける子供たちであるばかりでなくて、知恵に満ちた創造主から教えを受ける生徒でもあつた。彼らは、天使たちの来訪を受け、何の隔てもなく、創造主と交わることを許された。彼らは、いのちの木によつて与えられた生氣に満ち、彼らの知力、天使よりわずかに劣るだけであつた。目に見る宇宙の神秘「知識の全き者のくすしきみわざ」は、彼らにとって、尽きない教えと喜びの泉であつた（ヨブ記

三七ノ一六。過去六千年の間、人間が研究を続けてきた自然の法則と作用は、万物の創造者であり、維持者である無限のおかたによつて、彼らに知らされた。彼らは、木の葉、草花、樹木などと語り、それぞれのいのちの神秘を学んだ。アダムは、あらゆる生物、水中に遊ぶ巨大な海魚から、日光の中にいる小さな昆虫にいたるまで熟知していた。彼は、おのおのに名を与え、すべてのものの習癖や性質によく通じていた。もろもろの天の神の栄光、整然と運行する無数の世界、「雲のつり合い」、光と音、昼夜の神秘などのすべては、われわれの祖先の研究の課題であつた。森林のあらゆる葉に、山々の岩石に、すべての輝く星に、大地に、大氣に、大空に、神のみ名がしるされていた。造られた世界の秩序と調和は、無限の知恵と力とを彼らに語つた。彼らは、自分たちを強く引きつけ、彼らの心を深い愛で満たし、新たな感謝の声をあげさせるものを常に発見するのであつた。

彼らが神の律法に忠誠をつくしているかぎり、彼らの知つて、理解を深め、愛する能力は、絶えず啓発されるのであつた。彼らは、常に新しい知識の宝庫を手に入れ、新しい幸福の泉を発見し、神のはかり知れない不滅の愛について、ますます、明瞭な觀念をいただくようになるのであつた。



自然は、創造主のしもべである。創造のわざは、神の愛と力と偉大さを証明している。大自然という書物と聖書とは、互いに光を投げ合っている。

天地創造の一週間

安息日と同様に、週は、創造の時に創設されて、聖書の歴史を通じて維持され、われわれに伝えられた。神は世の終末に至るまで継続する週の見本として、最初の一週を設けられた。それは、他のすべての週と同様に、文字通りの七日間であった。神は、六日を創造の働きに用い、七日めに休み、この日を祝福して、人間のための休息の日として聖別された。

神は、シナイでお与えになった律法のなかで、週を認め、週の根拠になっている事実をお認めになった。「安息日を覚えて、これを聖とせよ」という命令を与え、六日のうちにすべきことと、七日めにすべきでないことを詳しく説明したあとで、こうして、一週間を過ごすことの原因として、神はご自身の模範をおあげになった。「主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」（出エジプト記二〇ノ八 一一）。創造の日々が、文字通りの一日であったことを理解するならば、この理由は、美しく力強いものに思われる。一週のうち六日間が人間の労働のために与えられ

ているのは、神が第一週のこの同じ時に、創造のわざをなさったからである。人間は、七日めに創造主が休まれたことを記念して、労働をやめるべきである。

しかし、第一週のできごとが何千万年も要したとの仮説は、第四条の戒めの根底をくつがえすものである。もしそうだとすれば、創造主は、ばく然とした不明確な期間の記念として、文字通りの日々を守るように命じておられることになる。神が、被造物に対して、このような態度をとられるとは考えられない。それは、神がすでに明らかにされたものを、不明瞭であいまいなものにしてしまう。それは、最も陰険で、最も危険な形の無神論である。この真相が巧みに隠されているために、聖書を信じると公言する多くの人々がそう信じて教えているのである。

「もろもろの天は主のみことばによって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた。」「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである」(詩篇三三ノ六、九)。聖書は、地球が長い時代を経てほとんどん状態から徐々に進化したというのを認めていない。聖書の記録は、創造週の一日一日が、その後のすべての一日と同様に、夕があり朝があつたことを明らかにしている。一日の終わりに、創造主のその日の働きの結果がしるされている。第一週の記録が終わつたところで、「これが天地創造の由来(ジェネレーション)である」としるされている(創世記二ノ四)。しかし、この言葉は、創造の日々が文字通りの一日でなかったというのではない。その一日一日がジェネレーションと呼ばれたのは、神がその日、その日に何か新しいものを発生させ(ジェネレート)また、造られた(プロデュース)からである。

地質学者は、地球がモーセの記録するところよりはるかに古代のものである証拠を地球自体から発見したと

主張する。今日、現存するものや、数千年経過したものよりは、はるかに巨大な人間や動物の骨、武器、樹木などの化石が発見されたことによって、創造の記録のなかにあらわれているときよりは、ずっと以前に現代の人間よりずっと大きな人種が生存していたと推論する。このような論理の結果、聖書を信じると称する多くの人々が創造の一日は、ばく然とした不定の期間であるという見解をもつようになった。

しかし、聖書の歴史を度外視して、地質学は、何も証明することはできない。発見したものについて、確信をもって論じている人々は、洪水前の人間、動物、樹木などの大きさや、洪水のときの大変化について、十分の認識を持ち合わせていない。地中から発掘される遺物類は、多くの点で現在とは非常に異なった状態にあったことを証明しているが、そうした状態がいつ存在したかということは、聖書から学ばほかないのである。洪水に関する物語のなかで、靈感は、地質学だけではさぐり得ないことがらを説明している。現在のものよりは数倍もある人間、動物、樹木などがノアの時代に埋没した。こうして、洪水前の人々が洪水によって滅びたことを後世の人々に証明するために保存された。神は、こうしたものが発見されたために、靈感による聖書歴史に対する信仰が強固になることを望まれた。しかし、人々は、いたずらに議論して洪水前の人々と同じ誤りに陥った。彼らは、神が、人々を益するために与えられたものを悪用して、それをのろいに変えてしまった。

神を無視した作り話を人々に信じさせることが、サタンの計略の一つである。というのは、そうすれば、きわめて明確に示されている神の律法をあいまいにし、人々を大胆に神の政府に反逆させることができるからである。彼は特に第四条を攻撃する。それは、この戒めが、生ける天地の創造主を明示しているからである。

創造のわざを、自然現象の結果であるというふうの説明しようとする試みが絶えず行なわれていて、クリスチ

ヤンと称する人々でさえ、聖書の明らかな事実に対して、人間の論理を受け入れている。多くの者が、預言、特にダニエル書と黙示録の預言の研究に反対し、これらの書は、不明瞭で理解しにくいと言う。ところが、この同じ人々は、モーセの記録とは反対の地質学的推論を熱心に信じる。しかし、もし、神が啓示されたものが、それほど難解であるとするならば、神が啓示されなかったことに關する単なる仮説を信じるとは、なんと大きな矛盾であろう。

「隠れた事はわれわれの神、主に属するものである。しかし表わされたことは長くわれわれとわれわれの子孫に属」する(申命記二九ノ二九)。神が、どんな方法で創造の働きをなさったかは、人間にあらわされていない。人間の科学は、至高者の秘密をさぐり出すことはできない。神の創造の力は、神の存在と同様に理解することはできない。

神は、科学と芸術の両方面において、世界にあふれる光をお注ぎになった。しかし、科学者と自称する人々がこうした問題を、単に人間的観点だけによって処理しようとするならば、必ず誤った結論を下すにきまっている。もし、われわれの説が、聖書の事実と矛盾しないならば、神の言葉の啓示を越えて推論しても害はないであろう。しかし、神の言葉をさしおいて、科学的原則によって、神の創造のわざを説明しようとする者は、未知の大海を海図も羅針盤もなくただようようなものである。もし、神の言葉の指導なしに研究するならば、どんな偉大な頭脳の持ち主でも、科学と啓示の關係を追求するのにとまどうことであろう。創造主と神のわざは、彼らの理解力をはるかに越えていて、彼らは、それを自然の法則によって説明することはできない。それで、彼らは、聖書の歴史は信頼できないと考える。旧新約聖書の記事の信頼性を疑う者は、さらに一歩進んで、神の存在を疑うよう

になる。こうして、彼らは、いかりを失った船のように、不信の暗礁にのり上げる。

こうした人々は、単純な信仰を失っている。神の清い言葉に対する堅い信仰が必要である。聖書は、人間の科学的觀念によつて、試験されるべきではない。人間の知識は、頼りがいのない案内者である。あらをさがそうとして聖書を読む懷疑論者は、彼らの科学および啓示に関する理解が不十分なために、この二者間に矛盾を発見したということがあろう。しかし、正しく理解しさえすれば、この二者は完全に一致しているのである。モーセは聖霊の指導に従つて書いたのであるから、地質学の学説が正しいものであれば、モーセの言葉と一致しない発見を主張することはあり得ない。すべての真理は、それが自然であれ、啓示であれ、そのすべてのあらわれかたにおいて常に矛盾はない。

神の言葉のなかには、偉大な学者でも答えられない質問が多く提出されている。こうした問題にわれわれの注目がひかれているのは、人間がどんなに知恵を誇つてみても、限られた頭脳では、日常生活のささいなことからなかにさえ、十分に理解できないことがいかに多くあるかを示すためである。

それにもかかわらず、科学者たちは、神の知恵、すなわち、神のなさったこととおできになることなどを理解できると考える。神は、神ご自身の法則に制限されておられるという思想が一般に広まっている。人々は、神の存在を否定するか、あるいは無視するかして、すべてのもの、人の心に働く神の霊の作用さえも説明できると考えている。そして、彼らは、神のみ名を敬わず、神の力を恐れもしない。彼らは、超自然ということ信じず、神の律法、また、彼らを通じて神のみこころを行なわれる無限の能力を理解しない。一般に、「自然の法則」という言葉は、物質界を支配する法則について、人間が発見し得たことを言うのである。しかし、人間の知識は、

なんとかぎられていることであろう。そして、創造主はご自身の法則にかないながらも、なお、有限な人間の思考を越えて働かれる範囲はなんと広いことであろう。

物体には、生命力があると多くの者が教えている。すなわち、ある特質が物体に与えられて、それはその固有の能力によって、活動するようになっていく。そして、自然の営みは、一定の法則に従って行なわれていて、神ご自身でさえそれに干渉することはできないと彼らは言う。これは、偽りの科学であって、神の言葉の支持を受けていない。自然は創造のしもべである。神は、神の法則を破棄したり、それに反して働かれることはないものであって、かえって、神の器として常に用いておられる。自然は、その法則のなかに一貫して、知性と実在と活動的勢力とが働いていることを証明している。父とみ子とは、自然のなかで、絶えず働いておられる。キリストはいわれた。「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」(ヨハネ五ノ一七)。

レビ人たちは、ネヘミヤ記のなかで、こう賛美している。「あなたは、ただあなたのみ、主でいらせられます。あなたは天と諸天の天と、その万象、地とその上のすべてのもの、……これをことごとく保たれます」(ネヘミヤ記九ノ六)。この世界に関するかぎり、神の創造のわざは終わった。「みわざは世の初めに、でき上がっていた」からである(ヘブル四ノ三)。しかし、神の力は、神が創造されたものを保つために働いている。心臓が脈打ち、呼吸が続くのは、一度、始動させられた機構が、それ自体の力によって、動き続けるのではない。すべての呼吸すべての心臓の鼓動は、われわれが神のうちに「生き、動き、存在」していて、神の全体にみなぎる保護のもとにある証拠である(使徒行伝一七ノ二八)。地球が、年々豊富な収穫をもたらし、太陽の回りを運行し続けるのも地球自体の力によるものではない。神のみ手が遊星を導き、それぞれを定められた位置において、秩序正しく天

を運行させておられる。神は、「数をしらべて万軍をひきだし、おのをおの名で呼ばれる。その勢いの大いなるにより、またその力の強きがゆえに、一つも欠けることはない」（イザヤ書四〇ノ二六）。草木が茂り、葉がもえ出て、花が開くのは、神の力によるのである。神は、「もろもろの山に草をはえさせ」谷を肥沃なところになさる（詩篇一四七ノ八）。「林の獣は」「神に食物を求める」。小さい虫から人間に至るまで、すべての生命あるものは日ごとに神のみ摂理の守りに依存している。詩篇記者は、美しくこう歌っている。「彼らは…期待している。あなたがお与えになると、彼らはそれを集める。あなたが手を開かれると、彼らは良い物で満たされる」（同・一〇四ノ二〇、二二、二七、二八）。神のみ言葉が風雨を支配する。神は、天を雲でおおい、地に雨を降らせられる。「主は雪を羊の毛のように降らせ、霜を灰のようにまかれる」（同・一四七ノ一六）。「彼が声を出されると、天に多くの水のざわめきがあり、また地の果から霧を立ちあがらせられる。彼は雨のために、いなびかりをおこし、その倉から風を取り出される」（エレミヤ書一〇ノ一三）。

神は、万物の根源であられる。すべての正しい科学は、神のみわざと調和している。真の教育は、すべて神の統治に従うように導く。科学は、新しい驚異を展開する。科学は、天空高く舞い上がり、未知の深海を探る。しかし、その研究から、神の啓示に反するものは、何一つ示すことはできない。人々は、無知であるために、科学の助けをかりて、神についての偽りの考えを支持しようとする。しかし、自然という書と神のみことばとは、互いに光を照らし合っている。こうして、われわれは、創造主をあがめ、そのみ言葉をよく理解して信頼するように導かれる。

限りある頭脳によつては、無限の神の存在、能力、知恵、そのみわざなどを知り尽くすことは不可能である。

聖書の筆者は言っている。「あなたは神の深い事を窮めることができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなしうるか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか。その量は地よりも長く、海よりも広い」(ヨブ記一一ノ七 九)。地上の最大の知者であっても、神を理解することはできない。人間は絶えず探究し、学び続けても、なお、前方には無限が広がっている。

しかし、創造のみわざは、神の力と偉大さを証拠立てている。「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす」(詩篇一九ノ一)。神のみ言葉の勧告に従うものは、科学のなかにも神を理解する助けがあることを見いだす。「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである」(ローマーノ二〇)。

エデンの園の悲劇

本章は、創世記三章に基づく。

サタンは、もはや天において反逆を扇動することができなくなったので、神への敵意を、人類の滅亡をはかるという新しい方面にむけてきた。エデンの清い家庭の幸福と平和は、彼が永遠に失ってしまった天上の喜びを思い起こさせるのであった。サタンは、彼らをねたみ、彼らを不服従に誘って、罪のたとえと罰とをこうむらせようとした。彼は、彼らの愛を不信に、賛美の歌を創造主に対する非難に変えようとした。こうして、自分が陥つたのと同じ不幸に、これらの罪のない者らを投げこむだけでなく、神に汚名を着せ、天を悲しませようとした。われわれの祖先は、彼らを脅かす危険について、何の警告も与えられずにいたのではなかった。天からの使者は、サタンの墮落や、彼が人類を滅ぼそうと計画していることを彼らに示し、悪の王がくつがえそうと試みている神の政府の性質をさらに十分に説明した。サタンとその軍勢が墮落したのは、神の正しい律法に、彼らが従わなかったからである。秩序と公平は、律法だけによって保たれるのであるから、アダムとエバが律法を尊ぶことは、どんなにたいせつであつたことだろう。

神の律法は、神ご自身と同様に、神聖なものである。それは、神の意志の啓示であり、神の品性の写し、神の愛と知恵の表現である。造られたものの調和は、生物であれ、無生物であれ、すべてのものが創造主の律法に完全に一致することにかかっている。神は、生物のためだけでなく、自然のすべての営みを支配するために、法則をお定めになった。万物は、破ることのできない一定の法則の下にある。しかし、自然のすべてのものが、自然の法則に支配されているにもかかわらず、地上に住む万物のなかで、人間だけは道德律に従わなければならない。創造の最高のわざである人間に、神は、神の要求を認めて、その律法の義と慈愛と、そして、人間に対する律法の神聖な要求を理解する能力をお与えになった。人間には、ゆるがない服従が要求されているのである。

天使と同様に、エデンの住人には、試験期間が与えられていた。彼らの幸福な地位は、創造主の律法に忠実に従うという条件だけによつて保つことができた。彼らは、服従して生きるか、それとも服従しないで滅びるかのどちらかであった。神は、彼らを豊かな祝福を享受する者とされた。しかし、もし彼らが神の意志に逆らうならば、罪を犯した天使たちを許されなかつたかたは、彼らをも許すことはおできにならなかつた。罪は神の賜物を取り去り、彼らに悲惨と破滅をもたらすのであつた。

天使たちは、サタンの策略に注意するように、彼らに警告した。それは、サタンが彼らをわなに陥れようとしてたゆまず努力するからであつた。彼らが神に服従しているかぎり、サタンは、彼らを傷つけることはできなかった。なぜなら、もし必要とあれば、天のすべての天使が、彼らを助けるためにつかわされるからであつた。もし彼らがサタンの最初の誘惑を断固として退けたならば、彼らは、天使たちと同様に安全であつたことであらう。しかし、一度誘惑に負けるならば、彼らの性質は墮落してしまい、とうてい自分だけではサタンに抵抗する力も

抵抗する気持ちも持てなくなってしまうのであった。

知識の木は、彼らの神に対する服従と愛を試みるためにおかれた。主は、園の中にあるすべてのものを彼らが用いるに当たって、一つの禁令を設けるのがよいとお考えになった。しかし、彼らがこの点で神のみ旨を無視するならば、彼らは、罪を犯すことになるのであった。サタンは、彼らのあとを追って絶えず誘惑することは許されなかった。サタンは、ただ禁じられた木のところだけで、彼らに近づくことができた。もし、彼らがその木がどんなものであるかを知ろうとすれば、サタンの策略にさらされることになるのであった。彼らは、神から与えられた警告に注意深く耳を傾け、神がみこころのうちに与えになった教えに満足するように忠告された。

サタンは、人に気づかれないうちに働きを進めるために、媒介としてへびを用いることにした。これは、欺瞞の目的には、ちょうどよい変装であった。そのころ、へびは、地上の動物のうちで、最も賢く、最も美しいものの一つであった。へびには羽があつて、空を飛ぶときは、みがき上げた黄金の色と輝きを放っていた。へびが禁断の木の実り豊かな枝にとまって、おいしそうな果実を食べているありさまは、人の注目をひき、目を楽しませるのであった。こうして、平和な楽園に獲物を待ち受ける破壊者がひそんでいた。

園の中で毎日の仕事をするときに、夫のところから離れないようにと、天使はエバに注意した。彼女が夫といっしょにいるときは、ひとりでいるときより誘惑に陥る危険が少なかった。しかし、エバは、楽しい仕事に夢中になって、知らず知らずのうちに、夫のそばから離れていった。彼女は、自分がひとりなのに気づいたときに、身の危険を感じたが、自分には悪を見わけてそれを退ける知恵と力が十分にあると考えて恐怖をしずめた。彼女は、天使の注意に気をとめないで、まもなく、好奇心と賛嘆のまじった思いで禁じられた木をながめていた。そ

の実は、非常に美しかった。彼女は、なぜ神がこれを禁じられたのかと疑問を抱いた。それが、誘惑者の待っていた機会であつた。彼は、彼女の心の動きを読みとることができるよう、彼女に言った。「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか」（創世記三ノ一）。エバは、自分の心の思いが声となつたのを聞いたような気がしてはつと驚いた。しかし、へびは音楽のような声で、彼女のすばらしい美しさを巧みにほめ続けた。その声は不快ではなかつた。彼女は、その場所から逃げ去ろうとしないで、へびが語るのを聞いて、不思議に思いながら、ためらつていた。もし、エバが天使に語りかけられたのであれば、彼女は、恐怖心を抱いたことであろう。しかし、エバは、目を奪うばかりのへびが、墮落した敵に用いられるとは夢想だにしなかつた。

彼女は、サタンの誘惑の言葉に答えた。「わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」。へびは女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」（同・三ノ二、三）。

彼らが、この木の実を食べるならば、もつと高い存在者となり、さらに広い知識をもつことができると、彼は言った。へび自身も、禁じられた実を食べたために、話す能力を得たのだと言った。そして、主は、彼らの地位が高められて、主ご自身と等しくならぬように、何とかして、この実を彼らに与えまいとしておられるのだとほのめかした。神が、それを味わうこと、また、それに触れることさえ禁じられたのは、それに知恵と力を授ける驚くべき性質があるからである。神の警告は、実際にその通りに成就するものではなくて、ただの威嚇にすぎ

ないのだ、また、彼らは、どうして死ぬことができようか。彼らは、いのちの木の實を食べたのではなかったか。神は、彼らが気高く成長し、より大きな幸福を見いだすことを妨害しておられると彼は言った。

こうした方法で、アダム時代から現在にいたるまでサタンは働き続け、大成功を収めている。彼は、人を誘惑して、神の愛に頼らず、神の知恵を疑わせるのである。彼は、不信心な好奇心を刺激し、神の知恵や力の秘密を探ろうとする際限のないせんさく心をかきたてようと常に努力している。多くの者は、神がみこころのうちに隠されたものを捜し出そうと努めて、神が、啓示された真理で、救いに欠くことのできないものを見落としている。サタンは、人間を、驚くべき知識の分野にはいるかのように信じさせて、不服従に誘惑する。しかし、これは、全く偽りである。進歩的思想に得意になりながら、彼らは、神の要求をふみにじり、墮落と死の道に踏み込んでいるのである。

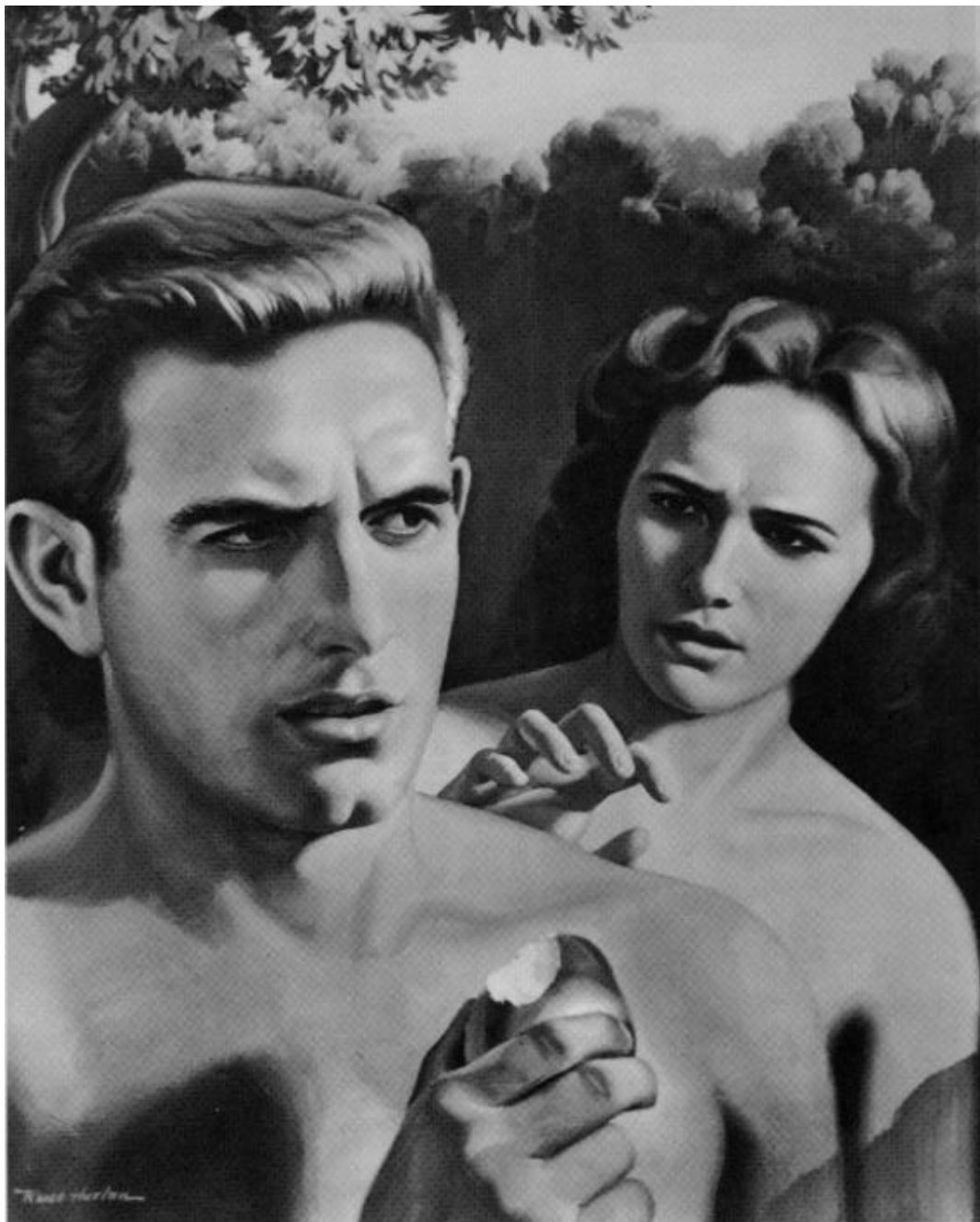
サタンは、きよい夫婦に向かって、神の律法を犯すことによつて、彼らは、勝利者になれると主張した。今日われわれは、それと同様の議論を聞かないであろうか。自分たちは、広い思想をもち、より大きな自由を享受していると主張する一方、神の律法に従う者は、考え方が狭いと言う者が多くいる。これは、「それを食べると」、すなわち、神の要求に逆らうと、「あなたがたは…神のように」なるでしようというエデンで聞こえた声の反響にすぎないのである。サタンは、禁じられた實を食べたために大きな利益を得たと主張したが、自分が罪を犯したために、天から追放されたことは、表に出さなかった。彼は、罪が永遠の損失をもたらしたことを知っていたが、他のものを自分と同じ立場に引き入れるために、自分の不幸を隠した。そのように、今日、違反者は、自分の正体を隠そうとする。彼は、自分が清いことを主張するであろう。しかし、そのりっぱな公言は、彼を欺

瞞者として、さらに危険なものとするだけである。彼は、サタンの側に立って、神の律法をふみにじり、他の人にも同じようにさせ、彼らを永遠の破滅に陥れようとしている。

エバは、サタンの言葉をほんとうに信じた。しかし、エバがそう信じたからと言って、罪の刑罰をまぬかれることはできなかった。エバは、神のみことばを信じなかった。そして、それが、彼女を墮落させたのである。人間は、審判のときに、偽りを本気で信じたからではなくて、真理を信じないで、真理を学ぶ機会をのがしたために罪に定められる。サタンは、正反対の詭弁を弄しているが、神に従わないことは、常に悲惨なことである。われわれは、真理が何であるかを知るように心がけなければならない。神が、み言葉のなかにお書かせになったすべての教訓は、われわれを警告し教えるためである。それらは、われわれを欺瞞から救うために与えられた。それを学ばないならば、身の破滅をもたらす。神のみ言葉に反するものは、みな、サタンから出たものであると思っ
てまちがいない。

へびは、禁じられた木の実をとって、なかば気の進まないエバの手にのせた。そうしておいて、彼は、神がそれにさわるな、死んではいけないからと言われたというエバ自身の言葉を彼女に思い起こさせた。彼は、それにさわっても害はなかったのだから、その実を食べてもだいじょうぶだと言った。エバは、さわっても何も悪いことが起こらないので、だんだん大胆になった。「女がその木を見ると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ」た(創世記三ノ六)。その味はよかった。彼女が食べたとき、彼女は、生き生きした力を感じたように思った。そして、さらに高い存在状態にはいったように感じた。彼女は、何の恐れもなく、実を取って食べた。こうして、罪を犯したエバは、サタンにかわって夫を破滅さ

第4章 エデンの園の悲劇



妻が、神の明白な命令にそむいたことを知ったアダムは、彼女と運命を共にする決心をした。彼もまた死のうと思った。そして、彼は、神に禁じられていた実を取って食べた。

せるために働く者になった。エバは、なんとも言えない異常な興奮状態に陥り、禁じられた木の実を両手に持って、夫をさがし、起こったことのすべてを話した。

悲しい表情がアダム顔にあらわれた。彼は、驚きおびえたように見えた。エバの話を聞いて、これはわれわれが警告を受けていた敵にちがいないと彼は答えた。また彼は、エバは神の宣告によって死ななければならぬと言った。彼女はそれに答えて、死ぬことはないと言った。へびの言葉をくりかえして、彼に食べるようすすめた。エバはそれをほんとうだと思った。というのは、自分は神の怒りのしるしを何も感じないし、むしろ、気分を爽快にして、引き立たせ、からだ中が新しい命におどるように思われ、天使も、このように力づけられているのかとエバは想像したからである。

アダムは、エバが神の命令にそむき、彼らの忠誠と愛の試練として課せられたただ一つの禁令を犯したことを知った。彼の心に恐ろしい苦闘が起こった。彼は、エバを、自分のそばからさまよい出るままにしておいたことを悲しんだ。しかし、それはもう取りかえしがつかなかった。彼は、交わりを楽しんでいた彼女から別れなければならなかった。どうして、それに耐えることができよう。アダムは、神と天使たちとの交わりを楽しんでいた彼は、創造主の栄光を見たのであった。もし、人類が神に忠実であつたならば、彼らにはどのような輝かしい運命が開かれるかを彼は知っていた。しかし、彼は、他のあらゆるもの以上に尊いものと思っていた賜物を失うことを恐れて、こうしたすべての祝福について考える余裕がなかった。創造主への愛、感謝、忠誠心などのすべては、エバに対する愛の大きさには比べるができなかった。彼女は、彼自身の一部で、別れるなどとは考えてみることもできなかった。土のちりから生きた美しい人間を創造し、彼を愛して、彼に伴侶を与えられた同じ無

限の能力を持たれた神は、彼女に代わるものを備えることがおできになることを彼は理解しなかった。彼は、彼女と運命を共にする決心をした。彼女が死ななければならないならば、彼もいっしょに死のうと思った。結局、賢いへびの言葉がほんとうではなかうかと彼は考えた。エバは、不従順の行為の以前と同様に美しく、見たところなんの罪もないかのように、彼の前に立っていた。彼女は、前よりは大きな愛を彼にあらわした。死の徴候は、彼女にあらわれていなかった。そこで、彼は、成り行きにまかせる決心をした。彼は、実を取ってすばやく食べた。

アダムは、罪を犯した後で、まず第一に、自分がこれまでより高い存在状態にはいったような気がした。しかし、間もなく、罪の意識は彼の心を恐怖で満たした。これまでなごやかで一樣だった気温が、罪を犯したふたりにはだ寒く感じられた。これまで彼らの心に宿っていた愛と平和はなくなり、その代わりに罪の意識と未来への恐怖と魂の空虚さを感じた。彼らを取りまいていた光の衣は消えてしまった。それで、彼らは、その代わりに衣服をつくろうとした。彼らは、何も着ないで、神と天使たちに会うことはできなかった。

彼らは、今、自分たちの罪の正体を知り始めた。アダムは、自分のそばを離れて、へびに欺かれたエバの愚かさを非難した。しかし、彼らはふたりとも安易な考えを抱いて、これまでこれほど多くのご自分の愛の証拠をお与えになった神は、この一つの罪を許し、彼らが当然受けるものと思った恐ろしい刑罰に会わなくてもすむようにしてくださるだろうと思った。

サタンは、自分の成功を喜んだ。彼は女を誘惑して、神の愛に不信を抱かせ、神の知恵を疑わせ、神の律法を犯させ、そして、彼女によって、アダムをも打ち負かしたのである。

しかし、偉大な律法賦与者は、アダムとエバに彼らの罪の結果を知らせようとしておられた。神が園に来られた。彼らが罪なく清いときであれば、喜んで創造主の近づいて来られるのを歓迎するのであったが、いまは、恐れて逃げ、園の奥深いところに隠れようとした。しかし、「主なる神は人に呼びかけて言われた、『あなたはどこにいるのか』。彼は答えた、『園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです』。神は言われた、『あなたが裸であるのを、だれが知らせたのか。食べるなど、命じておいた木から、あなたは取って食べたのか』」（同・三ノ九 一一）。

アダムは、自分の罪を否定し、言いわけをすることもできなかった。彼は、悔い改めの精神をあらわす代わりに、彼の妻を非難し、ひいては、神ご自身の責任にした。「わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです」（同・三ノ一二）。エバを愛するがために、神に喜ばれることも、樂園の彼の家も歡喜に満ちた永遠の命をも捨てた彼が、罪を犯した今は、罪の責任を妻ばかりでなく、創造主ご自身にまで負わせようとした。罪の力は、これほどに恐ろしいのである。

女が「あなたは、なんということをしたのです」と問われたとき、彼女は、「へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました」と答えた（同・三ノ一三）。「どうしてあなたは、へびをお造りになったのですか。へびがエデンにはいるのをどうしてお許しになったのですか」という質問が彼女の言いわけの真意であった。このようにして、彼女もアダムと同じく、彼らの墮落の責任を神のせいにした。自己を義とする精神は、偽りの父から始まった。この精神は、われわれの祖先がサタンの力に屈服すると直ちにあらわれた。そして、それ以来、アダムのすべてのむすこ、娘はこの精神をあらわしてきた。けんそんに自分の罪を告白するかわりに、彼らは他

の人や、環境、あるいは神を非難して、自分を弁護しようとする。彼らは、神の祝福さえ、神に対するつばやきの理由にするのである。

そこで、主はへびにこう宣告を下された。「おまえは、この事を、したので、すべての家畜、野のすべての獣のうち、最もろわれる。おまえは腹で、這いあるき、一生、ちりを食べるであろう」(同・三ノ一四)。へびはサタンの手先として使われたために、神の刑罰を共に受けなければならなかった。へびは、野の生きもののうちで、最も美しく、ほめそやされていたが、最も卑しめられて、いみきられるものとなり、人からも動物からも恐れられ、憎まれるようになるのであった。へびにむかつて語られた次の言葉は、サタン自身に直接言われたもので、彼が、最後には敗北して滅びることをさしていた。「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」(同・三ノ一五)。

エバは、これから会わなければならない悲しみと苦痛を知らされた。主は言われた。「あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう」(同・三ノ一六)。神は創造のときに、彼女をアダムと等しいものに造られた。もし彼らが神に従って、その偉大な戒めに調和していたならば、互いに調和しあってきたはずであった。しかし、罪が調和を破った。だから、一方が他方に従属することによって彼らの一致と調和が保たれるようになってしまった。エバは最初に罪を犯した。彼女は、神の命令に反して、夫のそばを離れたために、誘惑に陥った。また、アダムは、彼女のすすめによって罪を犯した。そこで、彼女は、夫に従う立場におかれた。神の律法が命じているこの原則を、墮落した人類が守っていたならば、この宣告は、罪の結果によるものであったとは言え、彼らにと

って、祝福となったことであろう。ところが、こうして与えられた優位を男が乱用したために、女の運命は非常に苦しく、彼女の人生は重荷となった。

エバは、エデンの家庭で、夫のそばにいて、完全な幸福を味わっていた。しかし、落ちつきを失った現代のエバたちと同様に、彼女は、神がお定めになったところより、もっと高い身分になりたいと望むようにそのかされた。彼女は、初めに置かれた地位より高く昇ろうと上して、それよりはるか下に落ちた。神のご計画に従って、実生活の義務を快く果たそうとしない者は、みな同様になる。神がお与えにならなかった地位を得ようと努めて彼らが祝福となることのできる場所をあげるものが多い。高い身分を望んで、女性の尊厳と品性の気高さを犠牲にし、天が特に彼らに与えた働きを怠る者が多いのである。

主は、アダムに宣言された。「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る」(同・三ノ一七 一九)。

罪のない夫婦が、悪を知ることとは、神のみこころではなかった。神は、彼らに善を惜しみなく与えて、悪は、さしひかえておられた。それなのに、彼らは神の命令に反して、禁じられた木の実を食べてしまった。こうして彼らは、それを一生の間食べ続け、悪の知識をもつことになるのであった。このとき以来、人類はサタンの誘惑に悩まされることになった。それまで彼らに与えられていた楽しい労働にかわって、不安と労苦を経験しなければならなくなった。彼らは、失望、悲嘆、苦痛をなめ、そして最後には死ななければならなかった。

自然全体は、罪ののろいのもとにあつて、神に対する反逆の性質と結果を人間にあかしすることになった。神は人間を創造なさったときに、彼を地とすべての生き物の統治者にされた。アダムが、天の神に忠誠をつくしていたかぎり、自然全体は彼に従っていた。ところが、彼が神の律法にそむいたとき、下等の動物は、彼の統治にそむいた。こうして、主は、その大きな慈悲をもつて、神の律法の神聖さを人間に示し、彼ら自身の体験によつて、ささいなことにおいても、律法の無視がどんなに危険であるかを悟るようにされた。

このとき以来、艱難辛苦の生活が人間の運命になったが、これは、愛のゆえに定められたものであつた。これは罪の結果、人間に必要なつた訓練であつて、食欲と情欲の放縦を防ぎ、克己の習慣を発達させるためであつた。これは、罪の滅びと墮落から人間を回復する神の大計画の一部であつた。

「それを取つて食べると、きつと死ぬであろう」(同・二ノ一七)という祖先に与えられた警告は、彼らが禁じられた木の実を食べたその日に死ぬという意味ではなかつた。しかし、その日に、取り消すことのできない宣告が発せられるということであつた。不死は服従の条件のもとに約束された。罪を犯せば、永遠の命を失うのであつた。その日に、彼らは死ぬ運命に定められるのであつた。

永遠に生きるためには、人間は、いのちの木の実を食べなければならなかつた。これが取り去られると、彼の生命力は次第に衰えていつて、ついには絶えてしまう。サタンは、アダムとエバが、不従順のために、神の怒りを招くことを意図していた。そして、彼らが許しを得ることができなければ、彼らは、いのちの木の実を食べて罪と悲惨に満ちた生活を永續することを、サタンは望んでいた。だが、人間の墮落後、直ちに聖天使がいのちの木を守る任命を受けた。この天使たちの回りには、輝く剣のような光がひらめいていた。アダムの家族の者は、

だれもこのさくを越えて、いのちの木の実を食べることはできなかった。だから、不死の罪人はいないのである。われわれの祖先の罪から生じたわざわいのうしおは、ごく小さな罪の結果としては、あまりにも恐ろしすぎる。と考えて、人間を扱われる神の知恵と義とを疑う者が多い。しかし、彼らがこの問題の深いところにあるものを見るならば、自分たちのまちがいに気づくであろう。神は、ご自分のかたちに従って、罪のないものとして人間を造られた。地上には、天使より少し低く造られた人びとが住むことになっていた。しかし、彼らの従順がためされなければならなかった。神は、この世界が、神の律法を無視する者たちによって満たされるのを許されなかった。ところが、神は大きなあわれみによって、アダムにきびしい試練をお与えにならなかった。そして、禁令が軽かったこと自体が、罪を非常に大きいものにした。もし、アダムが最も小さい試練に耐えることができなかったら、もっと大きな責任を負わせられたときに、さらに大きな試練に耐えることはできなかったであろう。

もし、アダムに何か大きな試練が課せられたならば、悪に傾いている者は、「これは、ちょっとしたことだ。神は、小さいことは厳密に言われたい」と言って、言いわけをしたことであろう。そして、ささいなことと思われることの違反がつづき、人びとの間で非難されることもないであろう。しかし、主は、どんなに小さい罪でも憎まれることを明らかにされた。

神の言葉にそむいて、禁じられた木の実を食べ、夫をも誘って律法を犯させることは、エバにとって、ささいなことのように思われた。ところが、彼らの罪は、不幸が潮流のようにこの世界に流れ込む門を開いたのである。誘惑のときの、誤った一歩がどんな恐ろしい結果をもたらすかをだれが知ることができよう。

神の律法は人間を束縛するものではないと教える多くの人びとが、その戒めに従うことは、不可能であると主

張している。しかし、それが真実であるならば、なぜアダムは、罪の刑罰を受けたのであろうか。われわれの祖先の罪は、この世に罪と悲しみをもたらした。もし、神の恵みとあわれみがなかったならば、人類は全くの絶望状態に投げこまれたことであろう。だれも自分をあざむいてはならない。「罪の支払う報酬は死である」(ローマ六ノ二三)。人類の祖先に宣告がくだったときと同じく、今も、神の律法を犯してその刑罰をまぬかれるものはひとりもないのである。

アダムとエバは、罪を犯してからエデンに住むことができなくなった。彼らは、罪のなかったときの喜びに満ちた住居にとどまっていたいと熱心に願った。彼らは、その幸福な住居に住む権利をすべて失ったことを認めたが、今後は、必ず神に服従することを誓った。しかし、彼らの性質は、罪のために墮落し、悪に抵抗する力が弱まり、サタンが容易に彼らに近づく道を開いたことを彼らは知らされた。彼らは、罪のないときに誘惑に負けたのであるから、今、罪を知った状態においては、忠実に従う力が弱まったのである。

彼らは頭をうなだれ、言い表わせない悲しみをいだきつつ、美しい住居に別れを告げ、罪にのろわれた地に住むために出ていった。かつては、おだやかで一樣だった気温も、今は、急激に変化するようになった。恵み深い主は、激しい暑さと寒さから彼らを保護するために、皮衣をお与えになった。

アダムとエバは、花がしばみ、葉が落ちるといふ死の最初の徴候を見て、今日、人びとが死者のために嘆く以上の悲しさを味わった。か弱い優美な草花が枯れるのは確かに悲しいことであつた。しかし、りっぱな樹木が葉を散らすときに、生きているものは、みな、死ぬ運命にあるという厳粛な事実を、はっきりと人の心に思わせるのであつた。

エデンの園は、人間がその楽しい道から追われた後も長く地上に残っていた。その入り口は警護の天使が守っているだけで、墮落した人類は、罪の入らなかつたときの住居を長い間かいま見ること許されていた。ケルビムが守っていた樂園の門には、神の栄光があらわれていた。アダムとその子らは、ここに来て神を礼拝した。かつて、神の律法を犯したためにエデンから追放された彼らは、ここで神の律法に従う誓いを新たにした。悪のうしおが全地にみなぎり、人々の悪行の結果、世界が洪水によって滅ぼされることになったときに、エデンの園を造られたみ手は、それを地上から取り去られた。しかし万物が回復されて、「新しい天と新しい地」が出現するとき（黙示録二二ノ一）、それは、はじめのときよりもっと輝かしく飾られて回復されるのである。

そのとき、神の戒めを守ってきたものは、いのちの木の下で、不死の生気を呼吸する。そして、罪のない世界の住民は、永遠にわたって、この喜ばしい樂園に、罪にのろわれなかつた完全な神の創造のみわざの見本を見る。とともに人間が創造主の栄光に満ちた計画を成就していたならば、全世界がどのようなようになったかという見本を見るのである。

人類救済の計画

人間の墮落は、全天を悲しみで満ちた。神に造られた世界は、罪ののろいでそこなわれ、不幸と死に運命づけられたものの住むところとなった。律法を犯したものには、のがれの道がないように思われた。天使は、賛美の歌をやめた。天の宮廷には、罪がひき起こした破滅を嘆く声が満ちた。

天の栄光に満ちた司令官であられる神のみ子は、墮落した人類をあわれまれた。彼の心は、失われた世界のわざわいをごらんになって、限らないあわれみの情を感じられた。しかし、神の愛は、すでに、人間を贖う計画を立てていた。破られた神の律法は、罪人の生命を要求した。人間に代わって、その要求に応じられるのは、全宇宙にただひとりしかなかった。神の律法は、神ご自身と同様に神聖であるから、罪の贖いをすることができるのは、神と等しいかただけであった。罪を犯した人間を律法ののろいから贖い、再び、天と調和させることができたものは、キリストのほかになかった。キリストは、罪のとがと恥とをその身に負われるのであった。罪は天父とみ子とを離れさせるほど、清い神にとっていまわしいものであった。キリストは、墮落した人類を救うために

悲慘のどん底においてこられるのであった。

キリストは、罪人のために父の前に嘆願された。その間、天の万軍は、言葉で表現することのできない深い関心をもつて、その結果を待ちうけた。神秘的な交わりは長く続いた。それは、墮落した人間の子らのための「平和の一致」であつた(ゼカリヤ書六ノ一三)。救いの計画は、地球が創造される前にたてられていた。キリストは「世のはじめからほふられた小羊」(黙示録一三ノ八・詳訳聖書)であつた。しかし、宇宙の王であられる神にとつても、み子を、罪を犯した人類のために死にわたすことは苦闘であつた。ところが「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さつた。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ三ノ一六)。ああ、贖罪はなんと神秘的なものであるうか。神を愛さなかつた世界を、神はどんなに愛されたことであらう。「人知をはるかに越えた」その愛の深さをだれが知ることができるうか。永遠の命を与えられた人々は、このはかり知れない愛の奥義を、永遠にわたつてさぐり求めて、驚き賛美するのである。

神は、キリストによつて、ご自分をあらわし、「世をご自分に和解させ」ようとなさつた(コリント第二・五ノ一九)。人間は罪を犯して墮落したために、自分の力では、清く恵み深いご性質の神と調和することができなくなつた。しかし、キリストは、律法の罪の宣告から人間を贖つたあとで、上からの力を人間に与えて、人間の努力とそれを結合させることがおできになるのであつた。こうして神に対する悔い改めとキリストを信じる信仰によつて、アダムの墮落した子らは、もう一度「神の子」(ヨハネ第一・三ノ二)となることができるのであつた。人類の救いが達成される唯一の計画は、その無限の犠牲に全天を包んだものであつた。キリストが、贖罪の計画を示されたとき、天使たちは、喜ぶことができなかった。というのは、人間の救いのために、彼らの愛する司

令官が言葉に表わせない苦悩をなめなければならぬことを知ったからである。キリストが、天の純潔と平和、歡喜と栄光、そして、永遠の命を去って地に下り、墮落した人々と接し、悲しみと恥と死を経験しなければならぬことを語られたとき、天使たちは、悲しみと驚きをもって彼の言葉に耳を傾けた。キリストは、罪人の仲保者として、罪の罰をお受けになるのであった。それにもかかわらず、彼を神の子として受け入れるものはわずかであった。彼は、天の王としての高い地位を捨て、人間として地上にあらわれて、自分を低くし、人間が耐えなければならぬ悲しみと誘惑を、経験によってお知りになるのであった。これは、みな、彼が試みられている者を助けるために必要であつた（ヘブル二ノ一八参照）。キリストは、教師としての任務を終えたあとで、悪者どもの手に渡されて、彼らがサタンにそそのかされて行なうあらゆる侮辱と苦痛を受けなければならなかつた。彼はとがある罪人として天と地の間にあげられ、最も残酷な死をとげなければならなかつた。彼は、天使たちが、見るにたえかねて、顔をかくすほどの恐ろしい苦痛を長時間味わわなければならなかつた。彼は律法を犯した罪、すなわち全世界の罪の重荷を背負うとともに、魂の苦悩と父のみ顔が隠されることにも耐えなければならなかつた。

天使たちは、彼らの司令官の足下にひれ伏して、自分たちが人間のために犠牲になりたいと申し出た。しかし天使の命では、負債を支払うことはできなかつた。ただ人間を創造されたかただけが、人間を贖う力をもっておられた。しかし、天使たちにも、贖罪の計画のなかで果たすべき役割があつた。キリストは、「御使たちよりも低い者とされ……死の苦しみ」に会われるのであつた（ヘブル二ノ九）。彼が、人性をおとりになれば、彼の力は天使の力とは同じでなくなる。それで、彼らはキリストに仕え、苦しみに会われる彼を力づけ慰めるのであつた。

彼らは、また、救いを受け継ぐべき人々に奉仕するためにつかわれる仕える霊となるのである（ヘブル一四参照）。彼らは、恵みにあずかる者たちを、悪天使の力とサタンが常に投げかける暗黒から守るものとなるのである。

天使たちは、主の苦悩と屈辱を見ると、悲しみと憤りに満たされて、殺人者たちから、主を救い出したいと願うのであったが、彼らの目撃することに介入して妨げてはならなかった。キリストが悪人の侮辱と虐待を受けられることは、贖罪の計画の一部であった。彼は、人間の贖い主となられたとき、こうしたすべてのことに同意されたのである。

キリストは、ご自分の死によって、多くの者を贖い、死の力を持つ者を滅ぼすことを、天使たちに保証なさった。彼は、人間が罪のために失った王国を回復し、そして、贖われた人びとは、彼とともにその王国を継ぎ、永遠にそのなかに住む。罪と罪人は消し去られて、二度と天と地の平和を乱すことはない。キリストは、父が承認なさった計画に天使軍が同意することを命じ、彼の死によって、墮落した人間が神と和解することができることを喜ぶようにお命じになった。

そのとき、喜び　口では表現することのできない喜びが天に満ちた。贖われた世界の栄光と幸福は、いのちの君の苦痛と犠牲をはるかに越えたものであった。「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心になう人々に平和があるように」（ルカ二一四）と、ベツレヘムの丘で鳴り響いたあの歌の最初の調べが、天の宮廷に反響した。新しい創造に歓喜したよりも、さらに深い喜びをもって、「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」（ヨブ記三八ノ七）。



園の中で、サタンに宣告が下されたとき、人間に、贖罪のことが初めて知らされた。
これは、悪魔の力が碎かれるという約束であった。

贖罪に関する最初の予告が、人間に与えられたのは、園でサタンに宣告が下されたときであった。主は言われる。「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」(創世記三ノ一五)。アダムとエバが聞いているところで語られたこの宣告は、彼らにとつては、約束であつた。そこには、人間とサタンとの戦いが予告されていたが、この大敵の力がついに碎かれることが宣告されていた。アダムとエバは、正しい審判者の前に罪人として立ち、犯した罪の宣告を待っていた。しかし、彼らは、自分たちの分である労苦と悲しみの一生、また、ちに帰らなければならぬという宣告を聞く前に、希望を与えずにはおかない言葉を聞いた。彼らは、大いなる敵の力に苦しまなければならなかつたが、最後の勝利を待望することができたのである。

サタンが、彼と女との間と、彼のすえと女のすえとの間に恨みがおかれることを聞いたとき、彼の人間の性質を墮落させる働きが妨げられ、人間は、何かの方法によつて彼の力に抵抗することができるようになることを知つた。しかし、救いの計画がさらに十分に示されたとき、サタンは、人間を墮落させたために、神のみ子をその高い地位からひきおろすことができることを彼の天使たちと共に喜んだ。彼はこれまでの彼の地上での計画は成功であつたと言つた。そして、キリストが、人性をおとりになる場合には、彼をも打ち負かして、墮落した人類の贖いを妨げることができると宣言した。

天使たちは、われわれの祖先に、人間の救いのために考え出された計画をさらにくわしく教えた。アダムとエバは、大きな罪を犯したにもかかわらず、サタンのなすがままに放任されてはいないという保証が与えられた。神のみ子が、彼らの罪を贖うために、ご自身のいのちを提供されたのである。彼らに恵みの期間が与えられ、悔

い改めとキリストを信じる信仰とによって、彼らは、ふたたび、神の子となることができるのであった。

アダムとエバの罪が要求した犠牲は、神の律法の神聖な性質を、彼らに明らかに示した。そして、彼らは、これまで感じたこともないほどに、罪のつとめと罪の悲惨な結果とを知った。彼らは、後悔と苦悶のうちに、その刑罰が、彼の上に負わせられないように嘆願した。彼の愛こそ彼らのすべての喜びの源であった。むしろ、その罰が彼らと彼らの子孫の上にくだることを願った。

彼らは、主の律法が地上と同じく天上においても神の政府の基礎であるから、律法を犯したことに對しては、天使のいのちでさえ、犠牲として受け入れることはできないことを聞かされた。人間の墮落した状態に適合させるために、その戒めの一つでも、除いたり変更したりすることはできなかった。しかし、人間を創造なさった神のみ子は、人間を贖うことがおできになるのであった。アダムの罪が不幸と死をもたらしたように、キリストの犠牲は、命と不死をもたらすのであった。

罪のために、人間だけでなく、地も悪者の支配下に陥った。そして、地も贖罪の計画によって、回復されなければならなかった。アダムは、創造されたときに、地の統治者としておかれた。ところが、誘惑に負けたためにサタンの支配下におかれた。「おおよそ、人は征服者の奴隷となるものである」(ペテロ第二・二・一九)。人間がサタンの捕虜になったとき、彼の統治権は、征服者の手に移った。こうして、サタンは「この世の神」(コリント第二・四・四)となった。彼は、初めアダムに与えられた地の統治権を彼から奪った。しかし、キリストはご自分の犠牲によって、罪の罰を払い、人間を贖うばかりでなくて、人間が失った統治権をも回復してくださるのであった。第一のアダムによって失われたものはずいぶん、第二のアダムによって回復されるのである。預言者

はこう言っている。「羊の群れのやぐら、シオンの娘の山よ、以前の主権はあなたに帰ってくる」(ミカ書四ノ八)。使徒パウロも、「やがて神につける者が全くあがなわれ」る時を示している(エペソ一ノ一四)。神は、きよい幸福な人々の住居として、地を創造された。主は、「地をも造り成し、これを堅くし、いたずらにこれを創造されず、これを人のすみかに造られた」(イザヤ書四五ノ一八)。地が神の力によって新しくされ、罪と悲しみから解放されて、贖われた者の永遠の住居となるときに、この目的は達成されるのである。「正しい者は国を継ぎ、とこしえにその中に住むことができる」(詩篇三七ノ二九)。「のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝」する(黙示録二二ノ三)。

罪を犯す前のアダムは、創造主との隔てのない交わりを楽しんでいた。しかし、罪が神と人間との間を隔ててしまった。そして、キリストの贖いだけが、この深淵に橋をかけ、天から地に祝福と救いがもたらされることを可能にした。人間は、創造主に直接近づくことはできなかったが、神は、キリストと天使たちによって人間と交わられるのであった。

こうして、エデンで神の宣告が与えられたときから、洪水のときまでと、そして、神のみ子の初臨までの歴史上の重大なできごとがアダムに示された。キリストの犠牲は全世界を救う価値が十分あるにもかかわらず、多くの者は罪の生活を選んで、悔い改めず、従わないことを彼は示された。犯罪は、時代が進むにつれて増加し、罪ののろいは、人類と獣類の上に、ますます重くのしかかる。人間の寿命は、人間自身の罪の生活のために短縮する。人間の背丈は低くなり、その耐久力は減少し、道徳的、知的能力は衰えて、ついに世界はあらゆる不幸で満たされる。人間は、食欲と情欲をほしいままにすることによって、贖罪の計画の大真理を理解することができな

くなる。しかし、キリストは、天を去られた目的に忠実に従って、人間をみこころにとめ、彼らの弱点と欠点を彼のうちに隠すように、いまなお招いておられる。彼は信仰をもって、彼に来るすべての者の必要を満たされる。こうして、悪がはびこるなかにあつて、神の知識を保ち、悪に汚されない者が、わずかながら常に存在するのであつた。

犠牲の供え物は、神が人間のためにお定めになったもので、罪の悔い改めと約束の贖い主への信仰の告白を、いつまでも思い起こさせるものであつた。それは、死をもたらすものは罪であるという厳肅な事実を、墮落した人類に印象づけるためであつた。アダムにとって、最初の犠牲をささげることは、非常に心の痛む儀式であつた。彼は、神だけが与えることのできる生命を奪うために、手を振り上げなければならなかつた。彼が死を見たのはこれが最初であつた。もし彼が神に服従していたならば、人間も獣も死ぬことはなかつたことを悟つた。彼が罪のない犠牲を殺したとき、自分の罪のために、傷のない神の小羊の血を流さなければならぬことを考えて、ふるえおののいた。神の愛するみ子の死によらなければ、償ふことのできない自分の罪の大きさを、この光景は、さらに深くなまなく彼に示した。罪を犯した者を救うために、そのような犠牲をお与えになる無限の恵みに彼は驚いた。暗く恐ろしい未来に希望の星が輝いて、それが、全く絶望的になるのを防いだ。

しかし、贖罪の計画は、人類の救済より、もっと広く深い目的をもっていた。キリストが地上に來られたのは、人間を救うためだけではなかつた。この小さな世界の住民が、神の律法に対して当然払わなければならない尊敬を払うようになるためだけではなかつた。それは、宇宙の前で、神の性質を擁護するためであつた。救い主は、十字架におつきになる直前に、その大犠牲が、人間だけでなく、他の諸世界に住む者たちに与える影響を予見

して、こう言われた。「今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ一二ノ三一、三二)。人間の救いのためにキリストが死なれた行為は、人間が天にはいる道を開いたばかりでなく、神とみ子が、サタンの反逆に対して取られた処置の正当性を全宇宙の前に示すのであった。それは、神の律法の永遠性を確立し、罪の性質とその結果を明らかにするのであった。

大争闘は、最初から神の律法に関して戦われたのである。サタンは、神は不正で、神の律法は不完全であるから、宇宙の幸福のためにそれを変更することが必要であることを証明しようとしてきた。彼は、律法を攻撃してその創始者の権威をくつがえそうとしていた。この争闘において、神の律法が不完全なもので、変更が必要であるか、それとも、完全で不変のものであるかが示されるのであった。

サタンは、天を追放されたときに、地球を彼の王国にしようとした。彼は、アダムとエバを誘惑して、勝利したときに、この世界を手中に収めたと思った。「なぜなら、彼らは、わたしを支配者に選んだからだ」と彼は言った。彼は、罪人に許しが与えられることは不可能であるから、墮落した人類は、当然自分の支配下におかれ、この世界は自分のものと公言した。しかし、神は、最愛のみ子、すなわち、ご自分と一つであるかたを与えて、罪の刑罰を負わせられたのである。こうして、彼らが回復されて、神の恵みに浴し、エデンの家庭に帰ることができるようになった。キリストは、人間を贖い、この世界をサタンの手から救い出そうとされた。天で起こった大争闘は、サタンが自分のものと主張したこの世界そのものを戦場として、勝敗を決することになった。キリストが墮落した人類を救うために、ご自分を低くされたことは、全宇宙の驚嘆の的であった。星々や諸世

界をめぐつてすべてを指揮されたかた、その摂理によつて、広大な造られたもののなかのあらゆる種類のものの必要を満たされたかたが、彼の栄光を捨てて、人間の性質をおとりになることは、他世界の罪のない住民が知ることを望んだ神秘であつた。キリストが人間の形をとつてわれわれの世界に來られたとき、すべてのものは、非常な熱心さをもつて、彼が一步一步と、かいばおけの中からカルバリーへと、血に染まつた道をたどつていかれるのをながめた。天は、キリストが受けられた侮辱とあざけりに注目した。そして、それが、サタンの扇動によるものであることを知つた。彼らは、反対勢力の活動が盛んになるのを見た。サタンが、暗黒と悲しみと苦しみを、常に人類に投げかけようとするのを、キリストはとめようとされる。彼らは、光とやみの戦いが、ますます激しくなるのを見た。そして、キリストが十字架上で、苦悶のうちに、「すべてが終つた」と叫んで息をひきとられたとき、勝利の叫びは、すべての世界と天そのものになり響いた(ヨハネ一九ノ三〇)。この世界で長い間継続された大きな戦いは、ここに勝敗が決し、キリストが勝利者であられた。彼の死は、父とみ子とが人間に対して十分な愛をもち、自己否定と犠牲の精神をあらわされるかどうかという疑問に答えた。サタンは、偽り者、殺人者の本性を暴露した。もし彼に天の住民を支配させるならば、彼の権力下にあつた人々を支配したのと同じ精神で、天の住民たちをも支配するにちがいないことが明らかになつた。神に忠実な宇宙は、声をそろえて神の統治をたたえた。

もし律法を変えることができたならば、キリストの犠牲はなくても、人間は救われたことであろう。しかし、墮落した人類のために、キリストがいのちをささげる必要があつたという事実は、罪人が神の律法の要求から免除されることはないということを証明している。それは、罪の報酬が死であることを実証した。キリストが死な

れたときに、サタンの滅びることが決定した。しかし、多くの者が主張するように、もし律法が十字架によって廃されたのであれば、神の愛するみ子の苦悩と死とは、サタンが要求するものを彼に与えるためだけのものとなってしまう。そうであれば、悪の君は勝利をおさめて、神の政府に対する彼の攻撃は是認されたことであろう。キリストが人間の罪の刑罰を負われた事実そのものが、すべての造られた者に対して、律法が不変であること、神は正しく、あわれみ深く、自己を否定するかたであること、そして、神の政府の統治には、無限の公平とあわれみが結合していることを大いに証明してあまりあるのである。

明暗を分けたカインとアベル

本章は、創世記四ノ一 一五に基づく。

アダムのむすこたちのカインとアベルは、性格が著しく異なっていた。アベルは、神に忠誠を尽くしていた。彼は、墮落した人類を扱われる神の処置に義と恵みを認め、感謝して贖罪の希望を受け入れた。しかし、カインは反逆の精神をいただき、アダムの罪のために、神が地と人類をのろわれたことに対してつぶやいた。彼は、サタンが墮落したのと同じ方向に自分の心がむかうままにして自己称揚にふけり、神の義と権威とを疑った。

この兄弟たちは、以前にアダムが試みられたように、神の言葉を信じて、従うかどうかを試みられた。彼らは人間の救いのために講じられた方法を知り、神が定められた供え物の制度を理解した。彼らは、これらの供え物をささげることによって、これらが象徴していた救い主への信仰を表明しなければならず、また、それとともに許しを受けるためには、救い主だけに依存していることを認めなければならないことを知っていた。また、彼らは、こうして贖罪の計画に調和すれば、神のみこころに服従する証拠を示していることになることも知っていた。血を流すことがなければ、罪の許しはあり得なかった。そして、彼らは、群れの中のういごを犠牲にささげて、

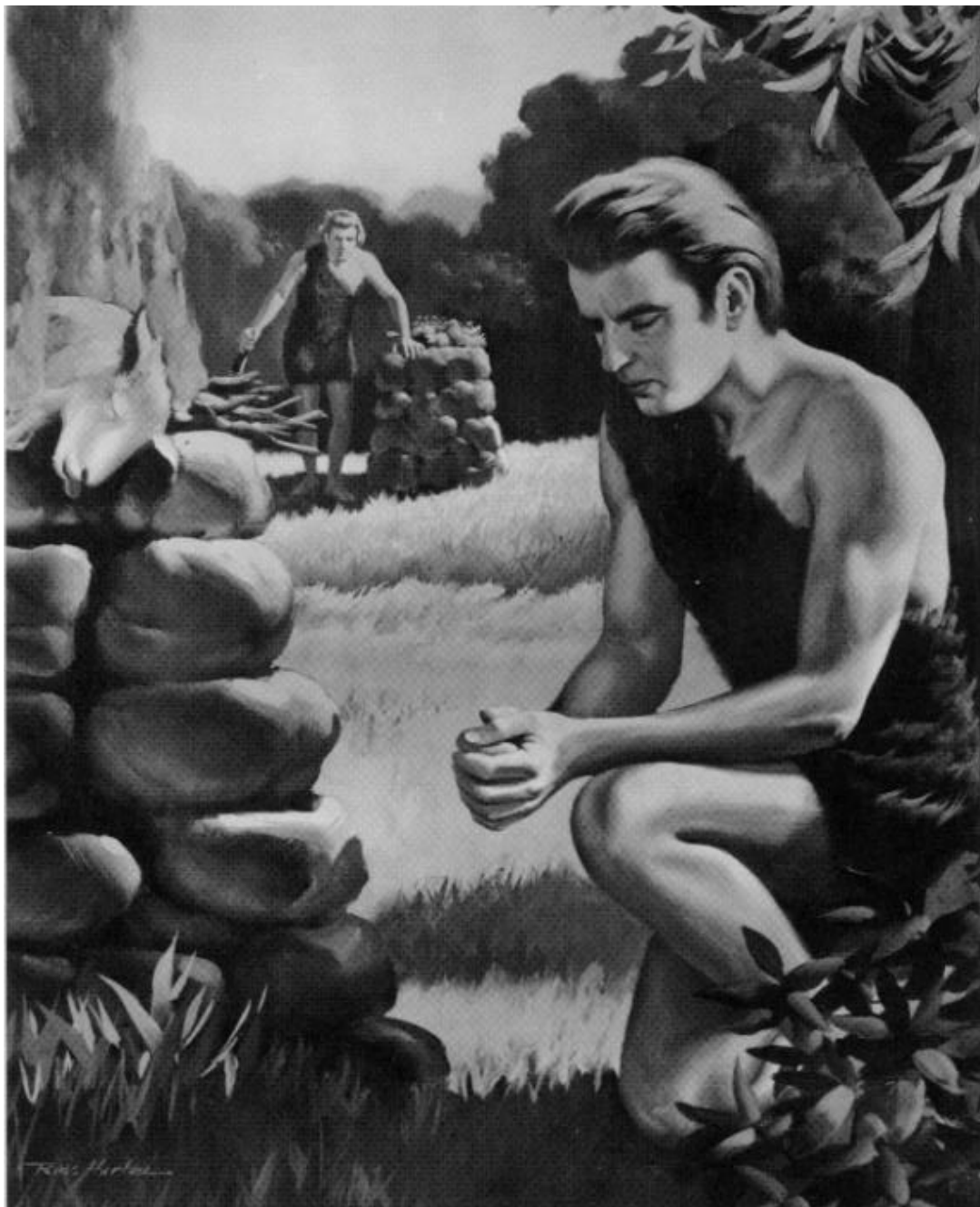
約束の贖罪としてのキリストの血への信仰をあらわさなければならなかった。そのほか、地の初穂が、感謝のさげ物として主の前に供えられなければならなかった。

ふたりの兄弟は、同じように祭壇を築き、それぞれの供え物を持ってきた。アベルは、主の命令に従って群れの中から犠牲をささげた。「主はアベルとその供え物とを顧みられた」(創世記四ノ四)。天から火が下って、犠牲を焼き尽くした。しかし、カインは、主の直接で明白な命令を無視して、地の産物だけをささげた。それを受け入れたことを示すしるしは、天からなかった。アベルは、神がお命じになった方法で神に近づくように兄に嘆願したが、彼の願いは、ただカインをさらにかたくなにするばかりであつた。彼は長子であつたから、弟の忠告を受ける必要を認めず、弟の勧告を軽べつした。

カインは約束の犠牲について、また犠牲の供え物の必要について、心中に不平と不信をいだきながら神の前に来た。彼の供え物は、罪の悔い改めの表明ではなかった。彼は、今日の多の人々と同様に、神に指示された通りの計画に従い、約束の救い主の贖罪に全く自分の救いをゆだねることは弱さを承認することであると思つた。彼は、自己信頼の道を選んだ。彼は自分の功績に頼つた。彼は小羊を持ってきて、その血を供え物にまぜることをしないで、彼の実、彼の労働の産物をささげた。彼は自分から神にささげるものとして供え物をささげ、それによつて、神に喜ばれたと思つた。カインは、神に従つて祭壇を築き、犠牲をたずさえてはきたが、彼は部分的に従つただけであつた。彼は最も重大な部分、すなわち、救い主の必要を認めることを省略していた。

この兄弟たちは、その出生と宗教教育の点では平等であつた。ふたりとも罪人で、神を敬い礼拝しなければならぬことを認めていた。外部から見れば、彼らの宗教は、ある点までは同じであつたが、そのさきの両者の相

第6章 明暗を分けたカインとアベル



カインとアベルは、ささげものの制度を明らかに理解した。アダムが試みられたのと同様に、彼らも神のみ言葉を信じて服従するかどうかを試みられた。

違は大きかった。

「信仰によって、アベルはカインよりもまさったいけにえを神にささげ」た(ヘブル一ノ四)。アベルは、贖罪の大原則を理解した。彼は自分が罪人で、彼の魂と神との間の交わりを、罪とその刑罰である死とが妨げているのを知った。彼は、ほふられた犠牲、すなわち、犠牲にされた生命をたずさえてきて、彼が犯した律法の要求を認めた。彼は、流された血によって、来たるべき犠牲、カルバリーの十字架上のキリストの死を見た。そして、彼は、そこでなされる贖罪を信じて、自分が義とされ、供え物が受け入れられた証拠が与えられた。

カインはアベルと同様に、こうした真理を学んで受け入れる機会があつた。彼は、独断的決定の犠牲者ではなかつた。兄弟のうちのひとりが受け入れられて、他のひとりが退けられるように神は定められたものではなかつた。アベルは、信仰と従順を選び、カインは、不信と反逆を選んだ。万事はこの点にかかつていた。

カインとアベルは、終末に至るまで世界に存在する二種類の人々を代表している。一方は罪のために定められた犠牲を受け入れるが、他方は、あえて自分の功績にたよろうとする。彼らの犠牲は、神の仲保のいさおしによらないものであつて、神の恵みにあずかることはできない。われわれの罪は、ただイエスの功績だけによつて許される。キリストの血の必要を感じない者、神の恵みがほしくて、自分の行ないによつて神に受け入れられると思つている者は、カインと同じあやまちを犯している。彼らは、清めの血を受けなければ、罪の宣告下にある。罪の奴隷から解放される道はほかに備えられていない。

カインの模範に従う礼拝者は、世界の大半をはるかに越している。というのは、ほとんどすべての偽りの宗教は、人間自身の努力によつて救いを得ることができるといふ同じ原則に基づいているからである。人類は贖罪で

はなく、文明の発達、すなわち、洗練と向上と更生とが必要であるという人もある。カインが、犠牲の血をぬぎにした供え物によって、神の恵みを得ようとしたように、これらの人々も贖罪を度外視して、神の標準にまで人類を高めようとするのである。カインの生涯は、どのような結末に至るかを示している。また、キリストを離れた人がどうなるかを示している。人類は、自分を再生させる力を持ち合わせない。それは、神に向かって向上するのではなく、サタンのほうへ墮落する傾向がある。キリストだけがわれわれの希望である。「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝四ノ一二)。

キリストに全的によりたのむ真の信仰は、神のすべての要求に従うこととなつてあらわれる。アダムの時代から現代まで、大争闘は神の律法に従うことに関してであつた。神の戒めのどれかを見無視しながら、神の恵みにあずかる権利を主張した人々が各時代にあつた。しかし、聖書は、行ないによつて「信仰が全う」されることと、服従の行為がなければ、信仰は「死んだ」ものであることを明らかにしている(ヤコブ二ノ一二、一七)。神を知っていると言いながら、「その戒めを守らない者は、偽り者であつて、真理はその人のうちにない」(ヨハネ第一・二ノ四)。

カインは、自分の供え物が受け入れられなかったのを見て、主とアベルに怒りを抱いた。カインは、神がお定めになった犠牲のかわりに、人間がささげたものをお受けにならなかったことを怒った。また、弟が、兄とともに神に反抗せず、神に服従するほうを選んだことをカインは怒った。カインが神の命令を見無視したにもかかわらず、神は、彼をお見捨てにならなかった。神は、この無分別な男を説得するためにおりてこられた。そして、主

はカインに言われた。「なぜあなたは憤るのですか、なぜ顔を伏せるのですか」。天使によって神の警告は伝えられたのである。「正しい事をしていなかったのでしたら、顔をあげたらよいでしょう。もし正しい事をしていないのでしたら、罪が門口に待ち伏せています」（創世記四ノ六、七）。それは、カイン自身の選択にかかっていた。もし彼が約束の救い主の功績にたより、神の要求に従ったならば、彼は神の恵みを受けたことであろう。しかし、もし彼が不信と罪を改めようとしなければ、主が彼を受け入れられなくても不平を言う理由はないのであった。

しかしカインは自分の罪を認めず、かえって神の不正をつぶやき、アベルをねたみ、憎んだのである。彼は、怒って弟を非難し、自分たちに対する神の処置について弟と論争を始めようとした。アベルは、柔和に、しかも恐れることなく、断固として神の公平と恵みを弁護した。彼は、カインの誤りを示し、彼がまちがっていることを納得させようとした。アベルは、両親が直ちに死の刑罰を受けるはずであったのに、彼らをお助けになった神のあわれみを指摘して、神が彼らを愛されたのでなければ、汚れないきよいみ子を、彼らが当然受けるべき刑罰を受けるためにお与えになることはないと言説した。こうしたことは、みな、カインを激怒させた。理性と良心は、アベルが正しいことを認めるのであるが、これまで従順に彼の勧告に従った弟が、今度は彼にさからい、彼の反逆に同調しないのを怒ったのである。彼は、激しい怒りにもえて弟を殺してしまった。

カインは弟を憎んで殺した。アベルが悪事を行なったからではなくて、「彼のわざが悪く、その兄弟のわざは正しかったからである」（ヨハネ第一・三ノ一二）。そのように、どの時代にあっても、悪人は自分より善良なものを憎んできた。アベルの従順とゆるがない信仰の生活は、カインにとって絶え間ない譴責であった。「悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない」（ヨ

ハネ三ノ二〇）。神の忠実なしもべたちの品性に反映する天の光が明るければ明るいほど、不信心な者の罪が明らかに示される。そして、悪人たちは何とかして自分たちの平和を乱す者を滅ぼそうとするのである。

アベルの殺害は、神が、へびと女のすえとの間、サタンおよびサタンの配下と、キリストおよびキリストの従者たちとの間に存在するといわれた敵意の最初の例であった。サタンは人間を罪に陥れて人類を支配することができたが、キリストは、彼らにサタンの束縛からのがれる力をお与えになる。神の小羊を信じて、人が罪に仕えることを拒否するときに、いつでもサタンの怒りが燃え立つ。アベルの清い生涯は、人間が神の律法を守ることが不可能だというサタンの主張に対する反ばくであった。悪魔の霊に動かされたカインは、アベルを自分の思いのままにできないことがわかると、激怒して彼の生命を奪った。神の律法の正しさを擁護して立つ者があると、どこでも彼らに対して同じ精神があらわされる。これがすべての時代に火刑柱をたてた精神であり、キリストの死したちを焼くために、まきに火を点じた精神である。イエスに従う者に加えられた残酷な仕打ちは、サタンとその軍勢の扇動によるものであった。なぜなら、彼らをして従わせることができなかったからである。それは敗北した敵の激怒である。イエスの殉教者は、すべて勝利者として死んだ。預言者は言っている。「兄弟たちは、小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、彼（「この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ」る）にうち勝ち、死に至るまでもそのいのちを惜しまなかった」（黙示録二二ノ一一、九）。

殺人者カインは、間もなく彼の犯罪の責任を問われた。「主はカインに言われた、『弟アベルは、どこにいますか』。カインは答えた、『知りません。わたしが弟の番人でしょうか』」（創世記四ノ九）。カインは、神が常に臨在なさることと、神の偉大さと全知であられることを忘れるほど深く罪に沈んだ。それで彼は、自分の罪を隠

すためにうそをついた。

主は再びカインに言われた。「あなたは何をしたのです。あなたの弟の血の声が土の中からわたしに叫んでいます」(創世記四ノ一〇)。神は、カインに罪を告白する機会をお与えになった。カインは深く考える時が与えられた。彼は、自分の行為とそれを隠すために言ったうそが罪深いものであることを知った。しかし彼は、なおも反逆心を捨てなかった。それで宣告はこれ以上延ばすことはできなかった。今まで嘆願と警告を発していた神のみ声は、恐ろしい宣告をするのである。「今あなたはのろわれてこの土地を離れなければなりません。この土地が口をあけて、あなたの手から弟の血を受けたからです。あなたが土地を耕しても、土地は、もはやあなたのために実を結びません。あなたは地上の放浪者となるでしょう」(同・四ノ一一、一二)。

カインの犯罪は、死の宣告に値したが、あわれみ深い創造主は彼の生命を助け、悔い改める機会をお与えになった。しかし、カインは心をかたくなにし、神の権威に対する反逆を扇動することに専念した生活を送り、大胆不敵で放縦な罪人たちの先祖になった。サタンに誘惑された背信者カインは、他の人びとを誘惑するものとなった。彼の生活とその感化は人びとを墮落させ、ついに地上は破滅にひんするまでに腐敗して悪に満ちた。

神は、最初の殺人者の生命を助けることによつて、大争闘に関する教訓を全宇宙にお示しになった。カインとその子孫の暗い歴史は、罪人が永遠に生きて神に反逆しつづけたならば、どういふことになるかを示した。神の寛容は、ただ悪者をますます大胆不敵にして、罪を犯させるだけであつた。カインに宣告が下されてから千五百年の後の世界中に満ちた罪と腐敗は、彼の感化と実例の結実であつた。神の律法に違反したために墮落した人類に与えられた死の宣告は、正当で恵み深いものであることが明らかにされた。人間は、罪の生活を長く続けられ

続けるほど、放縱になっていく。悪をほしいままにする生涯を短縮し、反逆のために心をかたくしたものらが、世界に悪影響を及ぼさないようにする神の宣告は、のろいではなくて、むしろ祝福であった。

サタンは、神の性質と統治とを偽って伝えるために、激しい勢いと数多くの欺瞞によってたえず働いている。彼は、広範囲に及ぶ組織的計画と驚くべき力をもって、世界の住民をだましておこうとしている。永遠で全知であられる神は、初めから終わりを見通される。悪を処理なさる神の計画は、遠大で包括的である。神の目的は、反逆をしずめることだけでなく、全宇宙に反逆の性質を実証することであった。神の公平とあわれみの両方を示す神の計画があらわされ、悪の処置に関する神の知恵と義は完全に擁護された。

他世界の清い住民たちは、地上におこるできごとを、深い関心をもって見守った。洪水前の世界の状態は、ルシファアがキリストの権威に逆らい、神の律法を放棄して、天で樹立しようとした統治がどんなものであるかを彼らに実証した。洪水前の世界の横暴な罪人は、サタンの支配する従者であることを彼らは見た。人の心に思いはかることはいつも悪いことばかりであった(創世記六ノ五参照)。あらゆる感情、衝動、思いはかることが、純潔、平和、愛という神の原則とは相入れないものであった。それは、神の被造物から、神の清い律法の抑制を除き去しようとするサタンの策略のもたらした恐ろしい墮落の実例であった。

神は大争闘の進行に従って明らかにされる事実によって、これまでサタンとサタンに欺かれたすべての者が偽り伝えてきた、神の統治の原則を実証なさるのである。全世界は、ついに神の公義を認めるのである。しかし、それは反逆者たちを救うにはすでに時はおそすぎる。

神の大きな計画が一步一步完成に近づくに従って、全宇宙は神に賛同し、是認するのである。神が反逆を最後

的に根絶なさるときにも、全宇宙はそれを納得する。神の戒めを捨てたすべてのものは、キリストに敵対するサタンの側についたことを知る。この世の君が裁かれるとき、彼と結合したすべてのものは、彼と運命を共にする。そのとき、全宇宙は、その宣告の証人として「万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります」というのである（黙示録一五ノ三）。

セツとエノクの時代

本章は、創世記四ノ二五 六ノ二に基づく。

神の約束の相続者、靈的長子権の継承者として、アダムにもうひとりのむすこが与えられた。このむすこにつけられたセツという名は、「定められた者」とか「償い」とかいう意味をもっていた。母親は、「カインがアベルを殺したので、神はアベルの代りに、ひとりの子をわたしに授けられました」と言った(創世記四ノ二五)。セツは、カインやアベルよりは、はるかに背が高くて氣品を備え、他のむすこたちよりアダムによく似ていた。彼はりっぱな人物で、アベルの足跡に従った。しかし、彼は、生来の美点をカインよりも多く受け継いだのではなかった。アダムの創造について、「神は自分のかたちに人を創造された」と言われている(同・一ノ二七)。しかし、人間は墮落後、「自分にかたどり、自分のかたちのような男の子を生んだ」のである。アダムは、神のかたちにかたどり、罪のないものに創造されたが、カインと同様に、セツも両親の墮落した性質を受け継いだ。しかし彼は、贖い主に関する知識と、義の教訓をも受けた。彼は、神の恵みによって、神に仕え、神を尊んだ。彼は罪深い人々が悔い改めて創造主をあがめ、服従するようになるために努力した。これは、アベルも生きていたな

ら、したと思われることであつた。

「セツにもまた男の子が生れた。彼はその名をエノスと名づけた。この時、人々は主の名を呼び始めた」(同・四ノ二六)。それまでも忠実な人々は神を礼拝していた。しかし、人間が増加するに従つて、二つの種類の人々の差はますます明らかになつた。一方は神への忠誠を公に告白していたが、他方は軽べつと不服従をあらわした。われわれの祖先は、墮落する以前からエデンで制定された安息日を守っていた。そして、樂園からの追放後も安息日を守り続けていた。彼らは、不従順の苦い結果を味わっていたので、神の律法をふみにじる者が、早晚、学ばねばならないこと、すなわち、神の戒めは、清くて不変のものであることと、違反に対しては必ず罰が加えられることを学んでいた。安息日は、神に忠誠を保っていたすべてのアダムの子孫によつてあがめられていた。しかし、カインとその子孫は、主の明白な命令にもかかわらず、自分かつてなときに働いたり休んだりして、神が休まれた日を重んじなかつた。

カインは、神ののろいを受けて父の家から離れた。彼はまず、土を耕す仕事を選んだ。そして、その次に、町を築き、彼の長男の名にちなんで町に名をつけた。彼は、エデンの回復の約束をなげうち、罪ののろいのもとにある地上で、財産や快樂を求めるために主の前を去つていった。こうして、彼は、この世の神を礼拝する多くの人々の先頭に立つたのである。彼の子孫は、世俗的、物質的發展の面だけでは、すぐれた力量をあらわした。しかし、彼らは神のことには無関心で、人類に対する神の計画にはそむいていた。カインが、まず殺人の罪を犯したのに続いて、彼から五代目のレメクは、一夫多妻の罪を加えた。彼は高慢で反抗的であつた。彼が神を認めたのは、カインについて言われたふくしゅうの言葉から、自分の身の安全の保証を得ようとしたときだけであつた。

アベルは羊飼いの生活を送って、天幕や仮り住まいに住んでいた。そして、セツの子孫も、自分たちを、「地上では旅人であり寄留者」であるとなし、*「もつと良い、天にあるふるさと」*を求めながら、同じ道を歩んだ（ヘブル二ノ一三、一六）。

しばらくの間、この二種類の人々は離れていた。カインの子孫は最初住みついた所から広がって行って、セツの子孫が住んでいた平原や谷間にまでちらばってきた。そして、後者は、彼らの悪影響を避けて山にのがれ、そこに住んだ。こうして離れているがぎり、彼らは神の礼拝の純粹性を保っていた。しかし、時の経過と共に彼らは徐々に谷間の住民と交わるようになった。この交際は最悪の結果をもたらした。「神の子たちは人の娘たちの美しいのを見」た（創世記六ノ二）。カインの子孫の娘たちの美に魅せられたセツの子孫は、彼らと雑婚して主の心を痛めた。神の礼拝者の多くは、常にさらされている誘惑に負けて罪に陥り、彼ら独特の清い性質を失ってしまった。彼らは墮落したものと交わって、精神においても行為においても似てきた。彼らは、戒めの第七条の拘束を無視し、「自分の好む者を妻にめとつた」（同・六ノ二）。セツの子孫は、「カインの道」に歩み、世俗の繁栄と快楽に没頭し、主の戒めをないがしろにした（ユダ一）。人々は「神を認めることを正しい」とせず「その思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなった」。それゆえに、「神は彼らを正しからぬ思いにわた」されたのである（ローマ一ノ二二、二八）。罪は、恐ろしい病のように地にはびこった。

アダムは千年近くも人々の間に生きて、罪の結果を目撃した。彼は、悪の潮流をせきとめようと忠実に努力した。彼は、主の道に従って、彼の子孫を教えるように命じられていた。それで彼は、神から受けた啓示を注意深く心にたくわえて、それを世代から世代へくり返し伝えた。彼は、楽園の清く幸福な状態を描写し、彼の墮落し

た経過をくり返し、苦難によつて神の律法に厳格に服従する必要を神から教えられたことを告げ、そして、彼らの救いのために設けられたあわれみ深い用意について、九代におよぶ子々孫々に説明した。しかし、彼の言葉に耳をかしたものはわずかであった。彼はしばしば、このようなわざわいを後世にもたらした罪を問われて、子孫から激しく責められるのであった。

アダムの生涯は、悲しみと屈辱と悔い改めの一生であつた。彼はエデンを去つたときに、自分が死ななければならぬことを考えて恐怖感におそわれた。長男のカインが弟を殺したとき、人類も死ぬべき運命にあることを彼は初めて知つた。自分の罪に対する痛烈な後悔の念に満たされ、アベルが死に、カインが捨てられて、ふたりを一時に失つたアダムは苦悩にうちのめされた。彼は、世がますます墮落するのを見た。そして、それが原因で世界は洪水によつて滅ぼされるようになるのであつた。そして、アダムは、創造主から受けた死の宣告を、最初はひどいもののように感じたが、千年近くも罪の結果を見てきた後では、苦悩と悲嘆の生涯を終わらせてくださるのは、神のあわれみであることを感じた。

洪水前の世界は、邪悪なものではあつたが、一般に考えられているような無知と野蛮な時代ではなかつた。人は、道徳的にも知的にも高い標準に達する機会が与えられていた。彼らは、偉大な体力と知力とを持ち、宗教と科学の知識を得るにはこの上なく好都合であつた。彼らは長命であつたから、その頭脳は晩成であつたと考えるのは誤りである。彼らの知的能力は早くから発達し、神をおそれ、神のみこころに一致した生活を送つたものは、その生涯を通じて知識と知恵が増加した。もし現代の著名な学者たちと洪水前の同じ年齢の人々とを比較してみれば、現代の学者たちは、知力においても体力においてもはるかに劣つてみえることであろう。人間の年齢

が縮まり、体力が衰えるに従ってその知力も減少した。今日、人々は、二十年から五十年の間研究に没頭し、世界はその人々の業績に感嘆する。しかし、これらの業績は、幾世紀にわたって、知力と体力が発達した洪水前の人々の場合と比較するならば、なんと限られたものであることであろう。

確かに現代人は、先人の業績の恩恵に浴している。工夫、研究、著述などに従事したすぐれた頭脳の持ち主は彼らの作品を後世に残した。しかし、この点と単なる人間的知識だけのことににおいても、古代の人々はなんと有利な立場にあつたことであろう。神のかたちにかたどって創造され、創造主ご自身が「良し」と宣言された人間、すなわち、物質界のあらゆる知識を神から教えられた人が、数百年もの間、彼らとともに生存していたのである。アダムは創造主から創造の歴史を学んだ。彼は、九百年間のできごとを目撃した。そして、彼は、その知識を子孫に伝えた。洪水前の人々は、書物や記録などはもっていなかった。しかし、彼らは驚くべき体力と知力とを持っていたので記憶力は強かった。そして、教えられたことをよく理解して、それを自分の子孫にまちがひなく伝えることができた。そして、数百年にわたって、七代の人々が同時に生存していたので、共に意見を交換して、それぞれがすべての者の知識や経験によつて、益を受ける機会に恵まれていた。

神のみわざを通して神を知ることが、この時代の人々ほどに恵まれた立場におかれたものはなかった。その時代は、宗教的暗黒の時代どころか、大いなる光明の時代であつた。全世界は、アダムから教えを受ける機会に恵まれていて、キリストと天使が主をおそれるものの教師であつた。また、数百年の間、人間のなかにとどまつていた神の園は、真理に関する無言の証人であつた。ケルビムに守護された楽園の入り口では、神の栄光があらわされ、ここに最初の礼拝者たちが集まつた。彼らは、ここで祭壇を築き、ささげ物を供えた。ささげ物をたずさ

えて来たカインとアベルに、神が親しく交わられたのもここであつた。

エデンが眼前に存在し、見張りの天使がその入り口を守っているうちは、懷疑論者もその存在を否定することはできなかった。創造の順序、樂園の目的、そして、園のなかにあつて、人間の運命に深い関係のあつた二本の樹木にまつわるできごとなどは、疑う余地のない事実であつた。アダムが彼らのうちにいた間は、神の存在とその至上権、神の律法の義務などは、容易に疑い得ない真理であつた。

罪惡がはびこつてはいたが、神との交わりによつて、高められ、氣高くされ、天の交わりのような生活を送つた聖徒の群れが常にあつた。彼らは著しい知能と、すぐれた学識の持ち主であつた。彼らには、正しい品性を築き、信心について、その時代の人々だけでなく、後世の人々にも教えるという偉大で清い使命があつた。聖書には、最も著名な人々のなかのごくわずかな人しか記録されていない。しかし、神は、各時代を通じて、忠実な証人、誠実な礼拝者をもつておられた。

エノクは、彼が六十五歳になつてむすこを生んだとされるされている。彼は、その後三百年の間神と共に歩んだ。エノクは、そうした初期の時代に、神を愛し、おそれ、神の戒めを守つた。彼は、聖徒たちのひとりで、眞の信仰の擁護者であり、約束のすえの先祖であつた。彼は、アダムの口から墮落の暗い物語や、約束に示された神の恵みの喜ばしい物語を教えられて、来たるべき贖い主によりたのんだ。しかし、エノクは、彼の長男の誕生後、さらに高い経験に達し、神とさらに密接な関係にはいつていった。彼は神の子として、自分に与えられた義務と責任を、もっと深く自覚した。子供が父を愛し、父の保護に単純に信頼するのを見たとき、そして、長男に対して深い愛情を自分の心に感じたときに、彼は、そのみ子を人間に賜つた驚くべき神の愛と、神の子らが天の父

に對して持たなければならぬ信頼に關して、尊い教訓を學んだのである。キリストによつて示された測り知れない無限の神の愛は、彼の昼夜の瞑想の課題になつた。彼は、自分の力の限りを尽くして、いっしょに住んでゐる人々にその愛を示そうとした。

エノクが神と共に歩んだのは、恍惚状態や幻を見るようなものではなくて、日常のすべての務めを果たすことにおいてであつた。彼は、自分を世から全くしや断して、隱者にならなかつた。というのは、彼は、この世で神のためにしなければならぬ仕事があつたからである。彼は、家庭においても、人々との交際においても、夫、父、友人、市民として、常に堅く立つてゆるがない主のしもべであつた。

彼の心は、神のみ旨に一致していた。「ふたりの者がもし約束しなかつたら、一緒に歩くだろうか」(アモス三ノ三)。この清い歩みは三百年続いた。もしクリスチャンが生命のはかなさを知り、または、キリストの再臨がまさに起こるうとしてゐることを知つたならば、ますます熱心になつて献身しようとしぬものはあるまい。しかし、エノクの信仰は、幾世紀の年月を経るにつれて強くなり、その愛はいつそう熱烈になつていった。

エノクは、よく洗練され、すぐれた頭腦と広い知識の持ち主であつた。彼は、神からの特別の啓示を受ける榮譽にあづかつた。しかし、彼は、絶えず天との交わりを保つて、神の偉大さと完全さとを常に実感してゐたのだれよりもけんそんであつた。彼は、神とのつながりが親密になればなるほど、自分の弱さと不完全さとを深く感じた。

エノクは、不信心なものの悪事が増加するのを嘆き、神へのエノクの崇敬の念が、彼らの不信心によつて弱められるのを恐れて、常に彼らと交わることを避け、人々から離れて瞑想と祈りにふけつた。こうして彼は主に仕

え、神のみこころを明らかに知って、それを実行しようと努めた。彼にとって、祈りは魂の呼吸であつた。彼は天のふんい気の中で生きていた。

神は、み使いによつて、この世界を洪水で滅ぼそうとしておられることをエノクに知らせ、贖罪の計画をさらにくわしく彼に示された。神は、預言の霊によつて、洪水後に生存する代々の人々と、キリストの再臨および世界の終末に関する大事件を彼にお示しになつた。

エノクは、死者に関して思い悩んでいた。彼は、義人も悪人も共に土に帰り、それですべてが終わるものと思つた。墓のかなたに義人の生命があることが、彼にはわからなかつた。彼は、預言の幻のなかで、キリストの死について教えられ、キリストが、彼の民を贖い出すために清いみ使いたちを率いて、栄光のうちにおいでになることを示された。また、彼は、キリストが再び来られるときの世界の墮落の状態を見た。人々は、誇りと高ぶりに満ち、氣ままにふるまい、唯一の神と主イエス・キリストをいなみ、律法をふみにじつて贖罪を軽んじることを見た。彼は、義人が栄光と誉れを受け、悪人が主のみ前から追われて、火によつて滅ぼされるのを見た。

エノクは義の説教者になつて、神がお示しになつたことを人々に伝えた。主をおそれた人々は、エノクから教えを聞き、共に祈るために集まつてきた。彼は、また、人々の間で公の伝道に従事し、警告の言葉に耳を傾けるものには、だれにでも神の使命を伝えた。彼は、セツの子孫のためだけに働いたのではなかつた。カインが主の前からのがれてきた土地でも、神の預言者は幻に見た驚くべき光景を人々に伝えた。「見よ、主は無数の聖徒たちを率いてこられた。それは、すべての者にさばきを行うためであり、また、不信心な者が、信仰を無視して犯したすべての不信心なしわざ……を責めるためである」(ユダ一四、一五)。

彼は、恐れることなく罪を譴責した。彼は、その時代の人々に、キリストのうちに表わされる神の愛を説き、悪の道から離れることを熱心に訴えらるゝとともに、広く行なわれていた罪惡を責め、律法にそむく者には、必ず刑罰が臨むことを警告した。エノクを通して語つたのは、キリストのみ靈であつた。このみ靈は、愛と同情と勧告の言葉だけを語るのではない。聖者たちが語るのは、耳に快くひびくことだけではない。神は、その使命者の心とくちびるに真理を与えて両刃の剣のように、するどく痛烈な言葉を語らせられるのである。

神のしもべを動かした神の力は、それを聞いた人々に感じとられた。警告に従つて、罪を離れた者もあつたが大多数は、嚴肅な使命をちよう笑し、ますます大胆に惡の道に走つた。終末時代の神のしもべたちは、同様の使命を世に伝えなければならない。そして、それは、また、不信とちよう笑をもつて迎えられるであらう。洪水前の世界は、神と共に歩んだ者の警告の言葉を拒否した。そのように、終末時代の人々も主の使命者たちの警告を軽んじるであらう。

エノクは、活動的生活を送りながらも、変わることなく神との交わりを保つた。仕事がつたえ、忙しさが増すにつれて、彼の祈りは、ますます絶え間なく、熱心になつていった。彼は一定の期間、すべての交際を絶つという生活をつづけた。彼は、しばらく人々の間にいて、教えと模範によつて彼らのために働いたあと、ただ神だけが与えることのできる天来の知識を飢えかわくように求めて、人を避けて孤独の時を過ごすのであつた。エノクは、こうして、神と交わるによつて、ますます神のみかたちを反映するようになった。彼の顔には、イエスのみ顔に輝く清い光が輝いていた。彼が、こうした神との交わりからもどつてきたときには、神を信じないものさえ畏敬の念に打たれて、彼の顔に押された天のしるしをながめた。

人々の罪惡は極に達し、ついに滅びの宣告が彼らの上にくだされた。年月の経過とともに、人類の罪惡のうしおは深く、神の刑罰の雲はいよいよ暗くたれこめた。しかし、信仰の証人であるエノクは、たゆまず努めて、警告と訴えと勧告とによつて、惡の潮流を押しさえし、報復の下るのを止めようとした。彼の警告は、罪深い快樂愛好者によつて無視されたが、神の承認のあかしが与えられていた。彼は根強くはびこる惡と忠実に戦い続けた。そして、神は、ついに彼を罪の世界から、天の清い喜びに移されたのである。

その時代の人々は、エノクが金銀をたくわえず、この世で財産を築こうとしないのを、愚かなことだとちやう笑した。しかし、エノクの心は永遠の宝に注がれていた。彼は天の都をみつめていた。彼は、シオンのなかで栄光に輝く王、キリストを見たのであつた。彼の思想も感情も会話もすべて天に關することであつた。彼の周囲の罪惡が大きければ大きいほど、神の家を慕う氣持ちは熱烈であつた。彼は地上におりながら、信仰によつて、すでに光の王国に住んでいた。

「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであらう」(マタイ五ノ八)。エノクは、三百年の間、天と調和するために心が清くなることを求めていた。彼は三世紀の間神と歩いた。彼は、日々密接な結合を熱望した。交わりはいよいよ深まっていき、ついに神は、彼をみもとにお受けになつた。彼は、永遠の世界の門口に立っていた。彼と祝福にみちた国との距離はわずか一步であつた。そして、門はあけられ、地上で長く続いた彼の神との歩みは続けられた。彼は、聖都の門を通つていった。彼は、人間のなかから、そこにはいる最初の人となつた。

彼がいなくなつて、人々はさびしく感じた。日々叫ばれた警告と教えの声は、もう聞かれなかつた。義人のう

ちにも、悪人のうちにも、幾人かの者は彼が去るのを目撃した。彼らは、彼が退いた場所のどこかへ連れ去られたものと思い、彼を愛する人々は、後に預言者の子らがエリヤをさがしたように熱心にさがしたが、むだであった。神が彼をとられたので、いなくなったと彼らは報告した。

主は、エノクの昇天を通して、重大な教訓を与えようとなさった。人々は、アダムの子の恐ろしい結果によって、失望に陥る恐れがあった。「苛酷なのろいが、人類にくだされ、われわれすべての者は死ぬべき運命を負わされているのだから、主を恐れ、その戒めを守っても何の役に立つだろう」と多くの人は叫ぶばかりであった。しかし、神がアダムに与え、セツがくり返し、エノクが実践した教えは悲しみと暗黒を吹き払った。そして、アダムが死をもたらしただけでなく、約束の贖い主は、生命と不死をもたらしという希望を人々に与えた。サタンは、義人が報いを受け、悪人が罰を受けることはなく、また、人間が神の戒めを守ることが不可能であると、人々に信じこませようとしていた。しかし、神はエノクの例をあげて、「ご自身を求める者に報いて下さる」かたであることを明言される(ヘブル一ノ六)。神は、戒めを守るものに何をなさるかをお示しになる。人間は、神の律法に従うことができることと、罪人や墮落した人間の間に混じって生活していても、神の恵みによって、誘惑に耐え、純潔で清くなれることを神はお教えになった。彼らは、エノクの模範をみて、こうした生活が幸福であることを知った。彼の昇天は従順なものには、喜び、栄光、永遠の命などの報いが与えられ、罪人には、断罪、わざわい、死などの罰が与えられるという、将来に関する彼の預言の真実性の証拠であった。

信仰によって、エノクは、「死を見ないように天に移された。…彼が移される前に、神に喜ばれた者と、あかしされていたからである」(ヘブル一ノ五)。罪悪のために破滅にひんした世界のまっただなかで、エノクは

神と密接に交わる生活を送っていたので、死の力は、彼を屈服することができなかった。この預言者の清い品性は、キリスト再臨の時に、「地からあがなわれ」る人々が到達しなければならぬ清い状態をあらわしている(黙示録一四ノ三)。そのときには、洪水前の世界のように、罪惡が世にはびこる。人々は汚れた心の衝動と偽りの哲学の教えに従って、天の権威に逆らうのである。しかし、神の民は、エノクのように心の純潔と神のみこととの一致を求めて、ついにキリストのみかたちを反映するに至るのである。彼らは、エノクのように、主の再臨と罪に対して下される刑罰について世界に警告を発し、その清い行状と模範とによって、不信心なものの罪を譴責する。世界が水によって滅ぼされる前にエノクが天に移されたように、生きている義人は、地が火によって滅ぼされる前に天にあげられる。使徒はこう言っている。「わたしたちすべては、眠り続けるのではない。終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる」(コリント第一・一五ノ五一)。「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに…天から下ってこられる」(テサロニケ第一・四ノ一六)。「ラッパが響いて、死人は朽ちない者によりみがえらされ、わたしたちは変えられるのである」(コリント第一・一五ノ五二)。「キリストにあつて死んだ人々が、まず最初によりみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。だから、あなたも、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい」(テサロニケ第一・四ノ一六 一八)。

ノアの洪水

本章は、創世記六、七章に基づく。

ノアの時代、地は、アダムの罪とカインの殺人の結果二重ののろいを受けていた。しかし、これは、自然の表面に大きな変化を与えなかった。衰退の兆候は明らかに認められはしたが、地は、なお神の摂理の賜物に恵まれて、豊かで美しかった。山々にはりっぱな樹木が繁茂し、枝もたわわなぶどうのつるをからませていた。広々とした庭園のような平原は、一面の緑で、数多くの草花が甘くにおっていた。地のくだものの種類は無類と云っていいほど多かった。樹木は、その大きさ、美しさ、完全に整っている点などで、今日のどれよりもはるかにまわっていた。木の木目は、細かく、石のように堅く、石同様の永続性をもっていた。金、銀、宝石なども豊富にあった。

人類は、まだ初期の活力を多く保っていた。アダムが、生命を長らえさせる木に近づくことができたときからわずか数代しか経ていなかったため、人間の一生はなお、世紀を単位として数えられていた。非凡の能力をもつて計画し、実行することができた長命のこうした人々が、もし、神の奉仕のために自分をささげていたならば、

彼らは地上で創造主のみ名に誉れを帰し、彼らに生命をお与えになった神の目的にそい得たことであろう。しかし、彼らは、そうしなかった。偉大な体格と体力を持ち、その知恵深いことで有名な巨人がたくさんいた。彼らは、実に巧妙に驚くべきものを作り出すことにたけていた。しかし、彼らは、その技量と能力に応じて、ほしいままに悪を行なう罪も大きかった。

神は、これらの洪水前の人々に、多くの豊かな賜物をお与えになった。ところが彼らは、自分自身をあがめるためにそれを用い、それをお与えになったかたよりも、賜物そのものに愛着を持って、それらをのろいにかえた。彼らは、金、銀、宝石、最上の木材などを用いて自分たちの家を建築し、技術の限りを尽くして住居を飾りたて互いにしのぎを削った。彼らは、自分たちの高慢な心の欲望を満たすことだけを求め、快樂と罪惡に夢中になっていた。彼らは、神のことを考えようとしなかったので、いつのまにか神の存在を否定するようになった。彼らに刻んだ像を拝むことを教えた。

彼らは、緑の野や形のよい樹木の陰に自分たちの偶像の祭壇を築いた。広大なときわ木の林は、偽りの神を礼拝するためにささげられた。これらの林には、美しい園が続いていて、その長くくねった小道にはあらゆる種類の木が枝もたわわに果実を実らせていた。また、そこには、人々の感覚をたのしませ、肉欲をほしいままにさせるものがすべて備わっていて、彼らを偶像礼拝に誘っていた。

人々は神を全く忘れ、自分たちがかつてにつくり上げたものを拝んでいた。その結果、彼らはますます墮落した。偶像を拝むものが偶像からどんな影響を受けるかについて、詩篇記者はこう言っている。「これを造る者と、

これに信頼する者とはみな、これに等しい者になる」(詩篇一一五ノ八)。ながめることによって変化するのは、人間の精神の法則である。人間は、真理、純潔、聖潔に関して、自分が持っている觀念以上に到達するものではない。もし、精神が、人間的水準以上に高められず、無限の知恵と愛を瞑想するために信仰によって高尚にされないならば、人間は常に低い方へ低い方へと沈んでいくのである。偽りの神の礼拝者は、その神々に人間の性質と情欲とを付与した。こうして、彼らの品性の標準は罪深い人間の形に下落した。その結果、彼らは墮落したのである。「主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであることを見られた。」時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた」(創世記六ノ五、一一)。神は、生活の規準として、律法を人々にお与えになったが、人々は、律法を犯し、そのためにありとあらゆる罪が生じた。人々は公然と、しかも大胆に悪を行なった。正義は地にふみにじられ、圧迫される者の叫び声は天に達した。

最初に、神が定められたことに反して多くの妻を持つことが早くから行なわれていた。主は、アダムにひとりの妻を与えて、この事に関する神の定めを示された。しかし、墮落後、人々は自分たちの罪深い欲望を満たそうとした。そのために、犯罪と不幸が急激に増加した。結婚関係や所有権は尊重されなかった。他人の妻でも財産でも、ほしいと思えば力づくで奪って、その暴力行為を彼らは勝ち誇った。彼らは、動物の生命を奪うことを喜び、肉を食物に用いることによって、彼らは、ますます残虐、凶悪になり、ついには、人間の生命に対して驚くべき無関心を示した。

世界は、まだれいめい期であつた。それにもかかわらず、はなはだしく罪悪がはびこり、神は、もはや耐え忍ぶことができなくなった。神は仰せになった。「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう」(同・六ノ

七)。神は、神の霊がながく人の中にとどまらなと宣言された。もし彼らが、罪によつて、世界と地の豊かな宝を汚すのをやめないならば、神は、彼らを神の世界から消し去り、神が彼らを祝福するためにお与えになったものを滅ぼそうとされた。神は、野の獣、豊かな食物を供給した植物を一掃して、美しい地球を破滅と荒廢の広漠としたところに変えようとした。

墮落がはびこるさなかにあつて、メトセラ、ノアなどその他多くの者は眞の神の知識を保ち、道德的罪惡の潮流を止めようと努めた。洪水の起こる一二〇年前に、主は天使によつてみこころをノアに伝え、箱舟を造ることを指示された。ノアは、箱舟を造りながら、神が洪水によつて惡人を滅ぼされることを説かなければならなかつた。その言葉を聞いて、悔い改めと改革によつてその事件に備えるものは、許され、救われるのであつた。エノクは、洪水について神から示されたことを子孫に語つてきかせた。そして、生きながらえてノアの説教を聞いたメトセラとむすこたちは、箱舟の建造を手伝つた。

神は、箱舟の正確な大きさと、その建造上の指示を明確にノアにお与えになつた。人知では、こうしたがんじようで耐久性のある建造物を考案することは不可能であつた。神が設計家で、ノアが建築家であつた。それは水に浮くように、船の形に造られてはいたが、ある面では家屋によく似ていた。それは三階建てで、ただ一つの入り口が横についていた。あかりは、上からとつてあつて、各部屋が明るくなるように工夫されていた。箱舟を建造するために用いられた材木はいとすぎの木で、それは、数百年たつても腐らないものであつた。この巨大な建造物の工事は遅々として進まず、ほねのおれる仕事であつた。樹木の大きさとその質の關係上、當時の人々は、そのはるかにすぐれた力をもつてしても現在の製材よりも非常に労力が多くかつた。工事の完べきを期するた

第 8 章 ノアの洪水



ノアは、箱舟を造りながら、神が洪水によって悪人を滅ぼされることを人々に伝えた。しかし、人々は彼の言葉をあざ笑った。

めに、人力のかぎりが尽くされた。しかし、箱舟は、やがて地をおそう暴風雨に、それだけでは耐える力はなかった。荒れ狂う水の上で、神のしもべたちを守ることができるのは神だけであった。

「信仰によって、ノアはまだ見ていない事からについて御告げを受け、恐れかしこみつつ、その家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世の罪をさばき、そして、信仰による義を受け継ぐ者となった」(ヘブル一ノ七)。ノアは、世に警告の使命を伝えるとともに、その行為によって、自分が真剣であることをあかしした。こうして彼の信仰は完成され、明白に示された。彼は、神が仰せになったことを、そのまま信じる模範を世に示した。彼は、全財産を箱舟につぎこんだ。彼が、この巨大な舟を陸上で建造しはじめると、群衆がこの奇妙な光景を見、風変わりな預言者の語る熱烈な言葉を聞こうと、四方から集まってきた。箱舟の槌音の一つ一つは、人々に対するあかしであった。

最初、多くの者は、警告を受け入れたように思われた。しかし、彼らは、真に悔い改めて神に立ち帰ったのはなかった。彼らは、罪を捨てようとはしなかったのである。洪水が来るまで、しばらくの間、彼らの信仰は試みられたが、彼らはその試練に耐えられなかった。彼らは、一般の不信仰に負け、ついに、以前の仲間といつしよになって、厳粛な使命を退けた。あるものは、深く感動して、警告の言葉に聞き従おうとした。しかし、あざけり笑うものが多いために、ついに彼らと同調して、恵みの招待を拒み、やがてだれよりも大胆不敵にちよう笑するものになった。というのは、一度光を与えられながら、罪を示す神の霊に逆らったものほど、無謀で、罪の深みに沈むものはないからである。

厳密な意味において、当時の人々は、全部偶像礼拝者であつたのではない。神を礼拝すると公言する者が多く

いた。彼らの偶像は、神を代表するものであって、人間はそれによって、神に関する明確な観念をいだくことができる。彼らは主張した。この種の人々が、率先してノアの説教を拒否した。神を物質的対象によって表わそうとすることによって、彼らの思いは暗くなり、神の威光と力とを見ることができなくなった。彼らは、神の品性の神聖さ、また、神の要求の神聖さも不変性も悟らなくなった。罪が一般に広く行なわれ、罪が罪と思われなくなった、ついに彼らは、神の律法は廃され、罪を罰することは神の品性に反するというようになった。そして、地に神のさばきが行なわれることを否定した。もし、あの時代の人々が、神の律法を守っていたならば、神のしもべの警告が、神の声であったことを認めたことであろう。しかし、彼らの心は光を拒んだために暗黒に閉ざされ、ノアの使命は妄想だとほんとうに思い込んだ。

正しい側についたのは、大多数の群衆ではなかった。世はあげて神の義と神の律法に反対し、ノアは狂信者だと思われた。サタンは、エバを誘惑して神にそむかせようとしたときに、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」と言った(創世記三ノ四)。世的に榮譽を受けた偉人や賢者は、同じことをくり返して言った。「神の警告はおどしのためであって、実際には起こらない。驚く必要はない。神が造られた世界を滅ぼし、神が創造された人々を罰するようなことは決してない。安心せよ、恐れるな。ノアは熱狂的狂信家だ」。世の人々は欺かれた老人の愚かさを冷笑した。彼らは、神の前に心を低くするどころか、神が、神のしもべを通して、お語りにならなかったのも同然で、彼らは不服従と罪惡にふけていた。

しかし、ノアは、暴風の中の岩のように立っていた。人々の侮りとあざけりに囲まれながら、彼は清廉潔白で不動の忠実さを示した。ノアの言葉には力があつた。それは、神がそのしもべによって人間に語られる神の声で

あつた。神との結合が、彼を無限の力によつて強くした。彼は、一二〇年の間、人間の知恵で判断すればとうてい不可能だと思われるできごとに関して、当時の人々に厳肅な声で語つた。

洪水前の人々は、数世紀間に自然の法則は固定したと論じた。季節の移り変わりは周期的にやつてきた。雨はそのときまで降つたことがなかった。地は、霧や露でうるおされていた。川は、まだあふれたことがなく、安全に海に注いでいた。定められた法則によつて、水は堤を越えてあふれなかった。しかし、これを論じ合つた人々は、「ここまで来てもよい、越えてはならぬ」と宣言して、水をとどめられたおかたのみ手を認めなかつた(ヨブ記三八ノ一)。

時が経過しても、自然界にこれといった変化が起こらないのを見て、初めは恐れおののいた人々も安心しだした。今日の多くの人が考えるように、自然のほうで、自然の神よりも上で、自然の法則は堅く定められたものであり、神ご自身もそれを変更することはできないものであると考えた。もし、ノアの使命が正しければ、自然はその軌道からはずれるであろうと彼らは論じ、その言葉が惑わしであり、最大の欺瞞であると世の人々に思いこませた。彼らは、警告が発せられる前に行なつていた通りのことをなしつつけて、神の警告をあなどっていることを示した。彼らは、歡樂ときよう宴をつづけた。彼らは、食べ、飲み、植え、建てなどして、将来得ようと望んでいる有利な立場について思いを練つていた。そして、彼らは、ますます罪惡の深みに沈み、神の要求を大胆に無視して、無限の神をおそれないことを示した。もし、ノアの言葉に少しでも真理があるとすれば、知者、識者、偉大な人々がそれを理解するはずであると彼らは言つた。

もし、洪水前の人々が、警告を受け入れ、その悪行を悔い改めたならば、主は後に二ネベになさつたと同様に

彼の怒りをとどめられたことであろう。しかし、その時代の人々は、良心のとがめと神の預言者の警告にがん強に逆らって、彼らの罪のますめを満たし、滅亡の期は熟した。

彼らの猶予の期間は、まもなく終わろうとしていた。ノアは、神からの指示に忠実に従っていた。箱舟は、主のさしず通りにすべてのところが完成し、人間と動物の食糧が貯蔵された。そして、今、神のしもべは彼の最後の厳粛な訴えを人々にした。彼は、言葉では表現できない心の苦しさをもって、避難所があるうちに救いを求めるように訴えた。彼らは、またもや彼の言葉を退け、ののしりとあざけりの声をあげた。突然、あざける群衆は沈黙した。最もおとなしい動物も、最もどうもうな動物も、あらゆる種類の動物が一樣に山や森から箱舟に向かって静かに進んでくるのが見えた。突風のような音が聞こえたので、見ると天を暗くするほどの多くの鳥類が四方から群がってきて、秩序正しく箱舟の中にはいった。人間は従わないのに、動物は神の命令に従った。彼らは天使に導かれて、「二つずつノアのもとに来て、……箱舟にはい」り、きよい動物は、七つずつはいった(創世記七ノ九)。世の人々は、驚いてながめた。恐れた人もあった。哲学者が、この異常なできごとを説明するために召集されたが、彼らは、どうすることもできなかった。それは、彼らにとってさぐり得ない神秘であった。人々は、がん強に光を拒んでかたくなになっていたので、この光景もつかの間の印象を与えただけであった。滅亡の運命にあった人類は、太陽がさん然と輝き、大地がエデンのように美しく飾られているのを見たとき、そうぞうしい歓楽の声をあげて、つのつてくる恐怖を払いのけた。そして、彼らは、暴虐な行ないによって、すでに下ろうとしている神の怒りを招いているように思われた。

神は、ノアに命じて言われた。「あなたと家族とはみな箱舟にはいりなさい。あなたがこの時代の人々の中で、

わたしの前に正しい人であるとわたしは認めたからである」(同・七ノ二)。世の人々は、ノアの警告を拒否したが、彼の感化と模範は、彼の家庭に祝福をもたらした。彼は、忠実で、誠実であつたので、神はその報いとして彼とともに彼の家族を残らずお救いになつた。親の任務に忠実なものに対して、これはなんと励ましを与えることであろう。

罪深い人類に対するあわれみの訴えはやんだ。野の獣と空の鳥は避難所にはいった。ノアと彼の家族は、箱舟にはいった。そして、「主は彼のうしろの戸を閉ざされた」(同・七ノ一六)。目がくらむ光がひらめき、いなくなくなり明るい栄光の雲が天から下つて、箱舟の入り口の前にたどつた。内側にいる者では閉じることのできない巨大な扉が、目に見えない手で静かに閉ざされた。ノアは、内側に入れられ、神のあわれみを退けたものは閉め出された。その扉の上には、神の印が押された。神がそれをおしめになつた。だから、ただ神だけがそれをあけることができるのである。そのように、キリストが天の雲に乗つてこられる前に、罪深い人間のためのキリストのとりなしは終わり、恵みの扉は閉ざされる。そうすると、神の恵みは、これ以上悪者を抑制しなくなるので、サタンは、恵みを退けた人々を完全に支配する。彼らは、神の民を滅ぼそうとする。しかし、ノアが箱舟のなかに閉じこめられたように、義人は、神の力に保護される。

ノアとノアの家族が箱舟にはいつてから七日の間、暴風雨がやってくるしはあらわれなかつた。この間、彼らの信仰は試みられた。それは、外部の世界にとっては、勝ち誇つた時であつた。いかにも遅れているので、人々は、ノアの使命が惑わしであつて、洪水は起こらないという考えを強くした。獣や鳥が箱舟にはいり、神の天使が扉を閉じるといふ厳肅な光景を目撃したにもかかわらず、彼らはなお、遊戯や宴会を続け、こうした著し

い神の力の現われさえも物笑いの種にした。彼らは、箱舟のまわりに群がって、内部にいる人々をあざけり、これまでになかったほどの乱暴を働いた。

しかし、八日めに暗雲が空をおおった。雷鳴がとどろき、いなびかりがひらめいた。間もなく大粒の雨が降り出した。世界には、今までこのようなことは起こったことがなかった。そして、人々の心は恐怖におそわれた。「ノアは正しかったのだろうか。世界は、滅びるのだろうか」と、みなはひそかにたずねた。空は、ますます暗くなって雨足は早くなってきた。獣たちは、激しい恐怖にかられてさまよい歩き、そのさわがしい叫び声は、彼らと人間の運命を嘆いているようであった。それから、「大いなる淵の源は、ことごとく破れ、天の窓が開けた(同・七ノ一一)。水は、雲のなかから大きな滝のように流れ出た。川は堤を越えて谷間にあふれた。地からはものすごい勢いで水がふき出して、巨大な岩石を何百フィートも空高く飛ばした。それらは落下して地中深くうずまった。

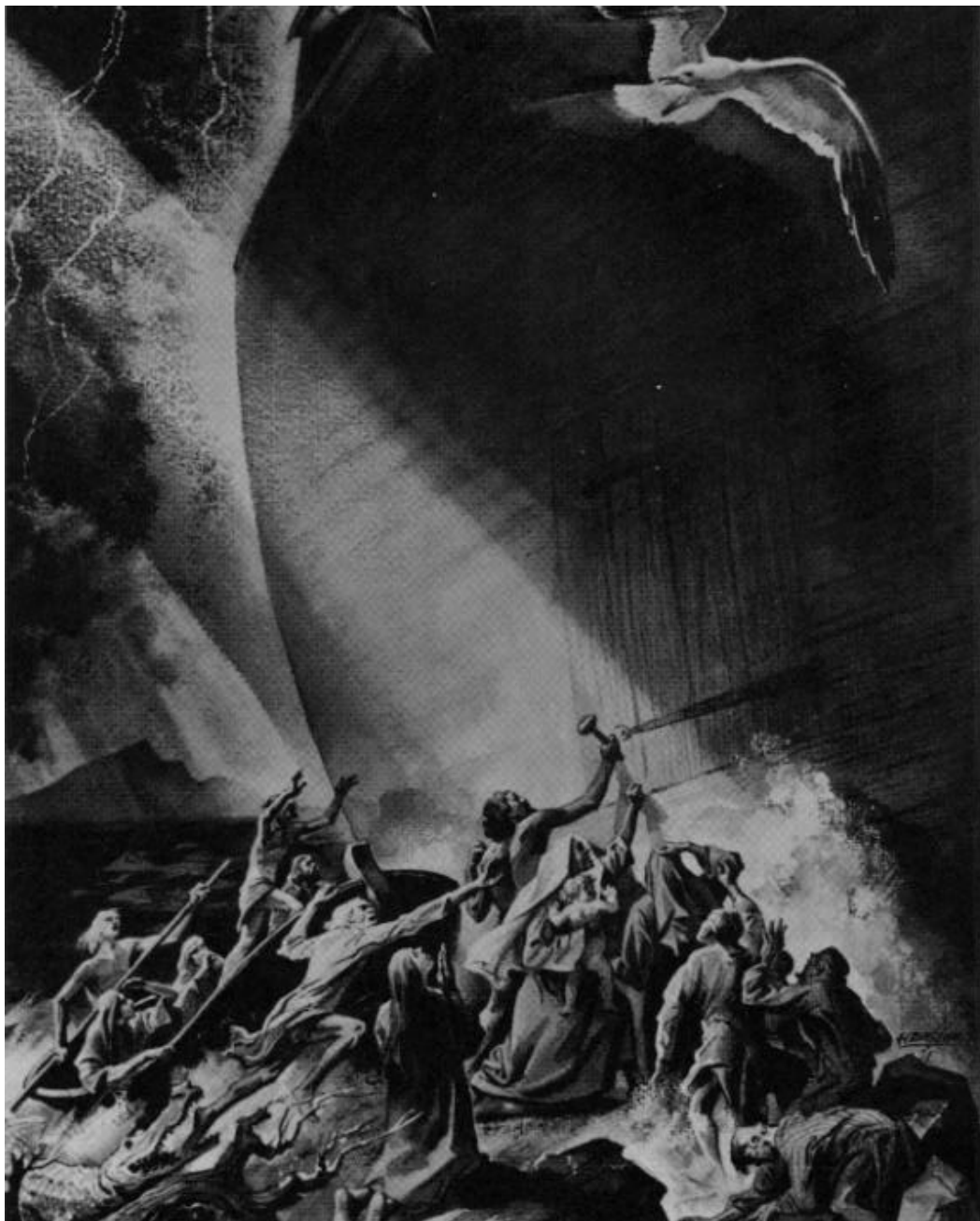
人々はまず、自分たちの手のわざが破壊されるのを見た。豪華な建物や、彼らが偶像を安置した美しい庭園や林は、天からのいわずまによつて破壊され、そのざんがいはここかしこに散らばっていた。人間を犠牲としてさげた祭壇はくずされた。偶像礼拝者たちは、生きた神の力におののき、破滅を招いたのは自分たちの墮落と偶像礼拝であることを悟った。

暴風雨が激しくなるにつれて、樹木、建物、岩石、土などが四方八方に飛び散った。人間と動物の恐怖のさまは、表現することができなかった。暴風雨のとどろきを越えて、神の権威を軽視した人々の嘆きの声が聞こえた。荒れくるう暴風雨のなかにとどまっていなければならなかったサタンでさえ、身の危険を感じたほどであった。

彼は、力強い人類を思うままにしたことを喜んでいた。そして、彼らに憎むべき罪を行なわせて、天の支配者への反逆を続けさせようとしていた。ところが彼は今、神は不正で残酷だといって神をのろった。サタンと同様に神を冒瀆する者が多かった。彼らは、できることであれば、權威の座から神を引きおろそうとしたことであろう。他の者は恐怖のため、狂気のようになって箱舟に手をのびしながら、入れてくれと頼んだ。しかし、彼らの願いはいれられなかった。ついに良心がめざめ、天を支配しておられる神の存在を彼らは知ったのである。彼らは、必死になって神をよび求めたが、彼らの叫びに神の耳は開かれなかった。この恐怖のときに、彼らは神の律法に違反したことが自分たちの滅亡の原因であることを悟った。しかし、彼らは刑罰を恐れて罪を認めたとはいえ、真に悔い改め、悪をきらったのではなかった。もし、刑罰が取り除かれたならば、彼らは、またもや神に反逆したことであろう。同様に、この世界が火で滅ぼされる前に地に下る刑罰のときに、悔い改めない者は自分たちの罪の正体を知り、それが、神の清い律法を軽視した罪であることを知るのである。しかしながら、古代の罪人と同様に、彼らは真に悔い改めるのではないのである。

なかには、死にものぐるいになって箱舟に乗り込もうとする者もあったが、堅固に造られていたのでびくともしなかった。箱舟にしがみつく者もあったが、うず巻く波にさらわれたり、岩石や木にぶつかったりして手を離してしまった。風が容赦なく吹きつけ、大波にほんろうされるたびに、巨大な箱舟はすみずみまで震動した。内部の動物たちは、恐怖と苦痛の叫びをあげた。しかし、暴風雨の最中でも、箱舟は安全に浮かんでいた。すぐれた力をもった天使たちが、箱舟の保護を命じられていた。

暴風雨に会った獣たちは、人間の援助を期待するかのようにつけてきた。ある者は、たくましい力を持った強



かつてノアと彼の言葉をあざ笑った者の中には、死にものぐるいになって箱舟に押し入ろうとした人々もあったが、がんじょうに造られた箱舟の戸は、開かなかった。

い動物の背に、子供たちや自分たちのからだを結びつけて、一番高いところのがれ、増してくる水を避けようとした。高い山の頂上にある大きな木にからだを結びつけたものもあつたが、木は根こぎにされて、人間もろともあわ立つ波のなかに沈んでいった。安全だと思われた場所が次々とだめになった。水かさが増すにつれて、人は、最高の山に避難した。人間と動物が足場の奪い合いをして争うこともあつたが、ついには両方とも流されてしまうのであつた。

人々は最高の峰から、果てしのない大海原をながめた。神のしもべの厳肅な使命は、もはやあざけりや軽べつの的ではなかつた。命運つきた罪人たちは、なおざりにしてしまった機会が、もう一度与えられることをどんなに望んだことであらう。あと一時間の猶予、もう一度だけのあわれみの機会、ノアのくちびるからもれるもう一度だけの招声を、彼らはどんなに切望したことであらう。しかし、彼らは、あわれみに満ちたやさしい声を再び聞くことはできなかつた。正義とともに愛もまた、神の刑罰が下つて、罪にとどめをさすことを要求したのである。報復の水は、最後ののがれ場を流し去つて、神を侮つた者は暗黒の淵に滅び去つた。

「その時の世界は、御言により水でおおわれて滅んでしまった。しかし、今の天と地とは、同じ御言によつて保存され、不信仰な人々がさばかれ、滅ぼさるべき日に火で焼かれる時まで、そのまま保たれているのである」(ペテロ第二・三ノ六、七)。別のあらしが近づいている。地は、再び神の怒りによつて荒廃に帰して一掃され、罪と罪人は滅ぼされる。

洪水前の人々に、報復をもたらす原因になつた同じ罪が今日行なわれている。神をおそれることは、人々の心から消えうせ、神の律法は冷淡と軽べつをもつてあしらわれている。あの時代の極度の世俗化が、現在の世代に

も同様に行なわれている。キリストは言われた。「洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった。人の子が現われるのもそのようであろう」(マタイ二四ノ三八、三九)。神は、洪水前の人々が、飲み食いすることを非難されたのではなかった。神は、彼らのからだの必要を満たすために、地の産物を豊富にお与えになったのである。彼らの罪は、与え主であられる神に感謝せずに、これらの賜物を受け、なんの抑制もなく食欲を満たして、墮落したことであつた。彼らが結婚することは正当なことであつた。結婚は、神が制定されたものである。これは、神が定められた最初の制度の一つであつた。神は、この儀式に特別の指示を与え、それを神聖で美しいものとされた。しかし、人々は、こうした指示を忘れ、結婚を悪用して情欲を満たすものにした。

今日も同じ状態である。それ自身、正当なことが、過度に行なわれている。なんの制限もなく、食べたいだけ食べている。今日、キリストに従うと公言し、その名がりっぱな教会員名簿にしろされている者が、飲酒家と飲み食いしている。不節制が道德的、また靈的能力をにぶらせて、いやしい情欲にふけらせるに至る。情欲を制することが、自分たちの道德的責任であることを感じないものが非常に多い。彼らは、情欲の奴隷になる。人々は感覚の快楽を求めて生き、この世界と現世のためだけに生きる。社会のいたるところに浪費が行なわれている。ぜいたくと虚飾のために、誠実は犠牲にされる。急いで富を得ようとする者は、正義を曲げ、貧者をしいたげ、今なお、「奴隷と人びとの魂」は売買されている。社会の上層部にも下層部にも、詐欺、贈収賄、盗みなどが、堂々とまかり通っている。新聞の報道は、殺人の記事で満ちている。冷酷で理由のない犯罪が行なわれ、人道は

全く地に落ちたかのように思われる。こうした残酷なことがありふれたことになり、人々は、それを話題にもせず、驚きもしなくなつた。無秩序の精神は、あらゆる国家に浸透し、時々暴動が起こつて世界を恐怖に陥れるがこれは、閉じこめられた激情と無法の火のあらわれで、一度抑制が除かれると、全地に災禍と荒廃をきたらせることであろう。靈感が示す洪水前の世界の状態は、現代の社会が急速に近づきつつある状態をあまりにもよく描写している。現在、キリスト教国といわれる国においてさえ、邪悪で恐ろしい犯罪が毎日行なわれている。そうした罪のために、古代の罪人は滅ぼされたのであつた。

神は、洪水が来る前に、ノアをつかわして世界に警告を発し、人々を悔い改めさせて、切迫している破滅から彼らをのがれさせようとされた。キリスト再臨の時が近づくにつれて、主は、主のしもべたちを世界につかわして警告を発し、その大事件の準備をするように促される。群衆は、神の律法に逆らつた生活をしてきた。そこで神は、彼らをあわれんで、清い戒めに従うように呼びかけられる。神に対して悔い改め、キリストを信じて、罪を捨てる者はみな許しが与えられる。しかし、罪を捨てることは、大きすぎる犠牲だと感じる者が多い。彼らは自分たちの生活が、神の道德的統治のきよい原則と調和していないために、神の警告を退け、神の律法の權威をいなむのである。

洪水前の地上のおびただしい人口のなかから、わずか八人だけが、ノアによつて与えられた神の言葉に従つた。義の説教者は、一二〇年の間、来たるべき破滅について世界に警告を発したが、彼の使命は拒否され、軽べつされた。今日も同様である。律法を賦与されたかたが、不従順な者を罰するために来られるに先だち、罪人らに、悔い改めて再び忠誠をつくすように警告されるが、大多数の者にとって、こうした警告は無益なものである。

使徒ペテロは言った。「終わりの時にあざける者たちが、あざけりながら出てきて、自分の欲情のままに生活し、主の再臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変っていない」と言うであろう」(ペテロ第二・三ノ三、四)。これと全く同じ言葉が公然と不信心者ばかりでなくて、この国の説教壇に立つ多くの牧師たちの口から聞かれなければならないであろうか。「何も驚くことはない。キリスト再臨に先だって、全世界は悔い改める。そして、義は、千年の間支配する。平和だ。平和だ。万物は、世の初めから同じように続く。だれも、こうした警世家の扇動的な言葉に動かされてはならない」と彼は叫ぶ。しかし、この福千年期の教理は、キリストや使徒たちの教えと一致していない。キリストは、重大な問いを発しておられる。「人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか」(ルカ一八ノ八)。すでに述べた通り、世界の状態は、ノアの時代のものであると主は言われた。終末が近づくにつれて、罪悪が増すことを予期すべきであるとパウロは警告している。「しかし御霊は明らかに告げて言う。後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに氣をとられて、信仰から離れ去るであろう」(テモテ第一・四ノ一)。使徒は、「終りの時には、苦難の時代が来る」と言っている(テモテ第二・三ノ一)。そして、彼は、信仰を持っているふりをする人々の間にある驚くべき罪の数々をあげている。

洪水前の人々は、猶予の期間が終わろうとしていたとき、刺激的娯楽や祭りに熱中していた。勢力と権力をもった者は、人々の心を娯楽と快楽に夢中にさせておいて、最後の厳粛な警告にだれも心を動かすことがないようにしむけていた。われわれの時代にも、同様のことがくり返されているのを見ないであろうか。神のしもべたちが、万物の終末の接近の使命を伝えても、世は、娯楽と快楽の追求に心を奪われている。次々と心を刺激するも

のがあって、神に対する関心を失わせ、来たるべき破滅から人々を救う唯一の真理に、深い感銘を受けることを妨げている。

ノアの時代に、哲学者たちは、この世界が水によって滅ぼされることはあり得ないと言ったように、今日でもこの世界が火で滅ぼされることはあり得ない、また、それは自然の法則に反することであることを示そうとする科学者たちがいる。しかし、自然の法則を定め、それを支配しておられる自然界の神は、ご自分のみ手のわざを用いて、ご自分の目的を達成することがおできになるのである。

偉人や知者たちが、水による世界滅亡の不可能性について証明し、人々の恐怖がしずまり、万人がノアの預言を妄想だといい、彼を狂信家とみなした、そのときこそまさに神の時の到来であった。「大いなる淵の源は、ここごとく破れ、天の窓が開け」て、あざける人々は、洪水にのまれた。人々は、彼らの誇った哲学も知恵もみな愚かなものであって、法則を制定されたおかたこそ、自然の法則より偉大であり、また、全能の神は、その目的を果たすための手段にこと欠かれないことを悟ったのであったが、そのときではもうおそすぎたのである。「ノアの時にあったように、…人の子が現れる日も、ちょうどそれと同様であろう」(ルカ一七ノ二六、三〇)。「しかし、主の日は盗人のように襲って来る。その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう」(ペテロ第二・三ノ一〇)。哲学の論理が、神の審判の恐怖を去り、宗教家が長い平和と繁栄の時代の到来を指摘し、世が事業と快楽、植樹や建築、飲食や歓楽に心を奪われて神の警告を退け、神の使者たちをあざけているその時、突如として滅びが彼らをおそってくる。そして、それからのがれることは決してできない(テサロニケ第一・五ノ三参照)。

第9章

約束のにじ

本章は、創世記七ノ二〇 九ノ一七に基づく。

水は最高の山より十五キュビット（約七メートル）も高く増した。箱舟は五か月もの間風波にもまれてただよったので、箱舟のなかの家族は死んでしまうのかと思ったことがたびたびあった。それは、苦しい試練であった。しかし、ノアは、神のめ手がかじをとっていることを確信していたので、彼の信仰はゆるがなかった。

水がひき始めると、主は、一群の山々に保護された場所に箱舟を漂着させられた。ここは神の力によって保存されていたのである。山々は、距離がわずかしき離れていなかったから、箱舟は、この静かな港のなかをただよっただけで、果てしない大海に漂流しなくなった。これで暴風雨にほんろうされて疲労した船のなかの人々に大きな安らぎが与えられた。

ノアと家族の者は、再び地上に出るのを待ちこがれていたもので、水が引くのを今か今かと待った。山々の頂上が見え始めてから四十日たったとき、彼らは、地がかわいたかどうかを知るために、においに敏感なからすを放った。からすは、水のほかには何もなかったもので、箱舟の回りを飛ぶだけであった。七日後にはとが放たれたが

とまる場所がないので、箱舟にもどってきた。ノアは、さらに七日待つて、再びはとを放った。夕方、はとは、オリーブの葉をくわえてもどってきたので、一同は非常に喜んだ。後で、「ノアが箱舟のおおいを取り除いて見ると、土のおもては、かわいていた」（創世記八ノ一三）。彼は、なお、忍耐強く箱舟の中で待った。ノアは、神の命令に従つてはいつたように、出るときにも特別の指示を待った。

ついに天使が天から下つて巨大な扉を開き、ノアと家族に、すべての動物を伴つて出てくるように命じた。ノアは、外に出る喜びのあまり、彼らを保護された恵み深い神を忘れたりしなかった。彼は、箱舟を出て最初に、祭壇を築いて、すべての清い獣や清い鳥のなかから犠牲をささげて、救済に対する感謝と大いなる犠牲であられるキリストに対する信仰をあらわした。主はこの犠牲をお喜びになり、ノアとその家族だけではなく後でこの地上に生きるすべてのものにまで及ぶ祝福をお与えになった。「主はその香ばしいかおりをかいで、心に言われた、『わたしはもはや二度と人のゆえに地をのろわない。…地のある限り、種まきの時も、刈入れの時も、暑さ寒さも、夏冬も、昼も夜もやむことはないであろう』（創世記八ノ二一、二二）。ここに後世のすべての人々が学ばなければならぬ教訓があつた。ノアは、荒廃した地上に出てきたが、自分の家の建築にとりかかる前に、神の祭壇を築いた。彼の家畜の群れはわずかで、非常な犠牲を払つて育ててきたものであつた。しかし、彼は、万物が神のものであることを認めたしるしに、喜んでその一部を主にささげた。同様に、われわれも、神に心からのささげ物することを第一の務めとしなければならない。われわれは、神が示されるすべてのあわれみと愛とに對して、献身的行為と神のみわざのためのささげ物をささげて、感謝の気持ちを表明しなければならないのである。

雲がわき、雨が降ることに、また、洪水が起こるのではないかと、人々が恐怖をいだくことのないように、主は、ノアの家族に一つの約束を与えて勇気づけられた。「わたしがあなたがたと立てるこの契約により、…地を滅ぼす洪水は、再び起らないであろう。…わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる。…にじが雲の中に現れるとき、わたしはこれを見て、神が地上にあるすべて肉なるあらゆる生き物との間に立てた永遠の契約を思いおこすであろう」（創世記九ノ一 一六）。

神は、このようにして、雲のなかに美しいにじをかけて、人間との契約のしるしにされたということは、あまりやすい人々に対する神の何と大きな恵みと慈悲の表現であろう。主は、にじを見るとときに、彼の契約を思い起こすと言われた。これは、神がお忘れになるという意味ではなくて、われわれが神をさらに深く理解するために、人間の言葉でお語りになったのである。後の時代の子供たちが、天にかけられた美しいにじをながめて、その意味を聞くとときに、親たちは、洪水の物語をして聞かせ、いと高き神が、水が再び地をおおうことがないしとして、にじを雲のなかにかけられたことを告げるのが神の目的であった。こうして、各時代を通じて、にじは人間に対する神の愛をあかしし、人間の神に対する確信を強めるものとなるのであった。

天では、にじのようなものがみ座を囲み、キリストの頭上にかかっている。預言者は言った。「その（み座）まわりにある輝きのさまは、雨の日に雲に起るにじのようであった。主の栄光の形のさまは、このようであった」（エゼキエル書一ノ二八）。黙示録の筆者はいった。「見よ、御座が天に設けられており、その御座にいますかたがあった。…また、御座のまわりには、緑玉のように見えるにじが現れていた」（黙示録四ノ二、三）。人間がその大きな罪のために、神の裁きを受けるとき、救い主は罪人のために、父の前でとりなしをしてくださり、雲

のなかのにじと、み座の回りごと自身の頭上のにじをさして、それが罪を悔いた人々に対する神のあわれみのしるしであることを示される。

洪水に関してノアにお与えになった保証に、神ご自身は、神の恵みの最も尊い約束の一つを結びつけられた。

『わたしはノアの洪水を、再び地にあふれさせないと誓ったが、そのように、わたしは再びあなたを怒らない、再びあなたを責めない』と誓った。山は移り、丘は動いても、わがいつしみはあなたから移ることなく、平安を与えるわが契約は動くことがないとあなたをあわれまれる主は言われる（イザヤ書五四ノ九、一〇）。

ノアは、どうもうな猛獣が彼とともに箱舟から出てくるのを見て、八人しかいない彼の家族が、動物に滅ぼされるのではないかと恐れた。しかし、主は、そのしもべに天使をつかわして、確証をお与えになった。『地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、海のすべての魚は恐れおののいて、あなたがたの支配に服し、すべて生きて動くものはあなたがたの食物となるであろう。さきに青草をあなたがたに与えたように、わたしはこれらのものを皆あなたがたに与える』（創世記九ノ二、三）。神は、このとき以前には、人間が動物の肉を食べることを許しておられなかった。神は、人類が地の産物だけで生命を保つように計画されたのであったが、すべての物がなくなってしまったので、箱舟のなかに保存された清い動物の肉を食べることをお許しになった。

洪水のときに、地球の全面が変化した。罪の結果、第三の恐ろしいのろいが地上に下った。水が減り始めるにつれて、山や丘は濁水の海にかこまれた。至るところに、人間や動物の死がい散乱していた。主は、こうしたものが残って腐敗し、空気を汚すのをお許しにならなかった。そこで神は、地球を一大埋葬場とされた。水をかわかすために吹かせられた強風は、非常な勢いでそれらを動かした。ある場合には、山々の頂上さえ洗い去って

死がいの上に、木、岩、土などを積み上げた。同様の方法によって、洪水前の世界を豊富にして、飾り、また、人々が偶像視していた金、銀、高級木材、宝石などは、人々が見つけたたり、捜し出したりできないように隠されてしまった。激しい水の勢いで、土や岩がこれらの宝物の上に積み重なって、ある場合にはその上で大きな山になったりした。神は、罪人たちが豊かになり、繁栄すればするほど墮落するのをごらんになった。豊かにお与えになる神の礼拝に導くはずの宝が礼拝され、その反面、神はあがめられず、軽べつされた。

地上は、描写できないほどの混乱と荒廃状態を呈していた。かつては、完全に均整がとれて美しかった山々は破壊されて形がそこなわれた。地上には、岩石、岩壁の岩だな、ごつごつした岩角が散乱するようになった。山や丘が消え去って、そのあとかたすらとどめないところが多かった。平原は山脈に変わっていた。こうした変化は、ある所では、他の所よりいつそう激しかった。かつては、地上の最も貴重な宝であった金、銀、宝石があった所に、最も激しいのろいの跡が見られた。人間が住んでいなかった地方や、犯罪が少なかったところにはのろいも軽かった。

このとき、広大な森林が地下に埋没した。これは石炭になり、現在の鉱脈になり、また、多量の石油を産出している。石炭と石油はときおり地下で引火して燃える。こうして、岩石は熱し、石灰石は焼け、鉄鉱が溶ける。石灰石に水がかかると、しやく熱度が高まり、地震、爆発、噴火などの原因になる。火と水が、岩と鉱脈に触れると、大きな地下爆発が起こり、鈍い雷鳴のような音がする。空気は熱く、息苦しくなる。こうして噴火が起こる。熱せられたものが十分に発散されないでいると、地は、海の波のように震動して隆起し、大きなきれつを生じて、時には都市、村落、火をふく山々までのみこんでしまう。こうした驚くべき現象は、キリストの再臨と世

界の終末の直前には、もつとひんぱんに激しくなり、滅亡がすみやかに近づいているしとなる。

地底は、主の武器庫であつて、神は、ここから古い世界を滅ぼす武器をとり出された。地からふき出た水は、天からの水と合流して、破壊のわざをなしとげた。洪水後、火もまた水と同様に、極悪の都市を滅ぼすために、神に用いられている。こうした刑罰は、神の律法を軽んじ、神の權威をふみにじる者が、神のみ力の前におののき、神の当然の主権を認めるようになるためにくだされた。山々が燃えて、火と炎をあげ、溶岩をふき出して、川を干上がらせ、雑踏する都市を滅ぼし、至るところに破壊と荒廃を及ぼすのを見るときに、どんなに大胆な者も恐怖に満たされ、不信仰の者も、神を冒瀆する者も神の無限の能力を認めないわけにはいかないのである。

こうした光景について、古代の預言者は言っている。「どうか、あなたが天を裂いて下り、あなたの前に山々が震い動くように。火が柴木を燃やし、火が水を沸かすときのごとく下られるように。そして、み名をあなたのあだにあらわし、もろもろの国をあなたの前に震えおののかせられるように。あなたは、われわれが期待しなかつた恐るべき事をなされた時に下られたので、山々は震い動いた」(イザヤ書六四ノ一 三)。「主の道はつむじ風と大風の中にあり、雲はその足のちりである。彼は海を戒めて、これをかわかし、すべての川をかれさせる」(ナホム書一ノ三、四)。

キリストの再臨のときには、世界にこれまで起こったこともないようなもつと恐ろしい光景が見られるであろう。「もろもろの山は彼の前に震い、もろもろの丘は溶け、地は彼の前にむなしくなり、世界とその中に住む者も皆、むなしくなる。だれが彼の憤りの前に立つことができよう。だれが彼の燃える怒りに耐えることができよう」(ナホム書一ノ五、六)。「主よ、あなたの天を垂れてくだり、山に触れて煙を出させてください。いならずま

を放って彼らを散らし、矢を放って彼らを打ち敗ってください」(詩篇一四四ノ五、六)。

「また、上では、天に奇跡を見せ、下では、地にしるしを、すなわち、血と火と立ちこめる煙とを、見せるであらう」(使徒行伝二ノ一九)。「すると、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震があった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震であった」(黙示録一六ノ一八)。「島々はみな逃げ去り、山々は見えなくなった。また一タラントの重さほどの大きな雹が、天から人々の上に降ってきた」(黙示録一六ノ二〇、二一)。

天からのいなづかりが地上の火の一つになるとき、山々は炉のように燃え、溶岩はすさまじい勢いで流れ出して、庭園や野や畑、都市や村落をおおってしまう。まっかに燃えたぎった溶岩は川に流れ込んで水を沸騰させ、巨大な岩石を驚くべき力でふきとばし、その破片を地の上にまき散らす。川は干上がってしまうであらう。地はゆれ動き、いたるところに恐ろしい地震と爆発が起こるであらう。

このようにして、神は、この地から悪者を滅ぼされる。しかし、義人は、ノアが箱舟の中に守られたように、こうした異変の中にあっても保護される。神が彼らの避け所となり、彼らはそのみ翼の下にこののである。詩篇記者はいつている。「あなたは主を避け所とし、いと高き者をすまいとしたので、災はあなたに臨まず」(詩篇九一ノ九、一〇)。「主が悩みの日に、その仮屋のうちにわたしを潜ませ、その幕屋の奥にわたしを隠し」(詩篇二七ノ五)。「彼はわたしを愛して離れないゆえに、わたしは彼を助けよう。彼はわが名を知るゆえに、わたしは彼を守る」(詩篇九一ノ一四)。これが神のお約束である。

第 10 章

バベルの塔

本章は、創世記九ノ二五―二七、一一ノ一―九に基づく。

道徳の退廃のため、洪水によって一掃されたばかりの荒廃した地上に、再び人間を住ませるために、神は、ノアの家族ただ一家族だけを保存なさった。神はノアについて、「わたしの前に正しい人であるとわたしは認めた」と言われた(創世記七ノ一)。しかし、ノアの三人のおすこたちの間には、洪水前の世界と同様の明確な区別が急速に現われていた。人類の先祖、セム、ハム、ヤペテのうちに、すでにその子孫の性格が予表されていた。

ノアは、神の靈感を受けて、こうした人類の先祖から起こる三大人種の歴史を預言した。ノアは、ハムの子孫について、父ハムではなくて、その子の名をかりて次のように宣言した。「カナンはのろわれよ。彼はしもべのしもべとなって、その兄弟たちに仕える」(創世記九ノ二五)。人道に反したハムの罪は、彼の心に親を敬う気持ちですでになくなっていたことを表わし、彼の品性が不まじめで、汚れたものであることを示していた。こうした悪い性質が、カナンとその子孫に永く伝わり、その重なる罪は神の刑罰を招いた。

他方、セムとヤペテが示した父に対する尊敬の念は、同時に、神の戒めに対する尊敬の念でもあって、その子

孫の輝かしい未来の約束でもあった。これらのむすこについて、こう言われている。「セムの神、主はほむべきかな、カナンはそのしもべとなれ。神はやペテを大いならしめ、セムの天幕に彼を住まわせられるように。カナンはそのしもべとなれ」(創世記九ノ二六、二七)。セムの家系は、選民、神の契約の民、約束された贖い主の与えられる民となるのであった。主は、セムの神であった。セムからアブラハムが出て、イスラエルの民となり、そのなかから、キリストが来られるのであった。「主をおのが神とする民はさいわいです」(詩篇一四四ノ一五)。「ヤペテを……セムの天幕に……住まわせられるように」(創世記九ノ二七)。ヤペテの子孫は、福音の祝福に特にあずかるようにされたのである。

カナンの子孫は、異教徒中の最も墮落した異教徒になった。預言によれば、彼らは、奴隷になるのであったがその運命は、数百年間保留されていた。彼らが、神の寛容の限度を越すまで、彼らの不信と墮落を忍ばれた。しかし、ついに彼らは所有物を奪われ、セムとヤペテの子孫の奴隷になった。

ノアの預言は、決して独断的に憤りを宣告したり、特別の寵愛を表わしたものでなかった。それが、ノアのむすこたちの性格や運命を定めたのではない。それは、むしろ、彼らが各自で選んだ道と彼らが築いた品性の結果が何であるかを示したものであった。それは、彼らとその子孫の品性と行為とから見て、神の彼らに対するみこころが何であるかを表現したものであった。一般に、子供は、親の性質と傾向を受け継ぎ、親の行為を模倣する。だから、親の罪は、代々その子孫がくりかえして行なうのである。こうして、ハムの罪と不敬の精神は、その子孫にも見られ、何代にもわたって彼らにのろいをもたらした。「ひとりの罪びとは多くの良きわざを滅ぼす」(伝道の書九ノ一八)。

これに反し、セムが父を敬ったことはなんと豊かに報いを受け、その子孫には、なんとすぐれた聖徒が現われたことであろう。「主は全き者のもろもろの日を知られる。」「その子孫は祝福を得る」(詩篇三七ノ一八、二六)。「それゆえあなたは知らなければならない。あなたの神、主は神にましまし、真実の神にましまして、彼を愛し、その命令を守る者には、契約を守り、恵みを施して千代に及ぶ(申命記七ノ九)。

ノアの子孫は、しばらくの間、箱舟が止まった山地に住んでいた。彼らの数が増加するにつれて、間もなく背信と分裂が生じた。創造主を忘れて、神の律法の制限から脱出しようと望んだ者らは、神を恐れる仲間の教えや模範を絶えずきらっていた。やがて、彼らは、神の礼拝者から分離することに決めた。そこで彼らは、ユフラテ河畔のシナルの平原に下った。彼らはこの場所が、美しく、地が肥沃なのにひきつけられた。彼らは、この平原に自分たちの家を建てることにした。

彼らは、ここに都市を建設し、世界の驚異となるような巨大な高塔を建てることにした。この企ては、人々が広く離散して住むことを防ぐために考案された。神は、人間が、広く地球上にわかれて住み、地に満ち、地を従わせるように指示されていた。しかし、バベルの建設者たちは、彼らの社会を一つの組織にし、やがて、全世界を含むに至る帝国を築こうとした。こうして、彼らの都市は、世界帝国の首都となるのであった。その栄光は、世界の人々の賞賛と尊敬をかちえて、建設者の名を有名にするのであった。空高くそびえる壮麗な塔は、建設者の能力と知恵の記念碑として建てられ、彼らの名声を永久に後世の人々に伝えるためであった。

シナルの平原の住民は、この地上に再び洪水を起こさないという神の契約を信じなかった。彼らのなかには、神の存在を否定し、洪水は自然的原因によって起こったとするものが多かった。他の者は至高者を信じ、神が洪

第10章 バベルの塔



神は、バベルの塔の建設者たちの言葉を乱した。その結果、反逆者たちの工事は中止され、人々は、神が人類を支配しておられることを知らされた。

水前の世界を滅ぼしたことを信じていた。しかし、彼らの心は、カインと同様に神に反抗的であった。彼らが塔を建てた目的の一つは、もし、再び洪水が起こったならば、彼らの身の安全を確保するためであった。彼らは、その建造物を、水が達したところよりもはるかに高く築き上げて、どんな危険にも耐えられるようにしようと思った。そして、雲のある層にまで登れるから、洪水の原因をつきとめることもできるだろうと彼らは考えた。この企てのすべては、計画者たちの誇りをさらに高め、後世の人々の心を神から引き離し、偶像礼拝に陥れようとするものであった。

塔の一部が完成したとき、そのある部分が塔の建設者の住居に当てられた。他に、りっぱな調度品を置いて、飾られた部屋は、彼らの偶像にささげられた。人々は、彼らの成功を喜び、金、銀の神々をたたえ、天と地の支配者に逆らった。突然、これまで順調に進んでいた工事が止められた。建設者たちの意図をくじくために、天使が送られた。塔はすでに高くそびえて、上で働いている者が、下にいるものと直接話をすることはできなかった。それで、あちらこちらに人員が配置されて、必要な資材の注文や工事の指示などを下の者に取り次いだ。こうして、伝令が次々に伝わるうちに、言葉が乱れ、必要でない材料を注文したり、初めの指示とは全く反対の指示を伝えたりするようになった。混乱とろうばいが起こった。工事は全面的に停止した。もはや調和と協力は望むことができなかった。建設者たちは、なぜ彼らの間にこの奇妙な誤解が起こったかを全く説明することができず、怒りと失望のうちに、互いに非難し合った。彼らの連合は、争闘と流血に終わったのである。いなくまが、神の怒りのしるしとして天からくだり、塔の上部を破壊して地に落とした。人々は、神が天を支配しておられることを知らされた。

この時まで、すべての人々が同じ言葉を話していた。しかし、こうなつては、お互いに言葉を理解し合うものだけがまとまって、それぞれ別れていった。「主が彼らをそこから全地のおもてに散らされた」(創世記一一八)。この離散は、広く地に人間を住ませるための手段であつて、主はこのようにして、人々がその成就を妨げようとして取つた方法そのものを用いて、ご自身の目的を果たされたのである。

しかし、神に逆らつた人々の損失はなんと大きかつたことであらう。神の目的は、人々が、国家を起こすために各地へ離散して行くとき、彼らが神のみこころに関する知識をたずさえていつて、真理の光が衰えることなく後世に輝きわたることであつた。忠実な義の説教者ノアは、洪水後三五〇年生きながら、セムは五〇〇年生きながらえたから、その子孫は、神の要求が何で、神が、彼らの父祖たちをどう扱われたかを知る機会があつた。しかし、彼らは、このような耳ざわりな真理を聞こうとはせず、神を知ろうと望まなかつた。そして、主として言葉が乱れたために、光を与え得る人々との交わりが絶たれてしまった。

バベルの建設者は、神に不満の精神を抱いた。彼らは、神のアダムに対するあわれみやノアと結ばれた恵み深い契約を感謝して記憶しようとはせず、かえつて、アダムとエバをエデンから追放し、洪水によって世界を滅ぼした神の苛酷さに不平をならした。しかし、彼らは、神に向かつて、専制的で苛酷であるとおつづやく一方、最も残酷な暴君の支配を受け入れていた。サタンは、キリストの死を予表した犠牲のささげものを軽視させようと努めていた。そして、人々の心が偶像礼拝によつて、暗くなると、これらのささげものにせ物をささげさせ、彼らの神々の祭壇に、自分の子供たちをささげさせた。人々が神から離れると、正義、純潔、愛などの神の性質は圧制、暴虐、残忍などにかわつていった。

バベルの人々は、神から独立した政府を設立しようと考えていた。そのなかには、神を恐れる人もいくらかあったが、不信の人々の主張に欺かれて、その企てに引き入れられていた。主は、こうした忠実な人々のために、刑罰をのびし、人々の正体が明らかになるように時間をお与えになった。これが行なわれている間、神の子らは彼らに思いとどまらせるように働きかけた。しかし、人々は、一致団結して天に反逆を企てた。もし彼らが止められずに進んでいったならば、彼らは、黎明期の世界を墮落させてしまったことであろう。彼らの連合は、反逆に基づいていた。それは、自己賞揚の王国であって、神には主権も栄誉も与えられないところである。もし、この連合が許されていたならば、巨大な勢力が動き出して、この地上から義を追放し、それとともに平和と幸福と安全を奪い去ったことであろう。「聖であって、正しく、かつ善なる」神の律法の代わりに、人々は自分たちの利己的で残忍な心のはかるところにかなった律法を定めようとしていた(ローマ七ノ一二)。

神を恐れた者は、神が干渉されるように叫び求めた。「時に主は下って、人の子たちの建てる町と塔とを見」た(創世記一一ノ五)。神は、世界をあわれみ、塔を建設している者の意図をさせつさせ、彼らの大胆な行為の記念碑をくつがえされた。神は彼らをあわれみ、彼らの言葉を混乱させて、彼らの反逆の計画を阻止された。神は人々に悔い改めの機会を十分に与えて、長く人間の邪悪を忍ばれる。しかし、神の正しく清い律法の権威に逆らう彼らのあらゆる企てを心にとめておられる。ときおり、支配権を握った目に見えない手が、悪をおさえるためにのぼされるのである。宇宙を創造し、無限の知恵と愛と真理に富んでおられるかたが天地の最高の主権者で、その力に反抗するものは、必ず罰せられるという明確な証拠が与えられた。

バベルの建設者の企ては、恥と失敗に終わった。彼らの誇りの記念碑は、その愚かさの記念碑となった。それ

でも人々は、同じ道をたどり続けて、自己に頼り、神の律法を拒否している。これは、サタンが天で実行しようとした原則であつた。カインがささげものをささげたときの精神もこれと同じであつた。

現代にも塔の建設者がいる。無神論者はいわゆる科学的推論によって、彼らの学説を打ちたて、啓示された神の言葉を拒否する。彼らは、神の道德的統治に批判を加え、神の律法を軽視し、人間の理性の十分なことを誇る。そして「悪しきわざに対する判決がすみやかに行われなければならないために、人の子らの心はもっぱら悪を行うことに傾いている」(伝道の書八ノ一一)。

いわゆるキリスト教会の世界でも、多くの人々は聖書の明らかな教えから離れて、人間の推論や耳ざわりのよい作り話をもとにして教義をつくりあげている。そして、彼らは自分たちの塔が、天への道であると指さしている。罪人は死なない、神の律法には従わなくても救いは得られると教える雄弁家の言葉に、人々は賛嘆して耳を傾けている。もしキリストに従うと称する人々が神の標準を信じるならば、それは、彼らを一致させることである。しかし、人間の知恵が神の清い言葉以上に高められているかぎり、分裂と不和は起こる。今日の互いに相入れない信条や教派による混乱は、「バビロン」という言葉で実によく表わされている。この預言は、終末時代の世俗的諸教会にあてはまる(黙示録一八ノ二参照)。

多くの者は、富と力を手に入れて、自分たちの天国を造ろうとしている。彼らは「悪意をもって語り、高ぶつて、しえたげを語り、人権をふみにじり、神の権威を無視する(詩篇七三ノ八)。高ぶる者は、しばらくの間は大きな勢力をもち、その企ては、すべて成功するかも知れない。しかし、最後には、失望と不幸を見いだすだけである。

神の審判の時が近づいている。いと高き神は、人の子らが何を建てているのかを見るために来られる。彼の統治権は、明らかにされ、人間の高ぶりのわざは打ちくだかれる。「主は天から見おろされ、すべての人の子らを見、そのおられる所から地に住むすべての人をながめられる。」「主はもろもろの国のはかりごとをむなしくし、もろもろの民の企てをくじかれる。主のはかりごとはとこしえに立ち、そのみこころの思いは世々に立つ」(詩篇三三ノ一三、一四、一〇、一一)。

神の召しに応じたアブラハム

本章は、創世記一二章に基づく。

バベルからの離散後、偶像礼拝は、また、全世界に広くゆきわたり、主は、ついにかたくなな罪人たちが悪を行なうのを放任しておかれる一方、セムの系統のアブラハムを召して、後の時代の人々のために、神の律法を継承する者とされた。アブラハムは、迷信と異教のなかで成長したのであった。神の知識を保っていた彼の父の家族でさえ、回りの魅力的感化に負けて、主より「ほかの神々に仕えて」いた。しかし、真の信仰が絶えてしまったわけではなかった。アダム、セツ、エノク、メトセラ、ノア、セムなどが次々に立ち上がり、神のみこころの尊い啓示を代々保ったのであった。テラの子が、この神聖な信任にあずかる者になったのである。偶像礼拝は、あらゆる面から彼を誘惑したが、彼は負けなかった。アブラハムは、信仰のない人々のなかで、信仰あつく、神にそむいた人々のなかで汚されず、ただひとり、真の神の礼拝を堅く守り続けた。「すべて主を呼ぶ者、誠をもつて主を呼ぶ者に主は近いのです」(詩篇一四五ノ一八)。神は、ご自身のみこころをアブラハムに伝え、律法要求や、キリストを通してなしとげられる救いについての明確な知識を彼にお与えになった。

神は、当時の人々が特に重んじていた子孫の繁栄と国家の強大さをアブラハムに約束して言われた。「わたしはあなたを太いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」(創世記一二・二)。そして、彼の子孫から世の贖い主がお生まれになるという他のすべての約束にまさって尊い保証が、信仰の継承者にそえて与えられた。「地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」(同・三節)。しかし、それが成就される最初の条件として、信仰の試練を受けなければならなかった。犠牲が要求されたのである。

「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」と、神はアブラハムに言われた(同・一節)。神が、アブラハムを清いみことばの擁護者としての偉大な任務にふさわしい者とするためには、まず、アブラハムを、彼の青年時代の仲間から引き離さなければならなかった。親族や友人たちの感化は、主がそのしもべに与えようとされた訓練を妨げるおそれがあった。アブラハムは、特別の意味で神につながったのであるから、他国人の間に住まなければならなかった。彼の品性は、世とは全く異なり、特殊なものでなければならなかった。彼は、自分の行動を友人たちに理解してもらうように説明することもできなかった。霊のことは、霊によって理解される。そして、彼の動機と行動とは、偶像教徒の親族には理解されなかった。

「信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうおつた時、それに従い、行く先を知らないで出て行った」(ヘブル一・八)。アブラハムの絶対服従は、全聖書を通じて見られる最も驚くべき信仰の例証の一つである。彼にとって、信仰とは、「望んでいる事ごらを確認し、まだ見ていない事実を確認すること」であった(同・一節)。彼は、神の約束の成就に対する外見上の何の保証もないまま、神の約束にたよって、

第 11 章 神の召しに応じたアブラハム



「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」と、神はアブラハムに言われた。神のみ言葉にアブラハムは従った。

どこへ行くのかも知らずに、家や親族、故郷を捨てて神がお導きになる所に従おうとして出て行つた。「信仰によつて、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ」(同・九節)。

アブラハムに臨んだ試練は、決して軽いものではなく、彼に要求された犠牲は、小さくはなかった。アブラハムは、故郷、親族、家庭と、堅いきずなで結ばれていた。しかし、彼は、ためらうことなく召しに従つた。彼は約束の地が肥沃であるか、健康的な気候なのか、また、そこは快適な環境で、富を蓄積する機会があるかなどは聞かなかつた。神がお語りになつたのであるから、神のしもべは従わなければならなかつた。彼にとって、この地上で最も幸福な場所は、神が彼にいるようにお望みになるところであつた。

アブラハムのように、今日も、なお、多くの人々が試みを受ける。彼らは、天から直接語られる神の声を聞かないが、神は、神のみことばの教訓と摂理のできごとによつて彼らを召される。富と榮譽を約束する職業を捨てて、気の合つた有益な仲間を離れ、親族と別れ、克己と困難と犠牲だけを要求するように思われる道に進むように要求されるであらう。神は、彼らに仕事をさせようとしておられる。しかし、安易な生活、友人や親族の感化は、その働きを完成するのに必要な品性の発達を妨げるのである。神は、彼らを人間的感化や援助から遠ざけて彼らに神の助けの必要を感じさせ、ただ神にだけ頼るよう導いて、彼らにご自身を啓示しようとなさるのである。心に秘めた計画や親しい友との交わりを捨てて、神の摂理の召しに応じる者はだれであらうか。キリストのための損は利益であると考えて、新しい任務を引き受け、働きが始められていない地に行き、堅い決心のもとに喜んで神のみわざに従事するのはだれであらうか。このようにする人は、アブラハムと同じ信仰を持っている。

そして、彼は、「永遠の重い栄光を、あふれるばかりに」彼とともに受ける。「今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない」(コリント第二・四ノ一七、ローマ八ノ一八)。

天からの召しは、アブラハムが「カルデヤのウル」に住んでいたときに初めて彼に与えられた。そして、彼は命じられるままにハランに移った。彼の父の家族は、ここまでいっしよであった。彼らは、偶像礼拝と真の神の礼拝もともに行なっていたからである。アブラハムは、テラが死ぬまでここにとどまっていた。しかし、神の声は、父の墓を離れて前進することを命じた。彼の兄弟ナホルとその家族は家にとどまり、偶像礼拝を行なった。アブラハムの妻サラのほかにも、早くなくなったハランのむすこロトだけがいっしよに旅をすることになった。それでもメソポタミヤを出発した人々の数は多かった。アブラハムは、東の国の富である家畜や羊の群れをすでに多く持っていた。そして、数多くのしもべたちや部下たちに囲まれていた。アブラハムは、「集めたすべての財産と、ハランで獲た人々とを携えて」祖先の地と永久の別れを告げようとしていた(創世記一一ノ五)。これらの人々のなかには、働くことや自己の利益を求めることよりも高尚な考え方に動かされたものが多くいた。ハランに滞在していた間に、アブラハムとサラは、ともに、他の人々を真の神の礼拝と奉仕に導いた。この人々は、アブラハムの家族につながり、彼とともに約束の国へ従ってきた。彼らは、「カナンに行こうとしていで立ち、カナンの地にきた」(同・下)。

彼らが最初にとどまった所はシケムであった。アブラハムは、こちらのエバル山と向こう側のグリジム山との間にあるモシのテレピンの木陰に天幕を張った。そこはオリーブの林があつて、泉がわき出ている広い草原であった。アブラハムが着いたところは、美しくよい地であった。「そこは谷にも山にもわき出る水の流れ、泉、お

よび淵のある地、小麦、大麦、ぶどう、いちじく及びざくろのある地」であつた(申命記八ノ七)。しかし、主の礼拝者の目から見ると、木の茂る丘やくだものの豊かな平原には、暗い陰がかかつていた。「そのころカナンびとがその地にいた」(創世記一一ノ六)。アブラハムは、待望していた目的地に到着してみると、国は、異邦人が占領していて偶像礼拝が広く行なわれていた。森のなかには、偽りの神々の祭壇が築かれていて、近くの山頂では人間の犠牲がささげられていた。

アブラハムは、神の約束にしっかりとすがつてはいたものの、天幕を張ったときに、不幸なできごとの予感がないわけではなかった。「時に主はアブラムに現れて言われた、『わたしはあなたの子孫にこの地を与えます』」(同・七節)。彼の信仰は、神が彼とともにあられて、悪人の思いのままになることはないという保証の言葉によって力づけられた。「アブラムは彼に現われた主のために、そこに祭壇を築いた」(同・下句)。彼は、まだ旅人であつたので、間もなく、ベテルの近くに移り、またそこに祭壇を築いて、主の名を呼んだ。

「神の友」アブラハムは、尊い模範を残した。彼の一生は、祈りの生涯であつた。彼は、天幕を張ると必ずそのそばに祭壇を築いて、朝夕の犠牲をささげるときに天幕内のすべての者を集めた。彼の天幕が移動していくと、祭壇はそこに残つた。後年、アブラハムから教えを受けたカナン人が、そのあたりで放浪生活を営んだ。そうした人々のなかのだれかが祭壇を見つけると、そこにだれが住んでいたかがすぐにわかつた。そして、そこに自分の天幕を張り、祭壇を修理して、生きた神を礼拝するのであつた。

アブラハムは、南に旅を続けていった。そして、ふたたび、彼の信仰は試みられた。天から雨は降らず、谷間の小川の水は枯れ、平原の草はしぼんだ。家畜や羊の群れの牧草がなくなり、天幕全体の者が餓死しそうになつ

た。さて、アブラハムは、神の摂理の導きを疑わなかっただろうか。豊かなカルデヤの平原に帰りたいたいと思わなかったであろうか。一同は、次々と苦難におそわれるアブラハムが、いったいどうするであろうかと、しきりに彼を見つめていた。人々は、アブラハムの確信がゆるぎさえしなければ、希望がもてると思った。彼らは、神がアブラハムの友であり、彼を導いておられることを確信した。

アブラハムは、神の摂理の導きを説明することはできなかった。彼は自分が期待していることを現実のものとしてはいなかった。しかし、「あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」という約束を堅く信じた（同・二節）。彼は、周囲の環境によつて神のみ言葉に対する信仰が動かされるのを許さず、熱心に祈って、自分の家族と家畜の生命をつなぐ方法を考えていた。アブラハムは、ききんを避けるためにエジプトに下った。彼は、カナンを見すてたではなかった。また困苦の末、食物にはことかかない故郷のカルデヤの地にもどろうとしなかった。彼は、約束の地にできるだけ近い所にしばらくのがれて、神が定められた場所、間もなく帰るつもりであった。

主は、摂理のうちに、この試練を与えて、服従、忍耐、信仰などの教訓を教えようとなさった。この教えは、後で苦難に耐えるように召されるすべての人のために記録されることになった。神は、神の子らを彼らの知らない道に導かれるが、神は、神に頼るものを忘れたり、見捨てたりなさらない。神はヨブに苦難がのぞむをお許しになった。しかし、神は、彼をお見捨てにならなかった。神は、愛するヨハネが、パトモスの孤島に流されることを許された。しかし、そこで神のみ子がヨハネに会われた。そして、彼の幻は、不滅の栄光に輝く光景で満たされたのである。神は、神の民が試練に会うのを許される。それは、彼らが神に誠実を尽くし、服従すること

によつて、彼ら自身が靈的に豊かになるためである。さらに、彼らの模範によつて、他の人々に奨励を与えるためである。「主は言われる、わたしがあなたがたに対していただいている計画はわたしがつ知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするもの」である（エレミヤ書二九ノ一一）。われわれの信仰を最もきびしく鍛え、神は、あたかもわれわれを見捨てられたのかと思わせるような試練そのものが、実は、われわれがすべての重荷を主のみもとにおろして、それに代えて彼がお与えになる平和を味わうことができるように、われわれをキリストのそば近くに導くべきである。

神は、常に神の民を悩みの炉の中で試みてこられた。クリスチャン品性という純金から不純物が取り除かれるのは、炉の火の中においてである。イエスは、この試練を見守つておられる。彼は、尊い金属をきよめて、彼の愛の輝きを反映させるのには、何が必要であるかを知つておられる。神は、綿密なきびしい試練によつて、そのしもべたちを訓練なさる。神は、ある人が神のみわざの進展のために役立つ能力を持っているのを見られて、そのような人々をためされる。神は、摂理のうちに、彼らの品性をためす地位に彼らをおいて、彼ら自身でも気づかなかつた欠点や弱点をあらわされる。神は、彼らがこれらの欠点を直して、奉仕にふさわしいものになる機会をお与えになる。神は彼ら自身の弱さを示して、神に頼ることをお教えになる。なぜならば、神が彼らの唯一の援助者であり、保護者だからである。こうして、神の目的は達成される。彼らには、大目的達成のための教育、訓練、鍛練、準備などが与えられる。彼らの力は、そのために与えられたのである。神が彼らを活動に召されるとき、彼らは準備が整っている。そして、天使たちは、地上の働きを完結するために力を合わせるのである。

アブラハムは、エジプトに滞在していた間に、彼がまだ人間的に弱く、不完全であるという証拠をあらわした。

彼は、サラが妻であることを隠して、神の守護に対する不信を示し、これまで彼の生涯において何度となくりっぱに示されたあの大きな信仰と勇気を欠いたのである。サラは美しい女であった。アブラハムは、浅黒いエジプト人はきつと美しい外国人をほしがり、彼女を得るためには、平気でその夫を殺すことだろうと考えた。彼は、サラが、父の娘ではあったが、自分の母の娘ではなかったたので、自分の妹だと言っても、うその罪にはならないと考えた。しかし、ふたりの間の真の関係をこうして隠したことは欺瞞であつた。全く正直であることから少しでもそれることを神は許されない。アブラハムの信仰が欠けていたために、サラは大きな危険にさらされた。エジプトの王は、彼女の美しさを聞いて、宮廷に召し入れ、彼女を妻に迎えようとした。しかし、主は、王家に刑罰を下し、大きなあわれみをもってサラを守られた。パロは、こうして真実を知り、自分が欺かれたことを怒つて、アブラハムを責めた。「あなたはわたしになんという事をしたのでですか。…あなたはなぜ、彼女はわたしの妹ですと言ったのですか。わたしは彼女を妻にしようとしていました。さあ、あなたの妻はここにいます。連れて行ってください」と言つて妻をかえした(創世記一一ノ一八、一九)。

アブラハムは、王から非常な好意を受けていた。こうなつたからといって、パロは、アブラハムとその仲間らに危害を加えることを許さず、彼らを安全に国外に送り出すように護衛の者に命じた。このころ、エジプト人が外国の羊飼いと飲み食いして交際することは、法律で禁じられていた。パロがアブラハムを去らせたことは、親切で寛大な行為であつた。しかし、彼は、アブラハムにエジプトを去ることを命じた。王は、彼がとまることを許さなかつた。パロは、知らずに、アブラハムに大きな危害を加えそうになつた。しかし、神が手を下されて、王が大きな罪を犯さないようにしてくださった。パロは、この旅人が天の神の恵みを受けていることを知り、こ

のように神の恵みにあずかっている者を国内にとどめておくことを恐れた。もしもアブラハムがエジプトにとどまっていたら、彼の富と名誉の増大は、エジプト人のねたみとおさほりをひき起こして、彼に危害が加えられ、その責任がパロ王に帰せられて、ふたたび、王家に災いが下るかも知れなかった。

パロに与えられた警告は、その後のアブラハムの異邦人との交際を保護するものとなった。というのは、このことは、秘密にしておけなかった。そして、アブラハムが礼拝する神は、そのしもべを守り、彼に危害が加えられるならば、報復なさることが明らかにされた。天の王の子らのひとりに悪を行なうことは危険である。詩篇記者は、アブラハムのこの経験を引用して、選民について語り、次のように言っている。神は、「彼らのために王たちを懲らしめて、言われた、『わが油をそがれた者たちにさわってはならない、わが預言者たちに害を加えてはならない』と」(詩篇一〇五ノ一四、一五)。

エジプトでのアブラハムの経験と幾世紀もたった後の彼の子孫の経験には、興味深い類似点がある。両方ともきぎんのために、エジプトに下って滞在した。彼らを保護するために下った神の刑罰によって、エジプト人は、イスラエルの人々を恐れた。そして、彼らは、異邦人から贈り物を受けて豊かになり、大きな資産をもって立ち去った。

第 12 章

カナンにおけるアブラハム

本章は、創世記一三 一五章、一七ノ一 一六、一八章に基づく。

アブラハムは、「家畜と金銀に非常に富んで」カナンに帰った。ロトも彼といっしょにいた。彼らは、ふたたびベテルに来て、以前に築いた祭壇のそばに天幕を張った。やがて彼らは、財産が増すにつれて悩みも増すことに気づいた。彼らは、困難と試練のただなかにあつては仲よくいっしょに住んだのであるが、繁栄すると彼らの間に争闘の危険があつた。牧草は、両方の家畜と群れを養うには十分ではなかつた。そのため、牧者どうしの間にたびたび衝突が起こり、アブラハムとロトにその解決を求めるのであつた。彼らが別れなければならないことは明らかであつた。アブラハムは、ロトよりも年長で、財産や地位においてもすぐれていた。それでも、アブラハムが最初に平和維持の案を提出した。全地は、神がアブラハムに与えられたものであつた。しかし、彼は、穏やかにその権利を譲るのであつた。

アブラハムは言った。「わたしたちは身内の者です。わたしとあなたの間にも、わたしの牧者たちとあなたの牧者たちの間にも争いがないようにしましょう。全地はあなたの前にはありませんか。どうかわたしと別れてください。あなたが左に行けばわたしは右に行きます。あなたが右に行けばわたしは左に行きましょう」（創

世記一三ノ八、九。

ここに、アブラハムの高潔、無我の精神があらわされた。これと同様の立場におかれたとき、なんと多くの人が、自分の権利や優先権を主張してやまないことであろう。こうして、どれほど多くの家庭が破壊されたことであろう。どれほど多くの教会が分裂して、真理の働きが悪人たちのぶべつと物笑いの種になったことであろう。「わたしとあなたの間にも……争いがないようにしましょう」。親族関係だけでなく、真の神の礼拝者でもあるから、「わたしたちは身内の者です」とアブラハムは言った。全世界の神の子らは、一つの家族である。そして同じ愛と融和の精神が彼らを支配しなければならない。「兄弟の愛をもつて互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい」とわれわれの救い主はお教えになった(ローマ二ノ一〇)。だれにでも礼儀正しくすることを身につけ、人々からしてほしいと思うことを、喜んで人々にするならば、人生の不幸の半分はなくなってしまうことであろう。自己誇張は、サタンの精神である。しかし、キリストの愛を心に持つものは、自分の利益を求めない愛をもつようになる。そうした人は、「おのおの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい」という勧告を心にとめるべきであろう(ピリピ二ノ四)。

ロトは、財産をもつことができたのはアブラハムといっしょにいたためであつたが、彼は恩人に感謝の気持ちであらわさなかつた。まず、アブラハムに選択権を譲るのが礼儀であつたが、彼は、そうはせずに自分のほしいものを全部手に入れようと欲張つた。「ロトが目を上げてヨルダンの低地をあまねく見わたすと、……ゾアルまで主の園のように、またエジプトの地のように、すみずみまでよく潤っていた」(創世記一三ノ一〇)。パレスチナ全土のなかで、ヨルダンの谷は、最も地味が豊かな地域で、見るものにかつての樂園を思わせた。そして、そ

れは、彼らが少し前に出てきたばかりの、豊かなナイル川沿岸の平野の美しさと肥沃さに匹敵していた。そこには、また、豊かで美しい都会があつて、そのにぎやかな市場では、商売が繁盛しそうに思われた。ロトは、世的利益の幻に目がくらみ、そこで当面する道德的、靈的害悪を見落としていた。低地の住民は、「主に対して、はなはだしい罪びとであつた」(同・一三ノ一三)。しかし、彼はそのことを知らなかった。たとえ、それを知つてもあまり重きをおかなかった。「ロトはヨルダンの低地をことごとく選びとつて」「天幕をソドムに移した」(同・一三ノ一、一二)。ロトは、この利己的選択の恐ろしい結果については、なんの予測もしなかった。

アブラハムは、ロトと別れたあとで、ふたたび、全地を与えるという約束を主から受けた。この後、間もなく彼は、ヘブロンに移り、マムレのテレビンの木の下に天幕を張り、そのかたわらに主の祭壇を築いた。彼は、オリーブ園やぶどう園、穀物の穂が波うつ畑、周囲の山々の広々とした牧場にかこまれた高原の大気を吸つて、それほど豊かな家長生活に満足し、ソドムの谷の危険な快楽は、ロトにゆだねた。

アブラハムは、周囲の国々から、偉大な族長、賢明で力ある首長として尊敬された。彼は、隣人に自分の感化を及ぼさないようにはしなかった。彼の生活と品性は、偶像礼拝者たちと著しく異なつていて、真の信仰の非常によい感化を及ぼした。彼の神への忠誠は不動のものであるとともに、彼の親しみやすさと情深さは、人々の信頼と友情を勝ち得、彼の飾らない偉大さは、尊敬と榮譽を受けた。

アブラハムは、宗教をひそかにしまつておいて、所有主がひとりで楽しむ秘宝のようなものだとは思わなかった。真の宗教は、そのようにしまつておけるものではない。そのような精神は福音の原則に反する。キリストが心のなかに住んでおられるなら、彼の臨在の光をかくすことも、あるいは、その光が暗くなることもあり得ない。

かえって、魂にかかる自我と罪の霧が、義の太陽の明るい光に照らされて、日ごとに消されていくにつれて、ますます輝きを増すことであろう。

神の民は、地上の神の代表者である。神は、この世界の道徳的暗黒のなかで、彼らが光になることを望まれる。彼らは、全国の都市や村々に散在した神の証人であって、神は、彼らを通して、神のみこころと神の驚くべき恵みの知識を不信の世界にお伝えになる。大いなる救いにあずかった者がすべて、主のための伝道者になるように神は計画された。クリスチャンの敬神深さを標準にして、世の人々は福音を評価する。忍耐強く試練に耐え、感謝して祝福を受け、柔和、親切、あわれみ、愛を習慣的にあらわすことなどが、世の人々の前で、品性から輝き出る光であって、生まれつきのままの心の利己心から出る暗黒との相違を示す。

アブラハムは、信仰深く寛大で、よく服従し、質素な旅人の生活にあまんでいたが、彼は、また、外交的手腕にたけ、戦いにおいても勇敢で、すぐれた技量をもっていた。アブラハムは、新しい宗教の教師として知られていたにもかかわらず、彼が住んでいたアモリの平原の支配者であった三兄弟は、アブラハムに、彼らと同盟を結んで安全を確保することを申し入れて、その友情を示した。というのは、国内には暴力と圧迫が満ちていたからである。やがて、彼がこの同盟を活用する事件が起こった。

エラムの王、ケダラオメルは、十四年前に、カナンに侵入して、これを属国にした。ところが、数人の王が反乱を起こしたので、エラムの王は、他の四か国の連合軍を率いて、ふたたび、彼らを屈服させようと侵入してきた。カナンの五人の王は、力を合わせて、シデムの谷で侵略軍と対戦したが完全に打ち破られた。軍隊の大部分は殺され、のがれたものは山に身をかくした。勝利者は、低地の町々をかすめ、たくさんの戦利品と多くの捕虜

をつれて引き上げた。そのなかに、ロトとその家族がいた。

アブラハムは、マムレのテレピンの林の中で平和に暮らしていたが、戦場からにげてきた者から、戦況と、彼のおいにふりかかった災難を聞いた。彼は、ロトの忘恩を不快に思っていなかった。彼のロトに対する愛情がすべて呼びさまされ、彼を救い出そうと決心した。アブラハムは、まず、神の助言を求めて、戦いの準備にとりかった。アブラハムは、自分の天幕から、神を恐れ、よく主人に仕え、戦いの訓練を受けたしもべたち三百十八人を召集した。彼と同盟を結んだマムレ、エシコル、アネルも部下を率いてアブラハムに加わり、ともに侵略者の追撃に出発した。エラムとその連合軍は、カナンの北境のダンに陣営を張っていた。彼らは、勝ち誇って、敗北した敵が攻めてくる心配もなく、陽気に騒いでいた。アブラハムは、異なった方角から接近するために、軍隊を区分けし、夜、陣営を襲った。この激しい不意のアブラハムの攻撃は、またたく間に勝利をおさめた。エラムの王は殺され、あわてふためいた軍勢は完全に敗北した。ロトとその家族は、他の捕虜や家財とともに取りかえされ、たくさんの戦利品が勝利者の手にはいった。神のもとにあったアブラハムが勝利をおさめるのは当然のことであった。主の礼拝者は、国家のために大きな貢献をしたばかりでなく、彼自身が勇者であることをも証明した。義は決しておくびょうではない。そして、アブラハムの宗教は、権利を守り、圧迫された者を擁護するために、彼に勇気を与えたものであることが明らかに示された。彼の英雄的行為は周囲の民族の間に広く知れわたった。アブラハムが凱旋すると、ソドムの王は、勝利者をたたえるために部下をつれて出迎えた。彼は、アブラハムに、戦利品は、自分のものとし、捕虜だけを返してほしいと頼んだ。戦いの習慣によれば、戦利品は、勝利者に属することになっていた。しかし、アブラハムは、利益を目的に戦ったのではなかったので、彼は、人々の不

幸に乗じることを拒み、ただ彼の同盟国の人々が受ける分を求めただけであつた。

こうした試練のときに、アブラハムのような高潔さをあらわすことができる人は少ない。このような莫大な戦利品を手に入れることができる誘惑に勝利する者は少ないことであろう。彼の模範は、利己主義と金銭目当ての精神に対する譴責である。アブラハムは、正義と人道の要求するところを尊重した。彼の行動は、「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない」との靈感の言葉の実例であつた(レビ記一九ノ一八)。「天地の主なるいと高き神、主に手をあげて、わたしは誓います。わたしは糸一本でも、くつひも一本でも、あなたのものは何も受けません。アブラムを富ませたのはわたしだと、あなたが言わないように」と彼は言つた(創世記一四ノ二二、二三)。彼は、こうして、利益のために戦いに参加したとか、彼の繁栄は、人々の贈り物や好意によるものだとか言う口実を人々に与えなかつた。神が、アブラハムを祝福すると約束されたのであつた。であるから、神に栄光を帰すべきであつた。

勝利したアブラハムを出迎えたもうひとりとは、サレムの王メルキゼデクであつた。彼は、アブラハムの軍隊の労をねぎらうために、パンとぶどう酒とを持ってきた。彼は、「いと高き神の祭司」として、アブラハムを祝福し、アブラハムによつて、こうした大きな救いが与えられたことを神に感謝した。そして、アブラハムは、「彼にすべての物の十分の一を贈つた」(同・一四ノ二〇)。

アブラハムは、喜びに満ちて、自分の天幕と群れのところにもどつた。しかし、彼は気にかかることがあつた。彼は、平和を愛好し、できるだけ敵意と争闘をさけてきた。彼は、実際に自分の目でみた殺人の光景を思い出してせんりつした。しかし、敗北した国々は、ふたたび、カナン侵略を再開することはまちがひなく、特に、彼の

ところにふくしゅうにやってくるであろう。こうした諸国の争闘に巻きこまれては、彼の平和な生活の静けさは破られてしまうであろう。それに、彼は、まだ、カナンの地を手に入れておらず、約束の成就が与えられている世継ぎを、今望むこともできなかった。

夜の幻のうちに、ふたたび天の声が聞こえた。「アブラムよ恐れてはならない、わたしはあなたの盾である。

あなたの受ける報いは、はなはだ大きいであろう」と諸王の王が言われた(同・一五ノ二)。しかし、彼の心は不安に閉ざされ、これまでのように疑わずに確信をもって、約束をつかむことができなかった。彼は、それが成就するという具体的証拠を祈り求めた。むすこが与えられないのに、どのようにして契約は実現するのであるうか。彼は言った。「わたしには子がなく、…あなたはわたしに何をくださろうとするのですか。」「わたしの家に生れたしもべが、あとつぎとなるでしょう」(同・一五ノ二、三)。アブラハムは、彼の信頼するしもべのエリエゼルを養子にして、財産を相続させようと思った。しかし、彼自身のむすこが彼の世継ぎになるという保証が与えられた。そして、彼は、天幕の外に連れ出され、天に輝く無数の星を見るように言われた。彼がその通りにすると、「あなたの子孫はあのようになるでしょう」という言葉が語られた(同・一五ノ五)。「アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた」(ローマ四ノ三)。

それでもアブラハムは、彼の信仰の確証と神の彼らに対する恵み深いみこころは成就されるということの後世に対する証拠として、何か目に見えるしるしを求めた。主は、当時の人々が厳粛な契約の批准をするのと同じ方法によって、アブラハムと契約を結ぶことに応じられた。アブラハムは、神の指示に従って、三歳の雌牛、雌やぎ、雄羊などを犠牲にし、そのからだを裂いて、少し間を置いて並べた。それに、彼は、山ばとと家ばとのひな

を加えたが、これは裂かなかった。こうしておいて、アブラハムは、うやうやしく、犠牲の裂かれたものの間を通り、永遠の服従を厳粛に誓った。彼は、夕暮れ近くまで、犠牲のそばにいて、荒い鳥に汚されたり、食い散らされたりしないように、じつと見守っていた。日暮れに彼は深い眠りにおちた。すると「大きな恐ろしい暗やみが彼に臨んだ」（創世記一五ノ一二）。そして、神の声が聞こえ、約束の国をすぐ所有することを期待しないように命じ、また、カナンに定住する前に、彼の子孫は苦難に会うことを予告した。ここで、キリストの死という大きな犠牲と栄光の来臨による贖罪の計画が彼に示された。アブラハムは、また、地上がふたたびエデンの美しさに回復されて、永遠の所有として彼に与えられ、約束が完全に成就することを示された。

この神と人との契約のしるしとして、神の臨在の象徴である煙の立つかまと炎の燃えたいまつが、裂かれた犠牲の間を通りすぎ、それらを完全に焼き尽くした。アブラハムは、「エジプトの川から、かの大川ユフラテ」に至るカナンの地が、彼の子孫に与えられるという保証の言葉を重ねて聞いた（同・一五ノ一八）。

アブラハムがカナンに住んで二十五年ほどたったときに、主は彼に現われて「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」と言われた（同・一七ノ一）。アブラハムが地に伏していると、「わたしはあなたと契約を結ぶ。あなたは多くの国民の父となるであろう」という言葉が続いた（同・一七ノ四）。この契約の成就のしるしとして、これまで、アブラムと呼ばれていた名が「多くの国民の父」を意味するアブラハムと変えられた。サライの名もサラ（王妃）となった。「彼女を国々の民の母としよう。彼女から、もろもろの民の王たちが出るであろう」と神は言われた（同・一七ノ一六）。

第 12 章 カナンにおけるアブラハム



彼は、天幕の外に連れ出され、天に輝く無数の星を見るように言われた。彼が、その通りにすると、「あなたの子孫はあのようになるでしょう」という言葉が語られた。

このとき、アブラハムは、「無割礼のままで信仰によって受けた義の証印」として割礼を受けた(ローマ四ノ一一)。割礼は、アブラハムとその子孫が、自分たちを神の奉仕にささげて偶像礼拝者から離れ、そして、神が彼らを神の特別の宝としてお受けになったことのしるしとして、守るべきものであった。彼らは、この儀式を行なうことにより、アブラハムに与えられた契約の条件を彼らの側で成就することを誓うのであった。彼らは、異邦人と結婚してはならなかった。なぜなら、そうすることによって、彼らは、神とその清い律法に対する尊敬を失い、他の国々の罪の習慣に誘惑され、偶像礼拝に陥るからである。

神は、アブラハムに大きな名誉をお与えになった。天使が友だち同志のように彼と歩き、語った。ソドムに神の刑罰が下されようとしたときも、その事実が彼にはかくされなかった。そして、彼は、罪人のために、神にとりなすものとなった。彼と天使たちとの出会いは、美しいもてなしの模範である。

暑い夏のまっ昼間、アブラハムが天幕の入口にすわって静かなけしきをながめていると、はるかむこうから三人の旅人が近づいてくるのが見えた。旅人たちは、彼の天幕に近づく前に、立ちどまって行き先の相談をしているように見えた。アブラハムは、彼らが他の方向へ行こうとするような様子を見て、彼らの依頼を受ける前に立ち上がって、急いで彼らのそばに寄り、礼をつくして、自分の家に止まってしばらく休息をとるように願った。アブラハムは、彼らがちりによごれた足を洗うために自分で水をくんできた。そして、旅人が涼しい木陰で休んでいる間に、アブラハムは食事の用意をした。その準備が終わると、客が食事をしている間、彼は、そのそばにかしこまって立っていた。神は、このていねいな行為を聖書に記録する重要性が十分にあるものとお認めになった。そして、千年ほどたって、使徒は、靈感によってその事に言及してこう言った。「旅人をもてなすことを忘

れてはならない。このようにして、ある人々は、気づかないで御使たちをもてなした」（ヘブル一三ノ二）。

アブラハムは、こうした客を、普通の旅に疲れた三人の旅人であると思い、そのなかのひとり、罪のないおかたとして、彼が礼拝をするかたであることを少しも知らなかった。ところが、天からの使者の真の性格があらわされた。彼らは、怒りの使者として、刑罰を下すために行く途中であつたが、信仰の人アブラハムには、まず祝福の言葉を語った。神は、厳格に罪を示し、悪を罰するのであるが、報復を喜ばれない。滅びのわざは、無限の愛の神には、「そのわざは異なつたもの」である（イザヤ書二八ノ二一）。

「主の親しみは主をおそれる者のためにあり」（詩篇二五ノ一四）。アブラハムは、神を尊んだ。それで、主も彼を尊び、神の会議に彼を加えて、みこころを彼にあらわされた。「わたしのしようとする事をアブラハムに隠してよいであろうか」と主は言われた（創世記一八ノ一七）。「ソドムとゴモラの叫びは大きく、またその罪は非常に重いので、わたしはいま下つて、わたしに届いた叫びのとおり、すべて彼らがおこなっているかどうかを見て、それを知ろう」（同・一八ノ二〇）。神は、ソドムの罪の量を知つておられた。しかし、彼は、彼の処置の正当性を、人間が理解できるように、人間的表現をなさつた。主は、罪人に刑罰を下すに先だつて、主ご自身が行って、彼らの行動を調査される。もし彼らが、まだ神の恵みの限度を越えていなければ、彼は、なお、彼らに悔い改めの機会をお与えになる。

ふたりの天使は、アブラハムとあとのひとりを残して出かけたが、彼はいま、このかたが神のみ子であることを知つた。信仰のあつい彼は、ソドムの住民のためにとりなした。彼は、剣によつて彼らを救つたことがあるが今度は祈りによつて彼らを救おうとした。ロトと彼の家族はまだそこに住んでいた。かつて、エラム人から彼ら

を救ったアブラハムの無我の愛は、もし、神のみこころならば、神の激しい刑罰から彼らをふたたび救い出した
いと願った。

彼は、深い尊敬と謙虚な心で訴えた。「わたしはちり灰に過ぎませんが、あえてわが主に申します」(同・一八
ノ二七)。自信や自己の義を誇る心はなかった。彼は、自分の服従とか神のみこころを行なうための犠牲とかを理
由にして、恵みを求めたのではない。彼は、自分自身罪人であるが、罪人のために哀訴した。神に近づく人々は、
すべてこのような精神をもたなければならない。アブラハムは、愛する父親に訴える子供のような確信をあらわ
した。彼は、天の使者のそばに近づいて熱心に訴えた。ロトは、ソドムの住民にはなつたけれども、彼は、住民
の罪に参加していなかった。アブラハムは、人口の多いこの町に、真の神の礼拝者がほかにもあるにちがいない
と思った。そう考えて、「正しい者と悪い者とを一緒に殺すようなことを、あなたは決してなさらないでしょう。
…全地をさばく者は公義を行うべきではありませんか」と彼は訴えた(同・一八ノ二五)。アブラハムは一度だ
けでなく何度も願った。願いが聞かれるにつれて大胆になり、もし、十人の義人がソドムにいたならば、町は救
われるという確証をついに得た。

アブラハムは、滅亡にひんした魂への愛に動かされて祈った。彼は、腐敗したソドムの町の罪はきらったが、
罪人が救われることを願った。アブラハムがソドムのために抱いた深い関心は、われわれが悔い改めていない人
人に対して感じなければならない切実な思いを示している。われわれは、罪を憎まなければならないが、罪人に
は、あわれみと愛を持たなければならない。われわれの回りには、ソドムにのぞんだのと同じように、希望なく
恐ろしい破滅に陥っている魂がある。毎日、だれかの恵みの期間が閉じている。毎時間、だれかが恵みのとどか

ないところへ移っていく。それなのに、恐ろしい運命をさけるように罪人に訴え、警告する声はどこにあるのだろうか。罪人を死から引き返すためにどこに救いの手がさしのべられているだろうか。けんそんに、しかも忍耐強い信仰をもって、罪人のためにとりなす人はどこにあるだろうか。

アブラハムの精神は、キリストの精神であった。神のみ子ご自身が罪人のために偉大な仲保者になられた。罪人の贖罪のためにその代価を払われたかたが、人間の魂の価値を知っておられる。キリストは、なんの汚れもない清い性質をもった者だけがいただくことのできる悪への敵意を示すとともに、無限の慈悲をもった者だけがいただくことのできる愛を罪人にお示しになった。キリストは、ご自分が十字架の苦しみなかで、全世界の恐ろしい罪の重荷を背負われたとき、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と、ちよう笑者や殺人者のために祈られた(ルカ二三ノ三四)。

アブラハムについては、「彼は『神の友』と唱えられ」「信じて義とされるにいたるすべての人の父」としてされている(ヤコブ二ノ二三、ローマ四ノ一一)。この忠実な父祖アブラハムについて、神ご自身このようにあかしされた。「アブラハムがわたしの言葉にしたがってわたしのさとしと、いましめと、さだめと、おきてとを守った」(創世記二六ノ五)。また、「わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。これは主がかつてアブラハムについて言った事を彼の上に臨ませるためである」(同・一八ノ二九)。アブラハムは、非常に名誉ある召しを受けた。彼は、世界に対して、数世紀間にわたって神の真理の擁護者、また、保持者となる民族の父となり、その民族のなかから、地のすべての国々を祝福する約束のメシヤが来臨なさるのであった。しかし、アブラハムを召された神は、彼の価値を認められた。語られる

のは神である。人の思いを遠くから知り、人を正しく評価される神は、「わたしは彼を知ったのである」といわれる。アブラハムの側においては、利己的的目的のために、真理を裏切ることとはなかった。彼は、律法を守り、公明正大にふるまうであろう。彼は、自分自身が主を恐れるだけでなく、家庭のなかで宗教をはぐくむであろう。彼は、義をもって、家族を教える。神の律法が彼の家の規則になるのであった。

アブラハムの家には、千人以上の人々がいた。彼の教えを受けて、ひとりの神を礼拝するようになったものは彼の天幕に住むようになった。そして、彼らは、ちょうど学校のように、ここで真の信仰の代表者となるための教育を受けた。こうして、彼の上に、大きな責任が負わせられた。彼は、家族のかしらたちを教育していた。そして、彼の管理の方法は、彼らが治める各家庭で実行されるのであった。

初期のころ、父親は家族の統治者であり、祭司であつて、子供たちが自分の家族をもった後までも、彼らの上に權威をふるつた。彼の子孫は、彼を宗教上ならびに、政治上の首長として尊ぶように教えられた。この制度は神の知識を保存させるものであつたから、アブラハムは、この家長制度の組織を永續させようと努力した。各地に広く行きわたつて、深く根をおろした偶像礼拝に対する防壁を築くために、家族の全員をまとめることが必要であつた。罪惡に親しむならば、知らず知らずのうちに原則を犯すようになることを、アブラハムは知つていたので、彼の天幕の住人たちが、異教徒と交わり、偶像礼拝の習慣を見ることがないように、あらゆる方法によつて彼らを守ろうとした。彼は、偽りの宗教のどんな形のものも閉め出し、真の礼拝の対象である生きた神の栄光と威嚴を人々の心に深く印象づけようと最大の注意を払つたのである。

神の民が異教徒との接触をできるだけ断ち、周囲の国民と交わらず、自分たちだけで生活するようにしたのは



アブラハムは、子供たちや家の者たちを愛して、彼らの信仰を擁護し、最も尊い遺産である神の戒めを彼らに教えた。

神ご自身の賢明な処置であつた。神が、父祖アブラハムを偶像礼拝者であつた親族から離れさせたのは、当時、メソポタミヤにはびこつていた腐敗的感化から、彼とその家族を引き離して、教育と訓練を施し、各時代にわたつて、彼の子孫に眞の信仰を清く保たせるためであつた。

アブラハムは、彼の子供たちと家族を愛していたので、彼らの信仰を保護し、彼が彼らに与えることのできる最も尊い遺産として、神の律法の知識を彼らに教えた。これは、彼らが世界に伝えるべきものであつた。すべての者が、天の神の統治下にあることを教えられた。親が子供を圧迫したり、子供が不従順であつたりしてはならなかつた。神の律法が各自の義務を示していたから、それに服従するものだけが、幸福と繁栄を得ることができた。

彼自身の模範、彼の日常生活の無言の感化は、不斷の教訓であつた。王たちの賞賛をかちえたゆるがない高潔な精神、慈愛と無我の精神による親切は、家庭でも發揮された。生活に芳香がただよい、品性の気高さと美しさとは、彼が天と結ばれていることをすべての者にあらわした。彼は、どんなに卑しい身分の奴隷の魂も輕視しなかつた。彼の家では、主人としもべを別々に扱い、金持ちと貧者を區別して扱う規則はなかつた。だれもが、彼とともに生命の恩恵を受け継ぐ者として、公平と同情をもつて扱われた。

アブラハムは、「家族に命じ」た。彼は、子供たちの惡の傾向を放任するような恐ろしいことをせず、大目に見て、えこひいきをするような愚かさや弱さもなく、また、誤つた愛情におぼれて、自分の義務を曲げることもなかつた。彼は、正しい教育を施したばかりでなく、公正と義の律法の權威を保つたのである。

今日、彼の模範にならう者がいかに少ないことであろう。多くの親たちは、盲目的で、利己的な感傷とまちが

った愛情に陥り、子供たちが彼らのまだ十分に成長していない判断力と訓練されていない欲望とをほしいままにするのを放任している。これは、青年たちにとって、全く残酷なことであり、世界にとって、大きな罪である。家庭と社会の無秩序の原因は、親の怠慢にある。それは神の要求に従うかわりに、青年たちの好むままを行なう欲求をますます強固にする。こうして、彼らは神のみこころを行なうことをきらって成長し、その非宗教的で不従順な性質を彼らの子孫に伝える。親は、アブラハムのように、家族に服従を命じる必要がある。神の權威に服従する第一歩として、親の權威に服従することを教えて実行させよう。

神の律法が、宗教的指導者にさえ軽視されることは、大きな害悪を生んでいる。神の律法は、もはや人間を拘束しないという教えが一般に広まっているが、これは、人々の道徳に偶像礼拝と同じ結果を与えている。神の清い律法の要求を低下させようとする人々は、家族と国家の組織の根底に直接攻撃を加える。信仰は持つていても神の律法に従っていない親は、主の道を守るように家族に命じない。神の律法が、生活の規準にされていない。子供たちが、それぞれの家庭を築くときに、彼ら自身が教えられなかったことを子供たちに教える義務は感じない。今日、不信仰な家庭がこんなに多いのはそのためである。墮落がこんなに深く、広く及んでいるのもこのためである。

親自身が、全心をこめて、主の律法に従って歩かないかぎり、子供たちに服従を命じることができない。この点に改革が必要で、深く、広い改革が行なわれなければならない。親に改革が必要であり、牧師に改革が必要である。彼らの家庭に、神が必要である。もし彼らが変化を希望するならば、彼らの家庭に神の言葉を入れ、その勧告に従わなければならない。それは、彼らに語る神の声であり、それに絶対に服従すべきであることを、彼ら

は子供たちに教えなければならない。親は忍耐深く子供たちを教え、神を喜ばせるためには、どのように生きるべきかを、やさしく、たゆまず教えなければならない。こうした家庭の子供たちは、無神論の詭弁に立ちむかう準備がある。彼らは、聖書を彼らの信仰の基礎として受け入れた。彼らは、懐疑論の潮流に流されない土台を持っている。

あまりにも多くの家庭で、祈りがなおざりにされている。親たちは、朝夕の礼拝をする時間がないと考えている。彼らは、植物を繁茂させる輝く日光や雨、聖天使の保護などの豊かな恵みに対して、神に感謝する時間を少しもさくことをしない。彼らは、神の助けと導きを求め、家庭にイエスがおとどまりになるように、祈りをささげる時間を持たない。彼らは、神についても天のことについても考えず、牛馬のように働く。彼らが何の望みもなく、失われることのないように、その贖いとして、神のみ子は生命をお与えになった。人間は、それほど尊い魂を持っている。それなのに、彼らは滅びてしまう獣と同様に、神の大きな恵みに感謝することをしない。

昔の父祖たちのように、神を愛すると告白するものは、どこに天幕を張っても、そこに主の祭壇を築かなければならない。すべての家が祈りの家でなければならない時があるとすれば、それは今である。父親も、母親も、自分たちと子供たちのために、けんそんに願いをなし、心を神にむけなければならない。父親は、家庭の祭司として、朝夕の犠牲を神の祭壇にささげ、妻と子供たちは、祈りと賛美に加わろう。イエスは、そうした家庭に喜んでとどまられる。

すべてのクリスチャンの家庭から、清い光が輝き出なければならない。愛は、行動に現わされるべきである。愛は、家庭のすべての交わりにあふれ出て、思いやりとおだやかさと、自分を忘れたやさしさとなってあらわれ

るべきである。この原則が実行されている家庭がある。それは、神が礼拝され、真の愛が支配している家庭である。これらの家庭から、朝夕の祈りはこうばしいかおりのように、神のみもとにのぼり、神の恵みと祝福は朝露のように祈る者の上に降るのである。

よく治められたクリスチャンの家庭は、キリスト教の真実性を支持する力強い論証で、無神論者もこれに反論できない。こうして、家庭が子供に感化を及ぼし、アブラハムの神が彼らとともにおられることが、すべての人にわかる。もし、クリスチャンといっているものの家庭が、宗教的に正しい型のものであれば、それは、非常によい感化を与える。彼らは、真に「世の光」となる。天の神は、すべての忠実な親たちに、アブラハムに語られた言葉を語られる。「わたしは彼が後の子らと家族とに命じて主の道を守らせ、正義と公道とを行わせるために彼を知ったのである。これは主がかつてアブラハムについて言った事を彼の上に臨ませるためである」(同・一八ノ一九)。

第 13 章

信仰をためされたアブラハム

本章は、創世記一六章、一七ノ一八 二〇、
二一ノ一 一四、二二ノ一 一九に基づく。

アブラハムは、むすこが与えられるという約束を疑わずに信じたが、神がご自身の時と方法によつて、みこ
ばを成就なさるのを待たなかった。神の力にたよる彼の信仰をためすために、神は、約束の成就が遅れるのを許
された。しかし、アブラハムはこの試練に耐えられなかった。サラは年をとっていたので、子供が与えられるこ
とは不可能だと考え、神のみこころが成就する計画として、彼女の侍女のひとりのアブラハムが第二の妻として
めとるように提案した。当時、一夫多妻は広く行なわれていたので罪だとは思われなくなっていた。しかしそれ
が、神の律法に違反することはまちがいに、家族関係の神聖さと平和にとつて致命的であつた。アブラハムと
ハガルとの結婚は、彼ら自身の家庭だけにとどまらず将来の世代にまでも悪い結果をもたらした。

ハガルは、アブラハムの妻という新しい地位を名譽に感じ、アブラハムから出る大国民の母になろうと望み、
高慢不遜になつて、女主人を軽べつするようになった。互いにしつとし合つて、平和な家庭の幸福が破られてし
まった。アブラハムは両方の言い分を聞かされ、もう一度、彼らを和合せようと努力したがむだであつた。ア

ブラハムがハガルをめとったのは、サラの熱心な勧めによったのであるが、サラは、それをいま、彼のせいにして責めるのであった。サラは、彼女の敵を追い出そうと望んだ。しかし、アブラハムはそうすることを許さなかった。なぜなら、ハガルは、彼が約束の子として、いとしんで望んでいる彼の子の母親となるからであった。それでも彼女はサラの侍女であり、サラの支配下にあった。ハガルの高慢な精神は、自分の横柄さに対して取られなきびしさに耐えられなかった。「サライが彼女を苦しめたので、彼女はサライの顔を避けて逃げた」（創世記一六ノ六）。

彼女は荒野にのがれた。そして、泉のかたわらに、さびしくただひとりで休んでいると、主の使いが人間の姿をとって彼女に現われた。主の使いは、「サライのつかえめハガルよ」と呼びかけ、彼女の立場と義務を思い起こさせて、「あなたは女主人のもとに帰って、その手に身を任せなさい」と命じた（同・一六ノ八、九）。しかし譴責に慰めの言葉が混じっていた。「主があなたの苦しみを聞かれたのです。」「わたしは大いにあなたの子孫を増して、数えきれないほどに多くしましょう」（同・一六ノ一、一〇）。そして、神の恵みの永遠の記念として彼女は、その子をイシマエル（神は聞かれる）と呼ぶように命じられた。

アブラハムは、百才近くなったときに、むすこが与えられる約束がくり返し与えられ、将来の世継ぎはサラの子でなければならぬという確証が与えられた。しかし、アブラハムは、まだ約束を理解しなかった。彼は、直ちに、イシマエルのことを考え、彼によって神の恵み深いみこころが成就するという考えを捨てなかった。彼は自分のむすこを深く愛して、「どうかイシマエルがあなたの前に生きながらえますように」と叫んだ（同・一七ノ一八）。ふたたび、まちがう余地のない言葉で約束がくり返された。「あなたの妻サラはあなたに男の子を産む

でしょう。名をイサクと名づけなさい。わたしは彼と契約を立てて、後の子孫のために永遠の契約としよう」(同・一七ノ一九)。しかし、神は、父の祈りをお忘れにならなかった。「またイシマエルについてはあなたの願いを聞いた。わたしは彼を祝福して……彼を大いなる国民としよう」(同・一七ノ二〇)。

一生待ったかいがあつて、イサクが生まれ、心からの願いがかなつたアブラハムとサラの天幕は、喜びに満たされた。しかし、ハガルにとつて、このことは楽しみにしていた野心が打ち砕かれることであつた。もう青年になつていたイシマエルは、天幕のなかのすべての人から、アブラハムの富の相続者、また、彼の子孫に約束された祝福の継承者とみなされていた。ところが、突然彼は退けられた。母子は失望してサラの子を憎んだ。だれもが喜んでいるのがねたましく思われ、ついにイシマエルは、公然と神の約束の継承者をあざわらつた。サラは、イシマエルの狂暴な性質が、いつまでも争いの種になるのを察して、ハガルとイシマエルを天幕から追い出すようにアブラハムに訴えた。アブラハムは非常な苦悩に陥つた。なお、深く愛しているむすこのイシマエルを、どうして追放することができたであろう。彼は苦しんで、神の導きを求めた。主は、天使によつて、サラの願いを聞き入れるように指示された。家族の一致と幸福を回復するにはこれしかなかったから、イシマエルやハガルに對する愛が妨げとなつてはならなかった。そして、イシマエルは父の家庭から離れても、神に見捨てられたのではないという慰めの約束が彼に与えられた。彼の生命は保護され、大国民の先祖となるのであつた。アブラハムは天使の言葉に従つた。しかし、それは、はなはだ苦しいことであつた。ハガルとそのむすこを追い出した父親の心は、言葉で表現できない悲嘆にくれた。

結婚関係の神聖さについてアブラハムに与えられた教訓は、各時代の教訓となるものであつた。それは、どん

な犠牲を払っても、結婚関係の権利と幸福とは慎重に守るべきことを言明している。サラが、アブラハムのただひとりの真の妻であった。妻また母としての彼女の権利は、他の何人も共有する資格がなかった。彼女は、夫を敬ったので、それが新約聖書の中でりっぱな模範としてあげられている。彼女は、アブラハムの愛情が他の女に与えられることを喜ばなかった。主は、彼女が相手の女を追放することを求めたときに、彼女を責められなかった。アブラハムもサラも、神の力を信じなかった。この誤りが、ハガルとの結婚の原因であった。

神は、アブラハムを信仰の父として召されたのであるから、彼の生涯は後世の人々の信仰の模範となるべきであった。しかし、彼の信仰は完全ではなかった。彼はさきに、サラが妻であることを隠し、こんどはハガルと結婚して神への不信を示した。神は、彼が最高の標準に達するために、これまでまだだれも召されたことのないきびしい試練に彼を会わせられた。彼は、夜の幻の中でモリヤの地に行き、そこで示される山の上で、むすこを燔祭としてささげるように命じられた。

アブラハムはこの命令を受けたとき百二十才であった。当時においても、彼は老人とみなされていた。若いころは、彼も強くて、困難に耐え、危険を冒すこともできたが、もう青年の情熱は消えてしまった。年をとり、足が墓によるめいているときには、心をくじかせるような困難や苦難も、壮年の活気に満ちているものならば勇気を出して当面することであろう。しかし、神は、アブラハムに年月の重荷のしかかり、心労と労苦からの休息を願うころになって、最後の最もきびしい試練を彼のためにとっておかれた。

ベエルシバに住んでいたアブラハムは、繁栄と栄誉に囲まれていた。彼は富裕で国の王たちから、力ある王としてあがめられていた。彼の天幕のむこうに広がった平原には、幾千という羊や家畜の群れがいた。至るところ

に、彼の家来たちの天幕や、幾百の忠実なしもべたちの家庭が見えた。約束のむすこが、彼のかたわらで成人したのであった。天は、長く延ばされた希望の実現を忍耐して待った犠牲の生涯を祝福するかのように思われた。

アブラハムは信仰によって服従し、故郷を離れ、父の墓や親族の家庭を離れたのであった。彼は、自分に与えられた土地を、旅人のように放浪した。彼は約束の相続人が生まれるまで長く待った。彼は、神の命令に従ってむすこのイシマエルを送り出した。そして今、長く待望したむすこが成人しようとしていた。そして、アブラハムは、彼の希望が実現するのを見ることができると思ったそのときに、これまでのどれよりも大きな試練が彼に臨んだ。

命令は、父親の胸をしめつけるような言葉で表現された。「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れて……彼を燔祭としてささげなさい」（同・二二ノ二）。イサクは、彼の家庭の光であり、彼の老年の慰めであった。そして、他の何よりもたいせつなことは、彼が、約束された祝福の世継ぎであることであった。こうしたむすこを、事故または病気で失うことは、慈愛深い父親にとって胸のはりさける思いであろう。それは、彼の白髪を悲嘆に暮れさせたことであろう。しかし、自分自身の手で、自分の子の血を流すように彼は命じられた。それは恐ろしい不可能な事のように思われた。

神の律法は、「あなたは殺してはならない」と言っている。そして、神は一度禁じられたことを変えられないから、アブラハムは欺かれているのだと、そばでサタンは言った。アブラハムは天幕の外に出て、雲一つない静かで明るい天を見上げて、彼の子孫が天の星のように数えることができないほどになるという、五〇年近く前の約束を思い出した。もし、この約束が、イサクによって成就するとすれば、どうして彼を殺すことができようか。

アブラハムは、自分が欺かれているのだと思い込もうと試みられた。彼は、疑惑と苦悶のうちに、地に伏してこれまでになかったほどに祈り、この恐ろしい義務を果たさなければならぬかどうかの確証を求めた。アブラハムは、ソドムを滅ぼすという神のみこころを、彼に告げるためにつかわされた天使を思い出した。そして、この同じむすこのイサクの約束を与えたのも天使であった。そこで彼は天使たちに会って指示を迎ぎたいと思って、天使たちと何度か会った場所へ行って見たが、だれも彼を助けに来てはくれなかった。彼は、暗黒に閉ざされたように思われた。そして、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れて」行けという神の命令が、彼の耳に響いた。その命令には服従しなければならなかった。彼は、延ばそうとはしなかった。夜が明けようとしていた。彼は、旅に出なければならなかった。

彼は、天幕にもどつて、イサクが若者らしく無心に熟睡しているところへ行つた。父親は、むすこのいとしい顔をしばらくながめていたが、身震いして離れ去った。彼は、サラのところへ行つたが、サラもよく眠っていた。もう一度むすこを抱かせるために、彼女を起こすべきであろうか。神の要求を彼女に知らせるべきであろうか。彼は、自分の心中を彼女に打ち明けて、この恐ろしい責任を彼女にも共に負ってもらいたいと思った。しかし、彼女は、自分を妨害するかも知れないと恐れて思いとどまった。イサクは、彼女の喜びであり誇りであった。彼女の生命は彼にすっかり結ばれていて、母の愛情から、彼を犠牲にすることを拒むかも知れなかった。

ついに、アブラハムはイサクを起こし、遠く of 山で犠牲をささげる命令のことを話した。イサクは、今までにも、父親の旅したところの道しるべになつていた数多くの祭壇の一つに、礼拝のために父親と出かけたことがしばしばあった。それで、今呼ばれても別に驚かなかつた。旅の準備はすぐ終わった。たきぎが用意されて、ろば

にのせられた。彼らは、ふたりのしもべをつれて出発した。

父とむすこは、肩を並べて黙って旅を続けた。アブラハムは心に重い秘密を抱いて、言葉を出す勇気がなかった。彼は、誇りと慈愛に満ちた母のことを考え、ただひとりで彼女のところへ帰らねばならぬ日のことを思っていた。剣が、彼女のむすこの生命を奪うその時、彼女の心をさしつらぬくことを彼はよく知っていた。

アブラハムの生涯中の最長の日が、やっと暮れかけていた。むすこも若者たちも眠っている間、彼は祈り通した。そして、彼は、天使があらわれ、試練はもうすんだ、イサクを傷つけずに母親のもとに帰してもよいというのを期待していた。しかし、彼の心の苦悩は取り去られなかった。長い日がもう一日続き、その夜も彼は心を低くして祈った。しかし、耳に聞こえるのは、彼のむすこを奪い去る命令であった。サタンは、疑いと不信を耳もとでささやいたが、アブラハムはその声にさからった。彼らが、三日めの旅を始めようとしたとき、アブラハムは、北のほうを見ると、モリヤの山には約束のしるしである栄光の雲がかかっていた。そして、彼は、語りかけた声が天からのものであることを悟った。

それでも、アブラハムは神につぶやかず、主の恵みとまことの証拠を考えて心を強くした。このむすこは、予期しないのに与えられた。尊い賜物を与えたかたは、ご自分の与えたものを取りもどす権を持たれないであろうか。すると信仰は、約束をくりかえす。「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」。彼らは海辺の砂のように無数になる。イサクは奇跡の子であった。であるから、彼に生命を与えたかたは、復活させる力があるのではないか。アブラハムは、目に見えるもののかなたをながめて、「神が死人の中から人をよみがえらせる力がある」と神の言葉を理解した（ヘブル―一ノ一九）。

しかし、むすこを死にわたすという父の犠牲の大きさを理解できるのはただ神だけである。アブラハムは、別れの光景を神以外のだれにも見られなくなかった。彼は、若者たちに残っているように命じ、「わたしとわらべは向こうへ行つて礼拝し、そののち、あなたがたの所に帰ってきます」と言った(創世記二二ノ五)。たきぎは、犠牲となるイサクが背負い、父は、刃物と火を持っていっしょに山頂さして登った。このように、おりと群れから遠く離れたところで犠牲の羊はどこから来るのかと、イサクは心の中で不思議に思った。彼は、ついに、「父よ、…火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」とたずねた。ああ、これはなんとという試練であつたことだろう。「父よ」という愛のこもった言葉が、どんなにアブラハムの心を刺したことであろう。まだ知らせることはできなかった。「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであらう」(同・二二ノ七、八)。

彼らは、定められた場所で祭壇を築き、その上にたきぎを置いた。そして、アブラハムは震える声で天からの言葉をむすこに知らせた。イサクは、自分の運命を知つて恐れ驚いたけれども、さからわなかつた。彼は逃げようつと思えば、彼の運命から逃げることはできた。悲しみに打ちひしがれた老人は、恐ろしい三日間の苦悩に力がつきていて、元気な若者の意志に逆らうことはできなかったことであらう。しかし、イサクは幼いときから、すぐに信賴して服従することを学んでいたから、神のみこころが知らされたとき、彼は喜んで従つた。彼はアブラハムと同じ信仰を持っていたから、自分の生命を神の供え物としてささげる召しを受けたことを名誉に感じた。イサクは、父をいたわり、悲しみを軽くしようと努めた。そして、父の弱々しい手を助けて、綱で自分を祭壇に結びつけるのであつた。

いよいよ最後の愛の言葉が語られ、最後の涙が流され、最後の抱擁が終わった。父は、むすこを殺そうと、刃

物をふり上げた。すると突然、彼の手はとどめられた。神のみ使いが天から彼を、「アブラハムよ、アブラハムよ」と呼んだ。彼は直ちに「はい、ここにあります」と答えた。すると声がふたたび聞こえた。「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」(同・二二ノ一、一二)。

そのとき、アブラハムは、「角をやぶに掛けている一頭の雄羊」を発見し、急いで新しい犠牲を捕え、「その子のかわりに」ささげた。アブラハムは、喜びと感謝にあふれて、その清い場所をアドナイ・エレ(主は備えられる)と新しく名づけた(同・二二ノ一三、一四)。

神は、モリヤの山で、神の契約を繰り返し、厳肅な誓いのもとに、アブラハムと彼の各時代の子孫に祝福を与えることを確証された。「主は言われた。『わたしは自分をさして誓う。あなたがこの事をし、あなたの子、あなたのひとり子をも惜しまなかつたので、わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにする。あなたの子孫は敵の門を打ち取り、また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであらう。あなたがわたしの言葉に従ったからである』」(同・二二ノ一六、一八)。

アブラハムの大きな信仰の行ないは、光の柱のように、その後のすべての時代の神のしもべたちの道を照らしている。アブラハムは、神のみこころを行なうことを免除されるようには求めなかつた。彼は、三日の旅の間いろいろと考え、疑おうと思えば神を疑うこともできた。むすこを殺すことは、彼が殺人者、第二のカインと見なされることになるという理由を考えることもできた。それは、また、人々が彼の教えを拒否し、軽べつする原因になり、そうすることによって、同胞に対して善を行なう力をそこなうとも考えられた。彼は、老齡を理由に服

第 13 章 信仰をためされたアブラハム



彼らは、定められた場所に祭壇を築き、まきをその上に置いた。アブラハムは、ふるえる声で、神のみ言葉をわが子イサクに知らせた。イサクは、神の計画を受け入れた。

従を免れることを求めることができた。しかし、アブラハムは、どのいいわけもしなかった。アブラハムは人間であつた。彼は、われわれと同じ情と愛情の人であつた。しかし、彼は、イサクが殺されたならどのようなようにして約束が成就されるのかをたずねようとしなかった。彼は、自分の心の痛みを考えなかった。彼は、神のすべての要求が公正で義であることを知っていて文字通りにその命令に服従した。

『アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた。』…そして、彼は『神の友』と唱えられたのである。(ヤコブ二ノ二三)。「信仰による者こそアブラハムの子である」とパウロは言っている(ガラテヤ三ノ七)。しかし、アブラハムの信仰は行為にあらわされた。「わたしたちの父祖アブラハムは、その子イサクを祭壇にさげた時、行いによって義とされたのではなかったか。あなたが知っているとおり、彼においては、信仰が行いと共に働き、その行いによって信仰が全うされ」る(ヤコブ二ノ一二、一二二)。信仰と行ないの関係を理解しない人が多い。「ただキリストを信じなさい。そうすれば、あなたは安全です。あなたは、律法を守る必要はありません」と彼らは言う。しかし、真の信仰は服従にあらわされる。キリストは、不信のユダヤ人に、「もしアブラハムの子であるなら、アブラハムのわざをするがよい」と言われた(ヨハネ八ノ三九)。主は、信仰の父について言われた「アブラハムがわたしの言葉にしたがってわたしのさとしと、いましめと、さだめと、おきてとを守ったからである」(創世記二六ノ五)。使徒ヤコブは、「信仰も、それと同様に、行いを伴わなければ、それだけでは死んだものである」と言った(ヤコブ二ノ一七)。そして、愛を深く瞑想したヨハネは、「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである」といっているのである(ヨハネ第一・五ノ三)。

神は、型と約束によって、「アブラハムに…良い知らせを、予告したのである」(ガラテヤ三ノ八)。そして

アブラハムの信仰は、来臨される贖い主に集中された。キリストは、ユダヤ人に言われた。「あなたがたの父アブラハムは、わたしのこの日を見ようとして楽しんでいた。そしてそれを見て喜んだ」(ヨハネ八ノ五六)。イサクのかわりにささげられた雄羊は、われわれの身代わりとして犠牲となられる神のみ子を代表していた。人間が神の律法を破って死ぬべき運命に陥ったとき、父なる神は、み子をながめて、罪人に「生きなさい。わたしは、身代わりを見つけた」と言われた。

神が、アブラハムにその子を殺すように命じられたのは、アブラハムの信仰をためすとともに、彼の心に福音を現実的に強く印象づけるためでもあった。あの恐ろしい試練の暗黒の数日間の苦悩は、人類の贖罪のために払われた無限の神の大犠牲を、アブラハムが自分の体験によって学ぶために神が許されたのである。自分のむすこをささげることほど、アブラハムの心を苦しめた試練はなかった。神は、苦悩と屈辱の死に、み子を渡された。神のみ子の屈辱と魂の苦悩を見た天使たちは、イサクの場合のように、介入することが許されなかった。「もうそれでよい」という声は聞かれなかった。墮落した人類を救うために、栄光の王はご自分の生命をおさげになった。神の無限のあわれみと愛の証拠として、これ以上の強力なものがあるだろうか。「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わないことがあるのか」(ローマ八ノ三二)。

アブラハムに要求された犠牲は、彼自身のためとその後の子孫のためばかりではなく、天と他の諸世界の罪のない者たちの教訓のためでもあった。キリストとサタンとの争闘の場、すなわち、贖罪の計画が行なわれるところは、宇宙の教科書である。アブラハムが神の約束に対する信仰の欠如をあらわしたために、サタンは、天使た

ちと神の前で彼を非難し、契約の条件を破ったので、祝福に値しないと云った。神は全天の前で、神のしもべの忠誠を試み、完全に服従すること以外は何物も受け入れられないことを実証して、彼らの前に救いの計画をさらに明らかに示そうとされた。

天の住民たちは、アブラハムの信仰とイサクの服従が試みられた光景の目撃者であった。試練は、アダムに臨んだものよりはるかにきびしいものであった。アダムに課せられた禁令に従うことには苦痛はなかった。しかし、アブラハムに与えられた命令は、最も苦しい犠牲を要求した。全天は驚嘆と賞賛をもって、アブラハムの断固とした服従を見守った。全天は彼の忠誠に賛嘆の声をあげた。サタンの非難は、偽りであることが示された。神はアブラハムに言われた、「あなたの子、あなたひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることを、〔サタンの非難にもかかわらず〕わたしは今知った」。他の諸世界の住民の前で、誓いをもってアブラハムに約束された神の契約は、服従が報われることを証明した。

天の指揮者、神のみ子が、罪人のために死ぬ必要があるという贖罪の神秘は、天使でさえも理解に苦しんだ。アブラハムに、その子をささげよという命令が与えられたときに、全天の関心がそれに注がれた。彼らは、緊張して、この命令が実行される段階を見守った。「燔祭の小羊はどこにありますか」とイサクがたずねたとき、アブラハムは、「神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」と答えた。父が今にもむすこを殺そうとしたとき、彼の手がとめられて、神が備えられた雄羊がイサクに代わってささげられたときに、贖罪の神秘が明らかに照らし出されて、人類のための神の驚くべき準備が、天使たちにさえ明瞭に理解されたのである（ペテロ第一・一ノ一二参照）。

ソドムの滅亡

本章は、創世記一九章に基づく。

肥沃で美しい「主の園」のような平原にあって、ソドムは、ヨルダンの谷間の町々のなかで、最も美しい町であった。ここには、熱帯植物が繁茂していた。ここは、やし、オリーブ、ぶどうなどの原産地で、花は一年じゅうよい香りを放っていた。畑には豊かな収穫が実り、回りを囲んでいる山や丘には、牛や羊の群れが満ちていた。芸術と商業が、この高慢な平原の町を豊かにしていた。ソドムの宮殿には、東の国の宝物が飾られ、さばくの隊商は、高価な品々を運びこんで市場をにぎわした。ほとんど考えることも働くこともせず、生活のあらゆる必要が満たされ、一年じゅう祭りの連続のようであった。

至るところに物があり余ることは、ぜいたくと高慢の原因になる。必要に迫られたことも、悲しみに打ちひしがれたこともない心は、怠惰と富によってかたくなになる。人々は、富と暇にまかせて、快楽を追求し、肉欲をほしいままにするのであった。「見よ、あなたの妹ソドムの罪はこれである。すなわち彼女と、その娘たちは高ぶり、食物に飽き、安泰に暮れていたが、彼らは、乏しい者と貧しい者を助けなかった。彼らは高ぶり、わたし

の前に憎むべき事をおこなったので、わたしはそれを見た時、彼らを除いた」と預言者は言う（エゼキエル書一六ノ四九、五〇）。富と暇ほど人々のほしがるものはない。ところが、これらが平原の町々を滅亡させた罪のものであった。彼らの無益で怠惰な生活が、サタンのつけねらうところとなり、彼らは、神の形を傷つけ、神よりはサタンに似ていった。怠惰は、人間の陥る最大ののろいであって、非行と犯罪がそれに続くからである。それは頭脳を弱め、知力をゆがめ、魂を墮落させる。サタンは、油断している者を滅ぼそうと待ちかまえている。人間の暇のときは、サタンが、何か魅惑的変装をして巧みに取り入るよい機会である。彼は、人間が何もしないでいるときに近づけば、一番成功するのである。

ソドムでは、歡樂と酒宴、饗宴と飲酒が行なわれた。最も卑劣で残酷な情欲がほしいままに行なわれていた。人々は、公然と神と神の律法にそむき、暴力行為を楽しんでいた。彼らの前には、洪水前の世界の実例もあり、神の怒りによって、彼らが滅ぼされたことを知っていたにもかかわらず、人々は、同じ惡の道をふみ従った。

ロトがソドムに移ったところには、腐敗が全体にひろがってはいなかった。神は、彼らをあわれんで、道德的暗黒のなかに、光が照り輝くことをお許しになった。アブラハムが、捕虜になった人々をエラム人から救い出したときに、人々は真の信仰に目を向けるようになった。アブラハムは、ソドムの住民にとって見知らぬ人ではなかった。彼が見えない神を礼拝することは、人々のちょう笑の的になっていた。しかし、彼が、非常に優勢であった敵軍に勝利をおさめ、捕虜や戦利品に対して寛大な精神をあらわしたことに、人々は驚嘆と賞賛の声を放った。人々は、彼の技量と勇氣をほめちぎったが、彼が勝利者となったのは、神の力によるものであったことを強く感じないものはいなかった。そして、利己的なソドムの住民とは遠くかけはなれた彼の高潔、無我の精神は、彼が

第 14 章 ソドムの滅亡



ソドムの門にふたりの旅人が近づいたのを見たロトは、礼を尽くして、彼らを自分の家に招待した。彼らは、ためらったが、ロトは、しいて彼らを招き入れた。

勇氣と忠誠をもって尊んだ宗教の優越性を示す、もう一つの証拠であつた。

アブラハムのために祝福を祈つたメルキゼデクも、主こそ彼の力の源であり、勝利をお与えになったかたであることを認めた。「願わくは天地の主なるいと高き神が、アブラムを祝福されるように。願わくはあなたの敵をあなたの手に渡されたいと高き神があがめられるように」(創世記一四ノ一九、二〇)。神は摂理によつて人々に語つておられたが、これまでのすべての光と同じように最後の光も拒否されてしまった。

今や、ソドムの最後の夜が近づいていた。神の怒りの雲は、すでに、この運命の町に影を投げていた。しかし人々はそれに気づかなかつた。天使たちが、破壊の任務を帯びて近づいたときも、人々は繁栄と快樂を夢みていた。最後の日は、これまで明けて暮れたどの日とも同じであつた。美しい平和な情景に夕やみが迫つた。たとえばようもなく美しい風景は、沈む太陽の光を浴びていた。町の人々は、夜の冷氣にさそわれて出てきた。快樂追求者たちの群れは、その夜の楽しみを求めてあちこちに行きかつた。

夕方、ふたりの旅人が町の門に近づいた。みたところ、彼らは一晩の宿を借りようとしてやってきた旅人のようであつた。この質素な旅人が、神の刑罰をもたらず力ある使者であるとはだれも気づかなかつた。そして、その晩、この天使たちをどのように扱うかによつて、彼らの罪が頂点に達し、その高慢な町を滅亡させようとは、輕薄で不注意な群衆は考えもしなかつた。しかし、ここに旅人を親切にもてなし、自分の家に招いた人がいた。ロトは、彼らがどのような人々であるかは知らなかつたが、ていねいに人をもてなすことは彼の習慣であつた。それは、彼がアブラハムの模範から学んだ教訓であつて、彼の宗教の一部であつた。もしも彼が、礼儀正しい精神を養つていながつたならば、彼はソドムの他の者たちとともに滅びてしまったことであろう。多くの家庭は、

旅人に戸を閉ざして、祝福と希望と平和をもたらす神の使者をしめ出している。

人生の行為は、それがどんなに小さいものであっても、みなよいことか、悪いことにかかわりがある。一見、最小と思われる義務を忠実に果たすか、怠るかによって、人生の最大の祝福か、最大の不幸かへの門を開くことになる。品性をためすのは、小事である。神が喜ばれるのは、快く進んで行なう日常のごく自然な自己否定の行為である。われわれは自己のためでなく、他の人々のために生きなければならない。自分を忘れ、人を助けるやさしい精神を心にいだいてこそはじめて、自分たちの人生を祝福とすることができ。ちょっとした心づかいや小さい飾りけのない思いやりの行為が、人生の幸福を構成する大きな部分を占めている。そして、これらをおろそかにすることが、人生を少なからず悲惨なものにしている。

ロトは、旅人がソドムで乱暴されそうなのを見て、彼らがいってきたときに、彼らを自宅に招いて保護することが自分の義務だと思った。彼は、旅人が近づいたとき、門にすわっていたが、彼らを見て、立ち上がって出迎え、ていねいに礼をしていった。「わが主よ、どうぞしもべの家に立寄って足を洗い、お泊まりください」。彼らは、彼のもてなしを辞退するかのように言った。「いや、われわれは広場で夜を過ごします」(同・一九ノ二)。この答えには二重の目的があった。すなわち、ロトの誠実をためすためと、ソドムの人々の性質を知らず、夜、広場で過ごしても安全だと思ったようにみせかけるためであった。ロトは、この答えを聞いて、なおさら、旅人を暴徒のなすがままにほっておけぬと決心した。彼は、しきりに彼らを招いて納得させ、自分の家に連れてきた。彼は、旅人を遠回りの道を通って自宅に案内し、門前の無精者たちに、彼の気持ちさをさとられないようにしようとした。しかし、彼らのためらいと遅延とロトの熱心な勧誘は人目につき、夜彼らが床につく前に、暴徒が家

のまわりに集まった。それは、おびただしい数で、若者も老人も激しい怒りに燃えていた。旅人は、町の特徴について質問していた。そして、ロトが夜、戸外に出ることは危険であることを警告していた。すると、暴徒たちが、彼らを外に出すように要求して、ののしり、叫ぶ声が聞こえた。

ロトは、もし彼らが乱暴をはたらくと、家にはたやすく侵入することができるので、彼らを説得するために外へ出た。「兄弟たちよ、どうか悪い事はしないでください」と言った(同・一九〇七)。彼は、この「兄弟たち」という言葉を隣人の意味に用い、彼らをなだめてその悪い計画を恥じ入らせようとした。しかし、彼の言葉は、火に油を注ぐようなものであった。彼らの怒りはあらしのほえる音のようであった。彼らは、ロトが裁判官気どりでいるとちよう笑し、旅人にしようとしていたことよりはもっとひどい扱いを彼に加えると脅迫した。彼らは、ロトに飛びかかってきた。もしも神の使いが救わなかったならば、ロトは八つ裂きにされていたことであろう。天使が「手を伸べてロトを家の内に引き入れ、戸を閉じた」。次のできごとが、ロトのもてなした客の性質を明らかに示した。「そして家の入口におる人々を、老若の別なく打って目をくらましたので、彼らは入口を捜すのに疲れた」(同・一九〇一)。もしも、彼らが心をかたくなにして、肉の目も心の目ともに盲目にされていなかったならば、神にこうして打たれたときに、恐れをいだき、悪行を思いとどまったことであろう。あの最後の晩は、その前の多くの夜よりも大きな罪が行なわれたものではなかった。しかし、このように長く軽んじられた恵みは、ついに訴えることをやめてしまった。ソドムの住民は、神の忍耐の限界 「神の忍耐と神の怒りの隠れた境界」を越えてしまった。神の報復の火が、シデムの谷に点じられようとしていた。

天使は、自分たちの任務の目的をロトに伝えた。「われわれがこの所を滅ぼそうとしているからです。人々の

叫びが主の前に大きくなり、主はこの所を滅ぼすために、われわれをつかわされたのです」(同・一九ノ二三)。
ロトが保護しようとした旅人たちが、今度は彼を守ると約束した。そして、彼と共に悪い町からのがれたいと思う彼の家族をもすべて救うと約束した。群衆は、騒ぎつかれて去った。ロトは、子供たちを警告するために出かけた。彼は、「立つてこの所から出なさい。主がこの町を滅ぼされます」(同・一九ノ一四)という天使たちの言葉をくりかえした。しかし、ロトの言っていることは彼らに冗談のように思われた。彼らは、それを、迷信的恐怖だといってあざ笑った。彼の娘たちは、その夫たちに感化された。彼らは、そこで、結構よい暮らしをしていた。彼らは、危険が迫っている証拠を見ることができなかった。すべてのものは、それまで通りであった。彼らは資産を多く持っていた。そして、美しいソドムが滅ぼされるとはどうい信じられなかった。

ロトは悲しんで家に帰り、説き伏せに失敗したことを語った。すると天使は、ロトに、立ち上がって、妻と家に残っていたふたりの娘を連れて町を出るように命じた。しかし、ロトはぐずぐずしていた。彼は人々の乱暴な行為を見て、日ごとに心を痛めていた。しかし、あの墮落した都会で行なわれていた腐敗した憎むべき罪惡の真相をつかんでいなかった。罪惡を止めるために、おそるべき神の刑罰が必要であることを彼は悟らなかった。ソドムには、彼の子供たちがまだ離れきれずに残っていた。彼の妻は、その子供たちを連れずに去ることを承知しなかった。地上で最も愛する者たちを置いていくことは耐えがたい苦痛であった。ぜいたくな家と、一生働いて得たすべての財産を捨てて、無一文の放浪者になることはつらいことであった。ロトは悲しさのあまりぼうぜんとしてしまい、行くに行かれずぐずぐずしていた。神の天使がいなかったならば、彼らはみな、ソドムの滅亡とともに死んでしまったことであろう。天からの使者たちは、ロトと彼の妻と娘たちの手を取って、彼らを町の外

に連れ出した。

ここで、天使たちは彼らを離れ、破壊の任務を果たすべくソドムにもどった。前にアブラハムが嘆願したことのあるもうひとりのかたが口トに近づかれた。平原のすべての町々のなかに、十人の義人さえ見つからなかった。しかし、アブラハムの祈りにこたえて、神を敬うひとりの人が滅亡から救い出された。「のがれて、自分の命を救いなさい。うしろをふりかえって見てはならない。低地にはどこにも立ち止まってはならない。山にのがれなさい。そうしなければ、あなたは滅びます」と、驚くべき激しさで命令が与えられた(同・一九ノ一七)。このとき、ためらったりおくれたりすれば命があぶなかった。運命の町を末練がましく見たり、美しい家を離れがたくて一瞬でもたたずんでいたりすることは、生命を危険にさらすことであつた。神の刑罰のあらしは、これらの哀れな脱出者たちが避難しおわるのを待つだけであつた。

ところが、うろたえ恐れた口トは、何か不幸なできごとが起こつて死んでしまふといけないから、命令に従うことができないと嘆願した。罪惡の町に住み、不信のただ中にいたために、彼の信仰は消えかけていた。天の君がそばにおられたのである。それなのに、彼のためにこれほどまでの保護と愛をあらわされた神が、もうお守りにならないかのように、彼は自分の命が助かることを願つた。彼は、自分自身を全く天の使者にゆだね、疑うことも、問い返すこともせず、主のみ手に意志と生命とをささげるべきであつた。しかし、多くの他の人と同様に、彼は、自分で計画をたてようとした。「あの町をこらんなさい。逃げていくのに近く、また小さい町です。どうかわたしをそこにのがれさせてください。それは小さいではありませんか。そうすればわたしの命は助かるでしょう」(同・一九ノ二〇)。ここで言われている町はベラで、後にゾアルと呼ばれた。それは、ソドムから数マイ

ルの所にあつて、ソドム同様に墮落して滅亡の運命にあつた。しかし、ロトは自分の小さい願いを聞いて、町を助けてほしいと願つた。彼の希望はいれられた。「わたしはこの事でもあなたの願いをいれて、あなたの言うその町は滅ぼしません」と主は約束された(同・一九ノ一二)。罪深い人間に対して、神の恵みは、なんと大きいことであらう。

火のあらしは、あとわずかしかな延ばせないから急ぐようにという厳肅な命令がふたたび与えられた。しかし、避難者のひとりが、ふり向いて滅びの町を見たために、神の刑罰の記念碑になつた。もし、ロトが、ためらうことなく天使の警告に従い、嘆願や抗議をしないでけんめいに山地をさして逃げていたならば、彼の妻ものがれたことであらう。ロトは、彼自身の模範によつて、彼女を罪と滅びから救うことができたのであつた。しかし、彼のためらいと遅延が、彼女に神の警告を軽視させた。彼女のからだは平原に来ていたが、彼女の心はソドムに執着していて、それとともに滅びた。彼女は、持ち物や子供たちまでが神の刑罰にのまれてしまうので、神に反逆の精神をいだいた。彼女は罪惡の町から救い出されて大きな恵みをこうむつたが、長年かかつて蓄積した富を、そのまま残して灰にしなければならぬことを、きびしい取り扱いだと感じた。彼女は、救いを感じて受けるかわりに、神の警告を拒んだ人々の生活をしたつて、あえて後ろを振り向いた。彼女の罪は、彼女が生きる価値を持つていないことを示した。彼女は、助けられていることになんの感謝もあらわさなかつた。

われわれは、神がわれわれを救うために、恵み深くもとられる方法を軽々しく扱わないように注意すべきである。「わたしの配偶者や子供がいっしょでなければ、わたしは救われたくない」というクリスチャンがある。彼らは、愛する者たちがいなければ、天国は、天国でないと感じる。しかし、神の大いなる恵みとあわれみを考え

ると、こういう感情の人は自分自身と神との関係について、正しい観念をもっているといえようか。彼らは、愛と誉れと忠誠という最も強いきずなによつて、創造主とあがない主の奉仕に結ばれていることを忘れたのであるうか。あわれみの招きは、すべてに与えられた。そして、友人が救い主の愛の訴えを拒むからといって、われわれも顔をそむけるのであるうか。魂の贖罪は尊いことである。キリストは、われわれの救いのために無限の代価を払われた。そして、この大犠牲の価値、また魂の価値を認めるものは、他の人々があなどるからといって、神の恵みの申し出を軽んじないのである。他の人々が神の正当な要求を無視すればこそ、われわれはさらに努力して、神に栄光を歸し、感化し得るすべての人が神の愛を受け入れるようにすべきである。

「ロトがゾアルに着いた時、日は地の上にのぼった」(同・一九ノ二三)。朝の輝かしい光は、平原の町々に繁栄と平和だけを告げているように思われた。町の通りでは、活発な生活のざわめきが始まった。人々はその日の仕事に、また、快樂にあちこちと動き始めていた。ロトの義理のむすこたちは、気の弱い老人の恐怖と警告をあざ笑っていた。すると、突然、青天のへきれきのように不意にあらしが起こった。主は、天から硫黄と火とを、町や豊かな平野に降らされた。王宮と神殿、ぜいたくな邸宅、庭園、果樹園、そしてつい前夜、天の使いを侮辱し、快樂を求めて陽気にさわいでいた群衆のすべてが焼き尽くされた。大火の煙は、大きな炉の煙のように上った。こうして美しいシデムの谷は、建てる者も住む者もない廃虚と化し、神は、必ず罪を罰せられることをすべての時代にあかししている。

平原の町々を焼き尽くした炎は、われわれの時代にまで警告の光を投げている。神は、罪人をあわれみ、長く忍ばれる。しかし、人間はある定められたところ以上に罪を犯し続けることはできないという恐ろしく厳肅な教

訓が教えられた。その限界に達するとき、あわれみの招きは取り去られて、刑罰のわざが始まる。

世の贖い主は、ソドム、ゴモラを滅ぼした罪よりもっと大きな罪があると言われた。罪人に悔い改めを促す福音の招待を聞きながら、それを心にとめないものは、シデムの谷間の住民以上に神の前に罪深いのである。そして、神を知り、その律法を守っていると公言しながら、その品性や日常生活において、キリストを拒む者の罪はさらに大きい。ソドムの運命は、公然と罪を犯す人だけでなく、天からの光と特権を軽んじるすべての人々に対する厳粛な訓戒であると救い主は警告された。

真の証人は、エペソにある教会に言われた。「しかし、あなたに対して責むべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。そこで、あなたはどこから落ちたかを思い起し、悔い改めて初めのわざを行いなさい。もし、そうしないで悔い改めなければ、わたしはあなたのところにきて、あなたの燭台をその場所から取りのけよう」(黙示録二ノ四、五)。救い主は、世の親が、気ままな生活をして苦しむむすこを許そうとする情け以上のやさしいあわれみをもって、愛と許しを提供して、その応答を待たれる。彼はさまよう者らに、「わたしに帰れ、わたしはあなたがたに帰ろう」と叫ばれる(マラキ書三ノ七)。しかし、罪人が、あわれみ深く、やさしく呼びかける愛の声にいつまでも従わないならば、ついに暗黒のなかに取り残される。神の恵みを長く軽んじた心は、罪になれて、もはや神の恵みの力に感じなくなる。とりなされる救い主が、ついに、彼は「偶像に結びつらなった。そのなすにまかせよ」と宣言される魂の運命は、まことに恐ろしい(ホセア書四ノ一七)。審判の日には、キリストの愛を知りながら、罪の世の快樂を選んで離れていった者よりは、平原の町々のほうが耐えやすいことである。

恵みの申し出を軽んじる人は、天の帳簿に負債として記入された大きな数字を考えてみるがよい。そこには、国家、家族、個人の不信の記録がある。神は、それらの記録が続くかぎり、忍耐して、悔い改めをうながし、許しをお与えになる。しかし、記録が満ちるときがくる。そのとき、魂の決定は下され、人間は、自分の選択によって自分の運命を決定する。こうして、刑罰執行の合い図がくだされる。

今日、宗教界は憂うべき状態にある。神の恵みは軽んじられた。多くの者は、神の律法を廃し、「人間のいましめを教として教え」ている(マタイ一五ノ九)。わが国の多くの教会に、無神論が流行している。それは、聖書を公然と否認する広義の無神論ではなくて、キリスト教の衣をまとった無神論で、聖書が神の啓示であるという信仰をくつがえしている。熱烈な献身と生氣にあふれた敬神の念は、空虚な形式主義に所を譲った。その結果、背信と快樂主義がはびこった。「ロトの時にも同じようなことが起った。…人の子が現れる日も、ちょうどそれと同様であろう」とキリストは言われた(ルカ一七ノ二八、三〇)。日ごとの記事は、このみ言葉の成就を証拠立てている。世界は、急速に滅亡にひんしていた。間もなく、神の刑罰が下り罪と罪人とは焼き尽くされなければならない。

「あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい。その日は地の全面に住むすべての人に臨むのであるから」(この世に心を奪われているすべての者に)「すべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていないさい」(ルカ二一ノ三四 三六)。

ソドムの滅亡に先だって、神はロトに言われた。「のがれて、自分の命を救いなさい。うしろをふりかえって

見てはならない。低地にはどこにも立ち止まってはならない。山にのがれなさい。そうしなければ、あなたは滅びます」（創世記一九ノ一七）。エルサレムが滅亡する前にも、キリストの弟子たちは、この同じ警告の声を耳にした。「エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、…そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ」（ルカ二一ノ二〇、二一）。彼らは、財産を少しでも持っていくために止まってはならなかった。彼らはそれを脱出の絶好機としなければならなかった。

それは、罪人から断固として離れて、命がけで出て来ることであつた。ノアの時も、ロトの時も同じであつた。エルサレムの滅亡前の弟子たちも同じであつた。そして、最後の時代にも同様である。人々の間にはびこっている罪惡から離れることを神の民に命じる神の警告の聲が、ふたたび聞こえるのである。

最終時代に、宗教界に見られる腐敗と背信とは、「地の王たちを支配する大いなる都」バビロンという幻によつて、預言者ヨハネに示された（黙示録一七ノ一八）。滅亡に先だつて、「わたしの民よ。彼女から離れ去つて、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ」という招声が天から発せられる（同・一八ノ四）。ノアやロトの時代と同様に、罪と罪人から、はっきり分離しなければならない。神と世との妥協はあり得ない。地上の宝を得るために引き返すことはできない。「あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」（マタイ六ノ二四）。

シデムの谷の住民のように、人々は、繁栄と平和を夢みている。神のみ使いは、「のがれて、自分の命を救いなさい」と警告する。しかし、別の声は「あわてることではない。心配することはない」という。天は、すみやかな滅亡が犯罪者に臨むと宣言しているのに、人々は「平和だ、無事だ」と叫ぶ。平原の町々は、滅亡の前夜、快

楽にふけり、神の使者の恐怖と警告をちよう笑した。しかし、こうしてあざけた者らは炎のなかで死んだ。恵みの戸は、あの晩、ソドムの邪悪で軽率な住民に対して永遠に閉ざされた。神を常に侮ることはできない。また神をいつまでも軽んじることはできない。「見よ、主の日が来る。残忍で、憤りと激しい怒りをもつてこの地を荒し、その中から罪びとを断ち滅ぼすために来る」（イザヤ書一三ノ九）。世の大多数の人々は、神の恵みを拒んで、急速に迫つて避けることのできない滅亡にのまれてしまつてあろう。しかし、警告に聞き従つたものは、「いと高き者のもとにある隠れ場」に住み、「全能者の陰にやどる。」「そのまことは大盾、また小盾である。」「わたしは長寿をもつて彼を満ち足らせ、わが救を彼に示すであらう」との約束が彼らに与えられている（詩篇九一ノ一、四、一六）。

ロトは、ゾアルに短期間しか住まなかつた。ゾアルもソドムと同じように、罪悪が満ちたので、ロトは町が滅ぼされるといけないと思つて留まることを恐れた。しばらくしてゾアルも、神のご計画のもとに滅ぼされた。ロトは山にはいり、洞穴に住んだ。彼は、家族を罪悪の町の感化にさらして、手に入れたすべての物を失つてしまつた。しかし、ソドムののろいはここまで追つてきた。彼の娘たちの罪深い行為は、罪悪の町の有害な交わりの結果であつた。ソドムの道徳的腐敗は、彼女たちの品性に織り込まれていて、善悪を区別することができなくなつていた。ロトの唯一の子孫であるモアブ人とアンモン人は、不道德な偶像礼拝者の種族であつて、神に対する反抗者であり、神の民の恨み重なる敵だつた。

ロトの生涯は、アブラハムの生涯と比較して、なんと著しく異なつていたことであらうか。彼らは、昔は仲間どうしで、一つの祭壇で礼拝をし、旅人の天幕に隣り合わせに住んでいた。しかし、今はなんと遠く離れたこと

であろう。ロトは、快楽と利益を求めてソドムを選んだ。ロトは、アブラハムの祭壇と生きた神への日ごとの犠牲とを捨てて、彼の子供たちが腐敗した偶像教徒と交わることを許した。しかし、彼は、心のなかで神を敬っていた。聖書には、ロトが「正しい人」であったとしるされている。彼の正しい魂は、毎日耳にする汚れた会話や、彼の力ではどうにもならない暴力と犯罪に心を痛めていた。彼はついに、「火の中から取り出した燃えさし」のように救われた（ゼカリヤ書三ノ二）。しかし、彼は、持ち物を失い、妻子をなくし、野獣のようにほら穴に住み不名誉な晩年を送った。そして彼は、義人の民族でなくて、神に反逆し、神の民と戦う二つの偶像教国を世に送った。彼らは、罪の杯を満たして滅ぼされてしまった。愚かな道を歩むものの結果は、なんと恐ろしいことである。

「富を得ようと苦勞してはならない、かしこく思いとどまるがよい。」「不正な利をむさぼる者はその家を煩わせる」と賢者は言っている（箴言二三ノ四、一五ノ二七）。「富むことを願い求める者は、誘惑と、わなとに陥り、また、人を滅びと破壊とに沈ませる、無分別な恐ろしいさまざまの情欲に陥るのである」と使徒パウロは言っている（テモテ第一・六ノ九）。

ロトはソドムに移ったとき、自分を罪惡から守り、家族を自分に従わせる堅い決心であった。しかし、彼は、明らかに失敗した。周囲の腐敗的勢力は、彼自身の信仰に影響を及ぼした。そして彼の子供たちがソドムの住民と結ばれたために、彼もいくぶんか彼らと利害をもにすることになった。その結果は、われわれの知るとおりである。

今日も同様のまちがいをくりかえす者が多い。彼らは住宅を選ぶ場合に、彼らと家族をとりまく道德的、社会

的影響よりは、物質的利益のほうを重くみる。彼らは、美しく肥沃な土地を選ぶ。または、もっと繁栄を確保することを望んで、繁華な都市に移転する。しかし、子供たちは誘惑にかこまれる。そして、彼らは敬虔の念を養い、正しい品性を形成するには不利な友人を持つ場合が多い。低い道德観念、不信仰、宗教に関する無関心などのふんい気は、親の感化を中和させる傾向がある。親や神の權威に対する反抗の実例は、常に青年たちの前にある。多くの者は、無神論者や未信者と親しくなり、神の敵と運命をとにする。

神はわれわれが住宅を選ぶとき、自分たちと家族をとりまく、道德的、宗教的感化を、まず考慮することを望まれる。希望する環境を持つことができない者が多いから、われわれは苦しい立場に立たされる。もし、われわれが、キリストの恵みにたより、目をさまして祈っているならば、どのような所に召されても、神は、われわれを汚れに染むことなく立たせてくださるのである。しかし、クリスチャン品性の形成に不利な環境に、わざわざ身をさらしてはならない。われわれが進んで世俗と不信仰のふんい気のなかにはいれば、神の不興を招き、家庭から聖天使を追い出す。

子供たちの永遠の幸福を犠牲にして、世の富と名誉を彼らに与えようとする者は、ついに、これらの利益が恐ろしい損失であることに気づくのである。多くの者は、ロトのように、子供たちを失い、自分の魂を救うことがせいっぱいであつたことを知るであろう。彼らの生涯の事業は失われ、彼らの一生は悲しい失敗である。もしも彼らが真の知恵を働かせていたならば、世的財産は少なくても、永遠の嗣業の獲得権を確保したことであろう。神がその民に約束された嗣業は、この世のものではない。アブラハムは、地上で何も持たず、「遺産となるものは何一つ、一步の幅の土地すらも、与えられなかった」(使徒行伝七ノ五)。彼は、大きな財産を持っていたが

彼はそれを、神の栄光と同胞の幸福のために用いた。しかし、彼は、この世を自分の故郷と思わなかった。主は永遠の所有として、カナンの国を与えることを約束して、偶像礼拝者の親族から離れることを彼に命じられた。しかし、彼も、彼の子も、孫も約束の地を受けなかった。アブラハムは、死者を埋葬する地がほしかったとき、カナン人から買わなければならなかった。約束の地の彼の唯一の所有は、マクペラのほら穴の岩にほられた墓だけであった。

しかし、神の言葉にまちがいはなかった。ユダヤ人のカナン占領も、この約束の最後の成就ではなかった。「約束は、アブラハムと彼の子孫とに対してなされたのである」(ガラテヤ三ノ一六)。アブラハム自身、嗣業相続にあずかるはずであった。神の約束の成就是、長く延びるように思われることであらう。「主にあつては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」(ペテロ第二・三ノ八)。おくられているように見えても、定まった時が来れば、「それは必ず臨む。滞りはしない」(ハバクク書二ノ三)。アブラハムと彼の子孫への賜物は、カナンの地だけでなく、地球全体を含むものであった。「なぜなら、世界を相続させるとの約束が、アブラハムとその子孫とに対してなされたのは、律法によるのではなく、信仰の義によるからである」と使徒は言っている(ローマ四ノ一三)。アブラハムに対してなされた約束は、キリストによって成就されることを、聖書は明らかにしている。キリストにある者はみな、「アブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである」。すなわち、罪ののろいの取り去られた地の「朽ちず汚れず、しほむことのない資産を受け継ぐ」相続人である(ガラテヤ三ノ二九、ペテロ第一・一ノ四)。「国と主権と全天下の国々の権威とは、いと高き者の聖徒たる民に与えられる。」「柔和な者は国を継ぎ、豊かな繁栄をたのしむことができる」(ダニエル書七ノ二七、詩篇三七ノ一一)。

神は、この永遠の嗣業の光景をアブラハムに見せられた。彼は、この希望をいだいて満足した。「信仰によって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいたのである。その都をもくろみ、また建てたのは、神である」(ヘブル一ノ九、一〇)。

アブラハムの子孫について、次のように書かれている。「これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした」(同・一一ノ一三)。われわれも「もっと良い、天にあるふるさと」を獲得しようと思ふならば、この地上で旅人、また寄留者の生活をしなければならない(同・一一ノ一六)。アブラハムの子孫は、彼が待ち望んだ、神が「もくろみ、また建てた」都を求めるのである。

イサクの結婚

本章は、創世記二四章に基づく。

アブラハムは老人になった。そして、自分の死ぬときが近づいたのを知った。しかし彼は、子孫に与えられた約束を確保するために、しなければならぬ行為が、まだ一つ残っていた。イサクは、神の律法の保管者、選民の父として、アブラハムの後継者に任じられてはいたが、まだ、結婚していなかった。カナンの住民は、偶像礼拝を行っていたので、神は、神の民と偶像礼拝者との雑婚を禁じておられた。神は、こうした結婚が背教の原因になるのを知っておられた。アブラハムは、彼のむすこの周囲にある腐敗的感化の影響を恐れた。アブラハムの、いつもながらの神への信仰と神のみこころへの服従は、イサクの品性に反映されていた。しかし、イサクは愛情が強く、柔和で、人に譲歩する性質もあった。もし彼が神をおそれない人と結ばれるとすれば、一致を保つために原則を犠牲にするという危険があった。アブラハムにとって、むすこに妻をめとることは重大なことであった。アブラハムは、彼を神から引き離すことをしない人と結婚させたいと心から願っていた。

昔、結婚の約束は、たいてい親たちが取りきめた。そして、これは神を礼拝する民の間の習慣でもあった。だ

れも愛することができない人との結婚をしいられたのではなかった。しかし、青年が自分たちの愛情を注ぐにあたって、経験があつて、神を恐れる親たちの判断に従つた。これに反した道をとることは、親に対する不敬、いや犯罪とすらみなされた。

イサクは、父の知恵と愛情に信頼して、この問題を父にまかせて満足し、神ご自身がその選択を導かれることをも信じていた。父は、メソポタミヤの地にいる彼の親戚のことを考えていた。彼らは、偶像礼拝から全く離れたとは言えないが、真の神を知り、礼拝していた。イサクがカナンを去つて、彼らのところへ行つてはならなかった。しかし、彼らのなかから、自分の家を離れて彼と一つになり、生きた神の清い礼拝を維持するものが見つかるだろうと思われたのである。アブラハムは、この重大なことを彼の「年長のしもべ」に託した。彼は、神を敬い、経験豊かで正しい判断の持ち主で、長く忠実にアブラハムに仕えた人であつた。彼は、そのしもべに、カナンのなかからイサクのために妻を迎えず、メソポタミヤのナホルの家族の娘を選ぶことを、主の前で厳粛に誓うことを要求した。彼はイサクを連れて行つてはならないと命じた。もし自分の親族を離れてくる娘を見いだすことができないならば、使者はその誓約から解かれるのであつた。この困難でやりにくい仕事をするにあたつて、アブラハムは彼を励まし、神がその任務を成功させてくださることを保証した。「天の神、主はわたしを父の家、親族の地から導き出して……主は、み使をあなたの前につかわされるであらう」と彼は言った(創世記二四ノ七)。

しもべは、直ちに出發した。彼は、自分の一行と、連れて帰ってくる花嫁の一行のために十頭のらくだを引いて行つた。しもべはまた、迎える妻とその友人たちのための贈り物をたずさえて、ダマスコの向こうまでの長旅

に立ち、東の国の大河に接する肥沃な平原へと進んだ。彼は、「ナホルの町」ハランに到着して、城壁の外の井戸のそばに止まった。ここは、その女たちが夕方、水をくみに来るところであつた。これは、彼にとってどうすればよいか深く考えなければならない時であつた。彼の主人の家族だけでなく、将来の幾代にもおよぶ重大な結果が、彼の選択にかかつていた。彼は、全く知らない人々ばかりの間で、どのような賢明な選択をすることができようか。神は必ず天使を送られるというアブラハムの言葉を思い起こして、彼は、熱心に明確な指導が与えられることを祈つた。彼は、主人の家庭でいつも親切と手厚いもてなしが行なわれているのをよく知っていたので、ここで、親切な行為が神のお選びになつた娘のしるしでありますようにと祈つた。

その祈りが終わるか終わらないうちに、こたえが与えられた。井戸のまわりに集まつた女たちのなかで、礼儀正しいひとりの娘が彼の注意をひいた。彼女が井戸からもどつて来たときに、旅人は、彼女に近づいて、肩にのせた水がめの水を少しくださいと頼んだ。彼女は快くその願いをきき入れ、らくだにも水を飲ませようと申し出た。これは、そのころ、身分の高い人の娘でも、父の家畜や群れのために行なう仕事であつた。こうして、願つたとおりのしるしが与えられた。娘は「非常に美し」かつた。そして、彼女の積極的親切心は、優しい心と活発で活動的性格をあらわしていた。こうして、しもべは、ここまで神の手に導かれたのである。しもべは娘の親切に対して、高価な贈り物をしたあとで、彼女がだれの娘であるかをたずねた。そしてしもべは、彼女がアブラハムのおいのペトエルの娘であることを知ると、「頭を下げ、主を拝し」た。

その人は、彼女の父の家でもてなしを受けることを願つた。そして、彼は、その感謝の言葉のなかで、アブラハムと自分との関係を明らかにした。娘は、家に帰り、事の次第を話した。すると、彼女の兄のラバンは、旅人

とその連れの人々をもてなすために、直ちに迎えに出た。

エリエゼルは、自分の任務と井戸での祈りなどの事情のいっさいを話すまでは、食事をしようとしなかった。それから、彼は言った。「あなたがたが、もしわたしの主人にいつくしみと、まことを尽そうと思われるなら、そうとわたしにお話してください。そうでなければ、そうでないとお話してください。それによってわたしは右か左に決めましょう」(同・二四ノ四九)。そこで彼らは答えた。「この事は主から出たことですから、わたしどもはあなたによしあしを言うことができません。リベカがここにおりますから連れて行って、主が言われたように、あなたの主人の子の妻にしてください」(同・二四ノ五〇、五一)。

家族は同意したが、リベカ自身、父の家を離れてそんな遠方へ行き、アブラハムのむすこの妻になる気があるかどうか聞いてみるようになった。彼女は、事のなりゆきから、神が自分をイサクの妻に選ばれたことを信じた。そして彼女は、「行きます」と言った。

しもべは、自分の任務が成功したことを主人がどんなに喜んでくれるかと思つて、早く出発したいと思つた。そして、彼らは翌朝帰途についた。アブラハムはベエルシバに住み、イサクはその隣の地方で羊の世話をしていたが、ハランからの使いの者の到着を迎えようとして、父の天幕に帰って来ていた。「イサクは夕暮、野に出て歩いてしたが、目をあげて、らくだの来るのを見た。リベカは目をあげてイサクを見、らくだからおりて、しもべに言った、『わたしたちに向かつて、野を歩いて来るあの人はだれでしょう』。しもべは言った、『あれはわたしの主人です』。するとリベカは、被衣で身をおおった。しもべは自分がしたことのすべてをイサクに話した。イサクはリベカを天幕に連れて行き、リベカをめとつて妻とし、彼女を愛した。こうしてイサクは母の死後、慰め

を得た」(同・二四ノ六三 六七)。

アブラハムは、カインの時代から彼の時代までの、神を恐れる者と恐れない者との結婚がどんな結果に終わるかをよく知っていた。彼自身とハガルとの結婚の結果、また、イシマエルやロトの結婚関係の結果を、彼は目の前に見ていた。アブラハムとサラの信仰が欠けていたために、イシマエルが生まれ、義人の種族が神を敬わない者と混じった。父の子に及ぼす影響は、偶像礼拝者である母親の側の親族と、イシマエルがめとった異邦の妻たちによってその力をそがれた。ハガルのしつと、そして彼女がイシマエルのために選んだ妻たちのしつとは、アブラハムの家庭を防壁のように取り巻き、彼がどんなに努力しても取り去ることはできなかった。

アブラハムの初期の訓育は、イシマエルに効果がなかったわけではない。しかし、彼の妻たちの影響によって彼の家庭で偶像礼拝が根をおろした。彼は、父親から離れて、神に対する愛も恐れもない家庭の争闘と競争に憤激して、「その手はすべての人に逆らい、すべての人の手は彼に逆ら」うという、粗暴で略奪を事とするさばくの酋長の生活にはいつてしまったのである(同・一六ノ一二)。イシマエルは、晩年に、その悪行を悔いて、彼の父の家に帰った。しかし、彼が子孫に与えた品性の特徴は消えなかった。彼の子孫は強大な国民となったが、それは、粗暴な異邦の民族で、常にイサクの子孫を悩まし苦しめるものとなった。

ロトの妻は利己的で、宗教心のない女であった。そして、彼女は、自分の夫をアブラハムから離れさせようとした。ロトは、彼女さえ望まなければ、賢明で神を恐れるアブラハムの勧告も聞けないソドムにとどまっていたくなかった。もし、彼が、初期に、アブラハムから忠実に教え込まれていなかったならば、彼の妻の感化と罪惡の町の交友とによって、神から離れていたことであろう。ロトの結婚とソドムに住宅を選んだことは、その後、

数世代にわたってこの世界に起こった一連の不幸なできごとの出発点となった。

神を恐れる者が、神を恐れない者と結合すれば必ず危険が伴う。「ふたりの者がもし約束しなかったなら、一緒に歩くだろうか」(アモス書三ノ三)。結婚関係の幸福と繁栄は、ふたりの和合にかかっている。しかし、信者と未信者の間には、趣味、傾向、目的などに根本的相違がある。彼らは、ふたりの主人に仕えている。彼らの間に一致はあり得ない。どんなに純粹で正しい原則を持っているとしても、信者でない伴侶は、神から引き離す傾向を持っている。

回心前に結婚関係にはいった者は、その悔い改めによって、彼らの信仰がどんなに異なっていようと、伴侶に忠実であるべき義務は、さらに増大した。しかし、神の要求は、試練や迫害を招こうとも、地上のどの関係よりも上位におかれなければならない。愛と柔和の精神をもってすれば、この忠誠さは、未信者を主に導く力となるかも知れない。しかし、クリスチャンが、神を知らないものと結婚することは、聖書の中で禁じられている。

「不信者と、つり合わないくびきを共にするな」と主は命じられる(コリント第二・六ノ一四、一七、一八)。

イサクは、世界の祝福となる約束の相続人となり、神から大きな栄誉を受けた。しかし、彼が四十才のとき、経験豊かで神を恐れるしもべに命じて、彼の妻を選ばせるといふ父の判断に従った。聖書は、この結婚が愛に満ちた幸福な家庭を築いたことを美しく描いている。「イサクはリベカを天幕に連れて行き、リベカをめとって妻とし、彼女を愛した。こうしてイサクは母の死後、慰めを得た。」

イサクの歩いた道と、現代の青年たち、またクリスチャンと自称する人々でさえ追い求めている道とは、なんと異なっていることであろう。青年たちは、だれを愛そうと、それは自分だけで決定すればよく、神や親たちが

らはなんの支配も受けることではないと考えやすい。彼らは、一人前の男子、女子になるずっと前から、親たちの助けなど受けずに、自分で選択することができると考える。たいてい、数年の結婚生活で、まちがいを見つめるのは十分であるが、悲しむべき結果を防ぐのには遅すぎる。なぜなら、急いで相手を選んだのと同じ知恵と自制の欠如が、事情をさらに悪化させて、彼らの結婚生活を耐えられないくびきにってしまうのである。こうして現世の幸福と永遠の生命の希望を破壊した人が多い。

もし注意深く考慮し、年配の経験豊かな人々の勧告を求めるべき問題があるとすれば、それは結婚問題である。もし、聖書の勧告を必要とし、祈りのうちに神の指導を求めるべきときがあるとすれば、それは、一生を結合する段階にはいる前である。

親たちは、子供たちの将来の幸福について責任があることを忘れてはならない。イサクが父の判断を尊重したことは、彼が、服従の生活を愛するように訓育された結果であった。アブラハムは、子供たちに、親の権威を尊重するように教えたが、彼は日常生活において、その権威が利己的または独裁的支配ではなくて、愛に基づき、彼らの福利と幸福を考慮したものであることを示した。

父親と母親は、青年たちの愛情に指導を与え、よく似合った伴侶になる人を愛するようにさせる義務があることを感じなければならない。親たちは、神の恵みの助けを受けて、自分たちの教えと模範によって、子供たちが清く、気高くなり、善と真実にひきつけられるように、彼らの品性を幼いときから形造ることを義務と思わなければならない。類は友を呼び、似た者はよく理解し合う。真実、純潔、善良を愛する心を幼いときから心に植えつけるようにしよう。そうすれば、青年は、そうした品性の持ち主との交わりを求めることであろう。

親たちは、自分たちの品性とその家庭生活に、天の父の愛と恩恵とを実証するように努めよう。家庭は、太陽の光に満ちたところにしよう。これは、子供たちにとって、土地や金銭よりもはるかに価値がある。彼らの心に家庭の愛を燃やしつづけ、子供たちが幼少時代の家庭をふりかえるとき、そこを天国に次ぐ平和と幸福なところとして思い出すことができるようにしよう。家庭の者が、みな、同じ性格のものではないから、忍耐と寛容の精神を働かせるべきときも時おり起ころう。しかし、愛と自制によって、すべてのものは堅く結ばれて一つになるのである。

真の愛は、高く清い原則である。それは、衝動的に生じ、激しく試みられると、急に消えてしまう愛とは全く異なったものである。青年たちは、親の家で忠実に義務を果たすことによつて、自分自身の家庭を持つ準備をしなければならぬ。青年たちは家庭で自制を実行し、親切で、礼儀正しく、クリスチャン的同情の精神をあらわそう。こうして、彼の心には、愛があたたく保たれる。そして、このような家庭から出て、自分の家族のかしらとなるものは、自分の生涯の伴侶として選んだ人の幸福を増進させる方法を知っている。結婚は愛の終わりでなく、愛の始まりに過ぎない。

ヤコブとエサウ

本章は、創世記二五ノ一九 三四、二七章に基づく。

イサクのふたごのむすこ、ヤコブとエサウは、その性質も、生活ぶりも著しく異なっていた。この相違は、彼らの誕生の前から神の天使に予告されていた。天使は、リベカが苦しみながら祈ったときに、ふたりのむすこが彼女に与えられること、そして、おのおのが大きな国民の先祖になり、ひとりが他よりも偉大になり、弟が優位を占めるに至る彼らの将来の歴史などを、彼女に明らかにした。

エサウは、自分を楽しませることを好み、ただ現在のことばかりに心を奪われて成長した。彼は、束縛に耐えられず、自由奔放な狩りを楽しみ、早くから猟師の生活を選んだ。しかし、彼は父親の氣に入っていた。物静かで、平和を愛する牧羊者は、長子の勇氣と活氣に心をひかれた。エサウは、恐れることなく、山やさばくを歩き回って、父親に獲物を持って帰り、心おどる冒険談を話して聞かせるのであった。ヤコブは、思慮深く、忠実で用心深く、現在のことよりは将来のことを考えていたので、家にいて家畜の世話をしたり、土を耕したりして満足していた。母親は、彼の忍耐力、儉約の精神、先見の明などを高く評価した。ヤコブの愛情は深く強かった。

そして、彼の物静かで根気強い思いやりの精神は、エサウの荒々しい、時おりの親切よりは、彼女により大きな幸福感を与えた。リベカにとって、ヤコブはいとしいむすこであつた。

まずアブラハムに与えられ、そして、そのむすこに確証が与えられた約束は、イサクとリベカの心の大きな願いであり希望であつた。エサウとヤコブは、その約束をよく知つていた。彼らは、長子の特権を非常に重要なものと考えるように教えられていた。というのは、それが、ただ単にこの地上の富の相続だけでなく、靈的に優位が与えられることをも含んでいたからである。それを受けるものは、家族の祭司となり、その子孫からこの世界の贖い主が出ることになつていた。一方、長子の特権を受けたものは責任も負わされた。祝福の継承者は、彼の生涯を神の奉仕にささげなければならなかつた。彼は、アブラハムのように、神の要求に従順でなければならなかつた。結婚、家庭関係、公の生活などで、彼は、神のみこころをうかがわなければならなかつた。

イサクは、こうした特権と条件とをむすこたちに知らせ、長子の特権を受けるのは、長子のエサウであることを言明した。しかし、エサウは献身を好まず、宗教生活を送る気持ちがなかつた。彼にとって、靈的な長子の特権に付随した要求は、好ましくないというよりはやつかいな制限とさえ思われた。アブラハムと神との契約の条件であつた神の律法は、奴隷のくびきのようにエサウには思われた。彼は放縦を好み、ただ自分の欲するままにふるまう自由を望むだけであつた。彼にとって、権力と富、飲食と宴樂が幸福なのであつた。彼は、なんの束縛もない奔放な流浪の生活の自由を誇つた。リベカは、天使の言葉を覚えていて、夫よりはもつとはつきりした洞察力でむすこたちの性格を読んだ。神の約束の相続権は、ヤコブのためにあるかのように彼女は思い込んだ。リベカは、イサクに天使の言葉を語つた。しかし、父親の愛情は長子に注がれていて、がんとして自分の意志を変

えなかった。

ヤコブは、長子の特権が自分に与えられるという神の告示を母親から聞き、なんとかしてその特権を自分のものにしたいという言葉には表現できない願望に満たされた。彼が渴望したのは、父親の富を所有することではなかった。彼が願ったものは、霊的長子の特権であった。義人アブラハムのような神との交わりにはいり、家族のために犠牲をささげ、選民と約束の救い主の先祖となり、契約の祝福に含まれている永遠の嗣業にあずかることなどが、彼の熱心に求めてやまない特権であり、誉れであった。彼の心は常に将来のことに向けられ、目には見えない祝福を得ようと努めていた。

彼は、霊的祝福について、父親が語るすべてのことをひそかな願いをいだいて聞き入った。そして、母親から聞いたこともたいせつに心に秘めていた。彼は、日夜そのことばかり考えていたので、それが彼の生活の最も重大な関心事となった。しかし、ヤコブは、このように現世の祝福よりは永遠の祝福を尊重はしたが、まだ彼の敬う神について体験上の知識はなかった。彼の心は神の恵みによって新たにされていなかった。彼は、兄が長子の権利を保持するかぎり、自分に関する約束は実現し得ないと思った。そして、彼は、兄が軽視しても自分には非常に貴重なその祝福を確保しようと、絶えず策略をめぐらしていた。

ある日、エサウが狩りから疲れ果てて帰ってきて、ヤコブが煮ていた食物を要求した。ヤコブは、始終このことばかりを考えていたので、この機を逸せず、長子の特権とひきかえに兄の飢えを満たそうとした。「わたしは死にそうだ。長子の特権などわたしに何になろう」と、無分別でわがままな狩人は叫んだ。こうして、エサウは一杯の赤いあつもので彼の長子の特権をゆずり渡し、誓ってその取り引きを確認した。今少し待てば父の天幕で

食物を得られたのに、彼は、自分の一時の欲望を満たすために、神ご自身が、彼の父祖たちに約束された栄光ある相続権を軽々しく手放した。彼は、ただ現在のことだけに興味を持った。彼は、地上のもののために、天のものを、一時の快樂のために未来の幸福を犠牲にしてしまふのであった。

「このようにしてエサウは長子の特権を軽んじた」(創世記二五ノ三二、三四)。彼は、それを譲渡して一種の解放感を味わった。もう彼には何のじやまものもなかった。好きかってができた。こうした気ままな楽しみや、誤った自由のために、なんと多くの人々が今もなお、清く汚れない天の永遠の嗣業をつぐ相続権を売り渡していることであろう。

エサウは、ただ単なる外のかたちとこの世的の魅力にひかれて、ヘテ人のふたりの娘を妻にめとった。彼らは偽りの神の礼拝者であつた。そして、その偶像礼拝はイサクとリベカを非常に悲しませた。エサウは、選民と異邦人との雑婚を禁じる誓約の条件の一つを犯した。しかし、イサクは、長子の特権を彼に与える決意を変えなかった。リベカの説得も、ヤコブの祝福に対する強い希望も、エサウのその義務に対する無関心も、父の意志をひるがえす力はなかった。

何年かが経過し、イサクは年老いて目がかすみ、死期が近づいたので、長子に祝福を与えることをもはや延ばすべきではないと思つた。しかし、リベカとヤコブの反対を知っていたので、彼は厳肅な儀式をひそかに行なうとした。こうしたときには、ふるまいを設ける習慣であつたので、老父は、「野に出かけ、わたしのために、しかの肉をとってきて、わたしの好きなおいしい食べ物を作り、……わたしは死ぬ前にあなたを祝福しよう」とエサウに命じた(同・二七ノ三、四)。

第 16 章 ヤコブとエサウ



ヤコブは、エサウが腹をへらして狩りから帰ってきた機会を利用して、長子の特権を一杯の食物と交換する取り引きをした。

リベカは、彼が何をしようとするかを読みとった。彼女は、それが神のみこころの啓示とは相反することを確信した。イサクは、神の怒りを招く危険にさらされていた。そして、神が召された地位に弟むすこをつかせまいとしているのであった。彼女は、イサクを説き伏せようとしたがむだだったので、策略を用いる決意をした。

エサウが狩りに出かけると、すぐにリベカは自分の考えの実行にとりかかった。彼女は、ヤコブに事の次第を話し、その祝福がついにしかも決定的にエサウに与えられるのを防止するために、すばやく行動する必要があることを告げた。もしヤコブが、母親の指示に従えば、神の約束通りに祝福を受けることができる。彼女は保証した。ヤコブは、彼女の考えた計画に、直ちに同意はしなかった。父親を欺くことは大きな苦痛であった。このような罪は、祝福ではなくてのろいをもたらすものだ。彼は感じた。しかし、彼は、良心の声にさからって母親の言葉に従い始めた。あからさまのうそを言うつもりではなかったが、ひとたび父の前に出てしまうと引きさがるわけにいかなくなった。彼は、不正手段によって熱望した祝福を手に入れた。

ヤコブとリベカは、目的を達したものの、彼らの詐欺行為によって得たものは、苦悩と悲哀だけであった。神は、ヤコブが長子の特権を得るであろうと言われたのであるから、神が彼らのためにそうしてくださるのを信仰をもって待つておれば、神の言葉は、神ご自身がよいと思われるときに達成されたことであろう。しかし、今日神の子であると公言する多くの人々のように、彼らはこの事を主の手にゆだねようとしなかった。リベカは、自分がむすこにまちがったことを勧めたことを非常に後悔した。これが、ヤコブをリベカから引き離す原因になり彼女は、ふたたび彼の顔を見ることができなくなった。ヤコブは長子の特権を獲得したその瞬間から、自責の念にかられた。彼は、父と兄と自分の魂と、そして、神に対して罪を犯したのである。彼は、ほんのわずかの時間

の間に、一生の悔いを残すことをした。後年、彼自身のむすこたちの罪深い行ないが彼の心を苦しめたとき、この光景が彼の前に鮮明にのみがえるのであった。

ヤコブが父の天幕を去ると、すぐ、エサウがはいってきた。エサウは、長子の特権を売り渡し、その取り引きを厳粛な宣誓によって、確認はしたが、彼は、今弟がなんと言おうと祝福を獲得しようとして決意した。長子の霊的特権には、物質的特権も含まれていて、家族の指導権と父の富の二人前が与えられることになっていた。彼が高く評価したのは、こうした祝福であった。「父よ、起きてあなたの子のしかの肉を食べ、あなたみずから、わたしを祝福してください」と彼は言った(同・二七ノ三二)。

驚きと苦悩にふるえながら、目の見えない老父は、自分が欺かれたことを知った。彼が長く楽しみにしてきた希望はくじかれた。そして、彼はエサウの感じる失望を身にしてみ味わった。しかし、自分の計画が失敗し、自分がやめようとしていたそのこと自体が実現したというのは、神の摂理であったという確信が彼の心にひらめいた。彼は、天使がリベカに語った言葉を思い出した。そして、罪を犯したとはいうものの、ヤコブが神のご計画を成就するには、最も適任であることをイサクは認めた。彼は、祝福の言葉を語っていたときに靈感を受けた。そして、今、すべての事態を承知の上で、彼が知らずにヤコブに与えた祝福を是認した。「彼を祝福した。ゆえに彼が祝福を得るであろう」(同・二七ノ三三)。

エサウは、祝福が自分の手元にあると思ったときには、それを軽々しく評価したが、永久に彼から離れ去ったとなると、手に入れたと思った。彼の衝動的で激しやすい性質がそのままあらわれ、彼の悲しみと怒りは大きかった。彼は、激しく泣き叫んだ。「父よ、わたしを、わたしをも祝福してください。」「あなたはわたしのため

に祝福を残しておかれませんでしたか」(同・二七ノ三四、三六)。しかし、すでにしてしまった約束は、とりかえすことができなかった。彼が軽率に手放した長子の特権は、ふたたび取りもどすことができなかった。「一杯の食」のため、すなわち、制することをしなかった食欲の瞬間的満足のために、エサウは長子の権利を売った。しかし、彼が自分の愚かなことを悟ったときには時すでにおそく、祝福を取りもどすことはできなかった。「彼は…涙を流してそれを求めたが、悔改めの機会を得なかったのである」(ヘブル二ノ一六、一七)。エサウは悔い改めるならば、神の恵みを求める特権がなくなつたわけではなかった。しかし、彼は長子の特権を回復する方法をみつけることはできなかった。彼の悲しみは、罪を認めたことからではなかった。彼は、神との和解を願わなかった。彼は、罪の結果を悲しんだが、罪そのものを悲しまなかった。

エサウは、神の祝福と要求に無関心であつたために、「俗悪な者」と聖書のなかで呼ばれている(同・一二ノ一六)。彼は、キリストが価を払われた贖罪を軽く評価して、地上の朽ちるもののために、天の相続権を犠牲にする人々を代表している。ただ現在のために生き、将来に対してなんの配慮も準備もない人がおびただしくいる。彼らは、エサウのように、「わたしたちは飲み食いしようではないか。あすもわからぬいのちなのだ」と言う(コリント第一・一五ノ三二)。彼らは、自分たちのしたいほうだいのことをしている。彼らは、自己否定を実行するよりは、最も重大なことがらを犠牲にする。誤つた食欲の満足か、あるいは、自己を否定し神を恐れる者だけに約束された天の祝福かのどちらかを捨てなければならぬとすれば、食欲の満足のほうが重要で、神と天のほうは文字通り見捨てられてしまう。何と多くの人々、また、クリスチャンと称する人々でさえ、健康を害し、魂の感受性をまひさせる嗜好物にふけつていゝことであろう。すべての肉と霊の汚れから身を清めて、神を恐れつつ

清潔を達成する義務が示されると、彼らはそれを好まない。彼らは、こうした有害な快樂を楽しみながら、天国にはいることができないことに気づく。そして、永遠の命の道は狭いために、その道を歩くのをやめてしまおうとする。

多くの人々は、肉の欲にふけるために長子の特権を売り払っている。健康は犠牲になり、知能は薄弱になり、天国の希望は失われる。しかも、それらはすべてただ一時の快樂のためであり、人間を弱め、墮落させる放縱のためである。エサウが軽率な取り引きの愚かさを悟ったときには時すでにおそく、取りもどすことができなかったように、利己的満足のために、天国の相続権を譲渡するものは、神の日に同じ運命に会うのである。

第 17 章

ヤコブの逃亡と放浪

本章は、創世記二八 三一章に基づく。

エサウの怒りに生命をおびやかされて、ヤコブは逃亡者となって父の家を出た。しかし、彼は、父の祝福をたずさえていった。イサクは、契約の約束をヤコブにもう一度くり返し、彼がその相続者であるから、メソポタミヤの母方の家族のなから妻をめとるように命じた。しかしヤコブは、深く物思いに沈んでさびしい旅に出かけた。彼は、ただ一本のつえをたよりにして、荒々しい遊牧の民の住んでいる原野を何百キロも旅しなければならなかった。彼は後悔と恐怖に襲われ、怒った兄につけられないように人目を避けていた。彼は、神が彼に与えようとされた祝福を永遠に失ったのかと恐れた。そして、サタンは、そばで彼を試みるのであった。

二日めの夕方、彼は父の家から遠く離れたところに来ていた。彼は、自分が放浪の身に陥ったことを感じた。そして、この苦しみは、すべて、自分のまちがった行為の結果であることを悟った。絶望の暗黒が、彼の心におしかぶさり、祈ることすらできなかった。しかし、その極度の寂しさのなかで、これまでになかったほどに神の保護の必要を痛感した。彼は、涙を流して深く恥じ入り、罪を告白し、自分が全く見捨てられていないという確

証を願い求めた。それでも彼の重い心は軽くななかった。彼は全く自信を失い、祖先の神は彼を見捨てられたのではないかと感じた。

しかし、神はヤコブを見捨てられなかった。神のあわれみは、なお、罪深い不信のしもべに注がれていた。主はヤコブをあわれみ、彼が最も必要としていた救い主を示されたのである。彼は、罪を犯した。しかし、ふたたび神の恵みに回復される道が示されたので、彼の心は感謝にあふれた。

放浪者は旅に疲れ果てて、石をまくらにして地に横たわった。彼が寝ていると、一つの光り輝くはしが地上に立ち、その頂が天に達しているのが見えた。このはしの上を天使たちが上り下りしていた。その上のほうに栄光の主がおられて、「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である」という彼の声が天から聞こえた(創世記二八ノ一三)。彼がいま、放浪者、逃亡者として横たわっている地は、彼と彼の子孫に与えられることが約束された。そして、「地の諸族はあなたと子孫とによって祝福をつけるであろう」という確証が与えられた。この約束は、アブラハムとイサクに与えられたものであったが、それがいまヤコブに繰り返して与えられた。それから、現在の彼の寂しさと苦悩を特に考慮して、慰安と激励の言葉が語られた。「わたしはあなたと共にいて、あなたがどこへ行くにもあなたを守り、あなたをこの地に連れ帰るであろう。わたしは決してあなたを捨てず、あなたに語った事を行うであろう」(同・一四、一五)。

主は、ヤコブを取りかこむ悪感化と、彼がさらされる危険を知っておられた。主は、この悔い改めた逃亡者をあわれみ、彼の未来を示して、彼に関する神のみこころを理解させ、彼がただひとりで、偶像礼拝者や陰謀をめぐらす人々の中に行ったときに会わねばならぬ誘惑に抵抗する準備を与えられた。彼は、自分の目ざすべき高い

標準を常に念頭に持っていなければならなかった。そして、神の計画は自分によって成就されるのだという自覚のもとに、常に忠実に励まなければならなかった。

この幻のなかで贖罪の計画が彼に示された。それは、十分なものではなかったが、当時の彼に必要な部分が与えられた。彼の夢のなかの神秘的なしごは、キリストがナタナエルとの会話のなかで引用されたのと同じものであった。「天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであろう」と彼は言われた(ヨハネ一ノ五一)。人間が神の政府に反逆するまでは、神と人との間に自由な交わりがあった。しかしアダムとエバの罪が、天と地とを隔ててしまったので、人間は創造主と交わることができなくなった。ところがこの世界は、孤立した絶望のうちに放任されたのではなかった。はしごは、交わりの仲介者として任命されたイエスを代表していた。もし、彼がご自分のいさおしによつて、罪がもたらした深い淵に橋をかけてくださらなかったならば、奉仕の天使たちは、墮落した人類と交わることができなかったであろう。キリストは、弱く力ない人間を、無限の力の源泉につないでくださる。

このようなことが、すべて夢の中でヤコブにあらわされた。彼の心は啓示のある部分をすぐに理解したけれども、その偉大で神秘的な真理は、彼の一生涯の研究であつて、彼の心に少しずつ明らかにされていった。

ヤコブが目をさますと、あたりはまだ夜の静けさに包まれていた。幻の輝かしい光景は消えていた。さびしい山々の輪郭の上に星空が輝いて見えるだけであつた。しかし、彼は、神が自分と共におられるという厳肅な感に打たれた。見えない臨在が寂しい場所に満ちていた。「まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった。……これはなんとという恐るべき所だろう。これは神の家である。これは天の門だ」と彼は言った(創世記

二八ノ一六、一七)。

「ヤコブは朝はやく起きて、まくらとしていた石を取り、それを立てて柱とし、その頂に油を注い」だ(同・二八ノ一八)。重大な事件を記念するときの習慣に従って、ヤコブは神のあわれみの記念碑を立てた。それは、彼がこのあたりを通るときに、この神聖な場所にしばらく足をとめて主を礼拝するためであった。そして、彼はその場所をベテル「神の家」と呼んだ。彼は深い感謝の念をいだいて、神が彼と共におられるという約束をくりかえした。そして、彼は厳粛な誓いをたてた。「神がわたしと共にいまし、わたしの行くこの道でわたしを守り、食べるパンと着る着物を賜い、安らかに父の家に帰らせてくださるなら、主をわたしの神といたしましょう。またわたしが柱に立てたこの石を神の家といたしましょう。そしてあなたがくださるすべての物の十分の一を、わたしは必ずあなたにささげます」(同・二八ノ二〇—二二)。

ヤコブはここで、神と取り引きをしようとしているのではなかった。主は、すでに彼に繁栄を約束しておられた。だからこの誓いは、神の愛とあわれみの保証に対する感謝として彼の心からあふれ出たものであった。ヤコブは神に感謝をいいあらわす必要を感じた。そして特別に神の恵みのしるしが与えられたならば、神に返礼すべきであると思った。それと同様に、われわれも、与えられるあらゆる祝福に対して、すべてのあわれみの源泉であられる神に感謝をあらわさなければならぬ。クリスチャンは、時おり自分の過去の生涯をふりかえってみて試練のときに支持が与えられ、暗黒と絶望のなかで道が開かれ、倒れるばかりのときに勇気づけられたことなど神から与えられた尊い救済の経験を思い出して感謝しなければならぬ。彼は、こうしたすべてのことを、天使の保護の証拠と認めるべきである。このような数えつくすことのできない祝福を思うとき、クリスチャンは、謙

虚で、感謝の心をもって、「わたしに賜わったもの恵みについて、どうして主に報いることができようか」と時おりたずねてみなければならぬ(詩篇一一六ノ一二)。

われわれの時間、才能、財産などは、これらの祝福をわれわれに委託された神にささげるべきである。われわれが特別に危険から救出されるとか、または、新しい予期しない恵みにあずかる場合には、言葉で感謝を表現するだけでなくて、ヤコブのように神のわざのためにささげ物や献金をして、神の恵みに感謝しよう。われわれは絶えず神の恵みを受けているのであるから、絶えずささげるべきである。

「あなたがくださるすべての物の十分の一を、わたしは必ずあなたにささげます」とヤコブは言った(創世記二八ノ一二)。福音の十分な光と特権にあずかっているわれわれは、十分恵みにあずからなかった古代の人々が神にささげたものよりも少なくささげて満足すべきであろうか。いや、大きな祝福にあずかればあずかるほど、われわれの責任も、それに従って大きくなるのではなからうか。しかし、われわれの評価はなんと低いことであろうか。はかり知れない愛と想像に絶する価値ある賜物に答えるに当たって、われわれの時間や金銭や愛を、数学的法則によって測ろうとすることはなんとむなしいことであろう。キリストのために、十分の一なのであるか。これほどの価値あるものに対して、ああ、なんと僅少で恥ずかしい返礼であろうか。カルバリーの十字架から、キリストは全的献身を求めておられる。われわれの持ち物も、われわれ自身も、すべてを神にささげなければならぬ。

ヤコブは、神の約束に対する新しい永続的信仰と、天使の存在と保護の確証をいだいて、「東の民の地」にむかって旅を続けた(同・二九ノ一)。ところが、約百年前に、アブラハムのしもべが到着したときとは、状態がな

んと異なっていたことであろう。しもべは、らくだに乗った多くの召使をつれ、金銭とりっぱな贈り物を持って来た。ところがむすこは、旅につかれた旅人として、つえのほか何の持ち物もなく、たったひとりでやってきた。ヤコブも、アブラハムのしもべのように、井戸のかたわらで休んだ。そして、彼が、ラバンの妹娘のラケルに会ったのはここであつた。井戸から石を取りのけ、家畜に水を飲ませる手伝いをしたのは、今度はヤコブであつた。ヤコブは、自分が彼らの親類であることを話して、ラバンの家庭に歓迎されることになった。彼は、持ち物も、供の者も連れずにやってきたが、わずか数週間で彼の熱心さと熟練さとが認められて、長く滞在するように勧められた。こうしてヤコブは、ラケルを妻にめとるためにラバンのために七年間働くことになった。

昔、結婚の契約が正式に認められるに先だつて、花婿はその身分に応じて、いくらかの金銭またはそれに相当する物品を、妻の父に手渡す習慣であつた。これは、結婚関係の安全を保つものと考えられていた。父親は家族を養うたくわえもしていない男に、娘の幸福を託すことは安全でないと考えた。もし彼らが儉約と努力によつて家業にはげみ、家畜や土地を手に入れることができないようであれば、彼らの一生は見込みがないと思われた。それでも、妻のために支払うものを何も持っていない者を試みる方法が設けられていた。彼らは、納入すべき結納金の額に応じて、きめられた期間、愛する娘の父親のために働くことが許された。求婚者が忠実に任務を果たし、他の点でもりっぱであることを証明すれば娘を妻にすることができた。そして、一般には結納金として父が受け取ったものは、結婚のときに娘に与えられた。しかし、ラケルとレアの場合は、両方とも娘たちに与えるべき結納金を、ラバンは利己的に自分のものにしてしまった。この事について、彼らはメソポタミヤを出発する直前に言った。「彼はわたしたちを売ったばかりでなく、わたしたちのその金をさえ使い果したのです」(同・三一



ヤコブは、村の井戸に立ち寄り、そこで彼のおじの娘、つまり、いとこに会った。
彼は、彼女の羊のために水をくみ、自分の身分を明かした。

ノ一五)。

古代の習慣は、時おり、ラバンのように悪用するものはあっても、よい結果をもたらした。求婚者が妻を得るために働かなければならなかったことは、早婚を防ぎ、家族をささえる能力とともに、その愛情の深さをもたすよい機会であった。今日はこれと全く反対なので、多くの悪い結果が生じている。結婚に先だつて、お互いの習慣や性質などについて知る機会はほとんどない場合が多い。そして、日常生活については全く他人同然で式をあげてしまう。彼らが互いに適合していないことを発見したときは時すでにおそく、その結婚が一生悲惨な結果に終わるものが多い。夫であり父である者の怠惰と無能、または悪習慣のために、妻や子供たちが苦しい思いをする場合がある。もし、古代の習慣に従つて、求婚者の性格を結婚の前にためすことができれば、大きな不幸を避けることができたであろう。

ヤコブは、ラケルのために七年間忠実に働いた。そして、その年月は、「彼女を愛したので、ただ数日のように思われた」(同・二九ノ二〇)。ところが、利己的で強欲なラバンは、非常に貴重な働き人を引きとめておくため、無情にもラケルのかわりにレアを与えて、ヤコブを欺いた。レアもこうした欺きに加担したために、ヤコブは彼女を愛する気になれなかった。ヤコブが憤慨して、ラバンを責めると、ラバンはあと七年働けばラケルを与えようといった。しかし、ラバンは家族の恥であるから、レアを捨ててはならないと言い張った。こうしてヤコブは、心も張り裂けるばかりの苦境に立たされた。彼はついに、レアをとどめておいたまま、ラケルと結婚する決心をした。ヤコブが最も愛したのはラケルであった。しかし、彼が彼女を他のものより愛したことは、ねたみとそねみの原因となった。そして、彼の生涯は、姉妹のふたり妻の争いによって悲惨なものになった。

ヤコブは、メソポタミヤに二十年間とどまって、ラバンのために働いた。ところがラバンは、肉身のつながり
を無視して、彼らの間から得られるだけの利益を得ようとしていた。ラバンはふたりの娘のために十四年の
労働をヤコブに要求した。そして、その後の期間においては、ヤコブの賃銀を十回も変更した。それにもかかわ
らず、ヤコブの働きは勤勉で忠実であつた。ラバンとヤコブが最後に会つたときの会話のなかで、彼がラバンに
言つた言葉は、無情な主人のために彼がどんなにたゆまず勤めたかを生々しく描写している。「わたしはこの二
十年、あなたと一緒にいましたが、その間あなたの雌羊も雌やぎも子を産みそこねたことはなく、またわたしは
あなたの群れの雄羊を食べたこともありませんでした。また野獣が、かみ裂いたものは、あなたのもとに持つて
こないで、自分でそれを償いました。また昼盗まれたものも、夜盗まれたものも、あなたはわたしにその償いを
求められました。わたしのことを言えば、昼は暑さに、夜は寒さに悩まされて、眠ることもできませんでした」

(同・三二ノ三八 四〇)。

羊飼いは、昼も夜も群れを守っていなければならなかつた。羊の群れは盗まれるおそれがあつた。また、数多
くのどうもうな野獣に襲われる危険もあり、よく見張っていないと群れが襲われ、大きな損害をこうむるのであ
つた。ヤコブの下で多くの羊飼いが働いていて、ラバンの広範囲にわたる群れを養つていたが、彼自身がすべて
の責任を負つていた。一年の中のある期間は、彼自身が群れといつてもいい、乾燥期には群れがかわいて死なな
いように、また最も寒い数か月の間は、群れがひどい夜の霜にこごえないように守らなければならなかつた。ヤコ
ブは羊飼いかしらであつた。彼の雇い人たちは、彼の下で働く羊飼いであつた。もし、羊がいなくなれば、羊
飼いかしらの損失であつた。もし群れの状態がよくなければ、ヤコブはその群れの世話をまかせた者を呼んで、

詳しい説明を要求した。

羊飼いが勤勉でよく羊の世話をして、ゆだねられた無力な生き物をあわれむことなどを例にあげて、聖書の記者は、福音の最も尊い真理をいくつか説明している。キリストは、ご自分と民との関係を羊飼いにたとえられた。人間の墮落後、キリストはご自分の羊が、罪の暗い道で滅びる運命に陥ったのを見られた。彼は、これらのさまよう人々を救うために、天の父の家の誉れと栄光とを捨てられた。「わたしは、うせたものを尋ね、迷い出たものを引き返し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くし」「それゆえ、わたしはわが群れを助けて、再びかすめさせず」「地の獣も彼らを食うことはない」（エゼキエル書三四ノ一六、二二、二八）。「昼は暑さをふせぐ陰となり、また暴風と雨を避けて隠れる所」である彼のおりに群れを導く彼の声が聞こえる（イザヤ書四ノ六）。彼は根気強く群れを守られる。彼は弱いものを強め、苦しみを和らげ、腕に小羊をだき、ふところに入れてたずさえられる。羊は彼を愛する。「ほかの人には、ついて行かないで逃げ去る。その人の声を知らないからである」（ヨハネ一〇ノ五）。

キリストは言われる。「わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。羊飼ではなく、羊が自分のものでもない雇人は、おおかみが来るのを見ると、羊をすてて逃げ去る。そして、おおかみは羊を奪い、また追い散らす。彼は雇人であって、羊のことを心にかけていないからである。わたしはよい羊飼であって、わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている」（ヨハネ一〇ノ一一四）。

大牧者キリストは、彼の牧者たちに、彼の下で働く羊飼いとして群れの世話をすることをゆだねられた。そして、ご自分が持たれた同じ関心を彼らも持って、主からゆだねられた任務の清い責任を感じるように命じられる。

主は、彼らに、忠実に群れを養い、弱ったものを強め、氣絶しそうになったものを生きかえらせ、かみ砕くおおかみから彼らを守るように、厳肅にお命じになった。

キリストは羊を救うために、ご自分の命を捨てられた。そして、彼は、彼の牧者たちに、このように表現された愛を彼らの模範としてお示しになる。しかし、「羊が自分のものでない雇人は」群れに対して真の関心をいだいていない。彼は、ただ利益のために働くのであって、自分のことしか考えない。彼は、ゆだねられたものの益ではなくて、自分の利益を図る。そして、危険が迫ってくると、群れを捨てて逃げてしまう。

使徒ペテロは、羊飼いたちに勧めている。「あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい。しいられてするのではなく、神に従って自ら進んでなし、恥ずべき利得のためではなく、本心から、それをしなさい。また、ゆだねられた者たちの上に権力をふるうことをしないで、むしろ、群れの模範となるべきである」(ペテロ第一・五ノ二、三)。パウロもこう言っている。「どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取られた神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者にお立てになったのである。わたしが去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んできて、容赦なく群れを荒すようになることを、わたしは知っている」(使徒行伝二〇ノ二八、二九)。

忠実な羊飼いに負わせられる世話や重荷を、好ましくない務めとみなすすべての者を、使徒は責めて言う。「しいられてするのではなく、…自ら進んでなし、恥ずべき利得のためではなく、本心から、それをしなさい」(ペテロ第一・五ノ二)。大牧者キリストは、こうした不忠実な羊飼いをすべて進んで解任される。キリストの教会は彼の血によって贖われたものであるから、すべての羊飼いはゆだねられた羊のために無限の犠牲が払われたこと

を自覚しなければならない。そのおのおのに無限の価値を認めて、彼らを健康ですぐれた状態に保つために、たゆまず努力しなければならない。キリストの霊に満たされた羊飼いは、彼の自己否定の模範にならない、ゆだねられたものの幸福のために絶えず働くのである。そして、群れは彼の保護のもとに栄える。

すべてのものは、各自の任務の責任を問われる。主はすべての羊飼いに、「あなたに賜わった群れ、あなたの麗しい群れはどこにいるのか」と要求される(エレミヤ書一三ノ二〇)。忠実な者は、豊かな報いを受ける。「大牧者が現れる時には、しばむことのない栄光の冠を受けるであろう」と使徒は言っている(ペテロ第一・五ノ四)。ヤコブがラバンの仕事に疲れて、カナンに帰ろうと思い、ラバンに言った。「わたしを去らせて、わたしの故郷、わたしの国へ行かせてください。あなたに仕えて得たわたしの妻子を、わたしに与えて行かせてください。わたしがあなたのために働いた骨折りは、あなたがごぞんじです」(創世記三〇ノ二五、二六)。しかし、ラバンは、彼にとどまることを勧めて言った。「わたしは主があなたのゆえに、わたしを恵まれるしるしを見ました」(同・三〇ノ二七)。彼は、財産がヤコブの管理下で増加したのを知った。

ヤコブは言った。「わたしが来る前には、あなたの持つておられたものはわずかでしたが、ふえて多くなりました」(同・三〇ノ三〇)。しかし、時がたつにつれて、「大いに富み、多くの群れと、男女の奴隷、およびらくだ、ろばを持つようになった」ヤコブを、ラバンはうらやむようになった(同・三〇ノ四三)。ラバンのむすこたちも、父親と同じように彼をねたみ、その悪意に満ちた言葉がヤコブの耳にはいった。彼は、「われわれの父の物をことごとく奪い、父の物によってあのすべての富を獲たのだ。」「またヤコブがラバンの顔を見るのに、それは自分に対して以前のようにではなかった」(同・三一ノ一、二)。

ヤコブは、エサウに会う恐れさえなければ、とつくの昔に、この悪賢い親類のもとを去っていたことであろう。ところがヤコブは、ラバンのむすこたちが、彼の富を自分たちのものだと考えて、暴力に訴えてでも手に入れようとする危険を感じた。彼は、非常に悩み苦しんで、どうしてよいかわからなくなった。しかし、彼は、ベテルでの慈悲深い約束を思い出し、この問題を神に訴えて指示を仰いだ。彼の祈りは夢のなかでこたえられた。「あなたの先祖の国へ帰り、親族のもとに行きなさい。わたしはあなたと共にいるであろう」(同・三一ノ三)。

ラバンの不在のときが出発の絶好の機会であった。家畜や羊の群れが大急ぎで集められ、先に送り出された。そしてヤコブは、妻子、しもべたちを伴ってユフラテ川を渡り、カナンの国境にあるギレアデに向かって急いだ。ラバンは、彼らの逃亡を三日後に知ってその後を追いかけて、彼らが出発してから七日めに、彼らに追いついた。ラバンは、激怒していた。そして、彼の一隊はヤコブの群れよりはるかに強力だったので、わけなく彼らを引きもどせると思っていた。逃亡者たちは、まさに一大危機に直面した。

ラバンの抱いた敵対心が実行に移されなかったのは、神ご自身が、彼のしもべを守護するために介入されたからである。「わたしはあなたがたに害を加える力をもっているが、あなたがたの父の神が昨夜わたしに告げて、『おまえは心して、ヤコブによしあしを言うな』と言われました」とラバンは言った(同・三一ノ二九)。つまり彼は無理にヤコブを引きもどしたり、または、有利な条件を出して誘ってはならなかった。

ラバンは娘たちの結納金を取り上げ、ヤコブを、悪がしこくきびしく取り扱った。ところが、今、彼は、彼独特のそらぞらしい態度で、ヤコブがひそかに出発したことと、父親に告別の宴を開く機会を与えず、娘や孫たちに別れを言う暇を与えなかったことを責めた。

それに答えて、ヤコブは明瞭にラバンの利己心と強欲な仕打ちを述べた。そして、彼自身の忠実さと誠実さをあかししてもらいたいと彼に訴えた。「もし、わたしの父の神、アブラハムの神、イサクのかしこむ者がわたしと共におられなかったなら、あなたはきつとわたしを、から手で去らせたでしょう。神はわたしの悩みと、わたしの労苦とを顧みられて昨夜あなたを戒められたのです」(同・三一ノ四三)。

ラバンは、ヤコブの言った事実を否定することはできなかった。そこで彼は、平和の契約を結ぼうと言った。ヤコブはその申し出に同意し、石を積み重ねて、その契約のしるしにした。ラバンは「われわれが互に別れたのちも、どうか主がわたしとあなたとの間を見守られるように」と言って、この石塚をミズパ(見守る塔)と名づけた(同・三一ノ四九)。

「更にラバンはヤコブに言った、『あなたとわたしとの間にわたしが建てたこの石塚をごらんなさい、この柱をごらんなさい。この石塚を越えてわたしがあなたに害を加えず、またこの石塚とこの柱を越えてあなたがわたしに害を加えないように、どうかこの石塚があかしくなり、この柱があかしくなるように。どうかアブラハムの神、ナホルの神、彼らの父の神がわれわれの間をさばかれるように』。ヤコブは父イサクのかしこむ者によって誓った」(同・三一ノ五一 五三)。この契約を確認するために、彼らは宴を開いた。彼らは、その夜楽しく語り合って過ぎた。そして夜明けにラバンと彼の従者たちは去って行った。この離別を境にして、アブラハムの子孫とメソポタミヤの住民との接触はとだえてしまった。

第 18 章

苦闘の一夜

本章は、創世記三二、三三章に基づく。

ヤコブは、神の指示に従って、パダンアラムを出発したものの、二十年前に逃亡者として歩いた道を引き返すのは、なんとなく不安なものであった。彼は、父をあざむいた罪を忘れることができなかった。彼は、自分の長い逃亡生活が、その罪の直接の結果であることを知っていた。彼は、日夜そうしたことを考えて良心に責められ心沈む思いで旅を続けた。生まれ故郷の山々が遠くに見え始めたとき、ヤコブは深い感動をおぼえた。彼の目前に、過去のできごとがはつきりと浮かび上がった。罪の記憶とともに、神の彼に対するあわれみの情と、天の助けと導きの約束が思い出された。

旅の終わりが近づくにつれて、彼は、エサウのことを考えて、不安な予感を感じた。エサウは、ヤコブが逃亡したあと、自分ひとりで父の財産を相続したつもりであった。そこへ、ヤコブが帰ってくるといふ知らせはヤコブが遺産を取りに来たと思わせる恐れがあった。エサウは、害を加えようとすれば、ヤコブに大きな損害を与えることができた。そしてエサウは、ヤコブに対するふくしゅうのためばかりでなく、これまで、長年自己のもの

とみなしてきた富を確保するためにも、ヤコブに暴力をふるうことができた。

主は、ふたたび保護のしるしをヤコブにお与えになった。彼らがギレアデ山から南下していると、彼らを保護するように、天の使いの軍勢が二軍に分かれて彼らの一隊の前と後ろを取り囲んでいた。ヤコブは、昔、ベテルで見た夢を思い出した。そして、カナンから逃亡したときに希望と勇気を与えた天使が、帰途の守護に当たっている確証を見て重い心が軽くなった。ヤコブは『これは神の陣営です』と言って、その所の名をマハナイル(二軍または、二つの陣営)と名づけた(創世記三二ノ二)。

しかし、ヤコブは、自分の安全を確保するなんらかの方法を講じなければならぬことを感じた。そこで彼は兄弟に使者を送って、和解の言葉を伝えさせた。彼は、エサウにどう言うべきかを彼らにはつきりと教えた。ふたりの兄弟が生まれる以前から、兄は弟に仕えるといわれていたので、この記憶が感情を傷つけてはならなかった。そこで彼は、彼のしもべたちが彼の「主人エサウ」のところに送られているのだと言った。そして、彼の前に現われたときには、自分たちの主人のことを、「あなたのしもべヤコブ」と呼び、彼が貧しい放浪者として父の財産を要求するために帰国したと思われないうちに、注意ぶかく次のように言わせた。「わたしは牛、ろば、羊、男女の奴隷を持っています。それでわが主に申し上げて、あなたの前に恵みを得ようと人をつかわしたのです」(同・三二ノ五)。

しかし、しもべたちは、エサウが四百人を率いて近づいていることと、彼の友好的伝言にはなんの返答もしないという知らせをもって帰った。エサウはふくしゅうのために来ているにちがいはなかった。天幕は恐怖に満たされた。「ヤコブは大いに恐れ、苦しんだ」(同・三二ノ七)。彼は、引き返すことも、前に進むこともできなかった。

た。武装も防備もない彼の一族は、敵と戦う用意は全くなかった。そこで彼は、彼らを二組に分け、一組が攻撃されれば他の一組が逃げられるようにした。彼は、多くの群れのなかから数多くの贈り物を、友好的言葉とともにエサウのところに送り出した。彼は、自分の力のかぎりを尽くして兄弟に対する過去の悪行の償いをしようとした。そして、心を低くして悔い改めるとともに、神の保護を祈り求めた。『おまえの国へ帰り、おまえの親族に行け。わたしはおまえを恵もう』と言われた主よ、あなたがしもべに施されたすべての恵みとまことをわたしは受けるに足りない者です。わたしは、つえのほか何も持たないでこのヨルダンを渡りましたが、今は二つの組にもなりました。どうぞ、兄エサウの手からわたしをお救いください。わたしは彼がきて、わたしを撃ち、母や子供たちにまで及ぶのを恐れます』(同・三二ノ九 一一)。

こうして彼らはヤボクの渡しに着いた。そして、夜になったので、ヤコブは家族の者たちに川の浅瀬を渡らせ自分はひとりであとに残った。彼は、その夜祈り明かすことにし、神と自分だけになりたいと思った。神は、エサウの心を和らげることがおできであった。ヤコブは、神に頼るほかなかった。

そこはものさびしい山地で、野獣がひそみ、盗賊や人殺しが出没するところであった。ヤコブは、ただひとりでなんの防備もなく、深い悲しみに沈んで地にひれ伏した。それは真夜中であつた。彼の愛する家族の者たちがみな遠くへ行き、危険と死にさらされている。彼にとつて何よりもつらいことは、彼自身の罪悪のゆえに、罪のない者たちが危険にさらされることであつた。彼は、真剣な叫びと涙をもって神に祈った。すると突然、力強い手が彼の上におかれた。彼は、敵が彼の命をねらっているのだと思い、敵の手からのがれようと全力を尽くした。暗黒のなかで、両者は必死に争った。ヤコブは一言も言わなかったが、全力を尽くして一瞬でも力をゆるめよう

としなかった。こうして、必死の戦いをしながらも、彼は罪の意識に心が重かった。彼の罪が彼の前に立ちはだかつて、彼を神から引き離すのであった。しかし、この恐るべき窮地にあつて、彼は神の約束を思い起こした。そして、彼は真心から、神のあわれみを哀願した。格闘は夜明け近くまで続いた。見知らぬ相手の指がヤコブの腰に触れるや、彼はたちどころに不具者になってしまった。ヤコブは、この敵がだれであるかがわかった。彼は天使と戦っていたことを知った。彼のほとんど超人的力でも勝てなかったのはそのためであつた。このかたは、「契約の天使」キリストで、ご自分をヤコブに現わされた。不具となり、激しい痛みに苦しみながらも、ヤコブは、彼を放そうとしなかった。ヤコブは悔いにくずおれて天使にすがり、「泣いてこれにあわれみを求め」、祝福を懇願した(ホセア書一一ノ四)。彼は、罪の許しの確証をどうしても受けなければならなかった。肉体がどんなに苦痛を感じても、この目的から心をそらせることはできなかった。彼の決意はますます強く、信仰は燃え、最後まで耐えぬこうとするのであった。天使は、ヤコブからのがれようとして、「夜が明けるからわたしを去らせてください」と言つたが、ヤコブは答えて、「わたしを祝福してくださいさらないなら、あなたを去らせません」と言つた(創世記三二ノ二六)。もしこれが、ヤコブの高慢無礼で自己過信から出たものであれば、彼は、直ちに滅ぼされたことであらう。しかし、それは、自己の無価値を告白するとともに、神が忠実に約束を果たされることを信頼する者の確信であつた。

ヤコブは「天の使と争つて勝つた(ホセア書一一ノ四)。罪深く、まちがいを犯した人間が、けんそんと悔い改めと自己降伏によつて、天の王に勝つたのである。彼はふるえる手で神の約束にすぎた。そして、無限の愛に富む神の心は、罪人の哀願を退けることができなかった。

欺瞞によって長子の特権を獲得するという罪にヤコブを陥れた誤りが、彼の前にはつきりと示された。彼は、神の約束に信頼せず、神が、ご自分の時と方法によって達成しようとするのを、自分の努力で実現させようとした。彼が許された証拠として、彼の名が、彼の罪を思い起こさせるものから、勝利を記念する名に変えられた。「あなたはもはや名をヤコブ（おしのける者）」と言わず、イスラエルと言いなさい。あなたが神と人との力を争って勝ったからです」と天使は言った（創世記三二ノ二八）。

ヤコブは、彼の魂が願い求めた祝福を受けた。彼が人をおしのけ欺いた罪は許された。彼の人生の危機は去った。疑惑、困惑、後悔の念が彼の生涯を苦しいものにしたが、今はすべてが変わった。神との和解による平安は楽しいものであった。ヤコブは、もう兄に会うことを恐れなくなった。彼の罪を許された神は、エサウの心を動かして、ヤコブのけんそんと悔い改めを彼に受け入れさせることができるのであった。

ヤコブが天使と格闘している間に、もうひとりの天使がエサウのところに送られた。エサウは夢のなかで、父の家から二十年の間離れて暮らした弟を見た。また、彼が母親の死を知って、どんなに悲しむかを見た。そして彼が、神の軍勢に囲まれているのを見た。エサウは、この夢を兵卒たちに語った。そして、彼の父の神がヤコブと共におられるから、彼に害を加えないように命じた。

ついに、戦士をひきつれたさばくの族長の一隊と、妻子や羊飼いたち、侍女たち、それに多くの家畜や羊の群れを従えたヤコブの一団とが、両方から接近した。ヤコブはつえによりすがりながら、戦士の一団に近づいた。彼は前夜の格闘のために、顔は青ざめ、からだの自由を失い、痛みに耐えながら、休み休み足を運んだ。しかし彼の顔は喜びと平和に輝いていた。



この見知らぬ敵と必死になって戦っていたときに、ヤコブは、自分の罪を思い出して、罪の意識に苦しめられ、神から見放されたように感じた。

からだの自由を失った彼を見て、「エサウは走ってきて迎え、彼を抱き、そのくびをかかえて口づけし、共に泣いた」（同・三三ノ四）。エサウの荒武者たちの心も、この光景に強く心を打たれた。エサウが彼らに夢の話をしていたものの、彼らは首領の心の変化を理解することができなかった。彼らは、ヤコブの弱々しい姿を見た。しかし、この彼の弱さが、彼の力の原因であったことを知ることはできなかった。

ヤコブは、破滅が目前に迫って、ヤボク川のほとりで苦闘した夜、人間の助けのむなしさと、人間の力に頼ることの不安定さを教えられた。彼は、唯一の援助は神から来るべきであることを悟った。しかも彼は、その神に対して恐ろしい罪を犯したのであった。彼は、自分の無力と無価値とを認めて、罪を悔い改める者に神が約束されたあわれみを願い求めた。彼が神に許され、受け入れられたことを保証するものはこの約束であった。天地は過ぎ去っても、この言葉は必ず成就する。あの恐ろしい格闘のときに彼をささえたのはこれであった。

ヤコブの格闘と苦悩の夜の経験は、神の民が、キリスト再臨の直前に経験しなければならない試練をあらわしている。預言者エレミヤは、清い幻のなかでこの時代をながめて言った。「われわれはおのきの声を聞いた。恐れがあり、平安はない。……どの人の顔色も青く変っている……悲しいかな、その日は大いなる日であって、それに比べるべき日はない。それはヤコブの悩みの時である」（エレミヤ書三〇ノ五 七）。

キリストが、人間のための仲保者の働きを終了されるとき、この悩みの時が始まる。そのときに、すべての人の運命が決定され、罪を清める贖いの血はもうないのである。イエスが人間のために、神の前に立つ仲保者としての地位を去られるときに、厳粛な宣言が下される。「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」（黙示録二二ノ一一）。

すると、神の霊の制御力が地から取り除かれる。ちょうど、ヤコブが、怒った兄エサウに殺されそうになったのと同様に、神の民も彼らを滅ぼそうとする悪者に生命を脅かされる。そして、ヤコブがエサウの手から救い出されることを一晚中祈ったように、義者は彼らの周囲の敵からの救済を日夜祈り求める。

サタンは、神の天使たちの前でヤコブを訴え、彼は罪を犯したから、彼を滅ぼす権利があると主張した。サタンは、エサウを動かして、ヤコブに対して軍勢を進ませた。また、サタンは、ヤコブが一晚中格闘している間、罪を思い起こさせ、彼を失望させ、神にすぐるのをやめさせようとした。この苦悩のときに、ヤコブは天使を捕えて涙ながらに訴えたのである。すると、天使は、彼の信仰を試みるために、彼の罪を思い出させて、彼からのがれようとした。しかし、ヤコブは天使を行かせなかった。彼は、神があわれみ深いことを知っていたので、神のあわれみによりすがった。彼は、自分がすでに罪を悔い改めたことをさし示して、切に救いを願い求めた。ヤコブは、その生涯をふりかえってみると絶望するばかりであった。しかし彼は、天使を捕えてはなさず、苦悩の叫びをあげて真剣に願い求め、ついに聞かれたのである。

神の民も、悪の勢力との最後の戦いにおいて、これと同じ経験をするのである。神は、神の救出力に対する彼らの信仰、忍耐、確信を試みられる。サタンは、彼らの絶望的であること、そして、彼らの罪は大きすぎて、許しを受けることはできないと思わせ、彼らを恐怖に陥れようとする。彼らは、自分の欠点を十分知っていて、その生涯をふりかえってみれば、絶望である。しかし、彼らは、神の大きなあわれみと自分たちの真心からの悔い改めを思い出す。そして、無力な罪人が悔い改めるときにキリストによって与えられる神の約束を懇願する。彼らの祈りが直ちに聞かれなくても、彼らの信仰はくじけない。彼らは、ヤコブが天使を捕えたように、神の力を

しっかり握って、「わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません」と心から言うのである。

もし、ヤコブが欺瞞によつて長子の特権を獲得した罪を、前もって悔い改めていなかったならば、神は彼の祈りを聞き、彼の命をあわれみのうちに保護なさることはできなかった。それと同様に、悩みの時においても、神の民が恐怖と苦悩にさいなまれるときに、告白していない罪が彼らの前に現われてくるならば、彼らは圧倒されてしまうであろう。絶望が彼らの信仰を切り離し、神に救済を求める確信を持たなくする。しかし彼らは自己の無価値なことを深く認めるけれども、告白すべき悪を隠していない。彼らの罪は、キリストの贖罪の血によつてぬぐい去られていて、彼らはそれを思い出すことができないのである。

サタンは、人生の小事に忠実でなくても神はそれを見すごされるというふうによくの人々に信じこませる。しかし、神は、悪を是認も黙認もなさらないことが、ヤコブを扱われた方法によつて示された。罪の弁解をして隠そうとするもの、そして罪を告白せず許されないまま、天の記録に罪を残しておく者は、みな、サタンに打ち負かされる。彼らがりっぱなことを言い、榮譽ある地位にあればあるほど、彼らの行為は、神の前にいまわしく、大いなる敵は確実に勝利を収める。

しかし、ヤコブの生涯は、罪に陥つても真に悔い改めて神にたち歸る者を、神は見捨てられないことを証明している。ヤコブが、自分の力をふるつて獲得できなかったものを得たのは、自己降伏と堅い信仰によつてであった。こうして、神は、彼の熱望した祝福を与え得るものは神の能力と恵みだけであることを教えられた。最後の時代においてもこれと同様である。彼らは危険に当面し、絶望に陥るとき、ただ、贖罪の功績だけに頼らなければならぬ。われわれは自力では何もできない。全く無力で無価値なわれわれは、十字架につけられ復活された

救い主の功績に頼らなければならない。そうするかぎり、だれひとり滅びることはない。われわれの罪の長い暗黒の記録は、無限の神の目のおかれている。帳簿は完全である。われわれの罪は、一つとして忘れ去られてはいない。しかし、昔、神のしもべの叫びに耳を傾けられた神は、信仰の祈りを聞いて、われわれの罪を許される。神は約束された。そして、神は約束を守られるのである。

ヤコブは、不撓不屈の精神を持っていたから祈りが聞かれた。彼の経験は、たゆまず祈りぬくことに力があることを証拠だてた。今こそわれわれは、神に聞かれる祈りと不動の信仰についての教訓を学ばなければならない。キリストの教会、また、クリスチャン個々の最大の勝利は、才能や教育、あるいは富、または人間の援助によって得られるものではない。その勝利とは、神との交わりの部屋で熱心に苦闘する魂が、信仰によって力強いみ腕をつかむときに得られる。

すべての罪を捨て、熱心に神の祝福を求めようとしなければそれを得ることができない。しかし、ヤコブのように、神の約束をしっかりとにぎり、彼のように熱心に屈せず願い求めるものはみな、彼のように聞かれるのである。「まして神は、日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらずに長い間そのままにしておかれることがあるのか。あなたがたに言うておくが、神はすみやかにさばいてくださるであろう」(ルカ一八ノ七八)。

第 19 章

カナンに帰る

本章は、創世記三四 三六章に基づく。

ヤコブはヨルダン川を渡って、「無事カナンの地のシケムの町」に着いた(創世記三三ノ一八)。こうして、ふたたび故郷に安全に帰らせてくださいと、神に願ったベテルでのヤコブの祈りは聞かれた。彼は、しばらくの間シケムの谷に住んでいた。アブラハムが百年以上も前に初めて天幕を張り、約束の国で最初の祭壇を築いたのはここであった。ヤコブはここで、「天幕を張った野の一部をシケムの父ハモルの子らの手から百ヶシタで買い取り、そこに祭壇を建てて、これをエル・エロヘ・イスラエルと名づけた」(同・三三ノ一九、二〇)。「神、イスラエルの神」の意である。アブラハムと同様に、ヤコブも自分の天幕のそばに主のための祭壇をたて、朝夕の犠牲をささげるときに、家族の者を集めた。また後に、彼が井戸を掘ったのもここであった。そして、それから十七世紀が経過したときに、ヤコブの子であられる救い主イエスが来られて、真昼の暑さのなかで、そのかたわらに休み、驚嘆して聞き入る人々に「永遠の命に至る水」の泉についてお語りになったのである(ヨハネ四ノ一四)。

ヤコブとそのむすこたちのシケム滞在は、暴行と流血に終わった。家族のなかのひとりの娘がはずかしめられ

た。そして娘のふたりの兄弟は殺人罪を犯した。ひとりの軽はずみな若者の不法行為に対する報復として、町中が破壊され、男たちは殺された。このような恐ろしい結果の元をただせば、ヤコブの娘が、「その地の女たちに出かけて行」き、神を敬わない人々と交際しようとしたからであった。神を恐れない人々の中で楽しみを求める者は、自分をサタンの側において、彼の誘惑を招いているのである。

シメオンとレビの非道な残虐行為には、それ相当の理由がなかったわけではなかった。しかし、シケム人への彼らの行動は、恐ろしい罪であった。彼らは、自分たちの策略を巧みにヤコブから隠していた。ヤコブは彼らが行なった報復の知らせを聞いて恐怖に満たされた。彼は、むすこたちの虚偽と暴行にはなはだしく心を痛めて、ただこう言っただけであった。

「あなたがたはわたしをこの地の住民、…に忌みきらわせ、わたしに迷惑をかけた。わたしは、人数が少ないから、彼らが集まってわたしを攻め撃つならば、わたしも家族も滅ぼされるであろう」(創世記三四ノ三〇)。しかし、ヤコブが彼らの流血の行為をどんなに悲しみ、きらったかということは、それから約五十年後に、彼がエジプトでの臨終の床にあったときに言った言葉にあらわれている。「シメオンとレビとは兄弟。彼らのつるぎは暴虐の武器。わが魂よ、彼らの会議に臨むな。わが栄えよ、彼らのつどいに連なるな。…彼らの怒りは、激しいゆえにのろわれ、彼らの憤りは、はなはだしいゆえにのろわれる」(同・四九ノ五 七)。

このようなことは、深く恥じ入るべきことであるとヤコブは感じた。彼のむすこたちの性格のなかに、残酷と虚偽があらわれていた。天幕のなかには、偽りの神々があつた。そして、彼の家族のなかでさえ、偶像礼拝がある程度まで根をおろし始めていた。もし、主が彼らにふさわしい取り扱いをされるとすれば、彼らが回りの国

国のふくしゅうを受けるのをそのまま放任されるのではなからうか。

こうして、ヤコブが苦しみに沈んでいたときに、主は、ベテルにむかつて南へ進むように彼にお命じになった。ヤコブは、この場所のことを考えると、天使の幻と神のあわれみの約束だけでなく、自分がそこで、主を自分の神にすると契ったことも思い出した。この聖なる場所に行くに先だって、彼の家族は偶像礼拝の汚れから清められなければならないと、ヤコブは決心した。そこで彼は、天幕にいるすべての者に命じた。「あなたがたのうちにある異なる神々を捨て、身を清めて着物を着替えなさい。われわれは立つてベテルに上り、その所でわたしの苦難の日にわたしにこたえ、かつわたしの行く道で共におられた神に祭壇を造ろう」(同・三五ノ二、三)。

ヤコブは、深い感激にふけりながら、自分が父の天幕を逃げ出して、ひとりさびしく流浪の生活にはいり、初めてベテルに来たときのこと、そして、主が夜の幻のうちに彼にお現われになった物語を語った。神がどんなに驚くべき恵みを彼にお与えになったかを思い起こしたときに、彼自身が感謝の念にあふれるとともに、彼のむすこたちもまた強く心を打たれた。これは、彼らがベテルに着いてから、神の礼拝に参加するのにこの上もないよい準備であった。「そこで彼らは持っている異なる神々と、耳につけている耳輪をことごとくヤコブに与えたので、ヤコブはこれをシケムのほとりにあるテレピンの木の下に埋めた」(同・三五ノ四)。

神は、カナンの住民の心に恐怖心を起こされたので、彼らはシケムの虐殺のふくしゅうをしなかった。ヤコブの一族は、無事、ベテルに到着した。主は、ここで再びヤコブに現われて、契約の約束を新たにされた。「そこでヤコブは神が自分と語られたその場所に、一本の石の柱を立て」た(同・三五ノ一四)。

ヤコブは、ベテルで、彼の父の家の尊ばれた一員として長く共に暮らしていたリベカのうば、デボラの死を悲

しむために呼ばれた。デボラは、女主人のリベカに従って、メソポタミヤからカナンの地に來たのであった。この婦人の存在は、ヤコブに自分の幼かったころ、特に、強くやさしい愛をもって自分をはぐくんでくれた母をなつかしく思い起こさせた。デボラは大きな悲しみのうちに、かしの木の下に葬られ、その木は、「なげきのかしの木」と呼ばれた。デボラの忠実な奉仕の生活の記念と、その死に対する人々の悲しみとが、神のみ言葉のなかに保存される価値のあるものとみなされたことは、注目に値することである。

ベテルからヘブロンまでは、わずか二日で行ける所であったが、その途中でヤコブは、ラケルの死という耐えがたい悲しみに出会った。ヤコブは、彼女のために七年間の労働に二度も従事したが、彼女を愛したためにその労苦をいとわなかった。その愛がいかに深く永続的のものであったかは、ずっと後になって、ヤコブが死に臨んだときに、たずねてきたヨセフに、その生涯をふりかえって言った言葉のなかにあらわれている。「わたしがパダンから帰って来る途中ラケルはカナンの地で死に、わたしは悲しんだ。そこはエフラタに行くまでには、なお隔たりがあった。わたしはエフラタ、すなわちベツレヘムへ行く道のかたわらに彼女を葬った」と彼は言った(同・四八ノ七)。ヤコブは、その長い苦しい一生のできごとのなかで、ただラケルの死だけを思い起こしたのである。ラケルは死ぬ前に、二番めのむすこを生んだ。彼女は、最後の息のなかから、その子を「ベノニ」(わたしの悲しみの子)と呼んだ。しかし、父親は「ベニヤミン」(わたしの右の手の子、またはわたしの力)と名づけた。ラケルは、死んだ場所に葬られた。そして、記念のためにその場所に柱が建てられた。

エフラタへ行く途中で、もう一つのかくれた罪悪がヤコブの家族を傷つけ、長子ルベン、長子の特権と名誉とを失うにいたった。

ついに、ヤコブは旅路の終わりに来た。そして、「ヘブロンのマムレにいる父イサクのもとへ行った。ここはアブラハムとイサクとが寄留した所である」(同・三五ノ二七)。彼は父が死ぬまでここにとどまっていた。衰弱して目の見えないイサクにとって、長く離れていたむすこの親切な心づかいが、ひとりさびしくとり残された彼の晩年の慰めであった。

ヤコブとエサウは、父の臨終の床で出会った。かつて兄は、このときをふくしゅうの機会にしようとしていたのであったが、その後、彼の気持ちは大きく変わった。そして、ヤコブは、長子の特権の霊的祝福に満足して、父の富の継承を兄に譲った。エサウが求め尊んだ遺産もこれだけであった。彼らは、もう、ねたみや憎しみによって仲たがいをしてはいなかったが、彼らは別れて、エサウは、セイル山に移っていった。豊かな祝福をお与えになる神は、ヤコブが求めた更にすぐれたものをお与えになったただけではなく、それに加えて世の富もまたお与えになった。ふたりの兄弟の「財産が多くて、一緒にいることができなかつたからである。すなわち彼らが寄留した地は彼らの家畜のゆえに、彼らをささえることができなかつたのである」(同・三六ノ七)。こうして別れることは、ヤコブに関する神のみこころにかなつたことであつた。兄弟たちは、その信仰が著しく異なつていたら、彼らが別れて住むほうがよかつたのである。

エサウとヤコブは、同じように神の知識を授けられた。そして、ふたりは自由に神の戒めの道を歩いて、神の恵みにあずかることができたのである。しかし、彼らは、ふたりともそうはしなかつた。ふたりの兄弟は、異なつた道を歩き、彼らの道はさらに広く大きく別れていくのであつた。

神が独断的選択を行ない、エサウを救いの祝福から閉め出されたというようなことはない。神の恵みの賜物は

キリストによって、すべての者に分け隔てなく与えられている。人間が滅びるのは、自分自身の選択によるのであって、そのように選ばれたのではない。神は、み言葉の中に、すべての魂が永遠の命に選ばれる条件をお示しになった。それは、キリストを信じる信仰によって、神の戒めに従うことである。神は、神の律法と一致した品性を選ばれるのであるから、だれでも神の要求される標準に達する者は、栄光の王国にはいることができる。キリストご自身はこう言われた。「御子を信じる者は永遠の命をもつ」(ヨハネ三ノ三六)。「わたしにむかつて『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいます**わが父の御旨を行う者**だけが、はいるのである」(マタイ七ノ一二)。そして、主は、黙示録のなかで言われる。「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、自分の着物を洗う者たちは、さいわいである」(黙示録二二ノ一四)。人間の最後の救いについて、み言葉の中にあらわされている選びとは、これだけである。

おそれおのいて自分の救いを達成しようとする者はみな選ばれている。武具をまとして、信仰のよき戦いをする者は選ばれている。目をさまして祈り、み言葉を研究し、誘惑からのがれる者は選ばれている。常に信仰を持ち、神のみ口から出るすべてのことばに従おうとする者は選ばれている。贖罪に必要な**ことが**らはすべての者に無代で与えられている。贖罪の**成果**は、条件に応じる者に与えられる。

エサウは契約の祝福を軽べつした。彼は靈的利益よりは、物質的利益を高く評価した。そして、彼は望んでいたものが与えられた。彼が神の民から離されたのは、彼自身が故意にそう選んだのであった。ヤコブは、信仰の遺産を選んだ。彼は、策略と欺きと偽りによってそれを手にしたが、神は、彼の罪が矯正されていくことをお許しになった。ヤコブは、その後あらゆる苦い経験をなめたのであったが、自分の志をひるがえしたり、自分の選

扱を放棄したりはしなかった。彼は、人間の技巧や策略にたよって、祝福を得ようとすることは、神にさからっていることであることを学んだ。ヤコブは、ヤボクの渡しで、夜、組打ちをしてから後は全く変わった人になった。自己過信が根本からぬき取られた。それ以来、初めのころの狡猾さがみられなくなった。策略と欺瞞のかわりに、そばくと真実さが彼の生活にあらわれた。彼は、全能のみ腕にひたすらたよるという教訓を学んだ。そして、試練と苦難のただなかにあっても、心を低くして神のみこころに従った。彼の品性の卑しい性質は、炉の火で焼かれ、真の金が精練されて、アブラハムとイサクの信仰が、なんのかげりもなくヤコブのうちに見られるようになった。

ヤコブの罪とその罪への一連のできごとは、悪影響を及ぼさないわけにはいかなかった。それは、彼のむすこたちの性質とその生涯に苦い実となつてあらわれるにいたった。このむすこたちが成人したころ、彼らの性質に重大な欠点があらわれた。一夫多妻の結果が家庭内に明らかに見られた。この恐ろしい悪は、愛の源泉そのものを枯らし、その影響は最も神聖なきずなを弱める。数人の母のねたみは、家庭の関係をみじめなものにした。子供たちは争い合い、他からのさしずを受けるのをきらつて成長した。そして、父親の生涯は心労と悲しみにおおわれ、暗くなつた。

しかし、ラケルの長男ヨセフは、著しく異なつた性質の持ち主であつた。彼のまれに見る容貌の美は、彼の精神と心の内面的美の反映であつた。ヨセフは純粹で、活動的で、歡喜にあふれていた。そして、道徳的にも真剣で堅固な性質をあらわしていた。彼は、父親の教えに耳を傾け、神に従うことを愛した。後年エジプトに行ったとき、彼のうちに著しくあらわれた柔和、忠誠、誠実などの特性が、すでに彼の日常生活のなかに見られた。母

親がなくなっていたために、彼は、父親に強い愛着をおぼえた。そして、ヤコブの心は、年をとってから生まれ、この子と堅く結ばれていた。彼は「他のどの子よりも」ヨセフを愛した。

しかし、この愛情さえ、悩みと悲しみの原因になった。不覚にも、ヤコブはヨセフに対する偏愛を表面にあらわして、他のむすこたちのねたみを起こさせた。ヨセフは、兄弟たちの悪い行動を見て非常に苦しんだ。彼は、穏やかに兄弟たちに忠告したが、それはただ、彼らの憎しみと恨みをさらに激しくするだけであった。ヨセフは彼らが神に対して罪を犯すのを見るにしのびなかった。そこで彼は、そのことを父に話し、父の権威によって彼らを改めさせることができるように望んだ。

ヤコブは、苛酷または厳格な処置をとって、彼らを怒らせることを注意深く避けた。ヤコブは、自分がどんなに子供たちのことを憂慮しているかを、強い感動をもって話した。そして、父の白髪を尊びその名をはずかしめないように願った。特に、こうした神の律法を無視する行為によって、神の名を汚さないように彼らに熱心に訴えた。むすこたちは、彼らの悪行が父に知られたことを恥じ、悔い改めたように思われた。しかし、明るみに出たために彼らの気持ちはさらに悪化した。彼らはそれをかくしているに過ぎなかった。

普通なら偉い人々が着るような高価な上衣を、ヤコブが無分別にもヨセフに与えたことは、さらに父親の偏愛を示すものと思われて、年上の兄弟たちをさしおいて、ラケルのむすこに長子の特権を授けるのではないかという疑念をさえ起こさせるのであった。ある日、少年が、彼の見た夢を彼らに語ったために、彼らはますますヨセフを憎んだ。「わたしたちが畑の中で束を結わえていたとき、わたしの束が起きて立つと、あなたがたの束がまわりにきて、わたしの束を拝みました」とヨセフは言った（創世記三七ノ七）。

「あなたはほんとうにわたしたちの王になるのか。あなたは実際わたしたちを治めるのか」と兄弟たちは、彼をねたましく思い、怒って言った(同・三七ノ八)。

やがて彼は、また同じような意味の夢をもう一つみて、それを語った。「日と月と十一の星とがわたしを拝みました」(同・三七ノ九)。この夢は、最初のもと同様にその意味がすぐわかった。そこにいた父は、彼をとがめて言った。「あなたが見たその夢はどういうのか。ほんとうにわたしとあなたの母と、兄弟たちが行って地に伏し、あなたを拝むのか」(同・三七ノ一〇)。彼の言葉はきびしい譴責であつたけれども、ヤコブは、主がヨセフに将来のことをあらわしておられるのを信じた。

ヨセフが兄弟たちの前に立つたとき、彼のりっぱな顔は、聖霊の啓示の光に輝いていたので、彼らは称賛せずにはおれなかつた。しかし、彼らは、自分たちの悪行を捨てようとはせず、自分たちの罪を責める彼の純潔さを憎んだ。カインの心を動かしたのと同じ精神が彼らの心に燃え上がった。

兄弟たちは、羊の群れの草を求めて、ここかしこ移動し、時には数か月も遠くへ行つて家にいないことがよくあつた。前述のような事情のあとで、兄弟たちは、父がシケムに買つておいた場所へ出かけて行つた。ところが、しばらく時がたつてもなんのたよりも来ないので、父親は彼らの安全を気づかいだした。というのは、彼らが前にシケムの人々に残酷なことをしていたからである。そこで彼は、ヨセフを彼らのところへつかわし、彼らが安全かどうかを行つて見てこさせることにした。もしヤコブが、兄弟たちのヨセフに対する憎悪心を知っていたならば、ヨセフをひとりで彼らのところへは送らなかつたであろう。しかし兄弟たちは注意深くヨセフに対する感情を表に出さなかつた。

ヨセフは喜んで父から離れていった。しかし、年とった父も、この若者も、ふたりがもう一度会うまでの間にどんなことが起こるのかを夢想だにしなかった。ヨセフは、ひとりで長いさびしい旅を終えてシケムに到着したが、兄弟たちや羊の群れはそこには見つからなかった。彼らのことを尋ねているうちに、ひとりの人がドタンに行くように教えてくれた。ヨセフはすでに五〇マイル以上も歩いてきたが、まだこれから一五マイルも先に行かなければならない。しかし、ヨセフは、兄弟たちが自分には不親切であつても、なお彼らを愛していたから、彼らに会って父親を安心させようと思い、疲労を忘れて先へ急いだ。

兄弟たちはヨセフが近づくのを見た。彼が、彼らに会うために遠くから旅をしてきて疲れて、うえているのであるから、兄弟の愛をもつて喜んで迎えるべきであるにもかかわらず、彼らは激しい憎しみを和らげなかった。彼らは父の愛のしるしである上衣を見て、怒り狂った。「あの夢見る者がやって来る」と彼らはあざ笑って叫んだ。長い間ひそかにいだいていたねたみとふくしゅうの精神が、今彼らをとりにした。「さあ、彼を殺して穴に投げ入れ、悪い獣が彼を食つたと言おう。そして彼の夢がどうなるか見よう」と彼らは言った(同・三七ノ一九、二〇)。

もしルベンがいなかったら、彼らはその計略を実行していたことであろう。ルベンは兄弟を殺害することに加わることができなかった。そして、ヨセフを生きたまま穴に投げ入れて、そのままほうっておいて死ぬにまかせようと言った。しかし、ルベンはひそかにヨセフを助けて、父のところへ帰らせようとたくらんでいた。ルベンは、その計画に一同の同意を得たあとで、自分の感情をおさえきれなくなった。そして自分の真の目的が何であるかを発見されるのを恐れて仲間を離れていった。

ヨセフは危険が身に迫っていることも気づかず、さがしていた兄弟たちが見つかったことを喜んだ。しかし彼は、期待していたあいさつの言葉の代わりに、怒りとふくしゅうの目でにらまれて驚いた。彼は捕えられ、上衣を脱がされた。そのあざけりと脅かしは、彼らがヨセフの命を奪おうとしていることを明らかに示した。だれも彼の哀願に耳をかす者はなかった。彼は怒り狂った男たちのなすままになっていた。彼らは、ヨセフを荒々しく引っぱって行き、深い穴へ投げこんだ。そして逃げられないことを確かめた上で、そのままの状態に彼を餓死させようとした。こうして彼らは、「すわってパンを食べた」（同・三七ノ二五）。

しかし、兄弟たちのなかには、不安な気持ちをいだいた者があつた。ふくしゅうによつて得られると思つた満足感がなかつたのである。やがて旅人の一団が近づいてくるのが見えた。それはヨルダンの向こうのイシマエルの隊商で、香料その他の商品を持ってエジプトへ行く途中であつた。ユダは、兄弟を穴の中においたまま死なせるよりは、異邦の商人に売ろうと言ひ出した。そうすれば、彼を都合よく追放することができて、殺さないで済む。「彼はわれわれの兄弟、われわれの肉身だから、彼に手を下してはならない」と言つた（同・三七ノ二七）。他の者もみなこれに賛成したので、ヨセフは急いで穴から引き上げられた。

ヨセフは、隊商を見るとすぐに恐ろしい自分の運命に気づいた。奴隸になることは死ぬよりも恐ろしい運命であつた。恐ろしさのあまり、泣き叫んで、兄弟たちひとりびとりにすがつて頼んだがなんの役にも立たなかつた。あわれみの情を表わした者もあつたが、他の者からちよう笑されることを恐れて何も言わなかつた。すべての者が、こうなつては引くに引けないところまで行つてしまったことに気づいた。もしもヨセフを救うならば、ヨセフは起こつたことを父に知らせるにちがいない。そして父は、愛するむすこに対する彼らの残酷な行為を許すは

ずはないのであった。彼らは、ヨセフの哀願に対して心を鬼にして異邦の商人の手にヨセフを渡してしまった。隊商は進んで行き、やがて見えなくなった。

ルベンが穴にもどってみると、ヨセフはいなかった。ルベンは驚きと自責の念にさいなまれて、自分の着物を裂き、兄弟たちのところに来て、「あの子はいない。ああ、わたしはどこへ行くことができよう」と叫んだ(同・三七ノ三〇)。ルベンは、ヨセフの運命を聞いてもう彼を取りもどすことができないことを知り、彼らと一つになつてその罪をかくすようになってしまった。彼らは雄やぎを殺してヨセフの着物をその血にひたした。そしてそれを父のところを持って行つて、これを野で見つけた、これはヨセフのではないかと思う、と言つた。「わたしたちはこれを見つけたが、これはあなたの子の着物か、どうか見さだめてください」と彼らは言つた(同・三七ノ三二)。彼らは、この時の恐ろしさを予期してはいたが、父の心がはり裂けるばかりに苦しみ、悲しみの窮みに達して泣き叫ぶのを目撃しなければならぬとは思つていなかった。「わが子の着物だ。悪い獣が彼を食つたのだ。確かにヨセフはかみ裂かれたのだ」とヤコブは言つた(同・三七ノ三三)。むすこや娘たちがどんなに彼を慰めようとしてもむだであつた。ヤコブは、「衣服を裂き、荒布を腰にまとつて、長い間その子のために嘆いた」(同・三七ノ三四)。時がたつても彼の悲しみは慰められなかった。「わたしは嘆きながら陰府に下つて、わが子のもとへ行こう」と言つて彼は嘆き悲しんだ(同・三七ノ三五)。むすこたちは、自分たちのしたことの恐ろしさを感じた。しかし彼らは父の譴責を恐れて、彼らの罪を心にかくしていた。それは自分たちにさえ、非常に大きな罪と思われたのである。

第 20 章

エジプトにおけるヨセフ

本章は、創世記三九 四一章に基づく。

一方、ヨセフは、売られた隊商につれられてエジプトに向かった。隊商がカナンの国境に向かって南下したとき、ヨセフは遠方に父の天幕が張つてある山を見ることができた。彼は愛する父親のさびしさと苦しさを察して激しく泣いた。ふたたびドタンで起こったことを思い出した。彼は兄弟たちの怒りを見、彼らの恐ろしい目つきを身を感じた。泣き叫んで訴える彼に浴びせられた鋭いぶつの言葉が彼の耳に鳴つていた。彼は将来のことを考えて恐れおののいた。たいせつに扱われたむすこから、いやしい無力な奴隷になるとはなんといい変わりようであろう。ただひとり、友もなく異国に連れられていく彼の運命はどうなることであろうか。ヨセフは、しばし悲哀と恐怖の念にかられて気が狂いそうであった。

しかし、神の摂理のうちに、このような経験さえも祝福になるのであった。ヨセフはわずかの時間のうちに、数年かかっても得られない教訓を学んだ。彼の父は、強くやさしい愛の人であつたが、彼を特別に愛してあまやかしたことは彼のためにならなかつた。この愚かな偏愛は兄弟たちを怒らせ、彼らに残虐行為を行なわせ、ヨセ

フを家庭から引き離す原因になった。その影響は、彼自身の性格にもあらわれていた。彼は、これまでに助長された欠点を改める必要があった。彼はうぬぼれの強い苛酷な人間になりつつあった。彼は、父親のやさしい保護になれていたので、前途の困難と、異国人また奴隷としてのきびしい、だれの保護もない生活になんの準備もないことを感じた。

そのとき彼は、父の神のことを考えた。彼は幼いときから、神を愛し恐れることを教えられていた。彼は父の天幕の中で、ヤコブが逃亡者となって家を脱出したときに見た幻の話をよく聞いたものであった。彼はヤコブに与えられた主の約束とそれが成就した方法、すなわち、父が最も必要に迫られたときに、神の天使が現われて彼を教え、慰め、保護したことを教えられていた。また、彼は、人間のために贖い主を与えられた神の愛について学んでいた。彼は今、こうした尊い教訓をまざまざと思い出した。ヨセフは、先祖の神が自分の神であることを信じた。彼はその時その場所で自分を全く主にささげ、イスラエルを守るものが、流浪の地で彼と共にいてくださるように祈った。

彼はどのような環境のもとにあっても、天の王の臣民らしく行動し、神に忠誠を尽くそうと決心して大きな感動をおぼえた。彼は、専心、主に仕えようと思った。彼は勇敢に試練に当面し、忠実に義務を果たそうとした。この一日の経験が、ヨセフの生涯の分岐点になった。その恐ろしい不幸が、あまやかされた少年から、思慮深く、勇敢で沈着なおとなに彼を変えたのである。

エジプトに到着したヨセフは、パロの侍衛長ポテパルに売られてそこで十年間仕えた。ここで彼は非常に大きな誘惑に会った。彼は、偶像礼拝のただ中にいた。偽りの神の礼拝は、王宮のあらゆる栄華に取り巻かれ、当時

最高の文明国の富と教養にささえられていた。しかし、ヨセフは彼の純真さと神への忠誠を保った。彼の周囲には、至るところに罪惡の光景や物音があつたが、彼はそれを見ようともしないのであつた。彼は、禁じられた問題を考えないのであつた。彼はエジプト人の好感を得ようと望んで原則を隠すことをしなかった。もし、彼がそうしたならば、試練に負けたことであろう。しかし彼は、父祖の信仰を恥と思わず、自分が主の礼拝者であることを少しも隠そうとしなかった。

「主がヨセフと共におられたので、彼は幸運な者となり、…その主人は主が彼とともにおられることと、主が彼の手のすることをすべて栄えさせられるのを見た」(創世記三九ノ二、三)。ポテバルのヨセフに対する信任は日ごとに増し、彼はついにポテバルの家令に任じられ、財産を全部ゆだねられた。「そこで彼は持ち物をみなヨセフの手にゆだねて、自分が食べる物のほかは、何をも顧みなかった」(同・三九ノ六)。

ヨセフにゆだねられたものが、すべて驚くべき繁栄をもたらしたことは、直接奇跡が行なわれたためではなかった。それは彼の勤勉と管理と活動に対して、天からの祝福が加えられたのである。ヨセフは、この成功を神の恵みに歸し、偶像礼拝者の主人もそれがこれまでにない繁栄の秘訣であることを認めた。ところが、目的に向かつてたゆまず努力をするのでなければ、成功を収めることはできない。神は、神のしもべが忠実であることによって栄光を受けられた。神を信じる者の純潔と高潔とが、偶像礼拝者とは著しく対照的にあらわされることを神は望まれた。こうして、異教の暗黒のただ中であつて、天の恵みの光が輝かされるのであつた。

ヨセフの温順と忠誠は、侍衛長の心を捕え、ヨセフを奴隷というよりもむしろ思うようになった。ヨセフは、地位の高い人や学者と接し、科学、語学、社会情勢などの知識を得た。これは、彼が将来エジプトの総

理大臣となるのに必要な教育であった。

ところがヨセフの信仰と誠実とが、火のような試練に会うことになった。主人の妻が神の律法を犯すように彼を誘惑した。彼はこれまで、異教国にみながっていた腐敗に染まずにいた。しかし、突然、強く、魅惑的に迫ったこの誘惑に、彼はどうしたらよいであろうか。ヨセフは拒絶すればどういう結果になるかをよく知っていた。応じればそれは秘密にされて、寵愛と報賞を受ける。反対にそれを拒めば、汚名を着せられて投獄され、殺されるかも知れなかった。彼の将来の人生のすべてがこの一瞬の決断にかかっていた。原則が勝利するであろうか。ヨセフはそれでもなお神に忠誠を尽くすであろうか。天使たちは、言葉にあらわせない不安をいだいて、この光景をながめた。

ヨセフの答えは、宗教的原則の力を示した。彼は、地上の主人の信頼を裏切ろうとしなかった。そして、結果がどうなるかと、彼は天の主人に忠実であろうと願った。多くの人々は、神と聖天使たちの目が見守っているなかで、同胞の前ではしないようなかつてなふるまいをする。しかし、ヨセフはまず第一に神のことを考えた。「どうしてわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができましょう」と彼は言った(同・三九ノ九)。

もし、神がわれわれのなすこと、言うことのすべてを見聞きして、その言行動作をそのまま記録しておられること、そして、われわれはいつかそのすべてに当面すべきであることを常に念頭においていれば、罪を犯すことを恐れるであろう。青年たちはどこにいて、何をしようとも神の面前にあることを覚えていよう。われわれの行動は、なに一つ注視の目をのがれることができない。至高者からわれわれの道を隠すことはできない。人間の法律は時としてきびしく思われるが、犯罪が発見されないまま処罰を免れることがよくある。しかし、神の律法は

そうではない。どんな夜中の暗黒も、犯罪者を隠すことはできない。自分ひとりだけであると思っても、目に見えない目撃者がすべての行為を見ている。心の動機でさえも、神の目にはあきらかである。すべての行為、すべての言葉、すべての思いは、あたかも全世界にその人がひとりしかいないかのようにはっきり認められて、天の注目が彼に集中しているのである。

ヨセフは、廉潔であつたために苦しみを受けた。彼を誘惑した者は、道にはずれた罪の汚名をヨセフに着せて恨みを晴らし、彼を獄屋に投げ入れた。もしポテパルが妻の訴えをそのとおりに信じたならば、ヘブルの青年の命はなかつたことであろう。しかし、ヨセフの生活態度に常にあらわされていた憤みと正直とは、彼の無実を証明していた。しかし、主人の家の評判を傷つけないために、ヨセフは恥辱と束縛を受けることになった。

ヨセフは初め獄屋番の苛酷な扱いを受けた。「彼の足は足かせをもつて痛められ、彼の首は鉄の首輪にはめられ、彼の言葉の成る時まで、主のみ言葉が彼を試みた」と詩篇記者は言っている(詩篇一〇五ノ一八、一九)。しかし、ヨセフの真の品性は、この暗い獄屋の中でも輝いていた。彼は、信仰と忍耐とを堅く守り通した。彼の長年の忠実な奉仕は、ここで不当な報いを受けることになったが、彼は気分を害したり、信頼を失つたりはしなかつた。ヨセフは自己の無実を自覚していたから、心は平静であつた。そして、神に自分のことをゆだねていた。彼は自分の逆境を悲しまず、かえつて他の人々の悲しみを軽減することによつて、自分の悲しみを忘れようとした。彼は、獄屋のなかでもなすべき働きを見いだした。神は、この苦難という学校のなかで、さらに偉大なことに役立つ準備を与えようとされたが、ヨセフは必要な訓練を受けることを拒まなかつた。彼は獄屋のなかで、圧迫と専制の結果、また、犯罪の結果を目撃し、正義、同情、慈悲の教訓を学んだ。これが、知恵と同情をもつて

権威を行使するための準備を彼に与えたのである。

ヨセフは徐々に獄屋番の信任を得るようになり、ついには、すべての囚人の責任をゆだねられるようになった。彼の日常生活にあらわれた誠実さ、また、悩み苦しむ人々に対する同情など、彼が獄屋のなかで行なったことがヨセフの将来の繁栄と名誉への道を開いた。われわれが他人に輝かす光は、すべて、また自分たちに反映する。悲しむ者に語るすべての親切で同情に満ちた言葉、しいたげられている者を救うすべての行為、貧しい人々へのすべての贈り物などは、それらが正しい動機から出たものであるならば、必ず祝福となってそれを与えたものにもどってくる。

エジプト王の給仕役の長と料理役の長とが、罪を犯して獄屋に入れられ、ヨセフの責任下におかれた。ある朝ふたりが思い悩んでいたので、ヨセフは親切にそのわけをたずねた。すると、ふたりとも不思議な夢を見て、その意味を知りたく思っているのだと語った。ヨセフは、「解くことは神によるものではありませんか。どうぞ、わたしに話してください」と言った(創世記四〇ノ八)。彼らはおのおのその夢を語り、ヨセフが夢の解き明かしをした。それによると、三日のうちに給仕役の長はもとの地位にもどって以前と同じようにパロの手に杯をささげるようになるが、料理役の長のほうは王の命令によって殺されるというのであった。そして、それはヨセフの言ったとおりになった。

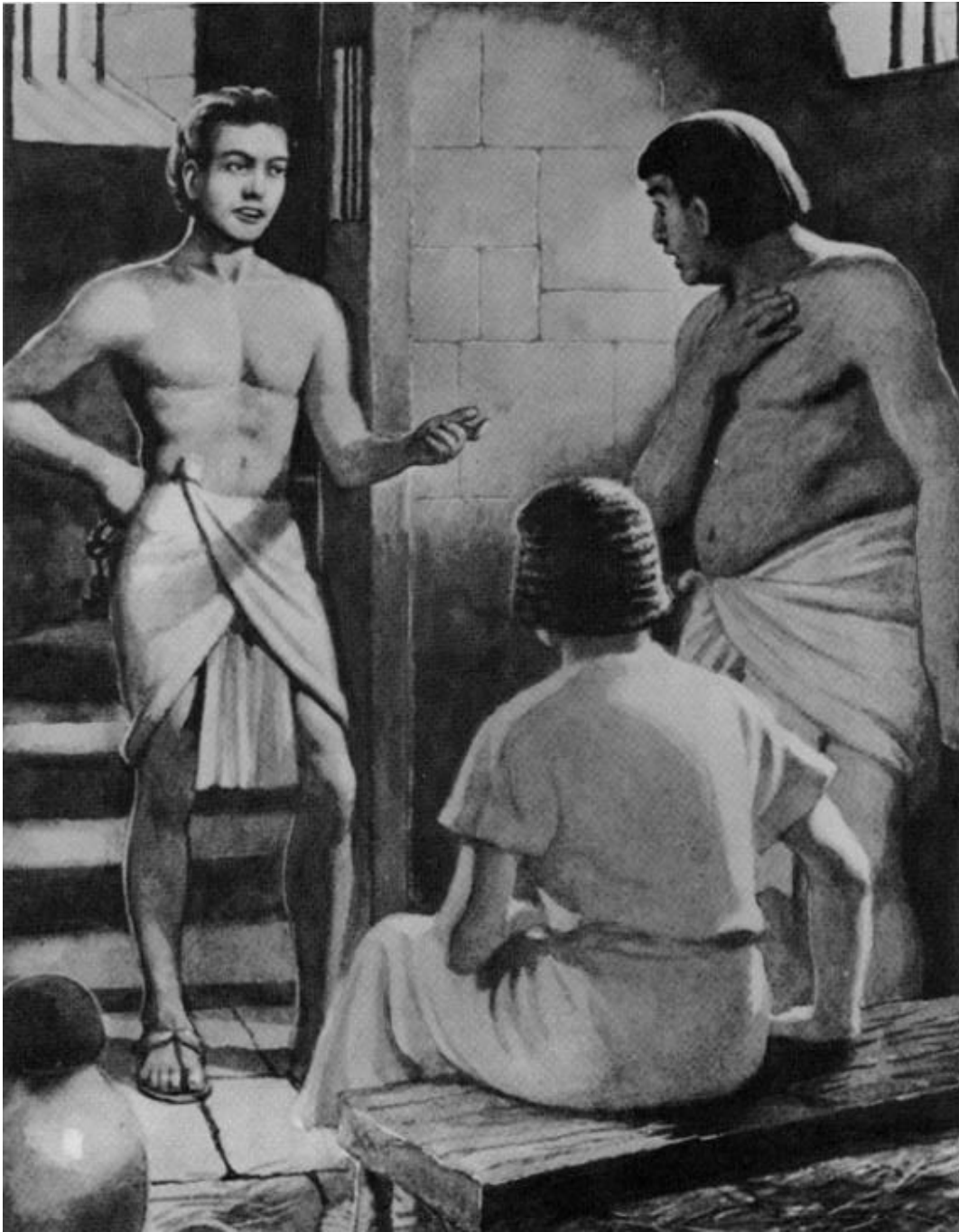
王の給仕役の長は、ヨセフの夢の解き明かしと、獄屋での数多くの親切で慈悲深い行為に深く感謝した。ヨセフはそれに答えて、自分が獄屋に不当につながれていることを涙ながらに訴えて、彼の件を王に取り計らってくれるように頼んだ。「それで、あなたがしあわせになられたら、わたしを覚えていて、どうかわたしに恵みを施し、

わたしの事をパロに話して、この家からわたしを出してください。わたしは、実はヘブルびとの地からさらわれてきた者です。またここでもわたしは地下の獄屋に入れられるような事はしなかったのです」とヨセフは言った（同・四〇ノ一四、一五）。給仕役の長の夢はそのとおり実現した。しかし、彼は、ふたたび王の愛顧をこうむったとき、恩人ヨセフのことをすっかり忘れてしまった。ヨセフは、それから二年近くも獄屋の中に残された。彼の心にともされた希望はうすれ、多くの苦難の上に、人に忘れ去られる苦しみを心に痛く感じるのであった。

しかし、神のみ手は獄屋の扉をまさにあけようとしていた。エジプトの王は、一夜のうちに二つの夢を見た。それらは、明らかに同じ事件を指示し、しかも大きな災いを予告しているかのように思われた。王は、その夢の意味を理解することができなかった。しかし夢は王の心を悩ましつづけた。エジプトのすべての魔術師や知者たちも、それを解き明かすことができなかった。王の困惑と苦悩はますますつのり、王宮全体が恐怖に襲われた。この大騒ぎが起こったときに、給仕役の長は自分が夢を見たときの事情を思い出し、それとともにヨセフの記憶がよみがえってきた。そして、自分の怠慢と忘恩とを考えて、自責の念に苦しめられた。彼はただちに、自分と料理役の長とが見た夢をヘブルの囚人が解き明かしてくれて、彼の言ったとおりになったことを王に話した。

パロが、自国の魔術師や知者たちを退けて、異国人、しかも奴隷の意見を聞くということは恥辱であった。しかし、彼は、心の苦悩が解決されるのであれば、どんなに身分の卑しい者の言うことでも聞き入れようとしていた。使いの者が、すぐにヨセフのところへ送られた。彼は囚人の着物を脱ぎ、ひげをそった。彼の髪の毛が、屈辱と投獄の期間に長くのびていたからである。こうして彼は、王の面前に召し出された。

「パロはヨセフに言った、『わたしは夢を見たが、これを解き明かす者がいない。聞くところによると、あなたは



ヨセフは、牢に入れられた給仕役の長と料理役の長が悲しんでいるのを見て、親切に声をかけ、彼らの苦しみを和らげることができた。

夢を聞いて、解き明かしができるそうだと。ヨセフはパロに答えて言った、『いいえ、わたしではありません。神がパロに平安をお告げになりました』（同・四一ノ一五、一六）。

ヨセフのパロへの答えの中に、彼のけんそんと、神への信仰があらわされている。彼は、つつしみ深く、すぐれた知恵が自分にあるなどとは言わなかった。『いいえ、わたしではありません』。神だけがこれらの秘密を解き明かすことができるのである。

そこでパロは、彼の夢を語った。「夢にわたしは川の岸に立っていた。その川から肥え太った、美しい七頭の雌牛が上がってきて葦を食っていた。その後、弱く、非常に醜い、やせ細った他の七頭の雌牛がまた上がってきた。わたしはエジプト全国で、このような醜いものをまだ見たことがない。ところがそのやせた醜い雌牛が、初めの七頭の肥えた雌牛を食いつくしたが、腹にはいっても、腹にはいった事が知れず、やはり初めのように醜かった。ここでわたしは目が覚めた。わたしはまた夢をみた。一本の茎に七つの実った良い穂が出てきた。その後、やせ衰えて、東風に焼けた七つの穂が出てきたが、そのやせた穂が、あの七つの良い穂をのみつくした。わたしは魔術師に話したが、わたしにそのわけを示しうる者はなかった。」

「ヨセフはパロに言った、『パロの夢は一つです。神がこれからしようとすることをパロに示されたのです』。これから七年間の豊作が続く、畑も果樹園もこれまでにないほどの大豊作となる。しかしそのあとで七年間の凶作が続く、後に来るそのききんが、非常に激しいから、その豊作は国のうちで記憶されなくなるでしょう」。夢が二度くりかえされたのは、それがまちがいに間もなく起こるといふ証拠であった。彼は続けて言った。「それゆえパロは今、さとく、かつ賢い人を尋ね出してエジプトの国を治めさせなさい。パロはこうして国中に監督

を置き、その七年の豊作のうちに、エジプトの国の産物の五分の一を取り、続いて来る良い年々のすべての食糧を彼らに集めさせ、穀物を食糧として、パロの手で町々にたくわえ守らせなさい。こうすれば食糧は、エジプトの国に臨む七年のききんに備えて、この国のためにたくわえとなり、この国はききんによって滅びることがないでしょう」(同・四一ノ一七 二五、三一、三三 三六)。

解き明かしは、理路整然としていた。また、ヨセフの提案した政策は、堅実、賢明なものであったために、その正確なことは疑う余地がなかった。しかし、この計画の実行を、いつたにだれにゆだねるべきであろうか。この人選に国民の存亡がかかっていた。王は困惑した。しばらく、王はこの任命について考慮中であつた。王は給仕役の長から、ヨセフが知恵と思慮深さをもつて、獄屋の管理に当たつたことを聞いていた。ヨセフが行政の手腕においても、優秀な能力の持ち主であることは明らかであつた。給仕役の長は、今や、自責の念にかられていたので、恩人ヨセフを心からほめちぎつて、かつての忘恩の罪を償おうと努めた。さらに王の調査は、給仕役の長の報告にまちがいのないことを証明した。王国に臨む危険を指示する知恵を持ち、それに当面するのに必要な準備のある者は、国中でヨセフのほかになかつた。そこで王は、彼が提案した計画を実行に移す唯一の資格ある人物がヨセフであることを確信した。神の力がヨセフと共にあつたことは明らかであつた。しかもこの危機に臨んで、国家の諸問題に対処し得る資格のあるものは、王の役人のなかにひとりもいなかった。ヨセフがヘブル人の奴隷であることなどは、彼の明確な知恵と適正な判断力を考慮したとき、たいした問題ではなかつた。「われわれは神の霊をもつこのような人を、ほかに見いだし得ようか」と王は家来たちに言った(同・四一ノ三八)。

任命は決定された。ヨセフにとって驚くべき宣言がなされた。「神がこれを皆あなたに示された。あなたのよ

うにさとく賢い者はない。あなたはわたしの家を治めてください。わたしの民はみなあなたの言葉に従うでしょう。わたしはただ王の位でだけあなたにまさる」。王は、ヨセフの高い地位をあらわす記章を彼に与えようとするのであった。「そしてパロは指輪を手からはずして、ヨセフの手にはめ、亜麻布の衣服を着せ、金の鎖をくびにかけ、自分の第二の車に彼を乗せ、『ひざまずけ』とその前に呼ばわらせ、こうして彼をエジプト全国のかさとした」(同・四一ノ三九、四〇、四二、四三)。

「王はその家のつかさとしてその所有をことごとくつかさどらせ、その心のままに君たちを教えさせ、長老たちに知恵を授けさせた」(詩篇一〇五ノ二二、二三)。ヨセフは獄屋からエジプト全国のかさにと高められた。それは、高い名誉ある地位ではあるが困難と危険とが伴うものであった。人間は、高い頂に立てば必ず危険に会うものである。嵐は谷間の低いところに咲く花をそこなうことはないとしても、山頂にある大木を根こぎにすることがある。同様に、平凡な生活のときには廉潔を保って来た人も、世的成功と名誉に伴って誘惑に敗れて深い穴に落ちこむことがある。しかし、ヨセフの品性は、繁栄のときと逆境のときの両方の試練に耐えた。牢獄の中においてあらわされた神への忠誠は、パロの王宮に立ったときにもあらわされた。彼はこのときでさえも異教の地の他国人であり、真の神を礼拝する親族から遠く離れていた。しかし、彼は神のみ手が自分の歩む道を指示したことを心から信じ、神に常に信頼しつつ忠実に与えられた義務を果たしたのである。ヨセフを通して、王やエジプトの高官たちの注目は、真の神に向けられた。彼らは偶像礼拝を続けてはいたものの、主なる神の礼拝者の生活と品性にあらわれた原則を尊敬するようになった。

ヨセフはどのようにして堅固な品性を持ち、正しく知恵ある者としての記録を残すことができたのであろうか。

彼は幼少の時代から、自分の好みよりも義務を第一にしていた。青年時代の廉潔、単純な信頼、高尚な性質が成人したのちの行動となって実を結んだ。純潔で素朴な生活が、肉体的、知的能力の両方が力強く発達するのに有益であった。神のみわざを通して神と交わり、信仰の継承者たちに伝えられた偉大な真理の数々を瞑想することにより、ヨセフの霊的な性質は高められ、気高くされ、他のどんな研究も及ばないほどに、彼の心を広げて強くした。最も低いところから、最も高いところにいたるまで、あらゆる場所にあつて忠実に義務を果たしたことはすべての能力を最高の奉仕のために発揮する訓練となった。創造主のみこころに従つて生きる者は、最も真実で最も高尚な品性を発達させることができる。「主を恐れることは知恵である、悪を離れることは悟りである」(ヨブ記二八ノ二八)。

人生における小さなことが、品性の発展にどんな影響をおよぼすかを悟っている人は非常に少ない。われわれのなすべきことで、ほんとうに小さいというものは一つとしてない。われわれが日ごとに直面する環境は、われわれの忠実さをためし、さらに大きな信頼を受ける資格がある者かどうかをためすために意図されている。平常の生活での事務や取り引きにおいて原則を保ち続けることによって、心は快楽や好みよりも義務の要求を第一に考えるように習慣づけられる。このようにして訓練された心は、風にそよぐ葦のように善と悪との間にゆらぐことはない。彼らは誠実と真実の習慣をつけてきたために義務に対して忠実である。彼らは小さなことに忠実であることによって、大きなことにおいても忠実である力を得るのである。

正しい品性は、オフルの純金よりもさらに大いなる価値がある。それがなければ、だれひとり榮譽ある名声を博すことはできない。しかし、品性は遺伝しない。それは買うこともできない。道德上の美点も、すぐれた知的

素質も決して偶然の結果ではない。最も尊い賜物も、活用しなければなんの価値もない。高尚な品性の形成は、一生涯かかる仕事である。それは、熱心でたゆまぬ努力の結果でなければならない。神は機会をお与えになる。成功は、その活用いかにかかっている。

ヨセフと兄弟たち

本章は、創世記四一ノ五四―五六、四二―五〇章に基づく。

豊年の開始と同時に、やがて近づいてくるききんのための準備も始まった。ヨセフの指揮のもとに、エジプト全国の主要な町々には、巨大な倉庫がつくられ、期待された収穫物の余剰を保存する十分の手はずが整った。この同じ方針は、豊作の七年間続けられ、ついに貯蔵してある穀物の量を計ることができないまでになった。

やがて、ヨセフが予告したように七年間のききんがやってきた。「ヨセフの言ったように七年のききんが始まった。そのききんはすべての国にあったが、エジプト全国には食物があった。やがてエジプト全国が飢えた時、民はパロに食物を叫び求めた。そこでパロはすべてのエジプトびとに言った、『ヨセフのもとに行き、彼の言うようにせよ』。ききんが地の全面にあったので、ヨセフはすべての穀倉を開いて、エジプトびとに売った」（創世記四一ノ五四―五六）。

ききんはカナン地のにもおよび、ヤコブが住んでいた地方でも激しくなってきた。エジプトの王が十分のたくわえをしていると聞いて、ヤコブの十人のおすこたちは、穀物を買うためにエジプトにおかった。彼らは到着す

ると、王の役人のところに行く指示を受けた。そして、買いに来た他の人々とともにエジプト全国のかさの前
にすすんだ。「ヨセフの兄弟たちはきて、地にひれ伏し、彼を拝した」「ヨセフは、兄弟たちであるのを知って
いたが、彼らはヨセフとは知らなかった」(同・四二ノ六、八)。彼のヘブルの名は、王に与えられた名前に変え
られていたし、このエジプトのかさと、彼らがイシマエルびとに売った若者とはまったく似かよう点はなかつ
た。ヨセフは、兄弟たちが腰をかがめておじぎしているのを見て、かつて彼がみた夢を思い出し、昔の光景がは
っきりとよみがえってきた。彼は鋭いまなざしで一同をみわたしたが、ベニヤミンがいらないことに気がついた。
ベニヤミンも、これらの残忍な兄弟たちの非道な策略のために犠牲になったのではなからうか。彼は、事実を知
ろうと思った。彼は「あなたがたは回し者で、この国のすきをうかがうためにきたのです」ときびしく詰問した
(同・四二ノ九)。

彼らはヨセフに答えた、「いいえ、わが主よ、しもべらはただ食糧を買うためにきたのです。われわれは皆、
ひとりの人の子で、真実な者です。しもべらは回し者ではありません」(同・四二ノ一〇、一一)。ヨセフは、自
分が彼らと一緒にいたころのような高慢な心を、彼らがまだもっているかどうかを知りたかった。また、家のこ
とについて、少しでも手がかりになることを聞き出したいと思った。しかし、兄弟たちのいうことがどんなにあ
てにならないものかも彼はよく知っていた。そこで同じことをくりかえして尋ねたが、兄弟たちは、「しもべら
は十二人兄弟で、カナンの地にいるひとりの人の子です。末の弟は今、父と一緒にいますが、他のひとりはいな
くなりしました」と答えた(同・四二ノ一二)。

つかさは、兄弟たちが物語ることの真実性を疑っているかのようなふりをして、彼らをあいかわらず回し者の

ように扱った。そして、彼らをためしたいと思うから、彼らがエジプトに残り、ひとりだけ行って末の弟を連れてくるようにと彼は命じた。もしも兄弟たちが彼の要求に同意しなければ、回し者として取り扱われるのであった。しかし、ヤコブのむすこたちがそんなことをしていれば、家族は食物の不足に苦しまなければならないからそのような取りきめには同意することができなかった。それに、いったいだれが兄弟たちを牢獄に残したまま、ただひとりで旅に出かけるだろうか。そんな事情のもとで父に会うことがどうしてできようか。彼らは殺されるか、あるいは奴隷にされるかもしれないありさまであった。たとえば、ベニヤミンを連れてきたとしても、彼らと同じ運命にあうかもしれない。兄弟たちは、たったひとり残ったむすこを失わせて、父をさらに悲しませるよりも、一緒にそのまゝいて、共に苦しむことにきめた。彼らは、こうしてみな一緒に三日間、監禁所に入れられた。ヨセフが兄弟たちから離れていた年月の間に、ヤコブの子らは品性が変わっていった。彼らは、かつてはしっかりと心が強く、乱暴で、人をだまし、残酷で執念深かった。しかし、こうして逆境の中で試練にあったときに、彼らは無我の精神をあらわし、互いに真実で父に孝養をつくし、彼ら自身すでに中年に達していたが、父の権威に従うようになった。

エジプトの牢獄の中ですごした三日間は、兄弟たちが、過去の罪の数々を反省する苦い悲しみの日々であった。ベニヤミンを連れてこなければ、回し者であるとの疑いは確定するし、ベニヤミンを連れて行くことに父が同意してくれる希望はほとんどなかった。三日めになって、ヨセフは兄弟たちを召し出した。彼は、もはやこれ以上兄弟たちを拘留しようとは考えなかった。すでに長く、父とその家族たちは食べ物不足に苦しんでいる。ヨセフは言った。「こうすればあなたがたは助かるでしょう。わたしは神を恐れます。もしあなたがたが真実な者な

ら、兄弟のひとりをあなたがたのいる監禁所に残し、あなたがたは穀物を携えて行って、家族の飢えを救いなさい。そして末の弟をわたしのもとに連れてきなさい。そうすればあなたがたの言葉のほんとうであることがわかって、死を免れるでしょう」(同・四二ノ一八―二〇)。兄弟たちは、父がベニヤミンを彼らと一緒にエジプトへ行かせないだろうと言いつつもこの計画を受け入れることに同意した。ヨセフは、兄弟たちに通訳者を通して話していたので、兄弟たちは自分たちの言葉がつかさにはわからないと思い、自分たちの思うままをヨセフの前で語り合っていた。彼らは互いに、自分たちのヨセフに対するあつかいがまちがっていたことを反省し、「確かにわれわれは弟の事で罪がある。彼がしきりに願った時、その心の苦しみを見ながら、われわれは聞き入れなかった。それでこの苦しみに会うのだ」と言った(同・四二ノ二二)。ドタンでヨセフを救おうと計ったルベンは「わたしはあなたがたに、この子供に罪を犯すなど言ったではないか。それにもかかわらず、あなたがたは聞き入れなかった。それで彼の血の報いを受けるのです」とつけ加えた(同・四二ノ二二)。ヨセフはもはや感情をおさえることができず、外に出て泣いた。それからまたもどってきて、ヨセフは兄弟たちの前でシメオンをしばり、牢獄に入れた。かつて彼らがヨセフを残酷にあつかったとき、シメオンが兄弟たちをそそのかした主謀者であった。彼が選ばれたのは、そのためであった。

兄弟たちに、立ち去る許可を与える前に、ヨセフは彼らに穀物を与え、その代金は、各自の袋の口のところにひそかに返すように指示した。また彼は故郷への旅路の間の家畜の飼料も与えた。帰る途中で、彼らのひとりが袋をあけ、金袋をみつけて驚いた。このことを他の者に知らせると彼らはあわてふためき、「神がわれわれにされたこのことは何事だろう」と話し合った(同・四二ノ一八)。彼らは、これを主からの賜物とすべきだろうか、

あるいは、主が彼らの罪を罰するためにこのようなことをし、さらに深い苦しみに合わせようとしておられるのだろうか。兄弟たちは、神が彼らの罪を見られて罰せられるのだと考えた。

ヤコブは、必ずこれらの帰りを今か今かと待っていたが、彼らが到着するや、天幕じゅうの者がみな集まり、彼らが、エジプトで起こったいろいろなことを、父に話すのを熱心に聞いた。すべての者の心は、驚きと不安に満たされた。その上、袋をあけてみるとめいめいの袋の中に金包みがいっているのを見て、エジプトのつかさの行動にはなにか悪いたくらみがあるように思えて、彼らの恐怖心はますますつのった。悩み苦しんだ老父は叫んだ。「あなたがたはわたしに子を失わせた。ヨセフはいなくなり、シメオンもいなくなった。今度はベニヤミンをも取り去る。これらはみなわたしの身にふりかかって来るのだ」。ルベンも答えた。「もしわたしが彼をあなたのもとに連れて帰らなかったら、わたしのふたりの子を殺してください。ただ彼をわたしの手にまかせてください。わたしはきつと、あなたのもとに彼を連れて帰ります」。この軽率な言葉は、ヤコブの心を慰めることができなかった。彼の答えは「わたしの子はあなたがたと共に下って行ってはならない。彼の兄は死に、ただひとり彼が残っているのだから。もしあなたがたの行く道で彼が災に会えば、あなたがたは、しらがのわたしを悲しんで陰府に下らせるであろう」(同・四二ノ三六―三八)。

しかし、ききんは続いた。時がたつにつれてエジプトから持ってきた穀物もほとんどなくなった。ヤコブの息子たちは、ベニヤミンを連れずにエジプトに行くことはおだなことを知っていた。彼らは父の決心を変える望みが全くないことがわかっていたので、だまってなりゆきを見守っていた。ききんはいよいよ激しさを増していった。宿営にいるすべての人々の沈んだ表情をみて、年老いたヤコブは、彼らの必要をさとした。ついに彼は、

「また行って、われわれのために少しの食糧を買ってください」と言った(同・四三ノ二)。

ユダは答えた。「あの人はわれわれをきびしく戒めて、弟が一緒にでなければ、わたしの顔を見てはならないと言いました。もしあなたが弟をわれわれと一緒にやってくださるなら、われわれは下って行って、あなたのために食糧を買ってきましょう。しかし、もし彼をやられないなら、われわれは下って行きません。あの人がわれわれに、弟と一緒にでなければわたしの顔を見てはならないと言ったのですから」。父の決心が揺らぎ始めたのをみてユダはさらに、「あの子をわたしと一緒にやってくだされば、われわれは立って行きましょう。そしてわれわれもあなたも、われわれの子供らも生きながらえ、死を免れましょう」(同・四三ノ三―五、八)と言い、自分がベニヤミンの身を保証し、もしもベニヤミンを父のもとに返さなかったならば、自分が永久にその責任を負うと言った。

ヤコブは、もはや同意せざるを得なくなり、おすこたちには、旅に出る準備をすることを命じた。ヤコブは、ききんで荒廃した国で産出する「少しの乳香、少しの蜜、香料、もつやく、ふすだしう、あめんどう」をつかさのため、そして、倍額の金を持っていくことを命じた。「弟も連れ、立って、またその人の所へ行きなさい。どうか全能の神がその人の前であなたがたをあわれみ、もうひとりの兄弟とベニヤミンとを、返させてくださるように。もしわたしが子を失わなければならないのなら、失ってもよい」(同・四三ノ一、二三、一四)。

彼らはもう一度エジプトに行き、ヨセフの前に出た。ヨセフが、自分の母の子、ベニヤミンを見ると深く感動した。それでもヨセフは感情をあらわさず、彼らを自分の家に連れてゆき、食事を共にする準備を命じた。つかさの邸宅に連れてゆかれた兄弟たちは、袋の中にあつた金包みのことで呼ばれたのではないかと大きな不安にかけられた。彼らは、自分たちを奴隷にするために金がわざと袋の中に入れられたのだと思った。困り果てた兄弟た

ちは、ヨセフの家づかさに、自分たちがエジプトに來た事情や、自分たちがなんの罪もないことを証明するために、袋の中にあつた金包みをもつてきたこと、それから食糧を買うための金も持ってきたことなどを話し、「われわれの銀を袋に入れた者が、だれであるかは分りません」とつけ加えた。すると家づかさは答えた。「安心なさい。恐れてはいけません。その宝はあなたがたの神、あなたがたの父の神が、あなたがたの袋に入れてあなたがたに賜わたつたのです。あなたがたの銀はわたしが受け取りました」(同・四三ノ二二、二三)。彼らの心配はなくなつた。そして、シメオンが牢獄から出されて、兄弟たちに加わつたとき、彼らはたしかに神はあわれみ深いおかただと感じた。

つかさがふたたび彼らの前にあらわれると、彼らは贈り物をさし出し、身を低くし、「地に伏して、彼を拝した」。このとき、ヨセフはもう一度前に見た夢を思い出した。ヨセフは、彼の客へのあいさつがすむとすぐ、「あなたがたの父、あなたがたがさきに話していたその老人は無事ですか。なお生きながらえておられますか」とたずねた。「あなたのしもべ、われわれの父は無事で、なお生きながらえています」と兄弟たちは答えてもう一度礼をした(同・四三ノ二六、二七、二八)。それから、ヨセフはベニヤミンに目をとめて、「これはあなたがたの前にわたしに話した末の弟ですか」と言った。「わが子よ、どうか神があなたを恵まれるように」となつかしさのあまり言っただけで、それ以上何も言えなかった。彼は「へやにはいつて泣いた」(同・四三ノ一九、二〇)。

ヨセフは、ふたたび冷静をとりもどしてみんなのところへかえり、一同食事にとりかかった。エジプト人は、階級制度によつて、異民族と食事とともにすることを禁じられていた。ヤコブのおすこたちは、自分たちだけの席に着いた。つかさは、身分が高いためにひとりで食事をし、エジプト人たちは、また別の食卓に着いた。すべ

ての者が席に着いたとき、兄弟たちは、年令にしたがって正しい順序にすわらせられたのをみて非常に驚いた。「ヨセフの前から、めいめいの分が運ばれたが、ベニヤミンの分は他のいずれの者の分よりも五倍多かつた」(同・四三ノ三四)。こうして、ベニヤミンにだけ特に好意を示すならば、自分のときと同じように、兄弟たちが末の弟にも羨望やしつとをあらわすかもしれぬとヨセフは考えた。兄弟たちは、あいかわらずヨセフには言葉が通じないと思つて、互いに自由に話し合つていた。これは、ヨセフが兄弟たちのほんとうの感情を知るよい機会であつた。彼は、さらに兄弟たちをためそうと思ひ、彼らが出発する前にヨセフ自身の銀の杯を末の弟の袋の中にかくすように命じた。

彼らは喜んで出発した。シメオンもベニヤミンも彼らと共にいる。動物の背中には穀物が積まれていた。兄弟たちは、やっと自分たちを囲んでるようにみえた危機から安全に脱出したと思つた。しかし、彼らが町はずれに着くか着かないうちに、家づかさが追いついて、「あなたがたはなぜ悪をもつて善に報いるのですか、なぜわたしの銀の杯を盗んだのですか。これはわたしの主人が飲む時に使い、またいつも占いに用いるものではありませんか。あなたがたのした事は悪いことです」ときびしく問ひただした(同・四四ノ四、五)。その杯は、その中に盛られたどんな毒も見わける力があると思われていた。当時、このような杯は毒殺を防ぐために珍重されていたのである。

この家づか사의非難に、旅人一同は答えた。「わが主は、どうしてそのようなことを言われるのですか。しもべらは決してそのようなことはいいたしません。袋の口で見つけた銀でさえ、カナンの地からあなたの所に持ち帰ったほのです。どうして、われわれは御主人の家から銀や金を盗みましよう。しもべらのうちのだれの所でそれ

第 21 章 ヨセフと兄弟たち



ヤコブのおすこたちは、ふたたび、エジプトに来て、ヨセフの前に現われた。
ヨセフは、自分と同じ母の子、ベニヤミンを見て、感無量であった。

が見つかったも、その者は死に、またわれわれはわが主の奴隷となりましょう」(同・四四ノ七一九)。

「家づかさは言った、『それではあなたがたの言葉のようにしよう。杯の見つかった者はわたしの奴隷とならなければならぬ。ほかの者は無罪です』」(同・四四ノ一〇)。

ただちに取り調べがはじまった。「そこで彼らは、めいめい急いで袋を地におろし、ひとりひとりその袋を開いた」(同・四四ノ一一)。そして家づかさはルベンから始めて年令順に年下の者まで捜したところ、ベニヤミンの袋の中から銀の杯が発見された。

兄弟たちは、あまりの悲しさに衣服を裂き、重い足どりでまた町へもどった。約束の通りに、ベニヤミンは奴隷の生涯を送らなければならない。彼らは、家づかさのあとについて邸宅に行ったところ、そこにつかさがまだいるのをみつけて、彼の前にひれ伏した。ヨセフは彼らに言った。「あなたがたのこのしわざは何事ですか。わたしのような人は、必ず占い当てることを知らないのですか」(同・四四ノ一五)。ヨセフは、兄弟たちから罪を自覚することばを聞きたいと思っていた。彼は、占いの力が自分にあると言ったわけではないが、彼らの生涯の秘密さえも見通すことができるのだと彼らに信じさせたかったのである。

ユダは答えた。「われわれはわが主に何を言い、何を述べ得ましょう。どうしてわれわれは身の潔白をあらわし得ましょう。神がしもべらの罪をあばかれました。われわれと、杯を持っていた者とは共にわが主の奴隷となりましょう」(同・四四ノ一六)。

ヨセフは答えた。「わたしは決してそのようなことはしない。杯を持っている者だけがわたしの奴隷とならなければならぬ。ほかの者は安全に父のもとへ上って行きなさい」(同・四四ノ一七)。

深い悲しみにくれて、ユダはつかさに近づき哀願した。「ああ、わが主よ、どうぞわが主の耳にひとこと言わせてください。しもべをおこらないでください。あなたはパロのようなかたです」(同・四四ノ一八)。ユダは、ヨセフを失ったときどんなに父が悲しんだか、そして、ヤコブが最も愛した妻ラケルの残した、ただひとりの子ベニヤミンをエジプトに連れてくることもどんなにためらったかを、感動的言葉で雄弁に述べた。彼は言った。

「わたしがあなたのしもべである父のもとに帰って行くとき、もしこの子供が一緒にいなかったら、どうなるでしょう。父の魂は子供の魂に結ばれているのです。この子供がわれわれと一緒にいないのを見たら、父は死ぬでしょう。そうすればしもべらは、あなたのしもべであるしらがの父を悲しんで陰府に下らせることになるでしょう。しもべは父にこの子供の身を請け合って「もしわたしがこの子をあなたのもとに連れ帰らなかったら、わたしは父に対して永久に罪を負いましょう」と言ったのです。どうか、しもべをこの子供の代りに、わが主の奴隷としてとどまらせ、この子供を兄弟たちと一緒に上り行かせてください、この子供を連れずに、どうしてわたしは父のもとに上り行くことができません」(同・四四ノ三〇―三四)。

ヨセフは満足した。彼は兄弟たちの中に真の悔い改めの実をみる事ができた。このユダの高潔な言葉を聞いて、兄弟たち以外の者に外に行くように命じ、声をあげて泣き叫んだ。「わたしはヨセフです。父はまだ生きながらえていますか」(同・四五ノ三)。

兄弟たちは恐れ驚いて身動きひとつせず、立ったまま黙っていた。しつとにかられて殺そうと企て、ついに、奴隷に売ってしまった弟ヨセフが、エジプトのつかさになっているとは。ヨセフを苦しめたすべての悪行が、彼らの目に浮かんだ。彼らは、ヨセフが見た夢をさげすみ、けんめいになってその実現を妨げようとしたことを思

い出した。ところが、今、彼ら自身が実際にその通りのことを行なっているのである。今や彼らはまったくヨセフの手中におかれていた。疑いもなく、ヨセフは自分が受けたひどい取り扱いの仕返しをするだろうと思うのであった。

ヨセフは、兄弟たちの取り乱したさまを見て、やさしく「わたしに近寄ってください」と言った。彼らが近寄ったので彼は続けた。「わたしはあなたがたの弟ヨセフです。あなたがたがエジプトに売った者です。しかしわたしをここに売ったのを嘆くことも、悔むこともいりません。神は命を救うために、あなたがたよりさきにわたしをつかわされたのです」(同・四五ノ四、五)。ヨセフは、兄弟たちが自分に対する残酷な行為のために、もう十分に苦しんでいることを感じて、彼らの恐怖心を取りのぞき、自責の痛みをやわらげようと気高くもつとめた。

彼は続けて言った。「この二年の間、国中にききんがあつたが、なお五年の間は耕すことも刈り入れることもないでしょう。神は、あなたがたのすえを地に残すため、また大いなる救をもつてあなたがたの命を助けるために、わたしをあなたがたよりさきにつかわされたのです。それゆえわたしをここにつかわしたのはあなたがたではなく、神です。神はわたしをパロの父とし、その全家の主とし、またエジプト全国のかさとされました。あなたがたは父のもとに急ぎ上つて言いなさい、「あなたの子ヨセフが、こつ言いました。神がわたしをエジプト全国の主とされたから、ためらわずにわたしの所へ下つてきなさい。あなたはゴセンの地に住み、あなたがたの子らも、孫たちも、羊も牛も、その他のものもみな、わたしの近くにあらせます。ききんはなお五年つづきますから、あなたも、家族も、その他のものも、みな困らないように、わたしはそこで養いましょう」。あなたがたと弟ベニヤミンが目に見るとおり、あなたがたに口ずから語っているのはこのわたしです。」「そしてヨセフ

は弟ベニヤミンのくびを抱いて泣き、ベニヤミンも彼のくびを抱いて泣いた。またヨセフはすべての兄弟たちに口づけし、彼らを抱いて泣いた。そして後、兄弟たちは彼と語った」(同・四五ノ六一、一四、一五)。兄弟たちは、心を低くして罪を告白し、許しを請い求めた。彼らも長い間、不安と悔恨の念に苦しんできたが、今、ヨセフが生きていたことを知ってよろこんだ。

この事件はすぐに王の耳にはいった。王は、ヨセフに深く感謝していたので、「わたしはあなたがたに、エジプトの地の良い物を与えます」(同・四五ノ一八)と言ってヨセフが家族を迎えることに承認を与えた。兄弟たちは車や食糧を十分に与えられ、全家族と従者たちがエジプトに移住するのに必要なすべてのものを得て出発した。ヨセフは、ベニヤミンに他の兄たちよりも高価なものを贈った。故郷に帰る途中で争いが起こるのを心配して、出発するにあたり、「途中で争ってはなりません」と告げてみんなに贈りものをした。

ヤコブのおすこたちは、「ヨセフはなお生きていてエジプト全国のかさです」という喜びの知らせをもって父のところへ帰った。ヤコブは最初、驚きのあまり、それをほんとうだと信じる事ができなかった。しかし、車や、荷物を積んだ家畜の長い列を見、もうひとたびベニヤミンを見たヤコブは、それを信じた。「満足だ。わが子ヨセフがまだ生きている。わたしは死ぬ前に行って彼を見よう」と喜びにみだされて叫んだ(同・四五ノ二六、二八)。

十人の兄弟たちは、もうひとつ身を低くしてなすべきことがあった。彼らは、長年父の生涯を苦しめ、また、彼ら自身の生活を悲惨なものにした欺瞞と残酷な行為を父に告白した。ヤコブは、彼らがそれほど卑劣な罪を犯していたとは思わなかった。しかし、神がすべてのことをよいように支配してくださったので、おすこたちの

あやまちを許し、祝福した。

父とむすこたちと、その家族、羊や家畜の群れ、また、多くの従者たちは、やがてエジプトへと旅立った。彼らはよろこびに満たされて旅を続けた。彼らがベエルシバに着いたとき、ヤコブは感謝の犠牲をささげ、主が共におられるという確証が与えられることを祈り求めた。夜の幻のうちに主のみ声が聞こえた。「わたしは神、あなたの父の神である。エジプトに下るのを恐れてはならない。わたしはあそこであなたを大いなる国民にする。わたしはあなたと一緒にエジプトに下り、また必ずあなたを導き上るであろう」(同・四六ノ三、四)。

「恐れてはならない。わたしはあそこであなたを大いなる国民にする」との保証には意味があった。アブラハムに対してその子孫が星の数ほどになるとの約束が与えられたが、それでも選民の数はわずかずしかふえてゆかなかった。それにカナンの地も預言されたような大いなる国民の発展には十分な土地ではなかった。そこには強力な異教民族が住みついており、「四代目」になるまでは占領できないことになっていた。もしもイスラエルの子孫がここで数の多い民族になるとすれば、彼らはカナンの人々を追放するか、あるいは彼らの中に離散するかしなければならなかった。カナン人を追い出すことは、神のご計画に従えば、彼らには不可能であった。また、カナンの人々に混じって生活すれば、偶像礼拝に誘いこまれる危険があった。しかしながら、エジプトは神の御目的の成就に必要な条件がそなわっていたのである。灌漑もよく、肥沃なエジプトの一地区が彼らに開放され、そこは人口が急速に増加するのに好都合であった。「羊飼はすべて、エジプトびとの忌む者」であるといわれて職業的反感にも、エジプトで当面するのであったが、かえってそのために、異なった別の民族としての区別を保つことができて、エジプトびとの偶像礼拝に加わらずにすんだ。

一行はエジプトに着いて、まっすぐにゴセンの地に向かった。ヨセフは、エジプトのつかさの乗る車に乗り、多くのいかめしい従者たちを従えて到着した。彼は、自分を取りまく華麗な光景も彼の威厳ある地位のことも忘れてしまった。彼は、ただ一つのことでは心がいっぱいになり、ただ一つの熱望に心をおどらしていた。彼は、旅人たちが近づいてくるのを見ると、長年の間心に秘めていた父を慕う気持ちを、もはやおさえることができなかった。彼は馬車からとびおり、父のもとにかけよって歓迎した。そして「父に会い、そのくびを抱き、くびをかかえて久しく泣いた。時に、イスラエルはヨセフに言った、『あなたがなお生きていて、わたしはあなたの顔を見たので今は死んでもよい』」（同・四六ノ二九、三〇）。

ヨセフは、兄弟たち五人をパロに会わせるために連れてゆき、将来、家を建てる土地の許可をもらおうと思った。パロは総理大臣ヨセフに感謝の念をいだいていたから、彼らをエジプトの名誉ある公職につかせることもできたであろう。しかし、ヨセフは兄弟たちが主の真の礼拝を忠実に行ない、異教の王宮で誘惑にさらされることがないようにしようと思った。そこで、王から質問された場合、正直に自分たちの職業を明かすように兄弟たちに助言した。ヤコブのおすこたちはその助言に従い、自分たちはこの地に寄留するために来ただけで、永住するつもりはないことを注意深く説明し、必要なときにはこの地を離れることができる余地を残しておいた。王は、彼らに住むところを与え、「地の最も良い所」であるゴセンの土地をおくった。

彼らが到着して間もなく、ヨセフは、父ヤコブもまた、王のもとに連れて行った。ヤコブは、王の宮殿の中では一介の旅人にすぎなかったが、荘厳な大自然の中で、地上の王にまさる天の王と交わっていた。そこで、ヤコブは、自分がすべた立場にあることを意識しつつ手を上げてパロを祝福した。

ヤコブは、ヨセフに再会したときに、今まで長い間の心労と悲哀とが、このように幸福な結末に至ったのだから、もう死んでもよいと言った。しかし、彼は、その後十七年間も生きながらえて、平和なゴセンの地で余生を送った。これらの年月は、かつての年月とは全くうって変わった幸福なものであった。ヤコブは、おすこたちの真の悔い改めの証拠を見だし、家族が大いなる国民になってゆくのに必要なあらゆる条件がそなわっているのを見た。そして、彼は、やがてカナンにおいて、彼らがりっぱな国を築いて行きたしかな約束を理解した。ヤコブ自身、エジプトの総理大臣のなしうる、あらゆる愛と好意のしるしにかこまれていたのである。こうして、彼は長いあいだ失っていたおすこのもとで、幸福な日々を過ごし、静かに、そして平和に世を去った。

ヤコブは、死期の近づいたのを感じて、ヨセフのもとに使いを送った。ヤコブは、カナンを与えよとの神のみ約束を堅く信じていた。「どうかわたしをエジプトには葬らないでください。わたしが先祖たちと共に眠るときには、わたしをエジプトから運び出して先祖たちの墓に葬ってください」と言った(同・四七ノ二九、三〇)。ヨセフはそうすることを約束したが、ヤコブはそれだけでは満足せず、マクペラのほら穴の先祖たちの所に自分を葬るという厳粛な誓いを求めた。

もう一つ、かたづけておかなければならないことがあった。ヨセフのおすこたちも、イスラエルのおすこたちのなかに正式に受け入れる必要があった。ヨセフは父に最後の面会に来たとき、マナセとエフライムを連れていった。この青年たちは、母の側からいえば、エジプトの大祭司の血縁であった。また、彼らがエジプトびとになることを選べば、父ヨセフの地位から言っても、高い身分と富への道が開かれていた。しかしながらふたりのおすこが自分の民族につらなることがヨセフの希望であった。ヨセフは、自分のおすこたちに代わって

エジプトの王宮が与えるすべての名誉を捨てて、神のみ言葉をゆだねられたいやしい羊飼いの部族を選び、神の契約の約束に対する信仰をあらわした。

ヤコブはヨセフに向かって、「エジプトにいるあなたの所にわたしが来る前に、エジプトの国で生れたあなたのふたりの子はいまわたしの子とします。すなわちエフライムとマナセとはルベンとシメオンと同じようにわたしの子とします」と言った(同・四八ノ五)。彼らは、ヤコブ自身のおすことされ、それぞれの部族のかしらになることになった。こうして、ルベンが失った長子の権の一つがヨセフに与えられた。これは、イスラエルにおける二倍の分であった。

ヤコブの目は、老令のためにかすんでいたので、青年たちがそばに来てても気がつかなかった。しかし、今、彼らの姿を認めて、「これはだれですか」とたずねた。彼らがだれであるかを知らされて彼はこう言った。「彼らをわたしの所に連れてきて、わたしに祝福させてください」(同・四八ノ九)。彼らが近づくと、ヤコブは彼らを抱いて口づけし、厳粛に彼らの頭の上に手を置いて祝福した。そして彼はこう祈った。「わが先祖アブラハムとイサクの仕えた神、生れてからきょうまでわたしを養われた神、すべての災からわたしをあがなわれたみ使よ、この子供たちを祝福してください」(同・四八ノ一五、一六)。その言葉には、自己依存の精神もなければ、人間的な能力や技巧に頼る精神もみられなかった。神が彼を守りささえてくださったのである。また、過去の苦い日にわたるつばやきも聞かれなかった。試練や悲しみも、もはや「身にふりかかって来る」不幸ではなかった。彼の全生涯の旅路を通じて、ヤコブとともにおられた神の恵みといつくしみだけが記憶によりがえってきた。

祝福は終わった。ヤコブはおすこに確証を与えた。そして、長い苦役と悲しみの年月を経なければならぬ次

の世代の人々に、このような信仰のあかしを立てた。「わたしはやがて死にます。しかし、神はあなたがたと共にあられて、あなたがたを先祖の国に導き返されるであろう」(同・四八ノ二二)。

ついに、ヤコブのむすこたちは、彼の臨終の床に集まった。ヤコブはむすこたちを呼びよせて「ヤコブの子らよ、集まって聞け。父イスラエルのことばを聞け。」「後の日に、あなたがたの上に起ることを、告げましょう」と言った(同・四九ノ二一、一)。ヤコブは今までもいくたびか彼らの将来を案じ、各部族がたどる歴史を想像してみたのであった。むすこたちが、最後の祝福を受けようと待っているとき、主の靈感がヤコブに臨み、預言的な幻のうちに彼の子孫の将来が示された。次々とむすこの名があげられ、各自の性質が描写されて、部族の未来の歴史が簡潔に預言された。

「ルベンよ、あなたはわが長子、

わが勢い、わが力のはじめ、

威光のすぐれた者、権力のすぐれた者」。

(創世記四九ノ三)

こうして、父は長子ルベンがどんな立場に立つはずであったかを描写した。しかし、ルベンはエダルにおける悲しむべき罪のために長子の祝福を受けることができなかった。ヤコブは続けて言った。

「しかし、沸き立つ水のようなから、

もはや、すぐれた者ではあり得ない」。

(創世記四九ノ四)

祭司職はレビに与えられ、王国とメシヤの約束はユダに与えられた。また、ヨセフには、二倍の嗣業が与えられた。ルベンの部族は、イスラエルの中で卓越することなく、ユダやヨセフ、ダンほどの数もなく、最初にバビロンに捕囚となった。

ルベンの次はシメオンとレビであった。彼らは共謀してシケムびとらを残酷にあつかった。ヨセフを売ったときに、一番罪深かったのも彼らであった。彼らについては次のように言われた。

「わたしは彼らをヤコブのうちに分け、

イスラエルのうちに散らそう」。

(創世記四九ノ七)

イスラエル民族のカナン入国直前に、民を数えたとき、シメオンは一番小さい部族であった。モーセも最後の祝福の中で、シメオンのことについては何も言っていない。カナンに定住したとき、この部族はユダの土地の小部分を受け、その家族たちは、後に、おのおの異なった強力な部落を作ったが、聖地の境界の外に定住することになった。レビは、カナンの各所に散在する四十八か所の町以外はなんの嗣業も受けなかった。しかし、この部族は、他の部族が背信におちたときに、神への忠誠を示したことによって、聖所の清い務めをするように任命されて、のろいは祝福に変わった。

長子の権の最高の祝福はユダに移された。ユダという名前の意味は、「さんび」であるが、この部族の歴史が次のような預言の言葉によって明らかにされた。

「ユダよ、兄弟たちはあなたをほめる。

あなたの手は敵のくびを押え、

父の子らはあなたの前に身をかがめるであろう。

ユダは、ししの子。

わが子よ、あなたは獲物をもって上つて来る。

彼は雄じしのようにうづくまり、

雌じしのように身を伏せる。

だれがこれを起すことができよう。

つえはユダを離れず、

立法者のつえはその足の間を離れることなく、

シロの来る時までには及ぶであろう。

もろもろの民は彼に従う」。

(創世記四九ノ八一―一〇)

森林の王者、ししはこの部族にふさわしい象徴であつた。この部族からダビデがあらわれ、ダビデの子、シロすなわち真の「ユダの部族のしし」があらわれた。ついに、この地上のすべての権力は彼を拜し、全国民は彼をあがめるようになる。

ヤコブはたいいていのむすこたちに未来の繁栄を預言した。そして最後にヨセフの番になった。ヤコブは「その兄弟たちの君たる者の頭」に祝福を祈り求めたとき、その心は喜びにあふれた。

「ヨセフは実を結ぶ若木、

泉のほとりの実を結ぶ若木。

その枝は、かきねを越えるであろう。

射る者は彼を激しく攻め、

彼を射、彼をいたく悩ました。

しかし彼の弓はなお強く、

彼の腕は素早い。

これはヤコブの全能者の手により、

イスラエルの岩なる牧者の名により、

あなたを助ける父の神により、

また上なる天の祝福、

下に横たわる淵の祝福、

乳ぶさと胎の祝福をもって、

あなたを恵まれる全能者による。

あなたの父の祝福は永遠の山の祝福にまさり、

永久の丘の賜物にまさる。

これらの祝福はヨセフのかしらに帰し、

その兄弟たちの君たる者の頭の頂に帰する」。

(創世記四九ノ二二―二六)

ヤコブは熱烈に深く愛する人であつた。彼のむすこたちに対する愛は強く、やさしく、彼らに対する遺言も決して偏愛や恨みに満ちた言葉ではなかつた。彼はむすこたちを、みな許し、最後まで愛し通した。彼の父親としての愛情は、希望と励ましに満ちた言葉の中にあらわれている。しかし、神の力が彼に臨み、靈感の導きのもとにあつたときには、たとえそれがどんなに苦しいことであつても真実を語らなければならなかつた。

今や、最後の祝福の言葉も終わつた。ヤコブは、もう一度、自分の埋葬の場所をくりかえして指定した。「わたしはわが民に加えられようとしている。マクベラの畑にあるほら穴に……わたしの先祖たちと共にわたしを葬ってください。」「そこにアブラハムと妻サラとが葬られ、イサクと妻リベカもそこに葬られたが、わたしはまたそこにレアを葬つた」(同・四九ノ二九―三一、英語訳聖書)。こうして、彼の生涯の最後の行為は、神の約束に対する信仰を表明することであつた。

ヤコブの晩年は、悩みと苦しみの一日の後の平和で、静かな夕暮れのもようであつた。暗雲が彼の道を閉ざしたが、彼の人生の日没は晴れ上がり、天の光輝が彼の最後の時間を明るく照らした。聖書は次のように言っている。「夕暮になつても、光があるからである。」「全き人に目をそそぎ、直き人を見よ。おだやかな人には子孫がある」(ゼカリヤ書一四ノ七。詩篇三七ノ三七)。

ヤコブは、罪を犯して非常に苦しんだ。彼は大きな罪を犯して父の天幕を離れて以来、悩み、苦しみ、悲しみの長い年月を過ごした。彼は家のない逃亡者となり、母から離れ、しかもふたたびその母に会うことができない

った。彼は、七年間も愛するラケルのために働いたが、卑劣な方法でだまされた。二十年もの間、貪欲で、利己的な親族のために苦労した。やがて、自分の富も増し、むしろこれらの成長を見ることができたが、争いが絶えず分裂した家庭の中には少しの喜びも見いだすことができなかった。娘の受けたはずかしめ、それに対する兄弟たちのふくしゅう、ラケルの死、ルベンの人の道に反した罪悪、ユダの罪、そして兄弟たちのヨセフに対する残酷な欺瞞と恨みによる苦悩など、なんと長く、暗い罪悪の数々が彼の目の前に広がったことであろう。ヤコブは、いくどとなく、彼の最初の失敗の実を刈り取ったのであった。彼は幾たびも自分自身の犯した罪を、そのむしろたちがくりかえすのを見た。しかし、このようなならしめは苦しかったが、その目的を果たしたのである。訓練は悲しいものと思われたが、「平安な義の実を結」んだのである（ヘブル二一ノ二）。

聖書は、特に神の恵みを受けた善人たちの失敗を、そのまま記録している。実のところ、彼らの美德よりも、むしろ欠点のほうを詳しく書いてあるくらいである。多くの人々は、この事を不思議に思い、無神論者は、このために聖書を軽べつする。しかし、聖書が真実であるという最大の証拠は、事実を修飾せず、聖書の主要な人物の罪さえもおおい隠していないことである。人間の心は偏見をいだきやすいもので、人類歴史が絶対的に公平であるということはあり得ない。もしも聖書が、靈感を受けない人間の書いたものであれば、疑いもなく、これらのりっぱな人物の品性も、さらに美化して書いたことであろう。しかし、われわれは、ここに、彼らの経験が正しく記録されたものを持っている。

神から恵みを受け、大いなる責任をゆだねられた人物も、今日のわれわれが、苦しみ、よろめき、しばしばあやまちを犯すのと同様に、時には誘惑に負け、罪を犯した。彼らの欠点と愚行とがはっきり書いてあるのは、わ

れわれに対する励ましと警告のためである。もしも彼らが全然あやまちない者として記録されていたならば、われわれのように罪深い者は自分の失敗やあやまちに絶望してしまうかもしれない。しかし、われわれと同じように失望しつつも戦いぬき、われわれと同様の誘惑に負けたが、それでも神の恵みによって勇気づけられ、勝利したことを知るとき、われわれもまた、義を追い求めるように励まされるのである。彼らが、時には打ちひしがれながらも、ふたたび立ちなおって神の祝福にあずかったように、われわれもイエスの力によって勝利者となることのできるのである。一方彼らの生涯の記録は警告でもある。神は、いかなることがあっても、罰すべきものを許さないことを教えている。神は、ご自分の最も愛するものの中にも罪をござらんになり、光や責任がわずしかか与えられていないものよりも、彼らを厳格に取りあつかわれるのである。

ヤコブを埋葬したのち、兄弟たちの心はふたたび恐怖に満たされた。ヨセフは兄弟たちを親切にあつかったにもかかわらず、彼らは良心の苛責から不信と疑惑をいだいた。ヨセフは父親のことを考えてふくしゅうを遅らせたのである。ヨセフは、こんどこそ長い間延ばしていた罪の罰を、自分たちに与えるだろうと彼らは考えた。兄弟たちはあえて直接ヨセフのもとに行こうとはせず、「あなたの父は死ぬ前に命じて言われました、『おまえたちはヨセフに言いなさい、「あなたの兄弟たちはあなたに悪をおこなったが、どうかそのとがと罪をゆるしてやってください』」。今どうかあなたの父の神に仕えるしもべらのとがをゆるしてください」とことづけた(創世記五〇ノ一六、一七)。このことづけを聞いてヨセフは泣いた。兄弟たちは、勇気を出して彼のもとに来て、「このとおり、わたしたちはあなたのしもべです」と言って彼の前にひれ伏した。ヨセフの兄弟たちに対する愛は深く、無我の精神から出たものであったが、兄弟たちがまだ自分にふくしゅうの精神があると思っていることに心

を痛めた。彼は言った。「恐れることはありません。わたしが神に代ることができましょうか。あなたがたはわたしに対して悪をたくらんだが、神はそれを良きに変わらせて、今日のように多くの民の命を救おうと計らわれました。それゆえ恐れることはありません。わたしはあなたがたとあなたがたの子供たちを養いましょう」(同・五〇ノ一八、一九―二二)。

ヨセフの生涯はキリストの生涯を代表している。兄弟たちがヨセフを奴隷に売ったのはねたみからであった。彼らは、ヨセフが自分たちより偉大なものになるのを止めようと思った。彼がエジプトに連れてゆかれたとき、自分たちはこれ以上、彼の夢に悩まされることはない、これで実現の可能性は完全になくなったと得意がった。しかし、彼らの行動はすべて神の支配のもとにおかれて、彼らが妨げようとしたできごとそのものを成就することになった。同じようにユダヤびとの祭司や長老たちは、人々の評判が次第にキリストのほうに傾くことを恐れてキリストをねたんだ。彼らは、キリストが王になることを妨げようとして彼を殺したが、かえって彼ら自身がキリストを王位につける結果をもたらしたのである。

ヨセフは、エジプトの奴隷になることによって、父の家族の救済者となった。しかし、このことは兄弟たちの罪を軽くするものではなかった。同じようにキリストは敵のために十字架につけられ、人類の贖い主、墮落した人類の救い主、全世界の支配者となられた。しかし、神がご自分の栄光と人類の幸福のために、摂理のみ手によって諸事件を支配されなかった場合と同様に、キリストを殺した人々の罪は、重かったのである。

ヨセフが兄弟たちによって異邦人に売られたのと同じく、キリストもまた、ご自身の弟子のひとりによって、最も憎むべき敵に売り渡された。ヨセフは、節操を守ったために、偽証によって牢獄に投げ込まれた。キリスト

も同じように、彼の自己否定の生涯が周囲の人々の罪に対する譴責となり、正しかったためにあざけられ、捨てられたのである。なんのとも犯さないのに、偽証人の言葉によって罪に定められた。ヨセフが、不正と圧迫を受けても忍耐し、柔和であって、また無情な兄弟たちに対しても許しと高貴な寛大の精神をあらわしたことは、悪人たちのちよう笑と悪意の中にあってもつぶやくことなく忍耐し、彼を殺害した者ばかりでなく、彼のもとに来て罪を告白し、許しを求めるすべてのものを許す救い主を象徴している。

ヨセフは父の死後五十四年生きながらえた。彼は、「エフライムの三代の子孫を見た。マナセの子マキルの子らも生れてヨセフのひざの上に置かれ」るまで生きた(同・五〇ノ二三)。彼は、自分の民が繁栄し、その数がふえてゆくのを目撃した。神がイスラエルを約束の地に回復されるという信仰は、彼の一生を通じてゆるぐことがなかった。

ヨセフは自分の死期の近づいたのを知ると、親族を集めた。パロの地にあつて大きな栄誉を受けたヨセフではあつたが、彼にとつてはエジプトは異国でしかなかった。彼の最後の行為は、彼がイスラエルと運命を共にしたことを示している。彼の最後の言葉は、「神は必ずあなたがたを顧みて、この国から連れ出し、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地に導き上られるでしょう」であつた(同・五〇ノ二四)。それから彼はイスラエルの子らに、必ず自分の骨をカナンの地に持つてゆくよう、厳粛な誓いを求めた。「こうしてヨセフは百十歳で死んだ。彼らはこれに薬を塗り、棺に納めて、エジプトに置いた」(同・五〇ノ二六)。その後、苦役の幾世紀かが続いたが、その棺はヨセフの臨終の言葉を思い出させるのであつた。そして、イスラエルびとに、彼らがエジプトの寄留者にすぎないことをあかしし、約束の地を待望しつづけるように命じた。なぜなら、解放の時は必ず来るからであつた。

第 22 章

モ ー セ

本章は、出エジプト記一 四章に基づく。

エジプトの人々は、ききんの間の食糧を得るために家畜や土地を王に売ったので、ついに、いつまでも奴隷でいなければならなくなった。しかし、ヨセフは、彼らを救済する賢明な策を立てた。彼は、人々を王の小作人として、王の土地を確保させ、彼らの勤労の実の五分の一を年貢として納めさせることにした。

しかし、ヤコブのむすこたちには、このような条件を設ける必要がなかった。彼らは、ヨセフがエジプトの国家に尽くした功勞によつて、国土の一部が居住地として与えられただけでなく、税金も免除され、ききんの間の食物も十分に供給された。王は、他の国々がききんのために滅びようとしていたときに、エジプトが豊作に恵まれたのは、ヨセフの神のあわれみ深い介入によるものであることを公然と認めた。王は、また、ヨセフの行政が国家を大いに豊かにしたことを認めて、感謝の意をあらわし、ヤコブの家族を厚くもてなした。だが、時代は移り、エジプトに大きな貢献をした偉大な人物ヨセフも、またその業績によつて祝福を受けた人々も死んでしまった。そして、「ここに、ヨセフのことを知らない新しい王が、エジプトに起った」（出エジプト記一ノ八）。彼

は、ヨセフの業績を知らなかったわけではないが、むしろ認めようとはせず、できるだけ忘れ去ろうとつとめた。「彼はその民に言った、『見よ、イスラエルびとなるこの民は、われわれにとって、あまりにも多く、また強すぎる。さあ、われわれは、抜かりなく彼らを取り扱おう。彼らが多くなり、戦いの起るとき、敵に味方して、われわれと戦い、ついにこの国から逃げ去ることのないようにしよう』」(同・一ノ九、一〇)。

イスラエルびとは、そのころすでに数が非常に多くなっていた。「けれどもイスラエルの子孫は多くの子を生み、ますますふえ、はなはだ強くなつて、国に満ちるようになった」(同・一ノ七)。ヨセフの庇護と、当時の王の好意のもとに、イスラエルびとは急速に増加していった。しかし彼らは、特殊な民族としての特徴を保つて、エジプトびとの習慣や宗教を取り入れなかった。それで彼らの数の増加は戦争が起これば、彼らがエジプトの敵に味方するのではないかという不安を、王や国民に与えた。しかし、政策は彼らを国外に追放することを禁じていた。それにイスラエルびとの多くの者は、有能で知力のすぐれた技術者であつて、また、国家を富裕にするのに貢献することが大であつた。王は、これらの職人を壮大な宮殿や神殿の建設にも必要とした。それで、王は、イスラエルびとを、国家に土地と財産を売り渡したエジプトびとと同列においた。やがて管理の役人を彼らの上に立てて、彼らを完全に奴隷化してしまった。「エジプトびとはイスラエルの人々をきびしく使い、つらい務をもつてその生活を苦しめた。すなわち、しつこいこね、れんが作り、および田畑のあらゆる務に当らせたが、そのすべての労役はきびしかった。」「しかしイスラエルの人々が苦しめられるにしたがつて、いよいよふえひろがつた(同・一ノ一二、一四、一二)。

王と側近たちは、きびしい労役をもつてイスラエルびとを苦しめ、その数を減らし、彼らの独立精神を粉碎し

ようとはかった。しかし、この計画の実行に失敗するや、彼らはもっと残忍な手段をとった。もしヘブルの男子が生まれたらその場で殺せという命令が助産婦に発せられた。彼らは職務上、この命令を実行できる立場にあった。サタンがこのことの扇動者であった。サタンは、イスラエルびとの中から救済者があらわれることを知っていて、王を動かしてヘブルの男子を殺してしまえば、神の計画をざせつできると考えた。しかし、助産婦たちは神を恐れて、残忍な王の命令に従わなかった。主は、彼女たちの行動を承認し、祝福をお与えになった。王は、自分の計画が失敗したので非常に怒り、命令をもっと急速で広範囲に実施することを命じた。かわいい赤子たちを捜し出して殺せという命令が全国に出された。「そこでパロはそのすべての民に命じて言った、『ヘブルびとに男の子が生れたならば、みなナイル川に投げこめ。しかし女の子はみな生かしておけ』」（同・一ノ二二）。

この命令が完全に実施されていたとき、神を敬うレビの部族のイスラエルびと、アムラムと、妻ヨケベテの間に男の子が生まれた。その赤子は「麗しい」男の子であった。両親は、イスラエルの救いの日が近いこと、また神は、その民のために解放者をお立てになることを信じて、この幼子を殺さない決心をした。神を信じる信仰は両親の心を強め、「彼らはまた、王の命令をも恐れなかった」（ヘブル一ノ二三）。

母親は、三か月の間はなんとか子供を隠すことができたが、それ以上安全に彼を守ることはできないと思い、パピルスで編んだ小さなかごを用意し、水を通さないようにアスファルトと樹脂を塗り、子供をその中に入れ、川岸の葦の中においた。そこに母親が残って見ていれば、子供の生命と自分を危険にさらすかも知れなかった。そこで、その子の姉ミリアムが、表面は何事もないようなふりをして、その辺にいて幼い弟のようすを注意深く見守っていた。ところが、そのほかに彼を見守る者があった。母親は熱心に祈って、その子を神の守護にゆだ



ババの娘は、小さいかごに心を引かれ、中のかわいい子供を見て、いっさいの事情を察し、その子を自分の養子にすることにきめた。

ねた。そして、人の目にこそ見えなかったが、み使いたちがこのささやかなこの上を飛びかっていた。天使はそこに、パロの娘を導いた。彼女は、そこで小さなかごをみつけて不思議に思い、その中に美しい男の子を見るや、その事情をすべて察知した。彼女は、赤子の涙を見てあわれに思い、だいじな赤子の生命を助けようとこれほどの努力をしている未知の母に心から同情した。彼女は、この子を助け出し、自分の養子にしようと決心した。ミリアムは、ひそかに事のなりゆきをうかがっていた。子供がやさしくいたわられているのを見て、近寄って行き、ついにこう言った。「わたしが行ってヘブルの女のうちから、あなたのために、この子に乳を飲ませるうばを呼んでまいりましょうか」(出エジプト記二ノ七)。すると、そうしてよいという許しが与えられた。

ミリアムは、すぐに喜びの知らせをもつて母親のもとにいそぎ、直ちに彼女を連れてパロの娘の前に出た。「この子を連れて行って、わたしに代り、乳を飲ませてください。わたしはその報酬をさしあげます」と王女は言った(同・二ノ九)。

神は母親の祈りを聞かれた。彼女の信仰は報われた。今やヨケベテは深く感謝して、この安全で幸福な任務にとりかかった。彼女は、その子を神のために教育する機会を忠実に活用した。彼女は、この子が何か大いなる働きのために守られたことを確信した。やがては、王宮の母親に彼を返さなければならないこと、そして、それは彼を神から引き離すような環境であることを彼女は知っていた。そのために、彼女はほかの子供たちよりも、もっと熱心に注意深く教育をほどこすようになった。彼女は、彼の心に神を恐れ、真理と正義とを愛するように教えこむことに力を入れ、あらゆる腐敗した影響から彼が守られることをひたすら祈り求めた。彼女は偶像礼拝の罪とむなしさを彼に示した。そして、彼が小さいときから彼の祈りを聞き、どんな危急の場合にも助けてください

るただひとりの生きた神を拝し、祈るように教えた。

母親は、できるだけ少年を自分の手もとにおいたが、彼が十二才になると手放さなければならなかった。彼はそまつな小屋からパロの娘の宮殿に連れてゆかれ、「そして彼はその子となった」(同・二一ノ一〇)。彼は、ここにきても幼少時代に受けた教訓を忘れなかった。彼は母親のそばで学んだ教訓を忘れることができなかった。それらの教訓は、高慢と無神論、また、華麗な宮殿の中に暗躍する罪悪を防ぐ盾となった。

この異郷の奴隷であったヘブルの一女性の感化は、なんと偉大な結果をもたらしたことであろう。モーセのその後の全生涯、イスラエルの指導者として果たした大事業は、クリスチャンの母親の働きの重要性を証明している。これに匹敵する仕事はほかにない。母親は、子供の運命の大部分を自分の手のうちに握っている。彼女は成長中の頭脳と品性をあつかい、現世だけではなく、永遠のために働いているのである。彼女はやがて、芽を出し善悪いずれかの実を結ぶ種をまいているのである。母親は、カンバスの上に美しい姿をいかいたり、大理石を彫刻しているのではなく、神のみかたちを人間の魂におしているのである。特に、幼少時代に子供たちの品性を形成する重要な責任が母親に負わされている。成長中の頭脳にこのとき与えられる印象は、生涯消え去らない。親たちは、子供たちをクリスチャンにするために、幼いうちから彼らを教え、訓練しなければならぬ。子供たちは地上の王国の継承者となるためではなく、神に仕える王たちとして永遠に支配する訓練を受けるためにわれわれの手もとにおかれているのである。

すべての母親は、自分に与えられている時間の尊さを知らなければならない。母親の働きは、厳粛な審判の日のためされる。そのとき、男女の失敗と犯罪の多くは、子供たちの足を正しい道に導く義務を負わされた者が、

無知であり怠慢であつた結果であることを知るであらう。また、天才的才能と誠実と清い生活の光をもつて世界を輝かした多くの者は、彼らの力と成功の源泉であつた原則を、神に祈るクリスチャンの母親から授けられたことを知ることであらう。

モーセはパロの王宮で、政治的また軍事的に最高の訓練を受けた。王は、娘の養子を次の王位継承者に指名し、青年モーセはその高い地位につくための教育を受けた。「モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、言葉にもわざにも、力があつた」(使徒行伝七ノ一二)。彼は軍隊の指導者としての能力を発揮してエジプト軍の中で名声を博し、一般の人々からも傑出した人物と思われた。サタンの策略は失敗に終わった。ヘブルの男の子をすべて殺せとの命令そのものによつて、神の民の未来の指導者の教育と訓練がほどこされるように、神は導きになった。

イスラエルの長老たちは、彼らの救済の時が近いこと、また、神はモーセを用いてその仕事をこなされることを、天使から教えられていた。天使は、モーセに、主がその民を苦役から救うために、彼を選ばれたことを知らせた。モーセは、自由を武力によつてかちえるものと考え、ヘブルびとをエジプト軍に敵対させようとした。モーセは、こうした考えから自分の感情をすっかり押えていた。さもないと、パロや養母への愛着から神のみこころを十分になしえないのではないかと恐れたからである。

エジプトの法律によれば、パロの王位にすわるものは、みな、神官たちの階級に属さなければならなかつた。

モーセは、正式の後継者であつたのでこの神秘的な国家宗教を伝授されるべきであつた。これは、神官たちにゆだねられた義務であつた。モーセは非常に勤勉でまじめな研究者ではあつたが、彼を偶像礼拝に参加させること

はできなかった。彼は、王位につけないかもしれないとどかされた。また、あくまでもヘブルびとの信仰を離れずにいるならば、パロの王女から破門されるかもしれないと警告された。しかし、天地の創造主であるただひとりの神以外は何をも礼拝しないという彼の決意はゆるがなかった。彼は、神官や偶像礼拝者たちに無感覚な対象に迷信的な礼拝をすることのむなしさを指摘して話し合った。だれも、彼の議論に反ばくすることも、彼の意志をかえることもできなかった。さしあたり、モーセのこうした決意は、その高い身分のためと、王や国民が彼に好感をいだいていたために、しばらく黙認されたのである。

「信仰によつて、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである」(ヘブル一ノ二四 二六)。モーセは、地上の偉大な人物の中で傑出した者となり、地上の最も華麗な王国の宮殿の中でも一段と輝き、王国の権力を示す笏を持つて支配するのにふさわしい者であつた。彼の知的な偉大さは、各時代の偉人よりもはるかにすぐれていた。歴史家、詩人、哲学者、軍隊の指揮官、また、立法官として彼と並び得る者はなかった。しかし、彼は、こうした世界を前において、「罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び」、富、偉大さ、名誉などを得ることができ有望な将来を断固として拒む道德的能力をもっていた。

モーセは、神が謙虚で従順なしもべにお与えになる最後の報酬について教えられた。であるから、それに比較すれば、世的な利益などはまったく無価値なものになつてしまふのであつた。彼らは、パロの壮麗な宮殿や王座をさし示して、モーセの心を引きつけようとした。しかし神を度外視した罪の快樂が、その堂々たる宮廷にある

ことを彼は知っていた。彼は、華麗な宮殿や王冠のむこうの、罪に汚れていないみ国において、至高者の聖徒たちと与えられる大きな栄光を仰いでいた。彼は、信仰によって、天の王が勝利者の頭におかれる朽ちない冠をみていた。このような信仰が、モーセに、地上の偉大な人々を離れて、貧しい軽べつされた民族に加わり、罪に仕えるよりは神に従うことを選ばせたのである。

モーセは、王宮に四十才までとどまった。彼はしばしば自分の民族のあわれな状態のことを考え、苦役にあえぐ兄弟たちの所に行き、神が解放のために働いてくださることを保証して励ました。また、ときには、不正と圧迫に民が苦しめられているのを目撃して憤慨し、彼らのあだを打とうと興奮した。ある日、彼が外に出てみるとエジプト人がイスラエルびとを打っているのを見て、とびかかってエジプトびとを殺してしまった。この行動を目撃したのはそのイスラエルびとだけだったので、モーセはいちはやく砂の中に死体を埋めた。こうして、彼は自分がイスラエルびとの運動を支持していることを示し、彼らが自由を回復するために立ち上がるのを見たいと望んだ。「彼は、自分の手によって神が兄弟たちを救って下さることを、みんなが悟るものと思っていたが、実際はそれを悟らなかったのである」(使徒行伝七ノ二五)。イスラエルびとには、まだ解放の用意ができていなかった。翌日、モーセはふたりのヘブルびとが互いに争っているのを見たが、明らかにそのひとりのほうが悪かった。モーセは、悪い人のほうに注意した。ところが、彼はすぐにモーセに反発し、彼の仲裁する権利を拒んだ。「だれがあなたを立てて、われわれのつかさ、また裁判人としたのですか。エジプトびとを殺したように、あなたはわたしを殺そうと思うのですか」と、彼の罪を非難した(出エジプト記二ノ一四)。

このことは、たちまちのうちにエジプト人の知るところとなり、大きく誇張されて間もなくパロの耳にもはい

った。この行動はたいへんなことのように王に報告された。すなわち、モーセは、自分の民族をエジプト人に反抗させ、政府を打ち倒し、自ら王座につこうとしている、彼が生きているかぎり、国家の安全は期することはできないというのであった。王は、直ちにモーセを殺すことに決めた。しかし、彼は、危険をさとして逃亡し、アラビアに行った。

主が彼の道を導かれた。モーセは、同じく真の神を礼拝するミデアンの王であり祭司であるエテロの家にとどりついた。その後間もなく、モーセはエテロの娘のひとりと結婚し、義父のもとで羊の群れを飼って、そこに四十年をすごした。

モーセは、エジプト人を殺したとき、父祖たちがくりかえして犯したと同様に、神がご自身でなしとげると約束されたことがらを自分の手で実現しようとする同じあやまちを犯した。モーセが考えたように、戦争によって民族を解放しようとすることは、神のみこころではなかった。それは、神だけに栄光を帰すようになるために、神の大いなる力によって実現するはずであった。しかしこうした性急なモーセの行動も、神の目的達成のために神が支配しておられたのである。モーセは、まだ、この大いなる仕事に当たる備えができていなかった。彼もまた、アブラハムやヤコブが学んだのと同じ信仰の教訓、すなわち神の約束の成就のためには、人間的な知恵や力にたよらず、神の力にたよることを学ぶ必要があった。そのほかにも、さびしい山々の中で受けるべき教訓があった。モーセは、自己否定と困難という学校で、忍耐を学び、自分の感情をおさえることを学ぶべきであった。また、モーセは、賢明に人を支配することができるようになる前に、まず、彼自身が服従する訓練を受けなければならなかった。イスラエルびとに神のみこころを伝えることができるようになる前に、彼自身の心が全く神と

調和していなければならなかった。モーセは、自分の経験から、援助を求めるすべてのものを、父親のようにめんどろをみる準備が必要であった。

多くの人々は、長い困苦と心労の期間を非常な時間の損失だと考えて、免除されることを願うものである。しかし、無限の知恵をもたれた神は、民族の将来の指導者を四十年間もいやしい羊飼いの仕事に召された。こうして、自分を忘れてやさしく羊の群れをいたわって、世話をする習慣が養われて、彼はイスラエルびとの心やさしく忍耐強い羊飼いとなるのであった。どのようにすぐれた人為的訓練や教養であつても、この経験のかわりにはならない。

モーセは、忘れなければならないものがたくさんあつた。エジプトにおいて彼を囲んでいた環境、たとえば、養母の愛情、国王の孫という高い身分、いたるところに見られる浪費、教養の高さ、鋭敏な眼識、そして、偽りの宗教の神秘性、壮麗な偶像礼拝の儀式、荘重な建築や彫刻など、すべては成長中の彼の頭脳に深い印象を与え彼の習慣や品性の形成に相当の影響をおよぼした。これらの印象をとり去ることができるのは、時間と環境の変化と、そして、神との交わりであつた。モーセにとつても誤謬を捨てて真理を受け入れることは必死の激しい戦いを要した。しかし、その戦いが人間の力では耐えられないほど激しくなるときには、神が助けをお与えになるのであつた。

神のみわざをなすために選ばれたすべての人々の中に人間的な要素がみられる。だが、彼らは、型にはまった習慣や品性に満足して、じつとしている人々ではなかつた。彼らは、熱心に神から知恵をえようと求め、神のために働くことを学ぼうとするのである。使徒ヤコブは「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、そ

の人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願ひ求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」と言っている（ヤコブ一ノ五）。しかし、神は、人々が暗黒の中にとどまって満足しているあいだは、天よりの光をお与えにならない。人間は、神の助けを受けるために、まず自分の弱さ、足りなさを自覚しなければならない。彼は、自分の中に大いなる変化が起こるように専心努力しなければならない。彼は、目をさまして熱心にたゆまず祈り、努力しなければならない。悪い習慣や風習は捨てなければならない。これらのあやまちを正しい原則に調和するように堅く決心して励んでこそ、勝利は得られるのである。多くの人は、当然得られる地位を得られないでいる。というのは、彼らが自分で実行するように神から力が与えられているのに、神が彼らのためにしてくださるのを待っているからである。有用な働きにふさわしい者はすべて、最もきびしい、知的、道徳的訓練によって鍛えられなければならない。そのとき、神は人間の努力に神の力を加えて助けてくださるのである。

モーセは、山々の岩壁にかこまれ、ただひとりで神と交わった。もはや、エジプトの華麗な神殿が彼の心に迷信と虚偽を印象づけることはなかった。永遠の山々の壮大ながめに、モーセは至高者の威光を仰ぎ、それとは対照的にエジプトの神々がいかに力なく、むなしきものであるかを認めた。いたるところに創造主のみ名がしるされていた。モーセは、神のみ前に立っているかのように感じ、その偉大な力に圧倒された。ここで彼の傲慢と自己満足とは一掃された。荒野のきびしい質素な生活の中では、エジプトの安易でぜいたくな生活の影響は影をひそめた。モーセは、忍耐力が強く、敬神深く、けんそんな人となり、「その人となり柔和なこと、地上のすべての人にまさっていた」（民数記一二ノ三）。しかし、ヤコブの偉大な神を信じる信仰は強かった。

モーセは、年月の経過とともに、羊の群れとさびしい場所を放浪しつつ、民の苦しい状態について考えた。彼は父祖たちをあつかわれた神の方法や、選民の嗣業として与えられた約束を思い返して、日夜イスラエルのために祈りをささげた。天使がモーセの回りを明るく照らした。モーセは、ここで、神の靈感を受けて創世記を書いた。モーセがただひとりで、長い年月を荒野で過ごしたことは、彼と彼の民族ばかりでなく、後世の人びとのためにも豊かな祝福となった。

「多くの日を経て、エジプトの王は死んだ。イスラエルの人々は、その苦役の務のゆえにうめき、また叫んだが、その苦役のゆえの叫びは神に届いた。神は彼らのうめきを聞き、神はアブラハム、イサク、ヤコブとの契約を覚え、神はイスラエルの人々を顧み、神は彼らをしるしめされた」(出エジプト記二ノ二三 一二五)。イスラエルの救済のときがきた。しかし、神のみこころは、人間の自尊心を傷つけるような方法でなされるべきであった。救済者は、手につえだけを持ち、卑しい羊飼いとして出て行くのであった。しかし、神はそのつえを神の力の象徴にしようとなさった。ある日、モーセが「神の山」ホレブの近くで羊の群れを導いていると、しばが燃えているのに、その枝や葉や幹が焼きつくされないのを見た。彼がこの驚くべき光景を見ようと近づいたとき、炎の中から声がして彼の名を呼んだ。モーセは、ふるえるくちびるで「ここにいます」と答えた。彼は軽率にそこに近づいてはならないことを警告された。「足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである。…わたしは、あなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」(同・三ノ五、六)。それは、過去の時代に、父祖たちに契約の天使として出現なさったおかたであった。「モーセは神を見ることを恐れたので顔を隠した」(同・三ノ六下句)。

神のみ前にくるすべての者の態度は、けんそんで敬神深いものでなければならない。われわれは、イエスの名によって、確信を持ってみ前に出ることができ、あたかも神がわれわれと同等であられるかのように、無遠慮な態度で近づくべきではない。近づくことのできない光の中に住み、偉大で、全能であられる聖なる神にむかつて、あたかも同等か、あるいは目下のものに話しかけるような言葉を用いる人がある。また、神の家の中にいて、地上の王たちの謁見室では決してしないような不謹慎な態度をとる人がいる。これらの人々は、自分が今、セラピムたちが賛美をささげ、み使いたちもそのみ前にあつて翼をもって顔をおおう神のみにあるということをおぼえていなければならない。神は大いに尊ばなければならないかたである。神のご臨在を真に感じるものはみな、そのみ前に謙虚に伏し、神の幻を仰いだヤコブのように、「これはなんという恐るべき所だろう。これは神の家である。これは天の門だ」と叫ぶのである（創世記二八ノ一七）。

モーセが、神のみ前で敬虔な思いで待っていると、みことばが聞こえてきた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを、つぶさに見、また追い使う者のゆえに彼らの叫ぶのを聞いた。わたしは彼らの苦しみを知っている。わたしは下つて、彼らをエジプトびとの手から救い出し、これをかの地から導き上つて、良い広い地、乳と蜜の流れる地……に至らせようとしている。……さあ、わたしは、あなたをパロにつかわして、わたしの民、イスラエルの人々をエジプトから導き出させよう」（出エジプト記三ノ七 一〇）。

モーセはこの命令に驚き、恐れ、しりごみしながら、「わたしは、いったい何者でしょう。わたしがパロのところへ行つて、イスラエルの人々をエジプトから導き出すのでしょうか」と言った。すると、「わたしは必ずあなたと共にいる。これが、わたしのあなたをつかわしたしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したと



モーセが、燃えるしばの近くに来ると、炎の中から声が聞こえて、彼の名を呼んだ。
モーセは、言われるままに、くつを脱ぎ、神を見ることを恐れて顔を隠した。

き、あなたがたはこの山で神に仕えるであろう」と神は答えられた(同・三ノ一、一二)。

モーセは、やがて直面する多くの困苦のことを考えた。そして、盲目的で、無知で、不信仰な自分の民のことを考えた。しかもその多くは、神についての知識をまったく持っていないのである。モーセは神に言った。「わたくしがイスラエルの人々のところへ行つて、彼らに『あなたがたの先祖の神が、わたしをあなたがたのところへつかわされました』と言うとき、彼らが『その名はなんというのですか』とわたしに聞くならば、なんと答えましょうか」(同・三ノ一三)。

神の答えは、「わたしは、有つて有る者。」「イスラエルの人々にこう言いなさい、『わたしは有る』というが、わたしをあなたがたのところへつかわされました」というのであつた(同・三ノ一四)。

モーセはまず、イスラエルびとの中で、長い間エジプトの労役を嘆いていた、氣高くて義を愛する長老たちを集め、神が解放の約束をお与えになつたことを彼らに伝えることを命じられた。それから、モーセは、民の長老たちとともに王の前に行き、次のように言うことになつた。

「ヘブルびとの神、主がわたしたちに現れられました。それで、わたしたちを、三日の道のりほど荒野に行かせて、わたしたちの神、主に犠牲をささげることを許してください」(同・三ノ一八)。

モーセは、イスラエルびとを行かせてくださいとの訴えに、パロが逆らうことを前もって知らされていた。しかし、神のしもべは勇気を捨ててはならないのであつた。というのは、このときこそ、神がエジプト人とイスラエルびとの前において、そのみ力をあらわされるからである。「それで、わたしは手を伸べて、エジプトのうちに行おうとする、さまざまの不思議をもつてエジプトを打とう。その後には彼はあなたがたを去らせるであろう」

(同・三ノ二〇)。

旅の準備についての指示も与えられた。主は言われた。「わたしはこの民にエジプトびとの好意を得させる。あなたがたは去るときに、むなし手で去ってはならない。女はみな、その隣の女と、家に宿っている女に、銀の飾り、金の飾り、また衣服を求めなさい」(同・三ノ二一、一二)。エジプト人は、イスラエルびとに不当の労役を強制して富を蓄積した。それで、イスラエルびとが新しい家郷にむかって出発するに際して、長年の労働の報酬を求めることは当然の権利であつた。そこで彼らは、値うちのある運びやすいものを求めることになった。神は、エジプト人がイスラエルびとに好意を示すように導かれた。イスラエルびとの救済のためになされる偉大な奇跡は、圧迫者たちの心に恐怖を起こさせ、奴隷たちの要求を彼らがかねえるのであつた。

モーセは、自分の前にある多くの困難に打ち勝てそうもないと思つた。神が、たしかにモーセをつかわされたというどんな証拠を、人々に示すことができるだろうか。モーセは言つた。「しかし、彼らはわたしを信ぜず、またわたしの声に聞き従わないで言うでしょう、『主はあなたに現れなかつた』と」(同・四ノ一)。そのとき、彼自身にもはっきりとわかるような確実な証拠を示された。彼はつえを地に投げるように命じられ、そうすると「へびになつたので、モーセはその前から身を避けた」。彼がそれをつかまえると、今度は手のなかでつえとなつた。彼はまた、手をふところに入れるように命じられたので、その通りにしたところ「それを出すと、手は、らい病にかかつて、雪のように白くなつていた」(同・四ノ三、六)。また、手をふところにもどすように言われてもどすと、回復して、もとの肉のようになっていた。主は、これらのしるしによつて、モーセに確証を与え、パロと同様に、イスラエルびとにも、エジプトの王よりも偉大な人間がここに現われたことを悟らせようとなさつた。

しかし、神のしもべモーセは、自分の前にある不思議な驚くべき働きのことを思つて圧倒されていた。彼は、苦しんで恐怖をいただき、話がよくできないことを口実にして、嘆願した。「ああ主よ、わたしは以前にも、またあなたが、しもべに語られてから後も、言葉の人ではありません。わたしは口も重く、舌も重いのです」(同・四一〇)。彼は、長い間、エジプト人と交わっていなかったため、以前のようにエジプトの言葉をはっきり知っておらず、以前のようにすぐに言葉が使えることもなかった。

主は彼に言われた。「だれが人に口を授けたのか。おし、耳しい、目あき、目しいに、だれがするのか。主なるわたしではないか」。さらに「それゆえ行きなさい。わたしはあなたの口と共にあつて、あなたの言うべきことを教えるであろう」と、神が助けてくださる保証が加えられた(同・四一一、一二)。それでも、モーセは、もっとほかに適当な人を選んでほしいと嘆願した。最初のうちは、このような弁解もけんそんとおくびようから出たものであつた。しかし、主があらゆる困難を取り除き最後の成功を与えるとの約束されているのに、それでもなおしりごみして、自己の不適任をかこつことは神への不信を示すものであつた。それは、偉大な事業に彼を召された神に、彼をその働きに適した者とする力がないか、それとも、神は人選を誤られたかということを暗にほめかしていた。

次に、モーセは、エジプトのことを毎日使つていて、完全に話すことのできる兄、アロンのことを考えた。モーセは、アロンが彼に会うために来ていることを知らされた。主からの次の言葉は絶対的命令であつた。

「あなたは彼に語つて言葉をその口に授けなさい。わたしはあなたの口と共にあり、彼の口と共にあつて、あなたがたのなすべきことを教え、彼はあなたに代つて民に語るであろう。彼はあなたの口となり、あなたは彼のた

めに、神に代るであろう。あなたはそのつえを手に執り、それをもって、しるしを行いなさい」(同・四ノ一五 一七)。モーセはもはやこれ以上逆らうことができなくなった。言いわけの余地がまったくなくなってしまったからである。

神の命令がモーセに与えられたとき、彼は、自信がなく、口が重く、おくびようであった。彼は、イスラエルびとに対する神の代弁者としての、自分の不適任さを思つて圧倒された。しかし、ひとたびその任務を受け入れるや、主にまったく信頼を寄せ、全心をこめて働きを始めた。彼はこの偉大な働きのために、彼の知力のかぎりを尽くして働いた。神は、モーセのこのような従順な態度を祝福されたので、彼は雄弁になり、希望に満ち、落ちつきを取りもどして、人間にゆだねられた最大の働きにふさわしい人物となった。これこそ神にまったく信頼し、主のご命令に従う者の品性を神が強化されるよい実例である。

人間は、神がお与えになる責任を受け入れ、全力を尽くして正しく遂行しようと願うときに、力と能力とを受けるものである。たとえ、その地位がどんなに低く、その能力にかぎりがあつたとしても、神の力に信頼し、その働きを忠実に果たそうとするものは、真に偉大なものになるのである。もしも、モーセが自分の力と知恵に頼り、大きな責任を自分から進んで負つたとすれば、彼はそのような働きに全然不適当であることを示したことがある。人間が自分の弱さを認めるという事実は、少なくとも彼が、与えられた仕事の大きさを認識し、神を彼の力、助言者とするということの証拠である。

モーセは、義父のもとに帰り、エジプトにいる兄弟たちを訪れたいことを話した。エテロもそれに同意し、「安んじて行きなさい」と彼を祝福した。モーセは妻と子供たちを連れて旅に出た。彼は、自分の働きの目的を話せ

ば、彼らと一緒に行かせてくれないと思ったので、何も言わなかった。しかし、彼はエジプトに着く前に、家族の身の安全を考えて、彼らをミデアンの家に送りかえすことがいっばんよいと思った。

モーセは、四十年前に、パロやエジプト人たちが彼に対して怒ったことを、心ひそかに恐れていたので、エジプトに帰ることはなかなか気が進まなかった。しかし、神のご命令に従って出発したあとで、主は、すでに敵は死んだことをモーセにお告げになった。

モーセは、ミデアンからの途中で、神が怒っておられるという驚嘆すべき恐ろしい警告を受けた。ひとりの天使が、モーセをおどすような態度で現われ、あたかも、彼をただちに滅ぼすかのように思われた。それにはなんの説明もなかった。しかし、モーセは、神のご要求の一つを軽視したことを思い出した。彼は、妻の言うままになって、末の子に割礼の儀式を行なうことをなおざりにしていた。モーセは、イスラエルの民に約束された神の祝福に、その子があずかるための条件を、まだ実行していなかった。選ばれた指導者が、このようなことを怠るならば、人々の間で神の戒めの力を弱めることになる。チツポラは夫が殺されることを恐れて、自分で儀式を行なったので、天使は、モーセが旅を続けるのを許した。モーセは、パロに対する任務を帯びて、非常に危険な立場におかれることになった。彼の生命は、聖なる天使たちに守護されていたからこそ安全であった。しかし、当然果たすべき義務を怠っている安全ではなかった。なぜなら、彼は、神の天使たちに保護されることができないからであった。

キリスト再臨直前の悩みの時にも、義人たちは天のみ使いたちの奉仕によって守られるのである。しかし、神の律法を犯すものは安全ではない。天使たちは、神の戒めの一つでも無視する者を保護することはできないのである。

エジプトの災害

本章は、出エジプト記五 一〇章に基づく。

アロンは、天使の指示に従って、これまで長い間、別れていた彼の兄弟に会いに出かけた。彼らは、ホレブに近いさばくのさびしいところで出会った。彼らは、ここで話し合い、モーセは、「自分をつかわされた主のすべての言葉と、命じられたすべてのしるしをアロンに告げた」(出エジプト記四ノ二八)。彼らは、一緒にエジプトに向かい、ゴセンの地につくと、直ちにイスラエルの長老たちを集めた。アロンは、神がモーセになさったことを全部彼らに語って聞かせた。そして、神がモーセにお与えになったしるしを民の前に示した。「民は信じた。彼らは主がイスラエルの人々を顧み、その苦しみを見られたのを聞き、伏して礼拝した」(出エジプト記四ノ三一)。

また、モーセには、王に言うべき言葉がゆだねられていた。ふたりの兄弟は、王の王からつかわされた大使として、パロの宮殿にはいり、その名によって語った。「イスラエルの神、主はこう言われる、『わたしの民を去らせ、荒野で、わたしのために祭をさせなさい』と」(同・五ノ一)。

「主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従ってイスラエルを去らせなければならぬのか。わたしは主を知らない。またイスラエルを去らせはしない」と王は言った(同・五ノ二)。

「ヘブルびとの神がわたしたちに現れました。どうか、わたしたちを三日の道のりほど荒野に行かせ、わたしたちの神、主に犠牲をささげさせてください。そうしなければ主は疫病か、つるぎをもって、わたしたちを悩まされるからです」と彼らは答えた(同・五ノ三)。

モーセとアロンのこと、また、彼らが人々の間でどんなことをあおり立てていたのかという知らせが、すでに王の耳に達していた。王は怒って言った。「モーセとアロンよ、あなたがたは、なぜ民に働きをやめさせようとするのか。自分の労役につくがよい」。こうした外国人の妨害によって、王国はすでに損失をこうむっていた。王は、それを思っ言葉続けた。「見よ、今や土民の数は多い。しかも、あなたがたは彼らに労役を休ませようとするのか」(同・五ノ四、五)。

イスラエル人は、奴隷になつてゐる間に、神の律法の知識をかなり見失ひ、その戒めから離れてゐた。安息日は、一般に無視され、作業を監督する者が不当に彼らを働かせたので、安息日が守れないことは明白であつた。しかし、モーセは、神に従ふことが救ひの第一条件であることを、神の民に明らかに示した。こうして彼らが、再び安息日を守らうとしてゐることが、圧制者たちに知られるようになった。

十分に警戒しはじめた王は、イスラエル人が王の仕事に反逆を企てるのではないかと疑つた。不満は、怠惰の結果起こつた。王は、危険な陰謀を企てる時間が彼らにないようにしなければならぬと考えた。そこで王は、直ちに彼らの束縛をきびしくし、独立精神をくたく手段に出た。その日、彼らの労働をさらにきつくし、圧迫を

加える命令が出された。

エジプトで、最も広く使用された建築の材料は、太陽でやいたれんがであった。最も壮麗な建物の壁もこのれんがの上に石をはりつけたものであった。れんがの製造には、多くの奴隷が使用された。粘土のつなぎとして、麦わらをきざんだものが混ぜられていたので、そのために多量の麦わらが必要であった。王は、麦わらの供給をそのときから停止することを命じた。労働者たちは、自分たちでわらをさがすとともに、同量のれんがを作ることがきびしく要求された。

この命令は、国内のイスラエル人を非常に困難な状態に陥れた。エジプト人の監督は、ヘブルびとの下役を任命し、彼らのもとにある人々の仕事の責任をとらせた。王の要求が実施され、人々は、わらの代わりに刈り株を集めるために、国中にちらばった。しかし、これでは、従来と同量の仕事を完成することは不可能であった。製造が順調に進行しないために、ヘブルびとの下役たちは、激しく打たれた。

この下役たちは、こうした圧迫が、王からではなく、監督から出たものであると思い、王のところに苦情を訴えた。しかし、パロは、彼らの訴えをちよう笑した。「彼らはなまけ者だ。それだから、彼らは叫んで、『行ってわたしたちの神に犠牲をささげさせよ』と言うのだ」(同・五ノ八)。彼らは、もどつて働くように命令され、仕事軽くされることは、絶対にあり得ないことを知らされた。彼らは、モーセとアロンのところに帰ってきて叫んで言った。「主があなたがたをこらんになって、さばかれますように。あなたがたは、わたしたちをパロとその家来たちにきらわせ、つるぎを彼らの手に渡して、殺させようとしておられるのです」(同・五ノ二一)。

このような非難を聞いたモーセは、非常に苦しんだ。民の苦悩は、いっそう激しくなった。国内いたるところ

で、老人や青年たちが絶望の声をあげ、口をそろえて、彼らの悲惨な状態をモーセのせいにした。

モーセは非常な苦境に陥り、神の面前に出て叫んだ。「主よ、あなたは、なぜこの民をひどい目にあわされるのですか。なんのためにわたしをつかわされたのですか。わたしがパロのもとに行つて、あなたの名によつて語つてからこのかた、彼はこの民をひどい目にあわせるばかりです。また、あなたは、すこしもあなたの民を救おうとなさいません」(同・五ノ二二、二三)。

それに答えて、神はこうおおせになった。「今、あなたは、わたしがパロに何をしようとしているかを見るであらう。すなわちパロは強い手にしいられて、彼らを去らせるであらう。否、彼は強い手にしいられて、彼ら王国から追い出すであらう」(同・六ノ一)。神は、ご自分が父祖たちと結ばれた契約をモーセに思い起こさせ、それが必ず成就されるという確証をお与えになった。

イスラエル人の中には、エジプトの奴隷生活中、ずっと主の礼拝を守り続けていた人々が少数ながらいた。この人々は、自分らの子供たちが、毎日、異教の憎むべきことをながめ、偽りの神々を礼拝したりさえするようになつたのを見て、非常に心を痛めていた。彼らは、大きな苦しみの中から、エジプト人のくびきからの解放と偶像礼拝の墮落的影響から救われることを、主に叫び求めた。彼らは、自分たちの信仰を隠そうとせず、天地の創造者であられる唯一の眞の生きた神が、彼らの礼拝の対象であることを、エジプト人に知らせた。彼らは、世界の創造からヤコブの時代にわたつてあらわされた神の存在と能力の証拠を列挙した。こうして、エジプト人はヘブルびとの宗教を詳しく知る機会に恵まれていた。しかし、彼らは、奴隷から教えられることを屈辱とし、神を礼拝する者たちを買収によつて誘惑した。そして、それがうまくいかないと、今度は脅迫と残酷な行為に及ん

だ。

イスラエルの長老たちは、父祖に与えられた約束や、エジプトからの解放に関するヨセフの生前の預言をくり返して、兄弟たちの衰えがちな信仰を保とうとつとめた。それに喜んで耳を傾けて信じる者もあれば、回りの状態を見て希望をいだこうとしない者もあった。エジプト人は、奴隷たちの間に伝わった情報を聞いて、そうした彼らの期待をちよう笑し、彼らの神の力をあなどって拒否した。エジプト人は、彼らが奴隷であることを指摘して、「もしあなたの神が正しく、あわれみに富み、エジプトの神々にまさる力を持っているなら、なぜあなたがたを自由な民にしないのですか」とのしつて言った。エジプト人は、自分たち自身の状態を考えてみよと彼らに言った。エジプト人は、イスラエル人が偽りの神と呼ぶ神々を礼拝しているにもかかわらず、豊かで、強大な国民である。こうした繁栄を与え、イスラエル人を奴隷として彼らに与えたのも、この神々であると彼らは言うのであった。そして、自分たちには、主を礼拝する者を迫害し、滅亡させる能力があると誇った。パロもまた、ヘブルびとの神は、その民を彼らの手から解放することは不可能だと誇っていた。

多くのイスラエル人は、こうした言葉を聞いて希望を失った。万事がエジプト人の言う通りになるような気がした。彼らは、奴隷であった。監督が情け容赦なく命じるままに、すべて耐えていかなばならなかった。イスラエル人の子供たちは、狩り出されて殺された。そして、彼ら自身の生活も苦しかった。それでも、彼らは天の神を礼拝していた。もし、主がすべての神々よりすぐれたおかたであるなら、彼らを偶像礼拝者の奴隷にしたままほうっておかれない。神に忠実であった者たちは、彼らが奴隷生活に陥るのを主が許されたのは、イスラエルが神から離れ、異邦人と結婚し、偶像礼拝をしたためであることを知っていた。彼らは、神が間もなく圧制者のく

びきを砕いてくださることを、力強く兄弟たちに語った。

ヘブル人は、特別に信仰の試練や、真の苦しみ、困難に会わずに自由を獲得することを期待した。しかし、彼らには、まだ、救われる準備ができていなかった。彼らには、神に対する信仰がほとんどなかった。また、神が彼らのために働くのに最適だと思われるときまで、忍んで苦しみに耐える気持ちがなかった。異国に移住するのとに付随した困難に会うよりは、奴隷のままでいたほうがよいと思う者が多かった。また、エジプト人の生活になじんでしまった者は、エジプトに定住することを選んだ。そのため、主はパロの前で最初に力をあらわされたときに、彼らをお救いにならなかった。神は、いろいろのできごとを支配して、エジプト王の残酷な精神がつのるのを許し、それとともに、ご自身を民にあらわそうとなさった。人々は、神の義と力と愛とを見ることによって、エジプトを離れ、神の奉仕に献身するようになるのであった。もし多くのイスラエル人が、これほどまでに墮落せず、また、エジプトを離れることをきらわなかったならば、モーセの働きは、はるかにやさしかったことであろう。

主は、モーセに、神の恵みの新しい確証をもって、民のところに行き、救済の約束をくり返すようにお命じになった。モーセは、命令された通りに出ていったが、人々は耳を傾けようとしなかった。聖書にはこう書かれている。「彼らは心の痛みと、きびしい奴隷の務のゆえに、モーセに聞き従わなかった」。再び神の言葉がモーセに与えられた。「エジプトの王パロのところに行つて、彼がイスラエルの人々をその国から去らせるように話さない」。モーセは失望して答えた。「イスラエルの人々でさえ、わたしの言うことを聞かなかったのに、どうして…パロが聞き入れましょうか」。モーセは、アロンを伴つてパロのもとに行き、もう一度「イスラエルの人々を

エジプトの地から導き出」すことを要求するように命じられたのである(同・六ノ九 一二三)。

モーセは、神がエジプトに罰を下し、驚くべきみ力の現われによって、イスラエル人を救い出されるまで、王は、譲らないであろうと知らされた。モーセは、もし、王が災いからのがれようと思えば、避けることができるように、一つ一つの災いが降される前に、それがどういう性質のもので、どういう結果になるかを説明するのであった。一つの刑罰を彼が拒むたびに、さらに激しい刑罰が続いて降り、パロの高慢な心が低くされ、ついには天地の創造者をまことの生きた神として認めるようになるのであった。もし、エジプト人が主の命令に逆らうならば、主は、それを彼らの偉大な人々の知恵がどんなにむなく、彼らの神々の力がどんなに弱いものであるかを知る機会にしようとされた。神は、エジプト人を偶像礼拝のゆえに罰し、彼らがなんの感覚もない神々から祝福を受けたといって誇っていることを沈黙させようとされた。こうして、諸国の人々は、神の力を知らされて、その偉大なわざに恐れおののくのである。また、神の民は、偶像礼拝をやめて、神に純粋な礼拝をささげるようになり、神ご自身の名があがめられるのである。

モーセとアロンは、再びエジプト王の華麗な宮廷にはいつていった。高い柱廊、輝く装飾、美しい絵画、異教の神々の彫像などに囲まれて、奴隷民族を代表するふたりは、当時の最も強大な王国の君主を前にして、イスラエルの解放を命じる神の言葉を語るために立ったのである。王は、彼らが神からの命令を持っていく証拠として奇跡を要求した。モーセとアロンには、そのような要求があった場合、どのように行動すべきかという指示が与えられていたので、アロンがつえをとり、パロの前に投げた。それは、へびになった。王は「知者と魔術師」を召しよせた。すると彼らも「おのおのそのつえを投げたが、それらはへびになった。しかし、アロンのつえは彼



モーセは、高い円柱や、きらびやかな装飾に囲まれたエジプト王の宮廷にはいり、高慢な王に、彼の民の解放を要求した。

らのつえを、のみつくした」(同・七ノ一二)。そこで、王は、今までよりもさらに心をかたくなにして、自分の魔術師はモーセやアロンと同じ力を持っていると言った。王は、主のしもべたちを詐欺師であると非難し、彼らの要求をしりぞけても安全であると考えた。王は、彼らの言葉をあなどったが、彼らに危害を加えることは、神の力によってとどめられた。

パロの前で、モーセとアロンが示した奇跡は、神のみ手によって、行なわれたのであって、彼らが持っていた人間的な力によるものではなかった。これらのしるしと不思議は、「わたしは有る」という大いなるかたが、モーセをつかわされたことと、イスラエル人を解放して、彼らを生きた神に仕えさせることが王の義務であることをパロに悟らせるためのものであった。魔術師たちも、しるしや不思議を行なったが、彼らは自分たちの力だけで行なったのではなく、主のわざに対抗するために、彼らに助けを与えた彼らの神、サタンの力によるものであった。

魔術師たちは、ほんとうに彼らのつえをへびに変えたものではなかった。彼らは、大いなる欺瞞者の助けを得て、魔術を用いてへびのように見せかけることができたのであった。つえを生きたへびに変えることは、サタンの力の及ばないことである。悪の君は、墮落天使の知恵と能力をことごとく身につけているとはいえ、創造する力、すなわち、生命を与える力は持っていない。これは、ただ神のみの特権である。しかし、サタンは自分の力でできることはことごとく行ない、にせものをつくり出した。つえは、人間の目にはへびに変わって見えた。パロと廷臣は、それらがへびであると信じていた。その外観からは、モーセによってつくりだされたへびと区別することは全くできなかった。主は、ほんとうのへびがにせのへびをのみつくすようにされたが、パロはそのことでさ

え神の力のわざではなく、自分の家来たちの魔術よりもさらにすぐれた魔術の結果であると思っていた。

神の命令に逆らったパロは、そのかたくなな心を正当化しようとのぞみ、神がモーセを通して行なわれた奇跡を無視する口実をさがしていた。サタンはちょうど彼がほしがっていたものを与えた。サタンは、魔術師たちに行なわせたしわざによって、モーセとアロンが単なる魔術師にすぎず、彼らがたずさえてきた使命は、神からのものとして重要視する必要はないとエジプト人に思わせようとした。このように、サタンの欺瞞はその目的を果たし、エジプト人を大胆にして神にそむかせ、また、パロの心を堅くして不信に陥れた。サタンはさらに、モーセやアロンの使命が神からのものであるという信仰をゆるがせ、自分の手下のがわを勝利させようとした。王は、イスラエルの人々が、奴隷から解放されて生きた神に仕えることを喜ばなかった。

しかし、悪の君が魔術師を通して不思議を行なったのには、もつと深い目的があつた。彼は、モーセが、イスラエルの人々を奴隷のきずなから解放することは、人類を罪の支配から解放するキリストを予表していることをよく知っていた。彼は、キリストがこの世に現われるとき、彼が神から世に送られた証拠として力ある奇跡を行なわれるのを知っていた。サタンは、キリストの力におののいた。サタンは、モーセを通してなされた神のみわざのにせものをつくり出すことによって、イスラエルの解放をさまたげると共に、その後の時代にまで影響を及ぼし、人々にキリストの奇跡を信じさせまいとした。サタンは、絶えずキリストのみわざのにせものをつくり、自分の勢力範囲を確立しようとしている。サタンは、キリストの奇跡が、人間の技巧と能力の結果であるかのように見せかけて、人々にそう思わせている。彼は、このようにして、多くの人々の心からキリストが神の子であるという信仰を失わせ、あがないの計画を通して与えられる恵み深いあわれみの招きを、人々が退けるようにし

むける。

次の朝、モーセとアロンは川岸に行くように指示されたが、そこは王がしばしば行くところであった。ナイル川のはんらんが、全エジプトの食物と富の源であったので、川は神として礼拝されていた。王は祈りをささげるために毎日ここに来ていた。ここでふたりの兄弟は、再びパロに伝えるべき言葉をくり返して告げ、それからつえをのべて水を打った。すると、その清い水は血に変わり、魚は死に、川は不快なおいを放った。家の中の水も、飲み水としてたくわえてあった水も同じように血に変わった。「エジプトの魔術師らも秘術をもって同じようにおこなった」。しかし「パロは身をめぐらして家に入り、またこのことをも心に留めなかった」(同・七ノ二、二三)。この災いは七日間続いたが、なんの効果もなかった。

再びつえが水の上にのべられて、かえるが川からのぼって国中にひろがった。かえるは家々に群がり、寝室にはいり、かまどやこねばちにさえはいった。エジプト人は、かえるを神聖なものとしていたので殺そうとしなかった。しかし、かえるのわざわいはついに耐えられなくなった。かえるはパロの宮殿にさえ群がったので、王は、たまりかねてそれを取り除かせた。魔術師たちはかえるをつくり出すようには見えなかったが、それを取り去ることはできなかった。パロはそれを見て、いくらか心を低くした。彼は、モーセとアロンを召して言った。「かえるをわたしと、わたしの民から取り去るように主に願ってください。そのときわたしはこの民を去らせて、主に犠牲をささげさせるでしょう」(同・八ノ八)。ふたりは、王が以前に高慢なことを言ったことを彼に指摘して災いが取り去られることを祈る時を定めてもらいたいと王に求めた。王は、次の日を指定した。彼は、それまでにかえるが自然にいなくなってしまう、彼がイスラエルの神に服従するというはなはだしい屈辱にあわなくてもすむよ

うにとひそかに願っていた。しかし、災いは定められた時まで続いた。そして、エジプトのいたる所で死んだかえるが腐って、その死がいが空気を汚染した。

主は、かえるを一瞬のうちにちりに帰すことがおできになったが、そうはなさらなかった。それは、かえるが取り去られたのち、王と人々が、それを魔術師たちの行なう魔法の結果であるということのないためであった。かえるは死に、一か所にうず高く集められた。これこそ、王と全エジプトの人々が、彼らのむなしい哲学では否定することのできない証拠であった。これは、魔術によって行なわれたものではなくて、天の神の刑罰であった。

「パロは息つくひまのできたのを見て、主が言われたように、その心をかたくなに」した(同・八ノ一五)。アロンの神の命令を受けて手をのべると、エジプト全国にわたって、地のちりがぶよになった。パロは、魔術師を呼び出して同じことをさせたが、彼らにはできなかった。このように神のわざはサタンのわざよりもすぐれていることが明らかにされた。魔術師たち自身も、「これは神の指です」と認めた。しかし、王はまだ動かされなかった。

訴えも警告も効果がなかったので、もう一つの刑罰が下った。それが偶然に起こったと言われることのないように、それがいつ起こるかという予告がなされた。あぶが家々を満たし、地の上に群がったので「地はあぶの群れのために害をうけた」(同・八ノ二四)。これらのあぶは大きく有毒で、人間や動物はそれにかまれると激しい痛みをおぼえた。この刑罰は、すでに予告されていたように、ゴセンの地には及ばなかった。

そこでパロは、イスラエル人に、エジプトで神に犠牲をささげる許可を与えたが、彼らは、そのような条件を受け入れなかった。モーセは言った。「そうすることはできません。…もし、エジプトびとの目の前で、彼ら

の忌むものを犠牲にささげるならば、彼らはわたしたちを石で打たないでしょうか」(同・ハノ二六)。ヘブルびとが犠牲としてささげるように要求されていた獣は、エジプト人が神聖なものとしていた動物に属していた。こうした動物は非常に尊ばれていたもので、たとえ事故によるものであっても、一匹でも殺すことは死刑に値する犯罪であった。ヘブルびとがエジプトで、彼らの主人の気にさわらないように礼拝することはほとんど不可能であった。モーセは、三日間荒野に行かせてほしいと再び申し出た。王はそれに同意し、災いが取り去られるように祈願してほしいと彼に願った。彼らは祈ることを約束した。そして、もう欺くことはやめてほしいと王に強く訴えた。災いはとどめられたが、王は、頑強に反逆して心をかたくし、なおも従おうとしなかった。

もっと恐ろしい打撃が続いた。野にいるエジプトの全家畜に疫病が下った。神聖な獣も、雄牛、雌牛、羊、馬、らくだ、ろばなど労役用の家畜も殺された。ヘブルびとがその刑罰から免れることは明らかに宣言されていたので、パロがイスラエル人の家に使者を送ったところ、モーセの宣言が正しかったことが証明された。「イスラエルの人々の家畜は一頭も死ななかった」(同・九ノ六)。王は、それでもなお頑強に逆らった。

次に、モーセは、かまどの灰をとって、「パロの目の前で天にむかって、まき散らしなさい」と命令された(同・九ノ八)。この行為には深い意義があった。四百年前、神はアブラハムに、彼の民が将来迫害されることを、けむっているかまどと、燃える燈火の象徴によってお示しになっていた。神は、彼らを迫害する者をさばき、捕われている人々に多くの所有物を与えて連れ出すであろうと宣言しておられた。イスラエル人は、エジプトで長い間苦難のかまどの中で苦しんできた。モーセのこの行為は、彼らにとって、神がその契約を覚えておられることと、彼らの解放の時が来たことの保証であった。

天に向かってまかれた灰の細かい粒子が、エジプト全国にまき散らされると、それはいたる所で「人と獣に付いて、うみの出るはれもの」を生じさせた(同・九ノ九)。祭司と魔術師は、それまでパロのかたくなさを助長していたが、今や、その刑罰は彼らにまで及んだ。彼らは、不快きわまる苦しい病に打ちひしがれ、誇っていた力も、ただ彼らをはずかしめるだけになり、もはやイスラエルの神に立ち向かうことができなくなった。全国民は自分の身さえ守ることのできない魔術師にたよっていることの愚かさを知らされた。

それでもなお、パロの心はさらにかたくなになっていった。そこで、主は彼にみことばを送って宣言された。

「わたしは、こんどは、もろもろの災を、あなたと、あなたの家来と、あなたの民にくだし、わたしに並ぶものが全地にないことを知らせるであらう。……しかし、わたしがあなたをながらえさせたのは、あなたにわたしの力を見させるため」である(同・九ノ一四 一六)。これは、神が、この目的のために、彼を生かしておかれたということではなく、むしろ神のみ摂理が諸事件を支配して、イスラエルの解放のために定められたちようどその時に、彼を王位につけたということである。この高慢な暴君は、彼の犯した罪により、神のあわれみを受けるに値しない者となっていたが、それでも彼の頑迷さを通して、主がエジプトの地で驚くべきことをあらわすために彼の生命は保たれていた。諸事件のなりゆきを定めるのは、神の摂理である。神は、神の力の大きな現われにあえて逆らおうとしない、もつとあわれみ深い王を王位につけることもおできであった。しかし、それでは、主の目的は成就されなかったであろう。神の民がエジプト人のはなはだしい残酷な取りあつかいを受けることを神が許されたのは、彼らが偶像礼拝の墮落的な影響について欺かれることのないためであった。主は、こうしたパロとの交渉のうちに偶像礼拝に対する憎悪を示し、残酷と圧迫とを罰せずにはおかない神の決意を示された。

神は、パロについて宣言された。「わたしが彼の心をかたくなにするので、彼は民を去らせないであろう」(同・四ノ二一)。王の心をかたくなにするために、何か超自然の力が用いられたのではない。神は、パロに神の力の最も著しい証拠をお示しになったのであったが、王はかたくなにも光を心に留めることを拒んだ。無限の力の表示をことごとく退けた彼は、反抗の決意をさらに固めた。彼が最初の奇跡を退けたときにまいた反逆の種は、その実を結んだ。彼が、彼自身の道を歩む危険を冒し続け、ますます強情の度合いを増すにつれて、彼の心はいよいよかたくなになり、ついに、長子のつめたい死に顔をながめなくてはならないようになった。

神は、そのしもべを通して人間に語り、注意や警告をお与えになり、その罪を非難なさる。神は、すべての人の品性が決定される前に、そのあやまちを正す機会をお与えになるが、もしその人が正されることを拒否するならば、神のみ力は、その人の行為の傾向をほかに向けるために干渉することをしない。彼には同じことをくり返すことが容易なのである。彼は、聖霊の感化に反対して心をかたくなにしている。光を退け続けると、さらに強力な感化力であっても永続的な印象をうけつけないのである。

一度、試みに負けた者は、二度めにはさらにたやすく屈服する。罪をくり返すたびに抵抗する力は弱まり、目は暗くなり、確信は消え去る。まかれた放縦の種はみな実を結ぶ。神は、その収穫を妨げるために奇跡を行なうようなことはなさらない。「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる」(ガラテヤ六ノ七)。神の真理に対して神を恐れぬ不敵さと、愚かな無関心を示すものは、彼自身がまいたものの収穫を刈り取っているのである。こうして、多くの者は、かつて彼らの魂をゆり動かした真理を、冷たい無関心な態度で聞くようになるのである。彼らは、真理に対して怠慢と反抗の種をまき、そのような収穫を刈り取るのである。

悪の道は、変えようと思えばいつでも変えられるし、あわれみの招きを軽くあしらっても、なおくり返しその招きを感じることができると考えて、良心の声をしずめている人々は、非常に危険な道を歩んでいる。彼らは、自分の力のすべてを大反逆者サタンの側に置いておきながら、いよいよどうにもならなくなって危険に囲まれたときに、自分の指導者を変えればよいと考えている。しかし、これはそれほど容易にできることではない。罪にふけてきた生涯の体験、教育、訓練などが品性をすっかり形成しているのであるから、彼らはもはやイエスのみかたちを受け入れることができなくなっている。もし光が彼らの道を照らしていなかったならば、事情は異なっていたであろう。あわれみのみ手がのべられて、その申しいでを受け入れる機会が彼らに与えられるかもしれない。しかし、長い間拒まれ、侮られて来た光は、ついに取り去られてしまうのである。

パロには、次に雹の災いが下されることになり、警告が与えられた。「それゆえ、いま、人をやって、あなたの家畜と、あなたが野にもっているすべてのものを、のがれさせなさい。人も獣も、すべて野にあって家に帰らないものは降る雹に打たれて死ぬであろう」(出エジプト記九ノ一九)。エジプトでは、雨や雹は珍しく、予告されたようなあらしはこれまでになかった。この知らせは、すみやかに広まり、主の言葉を信じた者はみな彼らの家畜を集めたが、警告を侮った者は家畜を野に残しておいた。こうして、刑罰のうちにも神のあわれみがあらわされ人々は試みられ、どれだけの人が神のみ力のあらわれを通して神を恐れるようになったかが明らかにされた。予告通りに、あらしがやってきた。雷と雹に火がまじり、「エジプト全国には、国をなしてこのかた、かつてないものであった。雹はエジプト全国にわたって、すべて畑にいる人と獣を打った。雹はまた畑のすべての青物を打ち、野のもろもろの木を折り砕いた」(同・九ノ二四、二五)。破壊と荒廃が、滅びの天使の通ったあとを示

していた。ゴセンの地だけが助かった。地は、生きた神の支配のもとにある。そして、自然は、神のみ声に従っている。だから神に従うことだけが安全であることが、エジプト人に明らかに示された。

全エジプトは、神の刑罰の恐ろしい降下を前にしておののいた。パロは急いでふたりの兄弟を召して叫んだ。

「わたしはこんどは罪を犯した。主は正しく、わたしと、わたしの民は悪い。主に祈願してください。この雷と雹はもうじゅうぶんです。わたしはあなたがたを去らせます。もはやとどまらなくてもよろしい」。モーセは答えた。「わたしは町を出ると、すぐ、主にむかってわたしの手を伸べひろげます。すると雷はやみ、雹はもはや降らなくなり、あなたは、地が主のものであることを知られましょう。しかし、あなたとあなたの家来たちは、なお、神なる主を恐れないことを、わたしは知っています」(同・九ノ二七 三〇)。

モーセは、争闘がまだ終わっていないことを知っていた。パロの告白と約束は、彼の気持ちが変わったためではなく、恐怖と苦悩のためやむを得ずなされたものであった。しかし、モーセは彼の願いを聞き入ると約束した。それは王に、これ以上強情をはる機会を与えなくなかったからである。預言者は、激しいあらしも気に留めず出て行った。パロとパロのすべての家来たちは、主がその使命者を守護なさる力を目撃していた。モーセは町の外に出て、「主にむかって手を伸べひろげたので、雷と雹はやみ、雨は地に降らなくなった」(同・九ノ三三)。ところが、王は恐怖心が去るとすぐ、もとのかたくなな心にもどった。

そこで、主はモーセに言われた。「パロのもとに行きなさい。わたしは彼の心とその家来たちの心をかたくなにした。これは、わたしがこれらのしるしを、彼らの中に行うためである。また、わたしがエジプトびとをあしらったこと、また彼らの中にわたしが行ったしるしを、あなたがたが、子や孫の耳に語り伝えるためである。そ

してあなたがたは、わたしが主であることを知るであらう」(同・一〇ノ一、二)。主は、ただご自分だけがまことの生きた神であるという信仰を強くイスラエルの人々にいだかせるために、そのみをあらわされた。神は、イスラエル人とエジプト人の間の相違について明らかな証拠をお与えになり、すべての国民が侮り、圧迫しているヘブルびとが、天の神の保護のもとにあることを諸国民に知らせようとされた。

モーセは、もし王がいつまでも強情をはり続けるならば、いなごの災いが送られ、それは地のおもてをおおい、残されているすべての青物を食べ尽くし、家々を満たし、宮殿さえも満たすであらうと警告した。モーセは、そのようなしめは「あなたの父たちも、また、祖父たちも、彼らが地上にあつた日から今日に至るまで、かつて見たことのないものである」と言った(同・一〇ノ六)。

パロ王の重臣たちは、驚いて立ちすくんだ。国は家畜の死によつてばく大な損失をこうむっていた。多くの人が雷で死んだ。森林は倒され、穀物はそこなわれた。彼らは、ヘブルびとの労力で得たものを急速にことごとく失っていた。全土は飢餓の脅威にさらされていた。つかさたちや廷臣たちは、王のまわりにつめ寄り、怒って要求した。「いつまで、この人はわれわれのわなとなるのでしょうか。この人々を去らせ、彼らの神なる主に仕えさせては、どうでしょう。エジプトが滅びてしまうことに、まだ気づかれないのですか」(同・一〇ノ七)。

モーセとアロンが再び召されて行くと、王は彼らに言った。「行つて、あなたがたの神、主に仕えなさい。しかし、行くものはだれだれか」(同・一〇ノ八)。

モーセは言った。「わたしたちは幼い者も、老いた者も行きます。むすこも娘も携え、羊も牛も連れて行きます。わたしたちは主の祭を執り行わなければならないのですから」(同・一〇ノ九)。

王は激しい怒りに満たされた。「万一、わたしが、あなたがたに子供を連れてまで去らせるようなことがあれば、主があなたがたと共にいますがよい」と彼は叫んだ。「あなたがたは悪いたくらみをしている。それはいいない。あなたがたは男だけ行って主に仕えるがよい。それが、あなたがたの要求であった」(同・一〇ノ一〇、一一)。彼らは、ついにパロの前から追い出された。パロは、重労働によってイスラエル人を滅ぼそうとしたのだが、今度は、彼らの幸福に深い関心をよせ、子供たちをやさしく見守っているかのように見せかけた。彼の真の目的は、男たちが帰ってくる保証として女と子供を手もとに置いておくことであつた。

さて、モーセがつえを地の上にさしのべると、東風が吹いていなごを運んで来た。「その数のはなはだ多く、このようないなごは前にもなく、また後にもないであろう」(同・一〇ノ一四)。いなごは空をおつたので、地は暗くなった。そして、残されていた青物をことごとく食べ尽くした。パロは、大急ぎで預言者たちを召して言った。「わたしは、あなたがたの神、主に對し、また、あなたがたに對して罪を犯しました。それで、どうか、もう一度だけ、わたしの罪をゆるしてください。そしてあなたがたの神、主に祈願して、ただ、この死をわたしから離れさせてください」(同・一〇ノ一六、一七)。彼らがそのようにすると、強い西風がいなごを紅海に運んでいった。王はそれでもなお、彼のかたくなな決意を変えようとしなかった。

エジプト人は、まさに絶望に陥るところであつた。これまで彼らに下つた天罰は、ほとんど耐えがたいように思われ、これから先は、どうなることかとあやぶまれた。国民は、彼らの代表者として、パロを礼拝していた。ところが、自然界のすべての力をみ心のままにお用いになる真の神に、パロが逆らっていることを彼らの多くははつきりと悟つた。ヘブルの奴隷たちは、全く奇跡的な方法で助けられたために、救済の確信をいだくようにな

った。監督たちはこれまでのように彼らを抑圧しようとしなかった。エジプトのいたるところで奴隷たちが立ち上がって、その受けた圧迫の報復をするのではないかと、人々はひそかに恐れた。人々は、いたるところで息を殺して次にはいつたい何が起こるだろうかとささやき合っていた。

突然、暗黒が全国にのぞんだ。それは非常に濃い暗黒であつたので、「そのくらやみは、さわれるほどであつた(同・一〇ノ一二)」。人々から光がとり去られたばかりでなく、空気もまた息がつまるようであつたので、呼吸するのも困難であつた。「三日の間、人々は互に見ることもできず、まただれもその所から立つ者もなかった。しかし、イスラエルの人々には、みな、その住む所に光があつた」(同・一〇ノ二三)。太陽と月はエジプト人の礼拝の対象であつた。この不思議な暗黒の中で、エジプト人と彼らの神々は、奴隷たちのために働き出した力に打たれた。この刑罰は、恐るべきものであつたとはいえ、神はあわれみ深く、滅ぼすことを喜ぶかたではないということを証拠だてるものであつた。神は最後の最も恐ろしい災いを彼らの上に下す前に、人々に反省と悔い改めのときをお与えになった。

恐怖は、ついに、パロを動かしてさらに譲歩させた。三日のくらやみののち、パロはモーセを召し、もし、羊と牛を残すならば、人々を去らせようと言った。堅く決意したヘブルびとは、「ひずめ一つも残しません」と答えた。「わたしたちは、その場所に行くまでは、何をもつて、主に仕えるべきかを知らないからです」。王は、怒りをおさえることができなかった。「わたしの所から去りなさい。心して、わたしの顔は二度と見てはならない。わたしの顔を見る日には、あなたの命はないであろう」とパロは言った。モーセは言った。「よくぞ仰せられました。わたしは、二度と、あなたの顔を見ないでしょう」(同・一〇ノ二六、二八、二九)。

「モーセその人は、エジプトの国で、パロの家来たちの目と民の目とに、はなはだ大いなるものと見えた」(同・一ノ三)。モーセは、畏敬の念をもってエジプト人に迎えられた。人々は彼だけが災いを取り去る力を持っている者であるとあがめていたので、王も彼に害を加える勇気がなかった。彼らは、イスラエル人にエジプトを立ち去る許可が与えられることを願っていた。モーセの要求に最後まで反対したのは王と祭司たちであった。

第 24 章

過越の祭り

本章は、出エジプト記一章、一二ノ一 三二に基づく。

イスラエルの解放を叫ぶ要求が、はじめてエジプト王に示されたとき、最も恐ろしい災いの警告が与えられた。モーセは、パロに、次のように言うように命令された。「主はこつ仰せられる。イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。わたしはあなたに言う。わたしの子を去らせて、わたしに仕えさせなさい。もし彼を去らせるのを拒むならば、わたしはあなたの子、あなたの長子を殺すであろう」(出エジプト記四ノ二一、二三)。イスラエル人は、エジプト人に軽べつされていたが、神からは、神の律法の保管者として選ばれる光栄に浴していた。彼らには、特別の祝福と特権が与えられ、諸国民の間で、長子がほかの兄弟たちよりすぐれていると同様の優位を占めていた。

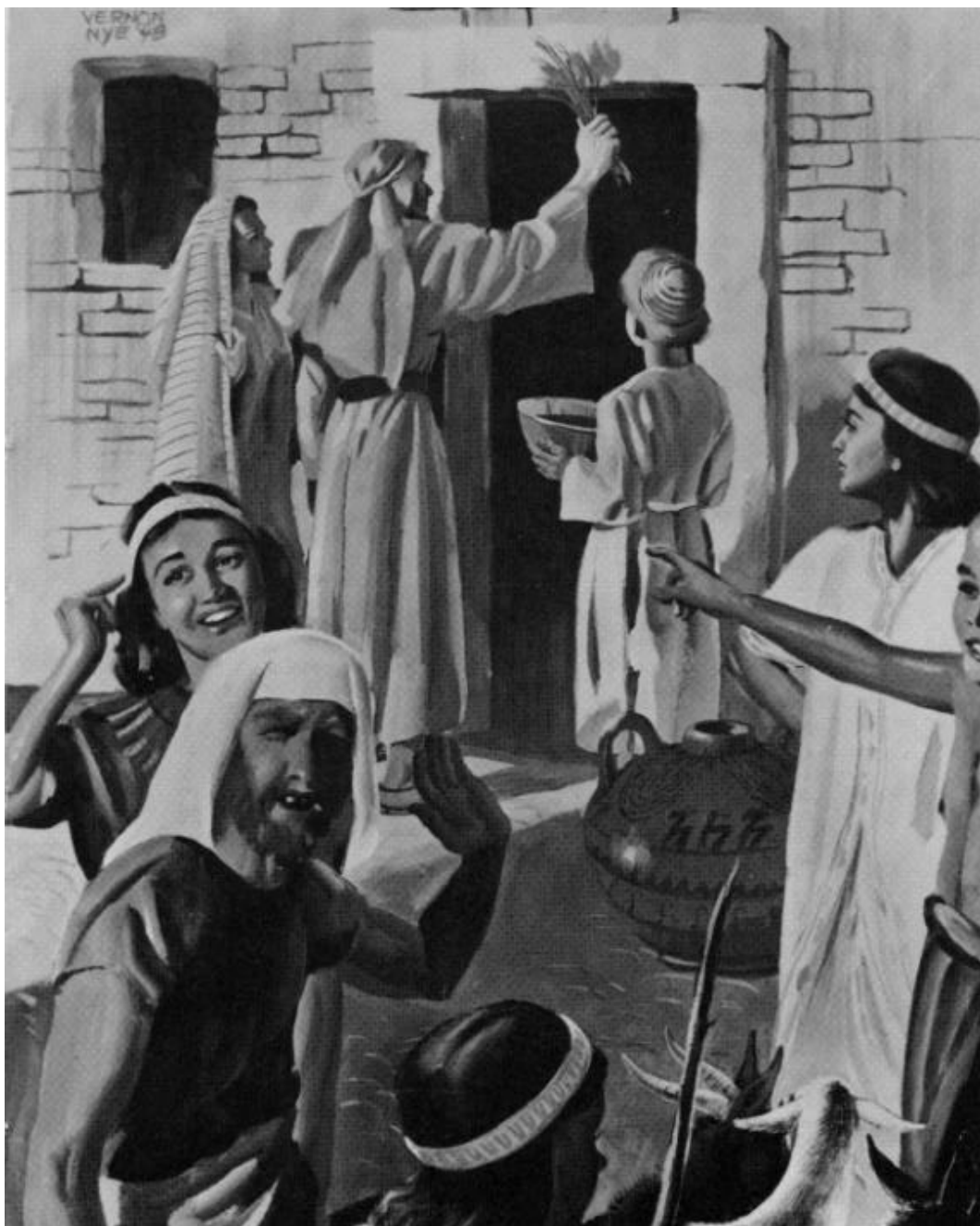
エジプトが最初に警告された刑罰は、最後に与えられるのであった。神は、忍耐深く、あわれみに富んでおられる。神は、ご自分のかたちに造られた者を、やさしく守られる。もし、エジプト人が、畑の産物や、羊や牛の群れなどを失ったとき、悔い改めていたならば子供たちは打たれなかったであろう。しかし、国民は心をかたく

なにして神の命令を退けたために、今、最後の災いが訪れようとしていた。

モーセが、再びパロの前に姿を現わすならば殺されることになっていた。しかし、神の最後のことばを、反抗的な王に伝えなければならなかったので、モーセは、また王の前に来て、その恐ろしい宣告をするのであった。

「主はこう仰せられる、『真夜中ごろ、わたしはエジプトの中へ出て行くであろう。エジプトの国のうちのういごは、位に座するパロのういごをはじめ、ひきうすの後にいる、はしためのういごに至るまで、みな死に、また家畜のういごもみな死ぬであろう。そしてエジプト全国に大いなる叫びが起るであろう。このようなことはかつてなく、また、ふたたびないであろう』と。しかし、すべて、イスラエルの人々にむかつては、人にむかつても、獣にむかつても、犬さえその舌を鳴らさないであろう。これによって主がエジプトびととイスラエルびとの間の区別をされるのを、あなたがたは知るであろう。これらのあなたの家来たちは、みな、わたしのもとに下ってきて、ひれ伏して言うであろう、『あなたもあなたに従う民もみな出て行ってください』と。その後、わたしは出て行きます」(同・一一ノ四 八)。

この宣告が執行される前に、主は、モーセを通して、イスラエルの子らにエジプトから出て行くことについての指示と、特に、迫っている刑罰から守護されるようにするための指示を与えられた。それぞれ家族は自分たちだけか、あるいは他の家族と一緒にになるかして、「傷のない」小羊、または小やぎをほふり、ヒソプの束でその血を「家の入口の二つの柱と、かもい」に塗らなければならなかった。それは滅びの天使が真夜中に通過するとき、その家にはいらなためであった(出エジプト記一一ノ一 一一八参照)。彼らは、モーセが言ったように、その夜、焼いた肉に種入れぬパンと苦菜を添えて食べなければならなかった。「腰を引きからげ、足にくつをはき、



過越の小羊は、殺すだけでなく、その血を入口の二つの柱とかもいに塗らなければならなかった。それと同じように、キリストの血のいさおしに対する信仰を、各自が自分のものとして表わさなければならない。

手につえを取って、急いでそれを食べなければならない。これは主の過越である」(同・一二ノ一一)。

主は言われた。「その夜わたしはエジプトの国を巡って、エジプトの国における人と獣との、すべてのういごを打ち、またエジプトのすべての神々に審判を行うであろう。…その血はあなたがたのおる家々で、あなたがたのために、しるしとなり、わたしはその血を見て、あなたがたの所を過ぎ越すであろう。わたしがエジプトの国を撃つ時、災が臨んで、あなたがたを滅ぼすことはないであろう」(同・一二ノ一二、一三)。

この大いなる解放を記念して、後世のイスラエル人は、みな一つの祭りを年ごとに守ることになった。「この日はあなたがたに記念となり、あなたがたは主の祭としてこれを守り、代々、永久の定めとしてこれを守らなければならない」。後世、彼らがこの祭りを行なうとき、彼らはモーセが命じたようにこの大いなる解放の物語を、その子孫にくり返して聞かせなければならなかった。「あなたがたは言いなさい、『これは主の過越の犠牲である。エジプトびとを撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越して、われわれの家を救われたのである』」(同・一二ノ一四、二七)。

さらに、人間と家畜のういごは共に主のものとなり、あがないによつてのみ、自分たちのものとなったが、それはエジプトのういごが殺されたとき、イスラエルのういごが恵みによつて救われたとはいえ、もし、贖いの犠牲がなかったならば、同じ運命にさらされていたことを認めるものであった。「ういごはすべてわたしのものだからである。わたしは、エジプトの国において、すべてのういごを撃ち殺した日に、イスラエルのういごを、人も獣も、ことごとく聖別して、わたしに帰せしめた。彼らはわたしのものとなるであろう」と主は言われた(民数記三ノ一三)。主は、幕屋の制度を制定されたのち、聖所の奉仕に当たる者としてイスラエルのういごの代わり

に、レビの部族をお選びになった。主は言われた。「彼らはイスラエルの人々のうちから、全くわたしにささげられたものだからである。イスラエルの人々のうちの初めに生れた者、すなわち、すべてのういこの代りに、わたしは彼らを取ってわたしのものとした」(民数記八ノ一六)。しかし、すべての人々には、神のあわれみを認めるしるしとして、長子の贖い金を払うことが要求された(同・一八ノ一五、一六参照)。

過越の祭りは記念の祭りであると共に、また、一象徴的な祭りでもあった。それはエジプトからの解放を指示していたばかりでなく、キリストがその民を罪の束縛から自由にして成就される、さらに驚くべき解放をも表示していた。犠牲の小羊は、われわれの救いの唯一の希望である「神の小羊」をあらわしている。「わたしたちの過越の小羊であるキリストは、すでにほふられたのだ」と使徒は言った(コリント第一・五ノ七)。過越の小羊はほふられるだけでは十分ではなく、その血を柱に注がなければならなかった。そのように、キリストの血といさおしは魂にも適用されなければならぬ。われわれは、キリストが死なれたのは世のためばかりでなく、われわれ一人びとりのためであることを信じなければならない。われわれは、贖いの犠牲の功績を自分のものとしなければならぬ。

血を注ぐのに用いられたヒソプは、清めの象徴で、ライ病人や、死人にさわって汚れた人々のきよめにも用いられていた。詩篇記者の祈りにも、そのような意味がうかがわれる。「ヒソプをもって、わたしを清めてください、わたしは清くなるでしょう。わたしを洗ってください、わたしは雪よりも白くなるでしょう」(詩篇五一ノ七)。

小羊は、そのまま調理され、骨は一本も折られなかったが、そのようにわれわれのために死なれることになっ

ていた神の小羊の骨は、一本でも折れてはならなかった(ヨハネ一九ノ三六参照)。こうして、キリストの犠牲の完全さが示されていた。

肉は、食べなければならなかった。われわれは、罪がゆるされるために、キリストを信じるといっただけでは、まだ十分ではない。われわれはみ言葉を通して、キリストから来る霊的な力と栄養とを、信仰によって絶えず受けていなければならない。キリストは言われた。「人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり」。キリストはこの言葉の意味を説明して、こう言われた。「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」(同・六ノ五三、五四、六三)、イエスは、父の律法を受け入れ、その生活において律法の原則を実行し、心の中にその精神と恵みの力をあらわされた。ヨハネは言っている。「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた」(同・一ノ一四)。キリストに従う者は、彼の経験にあずかる者でなければならない。彼らは神の言葉を受け入れ、消化し、それが彼らの生活と行為を動機づける力となるようにしなければならない。彼らは、キリストの力によって彼のかたちに変えられ、神のご性質を反映しなければならない。彼らは、神の子の肉を食べ、血を飲まなければならない。そうしなければ、彼らの中に生命はない。キリストの精神と働きが彼の弟子たちの精神となり、働きとなるべきである。

小羊は苦菜と共に食べなければならなかったが、それはエジプトでの奴隷の苦しさを示していた。そのようにわれわれがキリストを食べるとき、われわれは心のうちで自分の犯した罪の悔い改めをしていなければならない。

種入れぬパンを用いたことにも深い意味があった。それは過越の祭りのさだめに明らかにしるされており、ユダヤ人も実際に厳格に守っていたので、その祭りの期間中、彼らの家でパン種をみることは絶対になかった。同じようにキリストから生命と栄養を受ける者はみな、罪のパン種を取り除かなければならない。パウロは、コリントの教会にそのように書いている。「新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きなさい。…わたしたちの過越の小羊であるキリストは、すでにほふられたのだ。ゆえに、わたしたちは、古いパン種や、また悪意と邪惡とのパン種を用いずに、パン種のはいつていない純粹で眞実なパンをもって、祭をしようではないか」

(コリント第一・五ノ七、八)。

奴隸たちは、自由を得るに先だつて、間もなく成就されようとしている大いなる解放を信じていることを表わさなければならなかった。血のしるしを彼らの家に塗り、彼らとその家族はエジプト人から離れて、それぞれの家の中に集まっていなければならなかった。もしイスラエル人が、与えられた命令のどのような点でも、無視したり、彼らの子供をエジプト人から離すことを怠つたり、小羊を殺しても門の柱に血を塗ることを忘れたり、あるいはだれか家の外に出ているようなことがあつたならば、彼らは安全ではなかつたであらう。彼らが、必要なことをことごとくすませていると心から思つていたとしても、ただ眞剣にそう思つただけでは救われなかつたのである。主の命令に注意を払わなかつた者は、みな滅びの天使によつて、そのういごを失うのであつた。

イスラエルの人々は、従順によつて彼らの信仰の証拠を示さなければならなかつた。そのように、キリストの血の功績によつて救われようと望んでいる者は、みな救いを得るために、自分でもしななければならなかつたことがあるのを知るべきである。罪の刑罰からわれわれを贖うことができるのはキリストだけである。しかし、われわれ

も罪から離れて服従しなければならない。人間は信仰によって救われるのであって、行ないによるのではないがその人の信仰は、行ないによって示される必要がある。神は、み子を罪のなだめの供え物として死ぬためにお与えになり、真理の光、すなわち生命の道を明らかにされた。そして必要なでたと、さだめと、特権をお与えになった。そこで人間もこうした救いの方法と力を合わせなければならない。神がお備えになった助けを感謝して活用し、神のご要求をことごとく信じ、それに従わなければならない。

モーセがイスラエル人に向かって、彼らの救済のために神が備えられたことをくり返して述べたとき、「民は……伏して礼拝した」（出エジプト記一二ノ二七）。喜ばしい自由の希望も、彼らの圧迫者の上に臨もうとしている刑罰の恐ろしさも、また、彼らが急いで立ち去るための苦心と労力なども、すべて一時は忘れ去られて、彼らの恵み深い解放者であられる神への感謝で心は満ちあふれた。エジプト人の多くは、ヘブル人の神こそ唯一の真の神であることを認めるようになっていた。これらの人々は、滅びの天使が国中をめぐるとき、イスラエル家に避難させてもらいたいと嘆願した。彼らは喜んで迎え入れられた。彼らはその後、ヤコブの神に仕え、イスラエルの民と共にエジプトから出て行くことを誓った。

イスラエル人は、神がお与えになった指示に従った。彼らは大急ぎで、秘密のうちに出発の準備をした。家族が集められ、過越の小羊がほふられて、肉は火で焼かれ、種入れぬパンと苦菜がそなえられた。家庭の祭司である父親は、門柱に血を注ぎ、家の中にはいつて家族と一緒にいた。彼らは大急ぎで、黙って過越の小羊を食べた。人々は、恐れおののいて、祈りつつ見張っていた。長子たちの心は、じょうぶなおとなから小さな子供にいたるまで、言うに言われぬ恐怖に襲われた。父親と母親は、その夜下ろうとしている恐ろしい災いを思いながら、彼

らの愛する長子をその腕にだきしめていた。しかし、イスラエルのどの家にも死の天使は来なかった。血のしるし(それは救い主の保護のしるしであった)が、彼らの戸にあったので滅ぼすものはいらなかった。

真夜中に、「エジプトに大いなる叫びがあった。死人のない家がなかったからである」。国のすべてのういごは「位に座するパロのういごから、地下のひとやにおる捕虜のういごにいたるまで、また、すべての家畜のういご」は滅ぼす者にうたれた(同・一二ノ三〇、一二九)。エジプトの広大な領土のいたるところで、すべての家庭が誇りとしていたものが殺された。悲しむ者の叫びと嘆く声がどこからも聞こえた。王と廷臣たちは顔を青くし、足をふるわせながら、この恐ろしいありさまをながめて立ちすくんだ。パロは、前に、自分がどのように大声で叫んだかを思い出した。「主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従ってイスラエルを去らせなければならぬのか。わたしは主を知らない。またイスラエルを去らせはしない」(同・五ノ二二)。今、彼の天に対する不敵な誇りはくじかれた。「夜のうちにモーセとアロンを呼び寄せて言った、『あなたがたとイスラエルの人々は立つて、わたしの民の中から出て行くがよい。そしてあなたがたの言うように、行って主に仕えなさい。あなたがたの言うように羊と牛とを取って行きなさい。また、わたしを祝福しなさい』。王の大臣たちも国民も、イスラエル人に嘆願して、『すみやかに国を去らせようとした。彼らは『われわれはみな死ぬ』と思ったからである」(同・一二ノ三一、三二、三三)。

エジプト脱出

本章は、出エジプト記二二ノ三四 五一、一三 一五章に基づく。

イスラエル人は、腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取って黙々と畏敬の念をいだいて立ち、王からの出発の命令を今か今かと待っていた。彼らは、夜が明ける前に出発した。神の力のあらわれが、奴隷たちの心に信仰の火をともした。圧迫者を恐怖に陥れた災いが下っていた間に、イスラエル人は、次第にゴセンに集まって来た。彼らの脱出は突然ではあったが、それにもかかわらず、群衆を移動させるのに必要な組織と統制の用意はすでになされていたので、彼らは定められた指揮者のもとに隊を組んだ。

出発したのは、「女と子供を除いて徒歩の男子は約六十万人であった。また多くの入り混じった群衆および羊、牛など非常に多くの家畜も彼らと共に上った」（出エジプト記二二ノ三七、三八）。この群衆の中には、イスラエルの神を信じる信仰によって行動した人々ばかりではなく、むしろそれ以上の多くの人々が、ただ災いをのがれることを望んで加わっていた。また、単なる興奮と好奇心にかられて、この移動する群衆のあとについて来た人もいた。こういう種類の人々は、イスラエルにとっていつも妨害となり、わなとなった。

イスラエルの人々は、また「羊、牛など非常に多くの家畜」を引きつれて出た。これらは、イスラエル人のものであり、彼らはエジプト人がしたように、自分たちの所有物を王に売るようなことをしなかった。ヤコブとむすこたちは、羊や牛をエジプトにつれて来たが、それらはエジプトで非常にふえていた。イスラエル人はエジプトを去る前に、モーセの指示に従って、未払いの賃金に対する賠償を要求した。エジプト人は、彼らが出ていくことを切望していたので、彼らの要求を拒まなかった。奴隷たちは、圧迫者から得た宝を多く携えて出て行った。数百年前にアブラハムが幻によって啓示された歴史の期間が、この日に終わりを告げた。「あなたの子孫は他の国に旅びととなって、その人々に仕え、その人々は彼らを四百年の間、悩ますでしょう。しかし、わたしは彼らが仕えたその国民をさばきます。その後かれらは多くの財産を携えて出て来るでしょう」(創世記一五ノ一三、一四)。その四百年が満ちた。「ちょうどその日に、主はイスラエルの人々を、その軍団に従ってエジプトの国から導き出された」(出エジプト記一二ノ五一、四〇、四一、一三ノ一九参照)。イスラエル人がエジプトを離れたとき、ヨセフの骨という貴重な遺物を携えていた。ヨセフの骨は、長い間神の約束の成就を待つとともに、暗い奴隷生活の年月の間、イスラエルの解放を思い起こさせるものであった。

主は、カナンに向かうのに、ペリシテ人の国を通って行く最短の道を行かせずに、紅海の岸にそって南に彼らを導かれた。「民が戦いを見れば悔いてエジプトに帰るであろうと、神は思われたからである」(同・一三ノ一七、一八、二〇 一二参照)。もし、彼らがペリシテの国を通ろうとしていたならば、彼らの旅は妨害されたであろう。ペリシテ人は、イスラエル人を主人のところから逃走している奴隷と見なし、ためらうことなくイスラエル人に戦いをいどんだことであろう。イスラエル人は、貧弱な準備しかなかったので、この強力で好戦的な民族と戦い

をまじえることはできなかった。彼らは、神に関してほとんど知識を持っておらず、信仰も弱かったので恐怖に襲われ、心がくじけてしまったことであろう。彼らは、武器もなく、戦いにも慣れておらず、長い束縛によって心がくじかれていた。その上、女、子供、羊、牛などを引き連れていた。主は彼らを紅海に行く道にお導きになつて、ご自分が裁きの神であると同時に、あわれみの神であることをあらわされた。

「こうして彼らは更にスコテから進んで、荒野の端にあるエタムに宿営した。主は彼らの前に行かれ、昼は雲の柱をもつて彼らを導き、夜は火の柱をもつて彼らを照し、昼も夜も彼らを進み行かせられた。昼は雲の柱、夜は火の柱が、民の前から離れなかった」(同・一三ノ二〇 二二)。「主は雲をひろげておいとし、夜は火をもつて照された」と詩篇記者は言っている(詩篇一〇五ノ三九、コリント第二・一〇ノ一、一一参照)。目に見えない指導者の旗じるしが、いつも彼らのそばにあった。昼は、雲が彼らの旅路を導き、また、イスラエルの軍勢の頭上天蓋のようにひろがつていた。それは、焼けるような熱から保護する役目を果たし、その涼気と湿度は、かわききつて干からびたさばくの中で、生気を回復させるものとしてまことにありがたいものであった。夜になるとそれは火の柱になって、彼らの天幕を照らし、たえず主のご臨在をあかししていた。

イザヤの最も美しく、慰めに満ちた預言の言葉のなかで、この雲と火の柱は、悪の勢力との最後の大争闘において、神が、神の民を守られることの象徴として用いられている。「その時、主はシオンの山のすべての場所と、そのもろもろの集会との上に、昼は雲をつくり、夜は煙と燃える火の輝きとをつくられる。これはすべての栄光の上にある天蓋であり、あずまやであつて、昼は暑さをふせぐ陰となり、また暴風と雨を避けて隠れる所となる」

(イザヤ書四ノ五、六)。

彼らは、荒涼としたさばくを通つて旅を続けた。彼らは早くも、この道をたどつて行けばどこに行きつくのだろうかと思ひはじめていた。彼らは苦しい旅路に疲れはじめ、ある者は心の中でエジプト人が追跡してくるのではないかと恐れはじめていた。しかし、雲が前進するので、彼らも従つた。それから主は、モーセに狭い岩の谷のほうに歩を転じ、海のそばに天幕をはるようにな命を令された。パロは、彼らを追跡してはくるけれども、神が彼らをお救いになつて、神に栄光が帰されることがモーセに示された。

エジプトでは、イスラエル人が荒野にとどまつて礼拝をするかわりに、紅海に向かつて前進しているという知らせが広まつた。パロの大臣たちは王に向かつて、奴隷たちは逃亡してしまつて、二度ともどつてこないだろうと言つた。人々は、神の力によつて長子が殺されたと考えたのは愚かであつたと後悔した。エジプトの指導者たちは恐怖から立ちなかつて、災いは自然現象の結果であると説明した。「われわれはなぜこのようにイスラエルを去らせて、われわれに仕えさせないようにしたのであらう」と悲痛な叫び声をあげた(出エジプト記一四ノ五)。

パロは、「えり抜きの戦車六百と、エジプトのすべての戦車」および騎兵、指揮者、歩兵からなる彼の軍勢を集めた(同・一四ノ七)。王自身も彼の王国の勇士たちを従えて、攻撃軍の先頭に立つた。彼らは、神々の恵みによつて戦いに勝利をおさめる確証として祭司も共に連れて来た。王は、堂々たる彼の勢力を誇示して、イスラエル人の勇気をくじこうと思つた。エジプト人は、イスラエルの神に屈服させられたために、他国民のちよう笑の的になつたのではないかと恐れていた。そこで、もし彼らが今出て行つて、その偉力を示し、逃亡者を連れもどしたならば、奴隷たちの労働力を取り返すと同時に、彼らの栄光を再び回復することができるのであつた。

ヘブル人は、海のそばに天幕を張つた。海の水は彼らの前に立ちはだかつて、通り抜けることのできない障害

のように思われた。一方、南側にはけわしい山があつて、彼らの進行を妨げていた。突然、彼らは遠くかなたに強力な軍勢の接近を示す武器のきらめきと戦車の動きをみた。エジプトの軍勢が近づくとつれて、彼らが全力で追跡してくるのがわかった。

イスラエルの人々は恐怖に襲われた。主に叫ぶ者もあつたが、大部分の者はモーセのところにかけよつてつぶやいた。「エジプトに墓がないので、荒野で死なせるために、わたしたちを携え出したのですか。なぜわたしたちをエジプトから導き出して、こんなにするのですか。わたしたちがエジプトであなたに告げて、『わたしたちを捨てておいて、エジプトびとに仕えさせてください』と言つたのは、このことではありませんか。荒野で死ぬよりもエジプトびとに仕える方が、わたしたちにはよかつたのです」(同・一四ノ一一、一二)。

民のために示された神の力を、何度も目撃しているにもかかわらず、なぜ彼らは、このような弱い信仰しか持てないのかと、モーセは非常に悩んだ。モーセが神の明らかな命令に従つてきたことがわかつているのに、彼らはなぜ自分たちのおかれた、危険で困難な事態の責任をすべてモーセに負わせようとするのであるのか。事実、神が彼らをお救いになるために介入なさらなければ、解放される可能性はなかつたのである。しかし、モーセは神の命令に従つたために、このような事態におかれたのであつたから、その結果を恐れていなかった。モーセは静かに、確信をもつて人々に答えた。「あなたがたは恐れてはならない。かたく立つて、主がきょう、あなたがたのためになされる救を見なさい。きょう、あなたがたはエジプトびとを見るが、もはや永久に、二度と彼らを見ないであろう。主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい」(同・一四ノ一三、一四)。

イスラエルの軍勢を、主のみ前にじつと待たせておくことは容易なことではなかつた。彼らは訓練と自己抑制

に欠けていたので、狂暴になり、道理をわきまえなかった。彼らは直ちに圧迫者の手に落ちるものと思って、大声で激しく泣き叫んだ。彼らは、驚くべき雲の柱を、神が前進せよとお命じになる合図と見て従って来たが、今彼らは、それが何かの恐ろしい災いの前兆ではなかったろうかと疑った。なぜなら、雲は、彼らを山の反対側の通り抜けることのできない道に導いたからであつた。こうして神の天使は、彼らの混乱した心には、災いの先づれと思われたのである。

さて、エジプトの軍勢が今にも彼らを餌食にしようとして近づいて来たとき、雲の柱は天に向かっておごそかに昇っていった。そして、イスラエル人の頭上を越え、イスラエル人とエジプトの軍勢との間に下つた。追われる者と追う者の間に暗黒の障壁が立ち上がった。エジプト人は、もはや、ヘブル人の陣営を見分けることができなくなり、やむを得ず立ち止まつた。しかし、夜のやみが深まるにつれて、この雲の壁はヘブル人には大きな光となり、真昼の輝きをもつて全陣営を照らした。

こうして、イスラエル人の心に希望がよみがえつた。モーセは、主に向かつて声を上げた。「主はモーセに言われた、『あなたは、なぜわたしにむかつて叫ぶのか。イスラエルの人々に語つて彼らを進み行かせなさい。あなたはつえを上げ、手を海の上にさし伸べてそれを分け、イスラエルの人々に海の中のかわいた地を行かせなさい』」(同・一四ノ一五、一六)。

詩篇記者はイスラエル人が海を渡つたことを述べて、こう歌っている。「あなたの大路は海の中にあり、あなたの道は大水の中にあり、あなたの足跡はたずねえなかった。あなたは、その民をモーセとアロンの手によつて羊の群れのように導かれた」(詩篇七七ノ一九、二〇)。モーセが、つえをのべると水は分かれ、イスラエル人は

海の中のかわいた地を行つたが、その間、水は壁のように両側に立っていた。神の火の柱から出る光は、あわだつた大波の上を照らし、海の水のなかに巨大なみぞのように開かれて、はるか向こう岸までかすんで見える道を照らしていた。

「エジプトびとは追つてきて、パロのすべての馬と戦車と騎兵とは、彼らのあとについて海の中にはいった。暁の更に、主は火と雲の柱のうちからエジプトびとの軍勢を見おろして、エジプトびとの軍勢を乱し」、エジプト人が驚いて見ている前で、この不思議な雲は火の柱に変わった(出エジプト記一四ノ二三、一二四)。雷鳴がとどろき、いなくまがひらめいた。「雲は水を注ぎいだし、空は雷をとどろかし、あなたの矢は四方にきらめいた。あなたの雷のとどろきは、つむじ風の中にあり、あなたのいなくまは世を照し、地は震い動いた」(詩篇七七ノ一七、一八)。エジプト人はあわてふためいた。荒れ狂う自然界の中に、彼らは怒りを発せられた神の声を聞き、きびすを返して再びもとの岸辺に逃げかえろうとした。しかし、モーセがつえをさしのべると、おしとどめられていた水がほえたけるような音をたててもとにもどり、黒い海の深みにエジプトの軍勢をのみこんでしまった。

夜が明けると、イスラエルの群衆は、彼らの強力な敵の残骸、すなわち武具をまとった死体が岸辺に散乱しているのを見た。一夜のうちに彼らは最も恐ろしい危機から完全に救われたのであった。彼らは、戦いに慣れない奴隷の無力な大群衆で、女子、子供、家畜などをかかえ、前方は海に面し、後方からは強力なエジプトの軍勢の追跡を受けた。しかし、彼らは水を分けて開かれた進路を見、彼らの敵が勝利を目前にしていながら、波にのまれてしまったのを見た。主だけが彼らを救われたのである。彼らは感謝と信仰にみたされて、主に心を向けた。彼らは、心の喜びを歌と賛美であらわした。神の霊が、モーセに臨んだので、彼は人々を指揮して勝利を感謝す

る賛美の歌をうたわせた。この賛美は最も古く、われわれが知っている賛美の歌の中では、最も荘厳なものの一つである。

「主にむかってわたしは歌おう、

彼は輝かしくも勝ちを得られた、

彼は馬と乗り手を海に投げ込まれた。

主はわたしの力また歌、わたしの救となられた、

彼こそわたしの神、わたしは彼をたたえる、

彼はわたしの父の神、わたしは彼をあがめる。

主はいくさびと、その名は主。

彼はパロの戦車とその軍勢とを海に投げ込まれた、

そのすぐれた指揮者たちは紅海に沈んだ。

大水は彼らをおおい、彼らは石のように淵に下った。

主よ、あなたの右の手は力をもって栄光にかがやく、

主よ、あなたの右の手は敵を打ち砕く。……

主よ、神々のうち、だれがあなたに比べられようか、

だれがあなたのように、聖にして栄えあるもの、

ほむべくして恐るべきもの、

くすしきわざを行うものであろうか。……

あなたは、あがなわれた民を恵みをもって導き、

み力をもって、あなたの聖なるすまいに伴われた。

もろもろの民は聞いて震え、……

恐れと、おのきとは彼らに臨み、

み腕の大いなるゆえに、彼らは石のように黙した、

主よ、あなたの民の通りすぎるまで、

あなたが買いとられた民の通りすぎるまで。

あなたは彼らを導いて、

あなたの嗣業の山に植えられる。

主よ、これこそあなたのすまいとして、

みずから造られた所」。

(出エジプト記一五ノ一 一七)

この崇高な賛美の歌は、深いふちの音のようにイスラエルの大軍勢からわき起こった。イスラエルの代表的な女性であったモーセの姉ミリアムが、この賛美の歌をうたいながら先頭に進むと、人々もタンバリンを取り、踊りながら従った。荒野と海の遠くかなたまで、喜びに満ちた歌のおりかえしが響きわたり、山々は、「主にむかつて歌え、彼は輝かしくも勝ちを得られた」という彼らのたたえの言葉をこだました(同・一五ノ二一)。

この歌と、この歌が記念する大いなる解放は、ヘブル人の心にいつまでも消えない印象を与えた。この歌は、代々にわたり、イスラエルの預言者や歌人たちによってくり返し歌われ、主は、彼によりたのむ者の力であり、救いであることをあかしされた。この歌は、ユダヤ民族だけのものではない。それは義の敵がすべて滅び、神のイスラエルが最後に勝利をおさめる未来をさし示している。パトモスの預言者は、白い衣をまとった多くの人々が敵に「うち勝」ち「神の立琴を手にして」、「火のまじったガラスの海」のそばに立っているのを見た。「彼らは、神の僕モーセの歌と小羊の歌とを歌つ」た(黙示録一五ノ二、三)。

「主よ、栄光をわれらにではなく、われらにではなく、あなたのいつくしみと、まこととのゆえに、ただ、み名にのみ帰してください」(詩篇一一五ノ一)。イスラエルの救いの歌にみなぎっていたのはこのような精神であった。この精神が神を愛し、恐れるすべての人々の心の中になければならない。神は、われわれの魂を罪の束縛から解放することによって、紅海でヘブル人にお与えになったものよりはるかに大いなる解放をもたらしてくださるのである。われわれも、ヘブルの軍勢のように、真心から主を賛美し、「人の子らになされたくすしきみわざ」に対して、声をあげなければならぬ。神の大いなるあわれみを深く思い、神から与えられるさまたまのほかな小さな賜物をもたいせつにする者は、喜びの帯をつけ、その心のうちに主に對する音楽をかなでるのである。われわれが神のみ手から受ける日ごとの祝福と、なにものにもましてわれわれに幸福と、天国とを得られるようにしてください。イエスの死は、われわれの絶えまない感謝の主題でなければならぬ。神は、われわれを自身に結びつけ、神のたいせつな宝物としてくださり、なんと大きなあわれみと、たぐいない愛をわれわれ失われた罪人に示されたことであろう。われわれが神の子とよばれるために、なんとという大きな犠牲が贖い主によって払

われたことであろう。われわれは大いなる贖罪の計画の中で、われわれに与えられる祝福に満ちた望みを思つて神をたたえなければならぬ。われわれは、天の遺産と神の豊かな約束が与えられていることを考えて、神をたたえなければならぬ。イエスがわれわれのために生きてとりなしをしてくださることをたたえなければならぬ。

「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」と創造主は言われた(同・五〇ノ二三)。天の全住民は一つになつて神を賛美している。われわれが彼らの輝く列につらなるときにそれを歌えるように、今、天使の歌を学ぼう。詩篇記者と共に言おう。「わたしは生けるかぎり主をほめたたえ、ながらえる間は、わが神をほめうたおう」(同・一四六ノ二)。「神よ、民らにあなたをほめたたえさせ、もろもろの民にあなたをほめたたえさせてください」(同・六七ノ五)。

神は、み摂理のうちにヘブル人を海に面した山の中に導かれたが、それは、神が彼らを救う力を示し、彼らを圧迫するものの誇りをあからさまにくじくためであつた。神は別の方法を用いて彼らを救うこともできたが、彼らの信仰を試み、神に対する彼らの信頼を強めるために、この方法をお選びになつた。人々は疲労し、恐怖に満たされていた。しかし、モーセが前進せよと命じたときもし彼らがためらっていたならば、神は彼らのために道を開くことをなさらなかったであろう。「信仰によつて、人々は紅海をかわいた土地をとるように渡つた」(ヘブル一ノ二九)。彼らは、水の中を進んで行くことによつて、モーセを通してお語りになつた神の言葉を信じていることを示した。彼らが力のかぎりを尽くしたときに、イスラエルの力ある神が海を分けて、彼らの歩む道をお作りになつた。

ここに教えられている驚くべき教訓は、いつの時代にもあてはまるのである。クリスチャンの生涯は、しばしば危険にさらされ、義務を果たすことが困難に思われる。われわれは、前方には滅び、後方には束縛や死が迫っているように考える。それにもかかわらず、神のみ声は明らかに「前進せよ」と語っている。われわれの目が、暗黒を貫いて見ることができなくても、また、冷たい波を足もとに感じて、われわれはこの命令に従わなくてはならない。われわれの前進を妨げる障害物は、ためらったり疑ったりしては取り去られることはない。すべての不安のかがめが消えうせ、失敗や敗北の危険が全くなくなるまで服従をのぼすものは、絶対に服従することはない。「障害物が取り除かれて、われわれの道が明らかに見えるようになるまで待とう」と不信はささやく。しかし、信仰はすべてを望み、すべてを信じておおしく前進することを勧める。

エジプト人にとって、暗黒の壁であった雲は、ヘブル人には全陣営を照らし、彼らの行く手に光を投げかける大いなる照明の光であった。そのように摂理のうちになされることは、信じない者には暗黒と絶望をもたらすが、信じ、よりたのむ魂には輝く光明であり、平和である。神がお導きになる道は、荒野や海を通っているかも知れないが、安全な道なのである。

紅海からシナイへ

本章は、出エジプト記一五ノ二一―二七、一六―一八章に基づく。

イスラエルの全会衆は、雲の柱に導かれて、紅海からふたたび旅に出た。彼らの周囲の光景は非常にものさびしく、樹木のない荒れ果てたながめの山々と、不毛の平原で、敵の死体を海岸に横たえた紅海が、はるか向こうにひろがっていた。それでも彼らは、自由を得た喜びに満たされ、不満の思いは全く消えうせた。

しかし三日間旅を続けたが、水をみつけることができなかった。持参した水のたくわえは使い果たしてしまった。太陽の照りつける平原を、疲れた足を引きずって歩く彼らの焼けつくのどのかわきをいやすものはなにもなかった。モーセは、この地域をよく知っていたので、ほかの人たちの知らないこと、すなわち、メラが一番近い水の泉のあるところであるが、その水は飲めない水であるということを知っていた。彼は、はなはだしく気をもみながら、彼らを導く雲を見守った。水だ、水だという喜びの叫び声と一緒に伝わるのを、彼は沈む思いで聞いた。男も女も子供たちも、喜んで水の泉にかけ寄ったのであるが、人々の間から苦悩の叫び声が起こった。水は苦かったのである。

腹立たしさと絶望のうちに、彼らは、あの不思議な雲のなかに神が臨在して、彼らばかりでなくモーセを導いてこられたことを忘れて、モーセが自分たちをこんな道に導いてきたといつて責めたてた。モーセは、彼らの苦しみを気のどくに思い、彼らが忘れていたことをした。彼は熱心に神の助けを叫び求めたのである。「主は彼に一本の木を示されたので、それを水に投げ入れると、水は甘くなった」(出エジプト記一五ノ二五)。ここで、モーセを通して、イスラエルに次のような約束が与えられた。「あなたが、もしあなたの神、主の声によく聞き従い、その目に正しいと見られることを行い、その戒めに耳を傾け、すべての定めを守るならば、わたしは、かつてエジプトびとに下した病を一つもあなたに下さないであろう。わたしは主であつて、あなたをいやすものである」(同・一五ノ二六)。

メラから、人々はエリムへ行ったが、そこには、「水の泉十二と、なつめやしの木七十本」があつた(同・一五ノ二七)。ここに彼らは数日とどまってから、シンの荒野へはいつて行つた。エジプトを出てから一か月たつて彼らははじめて荒野に宿営した。食料のたくわえは乏しくかけていた。荒野には食用の草が乏しく、家畜は減りはじめていた。この大群衆にどのようにして食物を与えたらよいだろうか。またもや、彼らは疑いをいだいてつぶやいた。民のつかさたちや長老たちまで一緒になつて、神から任命された指導者たちにむかつて、つぶやいて言った。「われわれはエジプトの地で、肉のなべのかたわらに座し、飽きるほどパンを食べていた時に、主の手にかかつて死んでいたら良かった。あなたがたは、われわれをこの荒野に導き出して、全会衆を餓死させようとしている」(同・一六ノ三)。

彼らはまだ飢えてはいなかった。そのときの必要は満たされていたのであるが、彼らは将来を恐れたのである。

この大群衆が、荒野の旅をどのようにして生きていくのか、彼らはわかっていなかった。彼らは子供たちが飢え死にする光景を想像した。主は、これまで彼らを救ってくださったおかたに、人々の心をむけさせようとして、いろいろな困難を彼らに経験させ、食料の供給をとめられたのである。もし欠乏の中にあつて神に呼び求めるなら、神は依然として、神の愛と守りについてはつきりした証拠をお与えになるのである。神の戒めに従うなら、病気になることはない、神は約束されたのであるから、自分も子供たちも飢え死にするかも知れないと予想することは、彼らの罪深い不信であつた。

神は、彼らの神となつて、彼らをご自分の民とし、彼らをもつと広く、もつとよい国へ導くと約束されたのに、彼らは、その国へ行く途中、妨害に出会うたびにすぐ失望した。神は彼らを向上させて、高潔にし、彼らを地上の賞賛に値する国とするために、不思議な方法をもつてエジプトの奴隷の境遇から救い出された。しかし、彼らは困難に出会い、欠乏に耐えることが必要であつた。神は彼らを墮落の状態から引き出し、彼らが諸国民の中で尊敬される立場を占め、重要で神聖な責任を負わされるのにふさわしいものにしておられた。もし彼らが、彼らのために神が行なわれたすべてのことを考えて神を信じていたら、彼らは、喜んで不便と欠乏と、実際の苦難にも耐えたのである。しかし、彼らは神の力の証拠を常に目で見ることができないかぎり、神に信頼しようつしなかつた。彼らはエジプトでの苦しい仕事を忘れた。奴隷の境遇から救済されたときに彼らのために神の恵みと力があらわされたことを彼らは忘れた。死の天使がエジプトの長子を全部殺したときに、イスラエルの子らは生かされたことを彼らは忘れた。彼らが開かれた道を安全に渡ったときに、追跡してきた敵の軍勢が海の水にのまれて滅びたことを、彼らは忘れた。彼らは、現在の不便と試験だけを目にとめてそれを感じた。そして、

「神はわれわれのために大いなることをしてくださった。われわれは奴隷であつたのに、神はわれわれを大いなる国民にしてくださいさるのだ」と言わないで、彼らは、途中の困難について語り、このたいくつな放浪はいつ終わるのだらうと思つた。

イスラエルの荒野生活の歴史は、世の終わりの神のイスラエル人の益のために記録された。荒野の放浪者たちがあちらこちらへさまよつて、飢え、かわき、疲れたときに、彼らの救済のために神の力がいちじるしくあらわれたことなどの神の行為の記録は、すべて各時代の神の民に対する警告と教えに満ちている。ヘブル人のいろいろな経験は、彼らがカナンの約束の地へはいるための準備の学校であつた。神は、今日の神の民が、古代イスラエル人の経験した試練を、へりくだつた心と教えを受ける精神をもつてふりかえり、天のカナンにはいる準備に役立てるように望んでおられる。

イスラエル人の経験をふりかえつてみて、彼らの不信とつばやきに驚き、自分たちであつたら、あんなに忘恩的にはならなかつただらうと思う人たちが多し。しかし、彼らの信仰がちよつとした試みによつてためされてさえ、彼らは古代イスラエルと同じように信仰も忍耐も發揮しないのである。苦境に陥ると、彼らは神が彼らをきよめるために選ばれた道についてつばやく。現在の必要は満たされているのに、多くの者は将来のことを神に信頼しようとししないで、貧乏になりはしないか、子供たちが苦しみはしないかと絶えず心配する。ある人たちは、いつも悪いことを予想したり、実際に困難なことがあると、それを大げさに考えたりするので、彼らの目は、感謝しなければならぬ多くの恵みに対して盲目になっている。彼らは、困難に出会うときに、唯一の力の源である神に助けを求めようとししないで、不安とつばやきの心を起こし、かえつて神から離れてしまうのである。

われわれは、このように不信であつてよいだろうか。どうして感謝しなかったり、信頼しなかったりしてよいだろうか。イエスはわれわれの友である。全天はわれわれの幸福に関心を持っている。われわれの心配と恐れは神の聖霊を悲しませる。いらだたせ、疲れさせるだけで、試みに耐える助けとならない心配をしてはならない。

われわれの幸福が地上の事物にあるかのように、将来の必要に対する備えを人生の主要事として、神への不信をいだいてはならない。神の民が、心配事にうちひしがれることは、みこころではない。しかし主は、われわれの道になんの危険もないとはいわれない。神はご自分の民を罪と悪のこの世から連れ出そうとは言われず、われわれに確実な避け所をさし示される。主は、重荷を負つて疲れている者に、「すべて重荷を負つて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」と招いておられる(マタイ一一ノ二八)。自分自身のくびにかけた心配とこの世の苦労というくびきをはずしなさい。そして、「わたしのくびきを負つて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(同・一一ノ二九)。心配ごとをすべて神にまかせて、神のうちに休みと平安をみいだすことができるのである。「神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい」(ペテロ第一・五ノ七)。

「兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中には、あるいは、不信仰な悪い心をいだいて、生ける神から離れ去る者があるかも知れない」と使徒パウロは言っている(ヘブル三ノ一二)。神がわれわれのために行なわれたすべてのことを考えて、われわれの信仰を、強く、積極的で、持久力のあるものとしなければならない。つばき、不平を言うのでなく、われわれの心のことは、「わがたましいよ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なるみ名をほめよ。わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ」でなければ

ならない(詩篇一〇三ノ一、二)。

神は、イスラエルの必要を心にとめておられないではなかった。神は彼らの指導者に、「わたしはあなたがたのために、天からパンを降らせよう」と言われた(出エジプト記一六ノ四)。そして、毎日与えられるものを集め、六日めは、安息日をきよく守ることができるよう二倍の分量を集めるようにとの命令が与えられた。

モーセは会衆に、彼らの必要が満たされることを保証して、「主は夕暮にはあなたがたに肉を与えて食べさせ、朝にはパンを与えて飽き足らせられるであろう」と言った。彼はさらに、「いったいわれわれは何者なのか。あなたがたのつぶやくのは、われわれにむかつてでなく、主にむかつてである」とつけ加え、アロンに命じて、「あなたがたは主の前に近づきなさい。主があなたがたのつぶやきを聞かれたからである」と人々に言わせた。アロンが語っているとき、「彼らが荒野の方を望むと、見よ、主の栄光が雲のうちに現れていた」(同・一六ノ八、九、一〇)。彼らがこれまでに一度も見たことのない輝きは、神のご臨在を象徴していた。感覚に訴える啓示を通して、彼らは神についての知識を得るのであった。彼らが神のみ名をおそれ、神のみ声に従うように、人間モーセではなく、至高者であられる神が、彼らの指導者であられることを彼らに教えねばならなかった。

夕暮れになると、宿営はつずらの大群におおわれ、全会衆に十分ゆきわたった。朝になると、地面に、「薄いうるこのようなものがあり、ちょうど地に結ぶ薄い霜のようであった。」「それはコエンドロの実のようで白」かった。人々はそれをマナと呼んだ。モーセは、「これは主があなたがたの食物として賜わるパンである」と言った(同・一六ノ一四、三一、一五)。人々はマナを集めたが、全部の人たちに十分供給するだけあった。人々は、「ひきうすでひき、または、うすでつき、かまで煮て、これをもちとした。」「その味は蜜を入れたせんべいのよ



人々は、必要に応じて自由にマナを集めたが、それは、すべての人のためにあり余るほどであった。天から降ったマナは、生命のパンであられるキリストをあらわしていた。

うであつた」(民数記一一ノ八、出エジプト記一六ノ三二)。彼らは毎日、ひとり一オメル集めるように命じられたが、それを朝まで残しておいてはならなかった。中には翌日までとっておこうとした者があつたが、翌朝になると食べられなくなつていた。その日の分は、朝集めなければならなかった。地面に残っていたものは全部、太陽にとけたからである。

マナを集めるとき、きまつた分量よりも多く集める者もあれば、少なく集める者もあつた。「オメルでそれを見計ってみると、多く集めた者にも余らず、少なく集めた者にも不足しなかつた」(出エジプト記一六ノ一八)。この聖句についての説明と、それからの実際的な教訓について、使徒パウロはコリント人への第二の手紙にこう書いている。「それは、ほかの人々に樂をさせて、あなたがたに苦勞をさせようとするのではなく、持ち物を等しくするためである。すなわち、今の場合は、あなたがたの余裕があの人たちの欠乏を補い、後には、彼らの余裕があなたがたの欠乏を補い、こうして等しくなるようにするのである。それは『多く得た者も余ることがなく、少ししか得なかつた者も足りないことはなかつた』と書いてあるとおりである」(コリント第二・八ノ一三 一五)。

六日めには、人々はおのおの二オメル集めた。つかさたちは急いでやってきて、そのことをモーセに知らせた。するとモーセはこう答えた、「主の語られたのはこうである、『あすは主の聖安息日で休みである。きょう、焼こうとするものを焼き、煮ようとするものを煮なさい。残つたものはみな朝までたくわえて保存しなさい』と」(出エジプト記一六ノ二三)。彼らはそのとおりにしたが、それは変化していなかつた。そこでモーセは言った。「きょう、それを食べなさい。きょうは主の安息日であるから、きょうは野でそれを獲られないであらう。六日の間はそれを集めなければならない。七日目は安息日であるから、その日には無いであらう」(同・一六ノ二五、

二六。

神はご自分のきよい日を、イスラエルの時代と同じように、いまもなお、きよく守るように要求しておられる。クリスチャンは、みな、ヘブル人に与えられた命令を、主から自分たちに与えられた命令とみなさねばならない。安息日の前の日は、きよい時間のためにすべてのことを準備するための備え日としなければならない。どんなことがあっても、自分自身の用事のために、きよい時間にくいこむようなことがあってはならない。神は、病人や苦しんでいる人の世話をするように命じられた。彼らを安楽にするために必要な働きは、慈善の働きであって、安息日を犯すことにはならない。しかし、不必要な仕事は全部避けねばならない。備え日にすませられる小さなことを、不注意のために安息日のはじまるまで延ばす人が多い。そのようなことがあってはならない。安息日のはじめまでしないでおいた仕事は、安息日が過ぎるまでそのままにしておくべきである。こうすることによって思慮の足りない人々は、そのことをよく記憶していて、今後は注意深く六日の間に自分自身のことをするようになる。

イスラエル人は、荒野での長い間の滞在中に、毎週三重の奇跡を目に見たが、それは彼らの心に安息日の神聖さを印象づけるためのものであった。すなわち、六日めには二倍の分量のマナがふり、七日めには全然ふらなかった。そして、ほかのときには翌日までとっておいたものは食べられなくなっていたが、安息日に必要な分は新鮮なまま保存がきいたのであった。

マナが与えられたときの事情をよく考えてみると、安息日は、律法がシナイで与えられたときに創設されたところの人が主張しているが、そうではないという決定的な証拠がみられる。イスラエル人は、シナイに到着する

前に、安息日を守らなければならぬことを知っていた。安息日には全然降らなかったで、その準備として金曜日ごとに二倍の分量のマナを集めなければならなかったことによつて、安息日が清いものであることが絶えず心に印象づけられた。安息日にマナを集めに出る人々がいると、神は、「あなたがたは、いつまでわたしの戒めと、律法とを守ることを拒むのか」と言われた(同・一六ノ二八)。

「イスラエルの人々は人の住む地に着くまで四十年の間マナを食べた。すなわち、彼らはカナン地の境に至るまでマナを食べた」(同・一六ノ三五)。四十年の間、彼らはこの奇跡的な供給によつて、神の絶えることのない守護とやさしい愛を毎日自覚させられた。詩篇記者のことばに、神は「天の穀物を彼らに与えられた。人は天使のパンを食べた」と言われている(詩篇七八ノ二四、二五)。天使のパンとは、天使たちによつて彼らに与えられた食物ということである。「天の穀物」によつて養われた彼らは、神の約束が与えられているならば、あたかもカナンの肥沃な平野の波打つ穀物畑にかこまれているかのように、欠乏することは無いということを毎日教えられた。

イスラエルを養うために天から降ってきたマナは、世に生命を与えるために、神のみもとからこられたおかたを象徴していた。イエスはこう言われた。「わたしは命のパンである。あなたがたの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。しかし、天から下ってきたパンを食べる人は、決して死ぬことはない。わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べる者は、いつまでも生きるであろう。わたしが与えるパンは、世の命のために与えるわたしの肉である」(ヨハネ六ノ四八 五一)。来世において神の民に与えられる祝福の約束の中に「勝利を得る者には、隠されているマナを与えよう」と言われている(黙示録二ノ一七)。

シンの荒野を去ったのちに、イスラエル人はレピデムに宿営した。ここには水がなかったので、彼らは、また神の攝理を疑った。人々は盲目的に、そして僭越にもモーセのところへやってきて、「わたしたちに飲む水をください」と要求した。しかし、モーセは忍耐しつづけた。「あなたがたはなぜわたしと争うのか、なぜ主を試みるのか」と彼は言った。彼らは怒って叫んだ。「あなたはなぜわたしたちをエジプトから導き出して、わたしたちを、子供や家畜と一緒に、かわきによって死なせようとするのですか」(出エジプト記一七ノ二、三)。食物が豊富に供給されたときに、彼らは自分たちの不信とつばやきを思い出して恥ずかしく思い、これからは主に信頼しますと約束した。しかし、彼らはすぐにその約束を忘れ、信仰の最初の試みに失敗した。彼らを導いてきた雲の柱は恐るべき秘密を隠しているように思えた。また、モーセはいつたい何者なのだ、いつたい彼はなんの目的でわれわれをエジプトから連れ出してきたのだと、彼らはたずねた。疑いと不信が彼らの心を満たした。彼らはモーセが彼らの所有物によって私腹をこやそうとして、彼らを欠乏と苦難に会わせて、自分たちと子供たちを殺そうとたくらんでいるのだと言って、大胆に彼を責めた。怒りと憤りのさわぎの中で、彼らはモーセを石で打とうとした。

困ったモーセは、主にむかって、「わたしはこの民をどうすればよいのでしょうか」と叫んだ。彼は、エジプトで奇跡を行なったつえをとり、イスラエルの長老たちを連れて、民の前に行くように命じられた。主は、モーセにこう言われた。「見よ、わたしはホレブの岩の上であなたの前に立つてあろう。あなたは岩を打ちなさい。水がそれから出て、民はそれを飲むことができる」(同・一七ノ四、六)。モーセがそのようにすると、水が生きた水の流れとなつてわき出て、宿営に豊富に供給することができた。神は、モーセにそのつえをふり上げて、エジ

プトの災いのように、何か恐ろしい災いを、このようなつばやきを扇動した人々の上に下すようにとお命じにならないで、大きなあわれみをもって、このつえを彼らの救いをもたらす道具とされたのであった。

「神は荒野で岩を裂き、淵から飲むように豊かに彼らに飲ませ、また岩から流れを引いて、川のように水を流れさせられた」（詩篇七八ノ一五、一六）。モーセは岩を打ったが、モーセのかたわらに立って、いのちの水を流れさせたのは、雲の柱におおわれていた神のみ子であった。モーセと長老たちばかりでなく、離れて立っていた会衆のすべてが主の栄光を見た。しかし、もし雲がとり除かれたら、彼らはその中にとどまっておられるおかたの恐るべき輝きで殺されたであろう。

人々は、のどのかわきのあまり、神を試みて、「主はわたしたちのうちにあられるかどうか」（出エジプト記一七ノ七）。「もし神がわたしたちをここにつれてこられたのだったら、なぜパンと同じように水をお与えにならないのか」と言った。このような不信の表明は罪悪であって、モーセは神の刑罰が彼らの上にくだることを恐れた。そこで彼はその場所の名をマツサ（試み）、また、メリバ（小言）と呼んで、彼らの罪の記念とした。

新たな危険がいまや彼らを脅かした。主は、彼らが神に向かってつばやいたために、彼らが敵の攻撃にさらされるのをゆるしになった。その地方に住んでいた野蛮で、好戦的な部族アマレク人が、彼らに手むかい、疲れ果ててしんがりになっていた人々を襲った。モーセは、民の大多数に戦いの準備がないことを知っていたので、ヨシユアに、各部族から一団の兵士たちを選抜し、翌朝敵にむかって進撃するように命じた。一方、モーセは、手に神のつえを持って近くの高台に立つことになった。そこで次の日、ヨシユアとその一団は敵を攻撃し、一方モーセとアロンとホルは、戦場を見おろす丘の上に場所を占めた。モーセは、右手に神のつえを持って、両手を

天にさし出し、イスラエル軍の成功を祈った。戦闘が進むにつれて、モーセの両手が上のほうへさし上げられている間は、イスラエルが勝ったが、彼の手が下がると敵が勝つことがわかった。モーセは、疲れたので、アロンとホルが太陽の沈むころまでその手をささえて、敵を敗走させた。

アロンとホルは、モーセの手をささえて、モーセが、神から人々に語る言葉を受けている間に、人々は彼の困難な働きをささえなければならないことを彼らに示していた。モーセの行為もまた意味深いもので、神が、人々の運命をそのみ手ににぎっておられることを示した。すなわち、人々が神に信頼するときに、神は彼らのために戦って敵を征服されるが、人々が神にたよらないで自分自身の力にたよるときに、彼らは、神を知らない人たちよりも弱くなり、敵は彼らを打ち負かすのであった。

モーセが、手を天に向かってさしのべ、民のためにとりなしているときにヘブル人が勝利したように、神のイスラエルは、信仰によつて、偉大なる助け手の力にたよるときに勝利するのである。しかし、神の力は人間の力と結合しなければならない。モーセは、イスラエルが活動しなければ、神は、敵を打ち負かしてくださらないと思った。大指導者モーセが主に訴えている間、ヨシユアとその勇敢な部下たちは、イスラエルと神の敵を撃退するために全力を尽くしていた。

アマレク人が敗北したあとで、神はモーセに、「これを書物にしるして記念とし、それをヨシユアの耳に入れなさい。わたしは天が下からアマレクの記憶を完全に消し去るであろう」と言われた(同・一七ノ一四)。大指導者モーセは、死の直前に、人々に厳粛な命令を伝えた。「あなたがエジプトから出てきた時、道でアマレクびとがあなたにしたことを記憶しなければならない。すなわち彼らは道であなたに出会い、あなたがうみ疲れている

時、うしろについてきていたすべての弱っている者を攻め撃った。このように彼らは神を恐れなかった。…あなたはアマレクの名を天の下から消し去らなければならない。この事を忘れてはならない」(申命記一五ノ一九)。この邪悪なアマレク人について、主は、「アマレクの手は主のみ座に敵対する」と宣言された(出エジプト記一七ノ一六、英語訳)。

アマレク人は、神のご品性や主権について無知ではなかった。しかし、彼らは、神をかしこみおそれようとして、神の力に公然と反抗した。アマレク人は、モーセがエジプト人の前で行なった不思議なわざをちよう笑し、周囲の国民の恐怖をあざけた。彼らは、ヘブル人をひとりも残さず滅ぼすことを彼らの神々にかけて誓い、イスラエルの神は無力で自分たちに抵抗できないといばった。彼らは、イスラエル人から害を受けたこともなければ、脅かされたこともなかった。彼らの攻撃は全然挑発されたものではなかった。アマレク人がイスラエル人を滅ぼそうとしたのは、イスラエルの神に対する憎しみと反抗を示すためであつた。アマレク人は、長年の間、横暴な罪人で、彼らの罪悪はその報復が行なわれることを神に叫び求めていたが、神のあわれみは依然として彼らの悔い改めをうながしていた。しかし、アマレク人の男たちが、疲労して全く防備のないイスラエルの隊列を襲ったとき、彼らは自分たちの国民の運命を決定した。神の守護は、神の子らの最も弱い者たちの上にあつた。天の神は、彼らに対するどんな残酷な行為も圧迫も見のがされない。神を愛し、おそれるすべての者たちの上に、神のみ手は盾としてさし出される。人間はそのみ手を撃たないように気をつけるがよい。なぜなら、そのみ手は正義の剣をふるうからである。

イスラエル人が、そのとき宿営していた場所からあまり遠くないところに、モーセの義父エテロの家があつた。

エテロはヘブル人の救済について聞いていたので、このとき彼らを訪問して、モーセにその妻とふたりの子供を返してやろうとして出かけて行った。大指導者モーセは彼らの到着を使者たちから知らされると、喜んで出迎え、まず、対面のあいさつをすませて、彼らを自分の天幕へ案内した。モーセは、イスラエル人をエジプトから導き出す危険な仕事をする間、自分の家族を送り返していたのであったが、今、彼は、再び家族と会って安心し、喜ぶことができた。彼はエテロに、イスラエルに対する神の不思議な導きについて語った。エテロは喜んで、主を祝福し、モーセや長老たちと共に犠牲をささげ、神のあわれみを記念して厳粛な祝宴を開いた。

エテロは、宿営に滞在していたとき、モーセに負わされている重荷が重いことをすぐにさとった。無知で、訓練されていない大群衆の中に、秩序と規律を保つことは実にたいへんな仕事であった。モーセは、人々の指導者また行政官として認められていて、人々の全般的な利害問題と義務のことだけでなく、人々の間に生ずる論争まで彼のところへ持ち込まれていた。モーセはそれを許していた。というのは、そのことによって、彼が、「神の定めと判決を知らせるのです」と言ったように、彼らに教える機会が与えられたからである。しかし、エテロはこれに抗議して、言った。「このことはあなたに重過ぎるから、ひとりですることができない」「あなたも…必ず疲れ果てるであろう」(同・一八ノ一六、一八)。そこでエテロは、適当な人々を、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として任命するように助言した。それらの人々は、「有能な人で、神を恐れ、誠実で不義の利を憎む人」でなければならなかった(同・一八ノ二二)。これらの人々が小さな事件を全部さばき、一方最もむずかしい重大事件はやはりモーセのところに持ち込まれることになった。エテロはモーセに、「あなたは民のために神の前にいて、事件を神に述べなさい。あなたは彼らに定めと判決を教え、彼らの歩むべき道と、なすべき

事を彼らに知らせなさい」と言つた(同・一八ノ一九、二一〇)。勧告は受け入れられた。それはモーセの肩の重荷を軽くしたばかりでなく、その結果、人々の間にもつと完全な秩序が確立された。

主は、モーセに大きな栄誉を与え、彼の手によつて不思議なわざを行なわれた。しかしモーセは、自分人々を教えるために選ばれたのだから、自分自身は人から教えを受ける必要はないとは考えなかった。イスラエルの選ばれた指導者である彼は、ミデアンの敬虔な祭司の助言を喜んで聞き、その計画を賢明な措置として採用した。

人々は、レピデムから雲の柱の動きに従つて、旅を続けた。彼らは、不毛の平原を横切り、けわしい坂を越え岩に囲まれた狭い道を通つて行つた。さばくを横断していると、しばしば前方に、けわしい山々が巨大なとりでのように、彼らの道の真向こうにそびえ立ち、これ以上前進することができないようにみえた。しかし、近づいてみると、山腹のあちらこちらに通路が開けて、その向こうにまた平原が見えるのであつた。こうした奥深いじやりの山道を通りぬけて、彼らは導かれて行つた。それは荘厳で印象的な光景であつた。両側に何百フィートもそびえ立つ断崖の間を、家畜を連れたイスラエルの大群が、目のとどくかぎり生きたうしおのように流れて行つた。すると、彼らの眼前に、荘厳なシナイ山がその威容を現わした。雲の柱がその頂上にとどまつたので、人々は、その下の平原に天幕を張つた。ここが一年近くの間彼らの居住地になるのであつた。夜になると、火の柱が彼らに神の守護を保証し、彼らが眠りについてゐる間に天のパンが静かに宿営の上に降つた。

夜明けが山の暗い尾根を金色に染め、太陽の金色の光線が深い谷間にさし込むと、これらの疲れ果てた旅人たちには、それが神のみ座からのあわれみの光のようにみえた。四方の広大な、けわしい山は、その孤独な雄大さの中にあつて、永遠の存在と威厳を語つてゐるように思えた。ここで、心は厳肅と畏敬の念に打たれた。人々は

「てんびんをもって、もろもろの山をはかり、はかりをもって、もろもろの丘をはかり」られたおかたの前にあって、自己の無知と弱さを思わせられた（イザヤ書四〇ノ一二）。ここでイスラエル人は、かつて神が人類に示された最もすばらしい啓示を受けるのであった。ここに主はご自分の民を集めて、その聖なる律法をご自身の声で宣言することによって、ご自分の戒めの神聖さを彼らに印象づけられるのであった。彼らは、墮落した奴隷生活を送り、偶像礼拝と長い間接触していたために、その影響を習慣と品性に刻まれていたので、徹底的な大改革が彼らのうちに行なわれることになった。神は、ご自身を彼らに知らせることによって、彼らをもっと高い道德的水準に引き上げるために働いておられた。

第 27 章

十

誠

本章は、出エジプト記一九 二四章に基づく。

シナイに宿営するとまもなく、モーセは神に会うために山へ召された。彼はただひとりでけわしい道を登って行って、主の臨在の場所を示す雲に近づいた。イスラエルは、いま神との親密な、特殊な関係に入れられるのであった。すなわち、彼らは、神の統治下にある一つの教会、一つの国民として統合されるのであった。民のために、モーセに次のような言葉が与えられた。

「あなたがたは、わたしがエジプトびとにした事と、あなたがたを鷲の翼に載せてわたしの所にこさせたことを見た。それで、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所有だからである。あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであろう」(出エジプト記一九ノ四 六)。

モーセは宿営にもどって、イスラエルの長老たちを呼び集め、神の言葉を彼らにくりかえした。彼らは、「われわれは主が言われたことを、みな行います」と答えた(同・一九ノ八)。こうして彼らは、神と厳粛な契約を結

び、神を彼らの統治者として受け入れることを誓い、これによって、彼らは特別な意味で、神の権威の下にある民となった。

再びモーセは山に登った。主は彼に、「見よ、わたしは濃い雲のうちにあって、あなたに臨むであらう。それはわたしがあなたと語るのを民に聞かせて、彼らに長くあなたを信じさせるためである」と言われた(同・一九ノ九)。人々は、道中で困難に出会ったとき、モーセとアロンにむかつてつぶやき、イスラエルの群れを滅ぼすためにエジプトから連れ出したのだと言って彼らを責めた。主は、彼らがモーセの教えに信頼するようになるために、彼らの前でモーセに栄誉を与えようと望まれた。

神は、ご自分の律法を語られる時を、その重大性に応じて、荘厳な光景にしようともくろまれた。民は、神への奉仕に関連した一つ一つを最高の尊敬をもってみなねばならないことを印象づけられるのであった。主はモーセに、「あなたは民のところに行つて、きょうとあす、彼らをきよめ、彼らにその衣服を洗わせ、三日目までに備えさせなさい。三日目に主が、すべての民の目の前で、シナイ山に下るからである」と言われた(同・一九ノ一〇、一一)。それまでの数日の間に、すべての者が神の前に出るための厳粛な準備に時間を費やすのであった。彼らのからだに衣服は、汚れからきよめられねばならなかった。そして、モーセが彼らの罪を指摘するときに、彼らは心が不義からきよめられるように、へりくだって、断食と祈りに専念するのであった。

命令されたとおりに準備がなされると、次の命令に従って、モーセは、人も動物も聖域に侵入することがないように、山の周囲に境界を設けるように指示した。もしだれでもあえてその境界に触れるようなことがあれば、たちどころに死の刑罰が下るのであった。

三日めの朝、民のすべての目が山の方へ向けられると、その頂上は濃い雲でおおわれ、それがますます濃く暗くなって下のほうへくだり、ついに全山が暗黒と恐るべき神秘につつまれた。そのとき、ラツパの音が聞こえて民を神との会合に呼び集めたので、モーセは彼らを山のふもとへ導いた。濃い暗黒の中からあざやかないずまがひらめき、雷鳴が周囲の山々に反響をくりかえした。「シナイ山は全山煙った。主が火のなかにあって、その上に下られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山はげしく震えた」(同・一九ノ一八)。集まった群衆に、「主の栄光は山の頂で、燃える火のように」見えた。そして、「ラツパの音が、いよいよ高くなつた」(同・二四ノ一七、一九ノ一九)。エホバのご臨在のしるしは恐るべきものであつたので、イスラエルの群衆は恐ろしさにふるえ、主の前にひれ伏した。モーセさえ、「わたしは恐ろしさのあまり、おののいている」と言つた(ヘブル二ノ二二)。

するとかみなりはやみ、ラツパの音も聞こえず、大地は静かになつた。厳粛な沈黙の瞬間があつた。そのとき神のみ声が聞こえた。つき従つた天使たちに囲まれて、山の上に立たれた主は、ご自身をおおっている濃い暗黒の中から語つて、ご自分の律法をお知らせになつた。モーセは、その光景を描写してこう言っている。

「主はシナイからこられ、

セイルからわれわれにむかつてのぼられ、

パランの山から光を放たれ、

ちよるずの聖者の中からこられた。

その右の手には燃える火があつた。

まことに主はその民を愛される。

すべて主に聖別されたものは、み手のうちにある。

彼らはあなたの足もとに座して、

教をうける」。

(申命記三三ノ二、三)

主は、おそるべき威厳を備えた司法者、立法者としてばかりでなく、あわれみ深い民の守護者として、ご自身をあらわされた。「わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」(出エジプト記二〇ノ二)。イスラエル人がすでに自分たちの案内者であり、救済者であると知ったおかた、彼らをエジプトから連れ出して、海の中に道をつけ、パロとその軍勢を全滅させられたおかた、エジプトのどんな神々よりもまさったおかたであることを示されたおかた。そのおかたが、今、ご自分の律法を語られたのである。

律法は、このとき、ヘブル人だけのために語られたのではなかった。神は彼らに栄誉を与えて、ご自分の律法の守護者また遵守者とされたが、それは全世界のための聖なる委託として保持すべきものであった。十誠は、全人類に適用されるのであって、すべての人の教えと統治のために与えられたのである。十誠は、短くて、簡潔で、権威があつて、神と人に対する人間の義務を網羅し、その全部は愛という根本的な大原則に基づいている。「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」。また、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」(ルカ一〇ノ二七、申命記六ノ四、五、レビ記一九ノ八参照)。十誠の中には、

この原則が詳しく定められ、人間の状態と環境に適合されている。

「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」(出エジプト記二〇ノ三)。

永遠に自存し、創造されたおかたでなく、自らすべてのものの根源であって維持者であられる主だけが、最高の尊敬と礼拝をお受けになる資格がある。人間は、主以外のなにものをも第一に愛して奉仕することを禁じられている。神に対するわれわれの愛を減少させたり、神にささげるべき奉仕をさまたげるようなものを心にいだくときに、われわれはそれを自分の神としているのである。

「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない」(同・二〇ノ四、五)。

第二条は、像や類似した形のものによつて真の神を礼拝することを禁じている。多くの異教国民は、自分たちの像は神を礼拝するための象徴にすぎないと主張した。しかし、神はこのような礼拝は罪であると宣言された。物体をもつて永遠のおかたを象徴しようと試みるときに、神に関する人間の観念は低下するのである。人の心は主の無限の完全さから離れるときに、創造主よりも被造物のほうへひかれるのである。そして神についての観念が低下するにつれて、人間は墮落するのである。

「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神である」(同・二〇ノ五)。人と神との密接で聖なる関係が、結婚の象徴によつてあらわされている。偶像礼拝は靈的姦淫であるから、これに対する神の不快がねたみと呼ばれていることはふさわしい。

「わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三四代に及ぼし」（同・二〇ノ五）。子供たちが親の悪行の影響を受けることは避けられないが、その罪にあずからないかぎり、親の不義のために罰せられることはない。しかし、子供はたいいてい親の歩いた道を歩くものである。遺伝と手本によって、むすこたちは父親の罪にあずかる者となる。肉体的病氣と退化ばかりでなく、悪い傾向、ゆがめられた食欲、墮落した品行が、父から子へ、また、三代四代と受けつがれる。この恐るべき事實は、人間が罪の道に歩くのを抑制する厳肅な力とならねばならない。「わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう」（同・二〇ノ六）。第二条の偽りの神々を礼拝することを禁止することの中には、真の神を礼拝するようにとの命令が暗に含まれている。神を憎む者に対して怒りが三、四代に及ぶと予告されているのに対して、神への奉仕に忠実な者に対しては、千代まであわれみが約束されている。

「あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう」（同・二〇ノ七）。

この戒めは、偽証や日常ののしりの言葉を禁じているばかりでなく、そのおそるべき意味も考えないで、神のみ名を軽々しく、あるいは不注意に使うことを禁じている。日常の会話において、神について無思慮に発言することや、ささいなことを神に訴えることや、神のみ名を、幾度も無思慮にくりかえすことなどは、神のみ栄えを汚すことになる。「そのみ名は聖にして、おそれおおい」（詩篇一一ノ九）。神のとうといご品性についての觀念が心に印象づけられるように、だれもが、神の尊嚴と純潔と神聖さとを瞑想すべきである。そして、彼の清いみ名は、うやうやしく厳肅に言わなければならない。

「安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」(出エジプト記二〇ノ八一)。

安息日は、新しい制度として取り入れられたものではなく、創造のときに制定されたものである。それは創造主のみわざの記念としておぼえられ、守られるのである。安息日は、神を天地の創造者としてさし示すことによって、真の神とすべての偽りの神とを区別している。七日めを守る者はだれでも、その行為によって、彼らが主の礼拝者であることを表示するのである。このように、安息日は、この地上において神に仕える者があるかぎり、神に対する人間の忠誠のしるしである。第四条は、十誡の中で、立法者の名と称号が二つともしるされている唯一の戒めである。それは律法がだれの権威によつて授けられたかを示している唯一の戒めである。このように第四条は、律法の確実性と拘束力の証拠としてそれに押された神の印を含んでいる。

神は、人間に、働くために六日間をお与えになり、彼ら自身の働きがその六日の働き日になされるように要求される。病人や苦しんでいる者はいつでも世話しなければならぬので、必要とあわれみの行為は安息日にもゆるされるが、不必要な働きは厳格にこれを避けなければならない。「安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ、これを尊んで、おのが道を行わず、おのが楽しみを求めず」(イザヤ書五八ノ一二)。禁止はこれだけではない。「むなしい言葉を語らな

い」と、預言者イザヤは言っている。安息日に、商売の話をしたり、商売の計画をたてたりする者は、神から実際に商売の取り引きに従事したのと同じにみなされる。安息日をきよく守るためには、世俗的なことがらを心に思いめぐらすことさえしてはならない。この戒めには、われわれの門のうちにいるすべてのものが含まれている。家の中の同居人は、この清い時間の間、世俗的な用事をやめるのである。この清い日には、みんなが一つになって、心からの奉仕によって、神をあがめねばならない。

「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである」(出エジプト記二〇ノ一二)。

親は、ほかのだれも受けることのできない愛情と尊敬を受ける資格がある。神は、お与えになった子供たちの責任を親に負わせられた。そして、子供たちが幼いころは、親が子供たちに対して、神の立場に立つことを神ご自身が定められた。親の正当な権威を拒む者は、神の権威を拒んでいる。第五条は、子供たちが親を尊敬し、親に従順に従うことを要求しているだけでなく、親を愛し、いたわり、重荷を軽くし、その評判をまもり、老齢の彼らを助け、慰めることを要求している。それは、また、牧師、統治者その他神が権威をおゆだねになったすべての人を尊敬するように命じている。

「これが第一の戒めであって、次の約束がそれについている」と、使徒パウロは言っている(エペソ六ノ一二)。まもなくカナンにはいることを予期していたイスラエルにとって、これは、従順な者にとって、その美しい国で長く生活する保証であった。しかしこれにはもっと広い意味と、神のすべてのイスラエルが含まれていて、地が罪ののろいから解放されたときの永遠の生活が約束されているのである。

「あなたは殺してはならない」(出エジプト記二〇ノ一三)。

命を縮めるすべての不正行為、憎しみとふくしゅうの精神、また、他を傷つける行為を行なわせたり、他が傷つくことを望んだりさせる悪感情を心にいだくこと、(なぜなら、すべて兄弟を憎む者は人殺しだからである)利己的精神をいだいて、貧者や苦しむ者を顧みないこと、健康を害するすべての放縱、また、 unnecessary 消耗、過労に陥ることは、程度の差こそあつても、すべて第六条の違反である。

「あなたは姦淫してはならない」(同・二〇ノ一四)。

この戒めは、不純な行為だけでなく、好色的な思いや欲望、あるいは、そうしたものを刺激する行為を禁止している。外にあらわれた生活だけでなく、ひそかな意図や心の感情においても、純潔が要求される。キリストは神の律法について深遠な義務をお教えになり、邪悪な思いや目つきは、不法な行為と全く同様に罪であると言われた。

「あなたは盗んではならない」(同・二〇ノ一五)。

この禁止には、公私の罪が含まれている。第八条は、人間をさらったり、奴隷売買をしたりすることを有罪とし、征服のための戦争を禁じている。それは窃盗と強盗を有罪としている。それは日常生活のどんな小さなことながらも厳密な正直さを要求している。それは商売における不正を禁じ、正当な借金や賃金の支払いを要求している。それは、他人の無知、弱点、不幸につけこんで私腹をこやす行為は、すべて天の書に詐欺として記録されることを宣言している。

「あなたは隣人について、偽証してはならない」(同・二〇ノ一六)。

どんなことにおいても、偽りを言うこと、隣人を欺こうとするすべての試みや意図が、ここに含まれている。

欺こうとする意図が虚偽となるのである。目つき、手の動き、顔の表情によって、ことばと同じように効果的にうそが語られるかもしれない。わざと誇張されたしゃべり方、まちがった印象あるいは誇張された印象を伝えるように計画された暗示やほめかし、事実であっても誤解を招くような言い方などはすべて虚偽である。この戒めは、虚偽や悪意のある憶測や中傷、告げ口などによって隣人の評判を傷つける行為をすべて禁じている。事実を故意に隠して、その結果他人に害をおよぼすことは、第九条の違反である。

「あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない」(同・二〇ノ一七)。

第十条は、あらゆる罪の根絶をはかるもので、罪の行為が生じる根源の利己的欲望を禁じている。神の律法に従って、他人の所有に対してよこしまな欲望をいだかないものは、同胞に対して悪い行為を犯すことはしないであらう。

かみなりと炎の中で、驚くべき大立法者の権力と威厳のあらわれとともに語られた十誠の清い条文はこのようなものであった。神は、人々がその光景をいつまでも忘れることがないように、また、彼らが律法の創始者、すなわち、天地の創造主に対する深い尊敬心をいだくようになるために、律法の宣布に力と栄光のあらわれが伴うようにされた。神は、また、すべての人々に律法の神聖さ、重要性、永遠性を示そうとされた。

イスラエルの人々は、恐怖に圧倒された。神のおことばの恐るべき力に、彼らのふるえる心は耐えられないように思われた。なぜなら、神の大いなる正義の法則が、彼らの前に示されたとき、彼らは、聖なる神の御目にう

つる罪の憎むべき性格と自分自身の不義を、これまでになかったほどにさとったからである。彼らは恐れおののいて、山から遠く離れて立った。群衆はモーセに叫んで言った。「あなたがわたしたちに語ってください。わたしたちは聞き従います。神がわたしたちに語られぬようにしてください。それでなければ、わたしたちは死ぬでしょう」。指導者モーセは答えて言った。「恐れてはならない。神はあなたがたを試みるため、またその恐れをあなたがたの目の前において、あなたがたが罪を犯さないようにするために臨まれたのである」。しかし、モーセは、「神のおられる濃い雲に近づいて行つた」けれども、民は離れたところにとどまっていた、その光景を恐れて見守っていた(同・二〇ノ一九、二〇、二一)。

人々の心は、奴隷生活と偶像礼拝によつて盲目になり、墮落していたので、神の十の戒めの深遠な原則を十分に理解する備えができていなかった。人々が十誡の義務をもつと十分に理解し、励行するために、十誡の原則を例示し、適用するための、追加的な戒めが与えられた。これは、かぎらない知恵と公平によつて作られ、つかさたちがこれに従つてさばきを行なつたので、おきてと呼ばれた。これは十誡とちがつて、モーセに個人的に授けられ、モーセはそれを人々に伝えた。

この律法の最初の部分は召使に関するものであつた。昔、犯罪人が裁判人によつて奴隷として売られることがあつた。ある場合には、債務者が債権者によつて売られた。貧困のために、自分自身や子供たちを売ることさえあつた。しかし、ヘブル人は一生の間奴隷として売られることはなかった。使役の期間は六か年と限られていた。七年めに当人は自由の身となつた。人をさらつたり、故意に殺害したり、親の権威に反逆すると、死刑の罰を受けた。イスラエル人でない奴隷を保有することはゆるされたが、その生命と身体は嚴重に保護された。奴隷の殺

害者は処罰され、主人が奴隷に傷害を加えることは、たとえ一本の齒の損失であつても、その奴隷が自由の身になる権利を与えた。

イスラエル人は、さきごろまで自分たちが奴隷だったので、召使を持てるようになったからといって、彼らは自分たちがエジプト人の監督たちの下で経験してきた、残虐と搾取の精神を持つことがないように気をつけねばならなかった。自分たち自身のにがい奴隷生活の記憶から、彼らは召使の立場になつて考え、親切であわれみ深く、自分がとり扱われたいと望むように他人をとり扱うことができるようにならねばならなかった。

やもめと孤児の権利は特に保護され、彼らの無力な状態に対するやさしい考慮が命じられた。「もしあなたが彼らを悩まして、彼らがわたしにむかつて叫ぶならば、わたしは必ずその叫びを聞くであろう。そしてわたしの怒りは燃えたち、つるぎをもつてあなたがたを殺すであろう。あなたがたの妻は寡婦となり、あなたがたの子供たちは孤児となるであろう」と主は宣告された(同・二二ノ二三、二四)。イスラエルに加わつた外国人は、不正と圧制から保護されなければならなかった。「あなたは寄留の他国人をしえたげてはならない。あなたがたはエジプトの国で寄留の他国人であつたので、寄留の他国人の心を知っているからである」(同・二三ノ九)。

貧しい者から利息を取ることが禁止された。貧しい人の上着や毛布を質として取つた場合には、日が暮れるまでに返さねばならなかった。盗みの罪を犯した者は倍にして返すことを要求された。つかさたちを尊敬するように命令され、裁判人は虚偽の申し立てに加担したり、わいろをとつたりして、裁判を曲げることがないように警告された。中傷や悪口は禁止され、個人的な敵に対してさえ、親切な行為をするように命じられた。

人々は再び安息日の聖なる義務を思い起こさせられた。年ごとの祭りが定められ、そのときには、国中の男子

はすべて感謝のささげ物と収穫物の初穂をたずさえて主の前に集まるのであった。こうした規則の目的が明らかにされた。それは単なる専横的な主権の発動から出たものではなかった。すべてはイスラエルの益のために与えられたのであった。「あなたがたは、わたしに対して聖なる民とならなければならぬ」。すなわち、聖なる神から認められるのにふさわしい者とならねばならないと、主は言われた(同・二二ノ三二)。

これらの律法は、モーセによつて記録されたもので、国家の法律の基礎として、大切に保存すべきものであった。そして、十誡とともに、それを説明するために与えられたこれらも、イスラエルに対する神の約束の成就の条件となるのであった。

そこで、主から民に次の言葉が与えられた。「見よ、わたしは使をあなたの前につかわし、あなたを道で守らせ、わたしが備えた所に導かせるであろう。あなたはその前に慎み、その言葉に聞き従い、彼にそむいてはならない。わたしの名が彼のうちにあるゆえに、彼はあなたがたのとがをゆるさないのである。しかし、もしあなたが彼の声によく聞き従い、すべてわたしが語ることを行ふならば、わたしはあなたの敵を敵とし、あなたのあだをあだとするであろう」(同・二三ノ二〇 一二)。イスラエルの放浪の初めから終わりまで、キリストは、雲と火の柱の中にあつて、彼らの指導者となられた。来たるべき救い主をさし示すいろいろな型がある一方では、現実には救い主がそこにおられて、人々のためにモーセに命令を与え、彼らの前に、唯一の祝福の道を示された。

山から下ると、「モーセはきて、主のすべての言葉と、すべてのおきてとを民に告げた。民はみな同音に答えて言った、『わたしたちは主の仰せられた言葉を皆、行います』」(同・二四ノ三)。モーセは、この誓いを、それに従うことを誓った主のみこととともに、一つの書に記録した。

それから契約の批准が続いた。山のふもとに祭壇が築かれ、そのそばに、民が契約を受け入れた証拠として、「イスラエルの十二部族に従って」十二の柱が建てられた(同・二四ノ四)。それから、この務めのために選ばれた若者によって、犠牲がささげられた。

ささげ物の血を祭壇に注いでから、モーセは、「契約の書を取って、これを民に読み聞かせた」(同・二四ノ七)。こうして、契約の条件が厳粛にくりかえされたが、だれでも、それに従うかどうかを選ぶことは自由であった。彼らはまず、神のみ声に従うことを約束したが、それから、神のおきてが宣言されるのを彼らは聞いた。この契約にどれだけのことが含まれているかを彼らがよく認めるように、その原則が詳細に述べられた。ふたたび人々は口をそろえて答えた。「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」(同・二四ノ七)。「モーセが、律法に従ってすべての戒めを民全体に宣言したとき、…血を取って、契約書と民全体とにふりかけ、そして、『これは、神があなたがたに対して立てられた契約の血である』と言った」(ヘブル九ノ一九、二〇)。

いまや、主を王とする選ばれた民の国家の建設の手続きが完全に整った。モーセはすでに次の命令を受けていた。「あなたはアロン、ナダブ、アビウおよびイスラエルの七十人の長老たちと共に、主のもとにのぼってきなさい。そしてあなたがたは遠く離れて礼拝しなさい。ただモーセひとり主が主に近づき、他の者は近づいてはならない」(出エジプト記二四ノ一、二)。人々が山のふもとで礼拝していたときに、これらの選ばれた人々は山へ召された。七十人の長老たちがイスラエルを統治するのにモーセを助けることになり、神は彼らにみ霊をそそがれ、神の力と偉大さを彼らにおみせになった。「そして、彼らがイスラエルの神を見ると、その足の下にはサファイアの敷石のごとき物があり、澄み渡るおおぞらのようであった」(同・二四ノ一〇)。彼らは神を見たのではなく、

そのご臨在の栄光を見たのであった。これより以前には、彼らはこのような光景に耐えることができなかった。しかし、神の力のあらわれに、彼らは恐れ、悔い改めていた。彼らは、神の栄光、純潔、あわれみを瞑想し、ついに彼らの瞑想の主題である神にいつそう近づくことができた。

モーセとその従者ヨシユアは、いま神に会うために召された。彼らがしばらく不在になるので、モーセは、アロンとホルを任命して自分の代理とし、彼らを助ける長老たちも任命した。「こうしてモーセは山に登ったが、雲は山をおおっていた。主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は六日のあいだ、山をおおっていた」(同・二四ノ一五、一六)。六日の間、雲は、神の特別な臨在のしるしとして山をおおっていた。しかし、神ご自身のあらわれや神のみこころの伝達はなかった。この期間、モーセは、至高者であられる神の謁見室へ呼ばれるのを待っていた。彼は、「山に登り、わたしの所にきて、そこにいなさい」と命じられていた(同・二四ノ一二)。彼の忍耐と服従心がためされたけれども、彼は忍耐して待ち続け、自分の立場を離れなかった。この待っている期間が彼にとつては準備の時、自己吟味の時であった。神に愛されたこのしもべさえ、直ちに、神のご臨在に近づいて行つて、その栄光のあらわれに耐えることはできなかった。創造主と直接に交わる備えができる前に、心をさぐり、瞑想と祈りによつて、神に献身するのに六日間を用いなければならなかった。

七日めに、それは安息日であつたが、モーセは雲の中へ召された。濃い雲が、全イスラエルの目の前で開け、主の栄光が燃える火のように輝き出た。「モーセは雲の中にはいつて、山に登った。そしてモーセは四十日四十六夜、山にいた」(同・二四ノ一八)。山における四十日間の滞在には、準備の六日間が含まれていなかった。六日の間、ヨシユアはモーセと共にいて、彼らは共にマナを食べ、「山から流れ下る谷川」から飲んだ(申命記九ノ

二一）。しかし、ヨシユアはモーセと一緒に雲の中にはいらなかった。彼は外に残って、モーセの帰りを待っている間、毎日食べ、かつ飲んでいた。しかし、モーセは、四十日の間ずっと断食した。

モーセは、山にいた間に、神のご臨在が特別にあらわされる聖所の建築について指示を受けた。「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい」というのが神の命令であった。三度、安息日の遵守が命令された。「これは永遠にわたしとイスラエルの人々との間のしるしである。…わたしがあなたがたを聖別する主であることを、知らせるためのものである。それゆえ、あなたがたは安息日を守らなければならない。これはあなたがたに聖なる日である。…すべてこの日に仕事をする者は、民のうちから断たれるであろう」（出エジプト記二五ノ八、三一ノ一七、一三、一四）。神への奉仕のために、幕屋をすぐに建てるようにとの命令が与えられたばかりであった。そしていま、彼らの念頭にある目的は神の栄光であり、また礼拝の場所が非常に必要であるために、彼らは、安息日に建築のために働いてもよいと考えるかもしれない。この誤りを犯さないようにするために、注意が与えられた。神のための特別な働きがどんなに神聖であり、急を要しても、神の清い安息日を破ってはならなかった。

これから、人々は彼らの王であられるおかたに臨在していただくのであった。「わたしはイスラエルの人々のうちに住んで、彼らの神となるであろう」。幕屋で、「わたしはイスラエルの人々に会うであろう」というのがモーセに与えられた保証であった（同・二九ノ四五、四三）。神の権威の象徴として、また神のみこころのあらわれとして、神ご自身の指で二枚の石の板に刻まれた十誡の写しがモーセに渡されたが、それは聖所に納められて、国民の礼拝の目に見える中心となるのであった（申命記九ノ一〇、出エジプト記三二ノ一五、一六参照）。

イスラエルは奴隷の境遇から、すべての民にまさって高められ、王の王であられるおかたの特別な宝とされた。神は、彼らに聖なる委託物をゆだねるために、彼らを世から引き離された。神は彼らを律法の保管者とし、彼らによって神ご自身の知識を人々の中に保とうと望まれた。こうして天の光は、暗黒につつまれている世を照らし、すべての民族に偶像礼拝から離れて、生きた神に仕えるようにと訴えられる声が聞かれなければならなかった。もし、イスラエル人が、彼らの委託に忠実であるなら、彼らはこの世で強力な国家となるのである。神は彼らを防衛し、彼らを他のどの国民よりも高められるのである。神の光と真理は、彼らを通してあらわされ、彼らは、あらゆる種類の偶像礼拝にまさって、神の礼拝のすぐれていることのよい例として異彩をはなつのであった。

シナイでの偶像礼拝

本章は、出エジプト記三二―三四章に基づく。

モーセがいなくなった間、イスラエルの人々は、不安な気持ちにおそわれて彼の帰りを待ちわびていた。人々は、モーセがヨシュアと共に山に登り、下方からも見えていた密雲の中にはいつたことを知っていた。密雲は山の頂上をおおい、ときおり神の臨在の光がいなずまのようにひらめいていた。彼らは、彼の帰りを今か今かと待った。彼らは、エジプトにいたときに、物質によって神を代表することに慣れていたので、目に見えないおかたに頼ることはむずかしかった。そこで、彼らはモーセに頼って、かろうじて信仰を保っていた。

ところが、彼が、彼らのあいだから取り去られてしまった。幾日も、幾週間も彼は帰ってこなかった。雲はまだ見えていたが、宿営の多くの人々には、モーセが彼らを捨てて行ってしまったか、それとも、燃える炎の中で焼き尽くされたかのように思われた。

こうして彼らは待つ間に、すでに聞かされた律法をよく瞑想し、さらに神がこれから与えようとしておられる啓示を受けるために、心の準備をする時間が与えられた。これは、そのための絶好の機会であった。こうして

彼らが、神の要求をさらに明らかに理解しようとつとめ、神の前にへりくだっていたならば、試練に会わないように守護されたことであろう。しかし、彼らは、そうしなかった。やがて彼らは注意しなくなって、無とんちゃくになり、律法を犯すに至った。特に寄り集まり人はそうであった。彼らは、乳と蜜の流れる地、約束の国に行く途中で忍耐しきれなくなった。美しい国にはいる約束は、服従する者にだけ与えられるという条件であったが彼らは、これを見失っていた。中にはエジプトへ引き返そうとする者もあった。しかし、カナンに向かって進むにしても、エジプトに引き返すにしても、大多数の人々は、もはやモーセを待たないことにきめてしまった。

彼らは指導者を見失って途方にくれ、以前の迷信にもどっていった。「寄り集まりびと」が、まず不平とつばやきを言い始め、その後の背信の指導者になった。エジプト人が、神としていた象徴の中には、牛、または子牛があった。そして、エジプトで、この種の偶像礼拝を行っていたものの発案によって、子牛が造られ、その礼拝が行なわれた。人々は神を代表する何かの像が、モーセの代わりに彼らの前に進むことを望んだ。

神は、ご自分のどんな形をもお与えになつたことはない。そして、こうした目的のために、物質で形を造ることを神は禁じておられた。エジプトと紅海での奇跡は、神が、唯一の真の神で、イスラエルの目に見えない全能の救い主であられるという信仰を確立するために与えられた。目に見える神の臨在のしるしを見たい者のためには、雲と火の柱が与えられて群衆を守り、シナイ山の上には、神の栄光があらわれていた。しかし、神の臨在の雲が、なお彼らの前にあるのに、彼らの心はエジプトの偶像礼拝にもどり、目に見えない神の栄光を牛の像であらわした。

モーセの不在中、司法権がアロンにゆだねられていたので、大群衆は彼の天幕に集まって、「さあ、わたした

ちに先立つて行く神を、わたしたちのために造ってください。わたしたちをエジプトの国から導きのぼった人、あのモーセはどうなったのかわからないからです」と要求した(出エジプト記三二ノ二)。これまで、彼らを導いた雲は山の上に永久に止まってしまい、もはや旅の指示をしなくなったと彼らは言った。彼らには、それに代わって、偶像がなければならなかった。そして、もし彼らがある者らの意見に従ってエジプトへ帰るようなときには、偶像をまず先頭にかついで行き、それを自分たちの神であると認めるならば、エジプト人から喜んで迎えられるであろうと考えた。

こうした危機には、確固とした決断と、なにものにもくじけない勇気の人が必要であつた。それは、自分の人や身の安全、自分の生命そのものよりも、神の栄光を重んじる人である。しかし、そのときのイスラエルの指導者は、そうした品性の人ではなかった。アロンは一応人々をいさめた。しかし、危機に臨んでためらい恐れる彼の態度は、ますます人々をかたくなにするだけであつた。騒ぎは大きくなった。人々は、盲目的になり、不合理な熱狂状態に陥つた。神と結んだ契約を堅く保つた者もいくらかあつたが、大部分の人々は背信に加わつた。偶像を造ることが、偶像礼拝であることを指摘した少数の勇敢な人々は、群衆の襲撃を受けて乱暴をされ、ついに混乱と興奮の中で生命を失つた。

アロンは、自分の身の安全を気づかつた。彼は、神の栄光のために勇敢に立つかわりに、群衆の要求を受け入れた。アロンがまず第一にしたことは、すべての人々から金の耳輪を集めて、彼のところに持って来させることであつた。そうすれば、彼らは虚栄心から、そのような犠牲を拒否してくるものと内心希望していた。しかし、彼らは快く装飾品をはずした。アロンはそれを用いて、エジプトの神をまねた子牛を鑄造した。人々は言った。

「イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である」(同・三二ノ四)。こうしてアロンは卑劣にも、主がはずかしめられるのを許した。そればかりではなかった。アロンは、金の像が人々に歓迎されたのを見て、その前に祭壇を築き、「あすは主の祭である」と布告した(同・三二ノ五)。その布告は、ラッパによって組から組へと宿営全体に伝えられた。「そこで人々はあくる朝早く起きて燔祭をささげ、酬恩祭を供えた。民は座して食い飲みし、立って戯れた」(同・三二ノ六)。「主の祭」をするという口実のもとに、彼らは飲食にふけり、みだらな騒ぎを演じた。

今日でも快樂を愛する心が「信心深い様子」のかげに隠れていることがなんと多いことであろう。礼拝の儀式を守りながらなおかつ人々が利己心または、肉欲の満足にふけることを許す宗教は、イスラエルの時代と同様に今日でも、多くの人々に喜び迎えられている。そして、教会の権威ある地位の人が、清められていない人々の欲するところを受け入れて、彼らが罪を犯すのを助長する柔弱なアロンのような人々が、まだいるのである。

ヘブル人は、神の声に服従することを厳粛に神に誓ってから、まだほんの数日しかたっていないかった。彼らは恐れおののいて山の前に立ち、「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」という言葉に耳を傾けたのであった(同・二〇ノ三)。神の栄光は、まだシナイ山の上にただよっていて、会衆に見えていた。それなのに、彼らはそむいて他の神々を求めた。「彼らはホレブで子牛を造り、鑄物の像を拝んだ。彼らは神の栄光を草を食う牛の像と取り替えた」(詩篇一〇六ノ一九、二一〇)。慈愛深い父、全能の王としてご自分をあらわされた神に対して、これ以上の忘恩を示し、これ以上の大胆な侮辱を加えることができるであろうか。

山にいたモーセは、宿営で背信が起こったことを知らされ、直ちにもどっていくように命じられた。主はモー

セに言われた。「急いで下りなさい。あなたがエジプトの国から導きのぼったあなたの民は悪いことをした。彼らは早くもわたしが命じた道を離れ、自分のために鑄物の子牛を造り、これを拝」んだ(出エジプト記三二ノ七、八)。神はこのできごとを、その始まったときに止めることもおできであった。しかし、反逆と背信に罰を与えてすべてのものの教訓とするために、このことがこうして頂点に達するのをお許しになった。

神が、神の民と結ばれた契約は破棄された。そこで神はモーセに言われた。「それで、わたしをとめるな。わたしの怒りは彼らにむかって燃え、彼らを滅ぼしつくすであろう。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とするであろう」(同・三二ノ一〇)。イスラエルの人々、特に寄り集まりびとは、神に反逆する傾向があった。彼らは指導者にむかってつぶやき、その不信とかなくなさによって指導者を悩ますのであった。であるから、彼らを約束の国に導くことは、骨のおれるたいへんな仕事であった。彼らはすでに罪を犯して神の恵みを失い、当然滅ぼされる運命にあった。であるから、主は彼らを滅ぼし、モーセを大国民にしようと言われた。

「わたしをとめるな。……わたし(は)……彼らを滅ぼしつくすであろう」と神は言われた。もし、神がイスラエルを滅ぼそうとなさるならば、いったいだれが彼らのために嘆願することができようか。たいていの人は、罪人が滅びるのを、そのまま放任しておくものである。人々の忘恩とつぶやきの声しか聞くことのできない苦勞と重荷と犠牲の生活を捨てて、それに代わって安楽と榮譽ある地位とに喜んでつかない人間がいったいあるであろうか。神ご自身がモーセを解放すると言っておられたのである。

しかし、モーセは失望と怒りしか感じられないところに、希望を見いだした。モーセは、「わたしをとめるな」という神の言葉を、哀願を禁じるのでなくて、それを奨励するものと解した。そして、モーセの祈りだけがイス

ラエルを救い得るものであつて、そのような祈りによつて、神は、ご自分の民をお救いになるものと考えた。「モーセはその神、主をなだめて言った、『主よ、大いなる力と強き手をもつて、エジプトの国から導き出されたあなたの民にむかつて、なぜあなたの怒りが燃えるのでしょうか』」（同・三二ノ一）。

神は、神の民をお捨てになつたことを明らかにされた。神は、彼らのことを「**あなたがエジプトの国から導きのぼつたあなたの民**」とモーセに言われた。しかし、モーセは、心を低くして、自分が指導者であつたことを拒否した。彼らは、モーセのものではなくて、神の民であつた。「大いなる力と強き手をもつて、…導き出されたあなたの民」であつた。「どうしてエジプトびとに『彼は悪意をもつて彼らを導き出し、彼らを山地で殺し、地の面から断ち滅ぼすのだ』と言わせてよいでしょうか」と彼は訴えた（同・三二ノ一、一二）。

イスラエル人がエジプトを出てから数か月の間に、彼らが驚くべき方法によつて救われたことが、周囲のすべての国々に知れ渡つた。異教徒は恐怖と不吉な予感に襲われた。すべてのものは、イスラエル人の神が、その民のためになさることを見守つていた。もしも、彼らが今滅ぼされたならば、敵は勝利をおさめ、神は恥辱をこうむるのであつた。エジプト人は、神が、自分たちの非難どおりに、荒野で犠牲をささげるためではなくて、滅ぼすために神の民を導き出したのだと言ふことであらう。エジプト人は、イスラエル人の罪については考えない。神がこれほどまでに榮譽をお与になつた民を滅ぼすことは、神のみ名をはずかしめることであつた。神から大きな榮譽を受けた者は、この地上で神のみ名に譽れを帰すために、なんと大きな責任が負わせられていることであらう。彼らは、罪を犯してその刑罰を招き、異邦人に神のみ名を汚させることのないように、十分注意しなければならぬ。

モーセは、これまで神の導きのもとにイスラエル人のために多くのことを行なってきた。モーセは、彼らのために深い関心と愛をいだいて嘆願しているうちに、臆する気持ちがなくなった。主は、彼の願いに耳を傾け、彼の無我の祈りをお聞きになった。彼は、そのしもべを試みられたのである。神は彼の忠実さと彼があやまちに陥り、恩を忘れた人々を愛するかどうかを試みられた。そして、モーセは、その試練に耐えたのである。モーセのイスラエルに対する関心は、利己的動機から出たものではなかった。神の選民が栄えることは、彼の個人的榮譽や大国民の父となる特権よりも、彼にとつてたいせつなことであった。神は、モーセの忠実さ、心の素朴さ、誠実さをお喜びになって、彼を忠実な牧羊者として召して、イスラエル人を約束の国に導き入れるという大任命を彼にお与えになった。

モーセは、「契約の石板」を持って、ヨシユアと一緒に山から下って来た。すると彼らは、興奮した群集が、大声でわめいている声を聞いた。いくさびとであったヨシユアは、初め敵の攻撃かと思って、「宿営の中に戦いの声がします」と言った(同・三二ノ一七)。しかし、モーセは、その騒ぎの性質をもっと正確に判断した。その物音は戦いの声ではなく、歌の声であった。「勝どきの声でなく、敗北の叫び声でもない。わたしの聞くのは歌の声である」(同・三二ノ一八)。

彼らが宿営に近づいてみると、人々は偶像のまわりで大声をあげて踊っていた。それは、異教の人々の騒ぐ光景そのもので、エジプトの偶像礼拝をまねたものであった。厳肅でうやうやしく行なわれる神の礼拝と、それはなんと異なっていたことであろう。モーセは全く打ちのめされた感を受けた。モーセは、今、神の栄光のみ前から来たばかりであった。このような事態が起きたことは、知らされていたとは言え、これほどまでに恐ろしく墮

落したイスラエル人の状態を見るとは思っていなかった。彼は激怒した。モーセは、彼らの犯罪に対する大きな憎悪を表わすために、石の板を地に投げ捨て、人々の面前でそれを破壊してしまった。こうして、彼らが神の契約を破ったのと同様に、神の側でも、彼らと結んだ契約を破棄なされたことを示した。

モーセは、宿営の中にはいり、騒いでいる人々の間を通って偶像を取り払い、火にくべて焼いた。あとで、それをこなごなに碎いて山から流れてくる川の上にまき、人々に飲ませた。こうして彼らが拝んでいた神が、全く無価値なものであることを示したのである。

偉大な指導者モーセは、罪を犯した兄弟アロンを呼んで、「この民があなたに何をしたので、あなたは彼らに大いなる罪を犯させたのですか」ときびしく尋ねた(同三二ノ二一)。アロンは、人々の要求が激しく、もし、彼らの願いに応じなければ、自分は殺されてしまったであろうと言って弁解しようとした。「わが主よ、激しく怒らないでください。この民の悪いのは、あなたがごぞんじです。彼らはわたしに言いました、『わたしたちに先立つて行く神を、わたしたちのために造ってください。わたしたちをエジプトの国から導きのぼった人、あのモーセは、どうなったのかわからないからです』。そこでわたしは『だれでも、金を持っている者は、それを取りはずしなさい』と彼らに言いました。彼らがそれをわたしに渡したので、わたしがこれを火に投げ入れると、この子牛が出てきたのです」(同三二ノ二二 二四)。アロンは、火の中に投げ込まれた金が、超自然的力によって、奇跡的に子牛になったかのようにモーセに思わせようとした。しかし、彼の言いわけや弁解は、なんの益にもならなかった。アロンは、当然、罪人のかしらとして扱われた。

アロンが一般の人々よりは、はるかに祝福と栄誉を与えられていたために、彼の罪はそれだけ憎むべきもので



モーセが、ヨシュアと共に山からおりてくると、人々は、金の子牛のまわりで踊っていた。モーセは、彼らの行為を憎むあまり、律法の石板をこわしてしまった。

あった。「主の聖者アロン」が偶像を造り、祭りを布告した(詩篇一〇六ノ一六)。モーセの代弁者として選ばれ、神ご自身が「わたしは彼が言葉にすぐれているのを知っている」と言われた者が、偶像礼拝という神に対する反逆を止めることができなかった(出エジプト記四ノ一四)。アロンは、エジプト人と彼らの神々を罰するために神に用いられた人であった。そのアロンが、「イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である」という布告を鑄物の子牛の前で聞いても平然としていた(同・三二ノ四)。モーセと共に山に行き、そこで主の栄光を見て、その栄光のあらわれは、何一つとして形に現わすことができないことを知ったアロンが、神の栄光を変えて、子牛の像を造ったのである。モーセの不在中、人々の支配を神からゆだねられた者が、人々の反逆を許したのであった。「主はまた、はなはだしくアロンを怒って、彼を滅ぼそうとされた」(申命記九ノ二〇)。しかし、モーセの熱烈な祈りによって、彼は救われた。彼は、自分の大きな罪を悔いて心を低くしたために、再び神の恵みに浴することが許された。

もし、アロンが、どんなことになるうとも正しいことのために立つ勇氣を持っていたならば、彼は背信を防ぐことができたことであろう。もし彼が神に対する忠誠を堅く保ち、シナイにおける危機について人々に語り、彼らが神の律法を守ることを厳肅に神に誓ったことを思い起こさせたならば、この罪悪は止められたことであろう。しかし、彼が人々の希望に同意して、平然と彼らの計画を進めていく姿を見て、彼らは勇氣を増し、以前に計画していたことよりも、さらに大きな罪へと走っていった。

宿営に帰ったモーセが、反逆をきびしく譴責し、激怒して、聖なる律法の板を砕いたことと、彼の兄弟の快い話しぶりと威厳ある態度とは全く対照的で、人々はアロンに同情を示した。アロンは、自分が人々の要求に屈し

た弱さを、人々のせいにして自己を弁護しようとした。それでも人々は、彼の柔和と忍耐に対して尊敬の念をいだいていた。ところが、神は、人とは別の見方をなさる。アロンの譲歩の精神と人の歡心を得ようとする気持ちは彼の目をくらまし、自分がどんなにいまわしい罪を許しているのかを見えなくした。彼がイスラエルに罪を犯させたために、幾千人の命が失われた。これと対照的に、モーセはなんとりっぱな生涯を送ったことであろう。彼は、神のみこころを忠実に実行するとともに、イスラエルが幸福であることを自分の繁栄や榮譽や生命よりもたいせつにしたのである。

神が罰をお与えになるすべての罪のうちで、他の人に悪を奨励することほど、神がきらわれるものはない。どんなにつらいことであっても、忠実に悪を責めて、神に忠誠を尽くすことを、神はそのしもべたちにお望みになる。神からの任命を受ける榮譽に浴したものは、弱い、人の言いなりになるひより見主義者であってはならない。彼らは、自己を高めたり、好ましくない義務を避けたりすることなく、ゆるぐことのない忠誠心をもって、神の働きをしなければならない。

神はモーセの祈りによって、イスラエルを滅びから救われたとはいえ、彼らの反逆は、嚴罰に処せられるべきであった。アロンが許した不法と反抗は、すみやかに鎮圧しなかったならば、いよいよ悪がはびこり、イスラエルの国を取りかえしのつかない滅亡に陥れたことであろう。その罪悪はきびしく罰して除去しなければならなかった。宿営の門に立って、モーセは人々に呼びかけた。「すべて主につく者はわたしのもとにきなさい」(出エジプト記三二ノ二六)。反逆に参加しなかった者は、モーセの右に立ち、反逆はしたが悔い改めた者は左に立つことになった。しかし、子牛を造ることを扇動した寄り集まり人が大部分を占めた大群衆は、頑強に反逆をやめな

かった。そこでモーセは、イスラエルの神、主の名によつて、偶像礼拝に加わらなかった右側にいる者らに、腰につるぎを帯びて、反逆をやめない者をすべて殺すことを命じた。「その日、民のうち、おおよそ三千人が倒れた」（同・三二ノ二八）。悪の指導者は、どんな地位の人でも、親族、友人であろうがみな殺された。しかし、悔い改めて身を低くしたものは救われた。

この恐ろしい刑罰を行なつた者は、神の権威によつて行動し、天の王の宣告を執行したのであつた。人間は、盲目的に同胞を裁いて罰することがあるから注意しなければならない。しかし、神が悪者に対する神の宣告の執行をお命じになるならば、従わなければならない。このつらい行為を行なつたものは、それに従事したことにより、反逆と偶像礼拝に対する憎しみをあらわし、真の神の奉仕にさらに自分たちを献身することを示した。主はレビの部族が忠実であつたことを賞賛し、特別の榮譽をお与えになつた。

イスラエルの人々は、反逆罪を犯した。しかもそれは、彼らに豊かな恵みを賜つた天の王に対してであつた。彼らは、自分から進んで、その王の権威に従うことを誓つていたのであつた。天の統治を維持するためには、反逆者に罰を与えなければならない。ここにおいても、なお、神のあわれみがあらわされていたのである。神は、律法を維持されるとともに、選択の自由、すなわち、すべての者が悔い改める機会をお与えになつた。反逆しつづける者だけが、殺されたのである。

神が偶像礼拝をおきらいになることを周囲の国々に証明するために、この罪を罰する必要があつた。モーセは神の器として、罪を犯した者に罰を与えることにより、彼らの罪に対して公の抗議を厳粛に行なつたことを記録に残さなければならなかつた。その後、イスラエルの人々が、近隣の部族間の偶像礼拝を非難するようになれば

彼らは、主を神とする人々がホレブで子牛を造って礼拝したのではないかと反論してくることであろう。イスラエルは、そのとき、その恥ずかしい事実は認めないわけにはいかなくても、そのときの罪人たちの恐ろしい運命を示し、その罪が承認または黙認されたものでなかった証拠とすることができるのであった。

正義だけでなく、愛もまた、この罪が罰せられることを要求した。神は、神の民の主権者であると同時に、保護者でもあられる。神は、他の者を滅ぼさないようにするために、反抗をやめない者たちを滅ぼされた。神は、カインの命を助けることによって、罪を罰しない結果が何であるかを宇宙にお示しになった。カインの生涯とその教えが、彼の子孫に及ぼした影響は、ついに洪水によって全世界が滅ぼされなければならない状態へと導いた。洪水前の人々の歴史は、長命が罪人にとって祝福ではないことを証明している。神の大きな忍耐も彼らの悪を制することができなかった。長く生きれば生きるほど、彼らは腐敗していった。

シナイでの背信もその通りであつた。すみやかに刑罰が彼らに与えられなかったならば、同じ結果がまた見られたことであろう。全地は、ノアの時と同様に墮落したことであろう。もしも、これらの罪人たちが助かったならば、カインの命が助けられたときの結果以上の害悪が起こったことであろう。幾百万の人々に刑罰が下るようにならないために、数千人が死ぬことは、神のあわれみであつた。多数を救うために、神は少数に罰を与えなければならぬ。そればかりでなく、人々が神への忠順を捨ててしまったために、神の保護を受けることができなくなり、防備が除去されて国全体が敵の勢力下にさらされた。もし彼らが罪悪をすみやかに捨て去らなかつたならば、彼らは直ちに数多くの強敵の餌食になってしまったことであろう。イスラエルの幸福とその後の各世代の幸福のためにも、犯罪はすみやかに罰せられる必要があつた。そして、悪を行なつた罪人の命が絶たれるこ

とも罪人に対するあわれみの情が欠けていたわけではない。もしも、彼らの命が助けられたならば、彼らを神に反逆させた同じ精神が、彼らの間に憎みや争いを起こし、ついには相互に殺し合うようになったことであろう。犯罪がすみやかに、きびしく罰せられたのは、世界に対する愛とイスラエルに対する愛のためであり、罪人に対する愛のためでもあった。

人々が自分たちの罪の恐ろしさに気づいたとき、宿営全体は恐れおののいた。罪を犯した者はみな殺されるものと彼らは恐れた。モーセは、彼らの苦悩をあわれんで彼らのためにもう一度、神に嘆願することを約束した。「あなたがたは大いなる罪を犯した。それで今、わたしは主のもとに上って行く。あなたがたの罪を償うことができるかも知れない」と彼は言った(同・三二ノ三〇)。彼は出かけて行って、神の前に告白して言った。「ああ、この民は大いなる罪を犯し、自分のために金の神を造りました。今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば。しかし、もしかかなわなければ、どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消し去ってください」(同・三二ノ三一、三二)。主はモーセに言われた。「すべてわたしに罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう。しかし、今あなたは行って、わたしがあなたに告げたところに民を導きなさい。見よ、わたしの使はあなたに先立って行くであろう。ただし刑罰の日に、わたしは彼らの罪を罰するであろう」(同・三二ノ三三、三四)。

モーセの祈りの言葉は、われわれに天の記録のことを考えさせる。それにはすべての人の名がしるされ、善悪ともにその行為が正確に記録されている。命の書には、神に奉仕したすべての者の名がしるされている。もしそのうちのだれかが神から離れたり、または、頑強に罪から離れず、ついに聖霊の働きに心を堅く閉じてしまった

りするならば、彼らの名は、審判のときに命の書から消され、滅ぼされてしまう。モーセは、罪人の運命がどんなに恐ろしいものであるかを知っていた。しかし、モーセは、もしイスラエルの人々が主に拒否されるならば、彼らと共に自分の名も消されることを願ったのである。彼は、それほどまでに恵みに満ちた救いにあずかった人の上に、神の刑罰がくだるのを見るにしのびなかったのである。イスラエル人のためのモーセのとりなしは、罪人のためのキリストのとりなしを代表している。しかし主は、キリストが負われたような罪人の罪をモーセが負うことはお許しにならなかった。主は言われた。「すべてわたしに罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであらう」(同・三三ノ三三)。

人々は、深い悲しみのうちに死者を葬った。つるぎで殺された者は三千人であった。間もなく宿営の中に疫病が起こった。そして、こんどは、神が彼らと共に旅してくださいと知らないという知らせがあった。主は言われた。「あなたがたは、かたくなな民であるから、わたしが道であなただがたを滅ぼすことのないように、あなたがたのうちにあって一緒にはのばらないであらう」。そして、「今、あなたがたの飾りを身から取り去りなさい。そうすればわたしはあなたがたになすべきことを知るであらう」という命令が出された(同・三三ノ三、五)。こうして、宿営全体の人々は悲しみに沈んだ。悔い改めとへりくだった思いをもって、「イスラエルの人々はホレブ山以来その飾りを取り除いていた」(同・三三ノ六)。

礼拝の一時的地方として用いられていた天幕が、神の指示に従って、「宿営を離れて」張られた。これは、神が人々の間からお離れになったもう一つの証拠であった。神は、モーセにご自分をあらわされたのであるが、このような人々には、あらわされなかったのである。人々は、この譴責を深く感じ、罪感に苦しむ群衆は、それを

何か大きなわざわいの前兆であるかと考えた。神は、彼らを全滅させるために、モーセを宿営から離されたのではなからうか。しかし、彼らに全く希望がなかったわけではなかった。天幕は、宿営の外に張られたけれども、モーセは、それを「会見の幕屋」と名づけた。真に悔い改め、主に帰ることを願うものは、すべてそこへ行つて彼らの罪を告白し、神のあわれみを求めるようにという指示が与えられた。彼らが天幕に帰ったときに、モーセは、幕屋にはいった。人々は、モーセが自分たちのために行なうとりなしが受け入れられたしるしを、必死になつて見守つていた。もし、神が降りて来られてモーセに会われるならば、彼らは全滅のうきめに会わずにすむという希望がもてたのである。雲の柱が下つてきて、幕屋の入口に立つたときに、人々は喜びの声をあげて泣き、「立つておのおの自分の天幕の入口で礼拝した」（同・三三ノ一〇）。

モーセは、自分にゆだねられた人々の強情なことをよく知つていた。彼は、自分の当面する困難も知つていた。しかし、人々を説き伏せるためには、神の助けがなければならぬことを彼は知つた。彼は、さらに明らかな神のみこころの啓示と神の臨在の確証を祈り求めた。「ごらんください。あなたは『この民を導きのぼれ』とわたしに言いながら、わたしと一緒につかわされる者を知らせてくださいません。しかも、あなたはかつて『わたしはお前を選んだ。お前はまたわたしの前に恵みを得た』と仰せになりました。それで今、わたしももし、あなたの前に恵みを得ますならば、どうか、あなたの道を示し、あなたをわたしに知らせ、あなたの前に恵みを得させてください。また、この国民があなたの民であることを覚えてください」（同・三三ノ一二、一三）。

「わたし自身が一緒に行くであろう。そしてあなたに安息を与えるであろう」という答えが与えられた（同・三

三ノ一四)。しかし、モーセは、まだ満足しなかった。もし神がイスラエルの人々を、かたくなで罪を悔いないままの状態に放任されるなら、恐ろしい結果が生じることを彼は恐れた。彼は、自分が兄弟たちと別に切り離されてしまうことができなかった。そして彼は、神の恵みが神の民に回復されて、神の臨在のしるしが、彼らの旅を導くようになることを祈った。「もしあなた自身が一緒に行かれないならば、わたしたちをここからのぼらせないでください。わたしとあなたの民とが、あなたの前に恵みを得ることは、何によって知られましょうか。それはあなたがわたしたちと一緒にいかれて、わたしとあなたの民とが、地の面にある諸民と異なるものになるからではありませんか」(同・三三ノ一五、一六)。

すると主は言われた。「あなたはわたしの前に恵みを得、またわたしは名をもつてあなたを知るから、あなたの言ったこの事をもするであろう」(同・三三ノ一七)。それでも、モーセは嘆願をやめなかった。すべての祈りはきかれていたが、彼は、さらに大きな神の恵みのしるしを渴望した。彼は、ここで、今までどんな人間もこれまでにしたことのないことを願った。「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示してください」(同・三三ノ一八)。

神は、これを不遜きわまる願いとしてお退けにならず、恵み深い言葉を賜わった。「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ」よう(同・三三ノ一九)。おい隠されていない神の栄光をながめて、生きることのできる人間はこの地上にはいない。しかし、モーセは、彼の耐え得るだけの神の栄光を見ることが約束されたのである。モーセは、再び山の頂に召された。そこで、世界を創造し、「山を移される」(ヨブ記九ノ五)み手が、土のちりから造られた人間であるこの信仰の勇者を、岩の裂けめにおいて、その前に、神の栄光とそのもろもろの善を通らせられた。

神の臨在に関する他のすべての約束にまさって、この経験が前途に横たわる働きに対する成功の確証をモーセに与えた。そして、モーセはエジプトで学んだすべてのこと、また、為政者や、軍の指揮官としての彼のすべての能力よりも、この経験をはるかに大きく評価した。この世のどんな能力や技術や学識であっても、神の臨在の代わりとはならない。

罪人にとつて、生きた神の手に陥ることは恐ろしいことである。しかし、モーセは、永遠の神のみ前にひとりで立ち、なんの恐れも感じなかった。それは、彼の魂が彼の創造主のみこころと一致していたからである。詩篇記者は次のように言った。「もしわたしが心に不義をいだいていたらば、主はお聞きにならないであろう」(詩篇六六ノ一八)。「主の親しみは主をおそれる者のためにあり、主はその契約を彼らに知らせられる」(同・二五ノ一四)。

神は、ご自身こう言われた。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさ」ぬ者(出エジプト記三四ノ六、七)。

「モーセは急ぎ地に伏して拝し」た。モーセは、もう一度、神が神の民をゆるしてくださり、彼らをご自分の嗣業となさるるように嘆願した。彼の祈りは聞かれた。主は、深いあわれみをもつてイスラエルに再び恵みをたまひ、これまで「地のいずこにも、いかなる民のうちにも、いまだ行われたことのない不思議を」彼らのために行なうことを約束された(同・三四ノ八、一〇)。

モーセは、山に四十日、四十夜いた。そして、最初のとくと同様に、彼はこの間も奇跡的にささえられた。だ

れも、彼と一緒に行くことは許されなかった。また、彼の不在中、だれひとり山に近づくことも許されなかった。彼は、神の命令に従って、二つの石の板を用意して、それを山の頂に持って行った。主は再び、「契約の言葉、十誡を板の上に書いた」(同・三四ノ二八)。

こうして長い間、神と交わっている間に、モーセの顔は、神の臨在の栄光を反映していた。モーセは、自分では気づかなかつたが、山から降りて来たとき、彼の顔はあかあかと輝いていた。それと同じ光が裁き人らの前に立ったステパノの顔にも輝いた。「議会で席についていた人たちは皆、ステパノに目を注いだが、彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた」(使徒行伝六ノ一五)。アロンも人々も、モーセを避けてあとずさりした。「彼らは恐れてこれに近づかなかつた」(出エジプト記三四ノ三〇)。何が原因かわからなかったが、彼らがあわてふためいているのを見て、モーセは彼らに近づいて来るように言った。彼は、神の和解の契約を彼らに示し、神の恵みが回復されたことを知らせた。彼らは、モーセの声がただ愛と懇願以外のなにものでもないことを悟ってついに、ひとりの者が勇敢に彼に近づいていった。しかし、あまりの恐ろしさのために、何も言うことができなかった。モーセの顔を指さし、そして、天を指さすだけであつた。大指導者モーセには、その意味がわかつた。彼らは罪を意識していたので、自分たちはまだ神の怒りのもとにあると考え、天の光に耐えることができなかった。ところが、もし彼らが神に服従していたならば、喜びに満たされたことであろう。罪には恐怖がある。罪から解放された魂は、天の光から隠れようとは望まないものである。

モーセは、彼らに多くのことを伝えなければならなかった。そして、彼らの恐怖をあわれんで、顔おいを当てた。そして、その後、神と交わって宿営に帰ってくる時には、いつでもそうすることにした。

神はこの輝きによって、神の律法の清く高尚な性質とキリストによってあらわされる福音の栄光を、イスラエルの人々に強く印象づけようとされた。モーセが山に在る間に、神は律法の板だけでなく、救いの計画をもモーセにお与えになった。モーセは、ユダヤ時代のすべての典型や象徴に、キリストの犠牲が予表されているのを知った。そして、モーセの顔がどのように光り輝いたのは、神の律法の栄光であつたとともに、カルバリーから輝く天からの光でもあつた。この神の光は、目に見えるモーセを仲保者とした時代の栄光の象徴であつた。彼は、ただひとりの真の仲保者キリストを代表していたのである。

モーセの顔に反映した栄光は、キリストの仲保によって、神の律法を守る人々に与えられる祝福を示していた。それは、われわれの神との交わりが密接であればあるほど、神のご要求に対するわれわれの知識も明らかになり、いよいよ神のかたちに近づき、神の性質にあずかることも、ますます容易になる。

モーセは、キリストの型であつた。人々が栄光を見ることができなかったので、イスラエルの仲保者モーセは顔をおいをつけた。そのように、天からの仲保者キリストは、この世界に來られたときに、神性を人性でおおわれたのである。もしもキリストが、天の輝きにつつまれておいでになつたならば、罪深い人間に近づくことはおできにならなかつたことであらう。人々は、彼の臨在の栄光に耐えられなかつたことであらう。そこで、彼は、ご自分を低くして、「罪の肉の樣」になり、墮落した人類のところに来て、彼らを引き上げようとされたのである（ローマ八ノ三）。

律法に対するサタンの敵意

神の律法をくつがえそうとするサタンの最初の努力は、罪を知らない天の住民の間で行なわれ、しばらくのうちは首尾よく成功するかのように思われた。多数の天使たちがそれに迷わされた。しかし、サタンは勝利したかのように思われたものの、その結果は彼の敗北と損失、神からの離反と天からの追放であった。

この戦いが地上で再開されたときも、サタンは、一見優勢であった。人間は罪を犯したために彼に捕えられ、人間の王国もまた、大反逆者の手中に陥ってしまった。こうして、サタンが独立王国を建て、神とそのみ子の権威に反抗する道が開かれたように思われた。しかし、救済の計画が設けられて、人間は再び神と調和し、神の律法に従順な者となり、ついに人間も地球も、悪魔の力からあがなわれることが可能になった。

サタンは再び敗北した。そして、彼は、敗北を勝利に変えようとして、再び人間を欺く手段をとった。サタンは、墮落した人類を神に反逆させようとして、今度は人間に神の律法を犯すことを可能にしたのは、神の不当の処置であると言った。「なぜ神は、その結果がどうなるかを知りながら、人間が試みられ、罪を犯し、悲惨と死

をもたらすことを許されたのか」と言葉巧みに言った。アダムの子孫は、彼らに、再び機会を与えられた忍耐深い神の恵みを忘れ、自分たちの反逆が、天の王にどのような驚くべき大いなる犠牲を払わせたかを考えもせず、誘惑者に耳をかし、サタンの破壊力から自分たちを救うことのできる唯一のおかたに対してつぶやいた。

神に対して同じ反抗的不満をくり返している人々が、今日も大ぜいいる。彼らは、人間から選択の自由を奪うことは、知的存在としての権利を取り去って、人間を単なる機械人形にしてしまうのに等しいことを理解していない。意志を強制することは、神のみ旨でない。人間は自由意志を持った道德的存在として創造された。他の諸世界の住民たちと同じく、人間は、従順か否かの試みを受けなければならない。だが、人間は必然的に悪に負ける立場に置かれているのではない。人間が抵抗できないような誘惑や試練は、一つとして襲ってくるのが許されていない。神が十分の備えをしてくださったから、人間はサタンとの戦いにおいて決して敗北する必要はなかったのである。

人間が地上にふえるにしたがって、ほとんど全世界が反逆の側に加わった。今度も、サタンは勝利を得たように思われた。しかし、全能の力は、再び悪の活動をさえぎり、地上は洪水により道德的墮落から清められた。

「あなたのさばきが地に行われるとき、世に住む者は正義を学ぶ…。悪しき者は恵まれても、なお正義を学ばず、…主の威光を仰ぐことをしない」（イザヤ書二六ノ九、一〇）と預言者は言っている。洪水後がそうであった。地の住民は、神の刑罰から解放されると、再び主に反逆した。この世は、神の契約と定めとを二度も退けた。洪水前の民もノアの子孫も共に天の権威をかえりみなかった。そこで神はアブラハムと契約を結び、律法の保管者となる民族を召された。この民をいざない滅ぼすために、サタンはただちにわなを仕掛けてきた。ヤコブ

の子供たちは異邦の民と結婚し、その偶像の礼拝に加わるように誘惑された。だが、ヨセフは神に忠実であった。彼の忠誠は、真の信仰をたえずあかししていた。サタンがヨセフの兄弟たちにヨセフをねたむ心を起こさせて、彼を異国に奴隷として売らせたのは、この光を消すためであった。しかし、神は、エジプトの民にも神に関する知識が与えられるように、これらのできごとを支配なさった。ヨセフはポテパルの家でも牢獄でも、神を恐れつつ、国家の宰相という高い地位につくにふさわしい教育と訓練を授けられた。彼の感化力は、パロの宮廷から国土全体に及び、神を知る知識は遠く広くゆきわたった。エジプトにいるイスラエル人も繁栄して富裕となり、神に忠実な者はみな広範囲に及ぶ感化を与えた。

偶像に仕える祭司たちは、新しい宗教が人気を博するのを見て驚いた。彼らは天の神に反抗するサタンにそそのかされて、この光を消そうとはかった。王位の継承者の教育は、この祭司たちにゆだねられていた。未来の君主の性格を形成し、ヘブル人を苛酷に圧迫させたのは、断固として神に反対する精神と偶像礼拝熱であった。

モーセがエジプトをのがれてから四十年の間に、偶像礼拝が勝利を得たように思われた。イスラエル人の期待は年々弱まっていった。王も国民も自分たちの力を誇り、イスラエルの神をあざけた。この精神はだんだんとつおり、ついにパロ王がモーセと対決するに及んで頂点に達した。

モーセが「イスラエルの神、主」の言葉をたずさえて王の前に出たとき、王が「主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従（わ）なければならないのか。わたしは主を知らない」（出エジプト記五ノ二）と答えたのは、彼が真の神を知らなかったためではなく、その力に対して反抗していたためであった。パロが天の命令に反対したのは無知のためではなく、徹頭徹尾、憎悪と反抗によるものであった。

エジプト人は、長いあいだ神の知識を退けてきたにもかかわらず、主はなお悔い改めの機会を彼らにお与えになつてゐた。ヨセフの時代には、エジプトはイスラエルの避難所であつた。神の民に好意が示されたことは、神のみ名の栄えであつた。しかし、今や、怒ることおそく、あわれみに富む寛容な神も、災害を次々に送られることになつた。エジプト人は、自分たちの押んでいた対象そのものによつて、苦しめられ、主の力の証拠を示された。そして、望む者はみな神に従つて刑罰をのがれることができた。王の強情と頑迷が神のことを広く伝える結果になり、多くのエジプト人が神に仕えるようになった。

イスラエル人は、異邦人と結合し、その偶像礼拝をまねる傾向が強かつた。そこで、神はヨセフの感化が広くゆきわたり、彼らが独自の民族として存続するのに好都合なエジプトに、彼らが下つていくのを許された。ここで、ヘブル人は、エジプト人の偶像礼拝の墮落とエジプト滞在期間後半の残酷なとりあつかいと圧制の結果、偶像礼拝に嫌悪感をいだき、先祖の神のもとにのがれたいと思うようになるはずであつた。サタンは、こうした摂理そのものを、自分の目的達成のために利用して、イスラエル人の心を暗くし、彼らに異邦の教師の風習を模倣させた。エジプト人は動物を迷信的に尊重していたために、ヘブル人は奴隷生活をしている間、いけにえの供え物をささげることが許されなかつた。こうして、彼らの思いは、犠牲をささげることによつて、偉大なるいけにえキリストに向けられることもなく、彼らの信仰は弱まつた。イスラエル解放のときがくると、サタンは強硬に神の意志に反抗した。彼はなんとしても、二百万人以上をかぞえるこの大いなる民族を無知と迷信の中に閉じ込めておきたかつた。神が祝福してその数をふやし、地上の強国にすると約束された民、そして、神がご自分のみこころを人々に知らせるために用いようとされた民、すなわち、神が律法の保管者にしようとされたというそう

いう人々を、サタンは暗黒と束縛の中に置き、彼らの心から神の記憶をぬぐい去ろうとつとめた。

王の前で奇跡が行なわれたとき、サタンはその場にいて、その力に対抗し、パロが、神の至上権を認めて、その命令に従わないようにしていた。サタンは力のかぎりを尽くして神のわざを模倣し、そのみ旨に抵抗した。しかしながら、その結果はただイスラエル人に対しても、全エジプト人に対しても、神の力と栄光がさらに輝かく現わされることになり、生きた真の神の存在とその主権をいつそう明瞭にしたにすぎなかった。

神は、ご自分の力を強力にあらわすと共に、エジプトのすべての神々に刑罰を下してイスラエルを解放された。「こうして主はその民を導いて喜びつつ出て行かせ、その選ばれた民を導いて歌いつつ出て行かせられた。…

これは彼らが主の定めを守り、そのおきてを行うためである」（詩篇一〇五ノ四三 四五）。神は、彼らをよい国へ導くために、奴隷の状態からお救いになった。神は摂理のうちに敵をさける避難所として、国土を彼らのために備えて、彼らがみ翼のかげに宿ることのできるようにされた。神は彼らをご自分に引き寄せ、永遠のみ腕で囲みたいと望まれた。そして、彼らがその恵みとあわれみにこたえて、生きた神の前に他のいかなる神々をも持たず、み名を高め、これを地上に輝かすことを求めになった。

エジプトの奴隷であった間に、イスラエル人の多くは、全くと言っていいほど神を忘れ、その戒めを異邦の習慣や伝統と混合してしまっていた。神は彼らをシナイに導き、そこでご自分の声で律法を宣言された。

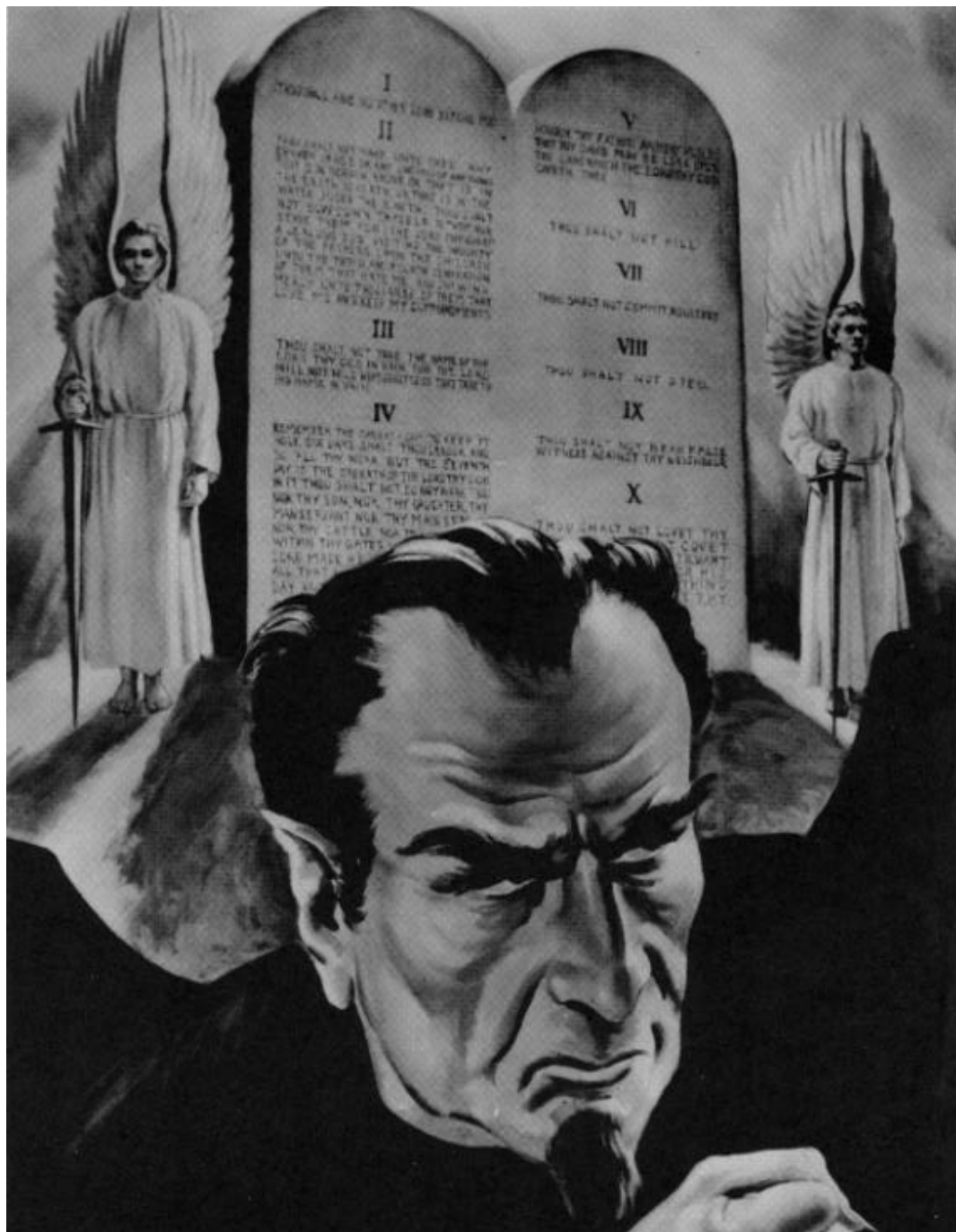
サタンと悪天使たちは地上にいた。神が民に律法を宣言しておられるあいだでさえ、サタンは彼らを罪にいざなおうとたくらんでいた。彼は神が選ばれたこの民を、天の神の面前で屈伏させてしまおうといていた。彼は、彼らを偶像崇拜に陥れることによって、すべての礼拝のもつ力を破滅させようとしていた。なぜなら、自分より

高くないもの、自分の手のわざによつて象徴され得るものをあがめることによつて、人間はどうして高められることができるであろうか。もし、人々が刻んだ像や獣や爬虫類の形で、神をあらわそうとするほどに、無限の神の力と威厳と栄光に対して盲目になり、創造主のみかたちに造られた人間がこれらのいまわしい無意味な対象にぬかずくほどに、主と自分たちの関係を忘れてしまふならば、邪悪な放縦の道が開かれ、心のよこしまな欲情のおもむくままに、サタンの完全な支配に服してしまふ。

サタンは、シナイの山麓から、神の律法をくつがえす計画の實行にかかり、こうして天で始めたのと同じ働きを押し進めた。モーセが神と共に山にいた四十日の間、サタンは忙しく働いて、疑惑と背信と反逆をひき起こしていた。神が契約の民に託すべき律法を書きしるしておられるあいだに、イスラエル人は主への忠誠を拒んで、金の神々を要求していた。民が守ることを誓った律法の戒めを手にして、モーセが神の栄光の恐るべき臨在から出てきたとき、彼らはその戒めに公然と反抗して、金の偶像の前にぬかずいて礼拝していた。

サタンは主なる神に対するこの大胆な侮辱と冒瀆に、イスラエルを誘い込むことによつて、彼らの滅亡を招こうと計画していた。彼らがこれほどにも墮落し、神から与えられた特権と祝福の目ざめと、そして、自分たちがくり返し厳肅に誓った忠誠を全く忘れてしまったのであるから、主は彼らを捨て去つて、滅ぼしてしまわれるだろうとサタンは考えた。こうして、生きた神の知識を保存する約束のすえ、アブラハムのすえは滅ぼされてしまい、サタンを征服することになっていた真のすえであられるかたが来ないように彼は願ったのである。大反逆者はイスラエルを滅亡させ、それによつて神のみ旨の遂行を妨げようと考えていた。だが、またしても彼は敗北した。イスラエルの民は罪深くはあつたが滅ぼされなかつた。頑強にサタンにくみした者たちは絶たれたが、へり

第 29 章 律法に対するサタンの敵意



天で大争闘が起こって以来、人々に神の品性と統治とを誤解させ、神の律法に反逆させようとするのがサタンのかねてからの目的であった。

くだって悔い改めた民は、あわれみによつて許された。この罪の歴史は、偶像礼拝の罪とその罰、また、神の公正と忍耐深いあわれみを、末長くあかししている。

全宇宙がシナイの光景をながめていた。この二つの統治の方法が示されたことによつて、神の統治とサタンの統治の対照が明らかにされた。今一度、罪を知らない他の世界の住民たちは、サタンの背信の結果を見、かつ、彼の支配が行なわれた場合に天に樹立されたであろうと思われる統治がどんなものかを見たのであつた。

人々に第一の戒めを犯させることにより、サタンは、神に対する彼らの觀念を墮落させようと思つた。彼は第四の戒めを人々の念頭から取り去ることによつて神を全く忘れさせようとした。異邦の神々にまさつて崇敬と礼拝を神がお求めになるわけは神が創造者であり、その他のものはみな神に創造されて存在するからである。聖書には、このようにしるされている。預言者エレミヤは言う、「主はまことの神である。生きた神であり、永遠の王である。…天地を造らなかつた神々は地の上、天の下から滅び去る。…主はその力をもつて地を造り、その知恵をもつて世界を建て、その悟りをもつて天をのべられた。」「すべての人は愚かで知恵がなく、すべての金細工人はその造つた偶像のために恥をこうむる。その偶像は偽り物で、そのうちに息がないからだ。これらは、むなしきもので、迷いのわざである。罰せられる時に滅びるものである。ヤコブの分である彼はこのようなものではない。彼は万物の造り主だからである」(エレミヤ書一〇ノ一〇 一一、一四 一六)。神の創造力の記念である安息日は、天地の造り主としての神をさし示す。したがつて、それは創造者の存在を絶えずあかしし、その偉大さ、その知恵、その愛を思い起こさせる。もし安息日がいとも清く守られていたなら、無神論者や偶像礼拝者などはあり得なかつたことであらう。

エデンで設けられた安息日の制度は、世界の誕生と共に古い。それは創世以来、すべての父祖たちが順守してきたものである。エジプトの奴隷時代には、イスラエル人は工事監督にいられて、やむを得ず安息日を破った。そして、彼らはその神聖さをおかた見失ってしまった。律法がシナイで宣言されたとき、第四の戒めの最初は「安息日を覚えて、これを聖とせよ」という言葉であつて、安息日がそのとき制定されたのではないことを示している。その創設は創造にまでさかのぼる。人々の心から神を消し去るために、サタンはこの偉大な記念をくずそうとした。人々をいざなつて創造主を忘れさせることができれば、彼らは悪の力に抵抗しなくなり、サタンは確実に獲物を捕えることができたのであつた。

サタンは、神の律法に対する敵意をいだいていたから、十誡の一つ一つの戒めに対して戦いをいどんだ。すべてのものの父である神を愛し、これに忠誠を尽くすという大原則と、子が親を愛しこれに従順を尽くすという原則とは密接に関連している。親の権威を侮れば、やがて、神の権威を侮るようになる。したがって、サタンは第五条の義務を軽減しようと努力した。異邦民族のあいだでは、この戒めの原則はほとんど守られていなかった。多くの国々において、年をとつて自分の世話ができなくなった親は、捨てられたり、殺されたりした。家族の中で母親は尊ばれず、夫が死ぬと、彼女は長男の権威に従わなければならなかった。子は、親に従順であるべきことをモーセは命じた。しかし、イスラエル人が主から離れたとき、第五条も他の戒めと共に無視されるに至った。サタンは「初めから、人殺しであつた(ヨハネ八ノ四四)」。彼は、人類を支配する力を得るやいなや人々を互いに憎み、殺させたばかりでなく、彼らをいっそう大胆に神の権威に反抗させ、第六条を破ることを彼らの宗教の一部とした。

神の性質をゆがんで考えたために、異邦民族は、神の恵みを得るには人身御供が必要だと信ずるようになった。そして、最も恐るべき残虐がいろいろな形の偶像礼拝のもとで行なわれてきた。その一つは、偶像の前で自分の子供たちに火の中をくぐらせる風習であった。子供たちのなかで、この試練から無傷で出てくることができたと、民は自分たちの供え物が受け入れられたと信じた。このようにして出てきた者は、神々から特に恵まれた者とみなされて種々の恩典を与えられ、以後は大いに尊重され、どんな大きな犯罪を犯しても処罰されることはなかった。しかし、火の中をくぐるあいだにやけどをした者の運命は定まっていた。神々の怒りは、そのいけにえの生命を奪わなければしきまらなと信じられていた。したがって、その子は、犠牲としてさげられた。背信のはなはだしかった時代には、こうした憎むべきことが、ある程度イスラエル人のあいだにも行なわれていた。

第七条を犯すこともまた、古くから宗教の名において行なわれていた。最もみだらな忌むべき儀式が、異邦の宗教の一部とされた。神々自身が不道德なものとしてあらわされ、その礼拝者は、低級な欲望をほしいままにしていた。男色が広く行なわれ、祭りのときにはだれもが公然と不道德なことをした。

一夫多妻は、ごく初期から行なわれていた。それは洪水前の世界に神の怒りを招いた罪のひとつであった。だが、洪水後それは再び広く行なわれた。サタンは、とりわけ結婚制度をゆがめ、その義務を弱め、その神聖さを減ずることに力を入れた。というのは、人間のうちにある神のかたちをそこない、悲惨と悪徳に戸を開くのに、これほど確実な方法はなかったからである。

大争闘の初めから、神の性格を誤解させ、その律法に反逆させることがサタンの意図したところであった。そして、これはみごとに成功しているように見える。多数の者がサタンの欺瞞に耳を貸し、神に反逆している。し

かし、悪の働きのただ中であつて、神のみ旨は着実に完成をめざして前進する。神は、すべての造られた者に、ご自分の公義と慈愛を明らかにしておられる。サタンの誘惑によつて全人類は神の律法を犯す者となつた。だごみ子の犠牲によつて彼らが神に立ち帰る道が開かれた。キリストの恩恵を通して彼らは天父の律法に従うことができるようにされる。このように、いつの時代にも神は背信と反逆のただ中から、ご自分に忠実な一つの民「心のうちにわが律法をたもつ」民(イザヤ書五一ノ七) をお集めになる。

サタンは、欺きによつて天使たちをいざなつた。彼は、いつの時代にも人々の間で、同じような方法で彼の仕事を進めてきた。そして、彼は最後までこの方針を続けるであろう。もし、サタンが公然と、神とその律法に戦いをいどんでいることを表明すれば、人々は警戒するであろう。しかし、彼は自分の本性を隠し、真理と誤謬とを混ぜ合わせている。最も危険な偽りは、真理と混ぜ合わせられたものである。こうして人々は誤りを受け入れて魂を捕えられ破滅に陥る。この方法によつて、サタンは世界を自分の側に引き入れている。だが、彼の勝利が永遠に終わる日が来ようとしている。

反逆に対する神の処置の結果、長い間ひそかに進められてきた仕事のおおいが完全に取りのぞかれる。サタンの支配の成果と神の定めを無視した結果は、すべての造られた者の前に明らかにされるであろう。神の律法は完全に擁護される。神の処置はことごとく、ご自分の民の永遠の幸福と、神が造られたすべての世界の幸福のためにとられたものであることが理解される。サタン自身も宇宙の見守る中で、神の統治の公正とその律法の正義を告白する。

神が立ちあがつて、これまで侮られてきたご自分の権威を擁護される時は遠い先ではない。「主はそのおられ

る所を出て、地に住む者の不義を罰せられる。」「その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう」(イザヤ書二六ノ一二、マラキ書三ノ一二)。神が山に下って律法を宣言されたとき、イスラエルの民は、その罪深さのために神の臨在の輝く栄光によつて焼き尽くされることのないように、そこに近づくことを禁じられた。神の律法を宣言するために選ばれた場所に、こうした神の威光があらわれたとすれば、主が、これらの清い律法を執行するために来られる審判は、どんなに恐るべきものであるう。主の権威をふみにじってきた者たちは、最後の報復の大いなる日に、どうしてその栄光に耐え得よう。シナイの恐怖は最後の審判の光景をあらわすものであった。ラツパが鳴り響いて、イスラエルは、神と会うために召集された。天使のかしらの声と神のラツパの音が、全地から、生きている者と死んだ者を審判者の御前に召し集めるのである。大ぜいの天使を伴った天父とみ子が、シナイ山の上に臨在された。大いなる審判の日には、キリストが「父の栄光のうちに、御使たちを従えて来る」(マタイ一六ノ一七)。そのとき、キリストは、栄光のみ座につき、その前にあらゆる国民が集められる。

神の臨在がシナイで現わされたとき、主の栄光は全イスラエルの目の前で焼き尽くす火のようであった。しかし、キリストが聖天使たちを従えて栄光のうちに来臨されるとき、全地はその臨在の恐るべき光で燃えるように明るくなるであらう。「われらの神は来て、もたされない。み前には焼きつくす火があり、そのまわりには、はげしい暴風がある。神はその民をさばくために、上なる天および地に呼ばわれる」(詩篇五〇ノ三、四)。彼の御前から火の流れがほとばしり出て、天は燃えくずれ、地と、その上に造り出されたものもみな焼き尽くされる。「それは、主イエスが炎の中で力ある天使たちを率いて天から現れる時に実現する。その時、主は神を認めない

者たちや、…福音に聞き従わない者たちに報復」される(テサロニケ第二・一ノ七、八)。

人間が創造されて以来、シナイで律法が宣言されたときのような神の力のあらわれは、他では見ることができない。「シナイの主なる神の前に、イスラエルの神なる神の前に、地は震い、天は雨を降らせました」(詩篇六八ノ八)。自然界の恐怖すべき激動のさなかに、神の声がラッパの音のように雲の中から聞こえてきた。山はふもとから頂まで震え、イスラエルの民は恐怖で青ざめ、震えながら地上にひれ伏した。このようにみ声をもつて地を揺り動かされた主は、今、宣言しておられる。「わたしはもう一度、地ばかりでなく天をも震わそう」(ヘブル一二ノ二六)。また、聖書はこうしている。「主は高い所から呼ばわり、その聖なるすまいから声を出し」、「天も地もふるい動く」(エレミヤ書二五ノ三〇、ヨエル書三ノ一六)。来たるべきその大いなる日に、天そのものも「巻物が巻かれるように」姿を消す(黙示録六ノ一四)。すべての山々島々は、その場所を動かされる。「地は酔いどれのようによるめき、仮小屋のようにゆり動く。そのとがはその上に重く、ついに倒れて再び起きあがることはない」(イザヤ書二四ノ二〇)。

「それゆえ、すべての手は弱り、すべての顔は「青く変っている。」「すべての人の心は溶け去る。彼らは恐れおのき、苦しみと悩みに捕えられ」る。「わたしはその悪のために世を罰し、…高ぶる者の誇をとどめ、あらぶる者の高慢を低くする」と主は言われる(イザヤ書一三ノ七、エレミヤ書三〇ノ六、イザヤ書一三ノ七、八、一一)。

モーセが、あかしの板を受けて神の臨在のもとから山を下ってきたとき、罪あるイスラエルは彼の顔を輝かしている光に耐えられなかった。まして、律法を犯し、贖罪を拒んだ者の審判のために、全天の万軍に囲まれ、父

の栄光に包まれて現われる神のみ子を、罪人たちはどうして仰ぐことができるであろう。神の律法を軽視し、キリストの血を足の下に踏みにじった者たち、「地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者」はみな「ほら穴や山の岩かげに」身を隠し、山と岩とに向かって言う、「われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だが、その前に立つことができようか」(黙示録六ノ一五、一六、一七)。「その日、人々は…しろがねの偶像と、こがねの偶像とを、もぐらもちと、こうもりに投げ与え、岩のほら穴や、がけの裂け目にはいり、主が立って地を脅かされるとき、主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける」(イザヤ書二ノ二〇、二二)。

そのとき、神に対するサタンの反逆は、彼自身の滅びと、彼の側につくことを選んだすべての者の滅びに終わったことが明らかとなる。彼は、罪を犯すことによって大きな幸福を味わうことができると主張してきた。だが「罪の支払う報酬は死である」ことが明らかとなる(ローマ六ノ二三)。「万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない」(マラキ書四ノ一)。あらゆる罪の根であるサタンと、その枝である悪者たちとは全く絶ち滅ばされる。罪は終わりを告げ、それから生じたわざわいと滅びもなくなる。詩篇作者は言っている、「あなたは…悪しき者を滅ぼし、永久に彼らの名を消し去られました。敵は絶えはてて、とこしえに滅び…ました」(詩篇九ノ五、六)。

しかし、神の審判のラッパを聞いても、神の子らには恐れをいだく理由がない。「主はその民の避け所、イスラエルの人々のとりでである」(ヨエル書三ノ一六)。神の律法を犯す者に恐怖と滅亡をもたらすその日が、従順

な者には「言葉につくせない、輝きにみちた喜び」を与える(ペテロ第一・一ノ八)。主は「いけにえをもつてわたしと契約を結んだわが聖徒をわたしのもとに集めよ」と言われる。「天は神の義をあらわす、神はみずから、さばきぬしだからである」(詩篇五〇ノ五、六)。

「その時あなたがたは、再び義人と悪人、神に仕える者と、仕えない者との区別を知るようになる」(マラキ書三ノ一八)。「義を知る者よ、心のうちにわが律法をたもつ者よ、わたしに聞け。」「見よ、わたしはよろめかす杯をあなたの手から取り除…いた。あなたは再びこれを飲むことはない。」「わたしこそあなたを慰める者だ」(イザヤ書五一ノ七、二二、一二)。「山は移り、丘は動いても、わがいつくしみはあなたから移ることなく、平安を与えるわが契約は動くことがない」とあなたをあわれまれる主は言われる」(イザヤ書五四ノ一〇)。

贖罪の大いなる計画は、この世界を完全に神の恵みのもとに引きかえす。罪によって失われたすべてのものが回復される。人間ばかりでなく、地も贖われて、従順な者たちの永遠のすみかとなる。六千年のあいだ、サタンは地の所有を維持しようと努力してきた。だが、今や創造当初の神の主旨が完成される。「いと高き者の聖徒が国を受け、永遠にその国を保って、世々かぎりなく続く」(ダニエル書七ノ一八)。

「日いずるところから日の入るところまで、主のみ名はほめたたえられる」(詩篇一一三ノ三)。「その日には、主ひとり、その名一つのみとなる。」「主は全地の王となられる」(ゼカリヤ書一四ノ九)。聖書は言う、「主よ、あなたのみ言葉は天においてとこしえに堅く定まり」、「すべてのさとしは確かである。これらは世々かぎりなく堅く立」つ(詩篇一一九ノ八九、一一一ノ七、八)。サタンが憎んで滅ぼそうとした聖なるおきては、罪のない宇宙であがめられる。そして、「地が芽をいだし、園がまいたものを生やすように、主なる神は義と誉とを、もろ

もろの国の前に生やされる」(イザヤ書六二ノ一二)。

幕屋の制度と儀式

本章は、出エジプト記二五 四〇章、レビ記四、一六章に基づく。

モーセが山で神と共にいたときに、「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである」(出エジプト記二五ノ八)という命令がくだされ、幕屋の建築についてあますところなく指示が与えられた。イスラエル人は、背信によって神の臨在の祝福を失い、そのためしばらくの間、彼らのあいだに神のための聖所を建てることは不可能となった。だが、彼らが再び神の恵みを受けるようになってから、偉大なる指導者モーセは、この神の命令の実現に着手した。

選ばれた人々は、神聖な建物の建設に必要な技能と知恵を神から特別に与えられていた。その大きさと形、使用する材料、内部の造作に関する細かい指示を含めたその構造設計は、神ご自身がモーセにお与えになった。手で造られる幕屋は、「ほんとうのものの模型」「天にあるもののひな型」(ヘブル九ノ二四、一三三) われわれのたいなる大祭司キリストが、ご自分の生命を犠牲となさった後で、罪人のために奉仕なさる天の神殿のひな型であった。神は、山でモーセの前に天の聖所の光景を示し、すべてのものを示された通りに造ることを命じられ

た。モーセはこれらのすべての指示を慎重に記録し、それを民の指導者たちに伝えた。

聖所の建築には、多額の費用を要する準備が必要であった。貴重で高価な材料が、大量になければならなかった。しかし、主は、心からのささげ物だけをお受けになった。モーセは「すべて、心から喜んでする者から、わたしにささげる物を受け取りなさい」という神の命令を民に伝えた(出エジプト記二五ノ二)。まず初めに神への献身と犠牲の精神が、いと高き者のすみかを造るために要求された。

民はみな、いっせいにこれに応じた。「すべて心に感じた者、すべて心から喜んでする者は、会見の幕屋の作業と、そのもろもろの奉仕と、聖なる服とのために、主にささげる物を携えてきた。すなわち、すべて心から喜んでする男女は、鼻輪、耳輪、指輪、首飾り、およびすべての金の飾りを携えてきた。すべて金のささげ物を主にささげる者はそのようにした」(同・三五ノ二一、二二)。

「すべて青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸、やぎの毛糸、あかね染めの雄羊の皮、じゅごんの皮を持っている者は、それを携えてきた。すべて銀、青銅のささげ物をささげることのできる者は、それを主にささげる物として携えてきた。また、すべて組立ての工事に用いるアカシヤ材を持っている者は、それを携えてきた。

また、すべて心に知恵ある女たちは、その手をもって紡ぎ、その紡いだ青糸、紫糸、緋糸、亜麻糸を携えてきた。すべて知恵があつて、心に感じた女たちは、やぎの毛を紡いだ。

また、かしらたちは縞めのおよびエポデと胸当にはめる宝石を携えてきた。また、ともしびと、注ぎ油と、香ばしい薫香のための香料と、油とを携えてきた」(同・三五ノ二三 二八)。

聖所の建設が進んでいるあいだも、老若の民は——男も女も子供も——ささげ物を続々と持参したので、工事

の監督たちは、もうこれで十分集まり、使いきれないほどになったと考えるほどであった。そこで、モーセは宿営中にふれさせた。『男も女も、もはや聖所のために、さざげ物をするに及ばない』。それで民は携えて来ることをやめた（同・三六ノ六）。イスラエル人のつばやきと、彼らの罪のためにくだった神の刑罰とは、後世への警告として記録されている。また、彼らの献身と熱意と物惜しみしない心とは、われわれが大いに学ぶべき模範である。すべて神の礼拝を愛し、その聖なる臨在の祝福を重んじる者は、神が彼らと会う家を建てるにあたつて同じ犠牲の精神をあらわす。彼らは自分の所有する最善のものをさざげ物として主のもとに携えてきたいと望む。神のために建てられた家は、負債を負つたまま放任しておいてはいけない。それは、主のみ栄えではないからである。ちょうど幕屋の建設者たちのように、工事にたずさわる者が、「もうさざげ物を持ってこなくてもよい」と言うことができるように、工事を完成するに十分の額が豊かにさざげられるようになってはいけない。

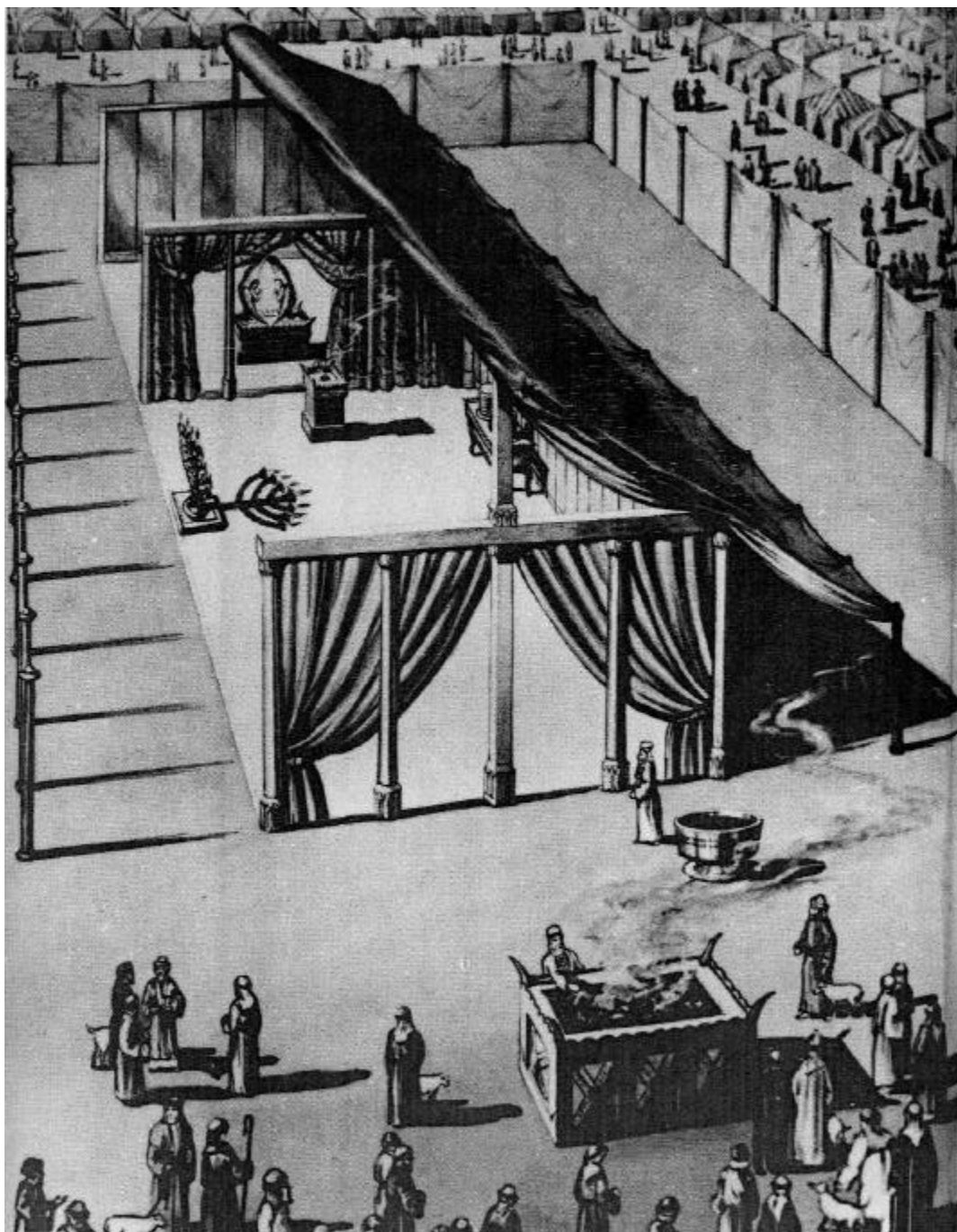
幕屋はイスラエル人が旅をするときは、取りはずして持ち運びができるように建設された。従つて、それは小さく、長さが五五フィート、幅と高さが一八フィートほどのものであった。だが、それは壮麗な構造であった。建物とその造作に用いられた木材は、シナイで手に入れられるどんな木材よりも腐朽しにくいアカシヤ材であった。壁は銀の台にすえられ、柱と横木で結び合わされた立て板であるが、金でおおわれているために、見たところ全体が金のものであった。屋根は四組の幕から成り、最も内側のものが「亜麻の撚糸、青糸、紫糸、緋糸で造り、巧みなわざをもって、……ケルビムを織り出したものであった（同・三六ノ八）。他の三組はそれぞれ、やぎの毛糸、あかね染めの雄羊の皮、じゅごんの皮でできていて、完全な防護となるように配列されていた。

建物は、金でおおった柱からたれ下がった豪華な幕、すなわち、とばりによって二つの部屋に分けられていた。

そして、同じようなとばりが第一の部屋の入口を閉ざしていた。これらは、天井となっている内部のおおいと同じく、青系、紫系、緋系などのはなやかな色彩で美しく飾られていた。そこには、天の聖所のつとめに関係があるとともに、地上の神の民に仕える霊である天使の群れを代表するケルビムが、金系、銀系によって織り込まれていた。

聖なる幕屋は、庭と呼ばれる広場に囲まれており、その庭には、青銅の柱につるされた亜麻のたれ布、すなわち、囲いが張りめぐらされていた。この囲いの入口は東端にあった。そこは、聖所の幕には劣るものの、やはり高価な材料で美しく作られた幕で閉ざされていた。庭のたれ布は、幕屋の壁のおよそ半分の高さがなかった。で、建物は外側の人々からよく見えた。庭の中には、入口に近いところに、燔祭のための青銅の祭壇があった。この祭壇の上で、すべての犠牲は火に焼かれて主にささげられ、その角には贖いの血が注がれた。祭壇と幕屋の戸口との間には、イスラエルの女たちが心からささげた鏡によって造られた、同じく青銅の洗盤があった。祭司たちは聖所にはいつて行くときや、主に燔祭をささげるために祭壇に近づいたりするときには、いつもこの洗盤で手と足を洗わなければならなかった。

第一の部屋、すなわち聖所には、供えのパンの机、燭台、香の祭壇があった。供えのパンの机は、北側に置かれていた。それは、上部に飾りが施され、純金でおおわれていた。この机に、祭司は安息日ごとに乳香をふりかけた十二個のパンを二段に重ねて置いた。取りのけたパンは聖なるものとみなされ、祭司がこれを食べた。南側には、七本に分かれて七つのあかりをともした燭台があった。その枝には精巧に細工したゆりに似た花の装飾が施され、全体はひとかたまりの金塊によって作られていた。幕屋には窓がなかったために、あかりは一度に全部



幕屋は、ふたつのへやから成り、中に、契約の箱、金の香壇、金の燈台、供えのパンの机などが納められていた。

消されることはなく、昼夜の別なく光を放っていた。至聖所と神の面前から聖所を隔てているとばりのすぐ前には、金の香の祭壇が置かれていた。祭司は、この祭壇で朝夕香をたき、その角には罪祭の血をつけなければならなかった。そして、この祭壇には大いなる贖罪の日に血が注がれた。この祭壇の火は、神ご自身によって点じられ、大切に保存された。清い香は、日夜聖所の二つの部屋とその回り、そして幕屋の遠くにまで芳しいかおりを放った。

内部のとばりの奥は至聖所であつたが、これが贖罪と仲保との象徴的奉仕の中心であり、また、天と地をむすぶ輪であつた。この部屋には、内も外も金でおおわれたアカシヤ材の箱があつて、その上の周囲に金の飾り縁があつた。それは、神ご自身がしるされた十誡の石の板を収めるために作られたものであつた。十誡は神とイスラエルの間に立てられた契約の基盤であつたことから、これは神の契約の箱と呼ばれた。

この聖なる箱のふたは、贖罪所と呼ばれた。これは一つの金塊から作られ、その両端には金のケルビムが立っていた。これらの天使の一方の翼は高く伸ばされ、もう一方の翼は崇敬とけんそんをあらわして自分のからだをおおっていた(エゼキエル書一ノ一一参照)。

互いに向かい合い、敬虔に箱を見下すこのケルビムの姿勢は、天の万軍が神の律法に対していだいている崇敬の念と、贖罪の計画に対する関心をあらわしていた。

贖罪所の上方には、神の臨在のあらわれであるシェキナーがあつた。神は、ケルビムの間からみころをお知らせになった。神のお告げは時として、雲からの声によつて大祭司に伝えられた。また、時として、承認もしくは受容をあらわすために光が右側の天使を照らし、不賛成もしくは拒否をあらわすために、影もしくは雲が左

側の天使をおおうこともあった。

箱におさめられた神の律法は、義と審判の大原則であった。この律法は違反者に死を宣告した。だが、律法の上には贖罪所があり、そこに神の臨在があらわされ、また、そこから、贖罪によって、悔い改めた罪人にゆるしが与えられた。こうしてわれわれの贖いのためのキリストのみわざが、聖所の奉仕のなかで象徴され、「いつくしみと、まこととは共に会い、義と平和とは互に口づけ」したのである(詩篇八五ノ一〇)。

幕屋の内部の光景の輝かしさは、どんな言葉をもつてしても描写することができない。金の燭台の光を反射する金張りの壁、きらびやかにししゅうした、天使の浮き出るたれ幕のまばゆい色合い、金色に輝く机と香の祭壇、そして第二のとばりのむこうには、聖なる箱と神秘的なケルビム、その上方の主の臨在が目に見える形であらわされる、聖なるシェキナー。だが、このすべては人間の贖いのわざの中核である、天にある神の神殿の栄光をおぼろげに反映するものにすぎない。

幕屋の建築には、約半年を要した。これが完成したとき、モーセは建築した人々の工事をことごとく点検し、これを彼が山で示された型と、神から受けた指示に照らし合わせた。「彼らは主が命じられたとおりに、それをなしとげていたので、モーセは彼らを祝福した」(出エジプト記三九ノ四三)。大ぜいのイスラエルの民は聖なる建物を見ようとして、非常な興味をもつて群がってきた。彼らが、敬虔な満ち足りた気持ちでこれに見入っているときに、雲の柱が幕屋の上にたなびき、その上にくだり、これを包んだ。そして「主の栄光が幕屋に満ちた」(同・四〇ノ三四)。ここに神の威光があらわされ、しばらくの間、モーセも中にはいることができなかった。民は、彼らの手のわざが受け入れられたしるしを感慨深く見つめていた。人々は、歓喜の声を上げたりはしなかった。

厳肅な畏怖がすべての者を包んでいた。だが、心の喜びは涙となってあふれ、神が降りてこられて、自分たちと共にお住みになることの感謝が、低くはあったが熱のこもったささやきとなったのである。

神の指示により、レビ人が聖所の奉仕のために選ばれた。ずっと初期のころには、すべての男子が自分の家族の祭司であった。アブラハムの時代には、祭司職は長男の生まれながらの権利とみなされていた。しかし、主はここで聖所の務めのために、全イスラエルの長子の代わりに、レビ族をお受け入れになった。神は、この特別の榮譽を与えることによって、彼らが忠実に主に仕えたことと、イスラエルが金の小牛を拝んで背信したときに、主のさばきを忠実に果たした彼らの忠誠を認めたことをあらわされた。しかし、祭司職は、アロンの家だけにかぎられていた。アロンとその子らだけが主の前で仕えることをゆるされた。レビ族のその他の者たちには幕屋とその備品に関する責任がゆだねられた。そして、彼らは奉仕にたずさわる祭司に付き添うことはできたが、いけにえをささげたり、香をたいたり、おおいをかぶせていない清い備品を見たりすることは許されなかった。

祭司にはその職務に従って、特別の衣服が定められた。「あなたの兄弟アロンのために聖なる衣服を作って、彼に栄えと麗しきをもたせなければならぬ」という指示がモーセに与えられた(同・二八ノ二)。普通の祭司の衣服は白亜麻で、一つ織りになっていた。すそは足の近くまでたれ下がり、腰は青糸、紫糸、赤糸でししゅうをほどこした白亜麻の帯で結ばれていた。このほかに亜麻布のかぶり物、すなわち帽子がついて、彼らの服装はそろったのである。モーセは、燃えるしばのところで、彼の立っている場所は聖であるからくつを脱ぐようにと命じられた。そのように、祭司も足にくつをつけたまま聖所にはいることはできなかった。足についているちりでさえ、清い場所の神聖を汚すのである。彼らは聖所にはいる前に庭でくつを脱ぎ、また幕屋や燔祭の祭壇で仕え

る前に、手足を洗わなければならなかった。こうして、神の御前に近づこうとする者からは、あらゆる汚れが取り除かれなければならないことが、たえず教えられた。

大祭司の衣服は、その高い地位にふさわしく、高価な材料で美しく作られていた。一般の祭司の着る亜麻の衣服に加えて、彼は同じく一つ織りの青衣を着用した。そのすそには、金の鈴と、青系、紫系、緋系で作ったざくろの装飾がほどこしてあった。その上に金系、青系、紫系、緋系、白系で織った短衣エポデを着用した。これは美しく作られた同色の帯でゆわえつけられていた。エポデにはそでがなく、金ししゅうの肩当てには、イスラエル十二の部族の名をしるした二個のしめのうがはめ込まれていた。

エポデの上には、祭司服の中で最も神聖な胸当があった。これは、エポデと同じ材料でできていた。形は一指当たり平方の正方形で、金の環に結びつけられた青ひもで肩からつるされていた。周囲は神の都の十二の土台を形成するのと同じ、さまざまな宝石で縁取られていた。縁の内側には金にはめ込まれた十二の宝石が四列に配され、これには肩当てと同じく十二部族の名が彫られていた。主は、「アロンが聖所にはいる時は、さばきの胸当にあるイスラエルの子たちの名をその胸に置き、主の前に常に覚えとしなければならぬ」と命じられた(同・二八ノ二九)。そのように、罪人のために父の前で、ご自分の血による嘆願をなさる偉大なる大祭司キリストも、ご自分の心に、すべて悔い改めた信じる魂の名をしるしておられる。「わたしは貧しく、かつ乏しい。しかし主はわたしをかえりみられます」と詩篇記者はうたっている(詩篇四〇ノ一七)。

胸当の左右には特に輝いた二つの大きな宝石があった。これはウリムとトンミムと呼ばれていた。これによって神のみこころが大祭司を通して知らされた。決定すべき問題が主の前に持ち出されたとき、右の宝石の周囲に

光輪がかかれば、これは神の是認もしくは認可のしとなり、左の宝石にかげりができれば、これは拒否もしくは認可されないしとなった。

大祭司の帽子は白亜麻のかぶりものであつたが、それには「主に聖なるもの」としるした金の板が青ひもで結ばれていた。祭司の衣服と動作のすべては、それを見る者に、神の神聖なこと、その礼拝が清いものであること神の前に来る者には純潔が要求されることなどを、深く感銘させるものでなければならなかつた。

聖所そのものばかりでなく、祭司の務めもまた、「天にある聖所のひな型と影とに仕え」るものであつた（ヘブル八ノ五）。このように、この務めは非常に重大なものであつた。そして、主は、モーセを通して、この象徴的な奉仕のあらゆる点に関する明確な指示をお与えになつた。聖所の務めは、二つの部分から成つていた。すなわち、日ごとの奉仕と年ごとの奉仕とである。日ごとの奉仕は幕屋の庭の燔祭の祭壇と聖所とで行なわれ、年ごとの奉仕は至聖所で行なわれた。

大祭司を除いては、いかなる人も聖所の奥の部屋を見ることができなかつた。その祭司も、年に一度だけで、しかもきわめて細心かつ厳粛な準備ののちに初めてそこにはいることができた。彼は震えおのきながら、神の前に行った。そして、民は、うやうやしく沈黙を守つて彼の帰りを待ち、熱心に神の祝福を求めて祈つていた。大祭司は、贖罪所の前でイスラエルのために贖いをした。そして、神は栄光の雲のうちで彼に会われた。大祭司がここに通例の時間より長くどまることがあると、彼らは、自分たちの罪か、あるいは、大祭司自身の罪のために、彼が主の栄光によつて絶たれてしまつたのではないかと恐れるのであつた。

日ごとの務めは、朝夕の燔祭、金の祭壇における香の供え物、及び個人個人の罪のための特別な供え物から成

っていた。そして、ほかに、安息日の供え物、新月の供え物、祭日の供え物があつた。

朝に夕に一才の小羊が適当な素祭と共に祭壇で焼かれ、こうして主に対する民族の日々の献身と、キリストのあがないの血に、彼らが絶えず依存していることが象徴されていた。聖所の務めのためにささげられる供え物は「傷のないもの」でなければならぬと、神は言明された(出エジプト記一一ノ五)。祭司たちは、犠牲としてささげられる動物をみなよく調べ、傷があるものは、ことごとく退けなければならなかった。「傷のない」供え物だけが、「きずも、しみもない小羊」(ペテロ第一・一ノ一九)として、ご自身をおささげになる主の完全な純潔を象徴するものとなることができた。使徒パウロは、キリストに従う者たちが自分自身をささげることの例証として、この犠牲を指摘している。「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である」(ローマ二ノ一)。われわれは自らを神の礼拝のためにささげなければならない。そして、この供え物をできるだけ完全に近いものとするように努めるべきである。神は、われわれのささげ得る最善のものでなければお喜びにならないのである。心から神を愛する者は、生涯の最上の奉仕を神にささげたいと望み、神のみこころを行なう能力を増進する律法に、自分たちの持っているあらゆる力を調和させようと絶えずつとめるのである。

祭司は、日ごとの務めにおける他のいかなる行為よりも、香をささげるときに、神の御前に一番近づいたのである。聖所の内部のとりは建物の上部にまで及んでいなかったたので、贖罪所の上にあらわれた神の栄光は、第一の部屋からも部分的に見ることができた。祭司は、主の前に香をささげながら、契約の箱のほうを見た。香の

煙が立ちのぼるとき、神の栄光は贖罪所の上にくんだり、至聖所に満ちた。そして、それは両方の部屋にまで満ちて、祭司が幕屋の戸口にまで退かなければならないことがよくあった。この象徴的礼拝において、祭司が自分には見えない贖罪所を信仰によって仰いだように、神の民は今、人の目に見えないが、天の聖所で彼らのためにとりなしておられる偉大なる大祭司キリストに祈りをささげなければならない。

イスラエルの祈りと共にのぼった香は、キリストの功績と仲保、キリストの完全な義をあらわしている。これは信仰によって神の民のものとされる。そして、ただこれによってのみ、罪深い人間の礼拝が神に受け入れられる。至聖所のとぼりの前には、絶えずとりなしの行なわれる祭壇があり、聖所の前には常供の贖いの祭壇があった。血と香によって、人間は神に近づくことができた。これらは、偉大な仲保者キリストをさし示す象徴であった。この仲保者を通して、罪人は主に近づくことができ、また、このキリストを通してはじめて、あわれみと救いが悔い改めて信じる魂に与えられるのである。

祭司が朝夕、香の時間に聖所にはいるとき、日ごとのいけにえは外の庭の祭壇にささげられる準備ができていた。これは、幕屋に集まった礼拝者たちが、非常な関心を示すときであつた。彼らは、祭司の務めを通じて神の前に出るに先だつて、まじめに心をさぐり、罪を告白しなければならなかつた。彼らは、顔を聖所に向けて心を合わせ、黙祷をささげた。こうして、彼らの祈願が香の煙と共に立ちのぼった。そして、彼らは信仰によって贖罪の犠牲に予表された約束の救い主の功績にすがつた。朝夕のいけにえをささげるために定められた時間は、清い時とみなされた。やがて、ユダヤ民族全体は、その時間を所定の礼拝の時間として守るようになった。そしてのちにユダヤ人が遠国に捕われの身として散らされたときも、彼らはこのきまつた時間に、エルサレムの方角を



家庭の祭壇にささげられた犠牲の子羊は、われわれの大いなる犠牲であられるキリストの象徴であった。この基本的霊的真理を中心にして、聖所のさまざまな奉仕が行なわれた。

向いて、イスラエルの神に祈願をささげた。この習慣はキリスト者にとって、朝夕の祈りの模範である。神は、礼拝の精神のない単なる儀式をきらわれる。しかし、神を愛し、朝に夕に頭をたれて犯した罪のゆるしを求め、必要な祝福を願う者たちを大きな喜びをもってごらんになる。

供えのパンは、絶やすことなくささげる常供の供え物として主の前に置かれた。こうして、これは、日ごとの犠牲の一部であった。これは、常に主のみ顔の前に置かれていたために、供えのパン、すなわち「み前のパン」と呼ばれていた。これは、霊肉の食物が神から与えられるものであること、しかも、それがキリストの仲保を通してはじめて得られることを認めたものであった。神は、天のパンによって荒野のイスラエルを養われたが、彼らは、いまなお、肉体のための食物であれ、霊の祝福であれ、神の賜物に依存していた。マナと供えのパンは、共に、われわれのために常に神の御前におられる生きたパンであられるキリストを示していた。キリストご自身「わたしは天から下ってきた生きたパンである」と仰せになった(ヨハネ六ノ四八 五一参照)。パンの前には乳香が置かれた。パンが安息日ごとに取り除かれて新しいパンと代わるとき、乳香は神の前の記念として祭壇でたかれた。

日ごとの務めのうちで最も重要な部分は、個人個人のために行なわれた務めであった。悔い改めた罪人は供え物を幕屋の戸口にたずさえ、このいけにえに手を置いて罪を告白し、こうして象徴的にその罪を彼自身から無垢の犠牲の上に移し変えた。それから動物は、彼の手で殺された。祭司は、血を聖所に運んで、この罪人の犯した律法を入れた箱の前方にたれているとばりの前に注いだ。この儀式によって、罪は血によって象徴的に聖所に移された。

血が聖所の中にたずさえられない場合もあった。そのときには、モーセがアロンの子らに命じて、「これは……あなたがたが会衆の罪を負(う)……ため、あなたがたに賜わった物である」(レビ記一〇ノ一七)と言ったように、祭司がその肉を食べなければならなかった。これらの儀式は、共に、悔い改めた者から聖所へと罪が移されることを象徴したものであった。

こうしたつとめが、一年を通じて毎日行なわれていた。このようにイスラエルの罪が聖所に移されたので聖所は汚れ、そのため、罪を取り除く特別のつとめが必要となった。神は、祭壇と同様に二つの聖所の部屋についてもあがないをなし、「イスラエルの人々の汚れを除いてこれを清くし、聖別しなければならない」とお命じになった(同・一六ノ一九)。

年に一度、祭司は聖所のきよめのために至聖所にはいった。そこで果たされるつとめが、年ごとのつとめを完了した。

贖罪の日には、二匹のやぎが幕屋の戸口に連れてこられ、それぞれにくじが引かれた。すなわち、「一つのくじは主のため、一つのくじはアザゼルのため」であった。はじめのくじに当たったやぎは、民のための罪祭としてほふられた。そして、祭司はその血をとばりの内部にたずさえて、贖罪所の上に注いだ。「イスラエルの人々の汚れと、そのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪のゆえに、聖所のためにあがないをしなければならない。また彼らの汚れのうちに、彼らと共にある会見の幕屋のためにも、そのようにしなければならない」(同・一六ノ一六)。

「そしてアロンは、その生きているやぎの頭に両手をおき、イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろのと

が、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白して、これをやぎの頭にのせ、定めておいた人の手によって、これを荒野に送らなければならない。こうしてやぎは彼らのもろもろの悪をになって、人里離れた地に行くであろう」（同・一六ノ一二、一二）。このように、やぎが送り出されてはじめて、民は自分たちを罪から解放された者とみなした。贖罪のわざがなされている間、すべての人は魂を悩まさなければならなかった。日常の働きをやめて、イスラエルの全会衆は、その日を厳粛に神の御前にへりくだって過ごし、祈り、断食し、心を深くさぐったのであった。

贖罪に関する重要な真理が、この年ごとの務めによって民に教えられた。一年間にわたってささげられた罪祭によって、罪人に代わるものが受け入れられてきた。だが、いけにえの血が罪に対する完全な贖いを果たしたのではなかった。それは、ただ、罪が聖所に移される手段を提供したにすぎない。罪人は血をささげることによって、律法の権威を認め、律法に違反した罪を告白し、世の罪を除くおかたへの信仰を表明した。だが、彼は律法の宣告から完全に解放されたものではなかった。贖罪の日に、大祭司は会衆のための供え物を取り、血をたずさえて至聖所にはいり、それを律法の板の上の贖罪所に注いだ。こうして、罪人の生命を求める律法の要求が満たされた。次に、祭司は、仲保者として自分の上に罪を負い、聖所を出てイスラエルの罪の重荷をになった。彼は幕屋の戸口でアザゼルのやぎに手を置き、「イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろのところが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白して、これをやぎの頭にのせ」た。そして、これらの罪を背負ったやぎが送り出されるときに、罪はやぎと共に、永遠に民から切り離されたものとみなされた。これが、「天にある聖所のひな型と影」で行なわれた礼拝であった（ヘブル八ノ五）。

すでに述べたように、地上の聖所は山で示された型に従ってモーセが建てたものである。それは、「今の時代に対する比喻」であって、「供え物やいけにえ」がささげられた。そのふたつの聖なる部屋は、「天にあるもののひな型」であり、われらの大祭司キリストが、「人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる」(同・九ノ九、一三、八ノ二)。使徒ヨハネが幻のうちに、天にある神の宮を示されたとき、彼は、「七つのとし火が、御座の前で燃えていた」のを見た。また、天使が「金の香炉を手に持って祭壇の前に立った。たくさんの香が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒の祈に加えて、御座の前の金の祭壇の上にさげるためのものであった」(黙示録四ノ五、八ノ三)。ここで預言者は、天の聖所の第一の部屋を見ることが許された。そして、彼はそこに、地上の聖所では金の燭台と香の祭壇であらわされていた「七つのとし火」と「金の祭壇」を見た。再び「天にある神の聖所が開けて」、彼は奥のとなりの内部、すなわち、至聖所を見た。ここに彼は、モーセの作った、神の律法をいれた清い箱によって示されていた「契約の箱」を見た(黙示録一一ノ一九)。

モーセは、「見たままの型にしたがって」地上の聖所を造った(使徒行伝七ノ四四)。パウロは、それが完成されたとき、「幕屋と儀式用の器具いっさい」は「天にあるもののひな型」であったと述べている(ヘブル九ノ二一)。ヨハネも天に聖所を見たと言っている。イエスが、われわれのために奉仕しておられるその聖所が本来のものであって、モーセの建てた聖所はその写しであった。

天の宮は王の王である神の住居である。そこでは、千の幾千倍の者がこれに仕え、万の幾万倍の者がその前にはべり、輝かしい守護のセラピムが顔をおおって崇敬をささげる永遠のみ座の栄光で満ちている。地上のいかなる建造物も、その広大さと輝かしさをあらわすことができない。だが、天の聖所と、人間のあがないのためにそ

こで行なわれる大いなるみわざとに関する重要な真理が、地上の聖所とそのつとめによって教えられた。

われわれの救い主は、昇天ののち大祭司としてのつとめを始められた。「キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらないで、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さった」とパウロは言っている(同・九ノ二四)。キリストの務めが二つに大きく分けられ、そのおのおのがある期間を占め、天の聖所において明確な場所を占めるように、象徴的な務めも日ごとの奉仕と、年ごとの奉仕の二区分から成り、それぞれに幕屋の部屋が一つずつあてられていた。

キリストが昇天に際して神の御前に現われ、悔い改めた罪人のために、ご自分の血による嘆願をなさったように、祭司は、日ごとの務めにおいて、罪人のために聖所でいけにえの血を注いだ。

キリストの血は、悔い改めた罪人を律法の宣告から解放したが、しかし、それは罪を消し去るものではなかった。罪は最終的な贖罪の時まで聖所の記録に残るのである。そのように象徴においても、罪祭の血は悔い改めた者から罪を取り除いたが、罪は贖罪の日まで聖所に残った。

大いなる最後の報いの日に、死者は、「そのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれ」る(黙示録二〇ノ一二)。このとき、真に悔い改めたすべての者の罪は、キリストの贖罪の血によって、天の書物から消される。こうして、聖所から罪の記録が除かれ、きよめられるのである。象徴においては、この大いなる贖罪のみわざ、つまり、罪を消し去ることは、贖罪の日のつとめによってあらわされた。すなわち、地上の聖所を汚していた罪を除いてきよめることは、罪祭の血によってなしとげられた。真に悔い改めた者の罪が、ついに贖われて、天の記録から消されて、もはや思い出すことも心に浮かぶこともなくなるように、象徴では罪

は荒野に追いやられ、会衆から永遠に切り離された。

サタンは、罪の創始者であり、神のみ子の死を招いたあらゆる罪の直接の扇動者であるから、正義は、サタンが最後の刑罰を受けることを要求する。人間を贖い、宇宙を罪からきよめるキリストのみわざは、天の聖所から罪を取り除いて、これらの罪をサタンの上に置き、サタンが最後の刑罰を負うことによって閉じられる。そのように、象徴的奉仕においても一年間の務めは聖所のきよめと、アザゼルのやぎの頭の上に罪を言いあらわす告白をもって閉じられた。

こうして、幕屋の務めと、のちにこれにとって代わった神殿の務めから、民はキリストの死とその務めに関する心理を日ごとに学び、そして、毎年一度、彼らの心はキリストとサタンとの間の大争闘の終結、宇宙が罪と罪人からきよめられる最終的なきよめに向けられたのであった。

第 31 章

ナダブとアビウの罪

本章は、レビ記一〇ノ一——に基づく。

幕屋が神にささげられたあとで、祭司たちはきよい務めにたずさわるために聖別された。これらの式典は、七日を要し、毎日特別の儀式があつた。八日めから祭司たちは、それぞれの務めを始めた。アロンは、むすこたちに助けられて、神が要求された犠牲をささげ、両手を上げて民を祝福した。それまで、すべてが神の命じられた通りに行なわれてきた。そして、神は、犠牲を受け入れ、ご自分の栄光を著しくあらわされた。火が主のもとから下つて、祭壇の上のささげ物を焼き尽くした。民は、畏怖と強い関心とをもつて、この神の力の驚くべきあらわれを見つめた。彼らは、そこに神の栄光と恵みのしるしを見、いつせいに賛美と崇敬の叫びをあげ、主のみ前にあるかのように顔を伏せた。

しかし、その後まもなく、恐るべき不幸が、突然大祭司の一家にふりかかった。礼拝のとき、民の祈祷と賛美が神のもとにのぼっていく間に、アロンのふたりのむすこが、それぞれ香炉をとり、主の前にうるわしいかおりとして立ちのぼる薫香をそれにたいした。だが、彼らは、主の命令にそむいて「異火」を使った。薫香をたくにあ

たつて、彼らは神ご自身がともし、このために使うように命じられた神聖な火を用いずに、普通の火を用いてしまった。この罪のために、火が主の前から出て、民の見ている前で彼らを焼き滅ぼした。

ナダブとアビウは、モーセとアロンに次いで、イスラエルのうちで高い地位にあった。彼らは、特に主からの榮譽を受け、七十人の長老たちと共に、山で主の栄光を見ることを許された者たちであった。しかし、それだからといって、彼らの罪の言い訳がなりたつたり、それが軽く見すごされたりしてはならなかった。むしろ、このために彼らの罪はいっそう重くなった。人は、大きな光を受けたからとか、また、イスラエルの君たちのように山にのぼって神と交わり、神の栄光に浴する特権を得たからといって、自分はそのあとで罪を犯しても罰せられないと考えてはならない。また、このような榮譽を受けたのであるから、神は自分の罪をきびしく罰せられることはないと思つてはならない。そのように考えることは致命的な誤りである。与えられる光と特権が大きければ、その光に応じた徳と聖潔がそこに要求される。神は、これ以下のものはお受けになることができない。大きな祝福や特権を得たからといって、もう安全であると思ひ、軽率にふるまつてはならない。それらは、罪を黙認するものでもなければ、また、神が、その人々を厳格にあつかわれたいと思つてよいものでもない。神から与えられた恩典はみな、もつと熱烈な精神をもち、活発に努力して、神のみ旨の遂行を活発に行なうための神の手段である。

ナダブとアビウは、少年時代に自製の訓練を受けなかった。父親が相手の言いなりになる性質で、正しいことに対する確固たる態度が欠けていたために、彼は子供のしつけをないがしろにした。むすこたちは好きなことをするにまかせてあつた。彼らはかつてにふるまう習慣が長く続いたために、最も神聖な職務の責任を負わせられ

ても、その習慣からぬけきれなかった。彼らは、父親の權威を尊ぶことを教えられていなかった。そして、彼らは神の要求に厳格に従う必要を認めなかった。アロンがあやまってむすこたちを甘やかしたために、ついに彼らは神の刑罰を受けなければならなくなった。

神は、民らが崇敬と畏怖をもつて神に近づき、しかも神の定められた方法に従わなければならないことを教えるようとなさった。神は、なまはんな従順をお受けになることができない。厳肅な礼拝のときにあたって、ほとんどすべてのことが神の指示どおりに行なわれるというだけでは不十分であった。戒めから離れ、世俗のものと神聖なものとを区別しない者に、神はのろいを宣告しておられる。神は預言者によってこう宣言なさる。「わざわざいなるかな、彼らは悪を呼んで善といい、善を呼んで悪といい、暗きを光とし、光を暗しと…する。わざわざいなるかな、彼らはおのれを見て、賢しとし、みずから顧みて、さとしとする。…彼らはまいないによつて悪しき者を義とし、義人からその義を奪う。…彼らは万軍の主の律法を捨て、イスラエルの聖者の言葉を侮った」(イザヤ書五ノ二〇 二四)。だれも自分を欺いて、神の戒めの一部は不必要であるとか、神はご自分の要求なさることの代わりのものでも、お受けになるとか考えてはならない。預言者エレミヤは、「主が命じられたのでなければ、だれが命じて、その事の成ったことがあるか」と言った(哀歌三ノ三七)。神は、みことばの中に、人がその好みに従つて服従してもしなくても、結果は同じだというような命令は一つもしておられない。もし、人間が厳格な従順以外の道を選ぶなら、「その終りはついに死に至る道となる」のである(箴言一四ノ一二)。

「モーセはまたアロンおよびその子エレアザルとイタマルとに言った、『あなたがたは髪を乱し、また衣服を裂いてはならない。あなたがたが死ぬことのないため…である。…あなたがたの上に主の注ぎ油があるか

らである¹。偉大な指導者モーセは、その兄弟に、「わたしは、わたしに近づく者のうちに、わたしの聖なることを示し、すべての民の前に栄光を現すであろう」という神のことばを思い起こさせた(レビ記一〇ノ六、七、三)。アロンは無言のままだった。恐ろしい罪のために、なんの警告もなしに、むすこたちが断たれたので、父親の胸ははりさけそうであつた。だが、彼は自分の感情を表わさなかつた。この罪は自分が義務を怠つたためであることを、彼はここで悟つた。彼は悲嘆をあらわして、罪に共感するそぶりを見せてはならなかつた。会衆を神に対してつばやかせてはならなかつた。

主は、他の人々に恐怖をいだかせるために、ご自分の罰の正当性を神の民に認めさせようと望まれる。イスラエルの中には、この恐ろしい刑罰を警告として、神の忍耐を軽んじて滅亡する運命から救われたものがあつた。自分の罪の言い訳をしようとする罪人に対して、まちがつた同情を示す者を、神は責められる。罪には道徳的な感覚を失わせる作用があり、そのために悪を行なう者は、その罪の大きさを自覚しない。そして、それを悟らせる聖霊の力がないので、彼は自分の罪に対してなかつた盲目的な状態に陥つてゐる。このような罪に陥つてゐる者に、その危険を教えるのは、キリストのしもべたちの務めである。罪の本性と罪から生ずる結果に対して、罪人の目を盲目にさせて警告の効力を失わせる者は、そうすることが自分たちの愛の証拠であるとうぬぼれがちである。しかし、実は、彼らは神の聖霊のわざに正面から対立して、これを妨げるために働いてゐる。彼らは、罪人を欺いて、滅亡の断崖にいこわせてゐる。彼らは、自分たちでその罪にあずかり、罪人が悔い改めないことの恐るべき責任を負つてゐる。このまちがつた同情の結果、実に多くの人々が滅びに陥つてしまつた。

もしもナダブとアビウが、初めから酒をほしだけ飲んで半ば泥酔状態になつていなければ、この致命的な罪

を犯すことはなかったであろう。彼らは神の臨在のあらわれる聖所にはいる前には、細心の注意を払って、厳粛に準備することが必要であることを承知していた。だが、彼らは不節制によって、清い職務にたずさわる資格を失ってしまった。彼らの心は混乱し、道徳的感覚は鈍り、神聖なものと世俗のものとの区別ができなくなってしまう。アロンとそのほかの子らはこう警告された。「あなたも、あなたの子たちも会見の幕屋にはいる時には、死ぬことのないように、ぶどう酒と濃い酒を飲んではならない。これはあなたがたが代々永く守るべき定めとしなければならない。これはあなたがたが聖なるものと俗なるもの、汚れたものと清いものとの区別をすることができるため、また主が…語られたすべての定めを、イスラエルの人々に教えることができるためである」(同・一〇ノ九 一一)。飲酒はからだを弱め、思想を混乱させ、道義を低下させる作用を持つ。それは、人に聖なるものの神聖さと、神の要求の拘束力を認めさせない。清い責任ある地位についた者はみな、きびしく節制を守って頭脳を明せきにして善悪を区別し、原則に堅く立ち、公正を行ない、あわれみの心を持つ知恵がなければならなかった。

それと同じ義務が、キリストに従うひとりひとりに負わされている。使徒ペテロは、「あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である」と言明している(ペテロ第一・二ノ九)。われわれは創造主に喜ばれる礼拝をささげることができるように、あらゆる力をできるだけ最善の状態に保つことを神から求められている。酒が用いられれば、これらのイスラエルの祭司たちの場合と同じ結果が生じるであろう。良心は罪に対する感受性を失い、次第に悪に慣れてついに世俗のものと神聖なものの区別が見分けられなくなってしまう。そのとき、われわれはどうして神が要求される標準に合致できるであろうか。「あなたがたは知らないのか。自

分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。」「だから、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである。」「あらゆる時代のキリストの教会に、この厳粛で恐るべき警告が与えられている。すなわち、「もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである」(コリント第一・六ノ一九、二〇、一〇ノ三一、三ノ一七)。

第 32 章

律法と契約

アダムとエバは、創造の当初、神の律法のことを知っていた。彼らは、律法の要求を知っていた。戒めは彼らの心に書かれていた。人間が罪を犯して墮落したときに、律法は変更されなかった。しかし、彼らを再び服従に立ち帰らせるために救済策が設けられた。救い主の約束が与えられ、大いなる罪祭、キリストの死を予表したさげ物の犠牲制度が設けられた。しかし、もし神の律法を犯すことがなかったならば、死もなければ、救い主の必要もなかった。従って、犠牲の必要もなかった。

アダムは、彼の子孫に神の律法を教えた。そして、神の律法は、父から子へと後の世代に伝わっていった。しかし、人間の贖罪のために恵み深い備えが与えられたにもかかわらず、それを受け入れ、服従した者は少なかった。この世界は罪のために非常に墮落したために、洪水によって腐敗から潔められなければならなかった。律法は、ノアとノアの家族によって保存された。そして、ノアは、子孫に十誡を教えた。人類が再び神から離れたとき、主は、アブラハムを選び、彼についてこう言われた。「アブラハムがわたしの言葉にしたがってわたしのさ

と、いましめと、さだめと、おきてとを守った」(創世記二六ノ五)。アブラハムに割礼の儀式が与えられた。割礼を受けたものは、神の奉仕に献身したというしるしであった。それは、彼らが偶像礼拝から離れて、神の律法を守るという契約であった。アブラハムの子孫は異教徒と同盟を結んで、彼らの風習を取り入れて、この契約を守らなかったために、エジプトに滞在して奴隷生活を送ることになった。ところが、彼らが偶像教徒と交わったり、エジプト人にして屈服させられたりしたために、神の戒めは、異教主義の下劣で残忍な教えによって、さらに汚された。そこで、主は、彼らをエジプトから救出されたとき、栄光に包まれ、天使たちを従えて、シナイに降りてこられて、恐ろしい威光をもつて、すべての民に聞こえるように、主の律法を語られた。

主は、そのときにおいても、忘れることの早い人間の記憶に主の戒めをゆだねることをせず、それを石の板に書かれた。主は、イスラエルが、ご自分のきよい戒めに異教の伝説を混合したり、あるいは主の律法を人間の法令や習慣と混同したりすることが全くないようにされた。しかし、主は、ただ十誡の戒めを彼らに与えただけでやめられなかった。人々は、すぐに誤った方向に惑わされるために、主は、一つでも誘惑の戸をあけておかないようにされた。モーセは、神がお命じになるままにおきてを書き、その要求項目を細かく人々に教えるように命じられた。人間の神と同胞に対する義務、そして、他国人に対する義務に関するこのような教えは、十誡の原則を単に拡大、明細にしたものであつて、だれも考えがいをしないようにするためであった。これらは、石の板に書かれた十の戒めの神聖さを守るためのものであつた。

アダムが墮落後に、神から与えられ、ノアが保存し、そしてアブラハムが守った神の律法を人間が遵守していたのであれば、割礼の儀式の必要はなかったはずであつた。そして、もしもアブラハムの子孫が契約を守り、そ

のしるしの割礼を行なっていたのであれば、偶像礼拝にまどわされたり、エジプトの奴隷生活に苦しむ必要もなかったのである。彼らは、神の律法を心の中にたくわえていて、それをシナイから宣言されることも、石の板に刻まれることも必要がなかったことであろう。そして、人々が十誡の原則を実行していたのであれば、モーセに追加的に指示が与えられる必要もなかったことであろう。

アダムに与えられた犠牲制度もまた、アダムの子孫によって曲解された。迷信、偶像礼拝、残酷、不道德などが、神の定められた単純で意味深い儀式を腐敗させた。イスラエルの人々は、長い間偶像教徒と接触していたために、彼らの礼拝に異教の習慣を多く取り入れていた。そこで、主は、シナイで犠牲の儀式に関して明確な指示をお与えになった。幕屋が完成したあとで、主は、贖罪所の上の栄光の雲の中からモーセと交わり、ささげ物の制度に関する十分な指示と、聖所で続けるべき礼拝の形式とお与えになった。こうして礼典律は、モーセに与えられたもので、モーセはそれを書物に書いた。しかし、シナイから語られた十誡の律法は、石の板の上に神ご自身がお書きになったもので、契約の箱の中に大切に保存された。

この礼典律のことを言っている聖句を用いて、この二つの制度を織りまぜて考え、道徳律は廃されたということとを証明しようとする人々が多くいる。しかし、これは聖書の曲解である。この二つの制度には、実に明瞭な区別がある。儀式の制度は、キリストとキリストの犠牲、そしてキリストの祭司職を示す象徴によって成り立っている。犠牲と儀式のこの礼典律は、世の罪を取り除く神の小羊であられるキリストの死という型の実体があらわれるまで、ヘブル人が行なうべきものであった。そのとき、すべての犠牲のささげ物は、終わることになっていた。キリストが、「取り除いて、十字架につけてしまわれた」のはこの律法であった(コロサイ二ノ一四)。しか

し、十誡の律法に関して、詩篇記者は、「主よ、あなたのみ言葉は天においてとこしえに堅く定まり」と宣言している（詩篇一一九ノ八九）。キリストご自身も、「わたくしが律法……を廃するためにきた、と思つてはならない。……よく言つておく」。この断言をできるかぎり強調して「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである」と主は言われた（マタイ五ノ一七、一八）。ここでキリストは、神の律法が過去において、また当時何を要求したかということばかりでなく、これらの律法の要求は、天地の続くかぎり継続するものであることを教えられた。神の律法は、神のみ座と同様に不変のものである。律法はあらゆる時代の人間に、服従を要求し続けるのである。

シナイから宣言された律法に関して、ネヘミヤは「あなたはまたシナイ山の上に下り、天から彼らと語り、正しいおきてと、まことの律法および良きさだめと戒めとを授け」と言つた（ネヘミヤ記九ノ一三）。「異邦人への使徒」パウロは、「律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖であつて、正しく、かつ善なるものである」と言つている（ローマ七ノ一二）。これは、十誡以外のものではあり得ない。なぜなら、これは、「あなたはむさぼつてはならない」という律法だからである。

救い主の死は、典型と影の律法を廃したけれども、われわれの道德律に対する義務を少しも軽減しなかつたのである。律法を犯した罪を贖うために、キリストが死ななければならなかつたという事實は、かえつて律法の不変性を証明したのである。神の律法を取り消し、旧約を廃止するためにキリストが来られたと主張する人々は、ユダヤ時代が暗黒で、ヘブルの宗教が単なる形式と儀式だけであつたように言うが、それはまちがひである。神が選民を扱われた方法がしるされている聖なる歴史の全体のために、偉大な、わたくしは有ると言われたおかたの

栄光に輝く足跡をたどることができる。主が、イスラエルの唯一の支配者として認められ、律法を人々にお与えになった時ほどに、彼の力と栄光が、人々にあらわされた時はなかった。そのとき、王権は人間の手に握られていなかった。目にこそ見えなかったが、イスラエルの王のはなばなしい出現は、言葉に表現できない荘麗さといかめしさがあった。

このような神の臨在があらわされたときは、いつもキリストによって神の栄光が現わされた。救い主がこの世に降臨なさった時ばかりでなく、人類の墮落およびその贖罪の約束が与えられたとき以来、各時代を通じて「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」ておられた(コリント第二・五ノ一九)。キリストは、家長時代とユダヤ時代の両時代にわたって、犠牲制度の基礎であり中心であつた。われわれの先祖が罪を犯して以来、神と人間の間には直接の交わりはなかった。父なる神は、この世界をキリストの手におゆだねになった。そして、神は、キリストの仲保の働きによって、人間を救い、神の律法の權威と神聖さを擁護なさるのである。墮落した人間と天との交わりは、すべてキリストを通じて行なわれた。われわれの先祖に贖罪の約束を与えたのは、神のみ子であつた。家長たちにご自分をあらわされたのは、キリストであつた。アダム、ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、そしてモーセなどは福音を理解した。彼らは人間の身代わりと保証であられるキリストによる救いを待望した。これらの古代の聖者たちは、この世界に人間となつて来られることになつていた救い主と交わつたのであつた。彼らのなかにはキリストや天使たちと顔を合わせて話したものもあつた。

キリストは、荒野におけるヘブル人の指導者であられた。彼は、主とも呼ばれた天使なる神であつて、雲の柱に包まれて、軍勢の前に進まれた。ただそれだけでなく、イスラエルに律法を与えられたのも彼であつた。キリ

ストは、シナイの荘厳な栄光の中から、すべての人に父なる神の十誡を宣言された。石の板に刻まれた律法をモーセに与えたのも彼であった。

預言者によって人々に語られたのは、キリストであった。使徒ペテロは、キリスト教会にあてて、「あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、…自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである」と言っている（ペテロ第一・一ノ一〇、一一）。旧約聖書を通して、われわれに語るのはキリストの声である。「イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」（黙示録一九ノ一〇）。

イエスは、ご自分が人々の間におられて教えられたときに、人々の心を旧約にお向けになった。イエスは、ユダヤ人に「あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである」と言われた（ヨハネ五ノ三九）。このときは、旧約聖書が、聖書として存在していたに過ぎなかった。また、人の子は、「彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよかるう」と言い、さらにつけ加えて、「もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう」と言われた（ルカ一六ノ二九、三一）。

礼典律は、キリストによって与えられた。それを行なう必要がなくなった後になって、パウロはユダヤ人に礼典律の真の位置と価値とを述べ、それが贖罪の計画の中でどんな位置を占め、キリストの働きにどんな関係があったかを示した。そして偉大な使徒パウロは、この律法が栄えあるものであって、それを創設された神にふさわしいものであると宣言するのである。聖所の中の厳粛な儀式は、その後の各時代を通じてあらわされる大真理を

象徴していた。イスラエルの祈りと共にのぼる香の煙は、キリストの義を代表している。ただこれだけが、罪人の祈りを神に受け入れられるものにする。血のしたたる祭壇上の犠牲は、来たるべき贖い主を示していた。そして、至聖所からは神の臨在のしるしが輝き出ていて、人はそれを認めることができた。こうして、暗黒と背教の時代を通じて、人々の心の中に信仰が生々しく保たれ、ついに、約束のメシヤの来臨の時にまで及んだのである。イエスは、人間のかたちをとって地上に来られる前から、ご自分の民の光。世の光であられた。罪におおわれた世界の暗黒を貫いた最初の光は、キリストから来たものであった。地上の住民に注がれた天の輝かしい光はすべて彼から来たのである。キリストは贖罪の計画の中で、アルファであり、オメガであり、始めであり、終わりであられる。

救い主が、罪のゆるしのためにその血を注ぎ、天にのぼって「わたしたちのために神のみまえに出て下さつてから」というものは、光は、カルバリーの十字架と天の聖所から流れ出ている（ヘブル九ノ二四）。しかし、われわれにさらに明らかな光が与えられたからといって、来たるべき救い主を型によって示された初期の人々を軽べつしてはならない。キリストの福音は、ユダヤの制度を明らかにし、礼典律を意義深いものにした。新しい真理が啓示されるにつれて、初めから与えられていた真理がより明瞭に理解され、神がご自分の選民をあつかわれる方法のなかに、神の品性とみ旨があらわされた。われわれが新しい光に浴すること、人間を救おうとされる神のみこころのあらわれである贖罪の計画が、さらに明らかに理解されるようになる。われわれは、靈感の言葉のなかに新しい美と力を見る。そして、ますます深く、そのページの研究に没頭するのである。

神は、ヘブル人と外部の世界との間に隔ての壁をおき、人類の他の大部分を度外視して、イスラエルだけを保

護し、愛されたという考えを持っている者が多い。しかし、神の民が、自分たちと同胞との間に隔ての壁を作ることは神のみこころではなかった。無限の愛にあふれた神のみこころは、地のすべての住民に手をさしのべておられた。彼らは、神を拒んでしまったが、神は常にご自分を彼らにあらわそうと努め、彼らを神の愛と恵みにあずかる者にしようとなさった。神の祝福が選民に与えられたのは、彼らが他を祝福するためであった。

神はアブラハムを召し、アブラハムに繁栄と名誉をお与えになった。そして、アブラハムが旅をしたすべての国々で、彼の忠実さが人々に光を輝かした。アブラハムは、彼のまわりの人々から離れて生活しなかった。アブラハムは、近隣の国々の王たちと友好的関係を持続し、その王たちの中には、アブラハムを非常に尊敬した者もあった。そして、アブラハムの正直、無我、勇氣、慈悲の心などは、神の品性のあらわれであった。メソポタミヤ、カナン、エジプト、そしてソドムにおいても、神の代表者によって天の神があらわされた。

そのように、神はヨセフによって、エジプトの人々と、この強国に關係のあつたすべての国々にご自身をあらわされたのである。神は、なぜ、エジプト人の中でヨセフを高めようとされたのであろうか。神は、ヤコブの子らに対する神のみこころを他の方法によって完成なさることもできたのである。しかし、神は、ヨセフを光とすることを望まれた。そして、ヨセフを王の宮殿に住ませ、天からの光が遠いところにも近いところにもひろがっていくようにされたのである。その知恵と正義、日常生活における潔白と愛、また、偶像教国の人々の幸福のための献身などによって、ヨセフはキリストの代表者となっていたのである。エジプト全国の人々が、感謝と賛美の心をいだいて、自分たちの恩人ヨセフを見るときに、彼らはそこに自分たちの創造主と、贖い主イエスの愛を認めるようになるためであった。同様に神はまた、モーセを用いて、地上最大の王国の王位のかたわらに光を置

かれた。それは、知ろうと思う者は、だれでも真の生きた神について学ぶことができるためであった。そして、この光のすべては、エジプト人の上に神の刑罰のみ手が伸べられる前に与えられたのである。

エジプトからイスラエル人が救い出されたことによって、神の力が遠近に広く知れ渡った。エリコ城内の好戦的な人々は、震えおののいた。「わたしたちはそれを聞くと、心は消え、あなたがたのゆえに人々は全く勇気を失ってしまいました。あなたがたの神、主は上の天にも、下の地にも、神でいらせられるからです」とラハブは言った(ヨシュア記二ノ一一)。出エジプト後、数世紀たってからも、ペリシテ人の祭司たちは、エジプトに降った災害のことを人々に思い起こさせて、イスラエルの神に反抗しないように警告を發した。

神は、イスラエルを召し、祝福し、高められた。それは、彼らが神の律法に従い、彼らだけが神の恵みを受け神の祝福をひとり占めにするためではなくて、彼らを通じて、地のすべての住民に神ご自身をあらわすためであった。神が、まわりの偶像教徒とは離れていなければならぬと彼らにお命じになったのは、そのためであった。

神は、偶像礼拝とそれに伴うすべての罪を憎まれる。そして、神は他の国民と交わって、「彼らのおこないにならって」神を忘れてはならないとお命じになった(出エジプト記二三ノ二四)。神は、彼らの心が神から離れ去ってはいけないので、異教徒との結婚をお禁じになった。神の民が「自らは世の汚れに染まずに」身を清く保つことは、今日と同様昔も必要であった(ヤコブ一ノ二七)。世は真理と義に反するものであるから、世の精神に捕われないうにしなければならなかった。しかし、神は、神の民が自己だけを正しいとする排他的精神をもって自分を世から区別し、世に感化を及ぼさないようにすることは、神のみこころではなかった。

各時代のキリストの弟子たちは、主と同じように世の光となるべきであった。「山の上にある町は隠れること

ができない。また、あかりをつけて、それを枡の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中(すなわち世の中)のすべてのものを照させるのである」と救い主は言われた。また、つけ加えて、「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」と言われた(マタイ五ノ一四、一五、一六)。エノク、ノア、アブラハム、ヨセフ、モーセなどは、この通りのことをしたのである。神がイスラエルの人々にするようにご計画になったのは、まさしくこのことであつた。

周囲の人々に光を輝かさないうで、それを隠してしまったのは、サタンに支配された彼らの邪悪な不信の心からであつた。彼らが、異教徒の罪深い習慣に従つたのも、あるいは、神の愛と保護とは自分たちだけのものであるかのようにふるまって、高慢に排他的になつたのも、この同じ頑迷な精神のためであつた。

聖書には、永遠に不変の律法と、仮りの一時的の律法の二つの律法が示されているのと同様に、契約にも二種類ある。恵みの契約は、まず、エデンで人間に与えられたのである。人間が墮落したあとで、女のすえがへびのかしらを砕くという約束が与えられた。この契約は、すべての人に罪のゆるしを与え、キリストを信じる信仰によって、その後従うことができるように、神の恵みの助けを与えた。それは、また、神の律法に忠誠を尽くすことを条件にして、永遠の命を約束した。こうして、家長たちは、救いの希望を与えられたのである。

この同じ契約は、アブラハムにくり返されて、「地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであらう」という約束が与えられた(創世記二二ノ一八)。この約束はキリストを指示したものであつた。アブラハムは、このことを理解し(ガラテヤ三ノ六、一六参照)、キリストにたよって罪のゆるしを求めた。彼が義と認めら

れたのはこの信仰であつた。アブラハムとの契約は、神の律法の權威をも維持した。主は、アブラハムに現われて、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」と言われた(創世記一七ノ二)。この忠実なしもべについて、神は、「アブラハムがわたしの言葉にしたがってわたしのさとしと、いましめと、さだめと、おきてとを守った」とあかしされた(同・二六ノ五)。そして、主は、「わたしはあなた及び後の代々の子孫と契約を立てて、永遠の契約とし、あなたと後の子孫との神となるであらう」と彼に宣言された(同・一七ノ七)。

この契約はアダムと取りかわされ、また、アブラハムにくり返して与えられたとはいえ、キリストの死によって初めて批准されたのである。これは、初めて贖罪の知らせがかすかながら与えられたときから、神の約束によって存在していたのである。人々は、これを信仰によって受け入れていた。しかし、それがキリストによって批准されたときに、それは新しい契約と呼ばれた。神の律法がこの契約の基礎であつた。律法は、単に、神のみこころに人々をもう一度調和させ、彼らが神の律法に従うことができるようにする手段であつたに過ぎない。

もう一つの契約は、聖書で「古い」契約と呼ばれているが、それは、シナイで神とイスラエルの間に結ばれたもので、それは、そのとき犠牲の血によつて批准された。アブラハムに与えられた契約は、キリストの血によつて批准され、「第二の」または、「新しい」契約と呼ばれている。それは、この契約に印を押す血が、第一の契約の血のあとに流されたからである。新しい契約が、アブラハムの時代に効力をもっていたことは、そのとき、神の約束と誓いによつて保証されたことによつて明らかである。「それは、偽ることのあり得ない神に立てられた二つの不変の事からによつて」である(ヘブル六ノ一八)。

ところが、もし、アブラハムに与えられた契約が、贖罪の約束を含んだものであったならば、なぜ、シナイでもう一つの契約を結ぶ必要があったのであろうか。人々は、その奴隷時代に、神に関する知識と、アブラハムに与えられた契約の原則の大部分を忘れてしまっていた。神は、彼らをエジプトから救出し、神の力と恵みを彼らにあらわし、彼らが、神を愛し、信頼するようになることを望まれた。神は、彼らを紅海にお導きになった。そこでエジプト人の追跡によって、彼らは全く逃げ場を失ってしまった。それは彼らが自分たちには全く力がなく神の助けの必要なことを悟るためであった。このようにしてのちに、神は彼らを救い出されたのである。こうして、彼らは神に対する愛と感謝に満たされ、神が彼らを救う力を持つておられることを確信した。神は、地上の奴隷生活からの救済者として、ご自分を人々に結びつけられた。

しかし、さらに大きな真理を彼らの心に深く印象づけなければならなかった。彼らは、偶像礼拝と腐敗のなかで生活していたので、神の神聖さと、自分たちの心のはなはだしい罪深さと、自分たちの力だけでは、神の律法を守ることができないこと、そして、彼らには、救い主が必要であることを真に自覚していなかった。こうしたことを、すべて、彼らは学ばなければならなかった。

神は、彼らをシナイに導き、ご自分の栄光をあらわされた。神は、彼らに律法を与え、服従することを条件にして、大きな祝福をお約束になった。「それで、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、……あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであらう」(出エジプト記一九ノ五、六)。人々は、自分たちの心の罪深さと、キリストの助けがなくては神の律法を守ることができないことを自覚しなかった。そして、彼らは直ちに神と契約を結んでしまった。彼らは、自分たちの義を確立す

ることができると感じて、「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」と宣言した(同・二四ノ七)。彼らは、恐るべき威光のうちに律法が宣言されるのを見、山の前で恐れおののいた。しかし、それにもかかわらず、その後わずか数週間しかたないうちに、彼らは神との契約を破り、偶像にひざまずいて礼拝したのである。彼らは、契約を破ってしまったために、神の恵みを受けることは望めなくなった。そして、今、自分たちの罪深さと、ゆるしの必要を認めた彼らは、アブラハムの契約にあらわされ、そして、犠牲のささげものによって示された救い主の必要を感じるようになった。彼らは今、信仰と愛によって、罪の奴隷からの救い主としての神に結びつけられた。こうしてこそ、彼らは新しい契約の祝福を感謝する用意ができたのである。

「古い契約」の条件は、従って生きよということであった。「人がこれを行うことによって生きるものである」しかし、「この律法の言葉を守り行わない者はのろわれる」(エゼキエル書二〇ノ一、レビ記一八ノ五参照、申命記二七ノ二六)。「新しい契約」は、「さらにまさった約束」によるもので、罪のゆるしの約束と、心を新たにする神の恵みと、神の律法の原則に心を一致させる約束によるのである。「しかし、それらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にする。…わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」(エレミヤ書三一ノ三三、三四)。

石の板に刻まれたのと同じ律法が、聖霊によって心の板に書かれるのである。自分自身の義を確立させようと努力するかわりに、われわれは、キリストの義を受け入れる。キリストの血がわれわれの罪を贖うのである。キリストの服従が、われわれに代わって受け入れられる。こうして、聖霊によって新しくされた心は、「御霊の実」を結ぶのである。キリストの恵みによって、われわれは心に書かれた神の律法に従って生きるのである。キリス

トのみ霊を持っているから、彼が歩かれたように歩くのである。彼は預言者によって、「ご自分のことを言われた。『わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります』（詩篇四〇ノ八）。そして、彼がこの地上におられたときには、『わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしているから、わたしをひとり置きざりになさることはない』と言われた（ヨハネ八ノ二九）。

使徒パウロは、新しい契約のもとにおける信仰と律法の関係を明らかに述べている。「このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。」「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである。」「律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を」 人間は罪深い性質を持っているから、律法を守ることができない。だから律法は、人間を義とすることはできない 「神は…御子を、罪の肉の形で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである」（ローマ五ノ一、三ノ三一、八ノ三、四）。

神の働きは、その発展の段階に相違があり、そして、ちがった時代の人々の要求に応じるために、その力のあらわれ方に相違があったけれども、すべての時代において同じであった。最初の福音の約束から始まって、家長時代とユダヤ時代を通じ、そして、現代に至るまで、贖罪の計画にある神のみこころは、徐々に展開されて与えられたのである。ユダヤの律法の儀式や礼典の中に象徴された救い主は、福音の中に啓示されたものと全く同じであった。神の姿をかこんでいた雲は取り去られた。おおい隠していたものが除かれた。そして、イエス、世の

贖い主はお現われになったのである。シナイから律法を宣言されたかた、そして、モーセに礼典律の戒めをお与えになったかたは、山の上で説教をされたおかたと同じである。律法と預言者の基礎として、彼が宣言された神への愛という大原則は、彼がモーセを通じてヘブル人に語られたものの反復に過ぎなかった。「イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならぬ。」「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならぬ」(申命記六ノ四、五、レビ記一九ノ一八)。両時代を通じて、教師は同じである。神の要求されるところは同じである。神の統治の原則は同じである。なぜなら、「変化とか回転の影とかいうものはない」おかたから、すべてのものがでているからである(ヤコブ一ノ一七)。

シナイからカデシへ

本章は、民数記二一、一二章に基づく。

幕屋の建設は、イスラエルがシナイに到着してから、しばらくの間始まらなかった。聖所は、エジプトを出て二年めの年の初めになって建てはじめられた。その後、祭司の聖別、過越の祭、民の人数の調査、民事、宗教制度の重要な取りきめの完成などがあつて、人々は約一年近くをシナイの宿営で過ごした。彼らの礼拝は、ここで形を整え、律法が国家の政治のために与えられ、カナンの地にはいる準備として、強力な組織づくりが行なわれた。

イスラエルの政治の特徴は、組織が実に行き届いていることであつて、その徹底的なことに共に、単純なことも驚くばかりであつた。神が創造されたすべての物の完全と整然さに表示された著しい秩序が、ヘブルの制度にあらわれていた。神が権威と統治の中心であつて、イスラエルの王であつた。モーセは、神の任命によつて、彼らの目に見える指導者として立ち、神の名によつて律法を執行した。後に、部族の長老の中から七十人の長老が選ばれて、国家の一般民事を扱つてモーセを助けた。次に祭司たちがいて、聖所で主のみこころをうかがった。

かしら、またはつかさが部族を支配した。その下に、「千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長」がいて、最後にいろいろの役をするつかさびとがいた（申命記一ノ一五）。

ヘブル人の天幕は、秩序整然としていた。それは三大区分に分けられ、それぞれの区分の宿営する場所が定まっていた。中央には目に見えない王の住居である幕屋があった。祭司とレビ人はその周囲に配置された。その外側に、他のすべての部族が天幕を張った。

幕屋とそれに付属する物は、宿営中も旅行中もすべてレビ人にゆだねられた。幕屋が進むときは、レビ人が幕屋を取りくずさなければならなかった。停止する場所に到着すると、彼らが幕屋を組み立てた。他の部族の人は近寄ると殺されるので、だれも近づくことはできなかった。レビ人は、レビの三人のむすこの子孫に従って、三組に分けられて、それぞれに特別の場所と仕事を与えられた。幕屋の前が一番近いところに、モーセとアロンの天幕があった。南のほうに、契約の箱その他の器物の管理をするコハテ人が宿営した。北のほうには、幕屋の柱や横木や座の管理をするメラリ人、幕屋の後方には、天幕のおおいやあげばりをゆだねられたゲルシヨン人の場所があった。

各部族の位置もまた定められていた。各部族は、主が命ぜられたとおりに、おのおのその部族の旗のもとに進し、宿営しなければならなかった。「イスラエルの人々は、おのおのその部隊の旗のもとに、その父祖の家の旗印にしたがって宿営しなければならない。また会見の幕屋のまわりに、それに向かって宿営しなければならない。」「彼らは宿営するのと同じように、おのおのその位置で、その旗にしたがって進まなければならない」（民数記二ノ二、一七）。エジプトからイスラエルについて来た入り混じった群衆は、部族と同じ場所を占めることは

許されなかった。彼らは宿営の外に住むべきであつた。そして彼らの子孫は、三代めになるまで会衆から除外されることになっていた(申命記二三ノ七、八参照)。

宿営の中全体と宿営のまわりは、厳格な秩序を保つとともに、細心の注意を払って清潔に保つことが命じられた。衛生の規則が徹底的に実施された。どんな理由であろうと、汚れた人は宿営の中にはいることを禁止された。このような大群衆の中で健康を保つために、こうした規定はどうしても欠くことができないものであつた。イスラエルがよい神の臨在を仰ぐためには、完全な秩序と清潔を維持することが必要であつた。神は、こう言われた。「あなたの神、主があなたを救い、敵をあなたにわたそうと、陣営の中を歩まれるからである。ゆえに陣営は聖なる所として保たなければならない」(申命記二三ノ一四)。

イスラエルが旅をするときは、すべて、「主の契約の箱は、…彼らに先立つて行き、彼らのために休む所を尋ねもとめた」(民数記一〇ノ三三)。神の聖なる律法のはいつた契約の箱は、コハテの子らにかつがれて、先頭に立つて行くのであつた。その前にモーセとアロンが行つた。そして、銀のラツパを持った祭司たちがその近くにいた。この祭司たちは、モーセから指示を受けて、それをラツパによつて人々に知らせた。各組の指導者は、ラツパで知らされたとおりに、取るべき行動をすべて明らかに指示しなければならなかつた。ラツパの指示に従うことを怠つた者は、だれでも罰として殺されることになっていた。

神は、秩序の神である。天と関係がある者は、すべて、完全な秩序を保っている。服従と完全な規律が、天使軍の行動の特徴である。秩序と行動の一致があつてはじめて、成功をおさめることができる。神は、イスラエルの時代と同様に、今日も神の働きにおいて、秩序と組織を要求される。神のために働いている者は、だれでも軽

率で中途はんばなやり方でなくて、物事をよく考えてしなければならぬ。神は、神の働きが、信仰と正確さをもって行なわれることを望まれる。それは、神が、ご自分の是認の印をその働きに押すことができるためである。神ご自身が、イスラエル人のすべての旅行の指示をお与えになった。彼らの宿営の場所は、雲の柱がおりてくることによって指示された。そして、彼らがそこにとどまっていなければならない間、雲は聖所の上にとどまっていた。彼らが旅を続けるときには、雲が幕屋のはるか上にあがって行った。止まるときも進むときもともに、厳粛な祈りがささげられた。「契約の箱の進むときモーセは言った、『主よ、立ちあがってください。あなたの敵は打ち散らされ、あなたを憎む者どもは、あなたの前から逃げ去りますように』。またそのとどまるとき、彼は言った、『主よ、帰ってきてください、イスラエルのちよろずの人に』」(民数記一〇ノ三五、三六)。

シナイからカナン¹の国境のカデシまでは、わずか十一日の旅程であつた。そして、ついに雲が前進の合図をしたときに、イスラエルの軍勢はすみやかに美しい地にはいることを期待して、行進を開始したのであつた。主は、彼らをエジプトから救い出したときに奇跡を行なわれた。そして、今は、彼らは、神を彼らの王として受け入れる正式の契約を結び、至高者の選民として認められていたのであるから、どんな祝福でも受けることを期待できるのであつた。

それなのに、彼らは長く滞在していたところを不本意ながら出発したのである。彼らは、そこを自分たちの故郷のように思っていた。神は、あの花崗岩の防壁の中に、ご自分の民を他のあらゆる国々から区別して集めて、彼らに神のきよい律法をくり返してお与えになった。彼らは、神の栄光が何度もあらわれたきよい山の、灰色の峰や不毛の山頂をながめることを愛した。そこは、神と天使たちが現われた場所として、ゆかりの地となってい

たので、そこを無造作に去ったり、あるいはうれしそうに去ったりするのでさえ、申しわけないことのように彼らは思うのであった。

しかし、ラツパを吹く者の合図に従って、宿営全体は幕屋をまんなかにかついで、各部族がそれぞれの旗のものと定められた位置について出発した。すべての目は、雲がどの方向に導いていくかを熱心に見ようと努めていた。雲が、黒々と荒れ果てた巨大な山々が重なっている東方へ動いて行ったとき、多くの人の心に悲しみと疑惑の念が起こった。

前進するに従って、道はますます困難になってきた。彼らの進む道は、石の多い峡谷と不毛の荒れ地であった。彼らの回り一面は、広大なさばくであった。「荒野なる、穴の多い荒れた地、かわいた濃い暗黒の地、人の通らない、人の住まない地」であった（エレミヤ書二ノ六）。岩にかこまれた谷間から谷間を、男や女や子供たちが、動物に車を引かせ、牛、羊などの長い行列を従えて通っていった。その進みぐあいは、どうしても遅々としてはかどらなかった。長い間宿営したあとの群衆は、道中の危険や苦難に耐える準備がなかった。

三日の旅が過ぎると、つぶやきの声が公然とあがるようになった。つぶやきは、まず入り混じった群衆から起こった。彼らの多くは、完全にイスラエルに合同していないで、何か非難する材料はないものかと目を見張っていた。進行の方向が彼らの気に入らなかった。モーセも彼らも共に、雲の指導に従っているのは十分承知しているが、彼らは絶えずモーセの指導に何かと不平を言った。不満は伝染性を持っている。そして、それは間もなく宿営全体に広がっていった。

彼らは、また肉を食いたいと言いだした。彼らは、マナが十分に与えられていながら満足しなかった。イスラ

エル人は、エジプトの奴隷生活の間、最も単純な食物を食べて生命をつながなければならなかった。しかし、困苦と激しい労働と空腹のために、それをおいしく食べることができた。ところが、彼らと一緒に来ていたエジプト人の多くは、ぜいたくな食事になれていた。まず、このような人々がつぶやき始めたのである。イスラエルがシナイに到着する直前に、マナが与えられたとき、主は彼らの熱心な願いに応じて肉をお与えになったが、それはただ一日だけのことであった。

神は、マナと同様に肉もたやすくお備えになることができたのであるが、それが与えられなかったことは、彼らのためを考えた上でのことであった。多くの者がエジプトで食べ慣れていた刺激性の食物よりも更によい食物を与えることが、神のみこころであった。ゆがめられた食欲を、もつと健康な状態にもどさなければならなかった。それは、神がエデンの園で、アダムとエバにお与えになった地の果実など、人間に最初に与えられた食物を楽しむことができるようになるためであった。イスラエルの人々に動物の肉がほとんど与えられなかったのは、こうした理由からであった。

サタンは、こうした制限が不正で残酷なもののように人々に思わせた。サタンは、禁じられたものを、人々がほしがるようにしむけた。なんの制限もなく食欲をほしいままにすれば、肉欲にふけりやすくなるのをサタンは知っていた。こうして、人々はたやすく彼の手中に陥った。病気と不幸の創始者は、最も成功をおさめる場所では人々を攻撃する。サタンは、エバに禁断の実を食べるように誘惑してからこのかた、主として食欲への誘惑によって、人々を罪に陥れた。サタンがイスラエルの人々を神に対してつぶやかせたのも、この同じ方法によってであった。飲食の不節制は、人々を低い欲望にふけらせるもとなり、ひいては、人々にすべての道徳的義務を無

視させる原因になる。彼らが誘惑に襲われるならば、なんの抵抗力ももたないのである。

神は、イスラエルの人々を、純潔で清く幸福な国民として、カナンに確立させるためにエジプトから連れ出されたのである。この目的を達成するために、神は彼らに訓練の過程をお与えになった。それは彼ら自身のためであるとともに、彼らの子孫のためであった。彼らが神の賢明な制限に従って、快く食欲を制したのであれば、彼らのうちには、衰弱と病気はなかったことであろう。彼らの子孫は、身体的にも、精神的にも活気にあふれていたことであろう。彼らは、真理と義務に関する明らかな知覚、鋭い識別力、健全な判断力を持っていたことである。しかし、神の制限と要求に快く従わなかったことが大きな理由となって、彼らは神が望まれた高い標準に到達できず、神が与えようとしておられた祝福を受けることができなかった。

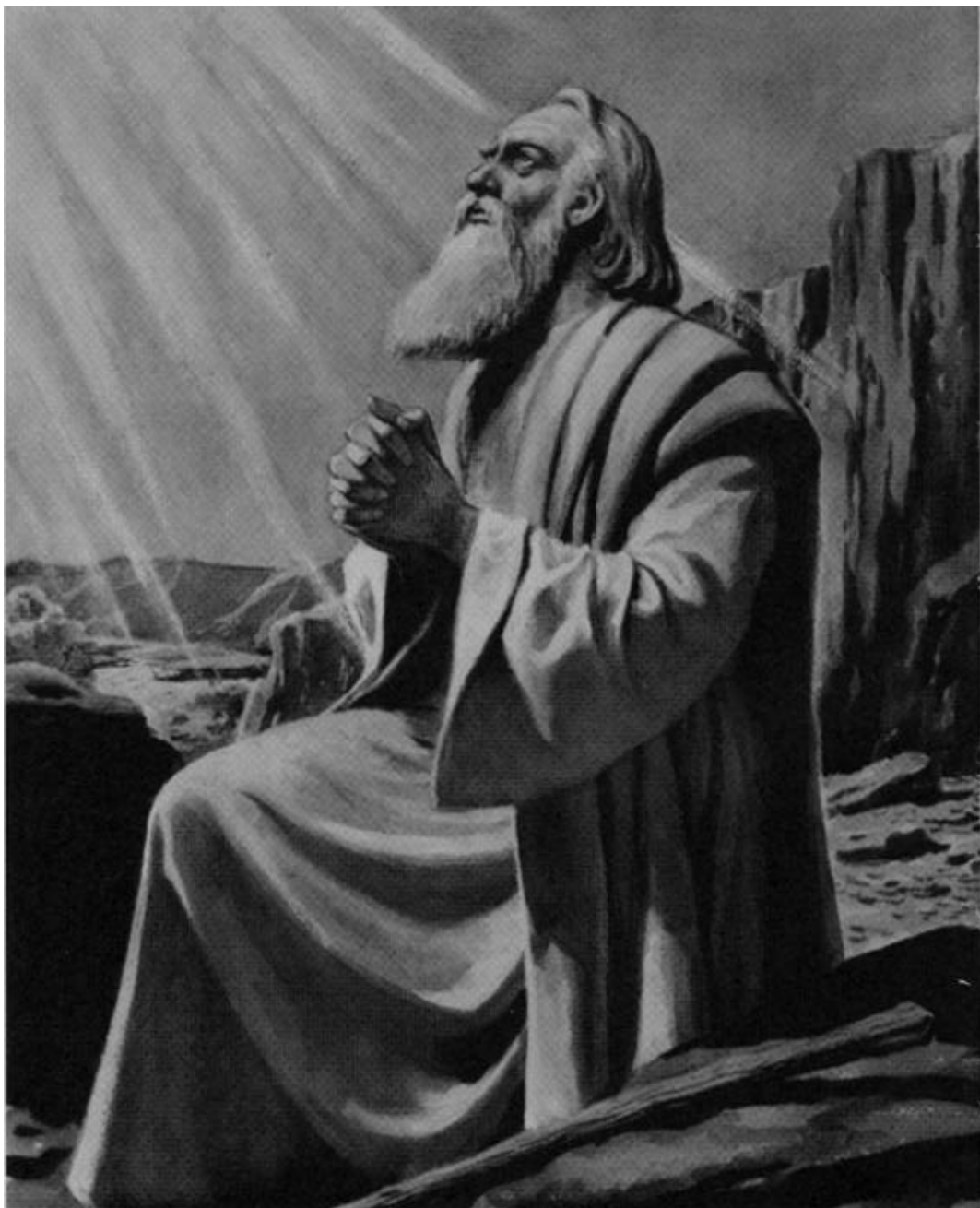
「おのが欲のために食物を求めて、その心のうちに神を試みた。また彼らは神に逆らって言った、『神は荒野に宴を設けることができるだろうか。見よ、神が岩を打たれると、水はほとばしりで、流れがあふれた。神はまたパンを与えることができるだろうか。民のために肉を備えることができるだろうか』と。それゆえ、主は聞いて憤られた」と詩篇記者は言った(詩篇七八ノ一八 一一)。紅海からシナイへ行く旅の途中には、つばやきと騒ぎがたびたび起こった。しかし、神は、彼らの無知と盲目をあわれまれて、彼らの罪をすぐに罰することをなさなかった。しかしそのことがあった後で、神は、ホレブでご自分を彼らにあらわされた。彼らは大きな光を受けていた。彼らは、神の威光と力とあわれみの証人となったからであった。そのため、彼らの不信と不満は大きな罪となるのであった。そればかりでなく、彼らは、主を王として受け入れ、その権力に従うことを誓っていた。彼らのつばやきは、今となつては反逆であった。イスラエルを無政府と滅亡とから守ろうとするなら、これは、

反逆として直ちに厳罰が与えられなければならなかった。「主の火が彼らのうちに燃えあがって、宿営の端を焼いた」(民数記一一ノ一)。つぶやいた者のなかの最も罪深い人々は、雲の中からのいなびかりによって死んだ。

人々は恐れて、彼らのために主に懇願することをモーセに求めた。モーセが主に祈ったので、その火はしずまった。この刑罰を記念して、人々はその所の名をタベラ(燃えあがる)と呼んだ。

ところが、間もなく、つぶやきは以前よりもひどくなった。この恐ろしい刑罰は、生き残った人々にへりくだりと悔い改めの心を起こさせるどころか、ますます彼らのつぶやきを増す一方に思われた。目をどこに向けても人々が天幕の戸口に集まって、泣きわめいていた。「彼らのうちにいた多くの寄り集まりびとは欲心を起し、イスラエルの人々もまた再び泣いて言った、『ああ、肉が食べたい。われわれは思い起すが、エジプトでは、ただで、魚を食べた。きゅうりも、すいかも、にらも、たまねぎも、そして、にんにくも。しかし、いま、われわれの精根は尽きた。われわれの目の前には、このマナのほか何もない』」(同・一一ノ四 六)。こうして、彼らは創造主がお与えになった食物に不満の声をあげた。しかし彼らは、その食物が彼らに適したものである証拠を常に目の前に見ていた。彼らは困難に耐えていたにもかかわらず、全部族の中でだれひとりとして、からだの弱った者は出なかったのである。

モーセは失望した。モーセ自身の子孫が大きな国民にされるということであつたが、モーセは、イスラエルが滅ぼされることのないように嘆願した。モーセは、イスラエルを愛して、彼らが滅ぼされてしまうよりは、むしろ自分の名を命の書から消し去ってくださいと祈ったのであつた。モーセは、自分のすべてを彼らのためにささげ尽くしたにもかかわらず、彼らの態度はこのようでありさまであつた。彼らは、自分たちの困難、また取り越



反逆したイスラエルに神の刑罰が下り、多くの者が火で焼かれたときに、
モーセは、神の民が、全滅しないように、熱心に主にとりなしの祈りをした。

し苦勞などのすべてを、モーセのせいにした。そして、人々の悪意に満ちたつばやきは、モーセの背負っている苦勞と責任の重荷をさらに重くした。モーセは、困惑して、神に対する信頼を失いそうになった。彼の祈りは、ほとんど不平のように聞こえる。「あなたはなぜ、しもべに悪い仕打ちをされるのですか。どうしてわたしはあなたの前に恵みを得ないで、このすべての民の重荷を負わされるのですか。……わたしはどこから肉を獲て、このすべての民に与えることができるでしょうか。彼らは泣いて、『肉を食べさせよ』とわたしに言っているのです。わたしひとりでは、このすべての民を負うことができません。それはわたしには重過ぎます」(同・一一ノ一一四)。

主は、モーセの祈りをお聞きになり、イスラエルの長老七十人を集めるようにお命じになった。この人々は、年をとったばかりでなく、気品と正しい判断と経験の豊かな人々であつた。彼らを「会見の幕屋に連れてきて、そこにあなたと共に立たせなさい。わたしは下つて、その所で、あなたと語り、またわたしはあなたの上にある靈を、彼らにも分け与えるであらう。彼らはあなたと共に、民の重荷を負い、あなたが、ただひとりで、それを負うことのないようにするであらう」と主は言われた。

主は、モーセが自分と責任を分担するために、最も忠実で有能な人々を選ぶことをお許しになった。それは、彼らの影響によつて、人々が乱暴を働くのを防ぎ、反乱をしずめることができるようになるためであつた。しかし、この人々が役職についたために、後で、重大な弊害が起ることになった。もしも、モーセが神の力と恵みの証拠に対して、それにふさわしい信仰をあらわしていたならば、この人々は選ばれなかったことであらう。しかし、モーセは、自分自身の重荷と任務とをあまりに大きく考え過ぎ、自分は、ただ神に用いられる器に過ぎな

いという事実をほとんど見失ってしまった。イスラエルののろいとなっていたつばやきの精神を、たとえどんなにわずかであっても、モーセが心にいただくことは、許されなかった。もしもモーセが、完全に神に信頼していたならば、主は、彼をたえず導き、どんな緊急事態が起こっても、力をお与えになったことであろう。

モーセは、神が人々のためにしようとしておられる事の準備をするように命じられた。「あなたがたは身を清めて、あすを待ちなさい。あなたがたは肉を食べることができであろう。あなたがたが泣いて主の耳に、わたしたちは肉が食べたい。エジプトにいた時は良かったと言ったからである。それゆえ、主はあなたがたに肉を与えて食べさせられるであろう。あなたがたがそれを食べるのは、一日や二日や五日や十日や二十日ではなく、一か月に及び、ついにあなたがたの鼻から出るようになり、あなたがたは、それに飽き果てるであろう。それはあなたがたのうちにえられる主を軽んじて、その前に泣き、なぜ、わたしたちはエジプトから出てきたのだろうと言ったからである」(同・一一ノ一八 二〇)。

「わたしと共にいる民は徒歩の男子だけでも六十万です。ところがあなたは、『わたしは彼らに肉を与えて一か月のあいだ食べさせよう』と言われます。羊と牛の群れを彼らのためにほふって、彼らを飽きさせるといいますか。海のすべての魚を彼らのために集めて、彼らを飽きさせるといいますか」とモーセは言った(同・一一ノ二一、二二)。

モーセは、信頼の念の薄いことを主から責められた。「主の手は短かろうか。あなたは、いま、わたしの言葉の成るかどうかを見るであろう」(同・一一ノ二三)。

モーセは、主の言葉を会衆に伝えた。そして、七十人の長老の任命を発表した。偉大な指導者が、これらの選

ばれた人々に与えた任命の言葉は、現代の裁判官や立法官にとつても、正当な裁判の模範とするに十分価値のあるものである。「あなたがたは、兄弟たちの間の訴えを聞き、人とその兄弟、または寄留の他国人との間を、正しくさばかなければならない。あなたがたは、さばきをする時、人を片寄り見てはならない。小さい者にも大いなる者にも聞かなければならない。人の顔を恐れてはならない。さばきは神の事だからである」(申命記一ノ一六、一七)。

さて、モーセは、七十人を幕屋に召集した。「主は雲のうちにあって下り、モーセと語られ、モーセの上にある靈を、その七十人の長老たちにも分け与えられた。その靈が彼らの上にとどまつた時、彼らは預言した」(民数記一ノ二五)。ペンテコステの日の弟子たちのように、彼らは、「上からの力」に満たされた。こうして、主は、彼らの任務のために準備を与え、会衆の前で彼らに榮譽をお与えになった。それは、この人々がモーセと一致して、イスラエルの統治をするために、神に選ばれた者であるという信頼を人々が持つめであつた。

再び、大指導者の気高い無我の精神の証拠が示された。七十人の中のふたりは、自分たちはそのような責任ある地位には適さないと考えて、幕屋で兄弟たちに加わつていなかった。しかし、神の靈が彼らのいるところ与えられて、彼らも預言した。このことの知らせを受けたヨシユアは、そのような不統一なことは、分裂の恐れがあるからやめさせようと思つた。ヨシユアは、彼の主人の名誉を傷つけまいとして、「わが主、モーセよ、彼らをさし止めてください」と言つた。モーセは答えて、「あなたは、わたしのためを思つて、ねたみを起しているのか。主の民がみな預言者となり、主がその靈を彼らに与えられることは、願わしいことだ」というのであつた(同・一一ノ二八、二九)。

強い風が海から吹いて来て、うずらの群れを運んできた。「その落ちた範囲は、宿営の周囲で、こちら側も、おおよそ一日の行程、あちら側も、おおよそ一日の行程、地面から高さおおよそ二キュビトであった」。人々は、その日一日中、そしてその晩も次の日も一日中、奇跡的に与えられた食物を集めた。それはおびただしい量であった。「集めることの最も少ない者も、十ホメルほど集めた」(同・一一ノ三二、三三)。すぐ使わない分は、かわかして保存することができたから、食料は、約束通りに丸一か月分は十分にあった。

神は、人々があまりにもほしがるために、彼らのために、最善のものではなかったが、お与えになった。彼らは、自分たちのからだのためになるものでは満足しなかったのである。彼らの反逆的欲求は満たされたけれども彼らは、そのために苦しまなければならなかった。彼らは、食べたいだけ食べた。彼らの不節制は直ちに罰せられた。「主は非常に激しい疫病をもつて民を撃たれた」(同・一一ノ三三)。多くの人々が熱病で倒れた。一方、彼らの中の最も罪深い人々は、彼らがほしがった食物を口にするやいなや、打たれた。

タベラを出たあと、次に宿営したのは、ハゼロテであったが、ここでまた、苦い試練がモーセを待っていた。アロンとミリアムは、イスラエルの中で榮譽と指導の地位に立っていた。ふたりとも預言の賜物が与えられていた。また、ふたりとも、ヘブル人の救済のときには、モーセとともに働くように神の命令を受けたのであった。主は、預言者ミカによって、「モーセ、アロンおよびミリアムをつかわして、あなたに先立たせた」と言われた(ミカ書六ノ四)。ミリアムは、まだ子供であったが、赤子モーセを隠した小さなかごをナイル川のそばで見張ったりして、幼いときから品性の力強さをあらわしていた。ミリアムは、詩と音楽の才能が豊かに与えられていたので、イスラエルの女たちを指導して、紅海の岸辺で歌い踊った。ミリアムは、モーセとアロンに次いで、人々

から愛され、天の誉れを受けていた。しかし、天で初めに不和をもたらした同じ罪悪がミリアムの心に起こり、その不満にすぐ同情した者があつた。

七十人の長老を任命することに関して、ミリアムとアロンは、なんの相談も受けなかった。そのために、彼らはモーセに対してねたみをいだいた。イスラエルがシナイに向かう途中で、エテロの訪問があつたとき、モーセは、義理の父の勧告をすぐに受け入れたので、アロンとミリアムは、彼のモーセに与える影響が自分たちよりも強力になるのではないかと恐れた。七十人の長老の組織が定められたときも、彼らは、自分たちの権威が無視されたと思つた。ミリアムとアロンは、モーセがどんなに重い苦勞と責任を背負つていたかを知らなかった。しかし、彼らは、自分たちがモーセを助けるように選ばれたために、自分たちも同じように指導の責任を分担したものと考え、それ以上の助け手を任命することはよけいなことであると考へたのである。

モーセは、他のだれも感じたことがないほど、自分にゆだねられた大きな任務の重要性を感じた。彼は、自分の弱さを感じて、神の勧告を仰いだ。アロンは、自分を過大に評価して、神をさほど信頼しなかった。アロンは責任が負わせられていたときに、シナイでの偶像礼拝に関して、卑怯にも妥協的態度をとつて、彼の品性の弱さを暴露した。しかし、ミリアムとアロンは、ねたみと野心に目がくらんで、このことを考へなかった。アロンはその家族が祭司職に任じられて、神から大きな榮譽を与えられていた。それにもかかわらず、このことでさえ、彼の自己賞揚の欲望を助長した。「彼らは言つた、『はただモーセによって語られるのか。われわれによつても語られるのではないのか』」（民数記一二ノ二）。自分たちも同様に神の恵みを受けているとみなして、自分たちも同じ地位と権威が与えられているものと感じた。

ミリアムは、不満をいだいて、神が特にご支配になった事件について不平の種を見いだした。ミリアムは、モーセの結婚を喜んでいなかった。モーセがヘブル人のうちから妻をめとらないで、外国の女を選んだことは、ミリアムの家族と国民の誇りを傷つけるものであった。チツポラは、あからさまに軽べつされた取り扱いを受けた。モーセの妻は、「クシの女」と呼ばれているが、ミデアン人であって、アブラハムの子孫であった。彼女は、

容貌の点では、ヘブル人よりいくぶんか浅黒いところが異なっていた。チツポラは、イスラエル人ではなかったが、真の神の礼拝者であった。チツポラは、小心で、遠慮がちで、やさしく、愛情がこまやかであった。そして人の苦痛を見ると非常に心を痛めた。モーセはエジプトへ行く途中で、チツポラがミデアンへ帰ることに同意したのはこのためであった。モーセは、エジプト人に降る刑罰を見る苦痛を、彼女に与えなくなかったのである。

チツポラは、荒野で彼女の夫に再会した。そして、モーセが重い荷を背負って体力をすり減らしているのに気づき、自分の心配をエテロに語った。そこでエテロが、その場合どうすればよいかを提案することになったのである。チツポラに対して、ミリアムが反感をいだいた主な理由はこうしたことがあったからである。ミリアムは自分もアロンも無視されたと思って感情を害した。そして、その原因がモーセの妻にあると考えた。自分たちが前のように相談にあずからないのは、チツポラが妨げているためである。ミリアムは思い込んだ。もし、アロンが正しいことのために堅く立ったならば、このような悪をとどめることができたことであろう。しかし、アロンは、ミリアムにその行動が罪深いものであることを示さずに、かえってミリアムに同情し、彼女のつぶやきの言葉を聞き、そのねたみに同意するようになってしまった。

モーセは彼らの非難をつぶやかず、黙って耐えた。モーセが人々の不信とつぶやきを忍耐し、彼のゆるがぬ助

け手であるべき人々の誇りとねたみに耐えることができたのは、ミデアンで苦勞しながら待っていた年月の間の経験、すなわち、彼がそこで得たけんそんと忍耐の精神のおかげであった。モーセは、「その人となり柔和な」と、地上のすべての人にまさっていた」（同・一二ノ三）。そのため、モーセは、すべての人にまさって神の知恵と指導とが与えられていた。聖書に、「へりくだる者を公義に導き、へりくだる者にその道を教えられる」とある（詩篇二五ノ九）。柔和な者は、すなおで、喜んで教えを受けるから、主に導かれるのである。彼らは神のみこころを知って行なおうと、まじめに願っている。救い主は、「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、…この教が…わかるであろう」と約束された（ヨハネ七ノ一七）。そして、使徒ヤコブによって「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」と宣言された（ヤコブ一ノ五）。しかし、主の約束は、快く主に全く従う者にだけ与えられる。神は、どの人の意志をも強制されない。であるから、高ぶって教えを受けない者や、自分かつてなことをしようとしている者を導くことはできない。二心の人、自分自身の意志のまま行動しようとする人は、神のみこころを行なうと口では言っているが、「そういう人は、主から何かをいただけるもののように思ふべきではない」と書かれているのである（同・一ノ七）。

神はモーセを選んで、神の霊を彼の上にお与えになつたのである。そして、ミリアムとアロンは、つばやいたことによつて、定められた指導者に対してばかりでなく、神ご自身に対して、不忠誠の罪を犯したのである。つばやいた扇動者たちは、幕屋に呼ばれ、モーセと顔を合わせた。「主は雲の柱のうちにあつて下り、幕屋の入口に立つて、アロンとミリアムを呼ばれた」（民数記一二ノ五）。彼らが預言の賜物を与えられていたことはなにも

拒否されなかった。神は、彼らとも夢と幻のうちにお語りになったことがあったであろう。しかし、主ご自身が「わたしの全家に忠信なる者である」と宣言されたところのモーセには、それよりももっと親密な交わりが与えられていた。神は、**モーセ**とは口ずから語られた。『なぜ、あなたがたはわたしのしもべモーセを恐れず非難するのか』。主は彼らにむかい怒りを発して去られた（同・一二ノ八、九）。神の怒りのしるしとして、雲が幕屋から離れた。そして、ミリアムは打たれた。彼女は「らい病となり、その身は雪のように白くなった」（同・一二ノ一〇）。アロンは助かったが、ミリアムの罰によって、彼もきびしく譴責された。こうして彼らの誇りは打ち砕かれて、アロンは自分たちの罪を告白し、ミリアムがこの恐ろしい罰を受けたまま滅びることがないように嘆願した。モーセの祈りにこたえて、ミリアムのらい病はいやされた。しかし、ミリアムは七日の間、宿営の外に閉じ込められた。ミリアムが宿営から追放されてはじめて、神の恵みの象徴である雲が、再び幕屋にとどまるようになった。ミリアムの高い地位に対する尊敬と、ミリアムの受けた罰を悲しんで、全会衆はハゼロテにとどまって、彼女の帰りを待った。

このように主の怒りがあらわされたのは、イスラエル全体に対する警告のためであって、不満と不服従の精神が強くなるのを防ぐためであった。もしも、ミリアムのねたみと不満とが著しく譴責されないまましていると、さらに大きな害毒を及ぼしたことであろう。ねたみは人の心の中の最も悪魔的性質の一つであって、最も恐ろしい結果を生じるものである。賢者は言っている。「憤りはむごく、怒りははげしい、しかしねたみの前には、だれが立ちえよう」（箴言二七ノ四）。初めに天で不和を起したのは、ねたみであった。そして、ねたみのゆえに人の間で数えきれない害がもたらされた。「ねたみと党派心のあるところには、混乱とあらゆる忌むべき行為

とがある」(ヤコブ三ノ一六)。

人のことを悪く言ったり、他の人の動機や行為をさばくことは、小さいことであると思つてはならない。「兄弟の悪口を言ったり、自分の兄弟をさばいたりする者は、律法をそしり、律法をさばくやからである。もしあなたが律法をさばくなら、律法の実行者ではなくて、その審判者なのである」(同・四ノ一二)。審判者は、ただひとりだけである。「主は暗い中に隠れていることを明るみに出し、心の中で企てられていることを、あらわにされるであろう」(コリント第一・四ノ五)。そして、だれでも同胞をさばいて罪に定める者は、創造者の権威を侵害しているのである。

聖書は、神がご自分の使者として行動するように召された人々を、軽々しく非難することがないように特に教えている。使徒ペテロは、極悪の罪人を描写して言っている。「大胆不敵なわがまま者であつて、栄光ある者たちをそしつてはばかりとるが、ない。しかし、御使たちは、勢いにおいても力においても、彼らにまさっているにかかわらず、彼らを主のみまえに訴えそしることはしない」(ペテロ第二・二ノ一〇、一一)。また、パウロは教会の上に立てられた者について、勧告を与えて、「長老に対する訴訟は、ふたりか三人の証人がない場合には受理してはならない」と言っている(テモテ第一・五ノ一九)。神の民の指導者と、教師としての重い責任を人々に負わせられた神は、人々がそのしもべたちをどのようにあつかうかの責任を問われる。われわれは、神が尊ばれた人々を尊ばなければならない。神が、神の働きの重荷を負わせられた人々をねたみ、つぶやくすべての者にとって、ミリアムに下った罰は、自分に対する譴責であると思わなければならない。

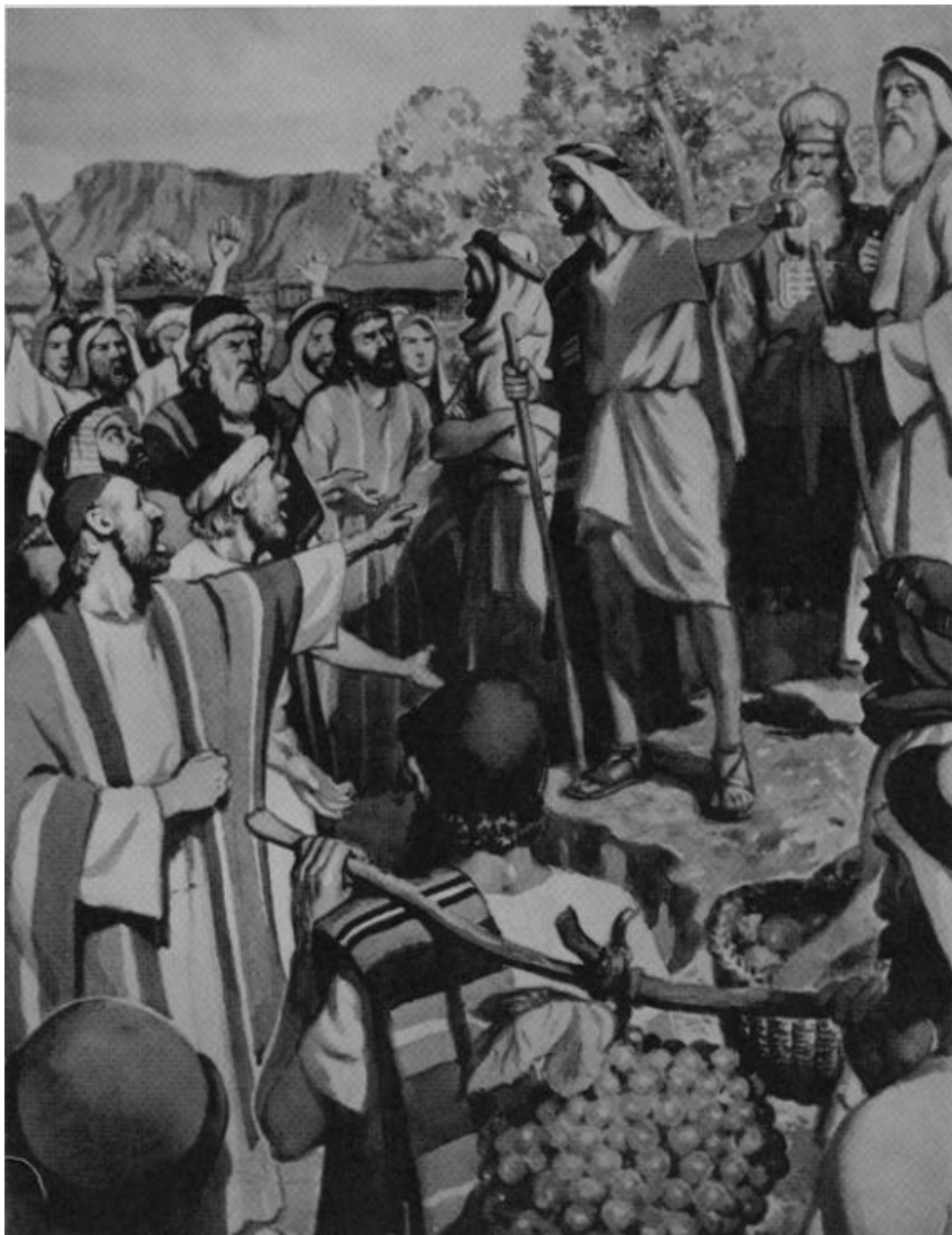
第 34 章

十二人の斥候

本章は、民数記一三、一四章に基づく。

ヘブルの軍勢は、ホレブの山を去ってから十一日後に、パランの荒野にあるカデシに天幕を張った。ここは、約束の国境から遠くなかった。人々の希望によつて、ここから斥候を送り出して国をさぐらせることになった。モーセが、このことを主に申し上げると、各部族のつかさをひとりずつ、そのために選ぶようにという指示と、許可が与えられた。斥候はさしず通りに選ばれた。そして、モーセは国土の様子を行つて見てくるように彼らに命じた。そこは、どんなところか、どんなありさまで、どんな資源があるか、どんな人々が住んでいるか、強いかわいかわい、多いかわい少ないかわい、また、土地は、肥えているかわいせているかわい、どんなものができるかわい、その地のくだものを取つてくるようにと言った。

彼らは出かけて行つた。そして、彼らは、南の国境からはいつて、北の果てまで進んだ。彼らは、出かけてから四十日たつて帰つてきた。イスラエルの人々は、大きな希望をいだいていた。そして、期待に胸をふくらませて待つていた。斥候たちの帰つた知らせが、部一族から部族へと伝わり、歓呼の聲があがった。人々は走り出て、



十人の斥候の悲観的報告を聞いて、イスラエルの人々が失望したときに、カレブは、神の約束をくり返して、今こそ出て行って征服するようにと人々を励ました。

危険な任務を果たして無事に帰ってきた使者たちを出迎えた。斥候たちは、地が肥えていることを示すくだもの見本を持ってきた。そのころは、ぶどうの熟す季節であつた。そして、彼らは、ふたりの男が棒でかつがねばならないほど大きな房を持ってきた。また、いちじくやざくろもたくさん実つていたので、彼らはそれも持ってきた。

人々は、自分たちがこんなによい地を手に入れるようになることを喜び、斥候たちがモーセに報告している言葉を一言も聞きもらすまいと、熱心に耳を傾けた。「わたしたちはあなたが、つかわした地へ行きました。そこはまことに乳と蜜の流れている地です。これはそのくだものです」と斥候たちは、まず言った(民数記一三ノ二七)。人々は熱狂した。彼らは、主の声に心から従つて、今すぐにも、その地を占領するために出かけようとした。しかし、その国がどんなに美しく、また土地が肥えているか話した後で、斥候の中のふたりのほかは、イスラエルの人々が、カナンを征服しようと思えば、どんな困難と危険に会わなければならないかを、詳しく述べた。彼らは、カナンの各地に散在する強国を列挙し、その町々が城壁に囲まれていて、非常に大きく、そのなかの住民も強力で、征服は不可能であろうと言つた。彼らは、また、そこでアナクの子孫である巨人たちを見、国土の占領はとうてい考えられないと言つた。

ここで事態は一変した。斥候たちがサタンにそそのかされて失望し、彼らの不信を口にしたとき、人々の希望と勇氣は絶望にかわつた。彼らの不信仰は、会衆の上に暗い影を投げ、選民のためにくり返し表わされた神の大きな力を忘れさせた。人々は落ちついて反省しようとしなかつた。ここまで彼らを導かれたおかたが、必ずこの土地をお与えになることを彼らは考えなかつた。神がどんなに驚くべき方法で、海を開いて道となし、パ口の追

跡軍を滅ぼして、压制者より救ってくださったかを、彼らは思い起こさなかった。彼らは、神を考えに入れなかった。そして、ただ武力だけに頼っているかのように行動した。

彼らは、自分たちの不信仰によって、神の力を制限し、ここまで彼らを安全に導かれた手にたよらなかった。そして、彼らはまた、モーセとアロンに対してつぶやくという彼らの以前のあやまちをくり返した。「これでわたしたちの大きな望みは、みな消えてしまった。ここは、わたしたちが、わざわざエジプトから占領するためにやって来た地なのだ」と彼らは言った。彼らは、指導者が人々を欺き、イスラエルの民を苦難に陥れていると非難した。

人々は、失望と絶望に陥り、自暴自棄になった。悲しそうなうめき声があがった。そして、それに心乱れてつぶやく声が混じった。カレブは、何が起こったのかに気づき、あえて神の言葉の正しさを守るために立ち上がった。カレブはできるかぎりを尽くして、不忠実な仲間たちの悪影響を阻止しようとした。しばらくの間、人々は、美しい国に関するカレブの希望と勇氣に満ちた言葉に、静かに耳を傾けた。彼は、すでに斥候たちが言ったことと反対のことは言わなかった。城壁は高く、カナン人は強い。しかし、神は、イスラエルにその国を与えると約束になったのである。「わたしたちはすぐにのぼって、攻め取りましょう。わたしたちは必ず勝つことができます」とカレブは勧めた(同・一三ノ三〇)。

しかし、十人の斥候たちは、カレブの言葉をさえぎって、彼らの前進をはばむものを今までよりもっと大聲に言った。「わたしたちはその民のところへ攻めのぼることはできません。彼らはわたしたちよりも強いからです。…その所でわたしたちが見た民はみな背の高い人々です。わたしたちはまたそこで、ネピリムから出た

アナクの子孫ネピリムを見ました。わたしたちには自分が、いなごのように思われ、また彼らにも、そう見えたに違いありません」と彼らは言った(同・一三ノ三一 三三)。

一度誤った道にふみ込んだこの人々は、頑強にカレブとヨシユアに敵対し、モーセに敵対し、そして神に敵対したのである。前進しようとするごとに、彼らはいよいよ心をかたくなにした。カナンを占領しようとする試みは、みな阻止しようと彼らは決心した。彼らは、自分たちの与えた悪影響をいかにもまことらしくするために、真実を曲げたのである。そこは、「そこに住む者を滅ぼす地です」と彼らは言った(同・一三ノ三二)。これは、悪い報告であるばかりでなく、いつわりの報告である。これは、つじつまが合わないことである。斥候たちは、その国が実り豊かで栄えたところであると言い、人々は大きいと言った。もしも、氣候が不順で「住む者を滅ぼす地」であるとするならば、以上のことはみなあり得ないことである。しかし、人が一度不信を心にいだいてしまふならば、彼らは、サタンの支配に身をゆだねたのであって、どこまでサタンにひかれていくかわからないのである。

「そこで、会衆はみな声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした」(同・一四ノ二)。暴動が起こり、公然と反旗をひるがえす者があいついで起こった。なぜなら、サタンが完全に指導権を握り、人々は理性を失ったのかと思われた。神が、彼らのよこしまな言葉を聞き、臨在の天使である主が、雲の柱に包まれた中で、彼らの恐ろしい怒りの爆発をこらんになったことを忘れて、彼らは、モーセとアロンをのろった。彼らは、悲しんで、「わたしたちはエジプトの国で死んでいたらよかったのに。この荒野で死んでいたらよかったのに」と言った(同・一四ノ二)。それから彼らは、神に反抗心を起こした。「なにゆえ、主はわたしたちをこの地に連れてきて、つるぎ

に倒れさせ、またわたしたちの妻子をえじきとされるのであろうか。エジプトに帰る方が、むしろ良いではないか。……わたしたちはひとりのかしらを立てて、エジプトに帰ろう」(同・一四ノ三、四)。こうして、彼らは、モーセだけでなく、神ご自身が彼らを欺いて、所有することのできない国を約束したのだと非難した。そして、彼らは、全能の神の強い手によって助け出された苦難と奴隷の地へ、彼らを連れもどす指導者を選ぼうとまでした。

恥と苦悩に心を痛めて、「モーセとアロンはイスラエルの人々の全会衆の前でひれふした」(同・一四ノ五)。彼らは、人々のこうした無分別な激しい考えをどうして思いとどませたらよいかわからなかった。カレブとヨシユアは、騒動を静めようと試みた。悲しみと怒りの表現として、彼らは衣を裂いて人々の中に飛び込んでいった。そして、鳴り響く大声で暴風のように泣きわめく声と反逆的悲嘆の声を圧倒して、彼らは言った。「わたしたちが行き巡って探った地は非常に良い地です。もし、主が良しとされるならば、わたしたちをその地に導いて行って、それをわたしたちにくださるでしょう。それは乳と蜜の流れている地です。ただ、主にそむいてはなりません。またその地の民を恐れてはなりません。彼らはわたしたちの食い物にすぎません。彼らを守る者は取り除かれます。主がわたしたちと共におられますから、彼らを恐れてはなりません」(同・一四ノ七 九)。

カナン人は、すでに彼らの罪惡のますめを満たしていたので、神は、これ以上彼らを忍ぶことができなかった。彼らからは神の保護が取り除かれたので、やすやすと彼らを打ち負かすことができたのである。神の契約によって、その地は、イスラエルのものであると保証された。しかし、不忠実な斥候の偽りの報告が受け入れられ、それによって全会衆が欺かれた。これは、反逆者たちのしわざであつた。もし、たったふたりが悪い報告をし、あ

との十人が、全部主の名によって国を占領しようと人々を励ましたとしても、彼らはよこしまな不信のために、十人の言うことよりは、ふたりの言葉を受け入れたことであろう。しかし、正しい側に立った者はただふたりで、十人は反逆の側についてしまったのである。

不忠実な斥候たちは、口をきわめてカレブとヨシユアを責めた。そして、彼らを石で打てという声があがった。気の狂った群衆は石をつかんでこの忠実な人々を殺そうとした。彼らは狂ったような叫び声をあげて前進した。ところが急に、彼らの手から石は落ち、声は静まり、彼らはふるえおののいた。神が彼らの殺意をとどめるために介入なさったのである。神の臨在の栄光が、燃える光のように幕屋を照らした。すべての民が主のしるしを見た。彼らよりも大きな力のあるおかたが、ご自身をあらわされた。こうなつては、あえて反逆しつづける者はひとりもなかった。悪い報告をした斥候たちは、恐怖に身を縮めて、息せき切つて天幕に帰った。

さて、モーセが立つて幕屋に入った。主は、モーセに言われた。「わたしは疫病をもつて彼らを撃ち滅ぼし、あなたを彼らよりも大いなる強い国民としよう」(同・一四ノ一二)。しかし、モーセは再び民のために嘆願した。モーセは、民が滅ぼされて自分が彼らよりも大きな国民にされることに同意することはできなかった。モーセは神のあわれみを請うて言った。「どうぞ、あなたが約束されたように、いま主の大いなる力を現してください。あなたはかつて、『主は怒ることおそく、いつくしみに富み…』と言われました。どうぞ、あなたの大いなるいつくしみによって、エジプトからこのかた、今にいたるまで、この民をゆるされたように、この民の罪をおゆるしてください」(同・一四ノ一七 一九)。

主は、イスラエルを直ちに滅ぼすことはしないとお約束になった。しかし、彼らの不信とおくびょうのために

主は、彼らの敵を征服するために力をあらわすことができなくなった。そこで、主は、あわれみのうちに、唯一の安全な道として、彼らに紅海にもどることをお命じになった。

人々は、反逆して、「この荒野で死んでいたらよかったのに」と叫んだ。今この願いは聞かれることになった。「あなたがたが、わたしの耳に語ったように、わたしはあなたがたにするであろう。あなたがたは死体となって、この荒野に倒れるであろう。あなたがたのうち、わたしにむかつてつぶやいた者、すなわち、すべて数えられた二十歳以上の者はみな倒れるであろう。…しかし、あなたがたが、えじきになるであろうと言ったあなたがたの子供は、わたしが導いて、はいるであろう。彼らはあなたがたが、いやしめた地を知るようになるであろう」と主は宣言された(同・一四ノ二八 三一)。そして、カレブについて主は言われた。「ただし、わたしのしもべカレブは違った心をもっていて、わたしに完全に従ったので、わたしは彼が行ってきた地に彼を導き入れるであろう。彼の子孫はそれを所有するにいたるであろう」(同・一四ノ二四)。斥候たちが、四十日の旅をしたのと同じように、イスラエルの軍勢は、四十年の間荒野をさまようことになった。

モーセが、この神の決定を人々に知らせると、彼らの怒りは悲しみに変わった。彼らは、その罰が正当なことを知っていた。十人の不忠実な斥候は、疫病にかかって、全イスラエルの目の前で死んだ。彼らの運命を見て、人々は自分たちの運命を知った。

今となっては、彼らは、自分たちの罪深い行為を心から悔いているように思えた。しかし、彼らの悲しみは、忘恩と不従順を感じたからではなく、むしろ彼らの悪行の結果のためであった。主がお決めになったことを容赦なくなさることがわかったとき、人々はまたわがままな気持ちを起こし、自分たちは荒野に帰りたくない主張

した。神が、敵の地から引き返すようにお命じになったのは、彼らの表面的服従が真実かどうかを試みておられたのであったが、それが真の服従でなかったことが明らかになった。彼らは、激情の支配するままに動き、神に従うことを勧めた斥候たちを殺そうとしたことによって、非常な罪を犯したことは認めたけれども、彼らは、ただ恐るべきあやまちを犯したことで、その結果が彼らを悲惨な末路に陥れるものであることを知って、恐れにすぎなかった。彼らの心に変化はなかった。そして、彼らは、また似たような暴動を起こすきっかけを必要としていたにすぎなかった。このことは、モーセが神の権威によって、彼らに荒野へ引き返すように命じたときに起こった。

イスラエルが四十年の間、カナンにはいれないという命令は、モーセとアロン、カレブとヨシユアにとって苦い失望であった。しかし、彼らはつぶやくことなく、神の決定を受け入れた。しかし、神の御処置についてつぶやき、エジプトに帰りたいと言っていた人々は、自分たちが侮った祝福が彼らから取り去られたときに、激しく泣き悲しんだ。彼らは取るに足らぬことのためにつぶやいてきた。そこで、神は今、悲しむ理由を彼らにお与えになった。もし、彼らの罪がそのまま目の前に示されたときに、彼らが自分たちの罪を悲しんだのであれば、この宣告は与えられなかったはずであった。だが、彼らは、この刑罰を悲しんだ。彼らの悲しみは、悔い改めではなかったから、この宣告の取り消しを得ることはできなかった。

その夜、人々は泣き明かしたが、朝とともに希望がわいた。彼らは、自分たちのおくびょうの償いをしようと決心した。神が行って、国を占領せよとお命じになったときに、彼らは拒絶したのであった。そして、神が今退却をお命じになると、彼らは同じように反抗した。彼らは国に攻め上って、占領しようと心に決めた。あるいは

神は彼らの働きを受け入れて、彼らに対するみこころをお変えになるかも知れない。

神は、神が決められたときに、彼らが入国するのを彼らの特権とし義務となさった。しかし、彼らの故意の怠慢のために、その許可は取り下げられた。サタンは、彼らのカナン入国を妨げて、自己の目的を果たした。神が命じられたときに、彼らが拒んだその同じことを、今度は、神が禁じておられるにもかかわらず、行なうようにサタンは人々をそそのかした。こうして大欺瞞者は、彼らを再び反逆に導いて勝利を得た。彼らは、彼らと力を合わせて、カナンを占領するために働いてくださる神の力に信頼しなかった。それにもかかわらず、今度は神の助けを受けずに、自分たちの力だけで、その仕事をなしとげようとしたのである。「われわれは主にむかつて罪を犯しました。われわれの神、主が命じられたように、われわれは上って行って戦いましょう」と彼らは叫んだ（申命記一ノ四一）。彼らは、罪の結果、これほどまでに恐ろしく盲目になっていた。主は、「上って行って戦え」とはお命じにならなかった。彼らが戦って国を獲得することは、神のみこころではなかった。それは厳格に神の命令に従うことによって行なわれるべきであつた。

人々の心に変化はなかったけれども、彼らは、斥候たちの報告を聞いて、反逆した自分たちの罪深さと愚かさを告白するに至った。ここで彼らは自分たちが軽率に投げ捨てた祝福の価値を認めた。彼らがカナンにはいれないのは、自分自身の不信のためであることを告白した。「われわれは罪を犯しました」と彼らは言った。そして彼らは、神が約束を履行なさることを激しく非難したけれども、おちどは神ではなくて、彼らにあることを認めた。この告白は真の悔い改めから出たものではなくても、神が彼らを正義をもってあしらわれることを示した。主は今もなお、同じような方法によって、人々にご自分の正義を認めさせ、み名に栄えを帰しておられる。神

を愛すると言う人々が、神の摂理に対してつばやき、神の約束をあなどり、誘惑に負けて悪天使と一緒にになって神のみこころを挫折させようとすることがある。そのようなときに、主は、彼らが真に悔い改めていないにもかかわらず、彼らに罪を認めさせ、自分たちの悪い行為を認めさせ、神が彼らを義と恵みをもってあしらっておられることを認めざるを得ないように、事情を支配なさることがよくあるのである。神は、このようにして、反対の勢力を活動させて、やみの働きをあらわになさるのである。そして、悪い行為に走ろうとする精神には、根本的変更はなくても、神の栄えのためとなり、圧迫と誤解を受けてきた神の忠実な譴責者たちが正しかったことを認める告白がなされるに至るのである。最後に神の怒りが注がれるときにも同じことが起こる。「主は無数の聖徒たちを率いてこられた。それは、すべての者にさばきを行うためであり、不信心な者の「すべての不信心なしわざ」を責めるためである(ユダ一四、一五)。すべての罪人は、自分に与えられた宣告を聞いて、その正当なことを認めるに至る。

神からの禁令があるにもかかわらず、イスラエルは、カナンの征服に着手しようとした。武器をまとい、武器を手にした彼らは、戦いの準備を完了したつもりであった。しかし、神の目と、悲しみに沈んだ神のしもべたちの目から見れば、はなはだしく不十分なものであった。約四十年後、主が上って行ってエリコを征服せよとお命じになったときに、主は共に行く約束なさった。神の律法を入れた箱が、軍勢の前にかつがれて行った。主のお定めになった指導者が、神のさしずに従って、彼らの行動を指揮することになっていた。このような指導の下にあれば、どんな損害も受けることはなかった。しかし、今は、神の命令と指導者たちの厳粛な禁令にもかかわらず、彼らは箱もなければ、モーセも共に行かないまま、敵の軍隊に向かって行った。

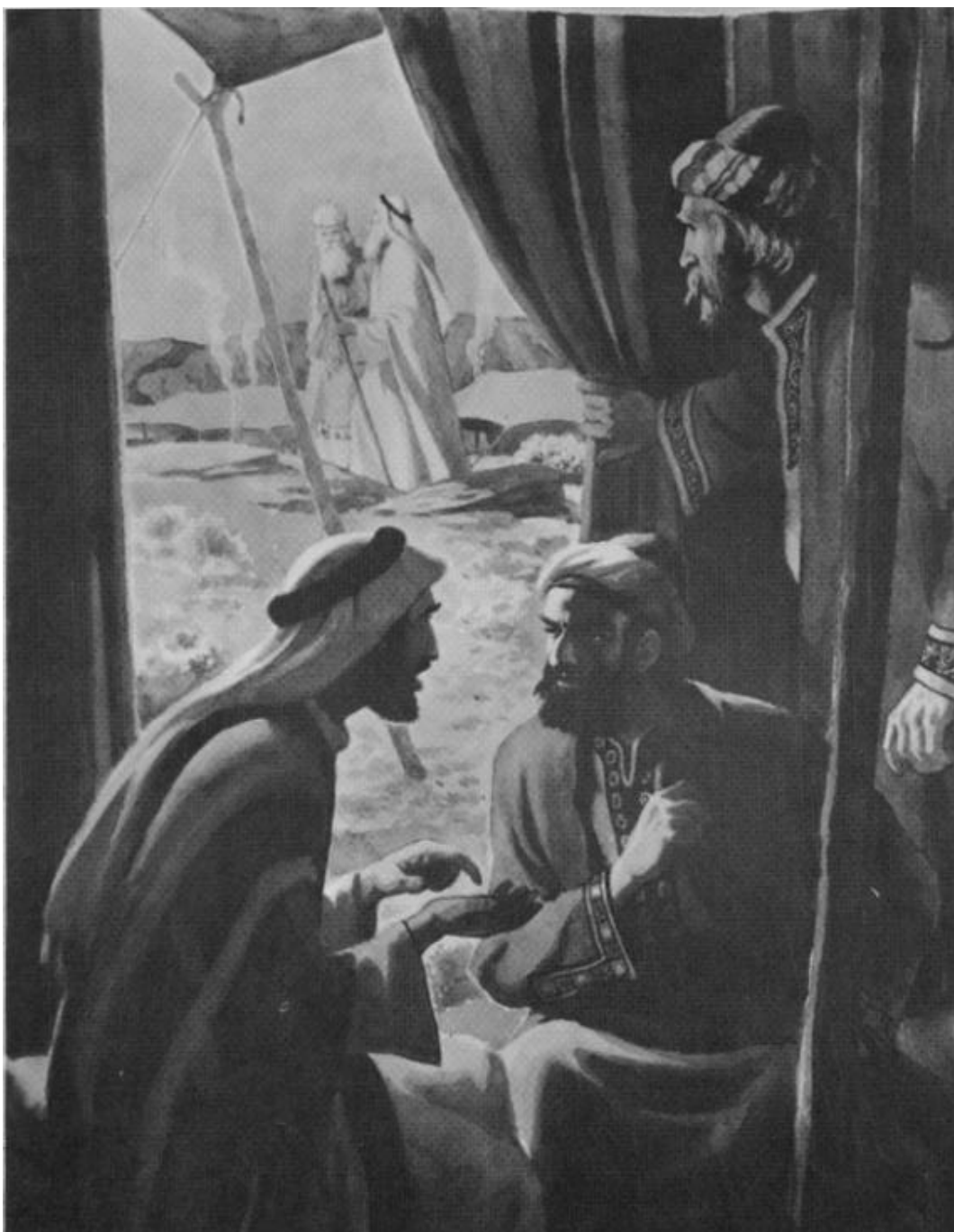
警告のラッパが鳴った。モーセは、彼らの後を追って警告した。「あなたがたは、それをなし遂げることもできないのに、どうして、そのように主の命にそむくのか。あなたがたは上って行ってはならない。主があなたがたのうちにおられないから、あなたがたは敵の前に、撃ち破られるであろう。そこには、アマレクびとと、カナンびとがあなたがたの前にいるから、あなたがたは、つるぎに倒れるであろう」(民数記一四ノ四一 四三)。

カナン人は、この民を守っているように思われる不思議な力と、彼らのために行なわれた奇跡について聞いていた。そこで彼らは、この侵入軍を撃退するために、強力な軍隊を召集した。攻撃軍のほうには指導者がなかった。勝利を願う祈りもささげられなかった。彼らは、自分たちの運命を逆転させるか、それとも戦死するかといった、死にものぐるいの気持ちで出発した。彼らは戦争の訓練は受けていなかったけれども、武装した大群衆であつた。そして、急に猛攻撃を加えることによつて、どんな反撃をも撃退できると考えた。彼らは、あえて攻撃をしかけない敵に、無暴にもこちらから挑戦した。

カナン人は、困難な山道や、急で非常に危険な坂をのぼらなければ行けない岩の上の台地に陣取っていた。ヘブル人のおびたらしい数は、それだけ彼らの敗北を悲惨なものにするに過ぎなかった。彼らは山の小道をよじ登り、上方の敵の恐ろしい攻撃に身をさらした。巨大な石が上から大音響と共に落下してきて、ヘブル人の道を死者の血で染めた。頂上に達した者も登って行くだけで力尽きて、激しい反撃にたまりかね、多くの損害をこうむって退却した。大虐殺の行なわれたあとには、多くの戦死者のしかばねが横たわっていた。イスラエルの軍隊は完全に敗北した。神にそむいて試みた攻撃の結果は、破壊と死であつた。

ついに降伏するほかなく、生き残つた者たちは「帰ってきて、主の前で泣いたが」主は彼らの声を聞かれな

った（申命記一ノ四五）。大軍の接近を恐怖に震えながら待っていたイスラエルの敵は、この大勝利によって、イスラエルに抵抗する確信を持つようになった。彼らは、これまで神がその民のために行なわれた驚くべきことを聞いていたが、それを今はみな偽りであったとし、なんの恐れる理由もないと感じるようになった。このイスラエルの最初の敗北は、カナン人に勇氣と決意を起こさせた。これは、彼らの征服を非常に困難なものにした。イスラエルは、勝ち誇る敵の前から退却して、荒野へ行くほかなかった。彼らは、その世代のすべての者が荒野を墓場としなければならないことを知っていた。



レビ人コラとルベンの部族の長であったダタンとアビラムは、モーセとアロンの地位をねたみ、彼らの統治をくつがえそうと計画した。

コ
ラ
の
反
逆

本章は、民数記一六、一七章に基づく。

イスラエルに降った刑罰は、しばらくの間、彼らのつばやきと不従順をおさえるのに役立った。しかし、彼らの心の中には、なお反逆の精神が残っていて、ついに苦い実を結んだのであった。これまでの反逆は、興奮した群衆が、突然衝動的に起こした民衆の混乱に過ぎなかった。しかし、今度のは神ご自身が任命された指導者の権威をくつがえそうとする決意から生じた根深い陰謀であった。

この運動の主謀者のコラは、コハテの氏族のレビ人でモーセのいとこであった。彼は才能に恵まれた有力者であった。彼は幕屋の務めに任じられていたが、その地位では満足せず、祭司職の地位につきたいと切望した。以前は、どの家族の長子にもゆだねられていた祭司職が、アロンとその家族に与えられたことが、ねたみと不満の原因であった。コラは、しばらくの間、公然と反逆行為に出ることはしなかったが、ひそかにモーセとアロンの権威に反抗していた。彼はついに、一般の民事と宗教の両方の権威を打倒する大胆な謀略を考えた。彼に同調する者も現われた。幕屋の南側にあるコラとコハテ人の天幕のそばに、ルベンの部族の天幕があった。この部族の

ふたりのつかさであるダタンとアビラムの天幕は、コラの天幕の近くにあった。このつかさたちは、直ちに彼の野心的陰謀に参加した。彼らは、ヤコブの長子の子孫であつたから、施政権は自分たちに属するものであると主張し、コラと祭司職の特権を共有しようともくろんだ。

一般の人々の考え方も、コラの策略に賛成であつた。彼らは、失望の苦しさを味わっているときであつたから、以前の疑い、しつと、憎しみなどが思い出されて、彼らの不平が、再び忍耐深い指導者に向けられたのであつた。イスラエルの人々は、彼らが神に導かれているということを常に忘れた。彼らは、契約の天使が彼らの目に見えない指導者であり、キリストが雲の柱にかくれて彼らの前に進み、モーセは、彼からすべての指示を受けているということを忘れた。

彼らは、自分たちすべての者が荒野で死なねばならないという恐ろしい宣告に服することを好まなかつた。そこで彼らは、あらゆる口実を設けて、彼らを導き滅びを宣告したのはモーセであつて、神ではないと思ひこもつた。この地上の最も柔和な人が最善を尽くしても、この民の反抗をしずめることはできなかった。彼らの隊列が乱れ、欠員が生じたことは、彼らの以前のかたくなさに対する神の怒りのしるしであつたにもかかわらず、彼らは、これから教訓を学ばなかつた。彼らは、再び誘惑に負けた。

モーセにとつて、不穏な大群衆の指導者としての現在の地位よりは、つつましい羊飼いの生活のほうがはるかに平和であり、幸福であつた。しかし、これは、モーセが選んだものではなかつた。羊飼いのつえのかわりに、権力のつえが彼に与えられた。これは、神が彼を解放されるまでおろすことができないものであつた。

すべての人の心の秘密を読まれる神は、コラと彼の共謀者の計画に注目し、神の民が、この共謀者たちの欺瞞

からのがれることができるように、警告と指示をお与えになった。彼らは、モーセに、ねたみと不平をいだいたためにミリアムにくだった神の刑罰を見たのであった。主は、モーセが、預言者よりも偉大であると言われた。「彼とは、わたしは口ずから語」と言われた。神はさらに「なぜ、あなたがたはわたしのしもべモーセを恐れず非難するのか」と言われた(民数記一一ノ八)。こうした教えは、アロンとミリアムのためだけでなく、イスラエルのすべての者に与えられたのである。

コラと彼の共謀者たちは、特別に神の力と偉大さを示される恵みにあずかった人々であった。彼らは、モーセと共に山に登り、神の栄光を見せられた者たちであった。しかし、それから後で変化が起こった。最初はささいなものであった誘惑に心を奪われているうちに、誘惑が強化されていった。そして、彼らの心はついにサタンに支配され、謀叛を起こすに至った。彼らは民の繁栄に大きな関心をもっていると表明した。彼らは、まず自分たちの間で不平をささやきあい、引き続いてイスラエルの指導者たちにそれをひろめた。人々は、彼らのほのめかしの言葉を直ちに信じた。そこで、彼らは、さらにそれを押し進め、ついに自分たちは神のための熱意に動かされていると思い込むようになった。

彼らは、民のなかのおもだった二百五十人のつかさたちを離反させることに成功した。彼らは、こうしたしつかりした有力者たちの支持を得たので、政治を根本的に改め、モーセとアロンの行政を大いに改善することができるという自信を持った。

ねたみは羨望を生じ、羨望は反逆をひき起こしたのである。彼らは、モーセに、こうした大きな権力と栄誉にあずかる権利があるのかという問題を語り合った。彼らは、モーセの地位を非常にねたましく思い、自分たちの

だれであっても、彼と同じ地位を占めることができると考えるようになった。そして、モーセとアロンの地位はこのふたりが自分かつてに占有したものであると思いがいをして、他の人々にもそのような思わせた。この指導者たちは、祭司職と行政権を手に入れて、自分たちを主の会衆の上に立てたが、彼らの家は、イスラエルの他の家族以上に榮譽を受ける資格はないのであると、不平家たちは言った。また、彼らは、民よりも清くはないのであるから、神の特別の臨在と保護を同様に受けている兄弟たちと同じ地位で十分であるというのであった。

共謀者たちの次の仕事は、民を動かすことであつた。あやまちを犯し、譴責に値するものに、同情と賞賛ほど好ましいものはない。こういう方法で、コラと仲間たちは、会衆の注意をひいて支持を得た。彼らは、人々がつぶやいたために、神の怒りをこうむつたと非難することはまちがいでであると言つた。会衆は、自己の権利を主張しただけであるから、おちどはないと言つた。また、彼らは、モーセが独裁者であると言つた。そして、民は清い民であり、主が民のなかにおられるにもかかわらず、モーセは彼らを罪人扱いにして譴責したのであると言つた。

コラは、人々が遭遇した困難、また、不平と不服従の結果、多くの者が滅ぼされた荒野の旅路を回顧した。それを聞いた人々は、もしモーセがちがつた道を進んだならば、あのような困難はきつと避けられたにちがいないと考えた。そこで彼らは、すべての災難を彼のせいにし、カナンに入国できないのも、モーセとアロンの不手ぎわの結果であると思ひ込んだ。もし、コラが彼らの指導者になるならば、罪を譴責するかわりに、彼らの善行を認めて勇気づけ、平穩で順調な旅をすることであらう。荒野をさまよい歩くかわりに、約束の国に直行することであらうと人々は思ふのであつた。

この反逆活動においては、これまでにかつてなかった団結と調和が、会衆の不平分子の間にあった。こうして民の間で成功をおさめたコラは、モーセに奪われた権力を抑圧しなければ、イスラエルの自由が失われてしまうと堅く信じるようになった。彼はまた、神がこのことを自分に示し、手おくれにならないうちに、政変を断行する権威が彼に与えられたと主張した。しかし、モーセに対するコラの告発を受け入れられないものも多かった。彼らは、モーセの忍耐と献身的な活動を思い出して、気がとがめたのである。であるから、モーセのイスラエルに対する深い関心に、なにかの利己的動機を結びつける必要があった。そこでモーセは、人々の持ち物を没収するために、彼らを荒野に導いて滅ぼそうとしているのだという以前の非難をくりかえした。

しばらくの間、この運動は秘密のうちに進められた。しかし、この運動が表面化するだけの勢力を得るやいなや、コラは派閥の先頭に立って、コラとその仲間とが、同様に受けるべき権威を、モーセとアロンが奪っているやと公に非難した。さらに、人々の自由と独立が侵害されたという攻撃も行なわれた。共謀者たちは言った。「あなたがたは、分を越えています。全会衆は、ことごとく聖なるものであって、主がそのうちにおられるのに、どうしてあなたがたは、主の会衆の上に立つのですか」(民数記一六ノ三)。

モーセは、この根深い陰謀に気づかなかつたが、その恐ろしい意味が突然明らかになったとき、彼は、ひれ伏して神に黙祷をささげた。彼は悲痛な面持ちで立ち上がったが、泰然自若としていた。天来の指示が彼に与えられていた。「あす、主は、主につくものはだれ、聖なる者はだれであるかを示して、その人をもとに近づけるであろう」と彼は言った(同・一六ノ五)。すべての者に反省の時間があるように、試験は翌日に延期された。そのとき、祭司職を希望する者が、それぞれ香炉を持って来て、会衆の面前において、幕屋で香をささげること

になった。聖職に任じられた者だけが、聖所で奉仕することができるということが律法に明記されていた。祭司であつたナダブとアビウでさえ、神の命令に反して、「異火」をさげたときに滅ぼされたのである。しかし、モーセは、こうした危険を冒してまで神に訴えるつもりがあるかどうかを、告発者たちにたずねた。

モーセは、コラと仲間のレビ人たちを選び出して言った。「イスラエルの神はあなたがたをイスラエルの会衆のうちから分かち、主に近づかせて、主の幕屋の務をさせ、かつ会衆の前に立つて仕えさせられる。これはあなたがたにとつて、小さいことであろうか。神はあなたとあなたの兄弟なるレビの子たちをみな近づけられた。あなたがたはなお、その上に祭司となることを求めるのか。あなたとあなたの仲間は、みなそのために集まって主に敵している。あなたがたはアロンをなんと思つて、彼に対してつばやくのか」(同・一六ノ九 一一)。

ダタンとアビラムは、コラほどの強硬な態度をとらなかつた。そこでモーセは、彼らが全く墮落して共謀に加つたのではなからうと思つて、彼らをモーセのところと呼んで彼に対する彼らの苦情を聞こうと思つた。しかし、彼らは、来ようともせず、無礼にも彼の権威を認めなかつた。彼らは、会衆が聞いているところで、こたえて言つた。「あなたは乳と蜜の流れる地から、わたしたちを導き出して、荒野でわたしたちを殺そうとしている。これは小さいことでしょうか。その上、あなたはわたしたちに君臨しようとしている。かつまた、あなたはわたしたちを、乳と蜜の流れる地に導いて行かず、畑と、ぶどう畑とを嗣業として与えもしない。これらの人々の目をくらまそうとするのですか。わたしたちは参りません」(同・一六ノ一二、一四)。

このようにして、彼らは自分たちの奴隷状態を、主が約束の地を描かれたのと全く同じ言葉で描いた。彼らはモーセが自分の権威を確立するために、神の指示のもとに行動しているふりをしたと非難したのである。そして

彼らは、もはや彼の野心的計画のままに、盲目的に、カナンに向かってみたり、荒野に向かってみたりはしないと言った。こうして、やさしい父親、また忍耐深い羊飼いのようであつた彼を、極悪非道な暴君、または強奪者のように彼らは言うのであつた。彼ら自身の罪の罰として、カナンにはいれなくなったことを、モーセのせいにしたのである。

人々の同情が、謀叛を起こした側に集まることは明白であつた。しかし、モーセは自己を弁護しようとはしなかつた。彼は、彼の動機が純粹で、彼の行動が正しいことを神があかしてくださるよう、人々の前で厳肅に神に訴えて、神が彼の裁判官になつてくださるよう哀願した。

翌日、コラを先頭に二百五十人のつかさたち、火皿をたずさえて現われた。彼らは、幕屋の庭に導き入れられ、人々は外側に集まつて結果を待つていた。コラとその仲間たちの敗北を目撃させるために、会衆を集めたのはモーセではなかつた。それは、反逆者たちが、盲目的推測によつて自分たちの勝利を目撃させようとして、彼らを集めたのであつた。会衆の大部分は、アロンに対抗して勝つ自信を十分に持つていたコラに公然と味方していた。

こうして、彼らが、神の前に出たときに、「主の栄光は全会衆に現れた」。モーセとアロンに、神の警告が伝えられた。「あなたがたはこの会衆を離れなさい。わたしはただちに彼らを滅ぼすであろう」。しかし、彼らは、ひれ伏して、祈つて言つた。「神よ、すべての肉なる者の命の神よ、このひとりの人が、罪を犯したからといって、あなたは全会衆に対して怒られるのですか」(同・一六ノ一九、二一、二二)。

モーセが、彼のところに来ることを拒んだ人々に最後の警告を与えるために、七十人の長老たちと共に下つて

いったときに、コラは会衆から退いて、ダタンとアビラムに加わった。群衆は従ってきた。モーセは、彼の使命を伝えるに先だち、神の指示によって、人々に命じた。「どうぞ、あなたがたはこれらの悪い人々の天幕を離れてください。彼らのものには何にも触れてはならない。彼らのもろもろの罪によって、あなたがたも滅ぼされてはいけないから」と人々に命じた(同・一六ノ二六)。みな者は、刑罰が下されようとしているのを知って、この警告に従った。反逆の主謀者たちは、彼らが欺いてきた者たちから捨てられたことを知ったが、その不敵な態度を変えなかった。彼らは、神の警告を無視するかのように、家族と共に天幕の入口に立っていた。

ここで、モーセは、会衆の面前でイスラエルの神の名によって宣言した。「あなたがたは主がこれらのすべての事をさせるために、わたしをつかわされたこと、またわたしが、これを自分の心にしたがって行うものでないことを、次のことによつて知るであろう。すなわち、もしこれらの人々が、普通の死に方で死に、普通の運命に会うのであれば、主がわたしをつかわされたのではない。しかし、主が新しい事をされ、地が口を開いて、これらの人々と、それに属する者とを、ことごとくのみつくして、生きながら陰府に下らせられるならば、あなたがたはこれらの人々が、主を侮ったのであることを知らなければならない」(同・一六ノ二八 三〇)。

イスラエルの人々は、次に何が起こるかと思つて、恐怖におびえながら、いつせいにモーセを見つめて立っていた。彼が語り終えると、堅い大地が裂けて、反逆者たちは彼らのすべての持ち物と共に、生きながら穴の中に落ちていった。そして、「彼らは会衆のうちから、断ち滅ぼされた」(同・一六ノ三三)。人々は、その罪に関与した自責の念にかられて逃げ去った。

しかし、刑罰はこれで終わったものではなかった。雲から火がひらめいて、薫香を供えた二百五十人のつかさた

ちを焼き尽くした。この人々は、最初に反逆したのではなかった。首謀者たちと共に滅ぼされなかった。彼らは首謀者たちの最後を見て、悔い改める機会が与えられた。しかし、彼らは反逆者に共鳴し、彼らと運命を共にした。

モーセが、切迫している刑罰からのがれるように、イスラエルに嘆願したとき、もし、コラと彼の仲間が悔い改めて許しを求めたならば、神の刑罰は、そのときでも止められたかも知れなかった。しかし、彼らの頑迷さが彼らの運命を決定したのである。全会衆も多かれ少なかれ、彼らに共鳴したのであるから、罪があつたのである。しかし神は、大いなるあわれみをもって、反逆の指導者と、指導に従つたものとを区別された。欺かれてしまつた民には、まだ悔い改める余裕が与えられていた。彼らが誤っており、モーセが正しいという圧倒的証拠が与えられた。著しい神の力のあらわれによつて、すべての疑惑が取り除かれた。

ヘブル人に先だつて行かれた天使であられるイエスは、彼らを滅びから救おうとされた。彼は、なんとかして彼らを許そうとしておられた。神の刑罰が身辺に迫り、悔い改めをうながした。抵抗することのできない特別の天からの介入によつて、彼らの反逆は阻止された。もし彼らが、今、神の摂理の介入に応じるならば、救われるのであつた。彼らは、滅びを恐れて刑罰からのがれたけれども、彼らの反逆心は、いやされていなかった。その夜、彼らはおびえて天幕に帰つたが、悔い改めてはいなかった。

人々は、コラと彼の仲間たちの甘言によつて、自分たちは非常にりっぱな民であると思ひ込み、モーセから、虐待と不当な扱いを受けたのだとほんとうに思い込んだ。もし、コラとその仲間が誤っていて、モーセが正しいかつたと認めるならば、彼らが荒野で死ぬという宣告も、神の言葉として受けなければならないのであつた。彼ら

は、これに服することを好まず、モーセに欺かれたと信じようと試みた。彼らは、今にも新秩序が制定されて、譴責のかわりに賞賛、また、心労と争闘のかわりに安易な生活が与えられることを望んでいた。滅ぼされた人々は、へつらいの言葉を語り、彼らに大きな関心と愛をあらわしていた。それで、人々は、コラと彼の仲間は善良な人々にちがいになく、彼らが滅ぼされたのは、何かの理由で、モーセのせいだと考えた。

神が自分たちを救うために用いられる器を拒否し、軽べつすることほど、神への大きな侮辱はあり得ない。イスラエル人は、そうしたばかりでなくて、モーセとアロンをふたりとも殺害しようとしたくらんだ。しかし、彼らは、自分たちのこうした恐ろしい罪の許しを神に求める必要を認めなかったのである。猶予の夜は、悔い改めと告白ではなくて、彼らが大罪人であることを示した証拠に抵抗する手段を工夫するために過ごされた。彼らはなお、神が任命された人々を憎み、その権威に逆らおうとした。サタンは、彼らの判断力をゆがめ、盲目にして滅びに陥れようとしていた。

イスラエルの全会衆は、穴に落ちた不運な罪人たちの叫びを聞いて、驚いて逃げ去った。「恐らく地はわたしたちをも、のみつくすであろう」と彼らは言った。「その翌日、イスラエルの人々の会衆は、みなモーセとアロンとにつぶやいて言った、『あなたがたは主の民を殺しました』」（同・一六ノ三四、四一）。こうして、彼らは、今にも忠実で献身的な彼らの指導者に暴力をふるおうとした。

幕屋にたれこめた雲の中に、神の栄光が現われた。そして、雲から声がモーセとアロンに語って言った。「あなたがたはこの会衆を離れなさい。わたしはただちに彼らを滅ぼそう」（同・一六ノ四五）。

モーセにはなんの罪もなかったから、恐れをいだかなかった。彼は、急いで会衆を離れて、彼らを滅びるまま

にしておかなかった。モーセは、この恐ろしい危機にあつて、自分が飼っている群れに対して真の羊飼いとしての思いやりをみせて、そこを去ろうとしなかった。彼は神の選民が、神の怒りによつて全滅されないように嘆願した。こうした彼のとりなしによつて、ふくしゅうの手は止められ、不服従で反抗的なイスラエルは全滅をまぬかれたのである。

だが、怒りの使者はすでに出発していた。人々は、すでに疫病に倒れていた。アロンは、モーセの指示に従つて、薫香を手にして、急いで会衆のまん中に行き、「彼らのために罪のあがない」をした。彼は、「すでに死んだ者と、なお生きている者との間に立」った(同・一六ノ四六、四八)。薫香の煙とともに、幕屋でのモーセの祈りも神のもとにのぼつていった。そして疫病はやんだ。しかし、つばやきと反逆の罪の結果として、一万四千人のイスラエル人が死んだのである。

祭司職は、アロンの家に定められたという証拠が、さらに与えられた。神の指示に従つて、各部族はつえを準備し、それに部族の名を書きしるした。アロンの名は、レビのつえに書かれた。つえは、幕屋の中の「あかしの箱の前に」置かれた。どのつえからでも芽が出るならば、主がその部族を祭司職に選ばれたしとなるのである。その翌日、見よ、「レビの家のために出したアロンのつえは芽をふき、つばみを出し、花が咲いて、あめんどこの実を結んでいた」(同・一七ノ八)。そのつえは、人々に見せたあとで、後世への証拠として、幕屋の中に保存された。この奇跡は、祭司職に関する問題を難なく解決した。

こうして、モーセとアロンとは、神の権威のもとに語ったということが十分に証拠立てられた。そして、人々は、荒野で死ぬという好ましくない事実を認めなければならなくなった。「ああ、わたしたちは死ぬ。破滅です、

全滅です」と彼らは叫んだ(同・一七ノ一二)。彼らは、指導者に反逆した罪を告白し、コラとその仲間のものが神の正しい刑罰によって滅ぼされたことを認めた。

天においてサタンを反逆させたのと同じ精神が、小規模ではあったが、コラの反逆のなかに見られたのである。神の統治に対する不満をルシファーにいだかせ、天の秩序をくつがえそうとさせたのは、誇りと野心であった。サタンは墮落以来、この同じねたみと不満、地位や名誉に対する野心を人間の心に植えつけようとしてきた。こうして、彼は、コラ、ダタン、アピラムの心を動かし、自己高揚心を起こさせ、ねたみ、不信、反逆の精神をかきたてたのである。サタンは彼らに、神の任命された人々を拒ませて、彼らの指導者であられる神を拒否させたのである。彼らは、モーセとアロンに向かってつばやき、神を冒瀆していながらも、なお、自分たちは正しく、彼らの罪を忠実に譴責した人々をサタンに動かされてみるとみなすほどに欺かれていた。

コラの滅亡の根底に横たわっていた同じ悪が、なお、存在しているのではなからうか。誇りと野心は広く人の心を支配している。そして、この精神は、ねたみと、最高の地位を求める心を起こさせる。魂は神から離れ去って、無意識のうちにサタンの側に引かれるのである。多くの者、また、キリストの従者であると公言する者でさえ、自分を高めるために熱心に考え、計画し、努力している。そして、人々の共鳴と支持を得るためには、あえて事実をもまげ、主のしもべたちを偽って悪く言い、自己の心のいやしい利己的動機を、彼らの動機であるかのように非難するのである。十分の証拠があるにもかかわらず、虚偽をくりかえしているうちに、彼らはついにそれを事実であると思うようになる。神が任命された人々に対する民の信頼を失わせようとしていながら、自分たちは善事を行ない、真に神に奉仕していると思い込むのである。

ヘブル人は、主の指示と制限に服従することを喜ばなかった。彼らは、拘束をきらい、譴責を甘受しなかった。こういうわけで、彼らはモーセにつばやいたのである。もし、彼らが欲することを自由にすることができたならば、指導者に対する不平は少なかったことであろう。教会の全歴史を通じて、神のしもべたちはこの同じ精神に当面したのである。

人間は、罪にふけることによって、心の中にサタンがつけ込むすきを与える。そして、一つの悪から次の悪へと進んでいく。光の拒否によって思考は暗く、心は堅くなる。そして、容易に次の罪を犯し、さらに大きな光を拒み、ついには罪を犯すことが習慣になってしまうのである。罪は彼らにとって、悪いものとは思われなくなる。神のみ言葉を忠実に説いて、彼らの罪を譴責するものは、当然彼らから憎まれる。彼らは、改革に必要な苦痛と犠牲に耐えることを喜ばず、主のしもべに反抗し、その譴責を不当できびしいものであると非難するのである。コラと同様に、人々には罪はなく、譴責者が災害の原因であるというのである。ねたみと不満の持ち主は、こうした欺瞞によって良心をなだめ、結束して不和の種をまき、教会を築こうとする者の手を弱めるのである。

神のみわざを推し進めるために召された人々の働きは、ことごとく疑惑の目で見られたのである。また、すべての行為は、ねたみとあらさがしの精神をもった人々に悪口を浴びせられた。ルーテル、ウエスレー、また他の改革者の時代においても、このとおりであった。これは今日も同様である。

もし、コラが、イスラエルに伝えられたすべての譴責と指令が神から出たものであることを知っていたならば、あのようなことはしなかったことであろう。しかし、彼は、これを知ることができたのである。神は、ご自分がイスラエルの指導者であることの十分な証拠を、すでに与えておられた。しかし、コラと彼の仲間、光を拒ん

だので目がくらみ、神の力のどんな著しい現われも、彼らを納得させることができなかった。彼らは、それらをすべて人間的、またはサタンの力に帰していた。これと同じことを人々が行なった。彼らは、コラとその仲間が滅ぼされた翌日、モーセのところに来て「あなたがたは主の民を殺しました」と言った。彼らは、民を欺いた者の滅びを見て、彼らの行為が神の不興を招いたという決定的証拠を示されたにもかかわらず、神の刑罰をサタンのせいにし、モーセとアロンが、正しく清い人々を悪魔の力によって死なせたと言ったのである。彼らの運命を決定したのは、この行為であつた。彼らは聖霊に対する罪を犯した。人の心は、この罪によって堅く閉ざされて、神の恵みに浴することができなくなるのである。「また人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであらう。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は……ゆるされることはない」とキリストは言われた(マタイ二一ノ三二)。

この言葉は、救い主が神の力によって恵みのわざをなさったときに、ユダヤ人がそれをベルゼブルによって行なわれたと言ったのに対して語られたものである。神は聖霊の働きによって人間と交わられる。であるから、この働きをサタンのものであると故意に拒む者は、魂と天との通路を断ち切ってしまうのである。

神は、聖霊の働きによつて罪人を譴責し、罪を悟らせられる。であるから、聖霊がついに拒否されてしまふならば、神はその魂のためにもう何もおできにならない。神のあわれみの最後の手段がとられたのである。罪人は自分を神から切り離れた。そして、罪には、それからの救済策がないのである。罪人に罪を認めさせて、悔い改めさせるために働く力が、もうなにも残されていないのである。「そのなすにまかせよ」と神は命じられる(ホセア書四ノ一七)。そして、「罪のためのいけにえは、もはやあり得ない。ただ、さばきと、逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけがある」(ヘブル一〇ノ二六、二七)。

ホワイト選集

- 1 人類のあけぼの (上巻)
- 2 人類のあけぼの (下巻)
- 3 国と指導者 (上巻)
- 4 国と指導者 (下巻)
- 5 各時代の希望 (上巻)
- 6 各時代の希望 (中巻)
- 7 各時代の希望 (下巻)
- 8 患難から栄光へ (上巻)
- 9 患難から栄光へ (下巻)
- 10 各時代の大争闘 (上巻)
- 11 各時代の大争闘 (下巻)

N D C 194/502P/22cm

転載複製を禁ず

1980年3月10日 発行

著者	エレン・G・ホワイト
訳者	清野喜夫
発行者	安河内寿
印刷所	福音社

〒241 横浜市旭区上川井町1966

発行所 福音社
電話 (045) 921-1414 振替 横浜 599番

〒241 横浜市旭区上川井町846

発売所 健康と品性向上協会本部
電話 (045) 921-1121

製本・関山製本社 PRINTED IN JAPAN